



禪宗全書

語銀部十六

(51)

北京国書館出版社

藍古富

主編

圖書在版編目 (CIP) 數據

禪宗全書/藍吉富主編.-北京:北京圖書館出版社, 2004.12

ISBN 7-5013-2602-9

I. 禪… Ⅱ. 藍… Ⅲ. 禪宗 - 文獻 - 雁編 Ⅳ. B946.5

中國版本圖書館 CIP 數據核字 (2004) 第 103681 號

责任編輯:王冠 于浩 封面設計:許冬麗



本書原名爲《禪宗全書》,藍吉富主編,經北京版權代理 有限責任公司代理,授權北京圖書館出版社獨家出版發行。

書名 禪宗全書 (全101册)

著者 藍吉富 主編

出版 北京圖書館出版社 (100034 北京市西域區文津街 7號)

發行 010-66139745, 66175620, 66126153, 66174391 (傳真), 66126156 (門市部)

E-Mail cbs@nlc.gov.cn (投稿) btsfxb@nlc.gov.cn (郵購)

Website www.nlcpress.com

印刷 河北三河燕郊古籍印裝廠

開本 880 × 1230 毫米 1/16

印張 4414

版次 2004年12月第1版 2004年12月第1次印刷

書號 ISBN 7-5013-2602-9/B·108

定價 18000 圓

憨山大師夢遊全集 解題

編譯紹

五十五卷。明,慈山德清撰,侍者福善議,通河編輯,劉起相重較。又稱「憨山老人夢遊集

志。有關其人之生平,可參見此夢遊集卷五十三至五十四之自序年譜,及卷五十五之憨山大師塔 學範圍極廣博。除佛教經論之註疏外,另有關於老子、莊子、中庸等書之註解。頗有融會三教之 作者德清,晚號憨山老人。與雲樓袾宏、紫柏真可、蕅益智旭等三人被稱爲明季四大師。治 爲憨山德清語錄的集大成本。

山與紫柏尊者爲明末兩大高僧。夢遊集卷首發氏序云。 本書為憝山逝世後,其門人通炯所編,並經大儒踐謙益校訂。錢氏對憝山甚為推崇,並許憝

昔人嘆中峰輟席,不知道隱何方。又言楚石季潭而後,枉花一枝幾熄,由今觀之,不歸於紫柏 嗚呼偉矣哉 ,大師與紫柏尊者皆以英雄不世出之資,當腳絃絕響之候,捨身爲法。.......

憨山,而誰歸乎?一

此書大致內容如次:

卷一:含錢謙益之序文、憝山老人自贊等四篇文章

色二三二二:鳥柩山對當時沸門繼素所属示之言語:

お十三三十二、書言。

卷十九至二十二:厅文。有為「村之內」外典所撰字,有贈及

每二十三至二十六:記。為佛教寺院等建築物所撰之記式,及遊記等

专二十七至三十:言所撰塔銘、專記二十餘篇。

卷三十一至三十八:題跋、贊頌等。

卷三十九至四十:古世學之古文、疏文、祭文等。

卷四十一至四十三鳥灣嚴、片華等徑之流墨。己枚八**十**續嚴墨經郎,以比事僅有目錄而無文

6元十四至四十六:烏作者對大學、三正及佛教等主教義之論說與義理發揮

卷四十七至四十九:詩集。

卷五十至五十二:曹溪中興錄及其也晃示。 為怒山在曹溪時所撰、有關曹溪地理及佛教史之

<u>多五十三至五十四</u>:自敍年譜

文章, 亚含復興,曹溪這場之計劃, 及新聞示之完善等。

至五十五·含果應賓、設鍊監等人所撰之整一答說、專記、競詩等。

此外,研究明代中末葉佛教史者,此書所含之史料,亦相當豐富 憨山為明代佛教界有數之學者。此書自是研究其人之生工、學問、弘生、交遊等之最佳資料

憨山大師夢遊全集

明·憨山遮

清

撰



憨山	解		
憨山大師夢遊	題		目
夢遊全集			次

卷四(法語)	示性湻禪人—示了際禪人	卷三(法語)	答鄭崐巖中丞——示法錦禪人	卷二(法語)	原書目錄	錄夢遊全集小紀	康居國會尊者像贊寄憨山大師幷序	憨山老人自贊	卷一:序
四七		三四			四	=======================================			

與達觀禪師—與曉塵上人
卷十三(書問)一七〇
寂照鎧公請益——示杜生
卷十二(法語)一五六
答湖州僧海印—答大潔六問
卷十一(法語)一四三
示本懷印禪人—答德王問
卷十(法語)一三〇
示夜臺禪人一示沈大潔
卷九 (法語)
示歸宗智監寺——示沙彌性鎧
卷八(法語)
示太素元禪人一示衆
卷七(法語)八九
示歸宗堅音慈長老行乞莊嚴佛土 示石鏡一禪人
卷六(法語)七五
示觀智雲禪人一示半偈聞禪人
卷五(法語)六〇

子雪山造物者である。原設自之町多りで	子屋上 説 収 看 こ			
 毎日子子会 毎日子子会 毎日子子会 毎日子子会 一旦 一旦	□ 一 一 一 一 一 一 一 一 一	□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □		
境禪人—題龍樹庵主濟川傳公傳後 警陀觀音大士贊 一宗伯像贊 一王宗伯像贊 首——示修淨土六首 首——示修淨土六首				
		《神人—題龍樹庵主濟川傳公傳後 《一生宗伯像贊 《一王宗伯像贊 《一王宗伯像贊 是岳留別嶺南法社諸子十首 是岳留別嶺南法社諸子十首	《神人—題龍樹庵主濟川傳公傳後 《一整香尊者贊 《一王宗伯像贊 《一王宗伯像贊 是岳留別嶺南法社諸子十首 是一示修淨土六首	
□———一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	□————————————————————————————————————			
□——宗修淨土六首 □——宗修淨土六首	□——宗修淨土六首 □——宗修淨土六首	□ 一,		
特種人―題龍樹庵主湾川傳公傳後	特種人―題龍樹庵主湾川傳公傳後	境禪人―題龍樹庵主濟川傳公傳後 警陀觀音大士贊 一院香尊者贊 一宗伯像贊 一宗修淨土六首 首―示修淨土六首	特種人 題龍樹庵主湾川傳公傳後 特種人 題龍樹庵主湾川傳公傳後 特価・	特
特に	境禪人―題龍樹庵主齊川傳公傳後 警陀觀音大士贊 一院香尊者贊 一宗修育尊者贊 一三宗伯像贊 一三宗伯像贊 一一示修淨土六首 首―示修淨土六首	特	特	空間 地域 地域 地域 地域 地域 地域 地域 地
境禪人—題龍樹庵主濟川傳公傳後 警陀觀晉大士贊 一燒香尊者贊 如意銘 如意銘 首—示修淨土六首 首—示修淨土六首	境禪人—題龍樹庵主灣川傳公傳後 警陀觀晉大士贊 一字宗伯像贊 一子宗伯像贊 一子修淨土六首 首—示修淨土六首	境禪人―題龍樹庵主濟川傳公傳後	境禪人—題龍樹庵主濟川傳公傳後 警陀觀音大士贊 一年宗伯像贊 一年宗伯像贊 一一示修淨土六首 一一示修淨土六首	境禪人—題龍樹庵主濟川傳公傳後 警陀觀晉大士贊 一三宗伯像贊 一三宗伯像贊 一三宗伯像贊 一三宗伯像贊 一三小修淨土六首 一一示修淨土六首
境禪人―題龍樹庵主濟川傳公傳後	境禪人―題龍樹庵主濟川傳公傳後	境禪人―題龍樹庵主濟川傳公傳後	境禪人―題龍樹庵主濟川傳公傳後	境禪人―題龍樹庵主濟川傳公傳後 警陀觀音大士贊 一處香尊者贊 如意銘 如意銘 南岳留別嶺南法社諸子十首 首―示修淨土六首
境禪人―題龍樹庵主濟川傳公傳後	境禪人―題龍樹庵主濟川傳公傳後	境禪人―題龍樹庵主濟川傳公傳後 一宗修豫十二十首 「文殊菩薩像疏―爲達師茶毗擧火文	境禪人―題龍樹庵主濟川傳公傳後 **	境禪人―題龍樹庵主濟川傳公傳後
境禪人—— 選龍 楼 庵 主 灣 川 傳 公傳 後 一 一 宗 伯 像 智 一 一 示 修 淨 土 六 首 一 示 修 淨 土 六 首 一 示 修 淨 土 六 首	境禪人——展龍楼庙主灣川傳公傳後 警陀觀音大士贊 一一宗伯像贊 首——示修淨土六首 首——示修淨土六首	特種人 悪龍 横	特	特
等配觀音大士贊 警陀觀音大士贊 一, 燒香尊者贊 如意銘 如意銘 首——不修淨土六首 「大生產象流——為產而來此學人文	等配觀音大士贊 警陀觀音大士贊 一燒香尊者贊 如意銘 如意銘 如意銘 首——示修淨土六首 「大學」等。 「大學, 「大學」等。 「大學, 「一學, 「一學 「一學, 「一學 「一學 「一學 「一學 「一學 「一學 「一學 「一學	等 陀觀 音大士 贊 一	等陀觀音大士贊 警陀觀音大士贊 一,	等陀觀音大士贊 警陀觀音大士贊 一無香尊者贊 一三宗伯像贊 一三宗伯像贊 一一示修淨土六首 一一示修淨土六首
等陀觀音大士贄 普陀觀音大士贄 一一宗修淨土六首 一一宗修淨土六首	等陀觀音大士贄 一一宗修淨土六首 一一宗修淨土六首	等陀觀音大士贊 一院香尊者贊 一宗伯像贊 一子宗伯像贊 一子修淨土六首 首一示修淨土六首	学院観音大士贄 一院香尊者贄 一宗伯像贄 一三宗伯像贄 一三宗伯像贄 一三宗伯像贄 一三宗伯像贄 一三宗伯像贄 一三宗伯像尊 一三宗修 一三宗伯像尊 一三宗伯像尊 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯像 一三宗伯 一三宗伯 一三宗伯 一三宗伯 一三宗伯 一三宗伯 一三宗伯 一三宗伯 一三宗伯 一三宗伯 一三宗伯 一三宗伯 一三宗伯 一三宗伯 一三宗 一三宗 一三宗 一三宗 一三宗 一三宗 一三宗 一三宗	学院觀音大士贊 警陀觀音大士贊 一年高學者贊 一年高別嶺南法社諸子十首 一一示修浄土六首
普陀觀音大士贊 一定。 一定。 一定。 一定。 一定。 一定。 一定。 一定。	普陀觀音大士贊 一定。 一定。 一定。 一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	普陀觀音大士贊 一生宗伯像贊 如意銘 南岳留別嶺南法社諸子十首 首——示修淨土六首	普陀觀音大士贊 一字。	学に観音大士贊 一焼香尊者賛 一売の 一売の 一元修浄土六首 一元修浄土六首 一元修浄土六首 一元修浄土六首
普陀觀音大士贊 一房香尊者贊 對—王宗伯像贊 如意銘 南岳留別嶺南法社諸子十首 首—示修淨土六首	普陀觀音大士贊 一房香尊者贊 如意銘 如意銘 南岳留別嶺南法社諸子十首 首一示修淨土六首	普陀觀音大士贄 一 一 一 一 一 一 一 一	普陀觀音大士贊一焼香尊者贊一一宗伯像贊一一示修淨土六首方外菩薩像疏─爲逹師茶毗擧火文	一字
学院觀音大士贊 一年の 一年の	学に観音大士贊 一 一 二 二 二 二 二 二 二 二	普陀觀音大士贊 一宗伯像贊 一宗伯像贊 一宗修淨土六首 一宗修淨土六首	普陀觀音大士贊 一定。 一定。 一定。 一定。 一定。 一定。 一定。 一定。	管陀觀音大士贊一焼香尊者贊一三宗伯像贊一三宗伯像贊一三宗伯像贊一三修淨土六首方外菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文
学――――――――――――――――――――――――――――――――――――	普陀觀音大士贊 一定。 一定。 一定。 一定。 一定。 一定。 一定。 一定。	一院香尊者贊一院香尊者贊一宗伯像贊一宗修淨土六首百一示修淨土六首一示修淨土六首一京修豫硫──爲達師茶毗擧火文	普陀觀音大士贊一焼香尊者贊一一宗伯像贊一一示修淨土六首「一一示修淨土六首「一一示修淨土六首「一一示修淨土六首「一一示修淨土六首	一院香尊者贊一院香尊者贊一一宗伯像贊一一宗修淨土六首「文殊菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文
普陀觀音大士贊 一房香尊者贊 如意銘 南岳留別嶺南法社諸子十首 京本客家和一為臺和农比學人文	学に観音大士贄 ・	普陀觀音大士贄 普陀觀音大士贄 一房香尊者贊 加意銘 如意銘 一一示修淨土六首 一一示修淨土六首	普陀觀音大士贄 一焼香尊者贄 一焼香尊者贄 加意銘 加意銘 南岳留別嶺南法社諸子十首 南岳留別嶺南法社諸子十首 京本・「「「「「「」」」」。 京本・「「」」。 京本・「「、「」」。 京本・「「」」。 京本・「「」 京本・「「 」 京本・「 、「 、「 、「 、 、「 、 、	学に観音大士贄 一 焼香尊者贄 一 一 示修浄土 六首
普陀觀音大士贊 一 一 一 一 一 一 二 一 一 二 二 二 二 二 二 二 二	普陀觀音大士贊 一 一 一 一 一 一 一 一	普陀觀音大士贊一特香尊者贊一一宗修齊生六首首──示修淨土六首方來菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文	普陀觀音大士贊 一字に観音大士贊 一字に観音大士贊 一字に観音大士賛 一字に観音大士賛 一字に観音大士賛 1 1 1 1 1 1 1 1	普陀觀音大士贊一焼香尊者贊一三宗伯像贊一三宗伯像贊「一三宗伯像贊「一三郎海士六首「一三修浄土六首「一三修浄土六首「大殊菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文
普陀觀音大士贊 一焼香尊者贊 一完らの 一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	普陀觀音大士贊 一焼香尊者贊 一焼香尊者贊 加意銘 加意銘 南岳留別嶺南法社諸子十首 南岳留別嶺南法社諸子十首 古一示修浄土六首 大朱客産象流—	普陀觀音大士贊 一房香尊者贊 一宗伯像贊 一宗的 一宗的 一宗的 一宗的 一宗的 一宗的 一宗的 一宗的	普陀觀音大士贊 灣一燒香尊者贊 如意銘 南岳留別嶺南法社諸子十首 南岳留別嶺南法社諸子十首	普陀觀音大士贊 一
普陀觀音大士贊 一宗伯像贊 一宗伯像贊 一宗修淨土六首 「大生客」 「大生客」 「大生客」 「大生会」 「大生会」 「大生会」 「大生会」 「大生会」 「大生会」 「大生会」 「大生会」 「大生会」 「大生会」 「大生会」 「大	普陀觀音大士贊 一	普陀觀音大士贊 一宗修齊尊者贊 一宗修淨土六首 古一示修淨土六首 古一示修淨土六首	普陀觀音大士贊 灣一無香尊者贊 如意銘 如意銘 「一示修淨土六首 「一不修淨土六首 「一不修淨土六首	普陀觀音大士贄 一 一 年 日 日 日 日 日 日 日 日
学――――――――――――――――――――――――――――――――――――	等 下 觀 音 大 士 贊 一	普陀觀音大士贊 一	普陀鸛音大士贊 一 一 一 一 一 一 一 一	普陀觀音大士贊一一宗伯像贊一一宗修淨土六首一一宗修淨土六首一一宗修淨土六首
 普內蘭音 7 寸 整 一 一 一 宗	等所權高力士警 1.	神宮 神宮 大士 神宮 神宮 神田 神田 神田 神田 神田 神田 神田 神田	普所權電力士營一無香尊者贊一一宗伯像贊一一示修淨土六首古一示修淨土六首一一示修淨土六首	空
	対	灣—— 三字伯像贊 一 三字伯像贊		□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □
費──完任像費营──完修淨土六首大朱客產敢先──完產而來比事人文	費──完件一一宗一一宗「安「安「安「安「安「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」<	費──完全の一一完全の一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	費──無香尊者贊費──王宗伯像贊方子官別嶺南法社諸子十首一示修淨土六首大殊菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文	費──無香尊者贊費──王宗伯像贊首──示修淨土六首文殊菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文
□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □	□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □	□ 一宗修淨土六首□ 一宗修淨土六首□ 一示修淨土六首□ 一示修淨土六首□ 一示修淨土六首	□ 一宗修傳書灣者贊□ 一宗修淨土六首□ 一示修淨土六首□ 一示修淨土六首□ 一示修淨土六首	□ 操香學者贊□ 操香學者贊□ 一示修淨土六首□ 文殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文
世界 一 一 一 一 一 一 一 一	**	····································	□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□	
費── 王宗伯像贊一一示修淨土六首一示修淨土六首 大朱喜產象流——爲蓋而於此事人文	費── 王宗伯像費黄── 王宗伯像費首── 示修淨土六首大朱菩達象流—— 系達師茶此事火文	費──王宗伯像費一三宗伯像費一三宗伯像費一三宗伯像費一三條淨土六首一三條淨土六首一三條分子, 一三條分子, 一三條子, 	費──完后傳養 一三宗伯像贊 一三宗伯像贊 一三宗伯像贊 一三宗伯像贊 一三宗修淨土六首 「文殊菩薩像疏——爲達師茶毗擧火文	費──完には、一一点達師茶毗擧火文「文殊菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文
對——無香尊者贊 ====================================	對—— 無香尊者贊 一 三 宗伯像贊 一 三 宗伯像贊 一 三 宗伯像贊 一 三 宗修淨土六首 首 — 示修淨土六首	對—— 無香尊者贊 如意銘 如意銘 南岳留別嶺南法社諸子十首 南岳留別嶺南法社諸子十首 「文殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文	對—無香尊者贊 一王宗伯像贊 如意銘 如意銘 南岳留別嶺南法社諸子十首 首—示修淨土六首	整——無香尊者贊 如意銘 南岳留別嶺南法社諸子十首 首——亦修淨土六首
- 焼香尊者贄 - 王宗伯像贄 - 王宗伯像贄 - 示修浄土六首 - 示修浄土六首	→ 無雪響 者對 - 一	→ 一 一 三 二 二 二 二 二 二 二 二 二 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一	─ 生宗伯像費─ 王宗伯像費─ 工宗伯像費─ 一示修淨土六首─ 赤蔭像疏—爲達師茶毗擧火文	─ 生宗伯像費─ 王宗伯像費─ 一工宗伯像費─ 一示修淨土六首─ 一示修淨土六首─ 一赤修簿・─ 一
- 焼香尊者贊 - 王宗伯像贊 - 三宗伯像贊 - 三宗修淨土六首 - 三宗修浄土六首	- 焼香尊者贊 - 王宗伯像贊 - 王宗伯像贊 - 一示修淨土六首 - 示修淨土六首	─無香尊者贊─王宗伯像贊一天宗伯像贊一示修淨土六首株菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	- 無香尊者贊 - 王宗伯像贊 - 王宗伯像贊 示修淨土六首 示修淨土六首	- 無香尊者贊 - 王宗伯像贊 - 王宗伯像贊 - 示修淨土六首 - 示修淨土六首
- / / / / / / / / / / / / / / / / / / /	-	-	- 焼香尊者賛 - 王宗伯像賛 - 王宗伯像賛 - 三宗修浄土六首 - 宗修浄土六首 - 赤修浄土六首	-
王宗伯像費 	王宗伯像費 	──王宗伯像 贊 ──王宗伯像 贊 一示修淨土六首 ── 新達像硫—爲達師茶毗學火文	王宗伯像賛 王宗伯像賛 	一王宗伯像費一天宗伯像費一示修浄土六首一赤修浄土六首株菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文
一王宗伯像贊 一王宗伯像贊 一一示修淨土六首	一王宗伯像贊 一王宗伯像贊 一一示修淨土六首 「一一示修淨土六首	王宗伯像贊 	王宗伯像贊 王宗伯像贊 王宗伯像贊 	一王宗伯像費一天宗伯像費一天修浄土六首一示修浄土六首株菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文
一王宗伯像賛	一王宗伯像賛	一王宗伯像費一天宗伯像費○ 大き で	一王宗伯像費一天宗伯像費一天宗伯像費一天修浄土六首株 菩薩像疏 ─ 爲達師茶毗擧火文	一王宗伯像費一天宗伯像費一天宗伯像費一天修浄土六首一茶修み、一点達師茶毗學火文
一王宗伯像贊	一王宗伯像贊 一王宗伯像贊 一一示修淨土六首 「基本」	―王宗伯像贊 ――王宗伯像贊 ――子宗伯像贊 ――――――――――――――――――――――――――――――――――――	一王宗伯像費一天宗伯像費一天修浄土六首一天修浄土六首株菩薩像疏─爲達師茶毗擧火文	一王宗伯像費一天宗伯像費一天修浄土六首一天修浄土六首株菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文
一王宗伯像贄	□ 王宗伯像贄 □ 王宗伯像贄 □ 王宗伯像贄 □ 王宗伯像贄	一王宗伯像贊一天宗伯像贊一天修淨土六首○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務○本務<	王宗伯像費 三宗伯像費 三宗伯像費 三宗伯像費 三宗伯像費 三宗伯像費	一王宗伯像費一天宗伯像費一天修浄土六首一天修浄土六首一天修ののでは、一天ののでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、一大のでは、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、<li< td=""></li<>
 一王宗伯像贊 一子修浄土六首 一子修浄土六首	□ 三宗伯像贊 □ 三宗伯像贊 □ 三宗伯像贊 □ 三宗伯像贊 □ 三宗伯像贊	──王宗伯像贊 ──王宗伯像贊 ──王宗伯像贊 ──王宗伯像贊	一王宗伯像贊一天修淨土六首株菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文	一王宗伯像贊一天修浄土六首一赤修浄土六首株菩薩像疏─爲達師茶毗擧火文
王宗伯像贊 王宗伯像贊 王宗伯像贊 三家衛、 三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、	王宗伯像贊 王宗伯像贊 	王宗伯像贊 王宗伯像贊 王宗伯像贊 	王宗伯像贊 王宗伯像贊 王宗伯像贊 	一王宗伯像贊一天宗伯像贊一天修淨土六首一系修淨・土六首株菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文
王宗伯像賛 	- 王宗伯像賛 	王宗伯像賛 ・	王宗伯像賛 	王宗伯像賛
意銘	意銘	意銘	意銘 「日宮川僧園」 「日宮川嶺南法社諸子十首 「一示修淨土六首 「一示修淨土六首 「一宗修豫、」「爲達師茶毗擧火文	意銘 「日宮 別嶺南 法社諸子十首 一示修淨土六首 一示修淨土六首
后留別嶺南法社諸子十首示修淨土六首	□ 高盛□ 一示修淨土六首□ 小修淨土六首□ 小修淨土六首□ 小修淨土六首□ 小修淨土六首□ 小條淨土六首	□ 会□ 会<td>意銘 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・</td><td>□ 高紹□ 一示修淨土六首□ 一示修淨土六首□ 株 菩薩像疏 — 爲達師茶毗擧火文</td>	意銘 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	□ 高紹□ 一示修淨土六首□ 一示修淨土六首□ 株 菩薩像疏 — 爲達師茶毗擧火文
意銘 一示修淨土六首 「特達象流」——爲臺丽茶此學人文	意銘 一示修淨土六首 一宗修淨土六首	□ 会議□ 会員□ 会員<td>岳留別嶺南法社諸子十首示修淨土六首</td><td>□ 無空間□ 無空間□ 二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十</td>	岳留別嶺南法社諸子十首示修淨土六首	□ 無空間□ 無空間□ 二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十
后留別嶺南法社諸子十首	后留別嶺南法社諸子十首	株 菩薩像硫──○ 株 菩薩像硫──○ 株 菩薩像硫──○ 株 菩薩像硫──○ 株 菩薩像硫──○ 株 菩薩像硫──	意銘 一示修浄土六首 一示修浄土六首 株菩薩像疏―爲達師茶毗擧火文	□ 無空間□ 二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十
后留別嶺南法社諸子十首	□ 公司□ 公司<td>岳留別嶺南法社諸子十首</td><td>□ 無空間□ 中間□ 中間<</td><td>岳留別嶺南法社諸子十首示修淨土六首</td>	岳留別嶺南法社諸子十首	□ 無空間□ 中間□ 中間<	岳留別嶺南法社諸子十首示修淨土六首
后留別嶺南法社諸子十首	后留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
后留別嶺南法社諸子十首 一示修淨土六首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首示修淨土六首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首	岳留別嶺南法社諸子十首
中宗修淨土六首	中国的特殊的 一系 经净土 六 首	母留別嶺南沒記記子十首	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
生管另資內 治而言:一章	生管另資內 治而語言 一章	朱菩薩像疏——爲達師茶毗擧火文	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	株菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文 ——示修淨土六首
# 客產象流 — 為達而 茶比學人文 # 客產象流 — 為達而 茶比學人文	**	外菩薩像硫—爲達師茶毗擧火文	外菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	外菩薩像疏——爲達師茶毗擧火文 ——示修淨土六首
生态,不是一个,不是一个,不是一个,不是一个,不是一个,不是一个,不是一个,不是一个	株 菩 達 象 流 ――	株 菩薩 像 硫 ― 爲 達 師 茶 毗 學 火 文 ― 示 修 浄 土 六 首	株菩薩像硫―爲達師茶毗擧火文 ― 示修淨土六首	株菩薩像硫―爲達師茶毗擧火文 ―示修淨土六首
# 客產象流 — 為達而 客比學人文 — 示修淨土 六首	- 宗修浄土六首 - 宗修浄土六首	株 菩薩 像 硫 ― 爲 達 師 茶 毗 學 火 文 ― 示 修 浄 土 六 首	殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文 —示修淨土六首	株菩薩像硫―爲達師茶毗擧火文 ― 示修淨土六首
朱 客 產 象 流 — 爲 幸 而 客 比 學 人 文 — — 示 修 淨 土 六 首 — — 示 修 淨 土 六 首	朱	殊菩薩像硫—爲達師茶毗擧火文 —示修淨土六首	株 菩薩像疏─爲達師茶毗學火文株 菩薩像疏─爲達師茶毗學火文	株 菩薩像疏──爲達師茶毗擧火文一示修淨土六首
# 客產象流 — 為達丽 客比學火文 — 示修淨土六首	朱 菩 蓬 象 流 ——	株菩薩像硫―爲達師茶毗擧火文 ― 示修淨土六首	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	株菩薩像疏―爲達師茶毗擧火文 ―示修淨土六首
朱客產象流——爲幸而茶此學人文——示修淨土六首	朱	殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文 ——示修淨土六首	殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文——示修淨土六首	殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文——示修淨土六首
朱 客 產 象 流 — 爲 幸 雨 客 比 學 人 文 — 示 修 淨 土 六 首	朱菩薩象流——高達師茶此學火文——示修淨土六首	殊菩薩像硫—爲達師茶毗學火文 —示修淨土六首	殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文 —示修淨土六首	殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文——示修淨土六首
朱客產象流——高達丽茶比學火文——示修淨土六首	朱	殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文 ——示修淨土六首	殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文——示修淨土六首	殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文 ——示修淨土六首
朱客產象流——高華丽茶比學人文——示修淨土六首	朱 菩 谨 象 流 —	殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文 ——示修淨土六首	殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文——示修淨土六首	殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文——示修淨土六首
て朱客産象流	文朱菩薩象流——爲達師茶此學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
て朱宮産家流――三二示修淨土六首	文朱菩薩象流——爲達師茶吡擧火文 	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文
て朱宮峯象流	文朱菩薩象流――爲菙師茶吡擧火文	文殊菩薩像硫爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文:	文殊菩薩像疏―爲達師茶毗擧火文
て朱宮産象流――――――――――――――――――――――――――――――――――――	文朱菩薩象流——爲華師茶此擧火文	文殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
て朱	文朱菩達象流	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文	文殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文
て朱宮牽象而一為華丽茶比學人文	文朱菩達象流——爲幸詗茶吡睾火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
て朱宮牽象流――爲幸而於此學火文	文朱 菩 產 象 流 —— 爲 幸 师 茶 此 攀 火 文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
て朱 돌 牽 煮 ――	文朱菩達象流——爲幸師茶吡擧火文	文殊菩薩像硫—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
て朱宮牽象而	文朱菩達象流	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗舉火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
て朱 돌 牽 煮	文朱菩達象流——爲耋詗茶吡搴火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
て朱宮牽象而	文朱菩達象流——爲幸師茶此擧火文	文殊菩薩像硫—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
て朱宮牽象而	文朱菩達象流——爲耋詗茶吡搴火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
て朱唇牽象而	文朱菩達象流——爲耋詗茶吡搴火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
て朱宮牽象流	文朱菩達象流——爲幸師茶此擧火文	文殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
て朱宮牽象流	文朱菩達象流——爲幸師茶吡擧火文	文殊菩薩像硫—爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
香文朱唇牽象布	季文朱峇嶐象流——爲幸师茶此擧火文說	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗擧火文	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文
条 C 朱 唇 毫 象 态	季文朱峇崔象流——爲幸师茶此事火文說	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗學火文說	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文說	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文
新文朱唇牽象而	季文朱菩達象流——爲幸师茶此擧火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗學火文說	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文
新文朱唇牽象而	季文朱嵜產象流——爲幸师茶此擧火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗擧火文	香文殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文
	季文朱峇嶐象流——爲幸师茶此擧火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗擧火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文
	季文朱嵜達象流——爲幸师茶此事火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文
学文朱唇牽象而	季文朱菩達象流——爲幸師茶此擧火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文
≶ て朱 唇牽 象 ← ← 爲 牽 师 茶 比 擧 人 文	季文朱嵜達象流——爲幸师茶此擧火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗擧火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文
≶ て朱 唇牽 象 ← ← 爲 牽 师 茶 比 學 人 文	季文朱嵜產象流——爲幸師茶此擧火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗擧火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文
昏丈朱唇產象流——爲童师茶比擧人文	季文朱嵜達象流——爲幸师茶此事火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
昏丈朱唇產象流——爲童而茶比擧火文	季文朱嵜產象流——爲幸师茶此擧火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文
学文朱唇牽象而	季文朱嵜嶐象流——爲幸师茶此擧火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文
₹ て朱 唇牽 象 ← ← 爲 牽 而 茶 比 攀 人 文 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	季文朱菩達象流——爲幸菲茶此擧火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文
₹乙朱唇牽象統爲牽而茶比擧人文	季文朱嵜嶐象流——爲辜聏茶此擧火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文
≰ て朱	季文朱嵜達象流——爲幸師茶此擧火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗擧火文	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文
≰ て朱 芸 毫 象 ← ← 爲 幸 师 茶 比 擧 人 文··································	季文朱嵜達象流	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文
学文朱喜產象流	季文朱嵜達象流——爲幸师茶此事火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文
昏丈朱唇董象流	季文朱嵜產象流——爲室师茶此擧火文	香文殊菩薩像硫爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗擧火文
骨丈朱唇毫象流	季文朱嵜產象流——爲室师茶此學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文	香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文
11.多丁与元季文朱等董象流	丘臺山圭沉香文珠菩薩象流	五臺山造沉香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文
江圣丁与元季文朱等董象流	丘臺山圭元季文朱菩達象流——爲幸师茶此事火文	五臺山告沉香文殊菩薩像疏爲達師茶毗擧火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文
正圣丁与元子之朱字董象而	丘臺山雪儿香文珠等產象流——爲臺師茶此事火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文
立圣丁与元子文朱字董象布——高室而茶比學人文	丘彥山 告冗 季文朱 等產象流——爲 奎丽 茶 此 學 火 文	五臺山造冗香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
正多一与元子之朱与董家杰——高室而长比事人文	丘彥山	五臺山告冗香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗舉火文
□臺丁肯式等大朱唇蓋象流——爲臺而茶比學人文	丘彥山	五臺山告冗香文殊菩薩像疏——爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏—爲達師茶毗學火文
记忆了生气等之朱字莲象流	丘瀀山告冗季文朱等莲象流	五臺山造冗香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏爲達師茶毗學火文	五臺山造沉香文殊菩薩像疏——爲達師茶毗舉火文
	丘臺山	五臺川造灯香文殊菩薩修研――爲遠ബ茶毗粤ツ ダ	五臺山造沂香文殊菩薩像硑――	五臺山造沉香文殊菩薩像疏——
	日皇上生三人子 (文字) 100 100 100 100 100 100 100 100 100 10	石皇―	五臺川進沂香文威菩薩僧勗――焦這笛奔毗暑リろ	五臺山造 で香 文
		子童! 建りする P き 変	王臺山道沙君子所書座作の「焦遠自之町」といっ	王臺山造物者である。原理的一条選問之門是リュ
		というできながら、これが、これには、これには、これには、これには、これには、これには、これには、これには	プラージンでである。 の対象にあれる。 の対象にあれる。 の対象にあれる。 の対象にある。 のがある。 のがる。 のがある。 のがある。 のがる。 のがる。 のがる。 のがる。 のが。 のがる。 のがる。 のがる。 のがる。 のがる。 のがる。 のがる。 のが。 のがる。 のが。 のが。 のが。 のが。 のが。 のが。 のが。 のが	五臺上說沒有之外是所作的一次的自然的是一个。 1
と言うに対していた。一般に対している。				

卷卷卷	卷卷卷	卷卷	卷卷
卷四十八····· 卷四十八····· 夢遊詩集 卷四十九····· 夢遊詩集	卷四十五 卷四十五 卷四十六 卷四十六	卷四十四········	卷四十二卷四十二
集 集 集	四、、大學綱目決疑題新	十四····································	十二
	11. : 論 : 八 生 : 、 : 學 義 : 道 : 網	道: 擎節	競
	軌 :		
	義 . 發 . 題		
	熟山		
	青		
… · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	····· 六 三 —	六一五
七三八	· 六 六 八 三 四		五 五

塔第一憨山大師口筏引
卷五十五(附錄)八二四
憨山老人自序年譜實錄下
卷五十四八一〇
憨山老人自序年譜實錄上
卷五十三七九一
示曹溪寶林昂堂主一憨大師曹溪中興錄序
卷五十二七七八
曹溪中興錄下
卷五十一七六四
曹溪中興錄上
卷五十七四六

靈何方又言楚石季潭而后拈花一枝幾熄由今觀

憨山大師夢遊全集序

歲襲孝升入粵海 睡華首和尚得余書雄雄告衆訪 求期湖棲壑禪師藏本曹秋岳諸公陰寫歸吳謙益 之演瑜伽龍樹之釋般若千門萬戸羅網交光郁郁 建心既徹簡乃爲之序曰佛祖闡教以文說法慈氏 **楷有行墨改竄實禀承大師墜言非敢曆瑜犯是不** 氏心法序下委判定見而色喜遂削前藥今茲響勘 手自豐勘撰次爲四十卷大師音述援筆立就文不 加點字句不免繁花段落間有失次東遊時會以た 憨山大師夢遊全集嘉興藏函山刻法語五卷丙申 門以通敏扶宗其文粵而麗徑山以弘廣應機其文 煩其最著者三家頸津以孤亢崇教其文裁而辨石 哉義理之津涉文字之淵海也逮及有宋教殿而文 以來天台清涼永明之文如日麗天如水行地大矣 濬發於南什肇弘演於北推軸大略實惟其始隋唐 平燦燦平千古之至文也大教東流人文漸啓遁遠 明而肆夫文而至於辨也處也肆也其城塹日以堅 其枝葉日以富其務籠引接日以博浩浩乎巵言之

其於中古手作易者其有憂患手豈不信哉我大師 生陳方侯獨語悲悟放筆薙髮大師搏取深心光芒 務龍引接務欲使末法衆生需被其一言牛旬皆將 從如來文字海中流出以鎮津之崇教者固其城塹 界悟徹於清涼被根應病橫說豎說千言萬偈一一 廣智深窓真多實悟惟心識智夢授於慈氏華嚴法 以石門之扶宗者沃其枝葉以徑山之應機者暢其 日出而岌岌乎津梁之日被也禁辭有之易之作也 清淨眼觀察諸龍命應盡者以左右翅鼓揚海水悉 飲河滿腹同歸於智海而後已雜華言金翅鳥王以 英雄不世出之資當獅紅絕響之候給身爲法一車 取善根衆生置佛法中亦復如是日者廣南籍寫書 令兩關取而食之大師說法爲人欲搏生死大海水 沙劫猶未艾也嗚呼偉矣哉大師與紫柏尊者皆以 昱曜凌紙怪發善根衆生應機吸受如方侯者歷河 其爲昏塗之炬火則一也昔人嘆中峰輟席不知道 兩輪紫柏之文雄健而斬截大師之文紆餘而悲婉

之不歸於紫柏整山而謎端手後五百年寬外鋒起之不歸於紫柏整山而謎端手後五百年寬外鋒起於所謂名世間出者裨販訓賊之徒往往惡就系附師 美高編然為蚍蜉之據樹東面灣而未審也然則大師同體 大悲如作易之有憂患者其何時而止乎斯可為痛 大悲如作易之有憂患者其何時而止乎斯可為痛 美追先志遂告成事其在激表其何時而止乎斯可為痛 美追先志遂告成事其在激表其何時而止乎斯可為痛 美国有法乳之旁法高附需上章困敦之蒙仲冬長 普與有法乳之旁法高附需上章困敦之蒙仲冬長

整山老人自贄

這重公案

章甫適越其誰不疑石頭之別肝膈冰冷丁生吹火 根歷主客收放夢歷掌拳實塔宇山之項 寫康觀影緣影得心心亡性冥大用無常謹以張聽 白日鼓掌我若無心菩薩影響有心之康祖愚髮草 此心何情弘并得罪命如單稿千里薄屬元益路運 骨刺魂驚大師得戍彌感聖明曹溪蠱毒飲者曾要 雷道名美麗風正高孟茂孤逝舌相昭昭南等題題 大師飲之銷盡請意指最舍利康祖之貪貪不爲我 康和來吳清公調學髑髏大師金剛眼突瘴海之惨

達觀可道人學

鉄夢遊全集小紀

之亦讚歎無比既以海幢所設者簡附翼公桌復刊 布諸利為博訪全敗之計又以八行致端州棲壑禪 書其於大師道稿流通之心夏切無此華首和尚觀 師索其全集禪師慮失原稿未徙也二月之望前孝 丁酉人日中丞蠹公孝介過海疃出宗伯貸公牧器 廉萬公履安來以錢公香有專囑爲謀之方伯曹公

of A term and take that the terms of the . S

之以博數千里外一整彈指三月初六日比丘今釋 出活信作大佛事而此僧承是心光爲一切人作發 適會城方有試事話士子之歸依華首者聞之皆至 稿乃後而曹公與墨憲錢公黍谷各捐資爲籍寫費 放岳作書重請於是再奉華首書遺喻如後知客往 起導師又未可量則是書流通功德豈可量耶因記 見諸護法一片心光與無情筆墨问向花首堂前推 所池裏面涌蓮華此不獨見大師心光攝受無量亦 差現前同學大衆幫他搭起袈裟且看曹谿一滴水 部遺稿能使陳郎出家時節因緣相值將銀引發無 制度主名古值字曰瞿滴余爲書助綠偈日多山一 **祗筆落墨數日而畢其司較對則一靈種侍者也時** 一儒生陳方侯於作字領有所感觸便求出家即日

谿及收藏遺稿皆與有力耳今釋再白 相號中當起家乙榜任撫州司李大師靈奮遺曹 寄遊爲大師肖座今海幢諸僧皆其諸孫也劉起 夢遊全集日錄編輯重較諸名幸各存之通炯號

示馮文孺	_	示靈洲鏡禪人	示性湻禪人	法語	卷之三	云法錦禪人	示優婆塞易真潭	示優婆塞結念佛社	示小師大義	示奇侍者	答鄭崑巖中丞呂下古	法語	卷之二	像費序	卷之一		& 山老人夢遊集日錄
		入					巨潭	念佛社			丞 足 下 古			記目錄			集日餘
示明哲禪人	示晉六符	示歐伯羽	示妙谜座主				示本淨實禪人	示真遇禪人	示洞聞棄禪師	示無隱挂禪人	示無生禄禪人						
	18400ALA 3-		and the second	ellent der Zeitellich	Bar Se Jacobs Los	orana unit d'alla	The state of the s	r Alasan dhafar vir, N. A.		adjungs, Jr. Terris				-	anorth, office traces	·	
示梁騰脣	示李子融	示歐嘉範	示文彰	示周暘高	示寬兩行人	示鄧司直	示小師惠宗	示慶雲禪人	示容玉居士	光IIII.	卷之四	示了際禪人	示態際空禪人	示西礁居士	示佛微乾首座	示宗遠禪人	示訂中安羅人
示游覺之	示歐嘉可	示李子晉	示例平子	示舒伯損	示如良禪人	示妙光玄禪人	示慧侍者	示如常禪人	示自菴有禪人住山				示懷恩修座主	示陳生資甫	示懷愚修禪人	示念松通禪人	示極禪人

ACTOR PROPERTY OF THE PERSON NAMED IN		SI OTEL MOTOR AND ADDRESS.			-			The second secon	ony other terms also also also also also also also als		A.		S.					
	示參禪切要已下古	示古愚拙禪人	示靈原覺禪人	示歸宗慈長老	法語	卷之六	示慧楞禪人	示玉覺禪人	示李福淨	示雙輪炤禪人	示鍾衡頴	示智海岸書記	示湘潭諸優婆蹇	示觀智雲禪人尼下古	法語	卷之五	示梁仲遷	示王伯選
	示董智光	示袁公寥	示斬陽歸宗常公	示王自安捨子出家			示半偈聞禪人	示明益禪人	示段幻然給諫	示題愚衡禪人	示袁大塗	示劉存赤	示方覺之	示了心海禪人			示劉仲安	示寂覺禪人禮普陀
	示劉道人	示了無深禪人	示等愚侍者	示念佛切要	示沈止止	示性田行者	示在介侍者	示王鹿年	示太素元禪人	法語	卷之七	示石鏡一禪人	示馮延齡	示譚梁生	示量衍宗禪人	示嵩撲恩山主	示徑山西堂靈鑒智	示聞汝東
	示非石玉禪人	示雪嶺峻禪人	示玄津壑公	示雲棲侍者	示澹居鎧公	示朱素臣	示在淨沙彌	示在顒侍者	示恒河智禪人持經	,			示寒灰奇小師住山	示曹居士	示顧山子	示椉密顯禪人	示知希先山主	示徑山幻有堂主

示沈居士	示護福堅
示顧汝平	示鎮仲先持咒
示嘉禾楞嚴堂主	示東禪浪崖耀禪人
示玉聖沖元深	示孫詵白
示姜養晦	示录
卷之八	
法 語	
示歸宗智監寺已下古	示自宗念禪人
示陸將軍	示慧成信首座
示自覺智禪人	示龍花泰禪人
示翠林禪人	示順則易禪人
示立機多禪人	示智沙彌
示性覺禪人	示賓藏禪人禮普陀
示明輝少林禮祖	示法界約禪人
示崇觀禪人	示六如坤公
示西印海公修淨土	示沙彌性鎧
卷之九	

-																	5	
與妙峰禪師五首		與選閱禪師九首已下古	計 自居口	卷之十三	示王周二生	示澄鋐二公	示沙彌祖定	示王生更字	示黃惟恒	示蕭玄圃宗伯二則	答徑山澹居八調	按語	卷之十二	答徑山西堂廣智六團	答湖州詹海印九阿	法語	卷之十一	答山東德王 兩周已下古
客選批輔師二首 		六古			示杜生	示工吾與	示吳公敏	示周子潛	示馬居士	示周子寅四則	答王芥菴朱白民三周		٠	答沈大潔六問	答武昌段給諫	Constitution and the second	Kan yang barang	九古
										Ÿ.								
奥湛烈福 部	しょうまう	與無念禪師	與雲棲大衆	與廬山圓通大衆	與神雲法師	與月清上人	寄無宿上人	與悟心首座	與賴菴師	建門門	卷之十四	屬弟子	與萬安上人	寄松谷師	與隱菴上人	與愚菴法師三首	與雪浪恩兄三首	與月川法師
名四一法的	が日本	答無異禪師二首	與巢松一雨二法師	與宗玄上人	與幻一律師	與印卷法師	與龍華主人	與體玄小師	與密蔵開公			與哪塵上人	與梅豬本師	與靜堂師	與靜修上人	與交光法師	與無言宗師三首	與五臺空印法師

首 與張大心 首 與牙南羽	常三首 答照 與所 金沙侍御二首 答照 與 原	章 與 與 與 與 與 與 與 與 與 與 與 與 與 與 與 與 與 與 與	與
	與晉見臺太宏	與漢月藏公	與修六副主二首

			-														
與熊芝岡侍御	與顧履初明府	與嚴天池中翰	與聞子與	答荊世子	答杭城諸宰官	與穆象玄侍御	與高瀛臺太守	與元温啓南	與馮啓南孝廉	與吳本如嗣部	與賀知忍	與汪靜峰司馬三首	書間	卷之十七	與瞿洞觀三首	與樊友軒侍御	與岳石帆計部二首
與蔡五岳使君	與處素心吏部	與王李和	與金省吾中丞	答無錫翁廣文	謝斯州荊王	與劉玉受繕部	與談復之二首	答李湘州太史己下古	與龍元温	與督金節儀部二首	與于中軍比部四首	與繆覺休二首				與那與陽孝廉	與處德國吏部
首楞嚴經通識序	首楞嚴經歷鏡序五卷十	十古		卷之十九	答沈大潔	答吳生白方伯	與賀函伯戸部	與袁公寥	覆段幻然給諫	答錢受之太史七首	答王東里明府三首	答習能始聚怎	與王省東侍御		卷之十八	答阮儋宇太守	
		請方册大藏序			答郭千秋	答李三近	答吳觀我太史三首	與周海門太僕	答袁滄孺使君二首	與徐清之中翰	與鲍中素儀部	答徐明衡司馬	答陳無異祠部		A.		謝吳曙谷相國

				methodro co													
三潭護生隄引	五臺金蓮社序	徑山志序	焦山法系序	華嶽法派序	十無盡藏品序	二十五圓通圖序是下古本	六祖壇經序二首	千佛懺序	淨土指歸序	序	卷之二十	方外遺書序	素柏全集序	起信論直解序	春秋左氏心法序	金剛決疑序	合刻法華文句序
	湖州天聖因緣序	菩提菴妙明堂序	船湖山詩序	南嶽諸祖景堂序	青原道場 序	本	因明寢言序	楞嚴接光錄序	瑜伽佛事序	and the same of th	and the same of th	雲棲了義語序	雲棲全集序	註道德經序	性相通說序見二十	金剛決疑題辭	心經直說引
無極師道行碑記	一 伏牛山慈光寺碑記	開錦屏魁音洞記	涿州石經山舍利記	石經山琬公塔院記巳	記	卷之二十二	送暎川法師幻遊序	賀應公住持慈壽序	送無言住持少林序	方子振奕微序	贈良醫序	贈太和老人序	送 吳 將 軍 還 越 序	壽一山上人庁	贈無盡上人住持序	序	卷之二十一
修悟山觀音菴記	修之罘山神廟記	五臺鳳林寺下院碑	大都明因寺常住記圖	十下 古本	- 1 			贈大倫住持廣濟序	送仰崖畫道景序	送堅音還金沙序	別陳生序	壽曹溪住持賢公序	周子悟一篇序	没蕴素上人還山序	送建上人遊八桂序		

揚州府放生社記	肾都金蓮卷 記	三古本	法相寺定光佛記号十三本
普度菴託	吳江接待寺常住記	木麗江奉佛記	高雲山藏經閣記
與佛殿山長慶寺記	雙峰月公道行碩記	遊汞州芝山記	衡州開福因綠記
廣東六祖戒壇碑記	新安仰山誌公像記	光孝重修六祖殿記	夢遊端溪記
金沙東禪寺綠起記	金椒縣昌化菴記	端州寶月臺記	遊景泰寺記
平湖紫清寺田記	廬山萬壽寺佛像記	瓊州全東泉記	瓊海探奇記
廬山雲中寺碑記	鷹山大悲懺堂記		記
	記		卷之二十四
	卷之二十六	南雄集龍菴記	軍修海會菴記
明州育王舍利記	金輪峰舍利塔記	休糧山社記	龍川淨土寺記
歸宗寺復生松記	放生功德記	法性寺優曇華記	電白縣化城菴記
清暢齋記	泰和縣眞如庵記	忠勇碑記	重修天心寺記
讀異夢記	忠懿王舍利塔記	粉 建長壽菴記	重修彭城洪福寺記
海虞尊勝菴記	徑山凌霄峰記	曹溪千日道場記	觀楞伽閣筆記
淨慈寺宗鏡堂記	鷹山五乳法雲寺記		置巴
	記		卷之二十三
	卷之二十五		旃檀如來因緣記
	金明寺大定堂記	修靈山大覺寺記	重修互峰玉皇殿記

i.		ē			a all addings of the last			and the second			·							
	古風湻公塔銘	徑山灣居鎧公塔鈴	塔銘	卷之二十九	黄山寓安寄公塔銘	法振鐸公塔銘	廬山敬堂忠公塔銘邑下古本	廬山恭乾法師塔銘	古鏡玄公塔銘	棲霞景齋珠公塔銘	壽昌無明禪師塔銘	塔銘	卷之二十八	雲棲蓮池禪師塔銘	徑山達觀禪師塔銘已下古	塔	卷之二十七	高郵海臺港常住記
	龍華禛公塔銘	南岳瑞光祥公塔銘			Y I	比丘性慈塔幢銘	丁 方 古 本	,	大方逕禪師塔銘	耶溪若法師塔銘	無垢蓮公塔釣		*	五臺空印法師峇鉾	力古本			
											0							
	八大人覺經跋	跋百城烟水卷	刻藥師經跋	題普賢行顯品	華嚴經題辭	題血書法華經二則	題華嚴法華二經後	三血害華嚴經後起下	題故	卷之三十一	海明沙彌傳	雪浪忍公傳	雲谷大師傳	報恩近林和尚傳 卷 十二	停	卷之三十	無瑕玉公塔銘	徐公願力碑銘
	釋迦觀音志	尊勝陀羅尼跋	白衣陀羅尼經跋	題安樂行品	菩提心願文跋	血書梵網經故	血書金剛經跋二則	七古本			聞仲子小傳	浮山朗目智公傳	五臺妙峰登公傳	六古本			勉菴幻法師塔銘	寶藏成公塔銘

												i.					
包公研書心經跋	丁右武浮海詩跋	題坐禪餞後	題十六妙觀後	百法八藏跋	重刻楞嚴經战	書金剛經頭後	楞伽略科題辭	跋可禪人行脚卷二則	題跋	卷之三十二	佛奴歌跋	題達大師送禪人卷	題竹林法語	題法雷遠震等	題数生現報餘	趙雲棲小像	題求生淨土圖
題東坡觀音費	爲右武書七帥偈	題書七佛偈後二則	題諸軍道景	題四十二章經	起信直解題幹	物不遷論跋	題金剛註解	題 <u>檀經首</u> 是下古本	and the state of t	منافعة المتكنف	題壽昌語鉄	超遠大師祭屬老文	趙真侍者行陶卷	題國朝高僧行脚卷	遷五大師傳	放生文跋	題化城寡蔬
		alvanament ma		alayahan da sasah													
思惟佛贊	雪山苦石佛焚七首	西方三聖贊	然燈占佛贊尼下古本	赞	卷之三十三	用 遼陽 將士文	超華山銅殿二碑	退血害企剛經	臺山竹林師卷	置幻予塔路	返南皐萬法婦一卷	题雪浪千丈	書范泰論後	書山居十首颐	六詠詩坂	題從軍詩	題鬼子母卷
思議佛贊	舍那如來法身贊	化佛贊	貝葉佛母贊			短龍樹菴主傳	題眞慈達孝卷	書南潯報國寺疏	題壁光童子傳	金竹坪接待題辭	題圓量有	書顧覺顧居士事	題書法華經歌後二則	紫柏觀病偈跋	書懷李公詩	匙臥病詩	書元旦大雪歌

十二尊者揭厲圖贊	又十二尊者贊			普陀觀音贊二言	
十四尊者贊	十六應眞圖贊	angal-majorin kul V	御刻観音贊	自在觀音贊二首	
金畫遊戲圖贊	又贊十八首		應變觀音贊	嚴樹觀音贊	
又贊十八首	又贅十五首		鞍 電戰音獎二首	南海觀音贊二首	
十八尊者渡海鹭	園林遊戲圖合贊		紫竹砚音贊二首	紙藍觀音贊三首	
一十古本	十八尊者贊三首是下		白衣觀音費十首	禪定製音費三首	
三十三配道景贊	陳如尊者贊		蓮花觀音費二首	瑞蓮觀音贊	
維摩大士費	日光菩薩贊		蓮葉観音贊二首	比丘觀音贊	
準提菩薩贊三首	寳掌菩薩賛	直	水月觀音贊二十四章	大悲觀音贊五首	
火光觀音贊	禮佛觀音贊	:	普賢大士贊七首	文殊大士贊二首	
四臂觀音贊	大悲觀音寶二首		三大士贊	辟支佛贊	
渡海觀音費	刺繡觀音赞二首	e gyptyddiaethaeth	布袋和佝偻	彌勒贊三首	20.00
則通觀音贊	降寬觀音贊二首		織盛七明如來贊	旃檀毗盧佛贊	
將軍觀音贊	空海觀音繁		还 行如来赞二首	親佛贊	
每月觀音費	海侧觀音贊			刺繡佛贊	
草衣觀音贊	天衣觀音聲	CHI SHEETHAMAN	釋迦佛贊四首	長藥繡佛圖贊	*
	贊	ugusti ennissi Parn	河爾陀佛贊二首	臥佛贊	
	卷乙三十四		接引佛贊王首	無量量佛質二首	/

								and the second participation of		Westerlier for Applied							
大歌耆季贊	靈徹法師贊	空印大師贊二	無明和尙贊	紫栢大師贊五首	王峰和田贊	呂純陽贊	孔子贊	文昌帝君贊	全剛墙贊		選摩大師数十六首	贄	卷之三十五	渡江尊者贊八首	調獅尊者贊	降龍尊者類二首	補衲尊者贊二首
定宗老宿贊	自光長老贊	紹覺法師贊	無邊和尚贊	雲棲大師赞五首	賽峰和 尚贊	漢壽亭侯贅	彭矶贊	港干赞二	三教圖贊	諸匪道景裕專贊八十	六龍大師贊		uge ov radovnase	德香等者對	浮海尊者贊		看經尊者類二首
観心銘	母子銘	銘	命簑	心管	我簑	座右簑	簑	本主治軍	金剛經項十八首	佛祖機緣三十則己	項	卷之三十六	胡中丕贊	澹居鎧公贊	月岸公贊	济 宝師賛	雪蝠山主贊
				性簑	身箴	定志簑			十六妙觀	二下十古一本			王宗伯贊	自贊三十三首	雪嶺公贊	虚谷公贊	楚懷山主贊

寂寞記	讀莊子	牧心說	安全說	雜說十九則已下台本	說	卷之三十九	偈一三百九首	卷之三十八	個一七十二首三下古本	卷之三十七	毗耶室銘	六沙弟	終寺第	正心銘	六良第	忘錄銷	受非 第
誠心說似憂支	圓扇我	觀心說	學要說	三本、近山党	On-to designate				十古本		鐵如意銘	般若軒鲚	齊家銘	誠意簽	念朗三珠銘	觀世第	夢翠遊
花器接待流	曹溪祖庭琉	施置佛疏	造文殊像疏邑下古本	流文	卷之四十	信圣 白字式	何希育字說	信息要字說	詹同問字說	器妆忘字說	徐子厚字號	歐嘉可字說	梁不遷字說	感應說	無情佛姓義說	86年代	澤山說
吉滕嶺茶菴疏	祖師景堂疏	南花祖塔疏	小唱園繁耀誌			自性說	僧香林字說	玉 應如字說	詹無陰字說	方學之字說	李容我字說	鄭士修字說	黃用中字說	長孝子廿雲說	四願臺說	北光樓說	覺夢說

卷之四十五 卷之四十四 卷之四十三 卷之四十二 卷之四十一 楞嚴補注二十七 觀老莊景響論是下古 楞伽補遺古本卷 法花擊節二十 院嚴懸鏡古本奏 放生文 **曾**九龍對靈小多文 祭徽空師文 祭雲棲大師文 祭胡順菴中丞文 血書花戲經願文 湖心亭佛墖疏 更終普濟寺疏 六条 本 大學決疑古本卷 達大師舉火文 結念佛社文 祭續芳聯公文 祭達觀大師文 為靈通侍者 中與数見 祭陸五臺太宰文 重修龍花寺疏 重建祇園寺疏 卷之五十三 卷之五十四 卷之五十二 卷之五十一 卷之五十 卷之四十九 卷之四十六 自叙年譜上 曹溪中興錄 曹溪中與錄上起下古 與復曹溪規約十條 夢遊詩集上古本卷 性相誦說 淨土會語買古本 徑山雜說 道德經解發題 此上下頭 古本卷 三十三 三十四 三古 F 題西 卷三十六 十本 九卷 示地 七本 曹脈 有漢僧表法語以称起說 夢遊詩集下三十本 化生儀軌三十二 怒山緒言思下古 六卷

愁山老人夢遊集卷第二

卷之五十五 夢遊全集目錄系 書跋 **冶銘傅四十下附錄** 自叙年譜 F 四古 十本 奮序 輓詩

*巴下古本

法語

答鄭崐巖中丞

嶺南弟子 劉起相

通 畑 編輯 重校

門

侍

者

福

善

日錄

心本來圓滿光明廣大清淨本然了無一物名之日 悟非除此心之外別有可修可悟者以心體如鏡妄 想攀綠影子乃真心之塵垢耳故日想相爲塵識情 爲垢若妄念消融本體自現譬如磨鏡垢淨明現法 爾如此但吾人積劫智染堅固我愛根深難拔今生

毫髮爭奈無始劫來愛根種子妄想情慮智染深厚

若論此段大事因緣雖是人人本具各各現成不欠

摩蔽妙明不得真實受用一向只在身心世界妄想

影子裏作活計所以流浪生死佛祖出世千言萬語

種種方便說禪說教無非隨順機宜破執之具元無

影子於此用力故謂之修若一念妄想順歌徹見自

實法與人所言修者只是隨順自心淨除妄想習氣

解切不可隨他流轉亦不可相續永嘉謂要斷相續 此著力一拶任他何等妄念一拶粉碎當下冰消瓦 心者此也蓋虎妄浮心本無根緒切不可當作實事 起滅處一覷觀定看他起向何處起滅向何處滅如 妄不實唯是真心中所現影子如此勸破說於妄念 想情慮即此一念本自無生現前種種境界都是幻 絲不掛圓圓明明充滿法界本無身心世界亦無妄 解的的只在一念上做諦信自心本來乾乾淨淨寸 正謂依他作解塞自悟門如今做工夫先要劃去知 作實法把作自已知見殊不知此中一點用不著此 光影門頭做工夫先將古人予言妙語蘊在胸中當 只在從前聞見知解言語上以識情摶量過捺妄想 力者多得力者少此何以故蓋因不得直捷下手處 **非虚語也大約末法修行人多得真實受用者少費** 荷軍刀直入者誠難之難古人道如一人與萬人敵 死根株一時頓拔豈是細事若非大力量人亦身擔 知本有發心趣向志願了脫生死要把無量劫來生 幸托本具般若內熏爲因外藉善知識引發爲緣自 已現前身心世界一眼看透全是自心中所現浮光 以爲實如今發心趣向乃返流向上一著全要將從 如此即自心妄想情感一切愛根種子習氣煩惱都 幻影如鏡中像如水中月觀一切音聲如風過樹觀 前知解盡情脫去一點知見巧法用不著只是將自 妄想生滅心當以爲眞故於六塵境綠種種幻化認 不達身心世界本空被他障礙故說爲迷一向專以 屬悟又何可迷如今說迷只是不了自心本無一物 因果除此心外無片事可得蓋吾人妙性天然本不 大段聖凡二途只是唯自心中迷悟兩路一切善惡 少佛法只是解說得此八個字分明使人人信得及 簽心要諦信唯心法門佛說三界唯心萬法唯識多 絕如斬亂絲亦力力挨拶將去所謂直心正念員如 的的提此一念如橫空寶劍任他是佛是魔一齊斬 正念者無念也能觀無念可謂向佛智矣修行最初 使作如水上葫蘆只要把身心世界撤向一邊單單 一切境界似雲浮空都是變幻不實的事不獨從外 橫在胸中起時便咄一咄便消切不可遏捺則隨他

般終是要抛却只是少不得用一番如今用此做工 話頭都是不得已公案雖多唯獨念佛審實的話頭 思算都是障礙先要設破臨時不生疑慮至若工夫 夫須要信得及冀得定較得住決不可猶豫不得今 塵勞中極易得力雖是易得力不過如歲門瓦子一 用兵兵者不祥之器不得已而用之古人說多禪提 來逗凑全及交涉就是說做工夫也是不得已譬如 此做工夫稍近真切除此之外別批予妙知見巧法 勒他箇下落切不可輕易放過亦不可被他瞞昧如 是虚浮幻化不實的如此深觀凡一念起決定就要 無可奈何此乃八識中含藏無量劫來習氣種子今 做得力處外境不入唯有心內煩惱無狀橫起或慾 日如此明日又如彼又恐不得悟又嫌不予妙者也 可當作實事但只抖撒精神奮發勇猛提起本多話 破透得過決不可被他籠罩決不可隨他調弄決不 日被工夫逼急都現出來此處最要分曉先要識得 念橫發或心生煩悶或起種種障礙以致心疲力倦 頭就在此等念頭起處一直捱追將去我者裏元無

> 如此一拶將去只教神鬼皆泣滅跡潛踪務要赶盡 遼過此一番便得無量輕安無量自在此乃初心得 拶得破則一切妄念一時脫謝如空華影落關餘波 殺絕不留寸絲如此著力自然得見好消息若一念 持咒心仗佛密印以消除之以諸密咒皆帰之金剛 此事問渠向何處來畢竟是甚麼決定要見箇下落 照不及處自已下手不得須禮佛翻經機悔又要密 生歌喜心則歌喜魔附心又多一種障矣至若藏藏 力處不爲半妙及乎輕安自在又不可生歡喜心若 久久純熟得力甚多但不可希求神應耳 下恐落常情故秘而不言非不用也此須日有定課 持此咒心得成無上正等正覺然佛則明言祖師門 **徽塵從上佛祖心印記訣皆不出此故日十方如來** 心印吾人用之如執金剛實杵摧碎一切物物遇如 中智氣愛根種子堅固深濟話頭用力不得處觀心 凡修行人有先悟後修者有先修後悟者然悟有解

證之不同若依佛祖言教明心者解悟也多落知見

於一切境緣多不得力以心境角立不得混融陽途

凡利根信心勇猛的人修行肯做工夫事障易除理

證得一分法身消得一分妄想顯得一分本智是又 以所悟之理起觀照之力歷境驗心融得一分境界 認作本來人於此一關最要透過所言頓悟漸修者 全在綿密工夫於境界上做出更爲得力 乃先悟已徹但有習氣未能順淨就於一切境緣上 人不識真只為從前認識神無量劫來生死本疑人 神邊事若以此爲眞大似認賊爲子古人云學道之 光影門頭何者以八藏根本未破縱有作爲皆是識 者深其餘漸修所證者淺最怕得少爲足切忌墮在 無明窟穴一超直入更無剩法此乃上上利根所證 深淺不同若從根本上做工夫打破八藏窠白順翻 想情處皆鎔成一味真心此證悟也此之證悟亦有 参實悟然後即以悟處融會心境淨除現業流藏妄 可疑如人飲水冷暖自知亦不能吐露向人此乃眞 從自己心中僕實做將去逼拶到水窮山盡處忽然 成滯多作障礙此名相似般若非真多也若證悟者。 念順歇徹了自心如十字街頭見親爺一般更無

> 障難遺此中病痛略舉一二 障難遺此中病痛略舉一二 障難遺此中病痛略舉一二 障難遺此中病痛略舉一二 障難遺此中病痛略舉一二

體令在迷中將諸佛神通妙用變作妄想情慮分別 知見將眞淨法身變作生死業質將淸淨妙土變作知見將眞淨法身變作生死業質將淸淨妙土變作知見將眞淨法身變作生死業質將淸淨妙土變作知是時慮元是神通妙用換名不換體也永嘉云無妄想情慮元是神通妙用換名不換體也永嘉云無妄想情感於厭心歇步步華藏淨土心心彌勒下生取捨情忘於厭心歇步步華藏淨土心心彌勒下生取捨情忘於厭心歇步步華藏淨土心心彌勒下生知兒轉求轉遠求之力疲則生厭倦矣

念願歇忽然身心脫空便見大地無寸土深至無極 東京不可自生疑慮凡做工夫一向放下身心屏絕 東京不得生恐怖心謂工夫念力急切逼拶妄想一 是得力處更加精采則不退屈不然則墮憂愁魔矣 是得力處更加精采則不退屈不然則墮憂愁魔矣 是得力處更加精采則不退屈不然則墮憂愁魔矣 是得力處更加精采則不退屈不然則墮憂愁魔矣 其次不得生恐怖心謂工夫念力急切逼拶妄想一

過若要透得此關自有向上一路只須難心意識多

達空富作勝妙若認此空則起大邪見撥無因果此則生大恐怖於此若不**勒破**則不**敢向前或以此豁**

中最險

東法身獨若虚空若達妄元虚則本有法身自現光 與法身獨若虚空若達妄元虚則本有法身自現光 調神變現切不可作奇特想也然吾清淨心中本無 一物更無一念凡起心動念即乖法體今之做工夫 人總不知自心妄想元是虚妄將此妄想境界此正 是了,她向一邊此如捕風捉影終日與之打交滾費 提了,她向一邊此如捕風捉影終日與之打交滾費 提了,她向一邊此如捕風捉影終日與之打交滾費 是心此乃初心之通病也此無他蓋由不達常住 立心此乃初心之通病也此無他蓋由不達常住 重心不生滅性只將妄想認性實法耳者裏切須透 其次決定信自心是佛然佛無別佛唯心即是以佛 其次決定信自心是佛然佛無別佛唯心即是以佛

離妄想境界求但有一念起處不管是善是惡當下離過切莫與之作對諦信自心中本無此事但將本大勇猛力大精進力大忍力決不得思前算後決不大勇猛力大精進力大忍力決不得思前算後決不持時獨但得直心正念挺身向前自然巍巍堂堂不得怯弱但得直心正念挺身向前自然巍巍堂堂不得怯弱但得直心正念挺身向前自然巍巍堂堂不得怯弱但得直心正念挺身向前自然巍巍堂堂不得怯弱但得直心正念挺身向前自然巍巍堂堂不

也有從者裏透過始得 也有從者裏透過始得

未明憂悲痛切如喪考妣若一見知識如嬰兒得母 時視參師訪友歷盡艱辛心心念念只爲已躬下事 古人最初發心眞正爲生死大事決志出離故割愛 示無生禄禪人乙未夏日在團中說

是望吾人之修者如披沙揀金非日絕無蓋亦鮮矣 生從何來死從何去豈復知因果難逃罪福無爽一 頭知更何日與言及此痛可悲酸目擊時流滔滔皆 耕而美食不蠶而好友虚消信施唐喪光陰竟不知 循俗習遊談終日捧腹縱情徒騎六根備造衆惡不 末法去聖時遙法門典刑已至掃地吾輩出家兒不 岐之供衆凡名載傳燈光照千古者無不從刻苦中 嗟乎三界牢獄四生桎梏大火所燒生死險宅何由 朝大限臨頭如石投水三途劇苦一報五千再得出 知竟爲何事生來祇知懼饑寒圖飽煖一入空門因 上人閒無量供養乃至末去兒孫猶受用白毫光中 來乃至過去諸佛求無上菩提捨身命如微塵數無 中了悟如登得寶拌身捨命陸沈賤役未嘗憚勞若 能溼猛燄離衆苦至無畏處耶非丈夫兒具靈根含 儻得一言半句開導心地如病得藥若一念相! 一分功德不盡豈有天生彌勒自然釋迦者哉痛念 一類而不受身無一身而不苦行百劫修因故感天 二組之安心斷臂六組之墜腰負石百丈之執勞楊

解之雷陽舟中示奇侍者 與祖教人於生死中順證無生法忍且每怪其於無生中妄見生滅此語如對市人說夢事聞者非不明 自張膽但未證實耳要之所說非所聞所聞非所見 也古人貴實證者直欲於生死法中親切勘破而已 心古人貴實證者直欲於生死法中親切勘破而已 心行其自信不疑而後止苟自至不疑之地縱假鬼 心待其自信不疑而後止苟自至不疑之地縱假鬼 心待其自信不疑而後止苟自至不疑之地縱假鬼 心待其自信不疑而後止苟自至不疑之地縱假鬼 心待其自信不疑而後止苟自至不疑之地縱假鬼 心待其自信不疑而後止苟自至不疑之地縱假鬼

善諭殆亦難免驚怖也余比以宏法罹難上干 相者耳世人所驚怖者非生死禍患手佛祖乃欲令 視之謂耶由是觀之佛祖殊無他長蓋能熱視世閒 未減於平昔觀者莫不驚異爲非常然而生死禍患 怒如白日雷霆聞者掩耳自被遠以至出離二百餘 此果何謂哉苟非熟視自到不疑之地吾意雖慈尊 人於中證無生忍且又明言於無生中妄見生滅噫 百城参多知識至於刀山火聚亦遲囘待動而後入 嶺南奇乃伴行舟中遂書此爲別嗟乎生死險道正 驚其所驚而人驚其所不驚是或有道焉奇侍者不 他人故爲余驚矣及視余不減歡喜心乃又驚余不 及入之果得清凉大解脫門此其策屬繞石令其熟 在所驚其無聞我歡喜心如夢事耶異時驗子於寂 遠三千里赴難問余於幽獄已而荷蒙 日備歷苦事不可言從始至終自視一念歡喜心竟 滅場中無以今日之言爲夢語 聖恩貶圖 聖

示無隱桂禪人

策邁石周行數十市仍引熱視良久方縱逸而去馬

自是遇物皆不驚余因是知道人遊生死險道歷境

心必如是而後已是故華嚴以善財表證其所歷

驗

明桂西蜀李氏子年十七出家多伏牛法光和尚禮

夢中事然且大通十劫猶不現前身子發心中道退

未必不由積累辛苦中來如萬里還家入門一步慶

快平生迴視向之談涉艱難閒關險阻依稀彷彿如

也即稱上根利智有能一念顧悟自心不從人得者

至若釋然解脫自在縱橫受用處又非解者所可與

見性眞所以然者如人被縛自不能解必假手於他

故從上佛祖必經多劫事多知識入多法門然後得

促小師大義歸家山侍養

商志身為法若諸老之為心者何思祖道之不昌法為一年 為三界法王四生慈父荷能持二子之心為弟子者為三界法王四生慈父荷能持二子之心為弟子者為三界法王四生慈父荷能持二子之心為弟子者為一人臣子者可謂不乘所生矣及長出家乃曰吾佛

門之不振乎應夫丈夫處世既不能盡命竭力以事 峰師於稠人中觀其貌悴骨剛知爲法器雖未語而 身水雪千巖萬壑中也隆慶初予居龍河講肆識妙 此心翩翩頁超世之思即處樊籠遊廳市未嘗不置 心許之矣萬歷癸亥余北遊上都適遇於長安市共 然又何屑屑以事齷齪手故予自知有向上事以來 其精勤然殊無短長越辛巳冬季 然員米採薪履水踏雪百務惟先日夜無隙衆皆推 檀越以書抵淸凉屬宗從事法門因著入槽颐宗羅 徹骨幾死者數矣時予幸有自信之地越丁丑山陰 沙彌明年余同妙師入清凉置身萬年冰雪中嚴寒 過河中山陰檀越延之道院數月是時宗尚董年為 坐龍華樹下一語而決生死乃結件同多共遊方外 人主榮名顯親即當爲法王忠臣慈父孝子易地皆 力能荷預第未察其信根耳明年壬午春臺山會罷 **晝則周旋不失一人夜則以餘力課誦余始心知其** 余與妙師訣師曰某即不能荷錫相從柰何吊影長 先帝建大會於臺山日集萬指宗獨任點茶湯 怒旨永

時必侍立輟餐而後已祭意之可否以爲憂喜予的 **痾於大行之障石殿宗隻身以從百務惟動凡操食** 途乎乃目宗謂此子可代執役因命宗曰古人從師 丙戌蒙 亦飽子偶不欲食則涕四交願亦終日不餐也余每 不面爾其志之明發即理策東西余同龍華老人養 侍者進日師即無意人世豈不上念 心福始編先前修明誠意欲避之宗與同件安桂二 下名山及二年焉余乃喟然歎日因緣障道往哲痛 實甘心焉。余亦將謂老死丘壑無復人世矣居三年 鬼之鄉也余因入那羅窟而居之披荊燒臥草莽犯 余即東蹈海上藏修於年山深處人跡所不能至神 人也子夏問孝孔子曰色難其是之謂乎明年癸未 每私祭久之如一日因謂龍華老人此子天性純孝 爲法誓死爲期爾其盡形蝎力憔中道志沮當此生 重法門爲斯民之福利乎余乃翻然念日惟我 風濤涉險阻艱難辛苦不可殫述人不堪其憂而宗 聖天子詔爲 慈聖聖母頒大藏經布天 聖心所以隆

天子仁孝

聖母慈恩以法爲社稷蒼生福某敢不

高致道眼視此不啻輕塵聚沫柰何慘慘於此余日 厚即那寒溽暑奔走於風塵道路冒生死之際者不 堅三年如一日也或謂余日古人言到處家山以師 可指陳而此心一念孤光未嘗少易宗輩之志愈益 未幾在院競作己丑歲即遭侵撓余所經涉無論污 爲天降地湧將爲東鄙法幢盛世永永福田也豎立 備秋毫皆出宗心建立規模居然不減在昔觀者以 奥四方納子日益至時則東海洋洋佛國之風焉天 師為行止余於是拜受慈命过意建立經營事務無 論巨細一切委宗而以安桂二人爲知事予但總其 惟何事願師安意以道自任爲法忘情我輩敢不視 人冥會轉化之機蓋亦神且速矣山門供衆法物墨 論流布昧人天眼目也安等唯唯進日師唯何人此 法為心畢命從事則止之否則去之無使異日作世 死誓何以轉魔界而成佛土爾輩試揣其衷果能以 孝子實予所圖第此海觸遐陬故稱麂戾苟不等心 竭躬盡瘁以敷揚法化上報 聖慈龍墨不三年叢林告成法道書 聖恩法王忠臣慈父

於動靜閉忙疾病禍患死生之際止此一念直觀師 求上不見有佛祖下不見有禪道唯知作務供來生 老人手宗稽首日宗自事師以來自知愚鈍不敢外 心而已是故師生則生師死則死余日我心無相汝 矣老人固未嘗以一語辨法累汝不知汝於何處見 荷蒙 作麼觀宗日師心若有相弟子則無今日也余乃大 態況吾釋子學出情法者乎第爾從老人幾二十年 別余觀往事如夢遊亦未曾一語及世譜常情也宗 今蒙 送余河梁余乃謂之曰丈夫處世固不戀戀爲兒女 是時安巳先去宗與桂共嬰此難余則以一死肩之 魔事爲借資致 聖天子震怒部下金吾遠及者來 以自處寧效死而弗去不爲荷生以失經或者唯唯 其命實均避難不義棄命不忠不義不忠何以爲法 **營聞世之君子以身殉國則死國以身殉法則死法** 頃亦魔風頭息矣又四年乙未春二月靈從中起以 假而以此即有封疆尺寸之寄荷蹄難而去之又何 聖恩 慈恩以法見托而且表揚 韶遣雷陽於是多十月出長安與宗 聖孝其事雖異

以金剛酸機破歷劫情應務使受根習氣綠影蕩蟲 在忘生以學出情法者今雖荷戈行伍何莫非佛事 **蘇野**余命宗率人親檢埋葬不下萬餘作津濟道場 皆老矣若葉彼取此亦為法中之恐也豈正信哉爾 此幻身而增空華障醫究竟何爲且屬父母師長今 毫無自欺如此可謂不負佛恩不辜本有方是老人 死之跡又何嗟嗟作夢中顛倒耶但翼爾誠心達本 萬里比隣太虚咫尺以法界海慧觀之了無去來生 以拔之會罷促宗歸日爾何戀戀於此耶余生平志 里相尋躬事變養無閒在昔粤省會亦遭疫濺骸骼 者亦數矣秋八月奉繳來五羊昔之在門者亦接踵 光輝萬大作,余坐尸陀林中毒氣炎蒸变攻而 其行矣幸爲謝諸故人生富重相逢死則長別雕異 不負汝處也否則抱佛而眼猶不兒為魔件況復守 笑而別獨攜善侍者而 日常寂光中回視今日猶作夢中事也爾其識之無 而至余見則詬罵日爾等各有出生死路脚跟誰 一尺土見我何爲皆痛斥而去頃之宗亦自蒲中西 南明春三月抵雷陽頻歲饑 至殆 無

忘所屬丁酉仲春二十五日書於量壁之旅泊齊

示洞聞乘禪人

無剩法與人不過直指此心令一切衆生當下知歸

題倒自取其答耳佛祖憐愍此輩特特出世一

番並

切佛本源 師心地初發心中所誦一名戒光明金剛寶戒是一 若離此外別求即墮外道邪徑故梵網經云盧舍那 不過遞相發明此心地法門豈此心外別求妙悟耶 正即解道本來無一物何處惹塵埃因此黃梅老人 滿寰中得之者死失之者生千七百人鼓簧播弄亦 戒耳展轉六傳至老盧俗漢子柴擔下聞金剛經云 豆筷人眼睛豈此外更有奇特哉從此兒孫滿日遍 亦不柰伊何只得無語歸方丈即三更密付大似鳥 師授性自具足者也又更有何奇特哉及至黃梅 應無所住而生其心蓋乃順悟此戒不從人得不因 这層西來神光立雪無言無說蓋亦分明直指此心 戒耳金色頭陀破翼微笑乃至二十八傳遞代授手。 法及至末後拈花天人瞪目而不知者亦只迷此心 學學為人委曲周旋者亦不過普令衆生信受此戒 諸佛此心宣傳此戒法即四十九年搖唇鼓舌波波 故毗盧 世諸佛此戒法耳干華臺上葉葉釋迦亦不過禀明 老子初坐菩提場亦不過宣明過去十方三 一切菩薩本源佛性種子一切衆生皆有 日 や人養人

> 除性一切意識色心是情是心皆入佛性戒中又云 學位中乃云是人始獲金剛心中初乾慧地到此直 是位中乃云是人始獲金剛心中初乾慧地到此直 人佛性海中由是觀之從凡入聖成佛作祖之要捨 此金剛心外豈復更有測法耶是知此不易悟悟 則名為住位不易淨淨則名為登地位不易流過則名 為向位不易淨淨則名為登地位不易流過則名 於此戒苟得其心則三世諸佛歷代祖師普及一切衆 生一齊向老人一毛婦頭放光動地則汝二六時中 與諸聖凡眉毛斯特也此則是名貫持戒者否則強 與對亞多多多測質初證鐵灣蘭風為師

5

示優婆塞結念佛社

潤隨分充足各得生長是故法有千差源無二致然化各有方便普令獲益譬若時兩三草二木無不蒙性吾佛住世說法利生四衆人等各皆得度隨機教

念佛三味教以專心淨業痛敬苦緣歸向極樂月會 勞可謂生不虛生死不復死是非真實功行哉然佛 心日誠罪障日消必以往生爲顏果能此道雖在塵 以期立有規制以三時稱名禮誦鐵梅爲行欲令信 深嘉之未幾有善士十餘人作禮願乞教授優妥塞 門庭之前竟埋荒草寥寥幾千載突談者言謂非義 彌寫余哀其未悟愍其不遂進修自度工夫因授以 五戒法全欣然應請即爲羯磨自是歸心日誠聽法 來弟子演說每一座中見諸善男子輩亹亹而來全 春至秋來五羊量壁閉住梭伽經完戊戌夏即爲諸 根地是不遂佛性之旨耳余蒙 如雷驚雪醬流布人開知之者希悟之者鮮是則嶺 有鄉性耶亞日人有南北鄉性豈有二耶自此一語 南爲禪道佛法之原頭爱自盧祖演化追被中原而 觀初至黃海問何處人答日齒繭人黃梅道傷療亦 真正善知禮開導依計鹽沈淪狂受辛苦耳所以盧 以佛性而觀案生則無一生而不可度以自心而觀 佛姓則無一人而不可緣但來生自迷而不知又無 思遺畫揚以丙申

為佛今所念之佛即自性彌陀所求淨土即唯心極為佛今所念之佛即自性彌陀所求淨土即唯心極為佛今所念之於十萬億國之外別有淨土可歸耶那又何必遠企於十萬億國之外別有淨土可歸耶所以遊心淨則土亦淨心穢則土亦豫是則一念惡於此之。諸善为於此心哉諸善男子各諦思惟應當堂地獻又豈外於此心哉諸善男子各諦思惟應當如流時不可待黨員此綠當面錯過大限臨頭悔之如流時不可待黨員此綠當面錯過大限臨頭悔之何及各宜努力珍重珍重

示真遇禪人

思惟一切諸佛族幻力而示現一切菩薩依幻力而工業幻人於幻化場中作如幻佛事開諸幻衆說如五羊幻人於幻化場中作如幻佛事開諸幻衆說如五羊幻人於幻化場中作如幻佛事開諸幻衆說如幻法門禪人作禮講益幻人乃依如幻三昧為說一切諸法皆如幻夢境界而開示之日善哉佛子當善切諸法皆如幻夢境界而開示之日善哉佛子當善別諸法皆如幻夢境界而開示之日善哉佛子當善別諸法皆如幻夢境界而開示之日善哉佛子當善別諸法皆如幻夢境界而開示之日善哉佛子當善

幻生一時顧度此則是名以知修幻所謂衆生幻心 **殊爲父觀音爲母普賢爲師**而欲特此親因以求出 步踏新幻結則無邊幻網一時順烈無遇幻海一時 還依幻滅者也其或未然則縱經三生六十劫以文 寫枯無量幻業一時順消無邊幻行一時順得無量 也然雖如是喚作迷頭認影不訪就発還家苟能一 十方諸大知識總皆不出幻化門頭非究竟眞實處 汝將遍歷寰中縱徑醫劫窮盡十方微塵國土承事 遊林入保社今年而南海明年而五臺後年而義眉 足超方何因而参訪知識何因而覆名山登區地穿 母胎何因而汨沒愛疆何因而願出沈淪何因而發 之所證六代種師之所傳總不出此幻網三味禪人 安得而透之耶汝試諸思何因而落生死何因而入 力而施設護湯爐炭依幻力而沸騰蘇甲羽毛依幻 力而建立瓊林竇樹依幻力而敷桑鑁珠鋼柱依幻 力而飛潜藏製蛸翹依幻力而動息以極三世話佛 昏迷一切衆生依幻力而生死若夫天官淨土依幻 終持一切二乘依幻力而越寂一切外道依幻力而

> 真實語也多多 生死事遠之遠矣,汝諦思惟其無謂我爲幻化人非

示愛婆恋易真理

 不能自止獨事而自為之覺非養根純熟時節因緣已至有不能自止獨事而現遇緣而成者耶由是觀之佛性不能自止獨事而現遇緣而成者耶由是觀之佛性未必盡善養體性未必盡惡隨其所習放有異耳佛說未必盡善養與五年而功成三年而化行即今海外路人皆作佛事,完成梵語菩薩此三大心衆生潭豈非大心衆生耶克成梵語菩薩此三大心衆生潭豈非大心衆生耶克成梵語菩薩此三大心衆生潭豈非大心衆生耶克成梵語菩薩此三大心衆生潭豈非大心衆生耶克成梵語菩薩此三大心衆生潭豈非大心衆生耶克成梵語菩薩此三大心衆生潭豈非大心衆生耶克成梵語菩薩此三大心衆生潭豈非大心衆生耶克成梵語菩薩此三大心衆生潭豈非大心衆生耶克成梵語菩薩此三大心衆生潭豈非大心衆生耶克成梵語菩薩此三大心衆生潭豈非大心衆生耶之後亦然佛言無佛法處建立三賓非菩薩人不能之後亦然佛言無佛法處建立三賓非菩薩人不能為政治學不是直入菩提被岸未必不從今日之後亦然佛言無佛法處建立三賓非菩薩人不能可以即承述是一種,

五羊稽首請無子示之日吾佛有言語法從緣生詔造旃檀釋迦彌陀二聖像成居端州之鼎湖時往來禪人寶貴以守護佛法爲心初書金字法華諸經募

示本淨資禪人

生無有未生無有則雖有而性常自空性空則諸法 托諸所化為緣是則佛從緣起而法亦從緣起於法 法從綠滅是知一切諸法緣會而生緣會而生則未 起無性者則爲成佛眞種矣善哉佛子汝之所書諸 性不空子若言其性空則現見佛之相好莊嚴畢竟 性中法即佛而佛即法也第不審果了此法性空手 經者法也所造旃檀如來者佛也以汝之信力爲因 本無自性矣故日知法常無性佛種從緣起能遠緣 光明織盛絕如寶山而華嚴八十一卷靈文三十九 白空矣万其今之緣聚也即以世諦之金香而爲佛 莊嚴如是佛法之名又何從而有耶求其本無則性 自香如是紙墨皆為世語流布如是金香皆為惡業 燦然滿目煥手至彰謂之性空無物可乎若言其性 品之次第五周因果之行布四十二位之森殿不欠 即以世諦之紙墨而爲經然紙墨之相不異當時體 不空方其緣之聚也則紙自紙墨自墨金自金而香 不增於昔日而佛法之名既彰則敬慢之心懸而其 一字法華之三周授記懺法之諸佛洪名不少一人

题之则一切諸法本無自性從綠會而生者明亮斯 觀之則一切諸法本無自性從綠會而生者明亮斯 所作種種諸勝綠不審達無性而作則為成佛眞種矣而汝 所作種種諸勝綠不審達無性而作則屬成佛眞種矣而汝 作耶由作而後得無性耶若達無性而作即佛法在 已而不在物若不遂無性而作則佛法在物而不在 是而知則爲虞知如是而作則為對于無性而作則佛法在 學空是非齊展則已與物皆無跡矣又從何而分別 學空是非齊展則已與物皆無跡矣又從何而分別 學空是非齊展則已與物皆無跡矣又從何而分別 是而知則爲虞知如是而作則爲妙行否則以思惟 心而作雖思之佛事譬如手把螢火而燒須彌祗益 心而作雖思之佛事譬如手把螢火而燒須彌祗益 自勞又何從而死竟那善哉佛子諦觀法王法法王 自勞又何從而死竟那善哉佛子諦觀法王法法王

示法錦禪人

然 是佛多劫雪為忍辱仙是知忍之一行為成佛之 忍辱 法門更為開導之日 承嘉大師有言我師得見 法錦自言性多以習老人因以方使調伏而示之以

淨斯皆不知忍之之方徒增我見之執耳所以佛教

諸弟子修和合行又日苦法忍苦去智又日無生法

從我之所致甚矣我之爲害譬如嚴城堅兵豈易破 事之選不能安一錢一寒之不能對一念之欲不能 案生時其我見堅牢難破所以一言之逆不能受一 **並完氏有言日柔勝剛弱勝點此蓋忍行之初地也** 路思長諸惡長則來苦集來告集而生死長來是皆 情立受情立則喜怒滋自性獨而心地香心地香則 曾以無我而至以我與物敵故是非生是非生則爱 生相壽香相然證佛即不與我授記由是觀之一切 衆生生死苦具皆以有我而成無上菩提福慧狂歌 我相無人相無衆生相無審者相若有我相人相樂 要行耶又云告我於歌利王割截身體我於爾時無 多善知識故之所成就豈非以忍之一行爲成佛之 日我之三十二相八十種好勝妙功德皆由提婆達 而殺害其命者非一及法華會上為其授肥作佛且 多之所誘害至於今生出世種種吸法無所不至甚 第一妙行也故我師釋迦老子生生世世爲提婆達

之異名由不敢爲天下先故忍爲成佛第一行如此 其無以爲口頭話且又無以此爲博飯具化 則忍大而我小故忍能衣被於我亦能衣被於物自 禪人求法語故余題之日忍辱爲衣禪人勉而行之 利利他之德無出此者故日柔和忍唇衣謂是故也 斯則心有不敢妄動身有不敢妄作事有不敢妄為 情有不敢妄發故老氏日不敢為天下先不敢即忍 之折旋動容處以忍持之喜怒哀樂處以忍驗之如 之是則學心動念處以忍試之畢足動步處以忍先 果成矣忍之一行豈透淺哉敢日凡有所作皆當忍 忍八地乃得是知從生法忍忍至無生則妙行圓佛

憨山老人夢遊集卷第三

侍

疆 X

日錄

嶺南弟子 劉起相

RE

法語

示性语禪人

水遠遠迢迢尋師覓友偏向深山窮谷中求之而後 於汝分上有所欠缺隱昧又勞汝費草鞋錢登山涉 用至若生言雖從來不見亦未嘗不蒙利益也何獨 河大地草木昆蟲鱗甲羽毛飛濟動植誰不通同受 來誰不親面相呈何晉瞞味絲毫又如果日麗天山 若論此事如靑天白日十字街頭長安路上往往來

恋山老人夢遊集卷第二

來亦不知誰之所使終日竟夜淹淹繼據隨波逐浪 麼人及至忽然夢省亦自大生**惭愧甚至扼腕頓足** 波波劫劫更不知所作何事亦不知自已本來是甚

相兩眼睁睁開口向人胡言亂語竟不知從何處發

得耶汝但自己不解向脚跟下一步勸絕命根被他

無量劫來種種戲論習氣所弄恰似白日被鬼迷之

大事恨般若綠淺習氣偏厚又無如古之真正明眼 化境界至濱萬死而獲一生所賴凍餓中博得一點 冰雪寒嚴一至萬死一生之地於中種種伎倆知解 在不了自心但爲習氣所弄耳老人生平有志此一 切齒椎心恨不能固地跳向佛祖頂额上行及手遇 見色聞聲未開眼時未入耳時早能耳親眼辨決不 皆夢中事耳且復自恨爲他業緣牽引墮入種種幻 製得父母未生前一點消息便回視者之種種頭倒 向者裏一電用不著唯獨於冷地納被蒙頭時忽然 下有志學道之人通病豈獨禪人爲然然其病根直 境逢緣眨眼之閒不覺墮入黑山鬼窟去也此乃天 且行矣即求老人法語一似合元殿裏兒長安若向 禪道佛法未必能會主若的信自心不向他求一著 煉習氣臟重緣影塵垢耳即今生死關頭示知何如 孤光處處受用種種逆順境界以此爲繼治鉗錘煅 知識鑪鞴且自發志出家操方學道以來以至入山 以此爲消曆歲月之具其他復何容啓齒哉禪人今

向生死窠中智氣燄裏頭出頭忍此所謂不涉途程一步早已超過則佛祖亦無挨身處閻老子豈柰伊何如此方不負雪浪開導之恩亦不負自已百劫千何如此方不負雪浪開導之恩亦不負自已百劫千年帶來者一點種子不被三毒智氣熏蒸爛亦不負更喚作甚麼人即老人今日之語大以木人穿棒石東喚作甚麼人即老人今日之語大以木人穿棒石東喚作甚麼人即老人今日之語大以木人穿棒石東喚作甚麼人即老人今日之語大以木人穿棒石東喚作甚麼人即老人今日之語大以木人穿棒石東與作甚麼人即老人今日之語大以木人穿棒石東與作甚麼人即老人今日之語大以木人穿棒石東與作甚麼人即老人今日之語大以木人穿棒石東與作甚麼人即老人今日之語,以東京

示妙谌座主

少悟即爲二乘不悟即爲凡夫若悟而不存證而無別有生死所謂迷之則生死始悟之則輪迴息是知問於紙墨文字三乘十二教中當作奇特事也所以別於紙墨文字三乘十二教中當作奇特事也所以別於紙墨文字三乘十二教中當作奇特事也所以別於紙墨文字三乘十二教中當作奇特事也所以別於紙墨文字三乘十二教中當作奇特事也所以別於紙墨文字三乘十二教中當作奇特事也所以別於紙墨文字三乘十二教中當作奇特事也所以別於紙墨文字三乘十二教中當作奇特事也所以別於紙墨文字三乘十二教中當作為此心爲三聖大乘即傳配出世亦特爲

4

澤 學頭一一透過即此日用不離一法不住一法處處 学頭一一透過即此日用不離一法不住一法處處 学頭一一透過即此日用不離一法不住一法處處 學質院界一一透得過處便是真實悟門即此悟處 發情境界一一透得過處便是真實悟門即此悟處 發情境界一一透得過處便是真實悟門即此悟處 實頭法法便是真實佛法非是聽座主撞壅擊鼓登 華座開大口學野干鳴側耳低頭閉目披衣時方為 構法也所以善財童子南歷百城參禮佛剎微塵數 用起心動念處情根固結處愛情変錯解脫法門然法門 用起心動念處情根固結處愛情変錯離脫法門然法門 用起心動念處情根固結處愛情変錯離脫法門然法門 用起心動念處情根固結處愛情変錯離脫法門然法門

示靈洲鏡上入

有甚奇特法門可入耶

自在大解脱無上法門捨此外更有何知識可多更

勘破一一透過如此便是真實知識當下即登無礙

一余普遊海門登妙高峯入無際三昧入核伽室觀東

うかか

三際十方當下平等天宮淨土一道齊平心佛來生 以為定課舊染頓法心光漸明蓋肯於刮垢潛光非 煙室變狀日月升沈專目對揚無非普現色身三昧 了無差別獲湯爐炭實察清凉草街庭莎風帆沙島 歎人生生死幻化去來夢事若以法界海慧照之則 老人猛思昔遊海門故事今此地兒東坡如前身因 况 仍 波流葉海者 比 也 須持 卷索法語為進修之資 **讀死生一幻場江山一幻境鱗甲羽毛一幻物聖凡 若觀舊遊是知天地一幻具萬法一幻叢出沒一幻** 鏡心上人過東坡堂讀悟前身詩又爽然自失恍然 金山而抵羊城未暇登眺戊戌秋日始得覧其勝與 幻業所弄直走瘴鄉舟行過曹溪口下湞陽峽經小 虚明昭廣之境時時如大圓鏡懸於眉睫閒也頃為 於中黨然不自覺耳自爾行脚雲水閒此海濶天空 知其所以然也及後還教乘印證乃知爲智氣橫發 山常庄是時擊身毛孔熙恰覺豫如春生百草不自 坡老人代張方平手書稜伽經與佛印禪師留作金 一幻衆爾我一幻遇耳上人降心白法日誦金剛經

之殺青灾本與老人今日荷三生之緣重過此山上 窗類之端耶上人苟能悟此法門則江光水色鳥語 真亦非真是則所讀之般若又豈有文言字句寄於 以心為鏡耶是以鏡照心耶若以心為鏡則老盧道 切有為法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀上 坐石室見法身時也如此則東坡之所書梭伽佛印 潮音皆演般若實相長鐘暮鼓送往迎來皆空生是 心鏡兩非名從何立如此則上人名是假名名假則 相又何從而照之耶如此非心則非鏡非鏡則非心 明鏡亦非臺井臺則無鏡可寄若以鏡照心心本無 人偶拈此卷以請益莫道又是前身夢語也經云一 來塵鏡未會磨今日分明方剖析上人號日鏡心是 若者哉然般若非他即吾人心鏡之光耳永嘉云比 有得名阿羅漢也一切世閒所有諸法豈有過此般 脱人即如空生悟般若時涕淚悲泣對佛自謂實無 際拈匙譽筯之閒願題自性無垢法身是稱爲得解 也吾學道人所賣金剛正眼樂政無明擬暗煥發本 有智慧光明拈向現前日用就睡掉臂揚眉瞬目之

安想題到情塵自然冰消瓦解矣

示歐生伯羽

學道人第一要發決定長遠之志乃至盡此形壽以

示馮生文孺庚子

竟之地蓋緣初發心時無決定志耳苟如此欲作世 生退還之念或將近及門遇見一機一境一事之差。 忘却未出門的念頭邈然不知所向往或中道緣差 或訛言誤聽以爲實使其將見而不及見其人臨門 悠悠蕩蕩或遇歌管隊裏富貴場中貪戀耳曰近玩 或者幸有親朋大力之人促發出門及手上了路頭 顧目前種種所愛放不下或因循延挨口去心不去 決定志也有無此判然決定之志只說出門要去題 而不得入其室如此者舉皆枉費辛勤終無實到究 回惶生無量苦或身體披順久冰風霜不柰勞苦便 **潼遇惡友惡緣弄得囊空資場加之疾病繼編進退** 入室與之交歡浹治以極忘形而後已如此方稱有 萬里之行決定以所至之處爲的從今日出門發足 志亦不以苦故退失今日之信心譬如有人發心有 是一定以悟爲期若不悟此心決定不休縱然墮落 地獄三途或經鑪胎馬腹響顏不捨此決定成佛之 一步直至入彼所至之門親彼所求之人以至升堂 極三生五生十生百生千生萬生以至劫劫生生直

> 開小小功名專業亦不能成何況無上佛道了死生 實之是若知是不真志其所不當志行其所不當行 實之是若知是不真志其所不當志行其所不當行 實之是若知是不真志其所不當志行其所不當行 可要相用工矣吾人求道既有此志須要的信自心 當體是佛本來清淨無物本來光明廣大如此所以 日用現前不得受用者只為彼此幻妄四大拘藏介 爾妄想浮心瀟禪難得透徹過此生死關擬子不當 其促發上路途中種種境界種種辛動種種遲回留 連不留連退情不退惰皆在學人自已脚段底本分 上付電皆非善知識所可與也馮生文孺有志於此 上付電皆非善知識所可與也馮生文孺有志於此 上村電皆非善知識所可與也馮生文孺有志於此 上村電皆非善知識所可與也馮生文孺有志於此 上村電皆非善知識所可與也馮生文孺有志於此

示晉生六符王寅

至遠而應萬有 坐故老子有言不出戸知天下堂妄 聖人用心如錢不將不迎來無所結去無踪跡以其

思愿機變智巧揣摩所能及哉所謂廓然大公等 人之心也古今智巧機變之士自謂思無不致智不 可及故飾智自憑是心光未透本體未明墮於無明 可及故飾智自憑是心光未透本體未明墮於無明 必要也,也會生态道當以此自勉

示贊侍者

特者真實寫余小像獎香作禮請說法語老人驀拈 性故趁之日爾朝夕執侍尚不自知生尊重想又何 以紙墨畫像為師範平每親聞法教如春風度耳又 何以紙上陳言為彈則手爾自發心出家求出離相 而不決忘修遠離行果真出家實為生死子爾自心 超安為真實迷頭認影了無出期即老人坐向汝胸 如安為真實迷頭認影了無出期即老人坐向汝胸 中爾亦作熟病想耳佛言作心為成佛秘要區區勢 自入無量法門也是則名為隨順覺性又何以包裹 老人為爾自思惟二六時中除却穿衣喫飯迎賓待 老人為爾自思惟二六時中除却穿衣喫飯迎賓待 老人為爾自思惟二六時中除却穿衣喫飯迎賓待

來面目者憂參透許汝觀見老人一莖眉其或未然

對面子里

生為夜旦亦不知心乃衆惡之源身爲衆苦之本也 欲雖而不得憂愁悲楚呈抹無門疲頓精神暫息無 以今既覺與向之求脫何與天壤哉即爾而觀今之 呼益然物號而大覺之則向之悲楚辛酸皆成笑具 術目謂終墮沈淪爾乃甘心汨沒矣又安知極力而 知幾千萬劫譬如夢聽險道怖畏張惶求脫而不能 原自述心為藏執妄為身題倒死生出沒苦道看不 以休養辭行老人因而勉之日爾豈以苦樂爲異地 病苦呻吟作去就求脫之想正若夢中事耳不能自 死生有彼此哉殊不知四大為設借苦樂為幻場死 成疾自視四大不支難堪衆務乃乞度資北尋樂地 行也賴人唯命是聽動力半載餘矣邁飲瘴煙浸染 命典寫食且將令知三德而調六和攝一心而修萬 施泊憲賴人不遠數千里多余於瘴鄉余親其謹整 余数放之四年已亥夏講校伽新疏於五羊之青門 示明哲禪人

便是破夢宅出險道之時也 便是破夢之出險道之時也 便是破夢之出險道之時也 便是破夢之出險道之時也 便是破夢之出險道之時也

示舒中安禪人住山

野中禪人將誅亦南嶽請孟山居法要老人因示之 田夫道不在山而居山心先見道見山忘道山即障 根見道忘山觸目隨緣無非是道此古德名言永嘉 之諦訓也子今志欲居山是見道而後居耶是居之 而後見道耶若見道而後居居則有住住則道非眞 が逼又云五蘊山又云人我山又云是梁山然涅槃 心也人我境也五蘊身心乃生老病死之窟穴也梵 野中禪人將誅亦南嶽請孟山居法要老人因示之

示極禪人辛丑

學佛法,把作參禪了生死又作種種歷勞事業當作知本分具足將謂別有乃於一切言教中求公案上知本分具足將謂別有乃於一切言教中求公案上指無非欲人頓識本有而已即三藏十二部歷代祖師所持無非欲人頓識本有而已即三藏十二部歷代祖師所

語涅槃此云寂滅幻妄身心境界總屬動亂原其本

之耶若知有而後發心則不是恁麼行脚若從師友 後發心耶是不知本有均發心後由師友指示而求 凝在增長夢中顛倒耳禪人自出頭來便解恁麼親 之以無明之火增長諸苦之芽即有佛法知見皆墮 師擇友恁麼苦行種種因緣而求佛道是知本有而 自心不知本法於已躬脚跟下一步了不干涉徒恃 東不得亦不復知有世出世閒因果事此蓋由不識 秘且復以世論文言外道經書惡見議論以口舌辯 外道戲論俱增苦本非出苦之要也末法弟子去聖 株裁向識情窠窟且又滋之以受水培之以欲泥熏 法財滅功德莫不由茲心意識然無量却來生死根 今拖關書經的事又作麼生且獲華乃入法界之經 指教而後知則又不必如此依然擬在外邊走也即 利馳騁機警當作撥天關的手段將謂閻老子定管 邪慢不但以佛法知見凌人傲物當作超佛越祖之 時遙不蒙明眼真正知識開示往往自恃聰明大生 惟妄想造作如夢中事耳以未離心誠故古人云損 出世功行今日正眼看來都沒交涉何也皆是以思

示宗遠禪人住山

遠稽首乞一語爲住山法要老人揮开以示之日夫相與結夏壘壁將牛復移居東華解制後各辭去宗南嶽來時悟心融佛嶺乾二子皆在伴老人以食息余鼠海外之五年庚子春宗遠紹禪人同慶堂福自

發明已事然後向深山窮谷草衣木食支折脚諡養 兒第一要務也古人出家專爲生死一著參師訪友 將謂四事供養應當受用更不思生死大事爲出家 形袈裟者靡不假我偷安罔然不知出家竟爲何事 寂寞中出嗚呼世衰道微人心不古凡托跡空門宏 載傳燈列名僧史者未有一人不向深山窮谷苦空 自斯已降法道東重若遠公之蓮社僧遠之胡牀五 孫四事受用不盡此乃開天闢地一箇住山樣子也 祖之破頭老盧之獵隊西江之隱山石霜之枯木凡 而不朽者皆從雪山六年凍餓中博來只今後輩兒 嚴殊麗無分遐運百代如生如此澤流而無窮功垂 名者喜見相者歸王臣敬仰有識傾心梵字琳宮莊 崇為天人師作世閒眼至今光照四天道流百億間 明星而悟道朗長夜而獨明便見天龍拱衛神鬼欽 年凍餓皮骨支持苦空寂寞之狀又何如也一日都 寒巖埋身千尺以至關巢其頂藍穿其膝猶不知六 本師釋迦老子棄捨金輪辭親割愛走入雪山萬丈 入深山住蘭若此從上佛祖第一入道因緣也惟我

> 是單提一念直欲上齊古人必以發明生死大事為 學單提一念直欲上齊古人必以發明生死大事為 學單提一念直欲上齊古人必以發明生死大事為

示念松遠禪人

告中峰禪師居天目久参高峰大事未明乃立懸崖 整為業其精苦固有之其期則過中峰遠之遠矣若 是語華殿滿百部以畢餘生臨行乞一語為法要余 是語華殿滿百部以畢餘生臨行乞一語為法要。 是語華殿滿百部以畢餘生臨行乞一語為法要。

之五羊復從匡山來慰余於瘴鄉余乍見如隔世親一余皆居東海那羅延窟禪人自五臺來謁及余度嶺

示佛嶺乾首座剌血書華嚴經

效蓮社之清修且願刺血手書華嚴大經以爲莊嚴 業乎若以書寫紙墨爲經則市肆案贖無非大經若 字為經平以運動折旋為淨業平以點畫分布為淨 佛士之淨業願乞一言開示余日佛子諦聽爾以何 及解制日乾作禮白云某將歸東林尋遠公之芳躅 因觀人閒夢幻如此乃於諸來弟子輩結夏煙壁閒 爲大經以何爲淨業爾以書寫紙墨爲經乎語言文 畫分布爲淨業則迎賓待客舉節拈匙無非普賢之 斯則本無欠缺又何庸書若以運動折旋為淨柔則 以語言文字為經則談呼戲笑世俗文字無非妙理 向無去來無取捨無始終三際爲之不遷十世圓成 二之圓音雨施雲行盡顯神通之妙用如是則無背 之靈文鱗甲羽毛盡法身之眞體猿吟鳥噪皆談不 明昧極法界是清淨土本沒精麤森羅萬象皆海印 猶知二五而不知十也雖然盡十方是常寂光元無 妙行如是則本自具足又何別求捨此而言法行是 日用尋常咳唾掉臂無非觀音入理之圓通若以點 念此法界無盡藏也關欲於無盡藏中徒以區區

5 1

以牛糞為旃檀魚目為意珠也況一字法門海墨書以牛糞為旃檀魚目為意珠也況一字法門海墨書而不盡爾欲以有限之四大涓滴之身血刹那之光。 空們摸電影也爾其參之如其未然試向五老峰頭空們摸電影也爾其參之如其未然試向五老峰頭空們摸電影也爾其參之如其未然試向五老峰頭空們摸電影也爾其參之如其未然試向五老峰頭空們摸電影也爾其參之如其未然試向五老峰頭空們摸電影也爾其參之如其未然試向五老峰頭空們摸電影也爾其參之與此處老子坐曹光明

示懷愚修禪人

學人圖修自吳中一妹走瘴鄉侍余二載餘余於戈閣場中而作佛事修精持一念作務爲衆先晝夜無務余欲參諸方知識臨行乃問四大本空五蘊非有辭余欲參諸方知識臨行乃問四大本空五蘊非有辭余欲參諸方知識臨行乃問四大本空五蘊非有辭。於參諸方知識臨行乃問四大本空五蘊非有別四大本空空是病五蘊非有有成非兩頭坐斷無消息始信家山到處歸

示陳生資甫吉水人

喜怒哀樂之未發謂之中正好於六祖不思善不思未動時著眼方乃得力

惡如何是上座本來面目同多

孟軻云食色性也此言似千七百則註脚殊非章句爲文乎須向自己胸中流出方始蓋天葢地

通執言之過耳古人云工夫在日用處此死句也今日坐在此語窠 家可知

上行者定不知話頭落處

宗鏡云聲處至聞見外無法此語非透出毗盧頂額

示西樵居士吉水人

儒生有志於道者獨向禪中求做工夫却不知念茲

覺知內守幽閒猶爲法廛分別影事古人目爲黑山

在茲便是上乘初地

來面目毋自欺也孔子云吾未見好德如好色者也夜氣清明攝心端坐返觀內照寂然不昧處自見本

足知天下不欺者鮮矣

識得分明萬物在已

叢林學道亦然 譬如嘉苗望其秀實賊蟊不除難其成矣不獨世閒

示離緊肇禪人

一切聞見知識及發參求本分事上日用工夫著衣死為大事試將從前厭俗心念乃至出家已來所有以有所得心入難言之實際手禪人果能決定以生苦論此事本無向上向下纔涉思惟便成剩法何況

微細推求畢竟以何為向上事再將推求的心語實 要飯折旋俯仰動靜閒忙凡所經歷目前種種境界

觀察畢竟落在甚麼處凡有落處便成窠口即是生

歲月日時只須將前後無量劫數直下拈在目前任

他生死去來起滅即此現前一念決定不爲他浮光

死窟穴皆妄想邊事非實際也經云縱滅一切見聞

立佛法會 立佛法會

示懷愚修堂主

一一聽者當下了知一切聖凡本來無二無別吾人 一一聽者當下了知一切聖凡本來無二無別吾人 一一聽者當下了知一切聖凡本來無二無別吾人 一一聽者當下了知一切聖凡本來無二無別吾人 一一聽者當下了知一切聖凡本來無二無別吾人 一一聽者當下了知一切聖凡本來無二無別吾人 一一聽者當下了知一切聖凡本來無二無別吾人 一一聽者當下了知一切聖凡本來無二無別吾人

即具此眼轉此經度此衆生雖云使盡大悲行盡大

原經利塵劫了無疲厭縱然如是亦非衲僧本分事 問以故以淨法界中本無動搖去來凡聖諸影像故 的以故以淨法界中本無動搖去來凡聖諸影像故 治諸顛倒相虛妄影耶是知從上佛祖示人只教歌 却狂心不從他覓所謂但自懷中解垢衣何勞向外 却狂心不從他覓所謂但自懷中解垢衣何勞向外 節精進又云但盡凡情別無聖解若作聖解即墮羣 節精進又云但盡凡情別無聖解若作聖解的墮羣 節情進又云但盡凡情別無聖解若作聖解的墮羣

示了際禪人內午

省處會得便與維摩方丈中諸上善人把臂共行去 州云洗鉢盂去其僧有省禪人若於趙州說處者僧 學人乍入叢林乞師指示州云喫粥也未借云喫也

也

松山老人夢游集卷第三

窓山老人夢遊集卷第四

4 善

粗粗

劉起相

嶺南弟子

示容玉居士甲辰

心於道久矣第志未專一念生爲名教以忠孝爲先 予居雷陽之三一庵化州王居士容玉請日弟子歸

安放難定志余日然哉夫忠孝之實大道之本人心 愧未能挂功名以忠人主博儋石以孝慈親心有未 之良也安有捨忠孝而言道背心性而言行哉世儒

> 之至矣優云以敬爲重而口體爲輕者抑又末矣玉 日古德有言唯有徑路修行但念阿彌陀佛梵語阿 題也第望洋若海渺無指歸捷徑之功乞師指示余 則爲真修以性真之樂娛親則爲妙行以是爲孝孝 眞人以天真之孝則爲真孝子能以見性之功自修 心性在我則爲本然之天真也能知天性之真則爲 名知人言知天而不見性則天亦茫然無據矣是則 之論事親而不知人不名爲孝論知人而不知天不 思知人不可以不知天人者仁也性之德也由是觀 所背者跡所向者心也傳日思事親不可以不知人 **槩以吾佛氏之教去人倫捨忠孝以爲背雕殊不知** 日弟子服膺明誨見性之功誠大矣以此娛親固所

萬物無所終窮故稱無量壽此壽非屬於形骸修短 後天地不爲終生死之所不變代謝之所不遷直超 歲月延促也吾人能見此性即名爲佛且佛非西方 聖人之稱即吾入自性之眞而堯舜禹湯蓋天民之

性尤見性之第一妙門心原夫此性先天地不為老

彌陀此云無量壽佛者覺也乃吾人本然天真之覺

富貴之可及哉此所謂心淨則佛土淨事心之功無 斯現則所遇無不安惟此真安至樂豈口體之能致 樂存禍去而福存矣真樂既存則無性而不樂天福 外乎此淨土之資亦不外於是玉日弟子聞教心目 覺覺則自性光明挺然獨露從前妄想貪瞋癡等當 佛子欲求佛但求自心心若有迷但須念佛佛起即 體也迷則不覺不覺即衆生不迷則覺覺即衆生是 生心悟則衆生是佛如水成冰冰融成水換名不換 手工夫願求示論余日吾人荷知自心是佛當審因 自心是佛自心作佛不假外求但不知作佛之旨下 曲之見未遇眞人之教而東於俗學以耳食爲至富 下冰消棄垢旣消則自心清淨脫然無累無則苦去 何而作衆生蓋衆生與佛如水與冰心迷則佛作衆 無怪乎茫然而不知歸宿矣玉日弟子蒙開示信知 爲堯舜則人人皆可以作佛明矣嗟嗟世人拘拘一 者此也能覺此性則人皆可以爲堯舜人既皆可以 先覺者斯則天民有待而能覺聖人生之而先覺此 覺豈非佛性之覺耶孟子所謂堯舜與人同耳所同

淨土在我而不在人佛在心而不在跡矣子其志之 樂樂且久豈非無量壽耶母壽無量子壽亦無量是 母時懷戚戚之憂也是則彼雖富貴而親不樂即樂 從此歸心於淨土致享一日之樂猶勝百年富貴使 親之心非養親之形心世孝乃爾黨能令母之餘年 而有所以不樂者存今子以念佛而能令母心安且 五鼎三牲之養而易斑衣戲彩之樂孝之大者在樂 如母念子之切感悦其母之心耳故古之孝子不以 子能了見自心恍然覺悟自心即母心也以已之覺 且樂耶第恐子事心之功不篤忘形之學不至不能 念子嚙指而子心痛今子念母忘形而母心豈不安 子之心則形忘而心樂矣且母子之心體一也昔母 愛子之心耶母若愛子之形則形累而心苦母若愛 以覺其母以已之念願母念之母既愛子之形豈不 念遂即旋歸且母嚙指而子心痛以體同而心一也 其母有客至望子不歸口嚙其指子即心痛知母憶 致此孝耶是所未安願師指示余日昔有孝子遠出 開朗如見歸家道路了無疑滯第以念佛爲孝何以

示自庵有禪人住山

佛言一切衆生流浪生死皆是妄想顕倒以為根本類倒地減肯心自許便是了生死出苦海的時節也妄想不休生死難出故云狂心不歌歌即菩提吾人展能順歌狂心便是出三界破魔軍露地而坐稱為無事道人鐵面閻羅老子縱有狠心毒手亦無打算無事道人鐵面閻羅老子縱有狠心毒手亦無打算解除偷腥撲臭耶十方世界皆成淨土以大圓覺為我際偷腥撲臭耶十方世界皆成淨土以大圓覺為我所修方稱自庵若養賴癡睡三生六十劫祇為他人所修方稱自庵若養賴癡睡三生六十劫祇為他人所修方稱自庵若養賴癡睡三生六十劫祇為他人所修方稱自庵若養賴癡睡三生六十劫祇為他人

示慶雲禪人

四要真知世閒是苦極生厭離第五要親近絕勝知發決定出生死志第三要拌一生至死不變之節第出家兒要明大事第一要真實為生死心切第二要

際不為五欲煩惱遮障不為惡舊所使不為惡友所 解不為五欲煩惱遮障不為惡舊所使不為惡友所 學不為惡緣所奪不以根鈍自生退屈如是發心如 是趨造久久純熟自然與本所願求函蓋相合縱今 生不能了悟明見自心即百劫千生亦以今日為最 生不能了悟明見自心即百劫千生亦以今日為最 家正業以此望出苦海是猶適越而之燕却步而求 家正業以此望出苦海是猶適越而之燕却步而求 家正業以此望出苦海是猶適越而之燕却步而求 家正業以此望出苦海是猶適越而之燕却步而求 亦以真實決定為第一義也勉之勉之

示如常禪人

佛言辭親出家心醉五欲不知何患是遠離法何道是無為法又日難除鬚髮而作沙門受佛法者去世資無為法又日難除鬚髮而作沙門受佛法者去世資財乞求取足日中一食樹下一宿愼不再矣使人愚財名求取足日中一食樹下一宿愼不再矣使人愚財名求取足日中一食樹下一宿愼不再矣使人愚勝者愛與欲心如是之法種種叮嚀苦語無非要爲佛弟子者最初出家便以離欲爲第一行耳後世兒佛弟子者最初出家他之本解無爲法名日沙門常行

求出離法當以直心為第一義珍重 他**本述繼編**春送而不自覺且又矯飾威儀詐現有 思芳道繼編春送而不自覺且又矯飾威儀詐現有

示小師德宗

瀾而不散猶是生死岸頭事此古人大不自欺處儻

默已欺人是自懷懷他也侍者·福慧早從老人出家

性具足如寒潭皎月靜夜鐘聲隨扣擊以無虧觸波

自斷者所以古人三二十年苦心參學縱然悟得自

歧執手叮嚀珍重 此作供養以關生平爾其再無忘今日重別之言。臨

示慧侍者

佛以一大事因緣故出現於世欲令衆生開示悟入佛以一大事因緣故出現於世欲令衆生開示悟入佛之知見然佛之知見無二而有迷悟不同者過在立不立耳祖師道若立一廛國破家亡以其知見本無不立耳祖師道若立一廛國破家亡以其知見本無不改是知我爲生死之本也豈特凡夫造貪瞋癡而不說是知我爲生死之本也豈特凡夫造貪瞋癡而不為是知難除以其知見深潛根於心者難拔故經云之細則難除以其知見深潛根於心者難拔故經云之。 是樂斯則聖凡知見無二而有迷悟不同者過在立不改是知我爲生死之本也豈特凡夫造貪瞋癡而不說是知我爲生死之本也豈特凡夫造貪瞋癡而不爲生死難拔之根故二種障中靈細不同靈則易不能

初見老人時一鑑盞物耳別去一十年茲來更蠢蠢 心獨嘗喜其蠢蠢中有惺惺不蠢處此侍者以此蠢 化獨嘗喜其蠢蠢中有惺惺不蠢處此侍者以此蠢 不靈為命根今來又五年其蠢日增其不蠢者亦潜 人人不自知 具為蠹地令年夏老人從西寧回山侍 人人不自知 具為蠹地令年夏老人從西寧回山侍 大人不自知 具為蠹地令年夏老人從西寧回山侍 之蠹爲已過也苟能以此靈自爲受用地亦頗自足 立蠹爲已過也苟能以此靈自爲受用地亦頗自足 立蠹爲已過也苟能以此靈自爲受用地亦頗自足 東老人眉毛斯結

示鄧司直

佛圖證故稱為大覺又日菩提諸佛用之故為神通端無所不照故日圓覺本來無染故日這架本來無妄故時無所不照故日圓覺本來叛放日這架本來無妄故味放日光明本來廣大包容故日虚空本來無妄故味無所不照故日圓覺本來寂滅故日涅槃此在諸勝無所不照故日圓覺本來寂滅故日涅槃此在諸時無所不照故日圓覺本來寂滅故日涅槃此在諸時無所不照故日圓覺本來寂滅故日涅槃此在諸時無所不照故日圓覺本來寂滅故日涅槃此在諸時國證故稱為大覺又日菩提諸佛用之故為神通

三界上下法唯是一心作以此觑之豈獨佛法說一 之境類別要之樂向外來苦從中出由是觀之天堂 至露法王身鱗甲羽毛普現色身三昧此皆般若之 情無情無不從此一心之所建立但有大小多寡善 心從上聖賢乃至一切九流異術極而言之至於有 自心之所至耳經云自心取自心非幻成幻法又日 地獻之說宛然出現於自心又豈爲幻怪哉是皆迷 受辛酸差毒難堪難忍正當求採而不可得時堂前 惡那正明昧之不同所用之各異耳故日山河大地 居然在目而酒尚溫餚尚熱也枕席之地未離苦樂 坐客喧譁未息隨有驚覺呷吟而起視其數娛之境 少時昏睡沈馨忽然夢在地獄種睡苦具事一時備 比心之所變現正若醒人無事種種樂境皆在目前 爲刀爲鋸爲鐵爲壓川三獲逷爐炭種種苦具皆從 数詐造之為業則為経為殺爲盜爲妄所取之果則 迷之則爲妄想業藏髮而用之則爲貪瞋擬愛驕蹈 妙用菩薩修乙名為妙行二乘得之名為解脫凡夫 **真光吾人自心之影事也吾人本有之心體本來廣**

是則諸佛全證若不出世則辜項衆生諸祖悟之而 族身民之獨心民之法又皆自心所出又取之而爲 地目院之於美色耳兔之於舜聲鼻兔之香舌兔之 此而不知固可哀矣而且誤取自心以爲貪愛之樂 蹇斯則佛祖可負而自己不可負以其本有而不水 行則辜負自已負衆生者慢負諸佛者墮負自己者 不說法則辜負諸佛凡有聞者而不信不解不受不 也豈獨老盧即老人今日爲司直所說者亦此事也 三十餘年諸於流行千七百則指示於人者盡此事 者獨吾人具足而不知如幻子逃逝而忘歸父母思 以其此心與諸佛同體無二歷代祖師悟明而不異 招未來三途之劇苦如人夢遊而不覺可不大哀數 數爲樂爲貪瞋疑爲至穀盃妄而造作種種幻業又 團者種種境界色相又皆吾心所現之若彼吾人有 大包容清淨光明之若此目前交錯襲沓陳列於四 實餘一則非真是知此一事外皆成魔說為戴論耳 司直與諸現前共聞見者亦此事心經云唯此一事 而搜討之所以釋迦出世達碧西來乃至曹溪所說

重今者身婴廛海心堕迷途忽然猛省回頭尋求此直今者身婴廛海心堕迷途忽然猛省回頭尋求此直今者身婴廛海心堕迷途忽然猛省回頭尋求此之方老人順以此法直指向渠儼若指示衣底神珠之方老人順以此法直指向渠儼若指示衣底神珠原是司直固有亦非老人把似以當人情世態也然原是司直固有亦非老人把似以當人情世態也然原是司有所表面,所述是主者求其隨應之方又在司直自心善互精動过足主者求其隨應之方又在司直自心善互精動过足主者求其隨應之方又在司直自心善互精動过足主者求其隨應之方又在司直自心善互精動过程,可上資佛顧下資老人萬萬不假他力否則依然一夢差太今日所說般若皆從上佛祖心地法門即與六老人今日所說般若皆從上佛祖心地法門即與六老人今日所說般若皆從上佛祖心地法門即與六老人今日所說般若皆從上佛祖心地法門即與六老人今日所說般若皆從上佛祖心地法門即與六老人。

示妙光予禪人

鄧生持此自利利他未必不爲廣長舌也

既以一人而富昔日千二百衆老人數喜不禁故亦

爲說般若之法如吾佛祖所云如爲一人衆多亦然

方、這因綠門路各別但隨風潛般若種性淺深不一有先順東文字單提古德機緣話頭而悟入者有先 在教中親習種種修行妙門而後拋却護毒專依觀 提掌果及見曹溪如殷索師子老盧極盡神力剛道 是中方信一切諸法不出自心與一切出 是中方信一切諸法不出自心與一切出 是中方信一切諸法不出自心與一切出 是時方信一切諸法不出自心與一切出 是時方信一切諸法不出自心與一切出 是明名為開甘露門向佛祖項額上行也若心 一方、地草芥塵毛皆為自己如此任運隨宜作法施 因緣是則名為開甘露門向佛祖項額上行也若心 一方、地草芥塵毛皆為自己如此任運隨宣作法施 因緣是則名為開甘露門向佛祖項額上行也若心 一方、地草芥塵毛皆為自己如此任運隨宣作法施

示寬兩行人

不了又安敢言佛法知見平

甚也所謂日用而不知者此耳其過在不知本有若 昔人爲生死行脚今人但行脚而不知生死可哀之

and sail & a seres was

村再行脚去若此後摸索鼻孔不著他時異日定難所有之日我心匪石不可轉也要知非金剛心地露手手寬兩自北而南來慰余數矣不爲艱難道路讓子手寬兩自北而南來慰余數矣不爲艱難道路讓其心不移故復以鐵腸二字美之然鐵腸乃老人所與其心不移故復以鐵腸二字美之然鐵腸乃老人所與其心不移故復以鐵腸二字美之然鐵腸乃老人所與其心不移故復以鐵腸二字美之然鐵腸乃老人所與其心不移故復以鐵腸二字美之然鐵腸乃老人所與其行脚事定非爾所知若稍知行脚便不恁麼驀紅去心老人怒其愚而恐其所不知故復以此書發

示如良禪人

似今日相見也

無所謂破三毒出三界破燈網爾時如來一大歡喜為基址塵勞聒聒皆此爲喧闆耳今欲一雕依止便然乃生死路頭第一大事也故切呵之戒之離此便然乃生死路頭第一大事也故切呵之戒之離此便為基址塵勞聒聒皆此爲喧闆耳今欲一離依止便

示周陽孺

淨其過在一念生心是爲心病有生則有滅惟此生

滅如水之流非水外別有流也但水不住之性見有

起分別則見非功矣由是觀之藏識本真故日性清

分別五塵者非五識乃同時意識耳改居有功若不

藏藏應緣之用獨能照境不能分別故日同圓鏡頁

識擬能分別亦無可寄矣若前五藏原無別體但是

八藏之動念所謂生機若此機一息前境順空而六

者非藏識乃生滅心耳此生滅心强名七藏其實是

藏特境界風耳偈云前境若無心亦無是則取境界

型 一語行出何會有性相之分耶及觀識此識乃全 一語行出何會有性相之分耶及觀識性識乃全 盡在裏許學不破故衣休止之即二派五宗都從此 盡在裏許學不破故衣休止之即二派五宗都從此 一語行出何會有性相之分耶及觀識智頌略為注 一語行出何會有性相之分耶及觀識智頌略為注

住境界風所動洪波鼓冥壑無有斷絕時既云藏識

乃眞妄迷悟之根生死凡聖之本稜伽云藏識海常

即阿護耶而又云常住則本不動也然所動者非藏

舒生伯損有志於道請益因示之日老氏有言為學示舒伯損

而道轉遠是故爲道者以損爲益也吾人性本清淨見以當進益殊不知知見增而我見勝我見勝則氣見以當進益殊不知知見增而我見勝我見勝則氣

了無一物所謂纖塵不立性之體也由是習染濃厚了無一物所謂纖塵不立性之體也由是對染過學面為質性之所不足性體若足則道日光由是發之而為思為孝爲仁爲義推而廣之以治天下國家則其利忠爲孝爲仁爲義推而廣之以治天下國家則其利忠爲孝爲仁爲義推而廣之以治天下國家則其利忠爲孝爲仁爲義推而廣之以治天下國家則其利忠以增長知見爲學則損益倒置又何能以盡性改善人以對長知見爲學則損益倒置又何能以盡性改善人。

示文軫

於胸中欲求志定而理明德新而業進其可得乎

示劉平子

廣神怡**協然獨步**此之謂予通之士也 **職神怡協然獨步**此之謂予通之士也 **職神怡協然獨步**此之謂予通之士也 **職神怡協然獨步**此之謂予通之士也 **以上,**

所立卓爾若到卓爾獨存之地則性自復外智不容入兩頭坐斷中閒自孤自孤處正謂如有自性本近唯因習而遠顧能把斷要津內習不容出性相近習相遠此語直示千古修行捷徑吾人苟知

放則自不放求之無求則爲真求子與氏見性明心,求而不求依稀彷彿視之爲匹似閒耳苟知不放之有心未嘗不求而問學不明者何也病在不放之放了與有言學問之道無他求其放心而已矣雖然亦

在目前不是目前法亦不雕目前非耳目之所到荷知道見目前而不見道非道遠人人自遠耳故曰道道在日用而不知道在目前而不見以知日用而不

單傳直指處唯此而已有志向道以此爲準

志向道初發心時便從此入過如此用心則聖人不在三代今古不離一念矣有能透過目前逆順關頭毀譽境上不被學幹橫身直

示歐嘉範

示李子晉

淨明現然鏡體本明非待磨而有也凡有志向道工念克去克之既久物徹塵消本明自露譬如磨鏡垢不必外求但於日用見聞知覺習染物欲偏重處念不必外求但於日用見聞知覺習染物欲偏重處念不必外求但於日用見聞知覺習染物欲偏重處念

示李子融

善人云劃變宜及膚冀爪宜浸體言其切也故學道 之土先須辦長遠不退之志下一分篤實苦切工夫 如登萬仞高山不至極項不已步步努力心心不退 不爲褮譽傾動不爲是非搖奪不爲困橫抑挫如一 人與萬人敵小有退怯前功盡棄又豈可以不堅固 心而至不退安樂之境界耶

示歐嘉可

語曰人莫不飲食也鮮龍知味也此言道在日用至 到古今兩閒之內,被穿衣喫飯滿味者多矣黨不為 其所滿則稱豪傑之士矣。學道之士不必向外別求 其所滿則稱豪傑之士矣。學道之士不必向外別求 其所滿則稱豪傑之士矣。學道之士不必向外別求 不數荷於日用一切境界不被所滿從著衣喫飯處 一眼看破便是眞實向上工夫,有志於道者當從日 一眼看破便是眞實向上工夫,有志於道者當從日

示梁騰霄

士君子處世當其未過靡不志願匡主庇民建不朽

TARTE THE TARE ALL MAN ALL THE

謂仁也此體之中一塵不立但有一念妄想即屬有 於道德者必先死吾人根本實際要從真性流出此 名亦無所顧忌完其初心不可得矣何也以最初志 久則漸染時俗心神渾濁不賢流入富貴之途甚則 之事業至一登仕籍但務立名爲心忘其所以爲功 大同之體昏塞不得爲仁矣本體昏塞則諸妄皆作 真性主廣至大光明清淨蕩絕鐵塵此吾性之體所 逸大非風鹽中人每從予遊聞一字一句末嘗不驚 爾下從根本實際中來第爲浮養妄想而已原非堅 未能的究根本但將六祖不思善不思惡正與麼時 矣梁生從今當做自性工夫從實際参究隱於自性 根本既妄則脚跟不聽由是一入世緣順染流俗宜 縱有功名之志皆從妄想發揮凡有作爲皆非眞實 我有我則與物對物我既分人我兩立人我既立則 心惕會閉嘗請益予謂學者固當求志於道德凡志 固不拔之志安能立不朽之業哉梁生騰霄骨剛氣 切参究多到一念不生處忽然識得本來面目方見 如何是上座本來面目話頭蘊在胸中二六時中切

老盧不吾數也

示游愛之

發若體性人人具足但以置氣厚薄故障有輕重之 是一眼觀透不為所瞞味欺奪耳由是觀之平 第之時,用觀透不為所瞞昧欺奪耳由是觀之平 是一時,一眼觀透不為所瞞昧欺奪耳由是觀之平 第之時,一眼觀透不為所瞞昧欺奪耳由是觀之平 第一眼觀透不為所瞞昧欺奪耳由是觀之平

示優婆塞王伯選

古人多稱墨秀中人有志向上求出生死謂之大裏生蓮以其真難得也以一切衆生無量劫來就湎五生蓮以其真難得也以一切衆生無量劫來就湎五生蓮以其真難得也以一切衆生無量劫來就湎五生產之心淨則佛士淨以吾人自心是佛性心是土土經云心淨則佛士淨以吾人自心是佛性心是土土經云心淨則佛士淨以吾人自心是佛性心是土土經云心淨則佛士淨以吾人自心是佛性心是土土經云心淨則佛士淨以吾人自心是佛性心是土土經云心淨則佛士淨以吾人自心是佛性心是土土經云心淨則佛士淨以吾人自心是佛性心是土土經云心淨則佛士淨以吾人自心是佛性心是土土經云心淨則佛士淨以吾人自心是佛性心是土土經云心淨則佛士淨以吾人自心是佛性心是

大宅生**芝**而已命

示寂憂禪人禮菩陀

家養禪人將東禮普陀乞一語為行胸重老人示之 司古人出家特為生死大事故操方行胸拿訪替知 大脚之名今年五臺戰帽明年普陀伏牛口口為朝 名山隨喜道揚其實不知名山為何物道場為何事 是不知何人為善知藏祗祀山水之高梁叢林鄉數 之帶顯而已走遍天下更無一語歸家山可不悲哉 之帶顯而已走遍天下更無一語歸家山可不悲哉 之帶顯而已走遍天下更無一語歸家山可不悲哉 之時顯而已走遍天下更無一語歸家山可不悲哉 於在須出門一步何必待至普陀而後見其或未然 於在須出門一步何必待至普陀而後見其或未然 於在河出門一步何必有宣告者 於在河出門亦不能為汝 於生死業根也禪人自定當看若大士有何言句歸 來當為奉似老人與勿處費草鞋錢也

示梁仲遷甲資

梁子四相字仲遷從老人遊有年老人愛其心寶直

之聖人涉世有體用全彰故應不失時若明鏡之照 亦不妨本多讀了做了放下就還他个本來無一物 **暨颾浮鹵莽界中不隨他脚跟轉矣即讀書做文字** 遇則話頭現前即是照用分明不亂定力所持自不 話頭一拶當下消亡綿綿密密將此本多話頭作本 往當先洗除習氣潛心向道將六祖本來無一物話 妍聽權衡之定輕重殊非漫任血氣者聚子自今已 光明藏中通身毛孔皆是利生事業又何有身命可 命元辰久久純熟自然心境虎閒動靜云爲凡有所 頭橫在胸中時時刻刻照管念起處無論善惡即將 將行相送韶陽舟中請法語以書紳乃書此寄之子 自然胸中平平贴贴久之一旦忽見本無心體如在 不探本而事末皆蠶浮氣之所使非由道力簽也古 勇猛赴緩急近慈悲忘身以赴之是不量力不審權 謂梁子有道者心質直而不曲此道之本也慷慨近 養操存之功若駿馬而無銜轡終不免其蹶也老人 给身命以當之老人每責其靈浮以有道體而欠酒 而氣慷慨每見事不平無論可否或義有可爲即放

子既有其本又何憚而不爲哉心心相照作文自性流出此是真慷慨丈夫之能事治此相照作文自性流出此是真慷慨丈夫之能事

示劉仲安英丑多

下一挖自然場底滅跡矣 一方自然場底滅跡矣 下一挖自然場底滅跡矣 夢遊集卷第四 一本來無一句作話頭二 大時中切切多死但看妄想起處切莫隨他流轉當 大時中切切多死但看妄想起處切莫隨他流轉當 大時中切切多死但看妄想起處切莫隨他流轉當 大時中切切多死但看妄想起處切莫隨他流轉當 大時中切切多死但看妄想起處切莫隨他流轉當

◆日下古木

怒山老人夢遊集卷第五

侍

褔 苦

日錄

通 畑

門

嶺南弟子 劉起相

示觀智雲禪人

切洗盡不存一毫第四要真真放捨身命不爲死生 第二要辦一片爲生死大事決定鐵石心腸不被妄 想攀緣以奪其志第三要將從前夙習惡覺知見一 學道人第一要看破世別一切境界不隨妄緣所轉

誤第六要議得古人用心真切處把作参究話頭第 七要日用一切處正念現前不被幻化所惑心心無

病患惡緣所障第五要發正信正見不可聽邪師謬

閒動靜如一第八要直念向前不可將心待悟第九

要久遠志不到古人田地決不甘休不可得少為足 第十做工夫中念念要捨要休捨之又捨休之又休

如此用心庶與本分事少分相應有志向上當以此

不湘潭諸優婆塞

捨到無可捨休到無可休處自然得見好消息學人

自勉

吾人出家單爲生死大事操方行脚參師訪友只爲 示了心海禪人

決擇已躬下向上一路不明不已故善知識單以此

此番入山幸仗規繩大衆夾持正好隨場下手著力 **耆**所以繫念反為念縛不得超脫大自在地耳禪人 再見老人决不似今日眉目動定也 然念頭迸斷心境兩忘如股索獅子自在遊行他時 但於念念中看觀念未起處由在離念一著久久忽

-60-

生定不空過但日用工夫軍提一念話頭最爲編密

牛山苦行非語方可及學道之士荷能排給身命

牛拈香請益老人示之日方今海內禪林第一賴有

入門見其有納僧巴鼻似非尋常粥飯者今將返伏

鼓粥飯氣息而已老人寓靈湖蘭若了心禪人來多

事示人近來法門寥落諸方罕聞此風行脚到處但

所以不得超脫得大自在者以一向死守話頭念念

不捨不知參禪最先要內脫身心外遺世界離念

清淨眞心但爲惡念染汚故隨情造業而不自知今 善心者即清淨真心也以一切衆生各各本具如來 明時時觀察提撕於何法上有未純熟更加切磋之 許今觀湘潭諸弟子信心篤厚非泛泛波流故强名 能觀察善心則一切惡法自不現前心自淸淨矣荷 功務要全美而後已如此用心是爲眞實善人所言 少一法即爲缺德汝等但能依教持此善法各各究 輕安不放逸行捨不害此十一法全具為純善人但 惡心所也十一法者謂信糟進慚愧不食不順不凝 今按唯識論說心所五十一而善法唯有十一餘皆 其請但念汝等素未聞法雖云善人不知如何是善 譏謗全無利益大爲壞法之端故老人生平未敢輕 師之室者近來法道久湮師承無眼妄禮三拜例得 佛法東來隨時受化代不乏人至有明心見性入祖 以其在家能持五戒可以近事三寶堪受法利故及 在家二衆日優婆塞此云近事男優婆夷云近事女 佛住世說法有常隨四來出家二衆日比丘比丘尼 一名即自稱爲弟子其實腥腪未吐素行未改致生

不思惡正與麼時那箇是明上座本來面目公案時時多究是謂向上一路汝等脚跟下誰無一尺土努時多究是謂向上一路汝等脚跟下誰無一尺土努時多究是謂向上一路汝等脚跟下誰無一尺土努時。與現生可斷生死。永絕於論但恐偷心自欺不能伸則現生可斷生死。永絕於論但恐偷心自欺不能作真實行耳老人强為汝等作如是散為漢三歲子作真實行耳老人强為汝等作如是散為漢三歲子

示方覺之乙卯

而美享喻焉圓覺經云當觀此身四大假合堅硬師 一、大見其心光炯炯是於般若有夙種者每以向上示 大見其心光炯炯是於般若有夙種者每以向上示 方子無以天全其性而殘其形以爲闕也予知天不 上者多矣孰能離形釋智以全其性耶聖人謂形爲 生者多矣孰能離形釋智以全其性耶聖人謂形爲 生素放日大患爲吾有身故滅身以歸無以其形爾 生累放日大患爲吾有身故滅身以歸無以其形爾 上 不 文要不依形骸不依氣息一切皆離其心自寂心寂 之要不依形骸不依氣息一切皆離其心自寂心寂 心 要不依形骸不依氣息一切皆離其心自寂心寂 心 要不依形骸不依氣息一切皆離其心自寂心寂

· ** 1 A

旦洞然始信老人此語不妄 旦洞然始信老人此語不妄 旦洞然始信老人此語不妄 是洞然始信老人此語不妄 是別然不見身內不見心身心寂然了 至樂不待忘形而造乎極矣子但精進作如是觀觀 地潤濕歸水緩氣歸火動轉歸風四大各難今者妄 地潤濕歸水緩氣歸火動轉歸風四大各難今者妄

示智海岸書記乙卯

是不欠一毫然諸衆生所以流浪生死長劫輪迴而是不欠一毫然諸衆生所以流浪生死長劫輪迴而是不久,自念老矣出世法緣會合良難經一至, 是三載居常極其淡薄二子恬然想陳蔡之從不是 是三載居常極其淡薄二子恬然想陳蔡之從不是 是三載居常極其淡薄二子恬然想陳蔡之從不是 是三載居常極其淡薄二子恬然想陳蔡之從不是 中一眼之龜值浮木孔豈易易哉嗟子行矣應諦聽 中一眼之龜值浮木孔豈易易哉嗟子行矣應諦聽 之佛言一切衆生皆證圓覺是知佛性在人各各具 之佛言一切衆生皆證圓覺是知佛性在人各各具

老矣求再侍老人如今日亦未可得也苟終身無成

遇老人一向動定無宜唯今相伴二年喜子能忍苦

可謂堅志今又告別恐難老人未必如今日也嗟予

不返者直以背覺合塵碩生死流隨逐魔網而不自知也以不自知自覺故枉受沈淪正似持珠乞丐不知地以不自知自覺故枉受沈淪正似持珠乞丐不知地以不自知自覺故枉受沈淪正似持珠乞丐不知應中本有如意之實棄之而甘受歸據以是之故如來說為可憐愍者老人居常觀子天性率直忘機如來說為可憐愍者老人居常觀子天性率直忘機如來說為可憐愍者老人居常觀子天性率直忘機如來說為可憐愍者老人居常觀子天性率直忘機不透洪是不覺隨波逐浪及至回頭照管已經多時如此起起倒倒依傍老人二十年來畢竟已剩下生死大事茫無歸宿此何以故蓋有入道之資而無堅忍不抵於定之志故脚跟下站立不住胸中多生惡覺惡智不養和意難遇今幸選知識聞正法若當面鑄過法難聞知識難遇今幸選知識聞正法若當面鑄過法難聞知識難遇今幸選知識聞正法若當面鑄過法難聞知識難遇今幸選知識聞正法若當面鑄過法難聞知識難遇今幸選知識聞正法若當面鑄過

生即從今已去乃至窮劫無有不誤之時也子向於

是不辜負此生一大事因綠耶子今行矣所叮嚀者 即勿再墮蹴網當堅持特操不可久住王城若以二 即勿再墮蹴網當堅持特操不可久住王城若以二 是一句話頭咬定牙關不可輕易放過如此拌盡 即生決志不改是則不但不離老人一步即與佛祖 此生決志不改是則不但不離老人一步即與佛祖 此生決志不改是則不但不離老人一步即與佛祖 用旋坐臥經行不出道場之外也不唯不負老人抑 周旋坐臥經行不出道場之外也不唯不負老人抑

示劉存赤乙卯

東東生是三無差別但心淨即佛心垢即衆生生佛 與衆生是三無差別但心淨即佛心垢即衆生生佛 是如反掌縣是觀之衆生與佛本來無二所謂心佛 意因示之日子於心難垢一句得力此語不虚亦不 喜因示之日子於心難垢一句得力此語不虚亦不 喜因示之日子於心難垢一句得力此語不虚亦不 之辦不遠只在心垢滅與不滅耳以此心本來清淨 與衆生是三無差別但心淨即佛心垢即衆生生佛

> 生無始業障深厚煩惱堅固難得清淨必假磨煉之 譬如鏡光本明以垢故昏必假磨煉之藥然藥亦垢 功故有参禪念佛看話頭種種方便皆治心之藥耳 衆生此垢若淨即名爲佛豈假他力哉無柰一切衆 但以貪瞋擬慢五欲煩惱種種業幻垢濁障蔽故名 統一以根鲍又無古人死心一以無眞善知藏抉择 生本來是佛非一向在質惱垢濁之中妄自稱為佛 生心垢難離必須工夫精動調治垢去心明故說衆 礦沙石垢穢必須烹煉之法。金精而無用其煉矣衆 也以取能去其垢故鏡明而藥不存矣又如眞金在 也參拜看話頭一路最為明心切要但近世下手者 若以念佛一聲蘊在胸中念念追求審實起處落處 多落邪見是故念佛參禪無脩之行極爲聽當法門 此與看公案話頭無異是須著力挨排始得若以妄 定要見箇的當下落久久忽然垢淨明現心地開通 想浮沈悠悠度日把作不喫緊勾當此到窮年亦不 得受用若以悠悠任妄想為受用此則自誤不但一

示鍾衡額

伴予度歲老人噫嚱而數曰子所志是將涉海渡河之若探囊拾芥也甲寅除日同存亦劉子遠來相慰 知其故猶然以生平未愜心快意事將用心力以圖 五生由是故物無恙蹈安恬無事之境然竟茫然不 至生由是故物無恙蹈安恬無事之境然竟茫然不 至生由是故物無恙蹈安恬無事之境然竟茫然不 至生由是故物無恙蹈安恬無事之境然竟茫然不 至生由是故物無恙蹈安恬無事之境然竟茫然不 一次若探囊拾芥也甲寅除日同存亦劉子遠來相慰 一次若探囊拾芥也甲寅除日同存亦劉子遠來相慰

是為真福是知福由已作者政非智巧機能可致耳

之鎡基若能直下休心將前生平所作之業從頭仔

且佛以斷妄心則感人天之屬鍾生本有功名富貴

減今苟妄消業節則一性圓明受用無邊得受用處

爲萬福之源但由妄相惡業遮障故禍日生而福日

乃休心斷妄之最上工夫也以人心本來光明廣大

業綠輕不須更覓菩提路只要當人退步行退步者

不疑執而行之則佛果可期況世緣手勉之勉之休心斷妄聽命俟時一件把作標準潜心自己固有休心斷妄聽命俟時一件把作標準潜心自己固有失一旦災消福至則功名富貴逼拶將來亦無迴避失一旦災消福至則功名富貴逼拶將來亦無迴避失一旦災消福至則功名富貴逼拶將來亦無迴避不避執而行之則佛果可期況世緣手勉之勉之

示袁大全

世別衆生一切逆緣境界不能磨礪以治斷之如詩電調之無濟有志向上留心學佛者往往深思高舉遠社。其所以為於一樣不知佛已痛可此是無寂滅者吾佛早已不容矣佛教所責在手自指虛無寂滅者吾佛早已不容矣佛教所責在手自治虚無寂滅者吾佛早已不容矣佛教所責在手自之行治衆生無斷煩惱故得此名菩薩捨世閒無可修之行治衆生無斷煩惱故得此名菩薩捨世閒無可修之行治衆生無斷煩惱故得此名菩薩捨世閒無可修之行治衆生無斷煩惱故得此名菩薩捨世閒無可修之行治衆生無斷煩惱故得此名菩薩捨世閒無可修之行治衆生無斷煩惱故得此名菩薩捨世閒無可修之行治衆生無斷煩惱故得此名菩薩捨世別無可修

术一佛也良由衆生惡智障重心難清淨故設念佛

方便求生淨土法門且日心淨則佛土淨是知念佛

固淨心之妙行也然念佛本爲淨心苟念佛而其心

不淨何取於念持戒而背五常何取爲戒蒙生有志

所云切磋琢磨者此也且佛制五戒即儒之五常不所云切磋琢磨者此也且佛制五戒即儒之五常不所去切磋琢磨者此心即名爲佛非雅此淨心之外即傳表乃自脫略其五常是知二五而不知十也又推佛或乃自脫略其五常是知二五而不知十也又推佛或乃自脫略其五常是知二五而不知十也又推佛或乃自脫略其五常是知二五而不知十也又推佛或乃自脫略其五常是知二五而不知十也又推我能爲修禪之要一日克已天下歸仁豈非願悟之報問心子曰克已復禮爲仁已者我執心豈非先破我能爲修禪之要一日克已天下歸仁豈非願悟之報悟之故耶及直請其目乃日非禮勿視聽言動以所視聽言動者皆物而非禮則其所行原不離於世閒即菩薩住世所行亦不外此其所行原不離於世閒即菩薩住世所行亦不外此其所行原不離於世閒即菩薩住世所行亦不外此其所行原不離於世閒即菩薩住世所行亦不外此其所行原不離於世閒即菩薩住世所行亦不外此其所行原不離於世閒即菩薩住世所行亦不外此

世出世法二利具足緊不出此生其勉之言自淨其心則戒已受禪已修淨土已入菩薩妙行請授戒老人示之日戒本自性具足若諦信老人之情授戒老人示之日戒本自性具足若諦信老人之

示雙輪照禪人

> 不是得到此地若被此等惡智所牽仍是鹽落生死 一生得到此地若被此等惡智所牽仍是鹽落生死 一生得到此地若被此等惡智所牽仍是鹽落生死

> > - 66 -

坑中前功盡東可不哀哉如此說話古人語中所載

不少老人略爲拈出以末法中難得真正學道之人

蓋亦晉爲浪子偏憐各耳大段古人住山不是養媚

置快活單為自己生死大事所以走向萬重寒嚴作 程度所活計若在此因循度日虚喪光陰豈不更可 程使倆活計若在此因循度日虚喪光陰豈不更可 發使倆活計若在此因循度日虚喪光陰豈不更可 發神水流風動猿吟鳥噪雲騰霧擁樅從在前變幻境 悲哉雖然用心差別既巳知之其山中目前變幻境 悲哉雖然用心差別既巳知之其山中目前變幻境 寒五內傷透唯有微微一息視從冰中出入至此返 寒五內傷透唯有微微一息視從冰中出入至此返 寒五內傷透唯有微微一息視從冰中出入至此返 寒五內傷透唯有微微一息視從冰中出入至此返 寒五內傷透唯有微微一息視從冰中出入至此返 等面又如千軍萬馬奔騰之狀如此襍亂境界初最 於別形話雖消久則果爾忽然寂滅自此一切境界 始則聒聒雖消久則果爾忽然寂滅自此一切境界 始則聒聒雖消久則果爾忽然寂滅自此一切境界 於別下不轉意根可許 始則聒聒雖消久則果爾忽然寂滅自此一切境界 於別路一舊工夫也禪人記取母忽

示顧恩衡禪人丙辰

明此事近代以來榮不知出家爲何事安可望爲古一日上一路乃出家人本分事古人發足超方只要死

之遂盡屛去單提一念切究本分事萬里南詢過曹 谿謁老人請益老人謂此事若不放下身心苦功根 謂之節沈死水又謂之卒妙窠窟若不囘頭轉腦則 **死到水窮山盡處終無下落縱到水窮山盡處古人** 人手顯愚衡禪人初依五臺空印大師聽習經論久 龍天厭薄法門乎丙辰春三月朔風雨夜半忽禪 病魔所撓業經實慶就醫老人聞之歎日禪門下衰 乃就誅茆南嶽未幾老人亦曳杖而至詢禪入則爲 身別行一路方不被他作障礙禪人唯唯作體而別 尺竿頭重進步大千世界現至身學人到此只索轉 轉位所以道百尺竿頭坐的人雖然得入未爲真白 人用心不是死到底須是死中發活始得要在回機 面前如鐵壁銀山相似祇是得力時不是受用處古 真實爲生死的學人最爲難得今斯人而有斯疾豈 觀其眉宇津津爽氣是知其疾已事八九因再拈香 冒雨衝泥而至老人相見大喜日此豈病夫所能**耶** 助道因緣子知之乎切以衆生之病病在有我以執 請益老人特示之日子之病魔乃子之大善知識爲

豈不見善財童子南詢百城多五十三大善知識各 惡習不留定不被他養成弱根直使佛祖無立脚處 授一種法門到頭只落箇與法界等與虚空等何會 言妙語及参禪執守功勛一齊睡却只到一點惡覺 存亦是病極言認執之病也禪人將前所蘊一切予 法身有兩般病其言透過法身若法執不忘已見猶 醫王東手最難調治諸佛諸祖特特出世單爲治此 禪不出陰界墮於識情窠臼縱有妙唇皆成我見以 生死之病大有過於生死之病也夫何故古人以多 何人哉禪人身病已瘳切不可被禪病侵也雲門謂 執四大為我病尚可醫今離四大復執有我此病則 巴去不知病之底止心于知生死之病而不知要出 多生劫劫病病至今日矣子若不了今日病則從此 耳且四大假合聚必有散縱使不病可嘗不病哉若 古及今無有一人不病是者唯知病病之人不爲病 我故一切煩惱衆病以之而生病生則苦必隨之自 了病不病者則病不能病之矣于知今日之病不知 種膏肓之病費盡多少心力求肯服藥而應者幾

示李福淨

從衆生界即可順入佛界矣達磨西來單傳心印質以迷一心而爲識識則純妄用事逐境攀緣不復知以迷一心而爲識識則純妄用事逐境攀緣不復知以迷一心而爲識識則純妄用事逐境攀緣不復知以迷一心而爲識識則純妄用事逐境攀緣不復知

禪家漸修之行也以世儒之學未離凡近去聖尚遠 其入道工夫在漸復不言頓悟若夫禪門則遠妻子 非漸趨無以致其極故聖人立教但日習日致日克 安也又曰人皆可以爲堯舜其可爲者性也不可爲 而近於性是可與為堯舜者亦此智耳智近於性即 者習也人之所習荷捨污下而就高明則日遠所智 可得而有也所謂堯舜與人同耳同者性也不同者 也不可變者眞可變者妄若達濕性無二則衆昧不 則本無二也是知案味乃妄之變也其濕性不可變 本一水也而以酸酸苦辣和之則淡性亡矣其濕性 則逐波忘水水尙不知而況了達濕性無二乎且如 孔子曰性相近也習相遠也性近則水原無波習遠 但知用情而不知用性但知波而不知波原水也故 則不迷不妄之性也其曰人心則迷性而爲情世人 此亦真妄之分也但世教所原不出乎此其曰道心 則日唯精惟一以精一爲宗極而有人心道心之別 夫吾儒所宗堯舜禹湯文武周公孔子所傳之心性

悟法門正是頓悟此心此禪宗心性真妄之旨也若

示叚幻然給諫請益

無可遣縱然如是猶是法身邊事未是法身向上事務實際直到知見盡泯一法不立始是到家田地若克實際直到知見盡泯一法不立始是到家田地若克實際直到知見盡泯一法不立始是到家田地若克實際直到知見盡泯一法不立始是到家田地若克實際直到知見盡泯一法不立始是到家田地若克實際直到知見盡泯一法不立始是到家田地若克實際直到知見盡泯一法不立始是到家田地若克實際直到知見盡泯一法不立始是到家田地若克實際直到知見盡泯一法不立始是到家田地若克實際直到知見盡泯一法不立始是到家田地若

to de term tank tente de de faith and a me to

皆未得明眼知識勘驗提撕故致禪門凋弊古德云 學道帶子處處多請印證故悟者不落邪見及宋而 輕易放過其在禪道大盛之時天下明眼知識甚多 向上一路勤絕佛法知見不到窮源徹底斷斷不肯 秦鏡當臺照徹肝膽至若與人解粘去縛直指法身 庭施設不同就裏宗旨元無差別其於應機接物如 原已下根機不一多在多求保養及至五家建立門 體無用如二乘偏空甚至撥無因果墮落外道豁達 元知識雖多學人邪見不少不墮生滅則落空見有 六祖已前不說參究功夫只實當下顧悟自商藏青 止是教家極則庭未是宗門極則處由是觀之終行 年不變其志亦有了悟自心一切皆空因無明師 爲足者多縱有真正學人肯下死手做工夫十年五 斷空或悟心未徹才見影響便得少爲足自稱菩薩 證遂落空見或藏神未破墮在光影門頭或習氣未 不是無禪只是無師謂是故耳大段末法参禪得少 口口談空心心著有竟造生死之業而不自覺如是 一事立是草草便以一知华解爲得哉且如宗門自 印

過正是教人不可坐在無事甲裏便說無佛可成無法可問。一定五人,與此為為法或使知他心宿命能見未來之意,或起極種異見此皆習氣變現若認作奇特便落度,可惜一往工夫為害非細此皆不遇明師又不應道可惜一往工夫為害非細此皆不遇明師又不應進純清絕點處此名拘守竿頭靜沈死水故云百歷避純清絕點處此名拘守竿頭靜沈死水故云百歷避純清絕點處此名拘守竿頭靜沈死水故云百歷避純清絕點處此名拘守竿頭靜沈死水故云百歷避純清絕點處此名拘守竿頭靜沈死水故云百歷避純清絕點處此名拘守竿頭靜沈死水故云百歷避純清絕點處此名拘守竿頭靜沈死水故云百度,其一

直饒透過放過即不可此語實是修心照膽鏡也故

得到法身邊隱隱的似有箇物相似亦是光不透脫

此亦是法身邊事未是法身向上事豈不聞雲門道

衆生可度此正墮在斷見不能離此空見耳縱然到

古德云悟之一字直須吐却應知佛祖說法一味遣

羣邪梭嚴經中五十種陰魔非漫語也今時修行旣

無明師指點若不遵佛祖言教印證將何以爲憑據

衆生執情所謂但盡凡情別無聖解若作聖解即受

耶始因衆生著有故佛破其有見二乘外道著空故佛破其空見菩薩著空有二邊故佛說非空非有破無遣正謂不見一法即如來豈不見善財童子參五十三大善知識已入五十三位法門入佛境界不說大一大善與主導菩薩著空有二邊故佛說非空非有破之大榜樣不以悟後為無事也今人修行經能悟徹之大榜樣不以悟後為無事也今人修行經能悟徹之大榜樣不以悟後為無事也今人修行經能悟徹之大榜樣不以悟後為無事也今人修行經能悟徹之大榜樣不以悟後為無事也今人修行經能悟徹之大榜樣不以悟後為無事也今人修行經能悟徹之大榜樣不以悟後為無事也今人修行經能悟徹之大榜樣不以悟後為無事也今人修行經能悟徹之大榜樣不以悟後為無事也今人修行經能悟徹之大榜樣不以悟後為無事也今人修行經能悟徹之大榜樣不以悟後為無事也今人修行經能悟徹之大榜樣不以悟後為無事也今人修行經能悟徹之大榜樣不以悟後為無事也今人修行無多聞慧錯

示玉覺禪人

萬綠盡情放下放得乾乾淨淨然有無始習氣障子之念不停故生死不斷欲實爲了生死必要把一切其心老人示之日學人修行爲生死大事也以心中上滅念念不停猶如野馬特求開示云何降伏而中生滅念念不停猶如野馬特求開示云何降伏

定放下又放下緩緩又提起一聲佛定觀這一聲佛

畢竟從何處起至五七聲則妄念不起又下疑情審

這念佛的畢竟是誰世人把此當作一句說話殊不

不得乾淨必須參一話頭紙上都有但不知下手工不得乾淨必須參一話頭紙上都有但不知下手工不得乾淨必須參善知識開示方便是他行過的有住今聞無住故當時放下而得開悟有何予妙如有住今聞無住故當時放下而得開悟有何予妙如事人情都要放下此多禪一著元無有予妙奇特此事極拙汝肯信否若果肯信但把從前妄想一齊放下不容蒼生緩緩專提一聲阿彌陀佛著實章定要上此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無始習氣太重又要放下切不要將心斷妄生此因無過數。

無別 此日夜靠定不計工夫一旦八藏忽然迸裂露出本 念單提行將去中閒再無疑難如是綿綿密密心心 禪之時不要求悟任他佛來祖來魔來只是不動念 來面目便是了生死的時節方不負出家之志但多 諸動中不見有動如此漸有入處七識到此不行如 只問是誰安念當下掃蹤滅跡矣佛云除睡常攝心 知此下庭情万纔是得力處如妄念又起即咄一聲 行住茶飯動部亦如是在獨人廣衆中不見有人在 睡時不能攝心一醒就提起話頭如此不但坐如是 日用著力做去自有下落

示明金禪

從而安之耶向外求安自古學人之通病非特今也 竟非屬已有既非已有則樂非真樂樂旣非真又何 明矣荀明其明則明亦不立何益之有故日爲學日 益凡言學者則向他家屋裏求安樂窩縱然求得畢 知即無明本此不知本有而向外職求更欲增益其 學人不知向上一路但求增益知見殊不知知見立 人請益將謂無益而欲明之耶有益而欲明

達本之答耳佛言息心達本源故號爲沙門學人奇 讀醫師喻未嘗不三復點訓稿見近世學者初為沙 知 齊吐却如傷食人中無宿滯則元氣自復學人劃却 何虧欠明益禪人果能知此順將從前所求多處一 能息心達本明不必外求益不必多增自性具足會 明之過也亦有求明而誤以不明强自爲明者誠不 本明而向外職求增益知見大都若此傷哉吾少每 醫器服毒藥而至損生者此不治之科化學人自棄 速效不信治本之方即疑醫棄藥五病也或更從庸 雖盧扁不能治何也以貪食不吐一病也養病諱疾 而吐可勿藥而愈若護病忌醫終成病而凡病此者 人食已能而更貪其味則傷食而病成矣若能隨食 明則失本明若更求多益則返成無益凡求益者如 彌即能誦此老不知宗竟致虎生浪死者無限此不 二病也病成忌醫三病也或從而惡藥四病也或求 又何必明之耶試看明從何明益從何益若求明其 之耶若言無益無益則不必矣若言有益既有 見可稱無事道人矣試子細檢點從前滿腹觀聽

作何氣味多多

示慧梭禪人

芳和尚強髮老人自南嶽來休夏金竹禪人拈香請 益因示之日汝巳能捨世閒恩愛身雖出家而心未 利他二利具足始是出家本分事禪人今日出家會 明出家之事昔吾佛世尊捨金輪栗王宮入雪山六 禪人生長休邑少賈於江湖因厭塵俗至匡山禮續 光明種子。今被無明煩惱葢覆日用而不自知者是 現前五蘊身心集下無量劫來種種貧瞋癡慢憎愛 <u></u>永離苦趣方爲自利後聽龍天谁出建立三寶是爲 用便爲出家者乎定有一段本分事也從上諸祖持 家之樣子也如此看來豈是偷安養賴貴圖現成受 年苦行觀明星悟道成等正覺為三界師六道尊仰 習氣種子日用心心起惑造業之心元是如來佛性 知有此事否督知有生死大事否如何是生死即今 明心地將無量劫來生死根株一拔順盡超脫三界 爲生死大事出家至於操方行脚參訪知識特爲發 人天供養普度衆生同出生死此是最初第一箇出

死是真出家兒如此看來出家乃大丈夫了生死事非享安逸賣圖自在而已也不肯修行不求明心見性是爲虚消信施返招來世酬償之苦何出家之有性是爲虚消信施返招來世酬償之苦何出家之有性是爲虚消信施返招來世酬償之苦何出家之有性是爲虚消信施返招來世酬償之苦何出家之有性是爲虚消信施返招來世酬償之苦何出家之有於仍生何緣何幸遇善知識指引開導若不深生慶去侶和合又何幸遇善知識指引開導若不深生慶本大生慚愧決志修行求出生死是爲自棄如到實本大生慚愧決志修行求出生死是爲自棄如到實本大生慚愧決志修行求出生死是爲自棄如到實本大生慚愧決志修行求出生死是爲自棄如到實本大生慚愧決志修行求出生死是爲自棄如到實本大生慚愧決志修行求出生死是爲自棄如到實本大生所也若不以老人之言發起眞實信心是爲避溺時節也若不以老人之言發起眞實信心是爲避溺時節也對自思自勉毋忽

示半偈聞禪人

出家之綠勝所居之地勝第未發勝心耳歸宗久尊宿建法幢之禪窟有如來舍利在焉是知禪人老人之弟子果淸湛公祝髮於歸宗歸宗乃昔諸禪人少習舉子業有出世志四十葉妻子禮紫栢

一大師窓而呪土甕之炭其重柴以下道場之再建大師窓而呪土甕之炭其重柴以下道場之再建大師窓而呪土甕之炭其重柴以下道場之再建一人為之綱領禪人間。一大師窓而呪土甕之炭其重柴以下道場之再建一人為之綱領禪人間。一大師窓而呪土甕之炭其重柴以下道場之再建一人為之綱領禪人間。一大師。一大師窓而呪土甕之炭其重柴以下道場之再建一人為之綱領禪人間。一大師。一大道場之、一大師。</l

輪王位置影雪山六年苦行以成正覺爲人天師其

實久遠劫來廣修福慧故曰三千大千世界無有如

汝雖出家然猶未聞出世之行昔吾釋迦本師捨金

數喜而示之日

沒溺貪欲苦海畢造生死苦業長劫沈淪無由自出 化十方莊嚴佛土以成淨土之淨業除此二行無可 般若了悟自心以出生死之苦海次要廣行衆行曹 佛心此名為慧廣修檀度莊嚴成就衆生此名為福 悲心是行佛行者忍辱心是佛家事者廣行六度成 修者然佛言教化衆生即是莊嚴佛土以大地衆生 所言福慧二嚴者以志悟般若種子了達自心妙契 是為賊人盗佛袈裟自滋苦本如此出家有何利意 名雖出家實資三途之苦具耳所謂體佛心者大慈 故感三界三途之苦具所賴三餐爲福田以種般若 故曰福慧兩足稱二足尊故今勸禪人第一要志求 就二殿建立三竇宏揚法化是若不如此非佛弟子 消受哉苟不思報佛恩體佛心行佛行理佛家事則 **题如東涕哑非一劫二劫乃至無量劫來世世生生** 受用由是觀之吾徒出家衣食現成安居受用登易 弟子一鉢盂飯皆是如來身命骨血換來留與兒孫 如此苦行方繼博得相好身土微妙莊嚴即今末法 芥子許不是菩薩捨身命爲衆生處至若施頭目腦

整山老人夢遊集卷第五

整山老入夢遊集卷第六

者 福 善

日錄

人 通 烱 編輯

門

嶺南弟子 劉起相 重較

示歸宗堅音慈長老行乞莊嚴佛土

建初也未幾果感 今上賜卸藏以鎮山門時則舍避稅生死不知其幾是知茲山之靈誠震旦之祗桓經元之鷺嶺也法運遷訛與時升降以致琳宮梵字。感枯樹迥榮兆亦奇矣於是有弟子法湛果公志存認枯虧迥榮兆亦奇矣於是有弟子法湛果公志存認 超過雪圖鼎新堅强不拔之願如康會之求舍利於經前也未幾果感 今上賜卸藏以鎮山門時則舍

絕所仰奧懷但見殿閣莊嚴大有未備若中道而餒勝事老人於丙辰秋自南嶽來禮如來舍利瞻依奇利出現大放光明山川震吼草樹呈祥誠末法希有

越那來慈者願大而力弱是在吾徒沙門釋子之實無異皆在荒秦也豈龍神呵護之意乎以本簽心擅

大以作莊嚴況有十方昔在靈山受屬之宰官居士故勸堅音慈公發廣大心作難遭想當布五體捨四

前茅老人笑曰無庸此也法界海會蓮華藏中無邊以家業託也慈公閒說大生勇猛乞老人一語以為原王在何不普請羣集以成就勝事庶不負慈父之

無欠無餘全在一念感發之力正如彌勒樓中含攝無欠無餘全在一念感發之力正如彌勒樓中含攝無定無計算別差人之言如向閣前一輕彈指其莊嚴之力耳是則老人之言如向閣前一輕彈指其莊嚴之力。與此一個情別的人之言如何關於力。

示王自安居士捨子出家

我自日孝名為戒謂孝順父母孝順師督三竇孝順 與夏子自南岳來茲山居士訪子至以天屬至情有 長夏子自南岳來茲山居士訪子至以天屬至情有 養愈厚苦益深是累其親非眞孝也故吾佛世尊薄 全輪而不爲捨父母,棄王宮苦行於雲山六年成道 会輪而不爲捨父母,棄王宮苦行於雲山六年成道 為三界尊人天之所宗仰苟不捨至實劃大愛何以 為三界尊人天之所宗仰苟不捨至實劃大愛何以 為三界尊人天之所宗仰苟不捨至實劃大愛何以 為三界尊人天之所宗仰苟不捨至實劃大愛何以 為三界尊人天之所宗仰苟不捨至實劃大愛何以 為三界尊人天之所宗仰苟不捨至實劃大愛何以 為三界尊人天之所宗仰苟不捨至實劃大愛何以

子相度共成無上之道享不世之榮名此必得之事

可比也干丈寒巖三閒芽屋視高堂廣厦卑卑也父

繁拉急管可厭也明燈清香昏曉不斷非腥羶臭穢

参喜印印斑衣戲彩無加也水流風動經路佛號非

也其視一官之封一言之褒而不能必者又如雲泥

至道孝順一切衆生故眞學佛行者將視一切衆生。為已多生父母豈一生之親而不報乎第恐出家不知其本也今若子以志悟無生爲根地若果決其志不唯報有餘即養亦有餘也世之病謂孝者將以功名博牲鼎養以娛親也功名見制於造物牲鼎有為的養亦有餘之而改名見制於造物牲鼎有為所遇無論得之而資苦且舉世求之而未必盡得之而未必能享抑有功名而不融者亦有父母不能待為亦有待之而不樂者以其聽命而不由已也今有志於大道者求之在我享之亦在我操必得之年。 「中間能割愛又能超顯有所樂地即草衣從子於山中間能割愛又能超顯有所樂地即草本中也是若子既潛形的山谷居士亦謝塵綠從子於山中既能割愛又能超顯有所樂地即草衣不愈而錦繡甘言不易也其父子日夜惟道是念朝不愈而錦繡甘言不易也其父子日夜惟道是念朝不愈而歸繡甘言不易也其父子日夜惟道是念朝不愈而錦繡甘言不易也其父子日夜惟道是念朝

以爲若子法門劵
以爲若子法門劵
以爲若子法門劵

示靈源覺禪人

慰矣但辨肯心必不相賺切不可作二法會也
苟能持此一念三十年住山不異佛祖定為摩頂安究必拌三十年苦心今經萬部非三十年不足禪人

示斬陽宗遠庵歸宗常公

於佛若以此心觀諸四諦能斷愛染煩惱苦因高超三 於佛若以此心廣行六度攝化聚生不見有生可度 於佛若以此心觀諸四諦能斷愛染煩惱苦因高超三 於佛若以此心觀諸四諦能斷愛染煩惱苦因高超三 於佛若以此心觀諸四諦能斷愛染煩惱苦因高超三 於佛若以此心觀諸四諦能斷愛染煩惱苦因高超三 於佛若以此心觀諸四諦能斷愛染煩惱苦因高超三 於佛若以此心觀諸四諦能斷愛染煩惱苦因高超三 於佛若以此心觀諸四諦能斷愛染煩惱苦因高超三 於佛若以此心觀諸四諦能斷愛染煩惱苦因高超三 於佛若以此心觀諸四諦能斷愛染煩惱苦因高超三

法不了自心一味真實更要別求予妙如此用心不 底絕無眞實受用及有志參究向上事不知本來無 教隨機施設皆是假名引導衆生元無實法與人也 皆一心之影響道是假名則知佛所說三乘十二分 成地獻種子豈不哀哉老人嘗謂學人直貴眞實用 唯正眼不明抑且墮落外道邪見名雖學道不知翻 言直指早是曲矣末法學人不遂自心專向外求到 來單傳心印亦是方便所言直指人心見性成佛若 也不唯佛是方便即末後拈華迦葉微笑及達磨西 見非正法也若了此心則知三賢十聖及一切衆生 此心外別有一法可說也若心外有法是爲外道那 種種方便皆爲開示此心不是更有異法爲衆生說 途劇報則運至三惡道中是故佛說三界唯心除此 運至諸天若迷此一心态殺盜婬斷佛種性則感三 至梵天能修十善斷上品惡則感六欲諸天境界則 此心精修然行四禪八定則是四聖四禪境界則運 界證寂滅樂如此便是二乘境界則運至三 心無片事可得唯此一事更無餘事故說一乘非

心自淨煩惱蓄氣業識種子破得一分業識便置一分佛知見達一分佛境界動得十分業識便是十分佛境界與有心外別將巧法逗廣將來可為佛境界。其但有假名便是真實工夫直須一切處不迷如此法但有假名便是真實工夫直須一切處不迷如此法但有假名便是真實工夫直須一切處不迷如此法但有假名便是真實工夫直須一切處不迷如此

示古愚拙禪人

古愚禪人自浮梁來多金輪請益做工夫老人因問汝日用如何用心答云作唯心觀又問汝作觀時還沒用如何用心答云作唯心觀又問汝作觀時還見有境否答曰到這裏總不見有境老人日既不見見有境否答曰到這裏總不見有境老人日既不見見,就唯心是以知見做工夫其實未達唯心已分別即不生汝於現前境界還生心如此禁硬設唯心民分別即不生汝於現前境界遺生心如此禁硬設唯心民別即不生汝於現前境界遺生心如此禁硬設唯心境界古心乃忘所未忘能故心境不得混融是名智礙況未心乃忘所未忘能故心境不得混融是名智礙況未心乃忘所未忘能故心境不得混融是名智礙況未心乃忘所未忘能故心境不得混融是名智礙況未

無出頭分 無出頭分 無出頭分

示袁公寥

候子見其所賦骨奇性敏但習重而氣高故但任習 標逐逐而不返地所謂百姓日用而不知苟能自求 情逐逐而不返地所謂百姓日用而不知苟能自求 行逐逐而不返地所謂百姓日用而不知苟能自求 一一日香有有豪傑之士塞情而復性則聖可期而 一一日香有有豪傑之士塞情而復性則聖可期而 事業當垂不朽矣佛之十戒孔之四毋禪之一心皆 事業當垂不朽矣佛之十戒孔之四毋禪之一心皆 事業當垂不朽矣佛之十戒孔之四毋禪之一心皆 事業當一不好矣佛之十戒孔之四毋禪之一心皆 事業當一不好意。

参三下古本

於爽口也於爽口也

大慧專教看話頭下毒手只是要你死偷心耳如示 則也不如此下手決不見自己本來面目不是教你 行此正是莲磨外息諸緣內心無喘心如牆壁的規 頭如斬亂絲一斯齊斯更不相續把斷意識再不放 簽無可奈何故將一則無義味話與你咬定先將一 繼極力主張教學人参一則古人公案以爲巴鼻謂 梁云参禪惟要虚却心把生死二字貼在額頭上如 在公案語句上尋思當作疑情望他計 切內外心院妄想一齊放下因放不下故教提此話 時節因緣至黃蘗始教人看話頭直到大慧禪師方 人了悟自心識得自己而已向未有公案話頭之說 中無量劫來惡習種子念念內熏相續流注妄想不 人回頭轉腦便休即有不會者雖下鉗錘也只任他 及南嶽青原而下諸祖隨宜開示多說疑處蔵擊令 之話頭要人切切提撕此何以故只爲學人八識田 祖第一示人参究之的訣也是知從上佛祖只是教 傳心印之的旨也及六祖南還示道明云不思善不 思惡正恁麼時阿那箇是明上座本來面目此是六 分曉也即 如

作機鋒迅捷想著幾句沒下落胡言亂語稱作項古 想和見網中如此多禪豈不瞎却天下後世人眼睛 是你自己妄想中來的幾晉夢見古人在若是如今 屬呈頌就當作奇貨便以爲得了正不知全障在妄 意根下妄想流注不行就在不行處看取本來面目 滋味時如撞牆壁相似到結交頭如老鼠入牛角便 子還有佛性也無州云無只管向個裏看來看去及 今之少年蒲團末穩就稱悟道便逞口嘴弄精魂當 上求求來求去忽然想出一段光景就說悟了便說 自己不是向他立妙言句取竟令人多禪做工夫人 華發明豈從他得耶如上佛祖一一指示要你多究 不是教你向公案上尋思當疑情討分曉也如云心 老人尋常慣用的鉗錘其意只是要你將話頭堵截 見倒斷心要汝辦一片長遠身心與之撕挨驀然心 人都說看話頭下疑情不知向根底究只管在話頭 華發明照十方利一悟便徹底去也此一上是大點 坐時臥時與朋友相關酢時節時間時學個話頭狗 欠人萬貫錢廣相似畫三夜三茶裏飯裏行時住時

三寸子何不道山擬開口師便一燒打落水中山線 計以此足見依話頭起疑其疑不在話頭要在根底 也只如夾山参船子問云垂絲千尺意在深潭離鉤 門瓦子只是驗開門要見屋裏人不是在門外做活 疑佛是誰只消聽座主講阿彌陀佛名無量光如此 佛的公案但審實念師的是誰不是疑佛是誰若是 若疑情破了則佛粗鼻孔自然一串穿却只如看念 上船師又云道道山擾開口師又打山大悟乃點頭 則語心者如麻以栗疾苦哉苦哉古人說話頭如說 便當悟了作無量光的偈子幾首來如此喚作悟道 謂小疑小悟大疑大悟不疑不悟只是要善用疑情 謂得可不懼哉其多禪看話頭下疑情決不可少所 鈍根人與你今人是草鞋也沒用處增上慢人未得 團趙州三十年不護用心似這般比來那古人是最 人悟道這等容易則古人操履如長慶坐破七箇蕭 是古人快便善出身路也在昔禪道盗時處處有明 夾山在鉤線上作活計船子如何捨命爲得他 三下師日竿頭級線從石弄不犯清波意自殊若是 此便

示董智光

高明達士自有以正之

莫造新殃佛爲業重衆生開懺悔一門最是出苦方 深重顯末出苦之要用何修習以滅罪您老人因示 深重顯末出苦之要用何修習以滅罪您老人因示 門頃參老人於雙徑願受優婆塞戒且自發露罪業 門頃參老人於雙徑願受優婆塞戒且自發露罪業 曹生斯張生長富貴之室早發求出生死之心葢夙 只怕覺遲覺照稍遲則被他轉矣若能於日用起心 處一念斬斷則舊積業根當下消除所謂不怕念起 惡業從此而生今欲舊業消除先要發起大智慧光 照破無明不許妄想萌芽潜滋暗長若能於妄想起 明水而灌溉之令此惡種發現業芽是爲罪根一切 世世以妄想心造種種業業習內積八識田中以無 乃諸業之因也此何以故由無始來迷自不心生生 本來清淨不被妄想顛倒所使則諸榮無因以妄想 眼看來諸願倒狀登可得耶即今現在無明夢中如 何能得消舊業須是以智慧光照破無明的信自心 **齊在無明夢中隨妄想顛倒造種種業自取語菩醒** 衆苦難堪及王醒來求夢中事了不可得是故衆生 隨妄想轉如人熟睡作諸思夢種種境界**區兩**佈畏 造種種業安安三界生死之苦是皆無明不了自心 平等本來無染亦無生死去來之相但以最初不覺 迷本自性的競無則因無明故起諸妄想種種顛倒 金寶相是為正行此外皆助方便也衆生自姓與佛 更居日衆軍如霜藍慧日能消除若欲鐵與者端坐

與勝力不能敵者在普佛有明顯若修行人智氣不 出世亦無懺悔處此在自力非他力可代也若惡智 是舊業消滅時也捨此一著便向心外別求則諸佛 肯著實提斯敢不能敵妄想耳若敵得妄想消處便 以此話頭如日輪當空無幽不照貝恐心力懈怠不 話頭一拶與當下粉碎一切妄想自然掃踪滅跡矣 此一事更無餘事如此用心纔見妄想起時說將此 中如三命展更不放給一切動靜開忙去來坐立唯 竟是誰如是隨提隨審並不放空將此疑團橫在胸 力提起一整佛號橫在胸中即更審究還念歸的學 則古德有数學人參究即將念佛審實公案正當著 照三珠若自心煩惱矗重無明確處不自覺知如此 此心又何妄想可容積柔可寄耶如此用心是名觀 處窮死了無生起之相看來看去畢竟不可得久久 純熟則自心清部無物無物之心是爲實相若常觀 除地若畫夜不給動動觀察不可放行但就妄想生 日能將於以無明黑暗唯智慧能被是調智慧能消 動念定念念於察念念消滅此所謂衆罪如霜露慧

業障出生死之時節也 業障出生死之時節也

示聞汝東

老作知識手

示徑山堂主幻有海禪人

佛祖一心教禪一致宗門教外別傳非難心外別有

應處如經云一切煩惱應念化成無上知覺如此便

及祖師予妙語句當作自已知見必要參究做到相 教印心終落邪魔外道但不可把佛說的語言文字 邊事豈可便以爲得耶今無明眼知識印證若不以 先解本無凡聖不屬迷悟是爲見地依此多究當人 在所呵何其毀教謂不足取耶今葉教多禪者果能 教週心者不能忘知絕解提話頭不能忘情絕跡皆 解也斯則禪呵知解而教末常不可也今多禪人從 解耳多禪順破無明是絕凡情心治亦吐却是絕望 了不可得豈二法耶是知教說一心所多者凡情聖 界及出世三乘之法也以無所得故得菩提與覓心 不可得六祖云本來無一物即般若無五蘊根塵識 但佛說一心就迷悟兩路說透宗門直指一心不屬 耳今参禪人動即呵教不知教詮一心乃禪之本也 迷悟生死了不可得此豈屬迷悟耶二祖云覚心了 迷悟要人悟透其實究竟無二如來藏中求於去來 一念若存絲毫情見及予妙知解總是未透皆生死 法可傳紙是要人難却語言文字單悟言外之旨 是原悟的樣子不得將煩惱習氣夾囊知見當作妙 居地亦不是則有只是消盡煩惱習氣夾囊知見當作妙 實時行履處豈不見夾山未見船子時上堂有僧問 如何是法身山云法身無相又問如何是法身山云法身無相又問如何是法身山云法身無相又問如何是法眼山死 是法眼山仍曰法眼無瑕僧囘舉似道吾吾云這藝 是法眼山仍曰法眼無瑕僧囘舉似道吾吾云這藝 是法眼山仍曰法眼無瑕僧囘舉似道吾吾云這藝 是法眼山仍曰法眼無瑕僧囘舉似道吾吾云這藝 是法眼山仍曰法眼無瑕僧囘舉似道吾吾云這藝 是法眼山仍曰法眼無瑕僧囘舉似道吾吾云這藝 是法眼山仍曰法眼無瑕僧囘舉似道吾吾云這藝 是法眼山仍曰法眼無瑕僧囘舉似道吾吾云這藝 是法眼山的母法身山仍曰法身無相又問如何 是法眼山的母法身上一路且看夾山 一下藏地高声在基處這裏定當得出管取教意祖意一 一下藏地葛藤不少珍重珍重

示徑山西堂靈鑒智禪人

又何有刹那之可見若見有剎那則非悟無生今何為愚者說古德云悟無生者方見剎那然旣悟無生承教有言一切法不生我說剎那義初生即有滅不

云悟無生者方見利那是則無生利那一耶異耶佛依不生說利那則非異矣祖師云悟無生者方見利那則所悟淨除現業流識是名爲修然流識者關徵即以所悟淨除現業流識是名爲修然流識者關徵。 一整語頭雖云著力而徵細生滅流注潛行如石壓草提話頭雖云著力而徵細生滅前得無生明矣今參釋 是語頭雖云著力而徵細生滅流注潛行如石壓草 提話頭雖云著力而徵細生滅流注潛行如石壓草 提話頭雖云著力而徵細生滅流注潛行如石壓草 是話頭雖云著力而徵細生滅流注潛行如石壓草 學話頭雖云著力而徵細生滅流注潛行如石壓草 學話頭雖云著力而徵細生滅流注潛行如石壓草 學話頭雖云著力而徵細生滅流注潛行如石壓草 學話頭雖云著力而徵細生滅流注潛行如石壓草 學話頭雖云著方而後見則世尊依利那而說無生 又爲剩法矣西堂飽餐教養今葉所暫單提向上一 對於此試定當看但不可作義理和會亦不可向意 解中求能於一念利那中顧見無生則佛祖鼻孔一 串穿却

示知希先山主

示之日此事人人本無欠缺圓滿具足所以日用不提向上一路吊影雙徑適老人來因拈香請益老人出主久棲講肆從少林參諸祖機緣今盡屏所習單

是難拔今又新熏言教文字祖師公案種種知見 具為味却自己向他取覓耳以積生煩惱習氣名煩 長為來的上事先要將從前所學一切文字語言予妙 多究向上事先要將從前所學一切文字語言予妙 意理名為்養毒盡情吐却單提本多話頭重下疑情 道理名為்藥毒盡情吐却單提本多話頭重下疑情 道理名為்藥毒盡情吐却單提本多話頭重下疑情 是獨家第一條路也若心不得別外不得入前後際 新斯妄想煩惱根源使內不得出外不得入前後際 表用力不得處一觀觀定看他畢竟是個甚麼看來 去用力不得處一觀觀定看他畢竟是個甚麼看來 去用力不得處一觀觀定看他畢竟是個甚麼看來 去用力不得處一觀觀定看他畢竟是個甚麼看來 去用力不得處一觀觀定看他畢竟是個甚麼看來 去用力不得處一觀觀定看他畢竟是個甚麼看來 去用力不得處一類觀定看他畢竟是個甚麼看來 去用力不得處一類觀定看他畢竟是個甚麼看來 去用力不得處一類觀定看他畢竟是個甚麼看來 去用力不得處一類觀定看他畢竟是個甚麼看來 去明力不得處一類觀定看他畢竟是個甚麼看來 去明力不得處一類觀定看他畢竟是個甚麼看來 去明力不得處一樣路也若心不肯死疑不切當則千生 百劫終在途路耳山主但將精神收向此中管取他 日得處定不是之乎者也可到萬萬勉之

示嵩璞恩山主

切放下絲毫不存單提一則公案話頭如趙州狗子古德教人參禪做工夫先要內脫身心外遺世界一

實念佛的是誰隨舉一則橫在胸中如金剛王寶劍實念佛的是誰隨舉一則橫在胸中如金剛王寶劍縣一切思慮妄想一齊斬斷如斬亂絲內不容出外將一切思慮妄想一齊斬斷如斬亂絲內不容出外縣一切思慮妄想一齊斬斷如斬亂絲內不容出外縣一切思慮妄想一齊斬斷如斬亂絲內不容出外縣一切思慮妄想一齊斬斷如斬亂絲內不容出外歷去說到心如牆壁一般再不容起第二念纔有妄是得力處如此靠定一切行住坐臥動靜閑忙中咬是不關決不放捨乃至睡夢中亦不放捨唯有一念是不過。是當人命根如有氣死人相似如此下毒手撕挨方是個參禪用工之人用力極處不計日月忽然於無得力時也山主有志向上事當以此自勉實和佛性也無州云無或萬法歸一一歸何處或審

示乘密顯禪人

作是觀時無我我所無動我者無作爲者去來坐立觀動作如機關木人觀聲音如谷響觀境界如空華學人日用觀四大如影觀目前如夢事觀心如急流

無起無止應念無生是名入無諍三昧

示墨衍宗禪人

之日古人云不實子行履只實子見地所言行履者 增夢耳今參禪之法無別妙訣直是打破夢想顕倒 是謂無中生有宣賞法耶但凝人顛倒執為實有此 夢中苦樂等事宛然現前及至覺來求之了不可得 別造種種業譬如醒人無事而忽於睡中作種種夢 則越操失旨故參學之士以見地爲先所言見地者 趣進工夫也見地者了遠自心爲行本也行本不明 妄不有則知佛法破妄想者亦本非有佛法是藥妄 若了知本無的信自心清淨無物則達妄想非有了 乃見不徹也及佛出世說種種法乃破夢乙具耳亦 立但因無始無明自蔽妙明故起種種頭倒妄想分 乃的信自心本來清淨了無一物不獨凡情聖亦不 多死有日末有所入遇老人王雙徑拈香請益因示 宗禪人少遊讚肆習性相義久之以不見自性起發 想是病若藥病不立則本體安然如此則知藥病皆 無本也而學佛法者又執爲已實有之法此乃夢中

毒藥禪人能信之乎當於一法不立處參買以毒去毒若知本無物則參之一字又下一毒也謂以毒去毒若知本無物則參之一字又下一毒也,

示顧山子

予居雙徑之寂照居士顧山子來參扣其業日事形态, 家次至化城因指點山水談造化之精妙超乎形氣。 蓝得其精而遺其亞者因語之謂嘗見悟一篇是篇 乃予門生周子所述予嘗序之日一乃萬物之本造 化之蘊也故曰天得一以清地得一以事聖人得一 以爲天下正正則不滑於邪而固其本也然人與物 理與氣心與形均一也一得而衆理歸之語云識得 一萬事畢故吾徒參予之士必曰萬物歸一一歸何 之過也居士既能觀天地造化之歸一而不識身心 性命之歸一是知二五而不知爲十也苟知性命之 歸一則萬化備在於我矣可不務哉

譚生根器最利蓋從夙習般若中來然般若乃衆生

汚習氣及至今生聰慧明利而人不知返將利根聰 氣有厚薄之不等耳其利根者因久習般若淨除染 佛性各各具足而根有利鈍之不同者良由五慾智

時有出塵志且日我至某時待世事了畢即去學道 明作染污惡智之資是名顛倒也以般若內熏故時

緣境界由抱未來高尚之志親爲不足爲亦不屑爲 此等見識舉世皆然以有將來之念故目前種種應

中京發起

光陰及至將來未必可如初志也且又心不檢細行 品耳而自己將目前放過世出世閒二者俱失虚送 以此虚想返增貢高我慢之心謂他人無此心皆庸

涯不缺可不愧哉聖人教人不躐等故曰素位而行 有志氣返不若三家村裏田舍爾他無別想歲歲生 情存鹵莽以我見作高明此尤誤之甚也如此喚作

染汚的現前行將去若目前時時刻刻不放過則將 切切仔細就規矩上做將去將一片眞實心學道不 老子日跨者不行惟今既有此向道之志就從今日

> 來不脫空若目前以虚想空頭且待將來是涉河水 **拌而止渴也豈不愚哉譚生請直看目前不虚放過** 一著便見平生下落

示曹士居

感如是遇境逢緣如鏡現像無一物可動於中矣此 凡民日用不雖見聞覺知而聖人亦然其用旣同而 之知若見本有之知則一切聲色貨利了然不被所 有聖凡之別者在知與不知之閒耳故日百姓日用 入道之要門也 而不知學人復聖工夫只在日用不知處求其固有

示馮延齡

定不容他起當不起處則當處消滅消滅時更不相 靈則觸境境不牽心觀心心不附境心境不到則生 續如此用心念念不放過心心不昧其知自靈知若 是生死苦根發心要斷更無他術只是起時就照見 學人向道第一要怕生死大要知生死很生死根者。 即日用現前種種憎愛取捨我慢貪瞋癡業是既此 死無容寄矣如此用心不必別求立妙

はいして日本年と言うい

示寒灰奇小節住山內長

揮又云良由取捨所以不如若不如則窮盡十方無 來得軍提向上一路少有把鼻但欠因地一聲耳談 老人來雙徑見奇氣雖弱而心力更强以向十餘年 役非一日矣今以老病覓大休歇場意卜之無當也 況汝隨本師願輪刻經於寂照開山皆汝用命之地 肯放下處便是休歇地耳又何從他覓哉古德云不 及歸休地老人示之曰盡大地是寂滅場唯在學人 染依老人數載以刻大藏因緣復歸本師執勞此大 未忘非觸病也以淨法界中佛祖衆生大家有分獨 即汝放捨身命處也老人知汝不能放捨者乃我見 無卓錐畢竟以刻大藏因緣故得埋骨與大慧同坑 **禪師亦歸宿於此即汝本師和尙脚跟遍海內立足** 可休之地矣老人觀雙徑乃八十八祖說法地大慧 種取捨故頭頭障礙三租大師云至道無難唯嫌揀 雜貫有立處立處即員良由自心生滅一向循情種 奇先體達大師求出世法師許可令參老人爲之華 我見者不能入若見有我則視佛祖皆是人相人與

何向上可求耶何向上可求耶

示石鏡一禪人

古人為生死大事不明走向山中吊影單棲專為宪古人為生死大事不明走向山中吊影單棲專為完古人為生死大事故云大事未明如喪考妣不是養賴圖明已躬下事故云大事未明如喪考妣不是養賴圖巴命根古人三十年不獲用心正是此耳若今住山已命根古人三十年不獲用心正是此耳若今住山中高處當悟的道理消遣日子如此只是一個蓋賴的凝漢如何喚作住山道人不唯唐喪光陰抑且虚的凝漢如何喚作住山道人不唯唐喪光陰抑且虚的凝漢如何喚作住山道人不唯唐喪光陰抑且虚的凝漢如何喚作住山道人不唯唐喪光陰抑且虚

古德云三途地獄受苦者未是苦也何袈裟下失却 山畢竟要計個下落方不負百劫于生一遇之勝緣

憨山老人夢遊集卷第六

人身誠為苦也可不念哉

心山老人夢遊集卷第七

温 善

日錄

則彼妄想自然掃踪絕跡矣此是初心下手做工夫

只數見便撤過一撇便消急急提起話頭深深看觀

對將心要斷他亦不得將心止他亦不可相續他但

疑情得力則妄想不起若纔見起時切不可與之作

侍

涌 畑

門

劉起相 重較

嶺南弟子

示太素元禪人

法語

識中有新熏文字模毒習氣舊熏貪瞋擬愛煩惱習 凡學人先習教乘迴心向上一路雖是有志無奈藏

氣內外交攻最難打量要放放不下要斷斷不得要 止止不住因此要提話頭如水上葫蘆過捺不下只

管與之打交滾最是難下手及下手不得便打退鼓 了也如此乃是沒志氣無力量人說甚多禪如今初

> 當奇特但從此好用功耳禪人東教從禪初心最難 故以此示之切不可視作小事

年化城乃刻大藏地為海內法窟禪人力任常住網 禪人出家浮渡久執侍澹公得任持法門居化城有 開示一切衆生佛之知見令其悟入所言佛知見者 老人因示之日佛爲一大事因緣故出現於世所謂 維百務老人適來雙徑禪人作禮請益願持法華經 乃衆生本有之佛性也今被無明封懿而爲妄想知 示恒河智禪人持法華經

話頭如趙州無字橫在胸中因甚道無重下疑情若 放下放了又放放到無可放處方樣提起一則公案 心只管將心內外一切道理知見及妄想思慮一齊

- 89-

力妄想暫歇時便得一念歡喜也得些歡喜處不可

的訣若話頭純熟妄想自稀不作障礙久久疑情得

見故日用見聞知覺隨情造業以取生死之苦不自 覺知我釋迦大師特特出世一番單為開示此事使 之悟其本有不假外求若悟此本有則日用六根門 如見叱若悟此知見則頭頭法法皆真實用心凡一 切動用諸行皆真實妙行都為成佛真因矣故經云 乃至攀一手或復小低頭乃至一香一華以此供養 捨命為法豈非成佛之真種乎吾佛教人持法華經 老不忘如此則六萬餘言字字光明現於六根門 頭疾若不入此法門鄉軍持安樂行品念念思推心心願入 是禪人能奉如來三者之教乃名真持經人若不能 是禪人能奉如來三者之教乃名真持經人若不能 是禪人能奉如來三者之教乃名真持經人若不能 是禪人能奉如來三者之教乃名真持經人若不能 是禪人能奉如來三者之教乃名真持經人若不能 是禪人能奉如來三者之教乃名真持經人若不能 是禪人能奉如來三者之教乃名真持經人若不能 是禪人能奉如來三者之教乃名真持經人若不能 是禪人能奉如來三者之教乃名真持經人若不能

示王鹿年丁巳元旦六日

響家豈真持經者耶若不信老人更當請問文殊獨

王生鹿年生長淮西來體徑山謁老人乞語老人見其貧義氣而有慈心因謂之日子聞之古有大力之人乎敢人者愚敵已者智愚者常獨智者常勝之道心聖人教人以不用爲用故日柔勝闡歸勝與易日剛而能柔,古之道心質羽拔山睾聯力雄千古及敗別處姬噓唏泣數行下是能敵人而不能敵已者也則處姬噓唏泣數行下是能敵人而不能敵已者也則處姬噓唏泣數行下是能敵人而不能敵已者也則處姬噓唏泣數行下是能敵人而不能敵已者也則處姬噓唏泣數行下是能敵人而不能敵已者也則處姬噓唏泣數行下是能敵人而不能敵已者也則處姬噓唏泣。

示在顧侍者

念佛審誰字公案教其參究顯亦能頒荷第恐無決心送命體濟和尚不問苦法華髮為沙彌老人來雙心送命體濟和尚不問苦法華髮為沙彌老人來雙心遊命體濟和尚不出苦法華髮為沙彌老人來雙經顧充侍者日夜精勤無怠老人初憐其蠢蠢時時激發顯時聞老人開示衲子亦眉閒津津動色是知激發顯時間老人開示衲子亦眉閒津津動色是知激發顯時間老人開示衲子亦眉閒津津動色是知激發顯時間老人開示衲子亦眉閒津津動色是知為發顯時間老人開示衲子亦眉閒津津動色是知為發顯時間老人開示衲子亦眉閒津津動色是知

若立志不堅用心不切別起邪思不但辜負此生即 技趣團即二三十年不悟不休縱今生不悟將作勝 也疑團即二三十年不悟不休縱今生不悟將作勝 也疑團即二三十年不悟不休縱今生不悟將作勝 也疑團即二三十年不悟不休縱今生不悟將作勝 一点畫夜六時緊

示在介侍者

業相老人全身荷員大法欲建法門中奥之業故刻力別大藏經此一段大事因緣非小小也末後全付域之功又非小小化城復非一手一足之力侍者在城之功又非小小化城復非一手一足之力侍者在城之功又非小小化城復非一手一足之力侍者在城之功又非小小化城復非一手一足之力侍者在大難心嘗謂世人未有無所為而樂用者即古豪傑皆然況其他乎漢高帝天下既定功臣未封忽見沙中偶諸問子房子房日此從兵戈中胃矢石經萬死中偶諸問子房子房日此從兵戈中胃矢石經萬死中偶諸問子房子房日此從兵戈中胃矢石經萬死中偶諸問子房子房日此從兵戈中胃矢石經萬死中偶諸問子房子房日此從兵戈中胃疾者初心無他即封之此古昔用人之格也今親介侍者初心無他即封之此古昔用人之格也今親介侍者初心無他即封之此古昔用人之格也今親介侍者初心無他即封之此古昔用人之格也今親介侍者初心無他即封之此古昔用人之格也今親介侍者初心無他即封之此古背所及

亦有三尺在也愼之哉。本如來法持如來戒行如來事萬一破戒壞法如來而賞之也介侍者即以老人得如來之大賞若不能可以必不之實

示在淨沙彌

無限記言和。 一切不善心皆是自心之委曲相也今要發心只須 一切不善心皆是自心之委曲相也今要發心只須

可作等閒輕意放過 阿作等閒輕意放過 可作等閒輕意放過

示性田徒海耕行者

歷觀古之豪傑涉艱難困苦操長遠不退之志者桑不多見其人若晉五臣從重耳亡在外十九年無息 名利牽心故忘身從事古今世人之常情也若田道 名利牽心故忘身從事古今世人之常情也若田道 人者從達大師二十餘年寢食俱廢一息未嘗少忌 小有過差痛實重被居常兩腿如墨竟不起一怨心 中竟何所圖乃能精進堅强不拔如此哉由是觀之 中竟何所圖乃能精進堅强不拔如此哉由是觀之 中竟何所圖乃能精進堅强不拔如此哉由是觀之 較古忠臣義士所絕少者今於道人見之矣及死得 較古忠臣義士所絕少者今於道人見之矣及死得 較古忠臣義士所絕少者今於道人見之矣及死得 較古忠臣義士所絕少者。

爲名曰海耕亦法門功臣世業之券也豈小綠哉血戰何以有此臨終以此卷付其徒朱道人今澹公

示朱素臣

外事自然無擾道力自强工夫必易就耳不讀書時多被無端妄想擾亂若就閑時能攝心一不讀書時多被無端妄想擾亂若就閑時能攝心一處把斷妄想不行心心在道念念不忘如此則學道處把斷妄想不行心心在道念念不忘如此則學道處把斷妄被無端妄想擾亂若就閑時能攝心一

示沈止止

道不欲雜雜則多多則擾擾則憂憂則不入古云學 道志當歸一吾所謂一者一其志耳今既知參究功 道志當歸一吾所謂一者一其志耳今既知參究功 養則生厭厭則但有求閒之心無念道之心矣心志 愛則生厭厭則但有求閒之心無念道之心矣心志 靈則生厭厭則但有求閒之心無念道之心矣心志 。 學則生厭厭則但有求閒之心無念道之心矣心志 歸一則百事可做凡用心處只在念頭起處著力起 歸一則百事可做凡用心處只在念頭起處著力起

向外馳求即禮佛持死也只在一念信力上做總之則盡此生無入道之時也沈生但就一念上做不必手便覺省力若捨此更待閑時靜時方做工夫如此

示澹居鐵公

種種方便皆是攝心之法耳

古之忠義之士非有大力不足以任大事力有心力有氣力語云志至焉氣次焉又曰持其志無暴其氣以形太勞則枯精太勞則竭神太勞則歇莊周言以以形太勞則枯精太勞則竭神太勞則以莊陽無涯殆已已而爲知者殆而已矣此言過用而不知所養也故老氏曰治人事天真若會會者有而不知所養也故老氏曰治人事天真若會會者有不知所養也故老氏曰治人事天真若會會者有不知所養也故老氏曰治人事天真若會會者有人任 表來於六塵之境久而遂勞謂是故也是知古人任 表來於六塵之境久而遂勞謂是故也是知古人任 表來於六塵之境久而遂勞謂是故也是知古人任 表來於六塵之境久而遂勞謂是故也是知古人任 表來於六塵之境久而遂勞謂是故也是知古人任 表來於六塵之境久而遂勞謂是故也是知古人任 表事者未有不以有餘而不暇顧其形之易瘁也今也有形之以其志有餘而不暇顧其形之易瘁也今也有形之以其志有餘而不暇顧其形之易瘁也今也有形之以其志有餘而不暇顧其形之易瘁也今也有形之以其志有餘而不暇顧其形之易瘁也今也有形之。

而至公必有以自處也何如則力全而任有餘未盡之業猶千里之行以豐息而道生也以公生平所學以明心爲格若心廣而形

要知愛是生死根本而今念佛念念要斯這愛根即 時畢竟主張不得故數念佛人第一要知爲生死心 **曾一念放得下直如正念佛時只說念不切不知愛** 如全身在火坑中一般不知正念佛時心中愛根未 無一件不是愛的則無一事無一念不是生死活計 得晚之晚矣所謂目前都是生死事目前了得生死 切實因此不得力若目前愛境主張不得則臨命終 是主宰念佛是皮面如此佛只聽念愛只聽長且如 日用現前在家念佛眼中見得見女子孫家緣財產 念是了生死之時也何必待到臘月三十日方纔了 切要斷生死心切要在生死根株上念念斬斷則念 得生死以愛縁多生智熟念沸纔發心甚生疎又不 愛麼果然斷得這愛麼若斷不得這愛畢竟如何了 **見女之情現前時回光看看這一聲佛果能敵得這** 空如此念念真切刀刀見血這般用心若不出生死 則諸佛墮妄語矣故在家出家但知生死心便是出

生死的時節也豈更有別妙法哉

示雲棲侍者

力却怨念佛無靈驗靜之遲矣故勸今念佛的人先

臨命終時只見生死愛根現前那時方知佛全不得

大師未入滅時前十九年起居食息侍者日夜屬庭 凡一切密行無不觀。一切數言無不聞一切廳機無 不達一切心事無不知是則大師之全身色相音聲 者之真知實見者也即今大衆人人見大師滅度只 者之真知實見者也即今大衆人人見大師滅度只 者之真知實見者也即今大衆人人見大師滅度只 情者獨不作滅度想耳未法修行淨土都要說想彌 陀妙相以未得親見面目即想亦不真要閱彌陀說 已久豈可忘却大師又向他家求佛法開示我謂侍 已及豈可忘却大師又向他家求佛法開示我謂侍 是彌陀出現時也纔有一念忘却便是預恩德入生 死之時老人無法可說但以大師全身安向汝心中 死之時老人無法可說但以大師全身安向汝心中 死之時老人無法可說但以大師全身安向汝心中 不可吐却便是我老漢隱身三昧也汝諦思之

示等愚侍者

生故毗盧以普賢爲身普賢以衆生爲身若以衆生

爲心是爲荷擔如來矣公試觀予言以印證其心若

所念性空性空衰滅能所兩忘是名即心成自性佛自心念佛念佛念心心佛無二念念不住能念不立

一念遺失便墮魔業

示玄津壑公

於光榛凡事一遵遺範手自行錄為師承卜遷師塔於光榛凡事一遵遺範手自行錄為師承卜遷師塔於宗鏡堂後誓不募化唯行法華懺儀堅持其願而於宗鏡堂後誓不募也所以於宗鏡堂後誓不募也所以於宗鏡堂後誓不募化唯行法華懺儀堅持其願而於宗鏡堂後誓不募之於宗鏡堂後誓不募的所以於宗鏡堂後誓不募的所以於宗鏡堂後誓不募的所以於宗鏡堂後誓不募的所以於宗鏡堂後書的表表。

之可作哉所以法華會上讚持經者日學手低頭皆 聚皆如幻夢又何有佛法之可說確道之可修萬行 身流轉五道而爲衆生是知能護衆生即護佛慧命 所以菩薩如大地心荷資來生故如檔梁心濟凌樂 子矣佛言慈悲所條綠苦衆生若無衆生則無菩提 中別自寂三輪若空則實相如如平等一照書提為 爲妙行所謂滅度無量無數衆生實無一來生可度 行皆是佛行行之妙者無踰於此如此是名真佛弟 已成佛是乃以已成之佛心作現前之衆行故一 我亦何有我人皆空中閉事業離作離受物我兩忘 是了衆生相空也然我即衆生之衆生也衆生既空 者為難然經即佛之法身慧命非紙墨文字也且法 佛弟子以能克荷其家業耳佛憂滅度之後求持經 安肯愛護衆生乎諸大乘教中皆稱能護法者爲真 故般若教菩薩法以思衆生爲第一以不住衆生相 以處剛强濁世自救不暇安能爲法門乎周身不給

見自心果於法合則法外無法如空外無空若有草丸。人我從然是非未泯捨此法門更於何處求向之是即是自心未度自不能度求甚佛祖作擔糞奴之是即是自心未度自不能度求甚佛祖作擔糞奴之是即是自心未度自不能度求甚佛祖作擔糞奴之是即是自心未度自不能度求甚佛祖作擔糞奴之是即是自心未度自不能度求甚佛祖作擔糞奴之是即是自心未度自不能度求甚佛祖作擔糞奴

示了無深禪人

知觉能免過學人用心不在一念上著力則終身參則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺自心之妄耳以此心本無一物平平貼點續有一念直的之妄耳以此心本無一物平平貼點續有一念真的之妄耳以此心本無一物平平貼點續有一念則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺則為過矣一念為過況種種惡習念念發現不自覺

怕落在立妙知見窠臼是爲黑山鬼窟繼有絲毫玄

妙知見挂在胸中或將古人言句蘊之不捨便墮外

暖柔懦粥飯氣習者何敢傍其萬一主於看話頭最

著力於本來無一物耳透別舟中貽此勉之耳禪人初參老人於徑山老人即字之日了無欲要學不能得眞實受用以用浮想綠影爲功故錯到底

示雪嶺峻禪人

及力量須是一塊剛骨方繼立得脚跟穩當若是轉門氣識量乃原習種性苟為生死心現前立志三事具足是為向道至若用心參究古人教人最初下手具足是為向道至若用心參究古人教人最初下手具足是為向道至若用心參究古人教人最初下手具足是為向道至若用心參究古人教人最初下手具足是為向道至若用心參究古人教人最初下手具足是為向道至若用心參究古人教人最初下手具足是為向道至若用心參究古人教人最初下手具足是為向道至若用心參究古人教人最初下手具足是為向道至若用心參究古人教人最初下手是沒要離過度之見處超卓先將身心世界觀過學是有一塊剛骨方繼立得脚跟穩當若是轉換力量須是一塊剛骨方繼立得脚跟穩當若是轉換力量須是一塊剛骨方繼立得脚跟穩當若是轉換力量須是一塊剛骨方繼立得脚跟穩當若是轉換力量須是一塊剛骨方繼立得脚跟穩當若是轉換力量須是一塊剛骨方繼立得脚跟穩當若是轉換力量須是一塊剛骨方繼立得脚跟穩當若是轉換力量須要可以可以表面。

作欄頭板也禪人只麼用力去他日自信老僧不欺也只須徹底打破漆桶方是真實又不可將心待悟。道那見以此中纖塵著不得著不得處便是得力時

示劉道人

汝為生死出家獨坐孤峰頂上十年於此何等真切 造不去何等忍力此必於本分事上大有得力處既 竟不去何等忍力此必於本分事上大有得力處既 能一念如此當視四大如空花水月視死生如夢幻 能一念如此當視四大如空花水月視死生如夢幻 能一念如此當視四大如空花水月視死生如夢幻 此念決不可如此認著不唯可惜自己為生死苦心 即恐令他入邪見網也

示非石玉禪人

知生死爲何物將謂與已無干膏然夜行故不得正法結生死根良由最初發心不從生死上著脚亦不法結生死根良由最初發心不從生死上著脚亦不法。是不達究竟之旨增益知見生大我慢是又以佛末法學人多尚浮習不詣眞實故於佛法教道但執

被宿習文字作所知障也老人行矣。七賢峰頭有牛獎等詳斟酌得老人言外之旨老人今歸匡廬休老真實樸素。老人東遊吳越刻稜嚴法華新疏命玉校真實樸素。老人東遊吳越刻稜嚴法華新疏命玉校真舊漢素,老人東遊吳越刻稜嚴法華新疏命玉校真然,以為此,以為於人言言句句乃出生死法豈意今人修行路且佛教人言言句句乃出生死法遗意今人

示吳江沈居士

糞火煨芋以待子其念之

我則於衆敵猶夫衆精攢空則無可寄矣有志道者我則於衆敵猶夫衆精攢空則無可寄矣有志道者 地而又愛而執之取之又愚之甚矣且將以爲資我 也而又愛而執之取之又愚之甚矣且將以爲資我 也而又愛而執之取之又愚之甚矣且將以爲資我 也而又愛而執之取之又愚之甚矣且將以爲資我 也而又愛而執之取之又愚之甚矣且將以爲資我 其不我益也故遠而避之苟避之不若忘我誠能忘其不我益也故遠而避之苟避之不若忘我誠能忘其不我益也故遠而避之苟避之不若忘我誠能忘其不我益也故遠而避之苟避之不若忘我誠能忘其不我益也故遠而避之苟避之不若忘我誠能忘其不我益也故遠而強之前後,

試從此始

示王子廟

苦是爲治身病之妙藥一切病元皆從妄想心生只 處起畢竟是誰起滅及至妄想滅時定要追察畢竟 發現直須當念著力就在起處觀察看他畢竟從何 如此時時觀察久則忽然一念覺破即不爲此身所 此血內之驅及四大分離即今此身更向何處安立 法門先須藏破身非我有但看父母未生前何曾有 根所在以水火相違四大交攻是為身病妄想攀緣 滅向何處去如此追究到起無起處滅無滅處是謂 須日用念念觀察凡一切善惡念頭起處即是病根 竟軍以覺破妄想無性爲同生妙藥學人要求安學 愛情取捨是為心病然身病藥石可治而心病則無 世人一向在幻妄身心境界上作活計從生至死未 前後不續中閒一念自孤即此一念獨立處久久純 起滅無從則心體安然得大自在如此把斷要關則 藥可治佛爲世醫王及調治衆生心病種種方便究 **營一念返覺自心本來面目由其不覺故不知其病**

解脱法門老人因請益認其名曰 福覺以其覺乃第無外得如此用心不退即此現前自心便是在言語文法不可相續佛言狂心若歇那即菩提勝淨明心本決不可相續佛言狂心若歇那即菩提勝淨明心本決不可相續佛言狂心若歇那即菩提勝淨明心本決不可相續佛言狂心若歇那即菩提勝淨明心本無外得如此用心不退即此現前自心便是大安樂縣別接門老人因請益認其名曰福覺以其覺乃第

示**族泊居士沈豫**昌

情根之難拔手居士欲入毗耶不二法門當從此入 職之固不難耳居士諦信誠能以物觀身則身易輕 視之固不難耳居士諦信誠能以物觀身則身易輕 以身觀心則心易忘以心觀情則情易折以情觀性 以異哉居士能信不疑則居家而入非家即世而能 以異哉居士能信不疑則居家而入非家即世而能 以異哉居士能信不疑則居家而入非家即世而能 以異哉居士能信不疑則居家而入非家即世而能 以異哉居士能信不疑則居家而入非家即世而能 以異哉居士能信不疑則居家而入非家即世而能

示顔福堅

> **虐名足尙哉** 名曰福堅只欲發其堅固之心所謂自求多福耳覺

示顧汝平

之時以此爲左券越二十二年丙辰長至月予自南 **柏汝平侍側即以書付之屬日執此他日必有見面** 耿孤光昭揭如日月既生不以形骸隔又安可以幽 之死也不死故今之生也非生不死不生湛然 書嗟乎法性海中聖凡出役如大海之漚起滅無從 **選生生宅因禮請益出此卷見紫栢手澤及予昔日** 嶽來雙徑赴紫稻入塔之期汝平迎予松陵至陋巷 汝平侍紫稻老人最久昔子被難緊圍中以書覆紫 明閒哉佛言觀彼久遠獨若今日不但予與繁栢如 昔紫柏視今日如眉睫子今見紫柏當日之寸心耿 是知紫柏今之死也豈真死哉手澤宛然法身常住 去來無所即死生夢幻於湛寂中了不可得且予昔 巨海之温即一切凡聖若空中電影耳汝平久入紫 之水浸透遍身毛孔耳紫栢老人或未拈及此故予 栢之室於此一際平等法門必若入大海浴使百川 。際

父母未生前著眼看觀久久當知見予與未見時無特為點破令其自信此法得大受用其或未然試向

示顏仲先持準提呪

前後際北

在家居士五欲濃厚煩惱根深日逐現行交錯於前
工夫有聰明看教不過學些知見資談柄絕無實用
念佛又把作尋常看不肯下死心縱肯亦不得力以
他在浮想上念其實藏識中習氣潛流全不看見故
他在浮想上念其實藏識中習氣潛流全不看見故
有一等好高慕異聞參禪頓悟就以上根自
不若是真實發心怕生死的不若持呪入門以先用
來若是真實發心怕生死的不若持呪入門以先用
來若是真實發心怕生死的不若持呪入門以先用
亦若是真實發心怕生死的不若持呪入門以先用
亦若是真實發心怕生死的不若持呪入門以先用
亦若是真實發心怕生死的不若持呪入門以先用

經云佛種從緣起所謂欲識佛性義當觀時節因緣是知法界以緣起為宗諦觀世出世別太有一法不是知法界以緣起為宗諦觀世出世別太有一法不是知法界以緣起為宗諦觀世出世別太有一法不是知法界以緣起為宗諦觀世出世別太有一法不是所謂不真所有擅者難得其人密藏開公東青治出家依復之而荷擅者難得其人密藏開公東青治出家依復之而荷擅者難得其人密藏開公東青治出家依處,這一世郡守蔡槐亭先生至則一旦奧起得包心並居下世郡守蔡槐亭先生至則一旦奧起得包心並居下世郡守蔡槐亭先生至則一旦奧起為一是心相印契即議欲不幸開公應去未克卒業五臺獨復大殿未有成也不幸開公應去未克卒業五臺獨復大殿未有成也不幸開公應去未克卒業五臺獨復大殿市出與豫義全土與問之之。

5世

示嘉禾梭嚴堂主

慈和可謂叢林之領袖也嘗竊悲夫五濁惡世佛事

付囑菩薩尚不敢涉此利生而況博地凡夫乎以林

潔誠幻海梵宮及見主者林公其人端莊循雅忍辱

事回過梭嚴觀其規模宏敝員歷中淨土其禪堂精

佛事大法流通即子之心光所逼也又何以不堅血状之願力以守難成不易之道場將為無窮不朽之響矣而幸有子繼之亦因緣所屬耳唯在子堅忍不傷以入皆敬皆悅之心成未圓未就之事如順風不悅以入皆敬皆悅之心成未圓未就之事如順風子之端雅故見者無不敬以林子之慈忍故歸者無

示東禪浪崖耀禪人

肉之驅而爲三實所惜乎

金沙東禪寺太史念西王公之所建也以寝崖羅公主之適聞老人有雙徑之行特專嗣南容公來請經主之適聞老人有雙徑之行特專嗣南容公來請經也山綠畢將歸匡廬長揖人世公懇留老人適至見其民臨別貽此示之曰法界性中安有去來之相耶智民 與未開情塵斯隔離合之見関心聚散之綠繫念非民華以實相為宗過去之多實現存即今之釋迦不

區區於幻化空身水月鏡像安生彼此之念耶老人相耶試觀白毫一光洞照無礙一切聖凡始終因果相耶試觀白毫一光洞照無礙一切聖凡始終因果相耶試觀白毫一光洞照無礙一切聖凡始終因果相耶試觀白毫一光洞照無礙一切聖凡始終因果相別記記,一念純真則心光交徹其無以世諦恒本月湛然荷一念純真則心光交徹其無以世諦恒本月湛然荷一念純真則心光交徹其無以世諦恒本月湛然荷一念純真則心光交徹其無以世諦恒本月湛然荷一念純真則心光交徹其無以世諦恒本月湛然荷一念純真則心光交徹其無以世諦恒本月湛然荷一念純真則心光交徹其無以世流

示王聖沖元深二生

行矣公其勉之

無以煩惱乾土投而獨之也

示孫詵白

無明生死根株只在現前一念如人周行十方盡生無明生死根株只在現前一念如人周行十方盡生限一步也是知歷劫妄想遷流生死輪轉實未離當及一步也是知歷劫妄想遷流生死輪轉實未離當假他力也佛說狂心不歇歇即菩提豈虚語哉老人假他力也佛說狂心不歇歇即菩提豈虚語哉老人假他力也佛說狂心不歇歇即菩提豈虚語哉老人

示姜養施

情根之所蒙蔽是於晦而能養則光體愈明而真元厚未易得此美質也幼稚會見紫稻大師即命之日唇光意謂性具般若之光也適參老人請益因字之后光意謂性具般若之光也適參老人請益因字之后光意謂性具般若之光也適參老人請益因字之時於現前境界愛惡關頭昏闇之中靈光獨耀不被縣於現前境界愛惡關頭昏闇之中靈光獨耀不被擊於現前境界愛惡關頭昏闇之中靈光獨耀不被擊於現前境界愛惡關頭昏闇之中靈光獨耀不被擊於現前境界愛惡關頭昏闇之中靈光獨耀不被

可自昧而不信耶但在我慢幢推則光明自露耳發現於動作云爲之閒功名建立皆不朽之盛業豈可復矣用其光無遺身殃姜生體此則廣大光明當

示衆

腋爲密行第一故爲佛長子此土前輩諸祖唯百丈

日不作一日不食遂為叢林千古典刑永明每日

供養大衆一切行門苦心操持難行能行難忍能忍 遍告同参 道再出頭來定是項天立地漢子也老人以此示之 云從緣入音相應疾如此用心三十年不敗縱不悟 若於日用六根門頭頭頭透過便得法法解脫古人 勇猛拼拾一條窮性命將這一具臭骨頭布施十方 如芥子許不是爲求菩提捨頭目髓腦處如此當發 死漢子當觀本師釋迦文佛於三千大千世界無有 真實修行虚消信施甘墮沈淪者乎若是真實爲生 端坐現成受用袖手不展一草不拈如此薄福絕無 融之資米黃梅之碓房歷觀古人無一不從辛苦中 來何其今之少年纔入叢林便以多禪爲向上只圖 慚愧之心縱有妙悟只成孤調絕無人天供養況無 百千辛苦未嘗憚勢故得光明碩大照耀今古若賴 不食之誠楊岐之事慈明二十餘年行門親操執事 案便是真實勘驗工夫處以此故有一日不作一日 看百丈侍馬祖每在田中作活如捕鍬子野鴨子公 禪門之弊一至於此諦觀從上古人決不是這等但 夢遊集卷第七

参四下古本

法語

嶺南弟子

劉起相

重較

涌

畑

憨山老人夢遊集卷第八

侍

者

福

其

日錄

示歸宗智監寺

凡衆人盡日所務有不及者視其當務必通夕不蘇 其勞以備大衆之務乎昔佛弟子千二百人獨稱羅 不攝禮誦不修甚主白晝安眠安肯終夜不寐身任 有是哉子嘗見叢林年少率無慚愧一味養懶三業 宇秀拔卓有骨氣因屬主者命爲監寺禪人善密行 山之勝因思輔弼者誠難其人衆中見禪人在智眉 荷之予丙辰夏來禮金輪舍利沿觀其寺規模甲匡 **妈身盡力竟還故物今廿餘年湛公化去弟子修慈** 歸宗爲古尊宿說法地達觀師倡緣與復旣而湛公 一一親爲料理明發則事無不辦者予嘻驢而歎日

慧二嚴一生取辦古人云移花氣螺至買石得雲饒 前三十六代祖師一齊在禪人眉毛上轉大法輪也 抹著一念疑團迸裂從前生死順然了却是可謂圖 胸中隨就作處心心参究畢竟因甚道無一旦塩著 更發精進居一切時但將趙州約子佛性話頭蘊在 生超過百劫千生矣如此乃謂不度生耳禪人從此 身受身皆造生死苦業何雪一日以此身命修出世 幸有此身發難得之志一生盡命不給本行則是 行乎若果有之則吾今生定不如此在凡夫地矣今 來捨此身骨如須彌山所飲母乳如四海水如此捨 秉如是行願二六時中念念諦思我自無始生死以 斷即是報佛深恩知恩報恩即是慈父之孝子矣旣 林即是建立三寶三寶常住即是續佛慧命慧命不 世閒福田功德心禪人能以此心放捨身命荷貧叢 故屬為天中天是知從上佛祖無有不從行門建立 干世界無有如芥子許不是菩薩給身命爲衆生處 行一百八事行故閻羅殿上圖像供養佛說三千大

示自宗念禪人

在心力强願力大不在色力健不健也今雖小恙不 之志盡自己色力量自己才能辨一片肯心任緣隨 名山諸祖說法勝道場地此萬劫難遇之緣正是饑 爲大苦若造惡業墮在三塗即求今日以小病小惱 題耐心耐煩忍苦忍勞即一日成就一種功德已勝 信老人言自今之後發堅固不退之心持勇猛剛强 逢王膳病遇醫王自當慶幸無量即盡此形壽拌捨 哉禪人今幸仗夙緣早得脫俗永雜苦海又得安居 定不似今生者頭面也回光返照猛自思惟豈不痛 議皆是虚生浪死何有一毛真實行門若有鬼行則 等廣大劫來於生死海頭出頭沒捨身受身不可思 得出生死者是以釋迦世尊歷劫勤終難行苦行我 自利不捨諸行是謂利他從上佛祖末有不由二行 之修福自利謂之修慧菩薩發心勤求無上菩提菩 薩雖知法性空寂而不捨有爲諸行知法性空是謂 佛教弟子修出世法唯自利利他二種妙行利他謂 一生空過矣禪人自說身弱神疲不能任事古人實 一生作此功德已勝百劫千生空過無益也禪人當

示陸將軍名世顯號鎮湖

慈悲即衆生之殺機古德云護生須用殺殺盡始安 於本以之獻佛則清淨以之洗穢則汚濁故佛之 於之水以之獻佛則清淨以之洗穢則汚濁故佛之 於之水以之獻佛則清淨以之洗穢則汚濁故佛之 於之水以之獻佛則清淨以之洗穢則汚濁故佛之 於之水以之獻佛則清淨以之洗穢則污濁故佛之 於之水以之獻佛則清淨以之洗穢則污濁故佛之 於之水以之獻佛則清淨以之洗穢則污濁故佛之 於之水以之獻佛則清淨以之洗穢則污濁故佛之

> 佛能如此殺生故號大雄猛世尊世人愚癡賦有雄 如來一大歡喜此釋迦老子歡人殺生之榜樣也以 居又云梵語阿羅漢此云殺賊經云與五陰魔煩惙 棄不謀可謂智乎雖然殺人則易自殺則難故云出 殺生之勇自殺其慾佛言貪懲瞋恚過於怨賊能 其愚等也將軍能囘心向上自求多驅從今日去以 大於殺生其殺人以爲功殺生食肉态口腹以爲快 佛性者哉語云一將功成萬骨枯自古罪之大者莫 地獄之苦而自以爲功多豈不爲至愚主癡倒用其 猛之佛性而不自殺其賊翻以殺人劫劫生生酬償 魔死魔共戰有大功勳滅三毒出三界破魔網爾時 家大丈夫事非將相所能爲老人葛藤至此是謂法 直求無上佛果是爲大賞其殺之利有如此者而自 施慈悲將軍信此是真懺悔 斷之是爲殺賊能破煩惱出生死苦是爲大雄以此 Ê

示慧成信首座

師乃至南嶽湖東掩關老人將卜居南嶽成破關相首座慧成中年秉妻挈子出家曾參達概蓮池兩大

三大士之行以成其身文殊智也觀音悲也普賢行 悲則盡衆生數皆爲已身凡衆生之饑寒困苦疾病 也给此三者則法身寂寥亦無寄兵故如來法身若 終身佩奉且生生世世執此願輪即往來人天周流 形壽依歸誠難捨此別求怙恃矣乃寫三大師之真 難行忍其難忍調其難調每見如來教中教菩薩法 空界盡衆生界盡衆生藻盡衆生煩惱盡我此行願 給於一衆生若言其行則盡處空徹法界無一草芥 其源底盡衆生界心念頭數莫不徹其根源若言其 言其智則微法界理事因果乃至草芥塵毛無不盡 夫本師和尚毗盧遮那法身非身以文殊觀音普賢 六趣會無厭倦乞師爲我證明之老人聞而笑日此 將謂空言今親承三大師之行履典刑現在便可盡 出生死親見三大師現身五濁惡世衞護法門行其 塵毛不是菩薩捨身命處故普賢十願一一皆言虚 痛癢乃至三途劇苦皆菩薩全身一體共受故能不 固子之深心本願雖然似矣猶未採其本也請試觀 迎遂侍巾舄 一日作禮白言某幸末法爲佛弟子志

中稻似温城温生耳若有挺特沒量大人能於毗盧 法身境界可心 是則有之何足以為師哉其無以限量心自隘如來 極未來劫劫生生下退此心亦如普賢之虚空界盡 用如由一塵以徧諸塵始一毛而融多毛從今生以 區介爾之行較三大士者又不啻奴兒婢子豈能盡 此三者如首羅三目即一即三非三非一於寂滅海 偏乃至塵毛草芥一有不徹則未盡無明以至虚空 無有弱盡是故本師毗盧邁那以此三法成就 出如幻三味逢場作戲竿木隨身說幻法以閉幻衆 師一毛孔外三大老者乃於法性海中同出同忍不 而行願無盡生生世世食息起居行住坐臥未離本 三實凡有纖毫裨法門益衆生事皆法界全體之德 佛法身之量哉苟能從此發堅固心放捨身命建立 頂額上行囘視此三行者大似喚奴作郎矣以彼區 盡處而行願亦盡則法身斷滅雖然於法界性中觀 少一法而达身不成即一衆生而非自己則法身不 .身

示自覺智禪人

佛心心不斷妄想消滅心光發露智慧現前則成佛 想之心轉爲念佛則念念成淨土因是爲樂果若念 最萬行以供養為先是二者乃爲總持吾人日用一 入山唯恐不深矣又安忍退從市俗縱浪身心為無 則不覺自驚日吾爲何難除鬚變不與俗人爲伍耶 法身然衆生所以貧窮無福慧者由生生世世末嘗 切起心動念皆是妄想為生死本故招苦果今以妄 之行修慧在手觀心修福在乎萬行觀心以念佛為 人願枯心住山修出世行老人因示之以福慧雙修 **慚人作無益行耶自覺禪人向住人閒來匡山禮老** 念俗如此則樂遠離行不待知識之教而自發勇猛 苟知形與俗異則居不敢近俗身不敢入俗心不敢 希而報恩者少特末一摩其頭耳苟同光一摩其頭 更不思我是何人物從何來爲何而受所以知思者 多所受用安居四事種種供養各各自謂所應得者。 老人每每思之吾佛慈悲痛徹骨髓常謂末法比丘 佛言汝等比丘每於辰朝當自摩頭此語最爲親切 念供養三寶以求福德直爲生死苦身念念貪求

> 厭當自摩頭則自發無量勇益也 一華粒米莖菜則如滴水入滄溟一塵落大地縱海 有枯而地有盡其福無窮故感佛果華藏莊嚴爲已 一華粒米莖菜則如滴水入滄溟一塵落大地縱海 三寶以有限之身命隨心量力供養十方乃至一香 三寶以有限之身命隨心量力供養十方乃至一香

示龍華泰禪人

斯年以開充之勞身心未及放下頃政為禪人指示 財年以開充之勞身心未及放下頃政為禪人指示 一人也遂相與莫逆數數往來諸弟子輩亦莫不以 全為親故無閒然及師化去其孫潭公視余徵視師 全為親故無閒然及師化去其孫潭公視余徵視師 余被放嶺外愧生平竟無以報德者頃余出嶺之南 全被放嶺外愧生平竟無以報德者頃余出嶺之南 之與師音聲相貌居然在目及余之雙徑了達大師 因緣禪人相侍既而余歸匡山則携禪人與之同歸 意念爾祖之德冀成就禪人出世之業為報地耳居 動年以開充之勞身心未及放下頃政為禪人指示 意留之不可得禪人將別請益因示之日吾出家兒先須急其大者略其小者何謂大生死是也何謂小先須急其大者略其小者何謂大生死是也何謂小世緣是也古德云除却死生真大事其餘都是可商量以衆生沈淪苦海汨疫世緣積劫以來以至今日量以聚生沈淪苦海汨疫世緣積劫以來以至今日量以聚生之念為高鄰道之緣不可失事畢旋歸老人幸死生之念為急辦道之緣不可失事畢旋歸老人幸死生之念為急辦道之緣不可失事畢旋歸老人幸不生之念為急辦道之緣不可失事畢旋歸老人幸不生之念為急辦道之緣不可失事畢旋歸老人幸不能是也過過一日之功老人以畢命爲期禪人以死心相侍但得一日之功老人以畢命爲期禪人以死心相侍但得一日之功老人以畢命爲期禪人以死心相侍但得

示翠林禪人

綠也禪人行矣其無久滯他鄉重增生死業累耳

大事亦是老人所以報乃祖之地不負此世祭會因

禪人當人一念光明煥發不獨禪人以了積劫生死

所動作言行舉措無一事而不眞行實則凡所云爲佛祖教人唯在眞心實行爲出生死之要心眞則凡

檢點何晉有一念一行是真實事從前已是空過即 必須將從前有生以來及出家以來從頭一一細思 從今日巳去發一片出世之心將一切世閒情根妄 行即從真實心中發現果有真真實實為生死之心 見便了不求一段真實之行亦徒然耳若求真實之 非掠虛之地何所爲而來耶既發真實信心不是一 來参老人必發一片真實信心以此空山寂寞之中 袈裟下失却人身最為可憐愍者禪人既不遠千里 識流轉會無一念返省而求真實履踐之行此乃向 佛弟子身在袈裟之下豈可流浪一生念念妄想業 中漂流難到彼岸所謂業識茫茫無本可據耳況爲 想頭倒用事劫劫生生未會一念真實故於生死海 眞多悟須實悟是知一切衆生虚生浪死者以其妄 敗種者以其心行不眞實故也從上諸題教人参須 果果者實也以始終皆員實故故佛呵二乘爲焦芬 不虚故佛說發心修行如布種子成就菩提以爲結 種皆發生之緣以是之故抽牙發幹開花結實死竟 行而不實故眞實如好種子其餘作爲立行種 示順則易禪人

毛上將一則古人公案蘊在胸中日夜参究看他一 之行如此操心立行透出本地光明則將積劫所染 我是非得失心不起一念休歇止足想如死明大師 無不親身竭力承事不生一念厭倦心不生一念人 如此多死不悟不休即此一著便是為生死真實心 念世閉心起便是墮在生死處定要把斷不容毫髮 邁 節 煖 思慮盡情 撒 却軍軍 直 以 死 生 一 念 掛 在 眉 條性命納向空山大澤之中任他日矣風吹一切安 種子矣如是用心可謂不虚此生不負出家不枉遠 每日行一百八件方便行盡形不改即此便是真實 禮拜三寶供養十方調和大衆看待老病一切行門 即以此心向二六時中一切動作云爲種種行門至 想攀緣一齊放下將此一把骨頭一齊拋却將此一 種子但隨妄想而行不唯辜負此生實取窮劫三途 犯風波多訪知識若仍前涉虚止作嘗情業垢罪垢 切貪瞋癡愛習氣種子一一消融化為成佛真實

○示予機參禪人

門歸源無二即參禪提話頭與念佛持明皆無二法乞老人指示老人因示之日佛說修行之路方便多禪人以持明爲專行從事者三十年心地未有發明

花撩亂却怪修行無下落豈非自誤自錯耶禪人從 只是持咒之心未會得力尋常如推空車下坡相似 二法哉禪人持明三十年念見効者不是冤無靈驗 絲毫寸寸步步脚跟不空如此用力時只逼得妄想 挨磨如推重車上坡相似渾身氣力使盡不敢放影 今不必改轉就將持呪的心作話頭字字心心著力 即窮劫亦只如此及王陰境現前生死到來依然眼 心管滾將去何會著力來如此用心不獨今生無驗 面目謂之悟道若是單單逼拶妄想不行何必話頭 放久久得力如逼狗跳協忽然藏藏进裂露出本來 流注塞斷命根更不放行到此之時就在正著力處 即婆子數炭團專心不二亦能發悟況念佛持咒有 識之中深固幽遠無人能破聖人權設方便教人提 用瓦子戴門只是要門開不必計手中瓦子何如此 以吾人無量劫來積集貪瞋癡愛裸染種子酒於藏 執著之心資助無明故用力多而收功少耳此事如 第不善用心者不知借以磨煉習氣破除妄想返以 一則公案爲話頭重下疑情把斷妄想關頭絲毫不

个甚麼 觀來觀去疑來疑去如老鼠入牛角直到轉个甚麼 觀來觀去疑來疑去則及逼到一念開豁處想亦不得以此爲離生退息想及逼到一念開豁處想亦不得以此爲離生退息想及逼到一念開豁處想亦不得以此爲離生退息想及逼到一念開豁處想亦不得以此爲離生退息想及逼到一念開豁處態,若能如此持咒與多禪豈有二法耶所以道俱服只念三行咒便得名超一切人便可證明即親見此只念三行咒便得名超一切人便可證明即親見此可念三行咒便得名超一切人便可證明即親見此可念三行咒便得名超一切人便可證明即親見此可念三行咒便得名超一切人便可證明即親見此可念三行咒便得名超一切人便可證明即親見此可念三行咒便得名超一切人便可證明即親見

示智沙彌

方今出家兄於末法翻諍堅固之時有能決志為生 方今出家兄於末法翻諍堅固之時有能決志為生 不易見今亦有参究此事又惡覺惡習濃厚滯團未不易見今亦有参究此事又惡覺惡習濃厚滯團未不易見今亦有参究此事又惡覺惡習濃厚滯團未不易見今亦有参究此事又惡覺惡習濃厚滯團未不易見今亦有参究此事又惡覺惡智濃厚滯團未不易見今亦有参究此事又惡覺惡智濃厚滯團未不易見於教法留心時光亦不空過其留心於教亦有無過,

世不虚消信施重增業累又何取於出家為 一志如古人潛心理觀一旦忘言契會得佛心宗 是由文子而得總持此所謂旋陀羅尼門由此證入 是由文子而得總持此所謂旋陀羅尼門由此證入 是由文子而得總持此所謂旋陀羅尼門由此證入 是由文子而得總持此所謂旋陀羅尼門由此證入 是由文子而得總持此所謂旋陀羅尼門由此證入 是由文子而得總持此所謂旋陀羅尼門由此證入

示性覺禪人

力處正好重下疑情於日用一切時一切處念念不 移乃至久久夢中一似醒時一般若用力到此決不 此決定之志操不退之心但只一念直直行將去切 可退電忽然疑團进裂自然頓見本來面目若肯發 立在心目之閒如此便是話頭得力時也若到此得 提又看又審又疑疑到疑不得處胸中如銀山鐵壁 審畢竟是誰看得繼有昏散現前即便快著精彩又 陀佛四字歷歷分明急著眼看看得少不得力又提 望速成就釋迦老子三大阿僧祇幼磨煉身心豈是 頭一齊放下放到沒可放處即深深提起一聲阿彌 則公案時時提斯先將身心內外一切妄想뾽亂念 審實話頭最易得力禪人今日發心參究但將此一 **鈍根耶古德参究機緣儘多唯有念佛的是誰一則** 不可求速効切不得將心待悟若工夫綿密自有打 志古人二三十年單提一念不悟不休第一不得指 上一著爲眞實工夫先要辦一片長遠決定不退之 了沒干涉禪人發心眞實爲生死大事唯有參究向 聲佛有力便下疑情審問者念佛的是誰無之又

亦可做得此之謂也禪人有志真爲生死便從此一閒忙都是用心的時節六祖云若論此事輸刀上陣放得下提得起靠得定疑得切不拘行住坐臥動靜放得下提得起靠得定疑得切不拘行住坐臥動靜破時節也如上所說參究一節最是易爲省力是要

示實藏相禪人體普陀

聚音大士證圓通本根以法界身隨緣應現豈定居於普陀耶海喻生死山喻涅槃大士以法身普懸生死海中即聚生日用尋常皆大士威神顯現湛然寂死海中即聚生日用尋常皆大士威神顯現湛然寂死海中即聚生日用尋常皆大士威神顯現湛然寂中寒生填醒自心大士大士現前則寂滅現前寂滅則幸生所居普陀非局指海中拳石為大士棲託也衆生士常居普陀非局指海中拳石為大士棲託也衆生士常居普陀非局指海中拳石為大士棲託也衆生士常居普陀非局指海中拳石為大士棲託也衆生士常居普陀非局指海中拳石為大士棲託也衆生士常居普陀非局指海中後不為大士棲託也衆生士常居普陀非局指海中後不為大士東區,

錢也 能信老人此言則不發一翻行脚不然則空費草鞋入圓通之門必使自信而後已同此行者但有一人入圓通之門必使自信而後已同此行者但有一人

示明輝禪少林禮亂

-112 -

麼乾矢橛禪人又要走向少林禮鼻祖求佛法禪道

到少室問取單傳堂前露柱看是个什麼學已錯却了也況千里萬里乎禪人如不信老人試門一步與到匡山時是同是別若是別則未出門一步到學林往返歸來時是同是別若是別則未出門一步到學林往返歸來時是同是別若是別則未出門一步到

示法界約禪人

一定上出家兒皆爲生死大事登山涉水求善知識 一從上出家兒皆爲生死大事登山涉水求善知識 一從上出家兒皆爲生死大事登山涉水求善知識 是不了。 是不了。 是不了。 是有何疑慮耶唯的信自心本有而已令人行脚走 更有何疑慮耶唯的信自心本有而已令人行脚走 更有何疑慮耶唯的信自心本有而已令人行脚走 是有何疑慮耶唯的信自心本有而已令人行脚走 是有何疑慮耶唯的信自心本有而已令人行脚走

> 內國人工學 一際寂滅法門待有話會再來與老僧相見 一際寂滅法門待有話會再來與老僧相見 一際寂滅法門待有話會再來與老僧相見 一際寂滅法門待有話會再來與老僧相見 一際寂滅法門待有話會再來與老僧相見 一際寂滅法門待有話會再來與老僧相見 一際寂滅法門待有話會再來與老僧相見 一際寂滅法門待有話會再來與老僧相見 一際寂滅法門待有話會再來與老僧相見 一際寂滅法門待有話會再來與老僧相見

示崇觀禪人

乃字之曰見微以衆生生死根株微細流注妄想昏志而未能也老人愍其遠來且無可指示但因其名。

我而不自知故吾佛大師設觀以照之良以微非觀問分上自有格外鉗錘但能一念如鐵壁銀山塞斷個分上自有格外鉗錘但能一念如鐵壁銀山塞斷個於上自有格外鉗錘但能一念如鐵壁銀山塞斷個於上自有格外鉗錘但能一念如鐵壁銀山塞斷個於上自有格外鉗錘但能一念如鐵壁銀山塞斷人方且波流識海未能勤絕命根他時後日苟能吐人方且波流識海未能勤絕命根他時後日苟能吐人方且波流識海未能勤絕命根他時後日苟能吐人方且波流識海未能勤絕命根他時後日苟能吐人方且波流識海水。

示六如坤公

正念真如祖師方便法門若說真如二字學人早作者捨教而言修行是捨規矩而求方圓也且佛教阿者論教而言修行是捨規矩而求方圓也且佛教阿斯黑心要集一切諸善行故大悲心願教一切衆生故深心要集一切諸善行故大悲心願教一切衆生故深心要集一切諸善行故大悲心願教一切衆生苦故從上諸祖教人參禪雖有超佛越祖之談其實要人從上諸祖教人參禪雖有超佛越祖之談其實要人從上諸祖教人參禪雖有超佛越祖之談其實要人

道理會取去誰肯下死工夫做若只教去看話頭看

與直心正念相應則目前無一法一事不是真如境

界矣所以馬祖與百丈諸弟子日用中搬柴進水鋤

田插禾燒火養飯事事上覿面勘驗尋常一言一句

上驗看可與直心正念相應不相應若事事法法都

出一个平妙真如來只是就將直心正念在一切事

用有爲萬行上求所以行上求者不是在事上別計

生日用種種事法皆是類惱現行今以真如一念事 事業且如世尊教須菩提度盡衆生實無衆生可度 生如此多學是名真多實死者不是現成端坐養懶 事法法上印破都轉作真如妙用便是度自心之衆 通取之無禁用之不竭則何法而非功德事哉以衆 得豈不是直心正念真如如此妙用乃自已日用神 亦無所得且度衆生豈不是集諸功德實無一法可 乃至廣行六度更無一法可行乃至上求菩提佛果 去度衆生却就是直心正念集諸功德處就是度生 苦是菩薩事待他日成了菩薩纔度衆生却不知能 胸中當作已解日用頭頭未會一毫看破豈不誤哉 **半妙機鋒語如今學人都把作半妙奇特言句鑑在** 度衆生方是菩薩度衆生苦不是有了神通妙用纔 第三大悲心願拔一切衆生苦如今學人見拔衆生 輕許印正此傳憶千七百則葛藤皆買實印正語非 無念境界起心動念即被業轉墮在生死窟中故未 冷言熟語都是要弟子入證真如之門若勘到果然 切處不昧方許有爲人分若胸中絲毫未透未到

> 過了三年五載便誇大口說我參禪幾多時悟了多少妙處如此見識都閻老子前喫鐵棒漢反不如三來村田舍歌他倒免酬信心擅越宿債老漢看來佛配教人原是分分明明只是後人錯會所以誤耳禪人既歸心老人須信老人言從今將抱守瑠璃瓶子一拶粉碎將從前参的都移在一片身心上向成就來生門頭拌却性命去一一著實體驗過發廣大心一類粉碎將從前参的都移在一片身心上向成就來生門頭拌却性命去一一著實體驗過發廣大心一類對性。 一時別一衆生發菩提心便是拔一衆生之苦自破一一類對性原子者從此以去更發長遠心即三生十劫 一類對於於將從前参的都移在一片身心上向成就 一類對於於將從前参的都移在一片身心上向成就 一類對於於將從前参的都移在一片身心上向成就 一種個一時都盡更要成甚麼佛祖

示西印淨公專修淨土

眼知識卒莫能迴其狂瀾大可懼也大都不深於教實行全無且謗大乘輕典爲文字不許親近世無明語句以實口舌便利以此相尚遂到法門日衰不但蔣母土而不修以致吾徒好名之輩多習古德現成蔣母土而不修以致吾徒好名之輩多習古德現成

門願修而未決老人因謂之日此事不必問人只看 豈不是出生死法耶多禪者多未必出而念佛者出 大祖師反不如今之業垢衆生而妄談耶淨公中年 門乃本師無問自說十方諸佛共讚豈諸佛菩薩諸 淨土禪至中學時在季世而極力讚揚西方況此法 土傳燈諸祖雖不明言淨土但悟心既出生死不歸 傳心祖師宗百部大乘作起信論究竟結歸西方東 攻毒博換之法耳故参究難悟念佛易成若果爲生 生久沈妄想離之實難若即染想而變淨想是以毒 生死無疑所以然者参禪要離想念佛專在想以衆 自家爲生死心何如若爲生死心如救頭然志要一 棄愛出家初参紫栢大師授多禪之指今於淨土一 海土豈成斷滅耶丞明會一大藏指歸一心亦攝歸 諦觀普賢以法界爲身修十大願必指歸淨土馬鳴 此淨土法門世人以權目之殊不知最是真實法門 死心切以参究心念佛又何患一生不了生死乎惟 但知祖師門下以悟爲上悟心本意要出生死念佛 乘不知吾佛度生方便多門歸源無二之旨耳世人

> 矣行之決不相賺 全取辦醫若人患必死之病有人覓還丹可救一人 生取辦醫若人患必死之病有人覓還丹可救一人 生取辦醫若人患必死之病有人覓還丹可救一人

示沙彌性鎧

無堅忍之力又何以克全出世之業乎無堅忍之力又何以克全出世之業乎。

憨山老人夢遊集卷第八

S山老人夢遊集卷第九

日錄

門

編組

嶺南弟子 劉
起
相

法語

示夜臺灣人

沙門黃體此山爲金色世界華嚴經云一切處文殊 文殊菩薩住淸涼山與一萬眷屬常演說法故西域

人能開智眼達本情忘知心體合則當下清涼如是 住於此山耶葢衆生界中質體所集爲熟體地若行

師利從一切處金色世界而來由是觀之文殊果常

故得此名今來南方行脚多體知識是必親從又殊 一切處文殊金色世界也夜臺禪人久住臺山夜遊 則獨目無非文殊化境步步不離清涼道場此所謂

指點而來如善財之南詢雖經百一十城未動脚跟

逆順法門無非文殊智眼今見老人於五乳等頭與 金色世界是同是別者裏辨得許你親見文殊其或 一步如前周行十方世界未離金色界中在在知識

未然再買草鞋行脚去多多

示省然覺禪人

性覺禪人中歲出家遠來匡山求授具戒以有隱疾 不能久侍辭歸請益老人因示之日身爲大患之本

聞此法念念不忘心心不懈即此便是修行之要如 戒心地法門乃斷欲之利具出苦之舟後也汝今幸 衆苦所聚六道生死先要識此生死苦因所謂諸苦 所因貪欲爲本若滅貪欲無所依止是故佛說金剛

能得利益者汝當更念此身雖苦幸存一息尚可求 有一人不從多究中來得了悟心性者未有不修而 即此工夫便是出生死之第一妙訣心從上諸顧未 久之純熟當見此身忽然晚空四大若空諸苦頓殿 能出之方若一失此身枉著袈裟則將來三途之苦 今此妄身當在何處如是觀察念念不忘心心不味 潤濕歸水煖氣歸火動轉歸風諦觀四大各有所

提心勉之毋怠

動經長劫雖欲求出不可得也故云思地獄苦發著

圓覺經云當觀此身四大合成我今觀此堅硬歸地

示說名道禪人

就日用現前六根門頭起心動念執著我處當下原 心大地無寸土以我自心元是般若光明本來無物 自心放云識心達本源故號爲沙門又云若人藏得 修行但求自心更不別尋拉葉佛祖教人只是返求 非向外別求即是吾人自心之本體本自具足故今 以吾人修行不仗般若根本智生死難出然此般若 道學人往多老人於曹溪特爲發明金剛般若宗旨 破本來無我無我則無人無人則了無衆生衆生既 我即不知有本來常住法身即今要悟本來法身即 但因一念之迷故日用而不知但知有此幻妄之假 將六祖本來無物一語置在目前但見一切境緣對 空則生死根絕生死既覓則無壽命是則四相旣除 待生心之時便是我執就此執處一照照破則富下 徑若境界看破了無罣礙則生死根株亦從此倒斷 日用身心了無罣礙以日用逆順境界皆是生死路 情忘對待心絕即是無我無我則無人人我既空則 一心無寄豈非無住之妙行乎若不能當下了悟只

民 一 是 一 表 此 外 別 求 即 落 外 道 那 極 民 如 是 豈 非 善 修 般 若 無 住 之 妙 行 手 課 人 有 志 要

矣

生死不是難此別有名妙只是在此等境界上情愛 生死不是難此別有名妙只是在此等境界上情愛 生死大事者第末遇善知識指點心地工夫故無把 性死大事者第末遇善知識指點心地工夫故無把 是死大事者第末遇善知識指點心地工夫故無把 是死大事者第末遇善知識指點心地工夫故無把 是來大事者第末遇善知識指點心地工夫故無把 是來不知此等情愛喜怒之情全是生死根株學世 之人未有不在此中一生交滾者古德教人參禪了 之人未有不在此中一生交滾者古德教人參禪了 之人未有不在此中一生交滾者古德教人參禪了

之心看破便是了生死以此情愛妄想從來暫染純

熱深厚若無方便法門豈能敵得所以多禪看話頭

之說正是破煩惱之利具耳所以被他牽繼者直爲

也無州曰無即將此一無字懷在胸中作話頭下疑

無此話頭作主宰耳只如僧問趙州狗子還有佛性

原念念不忘心心不昧一切閒忙動靜應酬忽遠中 與規此一語重下疑情審問疑來疑去只有一个話 與明前級是看書據放下書本囘頭一看便下疑情 與別久久純熟但見心中妄念起時如此一問當下 此疑堅固切不可作道理思量解會只要一个疑念 此疑堅固切不可作道理思量解會只要一个疑念 此難堅固切不可作道理思量解會只要一个疑念 如此做工夫不但敵破境界抑有了悟之時但切不 如此做工夫不但敵破境界抑有了悟之時。 可作平妙道理思量忍反裘也

示福教禪人

新安禪人遠参匡山求授戒法名曰福敦字曰寫如新安禪人遠参匡山求授戒法名曰福敦字曰寫如為生死治真常求無上是聚之福樂苟非精誠一念超生死治真常求無上是聚之福樂苟非精誠一念超生死治真常求無上是聚之福樂苟非精誠一念是死情根搜拔起藏竟不可得然不可得處便是生死無為之福難矣于里之行在於初步從此戒為基本乃趨菩提之初步即此念念向前心心不退軍求一念生死情根搜拔起藏竟不可得然不可得處便是生死無警處矣第訟志不堅行不力耳若恐不力但

新宾如是著力是名篇如勉之勉之
以阿彌陀佛四字橫於胸中以爲利斧久久根株自

示福厚禪人

示同塵春禪人

習南多知識遊新安之黃山愛其幽勝遂隱約其閒漢南同塵睿禪人遠至大都親歷講肆旣而盡棄所

a drawn and the best bette alle . The

閒故曰爲一大事因緣故出現於世以諸佛證此大 耳大哉衆生之心具有廣大不思議力智用無邊而 爲大利樂也是知此經所說乃說衆生日用妄想心 卷聚生本具性德也隱而不現謂衆生日用而不知 大經利益無窮然一微塵者衆生妄想心也大干經 二十重華藏世界無盡莊嚴以爲依賴安住海印三 爲介爾妄想所蔽可不悲哉吾佛特爲此事出現世 也明眼智人破塵出經即諸佛證窮此法開示衆生 大千世界中事有一智人明見此經剖破後塵出此 門乃諸佛自證境界具在衆生日用妄想心中念念 昧稱普光明智爲地上菩薩演說此經名曰普照法 以華嚴大經爲常課能知此經之綱宗手惟我毗庶 現前經云譬如一微塵中具有大千經卷書寫三千 界條多羅爲稱性法門種種微妙不可思議如此法 報身號盧舍那具有佛剎塵數相好是為正報所感 邁那曠劫因中稱法界心修普賢行證窮法界名為 夏來参压山求授大戒拈香請益老人因示之日子 一等往來無定棲止然以華嚴大經爲課誦壬戌仲

> 雖然如是也要牛皮鑽透始得 雖然如是也要牛皮鑽透始得 雖然如是也要牛皮鑽透始得

示修淨土法門

指歸淨土如馬鵬龍樹及此方永明中峯諸大祖師會一處專修淨業願乞慈悲指示法要老人因示之自一處專修淨業願乞慈悲指示法要老人因示之日佛說修行出生死法方便多門唯有念佛求生淨土最爲禪人遠參匡山求授戒法命名曰深愚拈香請海陽禪人遠參匡山求授戒法命名曰深愚拈香請

生之效驗也然一心專念固是正行又必資以觀想 不被生死拘留則感阿彌陀佛放光接引此必定往 若念至一心不亂則臨命終時淨土境界現前自然 失寤寐一如則工夫綿密打成一片是爲得力時也 味並無異緣如此用心久久純熟乃至夢中亦不忘 臥拈匙臀筋折旋俯仰動靜閒忙於一切時不愚不 佛以爲命根念念不忘心心不斷二六時中行住坐 要爲生死心切先斷外緣單提一念以一句阿彌陀 中厭娑婆苦發願往生安養立念佛正行然念佛必 此十惡永斷三葉永清是爲淨心之要於此清淨心 惡口則口業清淨意不食不眠不凝則意業清淨如 若身不殺不盗不婬則身菜清淨不妄言綺語兩舌 土當淨自心惟今修行淨業必以淨心爲本要母自 皆極力主張淨土一門此之法門乃佛無問自說三 更見穩密佛為章提希說十六妙觀故得一生取辦 乃三途苦因今持戒之要先須三業清淨則心自淨 心第一先要戒根清淨以身三口四意三此十惡業 根普被四衆齊收非是權爲下根設也經云若淨佛

示念佛參禪切要

則佛墮妄語矣

有一念歷歷孤明如白日當空妄念不生昏迷自退想雜念當下順新如斬亂絲更不容起起處即消难又審見者念佛的畢竟是誰如此靠定話頭一切妄提處即下疑情審問者念佛的是誰再提再審審之機處即下疑情審問者念佛的是誰再提再審審之

A & Aven

The date of the same

則身心世界當下平沈如空華影落十方與明成一 來面目故不得不下死工夫一番方有到家時節從 今人但信此心本來無物如今做工夫只為未見本 請淨湛然如此任運過時又豈有甚麼工夫可做耶 磨無明曆氣耳若悟本心本來無物本來光明廣大 應知本來清淨心中了無一物本無迷悟不屬望凡 魔若生憂喜便墮魔中當觀惟自心所現不從外來 認著一咄便消惡境不必怕善境不必喜此是習風 更無可疑始信自心本來如此從上佛祖自受用地 大光明線如此方是到家時節日用現前頭頭圓明 前後際斷中閉自孤忽然打破漆桶順見本來面目 又安得種種境界耶今為迷此本心故要做工夫消 有見即墮邪見若在工夫中現出種種境界切不可 外道惡見亦不可作有見亦不可作予妙知見但凡 不落妄思惺寂雙流沈浮兩捨看到一念不生處則 惺寂寂是惺惺翼想非謂寂寂不吝昏沈無記惺惺 寂寂惺惺永嘉大師云寂寂惺惺是寂寂無記非惺 無二無別到此境界不可取作空見若取空見便墮

此一直做將去自然有時順見本來面目是出生死

永無疑矣

示海澗禪人剌血書經

不之下用是則何莫而非書寫此經之時耶若身同 是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所過之身血若爲而盡書之耶雖然此經果不能書則此經若悟毗虛以法界爲身則自已身心亦同法界所此經若悟毗虛以法界爲身則自已身心亦同法界所以與日用現前動靜語默拈匙舉筋欬唾掉臂皆法 是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所 是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所 是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所 是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所 是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所 是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所 是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所 是演說盡未來際無閒無數如是之經充滿法界所 是演說盡未來所

刺血為墨量等法界是則全經不出一字即書一字

亦同全經何況百軸之文禪人苟能作如是觀則自

與性海同枯矣所以普賢大士剝皮為紙柝骨為筆

法界則一一毛孔皆悉周偏如是則學一滴之血當

思議禪人若無如是眼作如是行亦不免担目見空至執勞運力者無不同歸法界如是功德豈可得而書者與見聞者及禮拜讚歎一香一華而作供養乃

示曹溪沙彌能化書華嚴經

華豈不重增顛倒想耶

佛云佛種從綠起是故衆生正因佛性本具但以無陽和之緣方能抽芽發幹乃至開花結實耳老人未陽和之緣方能抽芽發幹乃至開花結實耳老人未是曹溪諸沙彌所習世俗之業且不知有佛有僧安知佛法哉自老人開化種種方便誘引教導始則知為情矣既而以佛性難明先教書寫華嚴大經後知 其人自是人人相望發心不十年閒書此大經者已其人自是人人相望發心不十年閒書此大經者。 其人自是人人相望發心不十年閒書此大經者。 其人自是人人相望發心不十年閒書此後 ,

. It was the top and the A. I will show . I

人而巴耶是在遞相轉教之功耳地分應按開萬行花將來必成菩提妙果此正所謂此人人勇猛發無上心有志佛法究明已躬大事即此人人勇猛發無上心有志佛法究明已躬大事即此人人勇猛發無上心有志佛法究明已躬大事即如六組住世時發明自心者千人之中豈止三十餘如六組住世時發明自心者千人之中豈止三十餘如六組住世時發明自心者千人之中豈止三十餘

示惺初元禪人書經

整元禪人來參匡山老人字之曰惺初發願書寫大經老人因示之曰出家修行佛說方便多門固在各經老人因示之曰出家修行佛說方便多門固在各發心何如耳第一向上參禪求明自心志了生死大則深窮教海志願宏通護持正法續佛慧命又次,則深厭生死專心淨菜願生西方此皆理行爲最上是佛稱讚者故法華說持經法師現世內身得六根是佛稱讚者故法華說持經法師現世內身得六根是佛稱讚者故法華說持經法師現世內身得六根是佛稱讚者故法華說持經法師現世內身得六根是佛稱讚者故法華說持經法師現世內身得六根是佛稱讚者故法華說持經法師現世內身得六根是佛稱讚者故法華說持經法師現世內身得六根是佛稱讚者故法華說持經法師現世內身得六根是佛稱讚者故法華說持經法師現世內身得六根

示昭凡庸禪人

是劫流轉生死苦海無出頭時夏由不知自心之過 作一件真實大事耳老人因示之曰古人學道第一 作一件真實大事耳老人因示之曰古人學道第一 阿即吾人日用現前種種塵勞境界中遇境逢緣若 一一件真實大事耳老人因示之曰古人學道第一 想分別心也以念念攀綠起善惡等種種業行都作 想分別心也以念念攀綠起善惡等種種業行都作 想分別心也以念念攀綠起善惡等種種業行都作 想分別心也以念念攀綠起善惡等種種業行都作 想分別心也以念念攀綠起善惡等種種業行都作

及種種妄想一齊折合歸向到一念上做將一句話

頭作橫空寶劍斬斷從前妄想如所亂絲果能如是

志此事直須將自己胸中從前世諦伶俐聰明知見

業可惜百千萬劫難遇一段大事因緣也禪人果有

家活計縱有一知半見都是魔說凡有所作皆是魔

若不是最初發心爲生死切任你做盡伎倆都是鬼

有何辛妙可求又何必向他家屋裏求耶然此一著

也故云若不了目心云何知正道古今學道人有志也故云若不了目心云何知正道古今學道人有志是親此無字離字起從何處起落向何處去只看者是親此無字離字起從何處起落向何處去只看者是親此無字離字起從何處起落向何處去只看者是親此無字離字起從何處起落向何處去只看者是親此無字離字更必滿人審實念佛的是誰即此一無字是就妄想迸斷打破漆桶順見本來面目到此便將一則公生滅妄想迸斷打破漆桶順見本來面目到此便將一則公生滅妄想迸斷打破漆桶順見本來面目到此便將一則公生滅妄想迸斷打破漆桶順見本來面目到此便將

佛祖向上鼻孔一時盡在自己手中從此識得本來

人更不疑張三李四恰元來是自己本命元辰如是

皮說好看話耳墮妄語矣所最思考唯是無真實悟處則從上佛觀皆下毒手做苦切工夫若無真實悟處則從上佛觀皆

示覆初崇禪人

職人生長豫章素有向上志聞老人遙老匡山遂葉 世諦綠潔心來参因留入衆隨時入室久之察其多 大家之智而骨氣不剛故入道之心不猛居常策其 不逮一日拈香請益老人因示之日子有向道之志 而無振拔之氣者以心力不純故骨不動骨不動故 而無振拔之氣者以心力不純故骨不動骨不動故 而無振拔之氣者以心力不純故骨不動骨不動故 活露習悠悠日月但守閒散任意以爲自在無拘於 心既不知檢而於四大幻身亦無支持之力故日用 也既不知檢而於四大幻身亦無支持之力故日用 要發一片真實爲生死心立一定久遠不退之志 要發一片真實爲生死心立一定久遠不退之志 大方不負此生平要如古人必以一則公案爲多究 人方不負此生平要如古人必以一則公案爲多究

> 新頭如永明大師念佛審實的公案最為歷富即將 無可放處軍單提起一聲阿彌陀佛即看此念起處 無可放處軍單提起一聲阿彌陀佛即看此念起處 無可放處軍單提起一聲阿彌陀佛即看此念起處 無可放處軍單提起一聲阿彌陀佛即看此念起處 無可放處軍單提起一聲阿彌陀佛即看此念起處 無可放處軍單提起一聲阿彌陀佛即看此念起處 是用心如此著力自然骨쀜氣猛名為挺特丈夫親 是用心如此著力自然骨勵氣猛名為挺特丈夫親 前軟暖之狀質日劫相倍矣。子其勉之

示意鏡心禪人

在學人乃致蔣念佛為另行又何疑多禪念佛而末法 妄入乃致蔣念佛為另行又何疑多禪念佛而末法 妄入乃致蔣念佛為另行又何疑多禪念佛而末法 是關多聞不知佛意妄生分別耳若約唯心爭土則 心淨土淨故初多禪未悟之時非念佛無以淨自心 佛無以成正覺安知諸顧不以念佛而悟心耶若念 佛無以成正覺安知諸顧不以念佛而悟心耶若念 佛無以成正覺安知諸顧不以念佛而悟心耶若念 佛無以成正覺安知諸顧不以念佛而悟心耶若念 此則念佛即是多禪若似菩薩則是語後不舍念佛 故從前諸觀皆不捨淨土如此則念佛即是多禪多 故從前諸觀皆不捨淨土如此則念佛即是多禪多 於不舍念佛 是則非念 於一等土此是古今未決之疑此說破盡而禪淨 分別之見以此至消即諸佛出世亦不異此說若捨 分別之見以此至消即諸佛出世亦不異此說若捨

示修六选關主

素為生死心切志求向上亦相從於金輪筝頂閉死困苦中始終二十五年未嘗少閒及余歸隱匡廬公率同輩歸依乃至出嶺之南嶽遊吳越相從於艱難余初度嶺至五羊時菩提樹下弟子修六逸公即相

光影門頭以爲究竟之見所以雲門道只饒得到法

之見及有一念在心暫歇處即執為妙悟便生得少 **悞墮邪見縱有一念頓悟自心本來無物則又墮在** 之見以此蘊集於懷不肯睡却久之釀成毒藥以致 人未忘佛見法見故有二愚乃至祖師門下初學多 之見一切菩薩執有生可度有佛可求之見等覺聖 生死難出是以一切凡夫執身心人我是非之見一 爲足之見即將古人言句攀扯回爲已解執爲予妙 禪者則多先起待悟之見於未悟中妄起末得謂得 立是則妄見乃我執之本稱爲法身之刺見刺不拔 切外道横執邪見二乘聖人執生死涅槃欣厭取給 而為根本一切聖凡二種生死皆因執我然我依見 用藥調治耳何謂生死病根以貪瞋癡慢皆以我見 死詞展末能顧拔以多禪先須藏取生死病根方能 乃本分事禪人死關三年其於放下身心抖微客廳 煩惱消磨響氣乃最初一步業已自信但於愛兜生 **拈香請益老人因示之日出家為生死求向上一** 關三年單提一念幸有自信之地今以省師歸故山

未識生死病根之過也所以古德王不用求真唯須 悟此皆遭自欺全非真多實死功夫如此用心皆是 起知見自以爲得即將古人現成語句把作自已妙 悟之一字亦須睡却何況全未了悟但依希恍忽便 生滅邊收通是生死病根縱然悟得尚屬生死故云 頭則永無超脫之見總之但有終毫情見未除皆是 身爲法執不忘已見曆存墮在法身邊謂之抱守竿 之時見非是見見猶難見見不能及此其究竟窮元 世界而沈生死故今以離見爲出生死證法身之極 單以見爲生死病根以從法身而起妄見見有身心 息見苟知見消亡不眞何待所以佛示阿難云見見 則也馬鳴大師示人以難念爲眞修實證以因念有 見若見謝則念自雖妄自泯矣是知貪瞋煩惱之病 腦易斷習氣難除習氣不除則妄見潛遊妄見遊則 根淺唯獨見刺之病根深最為難拔故參究工夫煩 縱有悟處皆成層氣以成魔見矣所以核嚴經中說 見魔最深隠而難知也禪人有志眞多實完直須看 破切不可墮在知見網中正當做工夫時只將超州

看者無字畢竟有什麼氣息纏有一念起處當下一 心內外一齊放下放下又放下放到無可放處透底 無字與六祖本來無一物同多於未提起時先將身 觀觀定看他畢竟是个甚麼如此安身立命在話頭 只將話頭掌定歷歷孤明自然不被境風搖奪乃至 擬以擬心即錯決不是古人見處至於尋常應緣時 脱時也切不得將古人公案言句蘊在胸中將來此 上靠定深錐痛剂一念不移如老鼠咬棺材自有透 談兩此一種病摄最深以正當說時直圖爽快全不 與人接談時切不可將古人公案作自已知見以實 看所以不知是病若養成此病則將為大我慢魔乃 不可不懼也古人多禪無別平妙只是肯將凡情望 在魔之所躡持今目中所見細白好禪者比此皆然 知不是自己本分事以此縱心矢口全不會回頭照 率知見不存則真見發光自然了無一物矣如此放 解一齊掃却放得胸中空落落不留蘇毫知見作主 下時則當人一念如大火聚一切麼情習氣一個便 燒如紅爐片雪絕無影跡可留回觀一切知見邊事

一念則一念真實若念念放下則念念真實若徹底 一念則一念真實若念念放下則念念真實若徹底 際之言則與老人眉毛撕結未常有絲毫閒隔時也 摩之言則與老人眉毛撕結未常有絲毫閒隔時也 歷吃老人老臭黛貧此綠錯過此生則再求今日之 緣又不知幾千萬劫也

示慧予製後禪人

東海傳法不行之地自靈山桂峯師開化令捨邪器正者不少老人昔居海印寺斯師法利之盛其諸弟子能說法者居多今學人要後乃嫡孫心老人別靈山二十有八年完辛酉歲後來参匡山改歲後辭歸故山請益修心法要老人因示之日佛最所訶者煩飲山請益修心法要老人因示之日佛最所訶者煩於不知佛法者固無足怪即學佛法人不斷除煩惱所知二種障為生死根本然煩惱障乃貪瞋變愛然不知佛法者固無足怪即學佛法人不斷除煩惱心地又以所學佛法為同無足怪即學佛法人不斷除煩惱心地人不知佛法者固無足怪即學佛法人不斷除煩惱心地之以所學佛法為所知障生長我慢重增煩惱心地之以所學佛法為所知障生長我慢重增煩惱心地之以所學佛法為同無足怪即學佛法人不斷除煩惱心地之以所學佛法為所知障生長我慢重增煩惱心地

一等為最上行也然又必要為生死心身。 一等為最上行也然又必要為生死心身。 一等為最上行也然又必要為生死心力乃肯下死 一等為最上行也然又必要為生死心力乃肯下死 一等為最上行也然又必要為生死心力乃肯下死 工夫耳學人實為生死真切用心乃有爱用不是設 工夫耳學人實為生死真切用心乃有爱用不是設 了便休作一種佛法知見也

示淨心居士

如何敢云念佛成片且来生無量劫來念念妄想情,然則數年矣今書來云念佛難成一片復請開示老號則數年矣今書來云念佛難成一片復請開示老號則數年矣今書來云念佛難成一片復請開示老

及如此驢年無受用時直須勇猛更英遲疑 長如此驢年無受用時直須勇猛更英遲疑 成告訴不得他人全要自己著力若但將念佛做面 如告訴不得他人全要自己著力若但將念佛做面 如告訴不得他人全要自己著力若但將念佛做面 如告訴不得他人全要自己著力若但將念佛做面 如告訴不得他人全要自己著力若但將念佛做面

示仁天老宿持法華經

示沈大潔

電子二行原無二法永明大師示之於前矣禪本離 定國矣然淨士有上品上生未常不從離念中終若 一定佛至一心不亂豈存念耶但此中雖是無二至 一定佛至一心不亂豈存念耶但此中雖是無二至 一定學至一心不亂豈存念耶但此中雖是無二至 此不無兩概念就參究念佛處打作一錄要他不生 一定生即不生方是永嘉惺寂雙流之實行也何耶 一定生即不生方是永嘉惺寂雙流之實行也何耶 一定生即不生方是永嘉惺寂雙流之實行也何耶 一定生即不生方是永嘉惺寂雙流之實行也何耶 一定是此不生 成平妙即有一念暫息寂靜默喜切不可當作好處 到做不得時則打起精彩又從新做起又切不可貪 的心便是攔頭板也只管一直敞將去不計工程即 即是念念即是参回頭一看始知向來如在含元殿 去凝固心思路路處如影山霧響無轉身拉氣齒是 襄覓長安也如此做工夫最怕將心要悟才有要悟 身汗流如大夢覺到此方信生即無生無生即生多 時忽然隨著觸音異無生意忽然猛的現前時則通 灣審之又審疑之又疑如鹽觀井觀來觀去是來疑 提起時就在直下看觀審實此念佛的是誰重下疑 空寂寂中著力提起一點阿彌陀佛歷歷分明正當 阿彌陀作話頭敞審實工夫將自己身心世界幷從 何多究即念佛念佛即多死耶如今多死就将一句 突道人諦聽多究念佛此中易落话蓋不可忽也如 者方悟無生即此一語則多死念佛當下可或一條 活句不多死句正在生處見不生意如經云見利那 挂在心頭念念不忘豈是真一心不亂古人教人參 一切世論俗習語言佛法知見一齊放下就從空

> 不相隱 奇特處道人還真實實為生死大事試從此下手決 向人問覓也看來此事元是人人本分上事更無為 絕處久久自見本來面目如十字街頭見阿爺更不 迷悟都不管軍軍只是追求一念下落追到提盡教 法又不可墮在無事甲中以此爲得總之一切聖凡 直領吐却切不可將佛祖予言妙語來作證當作佛

整山老人夢遊集卷第九

憨山老人夢遊集卷第十

FF

温 苦

日鉄

嶺南弟子 劉起相 浦 加 重較 温进

法語

示本褒印禪人

昔吾佛於靈山會上欲以妙法華經付屬有在令於 末世受持廣宣流布無論人天百萬即得授記諸勇

者應入如來室著如來衣坐如來座乃可爲深廣說 往昔求法之行如提婆達多世世之冤害及常不輕 後以不懈怠心乃可爲衆說是法華經故佛自述其 之衆乃能荷擔持此法者豈易易哉以五濁惡世衆 許不是菩薩為求菩提給身命處乃至頭目髓腦無 皆當能忍是以佛說觀三千六千世界無有如芥子 柔和忍唇心是如來堅者一切法空是安住是中然 此經如來室者一切衆生中大慈悲心是如來衣者 以忍辱為第一行故日如來滅後欲爲四衆說是經 生薄漏其性剛强最難調伏是以吾佛教持經者必 最勝行吾徒爲佛子苟無忍行又何以持佛慧命使 歡喜忍之無一念懈退此正教菩薩法末世持經之 之禮拜四衆乃至爲罵或加刀杖瓦石極種苦事皆 又何能護佛法續慧命乎老人每每以忍行開示禪 有恪惜故教持經者先以忍行悲此法末非大忍力 不斷哉及授付屬持經之菩薩則督之日種種苦事 子竟無一人敢於娑婆世界流通此法者必待地涌 人禪人能篤信老人亦能以忍力自持今不但卒保

三界上下了無一法又何生死可寄耶如此豈獨參 心佛知見者以能見諸法實相也以衆生迷眞知見 此外別求生死法也且此經乃吾佛世尊爲一大事 道場亦且成就已行切不可以世諦尋常觀之更於 悟實相之大宗師儻法社諸侶讀誦此經能有一人 因緣故出現於世一大事者乃衆生本有佛之知見 法益又何外慕別求佛法手今縱不能了生死即仗 但認五蘊幻妄身心而不見真實之相若見實相則 賢大行切不可起生滅心立人我見而生退鹽之想 發起大忍力大精進力是名異法供養如來以成普 岸時檀勝從前虚生浪死也禪人既信老人語從此 此法爲舟航顯力持之於生死海中亦必終有到彼 此法劫劫生生捨此身命禪人即能捨此一生成大 如是則護持之人具足恒沙功德不可思議矣佛爲 如天台悟入法華三昧者即此靈山一會儼然未散 **禪**能了生死而持經不能了生死乎若南岳天台皆 相

示新安仰山本源覺禪人

向前日用頭頭一切運爲明明了知皆從自心流出 道場如從天至皆從最初一念堅固信心故致如斯 步皆踏淨土資地經行即此身心已坐蓮華胎中直 不忘心心不味念至動靜無二寤寐如一則現前步 則法法皆爲淨土眞因更能將一點阿彌陀佛念念 土皆從金剛心地建立禪人果能了知此法門從此 遮那心地法門經云若授佛戒即入諸佛位是知一 老人今為禪人特授梵網金剛實戒此戒名為毗慮 廣大佛事由是觀之則西方淨土又豈從心外得耶 如仰山因緣向皆危石巉品荒壞茂草今一旦幻此 念信心即開佛知見一切佛土應念現前故諸佛淨 淨因果皆即現前念念轉變故日心淨則佛土淨直 教授菩薩是故爲佛弟子若達唯心法門則一切染 所謂圓覺流出一切清淨眞如菩提涅槃及波羅蜜 大義老人因示之日佛說三界上下法唯是一心作 從宿徑般若中今禮匡山請授大戒拈香請說與覺 自心力誦四聚然行二經亦二十餘年精持淨行皆 本源覺重與即山道場三十餘年幻出種稱莊嚴皆

> 努力珍重 一定協會終時續捨此身即花開見佛如從夢覺到此 一定的一定也要不過人久修梵行第末親聞善知 更有何法出生死乎過人久修梵行第末親聞善知 更有何法出生死乎過人久修梵行第末親聞善知 主臨命終時續捨此身即花開見佛如從夢覺到此

示陳善人

 示盛蓮生

子矣持齋豈分外事耶其中有上智高明之士既持 必定從放生不殺持齊戒中來在家有能持此五戒 放光接引投托蓮花以爲父母花開見佛從此永出 萬劫難復如此思惟念生死苦求出離心切更宜發 有徑路修行但念阿彌陀佛此外別求皆爲邪見邪 今在家男女行持一生取辦生西方者不少故日唯 生死輪回之苦長揖三界是名菩薩此念佛功夫古 佛念到一念純熟一心不亂臨命終時見阿彌陀佛 念念不忘朝暮禮佛誦經囘向西方求生淨土若念 心持念阿彌陀佛將此一句佛橫在胸中心心不斷 此戒復念人世無常如風中燭怕生死此一失人身 不妄語信也不飲酒智也儒門能此者即成德之君 者即五常備矣謂不發仁也不盜義也不邪婬聽也 感招其長壽多男父慈子孝天唱婦隨兄友弟恭者 行矣善人持此轉化同類一人一家以及一鄉一郡 通都為佛國矣但願努力修行只要信心真切一念 奉行不必別求予妙佛法

> 老子云吾所大思為吾有身若吾無身吾有何<u>此</u>週 養經云我今此身四大合成當觀身中堅硬歸地潤 濕歸水煖氣歸火動轉歸風四大各離今者妄身當 在何處如此諦觀此心久久純熟身相忽空種種煩 在何處如此諦觀此心久久純熟身相忽空種種煩 在何處如此諦觀此心久久純熟身相忽空種種煩 下消滅應念即入淸涼極樂國矣此觀學聚乃脫苦 下消滅應念即入淸涼極樂國矣此觀學聚乃脫苦 之妙藥然初心觀未易成但將阿彌陀佛審實話頭 以尋常無有正念故專逐妄想流轉攀緣不停以滋 以尋常無有正念故專逐妄想流轉攀緣不停以滋 於若之路循却步而求前也只須發勇猛心切不可 脫若之路循却步而求前也只須發勇猛心切不可 說不能乃自畫耳

示吳啓高

士爲授優婆塞戒復扶香請益老人因示之日一切門弟子以結未來出世之緣因都名福常號淨心居啓高久歸三寶齋心有年今來匡山·求授戒法爲法

法行所謂眞常之福從淨心中謂是故也居士果能 淨唯心淨土自性彌陀元不離當人一念是爲真實 供養三寶者皆爲莊嚴淨土之資所謂心淨則佛土 即日用現前事事皆是淨土之因即所施種種四事 短則心地清淨以此淨心念佛念念不忘心心不**断** 以持戒之心念佛淨除心中夙染貪瞋癡愛種種煩 苦可斷衆福可集生死可出淨土可生皆從最初一 疆增則爲常樂之果是知一念發起受戒之心則衆 滅則福增心淨則爲淨土之因苦滅則爲極樂之本· 戒法教人止惡修善以惡止則心淨善修則苦滅苦 **慧人但有一念返省發起厭苦之心便是出苦之路** 愛更增苦本不知出苦之要是為顛倒故學世之人 土衆生所聚散名堪忍愚迷之人以苦爲樂轉滋貪 凡所作即是出世之行雖未出家即名佛子從今果 念發心爲因地也居士今日既能知此事發此心故 但有一念求生淨土之願即是成佛之本所以佛說 但有一念知是無常苦空發心求出離者是即大智 世別種種業行皆是無常盡爲吉因敢感生娑婆國

之則道念自堅信心日長矣珍重珍重。語信不疑何用別求佛法但不可作世閒尋常事目

示無知鑑禪人

為生死大事要知世別一切諸法皆是苦本身是苦為生死大事要知世別一切諸法皆是苦本身是苦縣必要發心修行求出苦之道先須看破現在身心境界富觀此身乃地水火風四大假合成形四大各境界富觀此身乃地水火風四大假合成形四大各境界富觀此身乃地水火風四大假合成形四大各度無事。 是業無非是罪即此一念便是生死苦本切不可隨他妄想流轉日用密密觀察妄想起處就要看破界不過一個妄想地動意無非是罪即此一念便是生死苦本切不可隨他妄想流轉日用密密觀察妄想起處就要看破當心意。 一次是為正念現前則妄念不待還而自消矣如此二次是為正念現前則妄念不待還而自消矣如此二意。 一次是為正念現前則妄念不待還而自消矣如此二次。 一次是為正念現前則妄念不待還而自消矣如此二次。 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想と 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想と 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想と 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想。 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想。 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想。 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想。 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想と 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想。 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想的。 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想。 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想。 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想。 一次時中密密用心唯此一念為主其餘一切妄想。

示徐清之

還滅則成絲覺之因若一念了知人法無我因綠性開說三界上下法唯是一心作言三界上者乃出世門十法界中一切聖凡善惡因果依正莊嚴皆由一心之所造然此一心非別乃吾人日用現前分別了心之所造然此一心非別乃吾人日用現前分別了心之所造然此一心非別為不見有人一心寂靜則為於一切由心非次第造乃日用現前念部之心也既然一切由心非次第造乃日用現前分別了念轉十惡而爲十善則爲人天妙樂之因若一念轉十惡而爲十善則爲人天妙樂之因若一念轉十惡而爲十善則爲人天妙樂之因若一念轉十惡而爲十善則爲人天妙樂之因若一念善語兩忘內不見有我外不見有人一心寂靜則爲於所作之業於十法界流轉若一念由貪瞋癡所作之轉十惡而爲十善則爲人天妙樂之因若一念善則爲於不見有我外不見有人一心寂靜則爲於

空無有作受者而不妨現行布施持戒忍辱、二道之行化度衆生則為菩薩之因若一念順悟自心本來行化度衆生則為菩薩之因若一念順悟自心本來光明廣大無不包容無不濟度了無一法當情生佛平等即為成佛之因故此一心廣大無外本來清淨之人矣此所以維摩稱為不二法門也居士若能體之人矣此所以維摩稱為不二法門也居士若能體之人矣此所以維摩稱為不二法門也居士若能體之人矣此所以維摩稱為不二法門也居士若能體之人矣此所以維摩稱為不二法門也居士若能體之人矣此所以維摩稱為不二法門也居士若能體之人矣此所以維摩稱為不二法門也居士若能體之人矣此所以維摩稱為不二法門也居士若能體之人矣此所以維摩稱為不二法門也居立為不為其實。

示若曇成禪人

乃吾師釋迦世尊特爲開示衆生佛之知見爲成佛不移遂以此爲盡形壽焉請益老人因示之曰此經堂不數年閒能持者數十輩去住不一唯禪人一志變不數年別能持者數十輩去住不一唯禪人一志成禪人約同志於金沙之東禪結靑蓮社以持誦法

若徒以紙墨文言爲妙法以循行數字爲持經而心 爲光明藏如是受持是真精進是明真法供養如來 眞經順將八識田中歷劫已來愛情煩惱種子盡化 相屬處洞然則見色聞聲目前現證嘗轉如是一卷 向末展卷軸已前突開項門正眼際破無明諸法實 法華此又示持此經者第一義門禪人今持此經試 爲成佛之妙行明矣唯六祖云心迷法華轉心悟轉 銀而悟明一心者如永嘉而下非一人也是知此經 必得清淨如經具明金口親宣非虛語也此經自入 建立止觀妙門發明百界千如實相之旨向後依止 種也故委明持經之法師即於現世父母所生六根 日此法華三昧也非子奠證非我莫識故天台因之 **香大師讀誦此經乃見靈山一會儼然未散思大師** 中土受持者多獨南岳思大禪師所悟精深天台智 山會上各各授記成佛乃的示此經爲成佛正因真 生一處以持此經爲行故昔受化者直至今生於靈 得聞此經展轉傳持故凡會從聞者必生生世世共 真種故述其往因謂於大通智勝佛時爲十六王子

> 飲本如是則牛皮未透笠圖邁眼而**已**耶 地未淨煩惱未空此何異以水泡為摩尼以蒸沙為

示觀智雲禪人

學道入以等心死誓爲出生死第一義又放下爲入一生居半今幸有此卓錐之地正是爾等放給身命處生則同緣死則同歸爾當放下諸緣一心寂鄙於此集二三同志老者專心念佛情修淨業舊死爲期出法道常存慧命不斷是不負歸依之念也應念聞則法道常存慧命不斷是不負歸依之念也應念聞則法道常存慧命不斷是不負歸依之念也應念聞則法道常存慧命不斷是不負歸依之念也應念聞則法道常存慧命不斷是不負歸依之念也應念聞則法道常存慧命不斷是不負歸依之念也應念聞則法道常存慧命不斷是不負歸依之念也應念聞則法道常存慧命不斷是不負歸依之念也應念聞則法道常存慧命不斷是不負歸依之念也應念聞則法道常存之。則非眞實爲生死人凡居常務要以法爲懷欄維護林調和大衆內外一體賓主一心以法爲懷欄維護林調和大衆內外一體賓主一心以法爲懷欄維護林調和大衆內外一體賓主一心學道入以等心死誓爲出生死第一義又放下爲入學道入以等心死誓爲出生死第一義又放下爲入

示凝音通禪人

正修行路比來學人多禪者多被邪師過點引入邪佛祖修行之要唯有禪淨二門景以萬行莊嚴是為

参三下古本

十劫亦無出頭分爾其勉之 單提起一聲阿彌陀佛歷歷分明心中不斷如線貫 不淨妄想不除只道念佛不靈驗如此縱到三生六 亂便是超生死淨土之時節也若但口說念佛心地 **襍不亂夢寐如一如此用心念到臨命終時一心不** 定於一切處不被境緣牽引打失如此日用動中不 珠又如箭筈相拄中閒無一毫空隙處如此著力靠 瞋癡愛種種襍亂念頭一齊放下放到無可放處單 二法即念佛時須先將自己胸中一切煩惱妄想貪 不知念佛之妙故多錯誤耳且念佛即是參禪更無 老人極力主張淨土真修世人不知都輕視爲尋常 得解脫處似此不唯自誤亦且誤人可不懼哉是故 見獨林墮我慢魔增外道種是大可憂況十無一人

答德王問

持至臨終安樂後世不迷此乃大王宿習般若根深 持不殺飛齊疏三年但念末後一著爲急有何法修 承大王諭使者訪問山僧修行直捷法門云王巳能 積生修習故今處富貴尊位不昧本來一念真切參

冬山〇甲亭生会意名

了悟自心其下手工夫則心單提話頭參求直至明 昔有天台智者大小止觀乃成佛要門其大止觀文 此實古今共由不論貴賤智愚俱能真實下工夫故 非大王所易行者亦不敢進今獨有佛說西方淨土 現前境界逆順處多用不上況末後大事乎此法亦 下手安心亦不易入即能知能行亦難得親切日用 繁難於理會其小止觀雖簡易其實要說解明白而 不易接見善知識故不敢以此勸進其有依教修行 葢不多見是乃出家人易爲行耳今大王尊居深密 知識時時調護提斯方得正路在昔王臣亦有能者 見自心而後已此獨被上上根人一超直入又須善 行者有禪與教兩門人人共由禪則傳燈諸祖直貴 之藥方便多門不是一種自教流此土古今依奉修 求法要山份愚劣敢以實對惟佛說法度人如應病 萬人終行萬人效驗此願大王留意焉謹將日用修 大乘經爲引發以發願為趣向以布施爲福田莊嚴 一門專以念佛一事爲要以觀想淨境爲正行以誦 行規則條列如左

把一切世事都不思想但只將一句佛作自己命根 工夫更要親切每日除二時功課之外於二六時中 聲佛時時現前若遇逆順喜怒煩惱境界心不安時 **咬定牙關決不放捨乃至飯食起居行住坐臥此一** 軍將一聲阿彌陀佛橫在胸中念念不忘心心不昧 今不廢者是爲常行也至若爲末後一踏大事其做 修更妙此乃我 此日日以為定課定不可缺此法教諸官眷如法同 往生彼國語在功課經中此是早功課院亦如之如 佛名號或三五千聲或一萬聲完即對佛囘向發顧 課之法不必拘套但以念佛為主每日早起禮佛即 界實事最是明白其修行之方亦有節次如僧家功 經一卷便是證明其經中所說都是彼國及國土境 念煩惱是生死苦根今以念佛消滅煩惱便是佛度 就將者一聲佛提起一拶即見煩闔當下消滅以念 誦彌陀經一卷或金剛經一卷即持數珠念阿彌陀 土法門但專以念阿彌陀佛發願往生彼國有關陀 我佛爲救度娑婆世界諸吉衆生專說西方極樂淨 聖宗仁孝聖母所行垂法宮聞主

> 中作得主則於臨命終時分明仍想自身坐在華中獨 事不難行只是要一念為生死心切軍單靠定一聲 事不難行只是要一念為生死心切軍單靠定一聲 事不難行只是要一念為生死心切軍單靠定一聲 中作得主則於臨命終時分明了了便知去處矣此 中作得主則於臨命終時分明了了便知去處矣此 中都喜受用殊非世閒五欲之樂可此也惟大王留 意此法便是真實修行捨此更無過此直捷省事者 意此法便是真實修行捨此更無過此直捷省事者 意此法便是真實修行捨此更無過此直捷省事者 意此法便是真實修行捨此更無過此直捷省事者 大數喜受用殊非世閒五欲之樂可此也惟大王留 大數喜受用殊非世閒五欲之樂可此也惟大王留 大數喜受用殊非世閒五欲之樂可此也惟大王留 大數喜受用殊非世閒五欲之樂可此也惟大王留

生死之時節心直至臨命終時此華現前自見已身

坐蓮華中即有爾陀觀音勢至同來接引一念之頃

眼合眼了了不味乃至夢中亦見阿彌陀佛與觀音

勢至同在華中如白日明見若此華想成就便是了

不拘行住坐臥亦不計歲月日時只要觀境分明開

臺之上端然不動想佛放光明來照其身作此想

實諦信切莫懷疑 念佛一法得入親切其餘總不必如心矣願大王著 善運返至大病至不可療萬萬不可惡於此也若是 若怕疾病要學調息運氣求却病此非良法若氣不 不求長生但顯末後明白除此再無可明白之法矣 路修行但念阿爾陀佛给此別無妙法矣聞大王心 是昏談乃佛經中處處開導直捷法門所謂惟有徑 即得往生西方極樂世界居不退地永不復來受生 死之苦此實修行一生了辦之實效也惟此法門非

又

事件山僧伏讀再三足見大王體死生死大事要 明性命根宗了達佛祖禪教旨趣山僧愚昧不敢 正月二十七日僧蘊眞奉大王令旨持睿語下問 妄譚謹按教典一一條牒來問對答分明陳列如

左伏乞睿覧 有佛無佛端的何爲又說一靜之中無我無人猶 日無字心地何處用工人生到底怎麼下落又說 一問三乘之道性命之原教禪之說達磨之道何

工夫達磨之道如此而已除此心外更無別法後來

禪道既久學人不能頓悟故有參禪提話頭之說其

話頭不拘是誰隨將古人公案一則蘊在胸中作話

生之念一一細剖解釋是所願聞 如太虚到底如何可將上中下乘言語佛祖度衆

云將心來與汝安二祖云竟心了不可得達磨即與 喘心如墻壁可以入道此便是教多禪最初第 指二祖又問豈無方便磨云汝但外息諸緣內心無 達磨教二祖問日汝作甚麼二祖云乞師安心達磨 禪此宗不立文字只貴明心見性其修進工夫當初 上一路從前諸祖所傳即指此心以爲宗極是名爲 之佛不屬修證階差不屬三乘漸次此禪宗目爲向 悟此心則生死永絕只在當人一念順悟即名如如 本有圓心以爲禪宗故對武帝云廓然無聖若能順 凡不立生佛同體無二無別此正達磨西來直指此 答佛教宗旨單以一心為宗原其此心本來圓滿光 印正云與汝安心竟此心不可得一語便是西來的 明廣大了無纖塵清淨無物此中本無迷悟生死聖 著

原家來参去久久忽然心地迸開如大夢覺即名為 院多來参去久久忽然心地迸開如大夢覺即名為 無一物故說無我無人衝如太處悟處便是下落既 無一物故說無我無人衝如太處悟處便是下落既 是了悟自心則壓劫生死情根一齊順斷既悟此心 及說甚佛與衆生故從此已去三界往來任意度生 不絕諸苦不被生死拘留是稱菩薩此便是多禪到 不絕諸苦不被生死拘留是稱菩薩此便是多禪到 不善海無有彼岸正謂此心

不斷為行此三即知覺思慮之心其識即命根初未不斷為行此三即知覺思慮之心其識的母別的人人血內之驅名為色身即今知成幻妄身心即今人人血內之驅名為色身即今知成幻妄身心即今人人血內之驅名為色身即今知成幻妄身心即今人人血內之驅名為色身即今知問無事無事為受別負責或命念不斷為想此想相續知苦樂等為受別負求念念不斷為想此想相續知苦樂等為受別負求念念不斷為想此想相續知苦樂等為受別則負求念念不斷為想此想相續知苦樂等為受別則負求念念不斷為想此想相續知苦樂等為受別則負求念念不斷為想此想相續知苦樂等為受別負求念念不斷為想此想相續知苦樂等為受別負求念念不斷為想此想相續知苦樂等為受別則負求念念不斷為想此想相續

縱貪瞋癡愛即墮三途受苦無量此三乘法若學中

下乘終則一向愛戀此身貪著受用妄想之心不能

直是悟了此心方是末後下落處未悟此心俱在生

死海中隨善惡轉若作善即生天上人中若作惡業

佛此教中之極則也三乘修行之法甚多說不能盡

但依一法修行皆得出生死苦非止一端種種方便

乘又云上乘此二乘法一大藏經都說此事只是要

人了悟此心末後會歸一心即名最上一乘是名為

迷時但只云性既迷真心有此幻妄身心其識連持定所是自己是是一年故名,不是一个人的人的人,是苦本其苦因貪瞋疑愛煩惱所集先教人知此身是苦本其苦因貪瞋疑愛煩惱所集為下中二乘因他但能自度不能度人不知同體之意只得一半故名小乘及有大心衆生既能自度又意只得一半故名小乘及有大心衆生既能自度又意具得一半故名小乘及有大心衆生既能自度又意用,但是不是一个人的人的人。

四行又不能全亦不能即出生死縱修善法生在天四行又不能全亦不能即出生死縱修善法生在天上福盡還墜如汲井輪終無下落若求悟明此心可了生死無奈如今現前事法交錯又不能下苦心多死縱參亦不得真善知識指教恐錯用心返落邪道如此豈不虚過一生雖要求箇下落到底無下落以如此豈不虚過一生雖要求箇下落到底無下落以如此豈不虚過一生雖要求箇下落到底無下落以如此豈不虚過一生雖要求箇下落到底無下落以如此豈不虚過一生雖要求箇下落到底無下落以此今將念佛淨土法門爲大王陳之

> 故名極樂以彼佛國絕無穢汚故名淨土無有女人 設接引方便也 果後世下落如此分明除此之外別說臨終有甚境 是實事今一切人求生彼國者更無別法但一心念 現前悔之晚矣此是最省要直捷修行法門是佛別 界皆是那說若不念佛及臨命終時隨造惡業惡境 不復墮生死苦趣名不退地菩薩此便一生修行結 前見自己身坐於花上一念往生既生彼國從此永 命終時即見阿彌陀佛放光接引見大蓮華夢現在 佛以爲正行日日回向又心想蓮華身坐其中故臨 淨種種清淨全不同此世界彌陀經中所說一一皆 然故無求不得苦諸上善人俱會一處故無冤家聚 蓮華化生故無生苦壽命無極故無老死苦衣食自 故說西方淨土名爲極樂世界以此國中但受諸 富貴受用種種樂事都是苦因以此極苦難得出難 會之苦以彼國土七實莊嚴故無五碟荊棘便利不 樂

又以布施齊僧修諸福田功德以爲莊齡佛土之助一修淨土不必求悟明心性專以念佛觀想爲正行

事決不可錯信誤了百劫千生也但看校散經中說 所求乃是好事若不是所求善心中來都是邪魔之 前在生念佛水淨土的沒時淨土佛境現前以遂我 在生怎麼樣沒被怎麼樣在生造惡的沒時惡境現 也至是在血肉驅上妄認妄指之談俱無下落若問 忘佛號即此便是話頭就是性命根宗更不必問如 的分明若說有相皆妄此言是多禪門中的話單單 何是性命當人本來面目及三魂七魄元辰之說者 說都是那法皆不可信單單只是寫信念幾一門每 要盡情吐却乃至全真採取陰陽等術內丹外丹之 等教及妄立南陽淨空無爲等教歸家等傷一一皆 其念佛心中雖發願往生然必要知先斷生死之根 日誦彌陀經兩卷念佛若干或不計數只是心心不 是近代那人望空担作此等言語感亂世人之法俱 怒斌恨之心及執著鹽愛之心與一切邪魔外道那 師所說那教之法即如今一類邪人妄稱圓頂達磨 用及美色淫藝滋味口體一切皆是苦本及一切真 方有速效如何是生死之根即今會著世閒種種受

賢王如今國事萬機決不能多禪惟有念佛最好不 也已上數條伏乞賢王詳察留意焉 知非是人可學得的切不可想此等事若念佛到應 習此事若成了佛自然有神通不待求也其鬼神前 生海土一門不必明心見性軍軍只是念佛佛者覺 命終時自然預知時至亦是尋常念力成就不可發 巧法其前知乃神通之事此不必求當時佛不許學 拘閒忙動靜一切處都念得只是一心不忘更無別 不昧則臨終時此心不昧即此心不昧遠便是下落 · 若念念不忘佛即念念明覺自心若忘了佛便是 是觀想成就又何以妄相推之終行各有門路不同 不覺若念至夢中能念即是常覺不昧現在若此心 正不比妄談若多禪則以明心見性為主若念佛水 想心最難故今以淨想換去染想耳其蓮華現前正 只求清淨真心不容一物故說有相皆妄以念佛淨 不可一樂論也已上所答皆依佛祖經教中一一考 土原是想心成就經云想養成國土以多禪娶斷妄

整山老人夢遊集卷第十

謂以專念西方極樂世界阿彌陀佛所終善根囘向

山老人夢遊集卷第十

侍 者 福

善

嶺南弟子 劉起相 重較

答湖州僧海印

答承教有言淨土有三謂常寂光土實報莊嚴土方 問古人巳禀單傳直指復修淨業而欲往生者爲 修者墮偷心枝路心工夫那得成片如巳悟則畫 是悟後隨顧起行耶為是未悟二行棄修耶若兼 華藏在在蓮苗十方無不可者何獨樂西方乎

所現至若求生西方淨土者名方便有餘土乃華藏 塵塵刹刹皆淨土者乃華藏莊嚴實報土耳亦惟心 便有餘土若諸佛菩薩與從上單傳悟心諸祖皆受 信心難成意欲退者當知如來有勝方便攝護信心 **廛刹中一土耳此是欲求往生者論云衆生初學懼** 自性法樂無一不歸常寂光土者是謂惟心淨土若

> **业若乘修此行如論所云若觀彼佛真如法身常勤** 而修者即永明所云但得見彌陀何愁不開悟之意 願求即得往生常見歸依佛故終無有退此乃未悟 旨不知淨土之意也是知已悟者不待求而自然往 修習畢竟得生住正定故此豈倫心是未達念佛之

生未悟者亦非偷心念佛可生也

問多禪費一念不生念佛責淨念相機茲參究念 分明多時則二俱坐斷故多功漸勝念佛漸微他 一門意在妙悟而得往生也今念佛時雖心佛

時焉得亦悟亦生耶

號相繼不斷者是名繁念非淨念也乃中下根人專 此將四字佛號放在心中為淨念耳殊不知四字佛 答多禪實一念不生是巴若言念佛實淨念相繼者 念佛意在妙悟者乃是以一聲佛作話頭多究所謂 以念佛求生西方正屬方便淨土一門耳今云參究 念佛參禪公案也如從上諸祖教人參話頭如庭 等公案隨提一則蘊在胸中默默多究借此塞斷意 柏樹子麻三斤乾矢橛狗子無佛性放下著須彌山 前

展使妄想不行久久話頭得力忽然因地一聲如冷 灰念佛亦如此多但提起一聲佛來即疑審是誰深 突觀死此佛向何處起念的畢竟是誰如此疑來疑 表象之又多久久得力忽然了悟此爲念佛審實公 本參之又多久久得力忽然了悟此爲念佛審實公 本參之又多久久得力忽然了悟此爲念佛審實公 本參之又多久久得力忽然了悟此爲念佛審實公 本參之又多久久得力忽然了悟此爲念佛審實公 本參之又多久久得力忽然了悟此爲念佛審實公 本參之又多久久得力忽然了悟此爲念佛審實公 本多神亦不知念佛矣若多究果至淨念現此不但不 知多神亦不知念佛矣若多究果至淨念現此不但不 知多神亦不知念佛矣若多究果至淨念明此不但不

得耶為當更起疑情窮多力完以求妙悟耶便隨緣消業不造新殃任運騰騰以待夫藏乾自問即心即怫不外馳求之理信得及見得徹了為

北

後修是則悟後正好修行古德云學人但得一念順徒信無益並有但以信字便爲了徹耶古人云先悟答信得即心即佛及只是空信須要行證若無行證

子名為現業流識的居之後即將悟得道理二六時子名為現業流識的所居之後即將悟得道理二六時中密密綿綿爭除現業流識名之為修不是捨此悟外更有修心淨除現業乃為隨綠消費業全仗悟之之功乃能有力淨除惡暫若但空信將何以消惡暫不所云疑情参究等正是淨除現業工夫若未悟時不所云疑情参究等正是淨除現業工夫若未悟時不所云疑情参究等正是淨除現業工夫若未悟時不所云疑情参究等正是淨除現業工夫若未悟時不所云疑情参究等正是淨除現業工夫若未悟時不所云疑情参究等正是淨除現業工夫若未悟時之時後則惡智起處一照便消自然如紅爐片雪其悟後消業與未悟時工夫日劫相倍不可同日語其間後消業與未悟時工夫日劫相倍不可同日語其間後消業與未悟時工夫日劫相倍不可同日語

相續只是動靜兩閒如何提究疾得相應不落其應緣時若管帶又被古人詞斥任之不能問參禪暫有諸念不生時其話頭便提不起亦禁

若以聞信入乃知解邊事若靈雲睹姚華香巖聞擊

學人迷却自己把作實法會耳若參禪人未悟時不

答教有信解行證四門其解有解悟之解知解之解

祖當必有深義

此提究自然疾得相應若以電光三昧爲得終落識眞無生意耶參禪工夫只在一念不生以前著力如到此應緣不須管帶自然任運合道豈有古人訶斥

吐却所謂入此門來不存知解便稱祖位若聞他家

屋裡事解得當爲已有豈可稱爲祖師耶已透法身

竹頓了自心此解悟之解一解便徹自心即將解字

情窠臼

悟時用自心豈有悟後又起妄想耶有黑人素子,不斷分別不問來嘉二雖無念雖無生豈有二耶但迷時用妄想為生在妄想中故望妙悟將謂別有耳棱伽云從上人坐在妄想中故望妙悟將謂別有耳棱伽云從上人坐在妄想中故望妙悟將謂別有耳棱伽云從上人坐在妄想中故望妙悟將謂別有耳棱伽云從上人坐在妄想中故望妙悟將謂別有耳棱伽云從上人坐在妄想中故望妙悟將謂別有耳棱伽云從上人坐在妄想中故望妙悟將謂別有耳棱伽云從上人坐在妄想中故望妙悟將謂別有耳棱伽云從上人坐在妄想中故望妙悟將謂別有耳棱伽云從上人坐在妄想中故望妙悟將謂別有耳棱伽云從上人坐在妄想中故望妙悟將謂別有耳棱伽云從上

豈可與知解者同耶

員實悟的豈特解不稱祖所謂初發心時即得菩提

若影子不忘正墮識情全存知解是以古人不貴若

已透法身洞山必令盡識是證非解也茲解位稱門便登祖位夫祖位甚深聞解便可登乎況雲門問死明云先以聞解信入後以無私契同一入信

登比循行數墨春禽畫號者耶 必不可少若悟後誦經則字字心光透露盡爲妙行 妨持誦乃借法力加持以爲助行如三期懺悔古人

應於一門頭戶底非眞實也真多實悟之士決不墮地,亦非以口舌相見至若廣多知識只為決澤此心,所不是可言相思不拘有語無語自然自擊道存不是定要當門也然不作佛莫然佛不解語過矣然自知未悟時切不務真修而務機鋒轉語過矣然自知未悟時切之上稱為明眼人若作家相見如兩鏡格。不足取若是多學有疑明眼人若作家相見如兩鏡格。不足取若是多學有疑明眼人若作家相見如兩鏡格。

信於見性法門耶 悲增上本高迹下而人自不知乎不然學者奚取 那隔世便迷耶豈悟有淺深習有重輕乎抑亦大 臨終彼諸祖得自由者勿論其草堂靑印禪師等

答古人所云一悟便了生死者乃悟自性法身耳尚有積劫無明習氣種子皆生死苦因未得頓盡故須有積劫無明習氣種子皆生死苦因未得頓盡故須可以七信之悟便為完竟了生死耶是知變易生死問典微苦相應故云菩薩有隔陰之昏所云轉囊且是道力殊勝故能轉非定消定業也其實悟有淺深是可限是正大類倒耳經云一成真金體不復重為歲變必不至大類倒耳經云一成真金體不復重為歲變必不至大類倒耳經云一成真金體不復重為歲變必不在此論然佛不能逃定業又非悟心之咎也不在此論然佛不能逃定業又非悟心之咎也

答段幻然給諫

此

問見自性者得自由於生死作得主者能轉業於

問日。圓妙眞心未有不由五陰而障人如來地未

不併入五陰則行布內少破魔之功動行布不成 位太何必併歸破陰是有二種門頭突且歷位而 超今若云破陰自破陰何必併歸六十位位次自 行布也破陰而不併入三賢十驅則破陰中缺修 盡則不能超十住等至於藏陰銷落六十位次始 後人未細心耳某陰未盡則不能超十信某陰未 **尚未決則而經云又以藏陰若盡如淨瑠璃內含** 其破色陰一一可激獨以受想等擴入六十位中 身上歷菩薩六十聖位可見破色陰決在三漸次 大諸家解尚未分明豊學問難思推散難到故量 執迷今掠宗抄案之徒只實眼明不實踐履調此 超之位文破陰不成破陰也望師一一分疏開我 實月如是乃超十信等可見五陰該在行布中但 無疑矣且又修營其修增進諸功皆在色身而起 之耶經云受陰盡者雖未編盡心雖其形從是凡 **强而深深必由破某陰而後濟某位以破障對位** 有不由破陰而成棲嚴五十五位行布詳矣由淺 頂上行有何五陰有何行布大妄語成害將何

昌段然順首

原然亦未談及此學者一向緊未留心即山野通識妄測此義從前諸師亦未疑及即宗鏡深窮性相之乃諸佛菩薩自住三擊地中親證境界非凡情所可答讀來問變嚴破陰淺深與五十五位相對同別此

心也瓔珞位次雖詳意在分斷分證故約見思慶沙 在藉壓圓融故初發心時便成正覺是以果覺爲因 圓圓果海一位具足一切位雖設行布不說斷證要 路裡樂門故修證位次始終詳悉且又特申定中被 死之具即一代時教盡是破陰之談散在五時無處 終因是先悟妙圓真心為本發心即以此心漸斷習 不同單約梭嚴大定頓悟漸修故以不生滅心爲本 無明以定列行布如天台所明此經與彼二經迥然 陰驗其淺深故其位次不同華嚴瓔珞等說以華嚴 陰境界者以此經異修專以禪定一門深入而以破 攝述哲修證因果備殫聖凡二路以便修行者爲一 不說但未次第唯以核嚴經一經收盡一代時教統 能超生死者故如來出世單單只是破衆生五陰生 衆生通受生死之苦具修行之士未有不破五陰而 **歐觀到故敢依聖言量略陳其獎所言五陰乃一切** 五陰未破定中境界安敢妄言以居士爲法心切問 如來閱云云深為有見山野廣淺暗昧且禪定未深 但於三漸次及結位之文小有發揮亦未詳配位次

文也今若以五陰對為合位高下則經義大不然矣 入於如來妙莊嚴海以此佛語證之則在三漸次中 如淨琉璃內含實月如是乃超十信以至等覺圓明 土的然清淨譬如琉璃內懸實月後文云藏陰若盡 專以買如爲行本且云反流全一六用不行十方國 中即獲無生法忍從是漸修安立聖位然無生法忍 賢後斷無明在登地與今經少異詳今經文三漸次 先悟後修正與論義相符若約論義先斷惑棄在三 位矣事須漸除因次第盡此又約斷以明位也此經 以經有明文則日理須顧悟乘悟併消此則不歷諸 中之細細中之蠹初地至七地斷三細中現相八地 計名字起業三種靈惠三賢斯相續智相二惡為靈 乃登地巳證平等眞如方得此忍是經意以三漸中 至等覺斷轉相金剛最後斷業相此經中斷證之明 經以破陰定位則難合何也若約論則信位斷執取 定位次是關先悟後緣故論就破惑定位則易明此 氣以定位次邊深正起信論發心修行以悟真如爲 本至其斷惑論又多依相宗斷證特約六嶷三細以

實覺由是觀之則初修定時在三漸次中以定研窮 了自心是名爲悟即以所悟淨除現業流識是名爲 重的位以判淺深高下耳斯約頓悟漸修則由破陰 除因次第盡乃約侵斷歷劫無明習氣特就厚薄輕 則能超越諸位矣若云從此安立聖位則是事須漸 已破八識透出金剛心地正是理須順悟乘悟併消 是以金剛心爲禪定本故經云是名妙蓮華金剛王 破八藏根本無明而以定研窮縱八藏未破而見思 修非此外別有修也以衆生隨生死流流有四種謂 而入位元無二路也此義正與潙山云若人一念順 散之具故經特出發業潤生二種無明是以大定直 在單破生死根本專指經習為生死之根大定乃破 慶沙寶感任運先落至若以不生城心爲本修因正 **蹬機對談修證中一段義其所破惑亦隨機偏重乃** 位矣又何敢妄以破陰大第配諸位耶諦觀佛意必 不然矣此經正義大與諸經不同者以諸經葢隨時 巳超諸位應於未登位前巳破識陰又不待相似信 時應病之藥耳此經總收一代時教無機不攝重

> 重重磨煉方始得還本源心地故從信位即云圓妙 重重磨煉方始得還本源心地故從信位即云圓妙 重重磨煉方始得還本源心地故從信位即云圓妙 重重磨煉方始得還本源心地故從信位即云圓妙 重重磨煉方始得還本源心地故從信位即云圓妙 重重磨煉方始得還本源心地故從信位即云圓妙 重重磨煉方始得還本源心地故從信位即云圓妙 重重磨煉方始得還本源心地故從信位即云圓妙 重重磨煉方始得還本源心地故從信位即云圓妙

陰而入諸位耶若帶妄想而修則不名爲眞條矣且以此心中中流入一切妄想滅盡無餘又安可以帶

皆是妄想爲本若破陰對位則經初信文中便云即

顯以此大定消磨習氣之功也且如經云五陰各各

開敷中道純眞末後乃云如是重重單複十二者正

妙用耳以所化者淺故其位下所化者深放其位高 斷分證之可比由先破陰而後八位非約破五陰以 以觀心研窮進破無明的位以明證入之淺深非分 生死業習今以金剛如幻三昧磨煉業習化作神通 帶五陰而入諸位也明矣豈可單破色陰耶由五陰 難立諸位由此證之則在三漸次中已破五陰決不 · 頭生滅不停非為正定若藏陰不破則未悟真心 不得正受若想陰不破則難入妙奢靡他若行陰不 破色陰耶受乃執受四大有苦樂等若受陰不破則 三漸次中懲愛乾枯根境不偶現前殘質不復種生 配諸位也明矣又豈可執定破陰以併行布位次耶 圭山云覺前前非名後後位以此觀之此經大義單 如來藏中具有恒沙稱性功德向被無明變作恒沙 明寶氣正謂事須漸除至若五十五位諸妙功德以 陰乃戰悟其理其後諸位但約大定以消磨壓劫無 俱破方名真悟由破八藏進修乃名真修是則破五 此則已出三界生死矣後文識陰盡則超命獨豈但 然破陰之說佛恐諸修行人得少爲足錯亂修習故

> 存順悟自心順出生死一著爲急務若自心一明識 存順悟自心順出生死一著爲急務若自心一明識 之一時便了無事則諸佛又何假更歷三大阿僧祇劫 一悟便了無事則諸佛又何假更歷三大阿僧祇劫 一悟便了無事則諸佛又何假更歷三大阿僧祇劫 是言證望自爲超佛越祖乃是憎上慢人未得關 是答之士同日而語耶昨東行見禪者甚多而墮上 夏修之士同日而語耶昨東行見禪者甚多而墮上 夏修之士同日而語耶昨東行見禪者甚多而墮上 夏修之士同日而語耶昨東行見禪者甚多而墮上

裏六祖臨終自知去處豈非隨顧所往如是殆非妄

又云入息不居陰界出息不涉衆綠豈在受想行陰

似斬春風豈色陰能礙也又云老僧能轉十二時

言證聖者可擬也吾人只實究明自心求出生死一

陰自破則前四陰不待破而自破且如將頭腦白刃

生人

下是亦地上菩薩名大阿羅漢今佛旣現小應身示

閉而諸外道堅執我見未易顯化故舍利等亦

中文殊象王迴旋則含利弗等六千比丘成道於言

感故現身耳其所說法爲權智也華嚴會上邀多林

明暗劣之見如此高明有以教之。著且不必論破陰與位次合不合以理揆之聖言證

隨現**聲聞輔**揚法化爲影響衆所謂內**祕**外現之**傷**

西堂廣智請益教乘六疑

文義俱建願垂分析本被大乘二乘絕分鹿苑轉四諦時身子目連尚本被大乘二乘絕分鹿苑轉四諦時身子目連尚本被大乘二乘絕分鹿苑轉四諦時身子目連尚

佛真法身獨若虛空應物現形如水中月以低隨機機感現小化身八相成道於應野苑說三乘法所謂機感現小化身八相成道於應野苑說三乘法所謂と一乘法獨被大根乘生是謂稱實智說爭柰萊生上一乘法獨被大根乘生是謂稱實智說爭禁來生

野是色相身未入定時應見何故佛教起念方見作一脚以發悲歡離合之情及至散場則了無干涉 作一脚以發悲歡離合之情及至散場則了無干涉 在一脚以發悲歡離合之情及至散場則了無干涉 工問華嚴經中。普眼不見普賢如是三度入定值 型三千大千世界不見却來白佛佛教靜三昧中 起念便見普眼纔起一念即見在處空中若普賢 之身是一貫法界應在三昧中見何故不見若曹 之身是一貫法界應在三昧中見何故不見若曹 之身是一貫法界應在三昧中見何故不見若曹 之身是一貫法界應在三昧中見何故不見若曹

耶

者以法身無彼此迭相見故是知可見者乃就第二答法身無相饒他普眼亦莫能覷於定中求而不見

門頭故起念方見耳

能依業識多禪本是大乘法門若依事識而多返者菩薩依業識熏修今之學人多究但依事識不不是聚妄心有二一者凡夫二乘依事識熏修二二問起信論中眞如內熏故有妄心厭生死苦要

や葉母宝

成凡夫二乘之行若参時二藏同用又違古人云

離心意識多願垂開決

二藏巢曰若得少爲足便不能離心意識矣。直要打破業識漆桶直透向上未迷巳前一著不落、依藏發心取證耳今參禪人發心雖是事識而用志答教說凡夫二乘依事識修菩薩依業識修乃約就

四問古人云不貴子之行履祇貴子之見地又云二識巢臼若得少爲足便不能離心意識矣

也

經論依解名爲見地一說悟明後方爲見地若學見地不明墮落坑壺今諸方解說有二一說博學

即今初心操履以何法爲見地免離墮坑之患耶解爲見地何故宗門不許看教若悟後方是見地

答解爲見地有三種不同有學解有信解有悟解若

此雖是名見地謂依地作解其有未親言教但只決從教上或祖師公案上解得佛祖究竟處不落枝岐

解如此亦要操修以臻實證其悟解雖一念願悟尚是爲悟解此三皆名見地但依他解多落知見障信定信自心了無一物是爲信解若参究一旦明本有

有無始後細惑障亦要淨除是三種見地雖貴若不

+ 4120/11-0

非金不行履古人一期之語不可作實法會也 行履終難究竟今古人所實見地者但就根器爲本

與物交終日散心如何令學人日用中動靜無違心念紛飛話頭沈沒若惟靜坐又逸古人操魔若心惡紛飛話頭沈沒若惟靜坐又逸古人操魔若不要在靜坐多功有力若在四威緩中與物交接

答古人做工夫要在行住坐臥四威儀中看取不是 答古人做工夫要在行住坐臥四威儀中看取不是 小其實要將靜中做的去動處職看如何若用心編 高自然動靜如一打成一片夹今對境心念粉飛是 密自然動靜如一打成一片夹今對境心念粉飛是 密自然動靜自然不被他轉矣

答心佛衆生本來平等以衆生是佛心中之衆生故 信心之佛經一心盡作衆生乃衆生自作自心之衆 自心之佛經一心盡作衆生乃衆生自作自心之衆 生而佛界不減縱衆生界盡只是消得各各衆生界 以心平等故而佛亦不增佛觀衆生界空若衆生自 心不空則衆生亦不減譬如長空雲屯霧暗而空亦 心不空則衆生亦不減譬如長空雲屯霧暗而空亦 不減雲散雾消而空亦不增雖終日暗終日消而空 不減雲散雾消而空亦不增雖終日暗終日消而空 不減雲散雾消而空亦不增雖終日暗終日消而空

答大潔六問

而鈍者拓武手不無弊端幸提軌則使利者仰遵常決無莽獵然其閒大小區乘權實應用雖提因

在上二種戒乃因事而設名爲遮戒謂遮止過非雖 一類隨故設八萬四千律儀爲對病之藥欲令煩惱 一類隨故設八萬四千律儀爲對病之藥欲令煩惱 一類隨故設八萬四千律儀爲對病之藥欲令煩惱 一類。

平等以同具平等法身故以佛性而觀衆生則凡起 十八輕戒名爲性戒乃我本師盧舍那報佛所說諸 鬼神但解法師語者皆堪受之只要信一切衆生佛 乃圓滿顧戒然所重者獨在佛性種子即佛之慧命 等法身而觀衆生則無可殺盗婬妄乃至毀謗者以 即斷佛慧命與發佛無異矣故列十重之科若以平 者亦圓此戒光而已故觀一切衆生佛性種子本來 末後拈華所示者亦示此戒性而已歷代祖師所悟 淨法身性自具足故名為戒經云若人受佛戒即入 言性戒者謂了達自性清淨本來無染頓悟本有清 者即爲大乘亦在事相戒至若梵網經所說十重四 大小同選而多爲小乘但執身不行有能執心不起 性種子即是平等法身荷能作如是觀則於一切日 故不獨上根利智能受即黃門二根經男經女乃至 諸佛位故釋迦四十九年所說者但傳此戒法而巳 一念殺盜婬妄乃至說四衆過自讚毀他謗三資者 佛心地法門名金剛實戒命釋迦文佛展轉傳化所 用現前所遇遠界盡是戒光明地如此不獨執身不

行而於被盗經妄觸目念念佛性現前則額化為光明聚矣又豈特執心不起而已耶然持之之法在逃明聚矣又豈特執心不起而已耶然持之之法在逃明聚矣又豈特執心不起而已耶然持之之法在逃时不是一十大顧則日用無滲漏處尚隨事相至若十住百二十大顧則日用無滲漏處尚隨事相至若十住百二十大顧則日用無滲漏處尚隨事相至若十住百二十大顧則日用無滲漏處尚隨事相至若十住不數, 方法心初機常持此二品經則久久自然相應矣所方法心初機常持此二品經則久久自然相應矣所方法心初機常持此二品經則久久自然相應矣所方法心初機常持此二品經則久久自然相應矣所方法心初機常持此二品經則久久自然相應矣所方法心初機常持此二品經則久久自然相應矣所方法心初機常持此二品經則久久自然相應矣所方法心的。

免墮迷坑性無過多兜其閒疑悟交關子賊難判幸垂死變性無過多兜其閒疑悟交關子賊難判幸垂死變

言定然禪即定也初達曆示二祖只是个覓心了不 即定學也惟教中所設定學乃三觀妙門爲悟心之 即定學也惟教中所設定學乃三觀妙門爲悟心之 答佛說沙門所舊戒定慧三學然律即戒學其多究

毫奇特處若得一念數喜便自爲足是名認賊爲子 現前是謂悟自本心到此依然只是奮時人更無一 不移日夜糞定廢寢忘餐忽然冷灰豆爆本體一念 已本命元辰如此追求是名多究要念念不昧心心 是个甚麼因未明見自心故下疑情云如何是我自 從此級級極力提起話頭返看起處從何處起畢竟 提時須要先持身心內外一齊放下放到無可放應 **死不可無話頭以初心散亂難制要此作巴鄭富未** 是入定要門而今別作奇特想故多自誤耳唯今多 耶殊不知提話頭堵截意提不容一念生滅骚流即 教益為非真多禪也殊不知古人為學人難入特以 今時師家教人但多公案不完自心因此疑誤多人 故今參禪者多未有得正知見者且又自以參禪毀 夫初無看話頭下疑情之說後至黃蘗以下乃教人 看話頭以古人一則公案爲本参相傳爲實法及至 那个是自己本來面目即此返來自心便是參究工 可得名為順悟乃至六祖只是教人不思替不思惑 期方便權宜只要人識自本心耳佛觀豈有二心

涉多聞而正見不認雖有以淺爲深之過而無數法

突何况作種種知見 說假 說稱 為 奇貨 耶切不可 墮

此魔網

識此弊而掉弄精魂三途潛伏矣竹然一則稍識一齊雲霧從前破碎方信鬼關不三問公案日話頭破碎後一千七百葛藤勢如破

不是初機分上事且姑置之不必在念歷代祖師一个鼻孔出氣又說甚公案不公案此事答學人果能明見自心到不疑之地則與十方諸佛

一印處有一絲意識則悟者轉落陰魔資發邪見問舊訓也然義路是宿習宿習難消如油入麵萬四問印教日不向教上印證者不得正知見此和

子所問者正不知話頭落處也至若吾人種種心病 營老人尋常要修行人以教印心者謂是爲自已所 檢嚴்模伽圓覺經中所說者如佛說故云以聖教爲明 自心對照看如佛所說不如佛說故云以聖教爲明 的一向無明眼人指示邪正要以佛經印正如 然照見自心不是將經中玄妙言句回爲已解也如 於嚴்模伽圓覺經中所說皆禪定工夫悟心之要將 於嚴்模伽圓覺經中所說皆禪定工夫悟心之要將

不義路至若宿暫種種又不止義路也也形核伽外道二乘之邪見非佛細說又何從而知之形核伽外道二乘之邪見非佛細說又何從而知此佛佛披露殆盡如核嚴七趣升沈之狀五十種陰魔

明是獅是狐易於自愿是關是誘難於自知幸運以印自信印非眞印以關自任抹却諸莊獨逞已即印關教似乎契佛知見大轉法會然悟非眞悟

精判永奉蓍書

豈可以闡法稱乎此了然易見不問可知 法為利者此則不唯破壞佛法抑且誤墮後人如是 明利根但特已見爲得排斥古今縱口橫談唯以宏 如青溫陵寂音諸老是也此皆法施之大者至有聰 之版其所宏揚皆以法施爲心不求世閒名利恭敬

此見也吾人苟能了悟自心縱不闡教不頌古亦是 急何須預設古德云但得了悟自心不愁不會說法 如是初心唯以究心求明已躬大事為急切不可懷 設以彰大機大用且出自已經奪殺活之手非徒矢 口縱情搆畫爲得也此項古闡教一事皆非初機所 答項古從上有之不過發揮古人作略聊示門庭施 末法流弊手吾輩易失此坑幸發鐵從兽荷深怒 以爲悟語悟境膾炙人口一轉墮狐恬不知懼此 相今人悟未能徹氣易頭古句出詩想機同滑稽 六問頌古曰古人悟後頌古如描畫虗空不落色

怒山老人夢遊集卷第十二

侍

M

嶺南弟子 劉起相

法語

寂照鎧公請昼八則

祖曰若學坐禪禪非坐臥若學作佛佛非定相於 問經云無礙清淨慧皆由禪定生如何南岳關爲

無住法不應取捨此二說若為是非

了分明自無取捨纔有取捨便落是非 答祖師門下不論坐禪作佛只實見性若見自性了

風火故曰四大各難今者妄身當在何處未審此 問圓覺經云我今四大所謂堅濕煖動各還地水

身未死各離耶抑死後各離耶

答要未死前撤得下故臨行不被他累及至臨時要 離如生龜脫殼難之難矣古人道閒時做下忙時用

正謂此耳

真實出家不負在袈裟下也

憨山老人夢遊集卷第十一

問核嚴經云阿難白佛言本發心路從何攝伏入

發心與果地覺爲同爲異若於因地以生滅心爲 佛知見佛言汝等若欲入佛知見應當審觀因地

本修因而求佛乘不生不滅無有是處未審即今

爲出生死參禪學道是生滅心否

答學人参禪先斷生滅心及發明時乃見不生滅性 若以生滅心参但逐妄想流轉非参究也

問百丈海禪師日多見善知識求覓一知半解是

生盡然後成佛是菩薩法智魔誓願不相捨放若 善知識魔生語見故若發四宏誓願願度一切衆

持齋戒修禪學慧是有漏善根縱然坐道場成正

著故若於諸法都無貪染禪理獨存甚深禪定更 等覺度恒沙數人盡證辟支佛果是善根魔起貪

不昇進是三昧魔久耽玩故今參禪學道者如何

出得此魔人正修行路

忘則佛亦不立 答諸修行人只爲心見不忘故動隨魔網若心見消

問破四大五陰執有先後否

答教說五陰漸破必先破色陰若多禪打破漆桶則

不相 腦

先破識陰識陰既破則四大無依故如割水吹光了

問金剛四句古今未有明言者或指色聲香等為

氏則曰無我相無人相無衆生相無壽者相是也 四句或指眼耳鼻舌四句或指諸相非相等或指 六祖則日摩訶般若波羅蜜多是心雙林大士又 有諦無諦等至天親則日吾升兜率陀天請益慈 日經中持四句應當不難身愚人看似夢智者見

惟真自古迄今不看有定辭何也

除疾故古人指出何爲四句者各拈雪山一 答佛說般若如雪山衆草件件是藥拈來便用必定 問古人云直得純清絕點猶是真常流注直得無 僧家垂手直得七佛已前威音那畔薦取猶是話 會在今之學者果到此境界否 法當情獨遭仰山檢點直得通身是照循在務 五京率

答古人垂語只是怕人落在途路邊學人縱到此亦 是途路邊事況末到此便開口說禪總是欺心 問園悟大師日有祖以來唯務單傳直指以言遣

性攝 若肯留心此事從此不退久久可許造進此在不定 種性終是粘皮搭骨今人根器不淨定與此事絕分 答祖師取人論根器即教中佛論種性若不是者般

王芥菴朱白民請益

冏佛說頓教漸教禪開頓門漸門二教二門是同

是別

地上一類大根衆生於中行布四十二位是即順之學者稱為圓順法門此佛之順法也然教有順漸者如此盧遮那初成正覺於菩提場說華嚴經順示平等此盧遮那初成正覺於菩提場說華嚴經順示平等此盧遮那初成正覺於菩提場說華嚴經順示平等

此雖順亦從漸來至如為山云學人但能一念了悟

日成熟亦有今生多究三二十年工夫然後得悟如

下直捷了悟此葢多世修習般若根深因緣時至今

若歷代祖師頓悟此心者雖一言一句一棒一喝之

一著是謂向上一路名爲順教大乘此禪之類也至

南心其餘劣退在座如盲如整絕然無分此則法雖漸心其餘劣退在座如盲如整絕然無分此則法雖為法獨為一人哉所以現應化身體三根施設設三聚法初從漸修證所謂教之漸也後至棱伽法華涅槃如心遂為教外則傳之旨西域二門為修行之本此教中期額而漸修是禪為顧中之漸也其達磨之禪乃世界被所漸修是禪為顧中之漸也其達磨之禪乃世界,亦大傳曹谿而下傳燈所載諸祖乃軍傳直指一心之禪又非六度之禪可此以此單示一心更無別法之禪又非六度之禪可此以此單示一心更無別法之禪又非六度之禪可此以此單示一心更無別法之禪又非六度之禪可此以此單示一心更無別法之禪又非六度之禪可此以此單示一心更無別法。

自心識得自已本有是名為悟尚有無始無明**後細** 有修也以此觀之順中未嘗無漸也予嘗觀核伽分 有修也以此觀之順中未嘗無漸也予嘗觀核伽分 動一而論雖頓悟而不廢漸修佛祖之心本無二也 動一而論雖頓悟而不廢漸修佛祖之心本無二也 可佛說諸經俱是稱性之譚了義之旨何謂遠唇 題讚四門一順順二順漸三漸順四漸漸知此不可 類讚梭伽云此經是我心要至黃梅則指金剛餘 經有何差別耶

唯此卷獨合祖師心即以殺若乃入大乘之初門正題一眞至若檢伽一經直指一心雖有眞妄以示識數一眞至若檢伽一經直指一心雖有眞妄以示識數一眞至若檢伽一經直指一心雖有眞妄以示識數一眞至若檢伽一經直指一心雖有眞妄以示識數自心流注妄想現量順遂自心亦不立地位階級。也判教者名為願教法門是故達磨以為心印以此故判教者名為願教法門是故達磨以為心印以此故判教者名為願教法門是故達磨以為心印以此故判教者名為願教法門是故達磨以為心印以此故判教者名為願教法門是故達磨以為心印以此故判教者名為願教法門是故達磨以為心印以此故判教者名為願教法門是故達磨以為心印以此故判教者名為願教法門是故達磨以為心印以此故判教者名為願教法門是故達磨以為心即其建化門答佛說諸大乘經雖是稱性了義之譚即其建化門答佛說諸大乘經雖是稱性了義之譚即其建化門

上一路須是个裏人始得楼伽四種禪中最上一葉 要修而後入祖師禪直指不屬迷悟,不是此意也完門向要修而後入祖師禪直指不屬迷悟一著不假修為 要修而後入祖師禪本來無二伹如來禪就迷中說悟

如曼人妄稱帝王自取誅戮可不懼哉可不懼哉知見把作會祖師確如此連如來確亦未夢見在譬謝即祖師確其實本無異也若根器不淨妄逞聰明

不道先要了悟當人心體本來光明黃大包含無外入道先要了悟當人心體本來光明黃大包含無外面上一路西來心印唯此而已既能陪敬此心則於同上一路西來心印唯此而已既能陪敬此心則於可上一路西來心印唯此而已既能陪敬此心則於如此則凡所拖作皆從真心實際中流出一一皆真如此則凡所拖作皆從真心實際中流出一一皆真如此則凡所拖作皆從真心實際中流出一一皆真如此則凡所拖作皆從真心實際中流出一一皆真如此則凡所施作皆從真心實際中流出一一皆真如此則凡所施作皆從真心實際中流出一一皆真如此則凡所施作皆從真心實際中流出一一皆真如此則凡所為者是可同日而語耶此設光明人人妄思機械所爲者是可同日而語耶此設光明人人妄思機械所爲者是可同日而語耶此設光明人人。

心故漸修之功不可少耳為山三學人有能一念願受用者葢因無量劫來貪瞋癡愛種種煩惱障蔽自吾人心體本來與滿光明即今不能順悟不得現前

又

悟自心但將所悟的爭除現業流識是名為終不是 阿用此則署氣深潛遇境竊發久則流入魔界突然 阿用此則署氣深潛遇境竊發久則流入魔界突然 可處起追到一念生處本自無生則一切妄想情處 立定脚根返親內照於一念起處即追審此一念從 首下沐僧突然所忌者無勇益力不能把新國喉不 當下沐僧突然所忌者無勇益力不能把新國喉不 質相顧則流而不返也

示周子寅以下海甲賽哥

可笑圓覺經一部足下讀熟每日早晚以當功課失 般不是一般足下不知能信海印老人不虚誑否請 文讀書處看此書讀何何處寄著作文就看此文從 來春面時相與決擇尋常與足下書不免稍帶情識 自試看足下儻見信不謬始知頌子心齊三月大爲 用心時恰恰無心用無心恰恰用常用恰恰無是 切處無用觀毫縫罅如此安心再與永嘉所說恰恰 何處流出也不妨迎賓待客喫茶喫飯痾矢放尿一 遇種種惡習起時即將此話頭奮力提起空空一揮 不管是魔是佛是煩惱習氣是善惡思量一切情塵 忌大段一聲菩薩或一聲佛死急靠定與之厮挨若 纔見繼縛切不可和身放倒與之打交滾也切忌切 目愧為足下未敬非不徹恐足下信心未徹耳今見 根發作便向者裡猛然剔起眉毛不可被他纏縛住 念懶墮懈怠偷安圖快活受用之心生時此正是病 點片雪相似如此日用念念不得放捨纔有絲毫 是何物向何處起滅追到掃踪絕迹處如沸湯鍋 齊頭斷如斬亂絲如此做工夫不妨讀書不妨作 裏

何如何如人世可悲斯道可悲望足下心更可悲耳足下何時得徹若足下因循不徹則海印自徹去也足下信心漸增日近清浄此時若不將此亦心則與

叉

來書請益甚是真切但足下於空幻二字未得諦當故於心境不無其礙所以工夫難做今為足下殼破故於心境不無其礙所以工夫難做今為足下殼破故於心境不無其礙所以工夫難做今為足下殼破故於心境不無其礙所以工夫難做今為足下殼破人耳所謂幻者非變怪之幻乃有而不實之謂也譬若市如弄筒子摄出許多人物一般然此筒中本無方面,如身心諸法因幻故空由空故說如幻耳此人知化人非真人也人既非真豈不是空耶佛說空字乃破世人為著以為實有之謂非絕無斷滅之謂之別一切身心諸法因幻故空由空故說如幻耳此一二字相須而觀則頓見其妙所言空即幻有以觀空名日真空所謂有乃本無之幻有名日妙有由真空不書請益甚是真切但足下於空幻二字未得諦當之時有一切身心諸法因幻故空由空故說如幻耳此一二字相須而觀則頓見其妙所言空即幻有以觀空名日真空所謂有乃本無之幻有名日妙有由真空不言語。

當下瓦解冰消矣故日知幻即離不作方便離幻即 覺亦無漸次此所謂一念顧到佛家非虛語也足下 念無生如幻則一切苦樂憂患得失愛憎取捨情狀 自在者唯其不達心境無生如幻不實耳若了達一 人物旣不能礙人人又何礙於物耶世人所以不得 心若不强名愛惛何由起斯則但情不附物物豈礙 不生幻法云何立正所謂境緣無好聽好聽起於心 故曰自心取自心非幻成幻法不取無非幻非幻尚 之相了了常知靈然寂照者是如此用心有何聖確 但觀一切妄念起滅處一切境界起滅處無非是幻 亦無耳是所無者妄心耳豈絕無真心哉何以爲妄 心耶境執著不化者是何以為真心不取身心境界 破如幻不實名日若無而靈心獨照妄心觀默名日 所謂心本無生因境有前境若無心亦無者但只看 境境本是幻將何境而牽心斯但心不取境而心非 故心非斷滅由妙有故境是無生境既無生則心何 取著心既非斷則妄念何存妄念不存將何心而取 断減境不幸心而境自如如心境如如於何不樂此

> 化不實則心自然不奔境境自然不牽心矣往來應 緣則一念虚明靈然獨照照見現前身心如幻如化 據則一念虚明靈然獨照照見現前身心如幻如化 如水中月如鏡中像如空中雲如野馬陽歐如此把 如水中月如鏡中像如空中雲如野馬陽歐如此把 定金剛眼睛再莫動轉任他一切境界層之即消憑 定金剛眼睛再莫動轉任他一切境界層之即消憑 定金剛眼睛再莫動轉任他一切境界層之即消憑 不得思前等後種種思量皆惡覺惡習俱是障道因 不得思前等後種種思量皆惡覺惡習俱是障道因 不得思前等後種種思量皆惡覺惡習俱是障道因 不覺郎當如許婆心論逗如此珍重

叉

大而欲有聞且又疑泛然若無所歸良以能求之心 倍常歡喜沃灌心田心初意擬尊人行後必得入山 一晤相與印證既往工夫而決擇之此想實眞不覺 一時相與印證既往工夫而決擇之此想實眞不覺 中未明肯綮所以坐久而疲由不達心體之妙故靜 中未明肯綮所以坐久而疲由不達心體之妙故靜 中未明肯綮所以坐久而疲由不達心體之妙故靜 中未明肯綮所以坐久而疲由不達心體之妙故靜 中未明肯綮所以坐久而疲由不達心體之妙故靜 中未明肯綮所以坐久而疲由不達心體之妙故靜 中未明肯綮所以坐久而疲由不達心體之妙故靜

人所大有望於足下者今既肯心自許返乃秘吝乎 引此心而入持此心而定此足下精心苦切處乃鄙 知止故不得定承索所以治心條目如四勿三省者 第恐足下始於吾佛法中未得多聞至於名言之中 如渴鹿逐陽燄耳傳日知止而後有定以足下心未 取還顏之効耳從上佛祖教人之法門路雖多不出 多分轉爲昔日見聞之陳習致使甘露之樂不能近 未得祕訣所以求之一念返覺為勢是以心覓心正

や新営作頭

紙以慣今日之欠耳

| 碟染流轉習之深且厚矣即今一念信心始發斬於 此段因緣乃至易至難之事以無量劫來生生世世。 叉

旦夕而欲遏汞劫之長流其勢誠不易易即此一念 茅始抽而開華敷實全在時時栽培而保護之否則 回頭之心亦深難發此是積劫善根靈苗遇時而 惱不解脫者非法之答乃自心縛著不解脫耳良以 觀之功則可漸臻解脫然以吾人本自解脫所以類 順見枯焦矣遇境遇緣以事處事久久純熟更加 熟熟處自生生則疎疎則遠遠則澹澹則忘忘則不 向來世情濃厚習染純熟熟處難忘故獨之便發故 萬狀視之若空華水月陽酸冰河本無可縛著又何 暇求脫而自不縛矣久之而此心秦定則目前千態 曰吾未見好德如好色者也若以彼易此則生處自 求脱耶云肇公物不遷語得力此非足下大根器不 能入此老門闖獨於日月週天句不徹若此不徹則 知肇公不徹不徹則非眞得力也此語老人疑之數

戒定慧三學所謂因戒生定因定發慧其節目之詳

恰無心用無心恰恰用常用恰恰無又云忘緣之後

寂寂靈知之性歷歷無記昏昧昭昭契本真空的的

悉其實修心工夫條目不出止觀等持三門而已此

定慧等持也姑以此塞請集中紅圈者留神消息如

不解者不嫌數數寄問至於止觀捷徑之法容再書

集中奢壓他止也毗婆舍那觀也優畢叉止觀雙運

此用心之神符也如四勿三省者正乃戒耳此中具

玩味至於其中入定用心之訣如云恰恰用心時恰

經不過複嚴至若祖語無如永嘉集一書足下熟讀

ころして日本の一人は一日の

示黃惟恒

皆不得已也足下今云習教不免精神疲倦由宗如他法與宗與教不免話作兩橛若此處話作兩橛則但只爲人說破各各分上本有之事耳宗鏡云以一個只爲人說破各各分上本有之事耳宗鏡云以一個只爲人說破各各分上本有之事耳宗鏡云以一心為宗照萬法爲鏡特由吾人不能知一心故佛說心爲宗照萬法爲鏡特由吾人不能知一心故佛說心爲宗照萬法爲鏡特由吾人不能知一心故佛說心爲宗照萬法爲鏡特由吾人不能知一心故佛說是下雖云向道而此中眼目未得明徹往往將世法

乘順風此足下多生般若習氣之深如此大段海印 乘順風此足下多生般若習氣之深如此大段海印

子一般乾乾淨淨潔潔白白亦不許坐在乾淨潔白

喫茶喫飯就喫茶喫飯要打眠便打眠要痾矢放尿

便痾矢放尿強著便了更不許過後思量如遊魂鬼

要作文便作文不作便拈向一邊不許胡思算乃至

家風要讀書便讀書不讀則拈向一邊不許挂一字

本地靜靜悄悄寸絲不挂亦力力淨裸裸將此

段

只教神驚鬼怕天魔膽碎陰鬼魂消一喝喝退落得

道耳由此看來足下日用只將眉毛剔起此吃

。整

下信然之乎若果見信便豫起向者理入珍重珍重不為種種皮屬所移此之謂挺特大人沒量漢也足露時吐露時便是酒畜時如此不為動節明暗所轉也只向自獨中一口吐出更無前後酒畜時便是吐理如此單刀直入一念向前則讀書親見古人作文

> 而此战身一切動作猶幻人元無心識目前一切境界舊如空華忽起忽滅本來不有唯只圓明一念壓 發別於如如不動逆順好惡冤親平等隨順世緣所 作功德一事一法皆成圓妙淨行如是行者名菩薩 作功德一事一法皆成圓妙淨行如是行者名菩薩 等官身而說法即此是名報佛恩親國恩者公禀性 等官身而說法即此是名報佛恩親國恩者必禀性 多可發心向道故特此示之乃贖以號日淨妙居士

示王生求受戒更字

王生名廷佐字子瞻生意謂名俗而字犯古請幻人王生名廷佐字子瞻生意謂名俗而字犯古請幻人喜而告之曰異哉子之質也傳有之曰更新之幻人喜而告之曰異哉子之質也傳有之日之實苟不務實而尙虛名非德也由是觊之非獨子之實有不務實而尙虛名非德也由是觊之非獨子之實有不務實而尙虛名非德也由是觊之非獨子之實有不務實而尙虛名非德也由是觊之非獨子之實有不務實而尙虛名非德也由是認之非獨子之實有不務實而尙虛名非德也由是認之非獨子之實有不務實而尙虛名非德也自是改善,

株字蔽妄觸心蔽邪思六者变蔽汨昏其中熏陶漸 梁智以成性將謂之本有謂之固然是以大馳於昏 梁智以成性將謂之本有謂之固然是以大馳於昏 些人所悲悲在於此故投戒水以洗滌之且失戒者 些人所悲悲在於此故投戒水以洗滌之且失戒者 些人所悲悲在於此故投戒水以洗滌之且失戒者 些人者智光不朗故明德日昏今復明德而返天真 必須朗智光而破昏蔽昏蔽破本體現智光融。 定以立禮戒妄語以敦信戒飲酒以明智五戒具而 至以立禮戒妄語以敦信戒飲酒以明智五戒具而 至以立禮戒妄語以敦信戒飲酒以明智五戒具而 至以立禮戒妄語以敦信戒飲酒以明智五戒具而 為高而造新化也故幻人亦更其名曰言字曰子綸 於吾而造新化也故幻人亦更其名曰言字曰子綸

示周子潛

言綺語不兩舌惡口不貪瞋癡此佛之戒也噫以吾然而不省者唯在耳目口鼻身心之閒與聲色香味然而不復之切爲之戒且將欲祛舊染斷廛潛而復乎本然為是請道不遠人故曰聖遠乎哉體之即神吾人欲然清淨真心也由是觀之戒在我而備在心修之以然清淨真心也由是觀之戒在我而備在心修之以為是請道不遠人故曰聖遠乎哉體之即神吾人欲事是請道不遠人故曰聖遠乎哉體之即神吾人欲事是請道不遠人故曰聖遠乎哉體之則與聲色香味。

示祖定沙彌

子嘗見世之市肆羅列割烹而過者解不刮目垂遲 一號之味此恒情也每見吾徒稱沙門釋子者身 處旃檀之林足履淸涼之地歷大法之肆羅無上慶 處旃檀之林足履淸涼之地歷大法之肆羅無上慶 一號之時也藉使知之豈讓嗜寶之情哉吾佛最初 出世即揭波羅提木叉以示人此即以甘露陳於周 如味之過也藉使知之豈讓嗜寶之情哉吾佛最初

5 H

何人哉予隨緣入王舍城止慈氏園林適開甘露之

昏而志日喪風日靡而行日薄教日顏而法日毁也

不成學問之不精此其所以世愈下而道愈衰心日

成就無盡功德法門應當善學此波羅提木叉為第問指入林中即得餐采此甘露法味所言甘露法者即四根本重戒也嗟乎人者久矣沈酣生死之場成即四根本重戒也嗟乎人者久矣沈酣生死之場成即四根本重戒也嗟乎人者久矣沈酣生死之場成即四根本重戒也嗟乎人者久矣沈酣生死之場成即四根本重戒也嗟乎人者久矣沈酣生死之場成即四根本重戒也嗟乎人者久矣沈酣生死之場成即四根本重戒也嗟乎人者久矣沈酣生死之場成即四根本重戒也嗟乎人者入矣。沈酣生死之場成即四根本重视地耶是故海印老人讀言佛子若欲而為三種解脫地耶是故海印老人讀言佛子若欲而為三種解脫地耶是故海印老人讀言佛子若欲而為三種解脫地耶是故海印老人讀言佛子若欲而為三種解脫地耶是故海印老人讀言佛子若欲

示吳公敏

義諦一切法門因從此入

調伏之法如此又更其字曰調伏至若相即無相則心清淨即生實相然實相無相於何有生良由生即心清淨即生實相然實相無相於何有生良由生即心甚為此,以是降伏其心又云應無所住而生其心又云信住如是降伏其心又云應無所住而生其心又云信。

看目也 久純一、泯絕諸相願契無生是所謂信心清淨即生不可以無相爲無相故又刻之以定課日用不移久

實相也

情於自己哉二子勉旃 者斯可矣是以周公之夢鳳鳥之歎有志君子豈容 其可得乎孔子曰聖人吾不得而見之矣得見有回 捕風捉影後學無憑望吾人之修而見淳全之質者

示江吾與

孔子日士志於道而耻惡衣惡食者未足與議也古 下誠能以太上自動則貧而可樂其他又何以嬰心 志雪大耻乎聞之太上立德其次立功其次立名足 薪嘗膽之心不能以懸梁刺股自物又將何以醻初 年其竟以霸然歷劫貧愛豈值吳豐幽囚生死困唇 形骸豈直會稽之耻苟足下不懷切齒之恨而忘臥 覺令人愴然心悲復欣然大喜以舉世皆醉假而人 比越王遭會稽之耻志報吳響乃臥薪嘗膽二十餘 之肅恭亦酒態也今讀足下手書始恍然從醉夢中 竟醻其志況出世聖賢豈值一夫無上妙道豈多金 耳其所志富貴則奮發無當每治縱怠則懸梁剌股 人如足下則不實我獨醒耳嘗調蘇子一口舌之夫 與足下苦語十年如教酒人齊莊非不儼然肅恭要

之妙亦未嘗不嘗欬擊節及與之言佛則望望然不

顧噫知有心而不知有佛是猶知二五而不知十也

事業猶不足觀及扣其心性則瞠目結舌及與談心

子熟不心憤憤口悱悱眇視千古咳唾風雲雖伊周

旃 則無事矣又何可嬰心處之而不泰然耶願足下勉 人亦云秸有道義之樂則形骸可外形骸可外 此外

之狷至若不知而妄求者謂之怪與夫不知而不求 求之閒雖相去毫釐其失則千里矣竊觀三齊之君 則物而已矣嗟乎此人與物殊惟知與不知求與不 求之太過者謂之狂知而不明執一介爲必當者謂 盡者謂之智知而不肯返求者謂之愚知而不眞而 謂之聖知其當盡而不能頓盡謂之賢知而肯求其 者也易嘗有人物之閒畢竟所以異於物香以其物 嘗謂天生萬物唯人最靈此古語也予則謂之不然 具而不知人則知其所具者耳知其本具而盡之者 何也益人與萬物皆具靈覺之性此性均賦而同禀 示王牧長周世父 皆知其本有而肯求之者矣予則有望於二子不望

子作佛而願其現宰官居士身而說法將見般若根

丈夫骨見信自心者津津汗浹兩腋而陽和之調將 癸巳冬日來入海叩其道味天然略無毫髮拘拘俗 見予將骨化長波又復何憾王生牧長周生世父以 第感之不深故應之不至耳年來茲土二三君子具 雖然一管灰飛而大地春生一葉辭柯而滿空秋至 之常即天縱之聰明且將亦與彼俱化故曰習俗移 **警予深歎其爲奇男子矣雖然牧長牧長世文世文** 我何求此所以抱長夜之歎而飲泣與東海鏡流也 免虎口者盔亦數矣知我者謂我心憂不知我者謂 余今置身東海空山大澤之閒冒險阻履危機幾不 人賢者不免斯言可畏哉嗟乎長夜之歎爲誰而更 自信抑將與之俱化矣世之君子生而聞見乃耳目 告之者假而朝夕以真心實語熏陶漸染之雖不能 不信心之過也予竊謂非眞不信心葢未有以眞心 是以道術不明而英明豪傑之士亦不免坐蔽於此 此非知之過其實不知之過也又非不知之過其實

育之而生極樂之郷也子其勉之子其勉之何以稱深弩俗濃厚熏蒸變化此土羣蒙若人若物皆位之

子

示杜生

怒山老人夢遊集卷第十二

憨山老人夢遊集卷第十三

者

侍

腷 善

日錄

通 加 編輯

FF

嶺南弟子 劉起相

重較

書問

與達觀禪師

耳即焼伽能領深恩矣惟師一一辛苦中來某一日 期錫杖落此豈知吾師精進力所攝持耶昨禮座下 唇法愛連宵徹夜真言密語如咒病龍心心在雲雨 某鲍根下劣屈于慶暫適特地走人間自以無謂不

會上人耳匪蒙攜過雲居親見肝膽則某此生幾不 發讚歎耳此緣殊非小小某愚癡向謂琬公亦靈山 坐受其惠竟何以報想十方諸佛定為此會生歡喜

易遂莽鹵承當及至雷音觀其真迹不覺氣縮即以 知此公矣承命作復琬公塔院記初不自量將謂易

拓思已過半及觀師手書二經莊嚴妙麗讀願贊則 乎因懇祈請法力加庇而爲之尤難措辭馬上至潭 虚空爲口大地爲舌猶不能讚其功惠況方寸流注

> 增深佛種惟慈蠶受之某和南言 附達大師答書

發耳顏師印證不吝郢削無使疏公見屈抑令觀者

止此有則盡吐之矣其間但欲點染度空自覺少光

謝無量塔記藏此報命其文千二百餘言但某心血

勞法身特現塵中蓋似慈悲太煞使某何以當此敬

操觚屬艸剛完使者持法音至諷誦數過數喜絕倒

淬然具足矣十五日暮歸慈壽次日焚香禮禱

而後

敢作世諦流布某再和南 法道將何以報海印主人咄一棒分死活時決不 過令人無地可以寄口舌贅歎也苟非真得強公 使琬老朽骨生春即某足賴之不朽矣如是扶殖 之心骨之苦處安能吐鮮等刀鋸剖痛情哉事能 眞可和南唇塔記即率衆焚香頂禮訛疾讀三四

叉

憨山大師侍者某此囘出山諸人以爲突出意外 不及此即堀主亦不意數頭點腦闖入是非關藍 那羅堀主此囘來燕圓成無量功惠豈惟諸人處

少者某再和南 少者某再和南

叉

承慈遠問悲欣交集病病之心知在法眼空色決脈于十年前矣惟神明之祕久默斯要今豈逃嗣見肝以致君火太盛銷鑠肺金內外交攻上下否塞梔子以致君火太盛銷鑠肺金內外交攻上下否塞梔子以致君火太盛銷鑠肺金內外交攻上下否塞梔子樣去內寇得椒通和周身汗出道人幸佐以軍臺得揀去內寇得椒通和周身汗出道人幸佐以軍臺得來去內寇得檢通和周身汗出道人幸佐以軍臺得不傷生須徐徐調理但眞陰水生心火漸降客邪消不傷生須徐徐調理但眞陰水生心火漸降客邪消不傷生須徐徐調理但眞陰水生心火漸降客邪消

問受病之原其狀如此惟賴白毫遠照自受病以來問受病之原其狀如此惟賴白毫遠照自受病以來問受病之原其所用,其視三界牢獄四生桎梏端若天光雲影耳向來所其視三界牢獄四生桎梏端若天光雲影耳向來所述裂識鎖領開時將長策象王而逐金毛囘步旃擅之林饑餐紫柏渴飲曹溪吾生之願遂舉于此更不之林饑餐紫柏渴飲曹溪吾生之願遂舉于此更不之林饑餐紫柏渴飲曹溪,

叉

本息非妄語也不禁出期不遠儻幻綠有待尚圖荷奉慰非妄語也不禁出期不遠儻幻綠有待尚圖荷奉慰非妄語也不禁出期不遠儻幻綠有待尚圖荷奉慰非妄語也不禁出期不遠儻幻綠有待尚圖荷奉慰非妄語也不禁出期不遠儻幻綠有待尚圖荷奉慰非妄語也不禁出期不遠儻幻綠有待尚圖荷奉慰非妄語也不禁出期不遠儻幻綠有待尚圖荷奉慰非妄語也不禁出期不遠儻幻綠有待尚圖荷奉慰非妄語也不禁出期不遠儻幻綠有待尚圖荷

所遣成就第一希有功惠也

叉

> 之狀大不可言況復海岸腥風嵐煙烈日觸鼻透心 神昏意醉此爲罪鄉誠非虚設私謂自非徹骨冰霜 咫尺迷蹤曠野高原過無煙火窮日粒米不緣終朝 荷戈行伍不異道場但泉涸艸枯無薇可采資非禪 何能消此酷毒也仰庇諸所堪能調伏無生忍地即 不辨其益非益也至電白其程循生。速南山林蓊鬱 涉千五百里道殣相望雖三尺童子亦操戈挾刃殊 横行毒氣熏天炎蒸散日枵腹罹災死傷過半悲慘 滴水不啜雷地饑荒尤甚業已四年瘴寢大作時疫 竟留款叙移時齋食而退且又遣力護送往戍所途 吾輩正中心感重豈可以尋常世法相遇固讓不可 公物外高人況為 王公囚服見之此公意氣甚高親見降階釋縛乃云 六日至曹谿體六祖真養頃即出山至五羊謁 朝廷祈福致此奇論何罪之有 總鎮

以一方便而折攝之欲其情枯智竭須知極境窮源

報為慚愧耳竊念諸佛以不思議神力調伏衆生非

此業力所勝死生又何置念直以本願未發佛恩未

悦何慮不爲西山餓夫惟不慧道愧先惠遭時過之

智光圓照天南萬里不隔纖毫仰願無緣慈力時以師對談夢幻法門豈不以今日因緣爲實證也惟師冥益鈍根眞慈不淺儻法緣有在異日天假有緣與

叉

攝之

叉

當委悉

無大病第爲荔枝魔發偏體疥瘍又爲假曹谿粥飯郎的故巴二載餘宵忍不拈瓣香撮培士乎因是遂即自燕而晉及臨行念其二十年來鈴餅他方今其此來爲曹谿因綠想聞之必大攜掌先心尚欲令義此來爲曹谿因綠想聞之必大攜掌先心尚欲令義

隱但聽時節因綠耳 應但聽時節因綠耳 應但聽時節因綠耳

Z

福微塵刹土一切見聞同入自心現量即不慧委填之目亦未免作淨穢見心昨永順持法音來知杖錫有靈岳之行同書徑往報之矣旃檀如來因緣已悉前問蓋佛神力不假于他心持去楞伽筆記奉入慧目以作法供養某下劣深知此一段大事因緣皆如來所達。 聖恩所賜即此可為報恩地但願此法曾來所達。 聖恩所賜即此可為報恩地但願此法曾來所達。 聖恩所賜即此可為報恩地但願此法曾來所達。 聖恩所賜即此可為報恩地但願此法曾來所達。 聖恩所賜即此可為報恩地但願此法曾來所達。 聖恩所賜即此可為報恩地但願此法曾來所達。 聖恩所賜即此可為報恩地但願此法曾來所達。 聖恩所賜即此可為報恩地但願此法曾來所達。 聖恩所賜即不慧委填

分相應否願大施金**笠披刮醫膜其幸不在鼠區耳**

叉

春三月促覺音員病歸,是時尚想紫柏與五老爭雄 造八行往訊。忽順禪人持禿筆字來則知已拖泥帶 造八行往訊。忽順禪人持禿筆字來則知已拖泥帶 水向萬里無寸艸處去也笑老凝為底事如此忙碌 金身撇向十字路上令往來驢馬踐蹋若紫柏老凝 金身撇向十字路上令往來驢馬踐蹋若紫柏老凝 金身撇向十字路上令往來驢馬踐蹋若紫柏老凝 金身撇向十字路上令在來驢馬踐蹋若紫柏老凝 是別知在萬仞峰頭必發一笑老紅盔近來毒氣熏 身老雷陽則將丈六金身作一莖艸此个公案是同 身本電陽則將丈六金身作一莖艸此个公案是同 中工型眼花鼻塞咽悶不知何時向白銀界裏翻身 一吐此惡習也

-174 -

叉

死不死更見鉢沿量納貪涎流溢大千何時三炎火塗毒入耳轉令瘴煙毒霧化作甘露日夜飽餐故當紅盛去紫柏萬里時聞說法音聲在鼓擊刀斗間如

法身居然在日敬持梵香一面用伸供養唯慈照之 且無覺範別胡强仲氣層也某舌端時時現出紫老 別何如某禪人遠來相問不減契順走惠陽老紅盛 蓮花中吐廣長舌爲諸化身大士說利生法門時同 **盔鎗頭上佛事旂学下工夫較老紫柏端居淨土坐** 衆生多體時可使一一頓入毗盧法界也此蓋差紅 伸右手過一百一十餘城聊藉彈指之功便見重重 但閣門堅閉不能頓現無量莊嚴佛土只待文殊遙 今日始得轉身吐氣將來絕後再蘇頓見光明赫奕 化穢邦而成淨土變業海以作蓮池老盧埋沒千年 灑婦八年之內極盡神力一洗殆盡魔黨盡驅今將 老人神力不大暫求一宿不能安今天遣紅盃特來 餘也曹谿舊稱西天賢林比爲魔宮鬼堀可笑紫柏 無盡境界假使十方世界一一善財如佛利微塵數 起燒爲煨爐毗藍颺去光音霪雨 洗劫灰淨盡 無

某切自念鈍根下劣結習濃厚乘夙善緣天幸吾師 唇以真慈拯拔曲盘心力善巧方便面命耳提日夕 與妙峰彈

昧加被之力也雲聚清凉月明空界自爛形分影散 某情雖鹵莾而于潛滋密化未嘗不由吾師幻網三 羅入我心頓令於目動定若有靈聖者但土木坯胎 廓大谷不足以藏之廛勞塞漢非汪洋巨浸不足以 念也然其自知形器機獨謂斯朽骨惡氣衝天非寥 是則深居寂寞之濱益入圓通之境可謂迹逾疎而 **嚴含心水別經五稔館同一日道越三千不隔寸** 隱顯同時雖于妙音擊於勢阻關山然其實相真身 終難變化雖然於之既久入之既深不無感通其應 與者受者又皆盡從吾師圓妙清淨眞心流出也客 洗之故甘心拌命擲此山海窮鄉而置盡絕之地且 心逾密聲日銷而實日彰某之形神未嘗去吾師 無閒者數年居常切觀我師默造之心恨不能 屬于情而在出于常情者學目寥寥豈容多見是不 頭即所云喜心翻倒劇嗚咽淚沾襟耳然所悲者非 冬某持法旨至接讀十數通深見師心不覺涕泣交 將無復人世矣不意默承護法菩薩運通寶藏順 光東照大破暗冥可稱萬世希有功惠原其所自 進身 絲。 使

波澄意吾師心月能自忍留光而不落影于此中乎安步歸圓覺路也時幸託此一枝頗稱幽勝儻識海不棄心心圓照而攝受之令癡子不入顛倒狂途而不難心心圓照而攝受之令癡子不入顛倒狂途而無疑至若報侍左右之心有懷未即惟願我師眞慈

叉

不養平生每自尅念于此長夜得值吾師可謂再逢和友矣故自綠會三十年前即知有向上事二十年親友矣故自綠會三十年前即知有向上事二十年,常勤除糞此一念苦切之心未嘗去于眉睫低恨中常勤除糞此一念苦切之心未嘗去于眉睫低恨中常勤除糞此一念苦切之心未嘗去于眉睫低恨中常勤除糞此一念苦切之心未嘗去于眉睫低恨中常勤除糞此一念苦切之心未嘗去于眉睫低恨中常勤除糞此一念苦切之心未嘗去于眉睫低恨中常勤除糞此一念苦切之心未嘗去于眉睫低恨中常勤除糞此一念苦切之心未嘗去于眉睫低恨中常勤除糞此一念苦切之心未嘗去于眉睫低恨中常勤除糞此一念苦切之心未嘗去于眉睫低恨中常勤除糞的自綠會三十年前即知有向上事二十年,但不是一个。

也當天假以年猶當白首同歸以醫初願惟禪稅沒 彼此之相吾師處此久如諒不以天涯罪夫勞靜慮 行藏奉慰知已慈念也第緣有聚散法無起滅在正 眼視之了無朕迹利海不隔劫念圓收又何有去來 所堪況彼師親皆老何獨我爲是以促歸且以不慧 意吾師聞此必發一笑也大義萬里遠來以得法音 非正順解脫聊以法自娛適足以見光陰不虚度耳 謂不資師友矣于會心處隨筆記之今將卒業此雖 神以道自愛 員出世丈夫法門奇事今復依依萬里至此豈不慧 年心如一日辛苦萬狀然于禪道佛法竟未啓齒此 爲喜第念此子持吾師一言付屬于不慧者日十五 若逆若順無非令入清凉大解脫門火聚刀山無非 見力是知諸佛神力調伏有緣衆生非止一種方便 **究竟寂滅道場地而今而後或可謂不負已靈亦可** 榜伽究佛祖心印始知從前皆墮光影門頭非真知 **瘴海如坐道場飽飲炎蒸如餐甘露荷**戈之暇惟對 不慧以此慶快平生心知吾師必爲我賀今雖遠投

消熱慢作清凉地師其以爲妄乎古人爲到處家山 味第以情生智隔不能餐師法性之樂然亦賴此為 耳鈍根年來坐此瘴郷所作佛事亦不出師幻網三 受之心如珠網交羅光光相照更不容妄想于其間 利當無疲厭此退荒雖遠正不出吾師毛孔也其攝 惟師以法界爲心以行願爲身即彌綸華臧莊嚴塵 誠以印心吾師慧目蕭清心深照洞徹其原即此生 隨緣樂地不慧即不能全體適足以自娛楞伽四卷 無對面之期而世世常爲法侶矣

宿新州客邸寒風刮面不减塞上夜深擁納夢想正 自入瘴鄉六年不知霜風作何狀今正月六日南征 **拄地卷中枕膝夜話時也歡喜可知復詢吾師種種** 所負北來諸故人書首開吾師函恍若對面坐五臺 在萬文冰雪中忽推門扣見者大義也乃驚喜絕倒 功惡種種莊嚴此家常事不假稱揚嘗讀楞嚴經見 阿難望佛惠我三昧之語將謂虚談以今觀之不但

,

綠會遇窮劫不磨豈妄語哉不慧今年五十有六不 身坐瘴海即入銕團必蒙吾師足光先照矣所謂因

苦今遣歸家可以休渴狂心作已躬下事望吾師惡 足以甘心苦海爲人天作橋梁臥具此狹劣之見始 覺老至形容透俗心地日開常自私語若此形不化 辣鉗錘銷鎔習氣是以不負吾輩亦不負其先心耳 由吾師擴之今更見其眞耳大義之走瘴鄉誠以爲 慈善足光時時照拂亦不誠菩提場中初成正覺時 不慧以業力遷譌鄉此嶺外不減曼殊在鏡圍師以 也大義來具荷攝受感不在言惟師願輪日廣三昧 者學成真正俗人其所消磨日月者重增文言陋習 **慧處此業鄉三年餘矣禪定解脫未知何如但所喜** 皆多生積障今日盡發不知何日得三而座前求懺 日深顧此區區穢騙親近隨順如夙昔豈能再得不 悔耳先具數種師其爲我印正之遙憶多實妙塔涌 現虎空但昔日靈山會上釋迦分身盡集而塔戶一 開多寶出現吾師分身當何時而集耶令遙聞者不

禁贈墓之思也即有可散之花亦無神足可遣耳

寄蓮池禪師

叉

種子此等最上因綠乃毗盧之所願釋迦之所贊宜 為天龍八部之所欽也若不慧者以穢濁之寶點污 為天龍八部之所欽也若不慧者以穢濁之寶點污 法門以業累之綠權斯罪垢實受諸佛所呵乃辱吾 師攝受豈非以平等大悲曾視有情者耶不然何慈 可令有綠謗法者先蒙益耳不慧向沈幻網今幸樹 工作機構地年來奔走之餘所作佛事著逾數種 之鄉不識果與此法少分相應否數持獻座下乞師 法眼為我印決儻不墮增益謗或可聊弭夙愆麟语 之鄉不識果與此法少分相應否數持獻座下乞師 送眼為我印決儻不墮增益謗或可聊弭夙愆麟语

與五量月川師

東注幽邃蒙光豈不見此頭陀如是麼衆生而行菩逃逝已也囘視金色界人端居靈山一會維時白毫不肖鈍根波流幻海花落寒空不啻曳尾泥途自甘

熏四衆伏希慈納

肩簽特致問訊薄具名香三色奉為說戒時供養普

體勇悅毛孔皆香深愧業緊不前未遑瞻旣茲門人

諒其心耶抑所見未同耶故日正言似反誰當信者 以其物有遷流故今示之以不遷爲妙若真巳不遷 當俗不真為真由是觀之是物不逐而非真不遷也 言言有操即肇公對語亦俛首無詞但彼亦自解云 哉若以高見所摘論文皆遷流之語駁之字字無差 所造未嘗異所見未嘗同意恐足下實之以言而未 不遷何足云故云是法住法位世間相常住其旨良 **味乎然彼造論覃思立意命名不日無見且以不遷** 旨即清凉再出亦當追其武也點日和不及舌誠有 下心由辱見信之深不敢有貧所望略為陳之愚謂 雖非楊修幼婦而一覽頗識其妙第愧不足以當足 三昧故未敢加答恐當實法流布忽忽棄巳三秋適 所取若按名賣實難肇公復起不易其詞若忘言會 無已且出尊駁艸本不意刀刀見血如此不肖愚昧 幻師遠來下問窮陬詢及起居具悉悲戀之情深感 **駁物不遷見示鄙心將謂足下偶爾成文試入遊戲** 以報諒知已者一體同觀定不心口異視也往承以 薩行耶數唇慈念惠問勤勤以人境兩奪故無片言

設但結文此約俗諦爲不遷耳一語義則長短相形 不得聲公立論之心而亦全不得清凉表白之心不 徹見諸法實相不意云云若此獨謂足下此見不獨 是時交臂而別彈指已經八年將謂足下力窮不遷 此駁然不肖所以學此者意有所爲蓋緣尋常以物 下與肇公正謂所造末常異所見未常同也管見如 獨不得清凉表白之心而亦未得區區蓬心也此足 但文稍晦耳不肖在普譽此正恐足下有今日之事 遷之妙耳然鈔文但舉小乘一意辨之未竟大乘之 見放特揭此表而出之欲令人人深識論旨玄悟不 云其實意在大乘生即不生滅即不滅遷即不遷原 兩概然清凉疏中自有二意且云寫文似同小乘云 不遷意詰諸万大惠都謂物遷而眞不遷人人話作 清凉意正恐後人見此論文便墮小乘生滅遷流之 宜其相左聞足下始因不肖學清凉謂物各性住于 在物而足下以真宪之斯則爲門不同故道路各別。 若足下猶不信而信者誰其人數且肇公明指不遷 一世之語濫同小乘無容從此轉至餘方之說遂有

5

與五臺空印法師

金剛決疑法華品節鑑有當心幸命流通亦法施也子一書古無善解苦心十五年似可為後學發變其可得廖亦座下之白眉也近刻三種寄請印正但老望于龍華三會耳範愚有志納子可惜而有斯疾傷為厚幸若機緣不偶殆將不久人世即為承訣是有為厚幸若機緣不偶殆將不久人世即為承訣是有

興雪浪恩兄

市歲侍者南來手教諄切論弟以法門為重弟錐根下劣向耽枯寂日沈孤陋雖一念生死之心耿耿不下劣向耽枯寂日沈孤陋雖一念生死之心耿耿不下劣向耽枯寂日沈孤陋雖一念生死之心耿耿不下劣向耽枯寂日沈孤陋雖一念生死之心耿耿不下劣向耽枯寂日沈孤陋雖一念生死之心耿耿不下劣向耽枯寂日沈孤陋雖一念生死之心耿耿不下劣向耽枯寂日沈孤陋雖一念生死之心耿耿不下劣向耽枯寂日洗明寥落若吾輩天然兄弟尚多商一方不能時復促膝死心鼓竇斯道況悠悠者乎弟局谷之懷似難順伸居常深思吾佛立教以三學為易俗之懷似難順伸居常深思吾佛立教以三學為易俗之懷似難順伸居常深思吾佛立教以三學為易所一二根性稍利又爲在屬所附以至慢法輕師至于身心略無檢東根本不堅又安望其枝葉榮茂乎于身心略無檢東根本不堅又安望其枝葉榮茂乎。

又

于他原吾兄親操是所至望 塔為賴若刻一八楞方幢更見古雅其文不必假手 宇宙荷寥寥如此況其他平願吾兄及時努力謹薄 具名香一炷石資若干以爲先登即兄不奈綠恐建 支而涉世之念已灰此時若置勝緣不但泯先師之 長古惠所重家聲不播昔賢所恥若吾輩兄弟並名 惠抑且減法門之光使後學無遇不知所自愿遠流 者但不知吾兄此顾業已越否切念與兄年登知台 到代如斯即來死之年亦為禮衰老級利生之原示 震斯言實在耳弟明記于心亦時復以此學以知已 以酵去乳足了生平此其本原其他一切可任緣無 兄志向所在且云待老師百年後爲立一碑建一塔 **廖先師法愛不減于兄但弟之所以報先師者萬無** 守愚大和尚弟每念創染之初即蓋膺華嚴土席畏 堂照常為衆講演開堂之初第一等香先供養本師 不豫下祖弟奉吾兄大教業二十年今春始强勉開 一心會實音年弟初行脚時與兄別于雲浪嘗叩吾

流出吾徒不可不一瞻依也十九日抵廣州訪陳夷 其立言似非本指耳二月三日度庾嶺六日遊南華 海生摄繁衍風氣這厚今則涼薄太甚值蒙鰻異常 報云化去三月矣遐万失二知已良可悲悼向傳南 山巳作故物始聞歐倫老尚在及將買舟造其舍則 禮六祖親其山川形勢絕勝無怪其千七百人從此 淺經廬跋會王塘老所養甚佳其信向淨土精專觀 吾兄演化西江大爲開導此蓋渠信心肝膽懷有問 王兄當善調伏使其增崇正信作成佛眞種因緣不 江都南老迎于銕佛奉中言出吾兄手書踏祖機緣 **區利辛與弟夙緣有在一語投機盡翻前案誓將迎** 坐揮塵都君實此即法身常作養中主也都君根最 告展之光明赫昱照耀心目 · 語統橫發活嚴然據 所以從大塔廟前為初步也別後于新正六日抵同 露領党五內請原身心俱化罪屬皆空此善財南遊 唇吾師兄暫出那伽移步江上隣而教之使飽餐甘 心室過家山將布五體仰藉慈力攝受作徽罪場階 弟不肖罪冥無狀取辱法門爲師友憂大負慚愧先

又

如筆之成記將以此謝謗法之愆弟恃孤陋之見旣 法緣薄幼而無聞老無所知頃于荷戈之暇力死楞炎蒸消熟惱耳吾兄惠我三昧何深也弟生平于大 資訊 计量记于一宿蒙以甘露見漉即走入瘴郷皆藉以驅自江于一宿蒙以甘露見漉即走入瘴郷皆藉以驅

不蹈襲陳言又未及請正法眼竟為好事炎木可翻 不蹈襲陳言又未及請正法眼竟為好事炎木可翻 在不負此平生亦不累及法座若一言無當即為付 之水火決不敢以此博虚名增業種自蔽妙朋更障 之水火決不敢以此博虚名增業種自蔽妙朋更障 之水火決不敢以此博虚名增業種自蔽妙朋更障 之水火決不敢以此博虚名增業種自蔽妙朋更障 也同覆一門苟于此法印可其心弟即不致稱摩耶

與少林無言宗師

下來思顧命之言廣闡最初之制使初機之士追風 與諸幻衆種田博飯以消磨白日。爰餘年耳比來風 與諸幻衆種田博飯以消磨白日。爰餘年耳比來風 與諸幻衆種田博飯以消磨白日。爰餘年耳此來風 鄭是心器不淨又安可以注甘露廖大病乎惟願座 整蒙地痛念世道交衰人多薄信一榮不以根本爲 整蒙地痛念世道交衰人多薄信一榮不以根本爲 整蒙地痛念世道交衰人多薄信一榮不以根本爲

特本分尋常輕車熟路耳狂傲之言高明以爲何若受勒大步隨鈎然後戳眞風于性天撤迷雲于蘊谷

與愚菴法師

為得耶可笑壓下說法不知法為已不為人知法座咫 院一本蓋身為道本重為輕視而更本取末亦不智之 第一地蓋身為道本重為輕視而更本取末亦不智之 第一地蓋身為道本重為輕視而要本取末亦不智之 第一地蓋身為道本重為輕視而要本取末亦不智之 第一地蓋身為道本重為輕視而要本取末亦不智之 解如此豈自不安于純眞耶維摩道于食等者于法 解如此豈自不安于純眞耶維摩道于食等者于法 不等至若供養我者不名福田此又何謂也永嘉謂 如曹山之語將欲奉行者豈將與夷齊同貫而後 要有意不偏者謂曹山之不受食耳若以座下而觀 等者子不知法而說法將何以模範人天用規來學 等有意不偏者謂曹山之不受食耳若以座下而觀 等者子不知法而說法將何以模範人天用規來學 等有意不偏者謂曹山之不受食耳若以座下而觀 等者子不知法而說法將何以模範人天用規來學 等者是不知法而說法將何以模範人表明是不為

> 至高不與之斯面矣且不及親往特遣如**哪代為禮** 全當不與之斯面矣且不及親往特遣如**哪代為禮** 上加霜今奉世資若干為座下開**齊之需座下若不** 上加霜今本世資若干為座下開**齊之需座下若不**

叉

叉

與交光法師

識力加被之致得久活瘴鄉每思貌座萬指圍繞震朽夫罪累爲法門房自知慚愧無地懺悔所幸諸知

在法親有綠者乎與大義阿家山間公尙駐錫中條在法親有綠者乎與大義阿家山間公尙駐錫中條 心得贈禮光相小刻數禮季廛慧目略見萬里懷人必得贈禮光相小刻數禮季廛慧目略見萬里懷人

與隱菴上人

與靜修上人

居丈室亦常目在之也公戴乃雅物如鄙人乎吾會承惠乃祖獨笠子精妙絕倫鄙入時時戴之如天雖

可許不懼無常虚死也悠悠笑談作何究竟惟深省 老我輩所以想世尊乎鄙人見佛易見公等難不是 若我輩所以想世尊乎鄙人見佛易見公等難不是 若我輩所以想世尊乎鄙人見佛易見公等難不是 若我輩所以想世尊乎鄙人見佛易見公等難不是 若我輩所以想世尊乎鄙人見佛易見公等難不是

寄松谷師

之

聖人不出世萬古如長夜此語流布雖久證驗者希 在不肖養疴窮谷每見毫光東照莫不皆從吾師眉 性養者盡成佛事然法門有此瑞相十方諸佛豈不 供養者盡成佛事然法門有此瑞相十方諸佛豈不 共生歡喜讚歎今春不肖坐惡劫中衆苦音聲痛徹 心府又聞吾師疲于津梁掉臂而去此之痛處著錐 心府又聞吾師疲于津梁掉臂而去此之痛處著錐 心府又聞吾師疲子律梁掉臂而去此之痛處著錐 上中著一明眼人不得不肖亦謂此土衆生亦皆有 其正令者謂此婆子有大人相令親五獨惡世諸苦 其正令者謂此婆子有大人相令親五獨惡世諸苦

> 此又牽之入此鬧藍無奈狹劣之智不忘大菩提心 未發然目前不見吾師而他方登子堆集于長者之 未發然目前不見吾師亦月光中台掌作一讚歎耳 過無地可寄但于吾師亦月光中台掌作一讚歎耳 心無地可寄但于吾師亦月光中台掌作一讚歎耳 心無地可寄但于吾師亦月光中台掌作一讚歎耳 心無地可寄但于吾師亦月光中台掌作一讚歎耳 心無地可寄但于吾師亦月光中台掌作一讚歎耳 心無地可寄但于吾師亦月光中台掌作一讚歎耳 上數記明月山前光明石上對主山神來說自證法門 「實見改孤內耳

與靜堂師

惟願書紙百尺順令入我海印之光作幻人之件也想呈樣矣行實富離爲之成時幸以見寄別後有作乎其間豈不爲音詠之資禪定之病耶大師無縫塔乎其間豈不爲音詠之資禪定之病耶大師無縫塔十年剛一見復交一臂而失之然此心月麼麼學不

與萬安上人

一自清凉別後朽夫雖妄生于人世亦未常忘情于惟公爲法門樞機荷資甚重乃乘夙願力實非淺尟

見故甘心聽逐以一息之危生博無量之苦惱所以 報耳流光難擊日月欺人但顧努力寸陰自重自愛 難且感高誼留意于朽夫者獨厚且重故敢以言為 朽夫自顧博朽不材無敢旁景人世念與公見面之 之珠彈千仞之雀者比也公自視何如哉願公自重 **編**遇愛綠即東如涕唾至若較其輕重不 雷以隋侯 之受用所以一觀明星即如在掌握吾人固有而不 之所發所欠外緣助顯向上第一義耳良可悲悼蓋 而保持之萬勿自輕自棄沈酣歡湎爲親友所惜也 所喻如摩尼寶珠者是以吾佛世尊蚤見于此故不 大有富貴于富貴求之在我而不假于人者存焉即 吾人所賦獨靈于萬物者豈止口體安飽而已哉眞 之意語默炳炳手三昧此乃公宿植靈根般若內熏 **餘察公眉睫間煙霞之氣栩栩然有塵垢粃糠濁世** 大事因緣入舍衛一見公喜不自勝此心釋然冰解 懸安富貴尊榮爾乃甘心寒嚴以六年苦行博廣大 始知龍象遊行固不可以蹊徑量浣慰何言周旋月 公所憂非在公身而在公身所繁耳非虛語也昨以

與梅喬本師

宣一周其聞者亦無多舛自信頗不妄談即不敢以 于 藏之房中以爲子孫之實且爲異日之話柄也 不敢忘佛事敬持一部上供師前以聽訓誨之恩願 著書見志聊足爲懷悔之資且見某于造次顯沛亦 心觀照隨以所得筆而記之不覺於軸今夏爲柔敷 能讀幸藉此地足可究心初至戍所坐屍陀林即安 戈戟場中未常一念忘其本事向于楞伽一卷句不 間而四事安居上賴 其罪不能計其少分也即今投荒萬里獨在蓋載之 免此某日夜所腐心者也別師以來忽忽四年雖坐 檀越惟此恩惠殞身以報末足以聽萬一拔毛以數 **居造育此人間華報詹尙可逃恐地獄真因又何以** 離者皆仗如來白毫光中一分功惠也名雖罪鄉均 弟子某自省罪原不通懺悔以自受身于父母受恩 君受教于師受知于朋友受法于知識受食于 聖主下資檀越不致饑窘流

獨弟子語

子行矣善自寬毋以小害大毋以人廢言其言曉曉

驅學步宜囏難是以聖人生于憂患死于放逸切問 防未然不處嫌疑間如鳥擇木似虎掌山世路最崎 惟學日積惟惡日新流俗已深上求友于古人君子 凝神無以爲易其心戰戰兢兢守口如耕防意如城 近思博學篇志逢人若愚處世如寄無恃口無飭服 近憂小事當懲細行當勤天命可畏聖言可尊定志 志順氣傷恃志狂小不忍則亂大謀人無遠慮必有 將以其信求其信果若我信子其勉之無順氣無恃

與曉塵上人

恬澹寂寞身如虚舟心若空谷是信我信子其勉之

散我炎荒作甘露清熱腦耳 手想孤峰絕頂覓得古人行履處也儻持片雲不妨 足下踞天目之師子還記落掌懸崖撫松立雪之事

憨山老人夢遊集卷第十三

憨山老人夢遊集卷第十四

侍

者 疆

日錄

落

嶺南弟子 劉起相 通 重較 調器

F

書問

與棲霞媚卷師

吾師高臥煙霞燒松葉翠鹿泉蓋三十餘年矣其視 **盔下驢前馬後生涯事供山中諸大士和以洩此中** 塵類如緣鉢蟲耳況此瘴鄉逐客手楞伽筆記蓋紅

與密藏開公

毒氣耳來首想發一大笑也

昨日侵晨繞塔畢即抽身贊輕及至奇識是法攀經 藏深固幽遠無人能到此中可容無數分身諸佛是

當究竟具實無以疲勞生厭傷也法身不動於何不 生不覺不知耳公法緣若畢可來共坐食頃若未畢 故遊戲林閒相與擊新彈指必擊震大千但此中秦

樂某和南

與悟心首座

古遠曆初至少林中毒者五思大師以弘法被害者力達曆初至少林中毒者五思大師以弘法被害者上此佛祖之槩可見者況吾輩生末法道德愧不若定生平切以六租不欠汝命一語作如幻三昧觀其定集必欲於實期于生死路上無少聖礙果若欠渠定業必欲於實期于生死路上無少聖礙果若欠渠定業必欲於實期于生死路上無少聖礙果若欠渠定業必欲於實期于生死路上無少聖礙果若欠渠定業必欲於實力。 受耳此中大光明藏鐵塵不立方是眞實大受用處子其安心勉力盡道

與體玄小師

蕩然淨盡成就最上因緣彌感 聖恩何惜一死公何以坐消白日諸所堪能惟浮漚脆質幻化死生不何以坐消白日諸所堪能惟浮漚脆質幻化死生不顧了能苟存一息以待諸子掀髯長笑於高空明月識所以坐消白日諸所堪能惟浮漚脆質幻化死生不

萬萬勿以常情爲朽夫憂也

寄無相禪人

作地獻禮子也 作地獻禮子也 作地獻禮子也

與龍華主人

斯對之所謂於食等者於法亦等此本懷也但此 準折對之所謂於食等者於法亦等此本懷也但此 準折對之所謂於食等者於法亦等此本懷也但此 等法力未充費於法財待積畜三年定箕踞龍華樹 等法力未充費於法財待積畜三年定箕踞龍華樹 如然香燒指無始宿債定要一時舊畢何可

與月清上人

> 歌喜耳其佗復何所云 塵刹是則名爲報佛恩也萬里無可爲信特此報公

與印庵法師

與贪妄也。

以為妄也

與方山補雲師

惟座下踞棗柏之室受天人之供挹性海之渡運悉 花之機蓋已十年於方山石堀閒也其所享法樂過 花之機蓋已十年於方山石堀閒也其所享法樂過 於四禪尚以智眼觀迷方之客乎不慧身臨瘴壑心 於四禪尚以智眼觀迷方之客乎不慧身臨瘴壑心 於四禪尚以智眼觀迷方之客乎不慧身臨瘴壑心 時之間皆成淨土此非諸佛大言也近於穹廬中所 惟公案聊持一葉奉供九會之衆想十方諸佛見此 作公案聊持一葉奉供九會之衆想十方諸佛見此 然不滅銕團

文殊右手可伸而至當不捨有綠惟願過之

與幻一律師

是以法爲懷願以法謝楞伽一部是足以轉之 也憶下劣被罪之秋法門震蕩神鬼驚泣座下辟穀 飲水再四周旋恨不得以身代之非有切於肌膚者 致水再四周旋恨不得以身代之非有切於肌膚者

與廬山圓通寺大衆

事業業場頭陀敬白鷹山圓通合山大衆惟吾曹谿 無盛於鷹岳而圓通甲於諸利爲第一弘法之所訥 最盛於鷹岳而圓通甲於諸利爲第一弘法之所訥 最盛於鷹岳而圓通甲於諸利爲第一弘法之所訥 是不異當年諸老陞堂入室時也況殿宇巍峩鐘鼓 但不異當年諸老陞堂入室時也況殿宇巍峩鐘鼓 是不異當年諸老陞堂入室時也況殿宇巍峩鐘鼓 整於流俗但知粥飯氣息不知有從前佛祖向上事 整於流俗但知粥飯氣息不知有從前佛祖向上事 整於流俗但知粥飯氣息不知有從前佛祖向上事 整於流俗但知粥飯氣息不知有從前佛祖向上事 整於流俗但知粥飯氣息不知有從前佛祖向上事 整於流俗但知粥飯氣息不知有從前佛祖向上事

> 重珍重 惠山老人降生出胎時節也汝等勉力幸勿遲疑珍 第二瓣香以離佛祖深思第三瓣香則當供養南岳 大衆懸意欲老夫權爲汝等作導師此雖法門所當 廬山諸大知識定當薰及圓通是時汝等聞香悉知 使老夫頭顱光際此時第一瓣香以祝吾 盛時不過合千萬人如一身耳今旣如此又何息叢 我力合異同令汝等各論貪癡共爲一命從前法道 此乎所幸佛祖有靈先得總持作汝等依歸心忘入 爲吾徒分內事但老夫夙業未消罪根未拔安敢率 所大患者心不等誓不堅耳總持長老來曹谿具述 火宅為蓮池况片瓦根椽咸出十万之力復何難哉 念專精一直向前至死不二即可化穢邦成淨土變 林不重與祖道不再振耶苟從兹以往心心不退念 意妄爲重爲法門笑具儻蒙佛祖冥資 聖恩浩蕩 皇聖書

與宗玄禪人

輩真實行履但不審晉蒙善知 識開示得正修心法 公戲根夙植不失正因閉關藏修屏絕外緣正是吾

+

與雲棲寺大衆

破時節也

老朽仰暮大師三十餘年向以業牽未及一造丈室

聞惠文法師在山與古德法師二友相與夾輔叢林 歌地則大明國裏無容更覓佛法禪道矣此中鐵 者一片休歇心耳若人人放下身心各各軍成大休 法王法如是一語覿面不昧即大師日夜放光動地 調和大衆如侍大師白槌之日但願在諦觀法王法 不立若生一念無慚愧心則不惟貧恩而自貧多矣 異由是而知山中法侶從今日去至盡未來受用大 師白毫光中一分功德猶不能盡何所欠少所欠少 誠如世尊言末法比丘能奉波羅提木叉如親我無 身心恬怡寂靜如明鏡止水何容藏塵妄想念慮哉 逸四事充盈宛然大師踞華座時不減毫髮故大衆 化日深根已淳熟況枝葉不存唯有真實故叢林安 也老朽老矣後會無期故增忉怛言不盡意 條章因事制宜即乘時律部精詳曲盡惟諸大德受 朽自還匡山緬念大師存日說法不減靈山其調衆 與諸法侶周旋警欬想大師必發一熙怡微笑也老 自恨生平關綠昨持辦香贈禮 龍前嚴在常寂光中

與巢松一雨二法師

理人來知公開關誦華嚴經數卷尚有餘功閱疏鈔 與人來知公開關誦華嚴經數卷尚有餘功閱疏鈔 與人來知公開關誦華嚴經數卷尚有餘功閱疏鈔 與是空山舉目寥寥以是於二公伯仲不能去於蔣 來也自恨生逢盛世竟未觀其盛覺特佛前佛後之 來也自恨生逢盛世竟未觀其盛覺特佛前佛後之 來也自恨生逢盛世竟未觀其盛覺特佛前佛後之 來中個有一個最可爲公道或佛神力故假老朽此 於中果有不通處願公爲我通之以法忘情正不當 於中果有不通處願公爲我通之以法忘情正不當 於中果有不通處願公爲我通之以法忘情正不當 於中果有不通處願公爲我通之以法忘情正不當 於中果有不通處願公爲我通之以法忘情正不當 於中果有不通處願公爲我通之以法忘情正不當 於中果有不通處願公爲我通之以法忘情正不當 於中果有不通處願公爲我通之以法忘情正不當 於中果有不通處願公爲我通之以法忘情正不當 於中果有不通處願公爲我通之以法忘情正不當

與黃檗無念禪師

公相對一談亦萬古快事也有懷不禁燈下草草

一生無所建立至於曹谿爲六祖道場又以障重不心光洞照爲日久矣不慧忝在法門道不勝智泛泛

何幸得令師蹶起一代之衰所係匪細苟不能開正

うけせ

to de la late de late de la late de late d

彈指也何如

老朽自愧道不勝習無補法門向為業力遷觸於海老朽自愧道不勝習無補法門向為業力遷觸於海洋道妙一班且恨未及見也頃聞令師入滅傷嗟乎其道妙一班且恨未及見也頃聞令師入滅傷嗟乎其道妙一班且恨未及見也頃聞令師入滅傷嗟乎法門薄怙哀悼久之此知座下開法於博山喜不自法門薄怙哀悼久之此知座下開法於博山喜不自法門薄怙哀悼久之此知座下開法於博山喜不自法門薄怙哀悼人之此知座下開法於博山喜不自法門薄怙哀悼人之此知座下開法於博山喜不自法門方。

署者也然光朽自信不謂非令師之知已故深入其 舉者也然光朽自信不謂非令師之知已故深入其 學其正令其餘實行別作一錄可也深愧不文聊足 學其正令其餘實行別作一錄可也深愧不文聊足 自有具眼考幸識諸弟子不可妄意增換不唯傷文 自有具眼考幸識諸弟子不可妄意增換不唯傷文 自有具眼考幸識諸弟子不可妄意增換不唯傷文 自有具眼考幸識諸弟子不可妄意增換不唯傷文 自有具眼考幸識諸弟子不可妄意增換不唯傷文 自有具眼考幸識諸弟子不可妄意增換不唯傷文

又

现尺相望如在眉睫音聲相及不隔一毫乃辱惠問 思子公常默然再不必以此置脣吻也 現乎公常默然再不必以此置脣吻也 我手公常默然再不必以此置脣吻也

雲門湛然禪師

之盛讚莫能巳老朽愧辱法門一毫無補且今老矣 以開羣蒙使法門後進順捨陋習而歸之如水赴壑 振者何幸得公蘇起東南建大法幢獨揚軍傳之道 誠一代之偉事也老朽昨遊吳越幸觀光議慶法道 西來一脈至我 比匿迹匡山以送餘日閉關絕緣一息待盡而已廬 場老朽聞之歡喜讚歎惟公正當盛化之時名山勝 十七人皆傳燈盛烈墮荒榛者百餘年矣近以達師 山故稱西江名勝不惟蓮社肇基即歸宗自晉開 慨嘆而已護法汪公邢居士援奉迎座下以光揚道 發起因緣重與以來二十餘年猶然故物老朽但有 有唐亦眼禪師大闡宗風下至佛印眞淨諸大老三 地地靈人傑因緣不偶想必欣然命錫大千掌果定 不以山川遠近為懷也 明百餘年一絲垂絕久未見有力 Щ

答四一授公

疏見示唇委爲序衰病連年眼目昏花頭重眩暈不 投老匡山掩關養疴僅存一息遠遺手書以經論二

指安敢妄擬以此不及奉命(黨天假之年·衰病少愈) 敢展卷久視日唯昏睡是以未能盡閉始終不得妙

與關主修六逸公

尚當讚嘆有分

叉

| 久雨苦人不能遣訊此心未常一念放下也知公安

51

居寂靜身心泰然妄念久自銷落矣但當妄念劉落 為得則從此墮於任病。只圖幽幽綿綿以無事為妙 為得則從此墮於任病。只圖幽幽綿綿以無事為妙 為得則從此墮於任病。只圖幽幽綿綿以無事為妙 為得則從此墮於任病。只圖幽幽綿綿以無事為妙 意此妄念銷落時。正好著力提持話頭切切參究重 言此妄念銷落時。正好著力提持話頭切切參究重 下疑情若疑情得力靠定話頭晝夜審究愈究愈深 下疑情若疑情得力。

與漢月藏公

與一個公以向上一路極力為人此末法中最為難得但 與一個公以向上一路極力為人此末法中最為難得但 與一個公以向上一路極力為人此末法中最為難得但 與一個公以向上一路極力為人此末法中最為難得但

答頭石上人

所須無足以當法限姑置之幸以本分著力為望也若此爐韉不化則將為不祥之金矣公其勉力哉體俱化矣適是來書謝然故吾悲矣足見入道之難體俱化矣適是來書謝然故吾悲矣足見入道之難體與化矣適是來書謝然故吾悲矣足見入道之難

上山東德王

外皆是邪魔邪法也故曰惟有徑路修行但念阿彌

同遊蓮池海會將來垂悲願力轉去十方度生不被

戒殺生可以延年壽寡姪欲可以却疾病息妄想可

伏承問日用工夫敬陳如左

心失却本有清淨極樂也心失却本有清淨極樂也

與莆州山陰王

音以扣立默翼神珠朗炤不在多言無盡際豊直千里同風者比哉未遂接足故託此友期惟願大檀安心一境平視死生是則把臂寂場至期惟願大檀安心一境平視死生是則把臂寂場至

又

根永斷豈但能輕萬戶耶嘗謂像代可無臨濟德山

又

叉

攝受我也

耳山野以幻化空身投之蠻煙毒霧中如坐千尺寒 有成虧於法性無加損智眼明炤諒不以之撓泰定 一往麥事前書具見既皆顕倒夫復何言第在世相

The state of the s

殿萬年冰雪即有骨未融而亦爲之銷樂也不審異日賢王於何處案空生耶山野近在五羊得奉法冒當之深委慈念眷注之切細披諸作皆精心中出自當光耀千古此於邸報見斷髮表誠疏此實賢王壓對以爲賢王果能親生死如一髮則必能以一髮引野以爲賢王果能親生死如一髮則必能以一髮引是不待越三界而取菩提儻或智發於忠以忠資習是不免於祥在雖博名高難收實效而世出世法兩是不免於祥在雖博名高難收實效而世出世法兩是不免於祥在雖博名高難收實效而世出世法兩是不免於祥在雖博名高難收實效而世出世法兩是不免於祥在雖博名高難收實效而世出世法兩是不免於祥在雖博名高難收實效而世出世法兩

叉

為於印今則謂之不然何也以法性偏在無情而法者, 青者每聆談者謂四大無常而佛性眞常則以無衰惱耶嘗聞佛為波斯置王指不遷之見以觀河即之惟我賢王終日臨流賭逝者如斯而見未嘗往即之惟我賢王終日臨流賭逝者如斯而見未嘗往

從言之令人悲慨耳前大義自河中持法旨來今忽得況參復商異路宛如隔世縱精神洞達而形迹靡一時也第恐人生浮世幻影幾何良友勝緣不能再計與老居士一別幾三十年瞬息頃耳信乎念劫同

屈指又三年矣日月歎人亦至於此讀礼語知法體

叉

人生天地別忽如遠行客況以一息餘生持浮脆之是接法音環環在耳回想舊遊不隔纖毫是知古人不遷之旨即在當人日用中也山野年來此中法味不遷之旨即在當人日用中也山野年來此中法味不遷之旨即在當人日用中也山野年來此中法味不選但不得與知已共之耳昨某來具悉賢王起居不透但不得與知已共之耳昨某來具悉賢王起居中求此清涼人物豈易見哉惟賢王幻遊浮世百無中求此清涼人物豈易見哉惟賢王幻遊浮世百無中求此清涼人物豈易見哉惟賢王幻遊浮世百無中求此清涼人物豈易見哉惟賢王幻遊浮世百無中求此清涼人物豈易見哉惟賢王幻遊浮世百無中求此清涼人物豈易見哉惟賢王幻遊浮世百無中求此清涼人物豈易見哉惟賢王幻遊浮世百無中求此清涼人物豈易見哉惟賢王幻遊浮世百無

人天歲見多實全身也又不知幽暗衆生可能盡路身之衆未知集否又不知誰爲彈指開寶塔戶普集

與 曾見 齊太常

此段光明否

是二利之行臨邊法之心而以斯道為任若公與二 三君子者無多讓已末法之幸何幸如之鄙人私念 三君子者無多讓已末法之幸何幸如之鄙人私念 三君子者無多讓已末法之幸何幸如之鄙人私念 是中作主最難得人以其現處五獨煩惱深坑今欲 中作主最難得人以其現處五獨煩惱深坑今欲 時界之所隨單不為五欲投兒之所引弄不為是非 目前種種幻化不為五欲投兒之所引弄不為是非 目前種種幻化不為五欲投兒之所引弄不為是非 是一來可謂善入無礙大解脫門所以慶 世界之所範圍不為妄想情愛之所感亂不為身心 人我之所障蔽不為功名富貴之所感亂不為身心 為生死事切願試入此三昧若入得其真則如大火 高生死事切願試入此三昧若入得其真則如大火 於屬處洞然彼何物而敢攖傍耶世人學道學皆捨 聚屬處洞然被何物而敢攖傍耶世人學道學皆捨

又

獨居幽眇寂寞情深心境寥寥豈不依依法中骨內緬惟道誼員期願超色相妙契忘言初無彼此良以

項月清上人來派動定勝常知已善於日用工夫漸增綿密逆順境緣無非佛事第恐於佛事中看益知見以為病刺耳看來此事原一平等真際任運現前了無遮障吾人所以不得真實受用者誠所謂四相了無遮障吾人所以不得真實受用者誠所謂四相為情留心冷地惟公力荷擔之自非般若緣深何能為情留心冷地惟公力荷擔之自非般若緣深何能為情知此更冀順時勉圖志登彼岸底不負法門知底信如此更冀順時勉圖志登彼岸底不負法門知底自非內恃寸心外依諸大知識神力所被則所不敢留影石室也

叉

日用一切順逆境緣能炤破否於一切煩惱習氣能持虞抑及道心濃厚峻然徹見高抱矣忻躍何如悲夫世道交喪人心汨溺火馳而不返槩不知其誰為已有也豈得挂齒於生死大事哉惟公所云以此事已有也豈得挂齒於生死大事哉惟公所云以此事

厭思算之念思算日深則厭難日切苦惱日重將謂

能於此炤破加乙求道乙志與乙角立便起無量於

者乎是則雖爲生死而不知生死之根本也由其不 息且不能又安能圓觀洞炤當下消滅如片雪紅爐 目前念念與之打交滾矣安有一念暫息哉一念暫 哀樂妄想情慮兒女眷屬種種意應諸生死業皆在 生虚妄者也由是吾人認以爲實不能炤破故爲生 界虚妄之相宛然具足被其龍單所謂迷本圓明是 生有滅既有生滅即名生死既有生死則有身心世 死拘留故於一切境界若功名富貴人我是非喜怒 心我人世界生死之相因最初一念妄動而有生因 者良以吾人本體原是妙明真心圓炤法界本無身 太阿當空誰敢撄其鋒者此則名爲大自在人矣何 界煩惱習氣妄想觸之如片雪輕霜不可依傍又如 所點去無蹤迹直令此智現前如大冶紅爐一切境 但只於此身心世界圓觀一念炤破如鏡中像來無 只今十五年中窮歷冰雪冷地看來原無異樣題公 消磨否然此事鄙人早年切切用志將謂萬分奇特

生以前一觀觀定任他種種變幻起滅切不可追隨 來但只日用工夫將一切境緣煩體身心世界一一 內守姆開猶爲法塵分別影事此正所謂識神之影 墨絲慶對境生滅之念認爲真實都謂即此便是此 也惟公以道相看即道中骨內既爲生死痛切就當 久自圓明圓明則生滅無寄生滅無寄則生死何從 譬如明鏡當臺雖現色相而無去來之迹如此鑑炤 炤破目前無有一法當情單單的的於一念妄想未 痛切則顧不可坐在此中亦不可思算厭難等待將 都流入此弊見之不明炤之不破若是則雖爲生死 況彼緣塵擾擾者手由其無真知見人與之決擇大 明妄想之機關生死之堀穴所知之大障此尚非真 又病中之病最難治者也良以縱滅一切見聞覺知 豈不虛生很死哉此蓋世有志者之通弊也至若有 而寄之耶此則雖非要妙乃初心第一步之要緊處 而實重增生死豈不謂病中之病也惟公旣爲生死 志於塵勞境緣上作工夫者又以見聞覺知昭昭靈 必待捨離而後能若終身不能則終身於此絕分矣

所裁願公朗炤而力圖之隨處下手更不可思算等待虚抛日月也信口不知

與汪南溟司馬

劣授我金剛如幻三昧是時猶住音聲色相關雖其 門深信長者獨證之餘皆無入者某固識之而未能 出也敢忘所自有資於知已哉比知長者深證無生 事知識如妙師者無二志是故十年嚴穴耿耿孤明 內斯豈常情哉盡皆法愛也清涼分錫某傾一 妙峰禪師長者無他念蓋恭法門寥落屬空區區將 真切語也既而長者隱宰官身去復教某善事良友 **猛躍然良以絲毫未透如隔千山此古人親證實到** 能令我七日掩攔一超直入爾時某難暗鐘豈不勇 也蒙以法示我動之以定拔之以智喫喫相爲恨不 心領神會尙成眼鈍頭迷至於廣大自在無礙解脫 某憶往昔參長者於毗耶離城唇慈光洞炤不以下 比小歇場亦頗自信此皆自我長者大智光中所流 有以負荷耳臨行迴旋說偈叮嚀懇懇言外不啻骨 念冰霜心心獨炤雖痛徹骨臟有愧古人至若此 。命以

室老人豈不時時遙伸右手過有餘城爲一摩頂攝枯骨以休其於長者妙音色相未嘗去於三味也勢良爲宿業所引至於東海愛此深山大澤志卜納此良爲宿業所引至於東海愛此深山大澤志卜納此

與周幼海灭球

職息十年都成夢幻法門矣鄙人居五臺十七年寒徹心骨幻體不禁遠尋東海場谷結鷹以居所居二中東南名勝乃佛經所載古那羅延堀者鄙人下於平東海名勝乃佛經所載古那羅延堀者鄙人下於一東東海名勝乃佛經所載古那羅延堀者鄙人下於一華東海名勝乃佛經所載古那羅延堀者鄙人下於一華東海上高苦無濟勝之具似不能入此海印三昧。 節長者年高苦無濟勝之具似不能入此海印三昧。 節長者年高苦無濟勝之具似不能入此海印三昧。 節長者年高苦無濟勝之具似不能入此海印三昧。 即是長者法身常住此中矣長者能如題乎

來是 一至於此豈非長者罔象之手。誰可當之西 來是別等滿祇林片言見心痛微骨髓直使天華錯 來是別數崇慧日圓明魔宮慶城惟此因緣又非邊 本路沿緣長至日方抵白下諸凡無恙所持大藏入 寺之期舍利散於重霄群光現於塔表光光北向網 等之期舍利散於重霄群光現於塔表光光北向網 等之期舍利散於重霄群光現於塔表光光北向網 等之期舍利散於重霄群光現於塔表光光北向網 等之期舍利散於重霄群光現於塔表光光北向網 等之期舍利散於重霄群光現於塔表光光北向網 整中諸大士身心能無疲厭否

與顧朗哉

別來坐此牽鄉准嵐煙而飲毒霧頗與嚙雪吞藍同

與瞿太虛

新刻數種之中原與足下共之境此時但一與懷炎蒸頓失是又足下洗我此心也以此時但一與懷炎蒸頓失是又足下洗我此心也以此時但一與懷炎蒸頓失是又足下洗我此心也以此時但一與懷炎蒸頓失是又足下洗我此心也以

謝毛文源待御

富與 社稷相爲常住矣營建之業奉承法旨獨撤 富與 社稷相爲常住矣營建之業奉承法旨獨撤 高與 社稷相爲常住矣營建之業奉承法旨獨撤 高與 社稷相爲常住矣營建之業奉承法旨獨撤 高與 社稷相爲常住矣營建之業奉承法旨獨撤 高與 社稷相爲常住矣營建之業奉承法旨獨撤 高與 社稷相爲常住矣營建之業

與張守菴

間也草膏威嚴不勝惶悚

學聞佛說學般若菩薩即為擔荷如來今見我公如 學聞佛說學般若菩薩即為擔荷如來今見我公如 是用心求無上菩提誠信世尊言不虛也切念末法 且如天人多受欲樂不省發菩提心又非我公天鼓 理如天人多受欲樂不省發菩提心又非我公天鼓 一程記人人成佛即有以惡罵捶打菩薩皆悉能忍此 授記人人成佛即有以惡罵捶打菩薩皆悉能忍此 一方子佛觀此末法衆生多剛强難化若菩薩願於此

又

切禍患了然不動於心古偁大力量人便是此等樣生死相關何人能似公生平解脫視生死如遊戲一誰不强口高談向佛門中做地獄種子及拔一毛皆誰不强口高談向佛門中做地獄種子及拔一毛皆

一一点不能傾刻怠惰專以度生為事以佛法為命此一言不能傾刻怠惰專以度生為事以佛法為命此一言不能傾刻怠惰專以度生為事以佛法為命此一言不能傾刻怠惰專以度生為事以佛法為命此一言不能傾刻怠惰專以度生為事以佛法為命此一言不能傾刻怠惰專以度生為事以佛法為命此一言不能傾刻怠惰專以度生為事以佛法為命此一言不能傾刻怠惰專以度生為事以佛法為命心今將三年內所著諸書皆發明佛祖心印宪明大也但願公仗此法力早蒙解脫尚冀未盡之年廣作也但願公仗此法力早蒙解脫尚冀未盡之年廣作無邊佛事耳

答龔修吾

-204-

山僧所言無念如空者非是斷滅無知豁達空也論達究竟心原而以有思維心圖度無思維境界也然持悟以謂此中實實有箇光景為所得之地此皆未持態與謂此中實實有箇光景為所得之地此皆未持態以謂此中實實有箇光景為所得之地此皆未持極以謂此中實實有箇光景為所得之地此皆未持極以謂此中實實有箇光景為所得之地此皆未持極以謂此中實實有箇光景為所得之地此皆未持極以謂此中實質有質,是一語中來然非公真專釋所問三則皆從山僧無念一語中來然非公真專釋所問三則皆從山僧無念一語中來然非公真

ラササ

無者但無一切分別妄念耳覺是斷減頭然無知耶 浮雲錄起錄滅起滅自彼而吾心體寂滅湛然不動 故老龐云但願空諸所有切勿實諸所無是以山僧 無此事由其心本無生所以山僧說無念耳是則所 雖有種種分別計較之心總是妄想以清淨心中本 此現在身心世界皆是幻化不實如夢中事如太虚 綠如此看來久久純熟自然心體靈明寂滅現前一 至極處當自了知不知亦不許思算亦不得相續攀 觀定勘此念畢竟向何處起不知起處真道不疑疑 中但任運觀之凡有一念起處即是妄想當下一觀 示人作工夫先有的的信得自心如此而於一切時 做工夫第一要諦信自心本來清淨光明廣大而觀 念妄見即是生死根本何況種種思算計較耶吾人 明了無一法永難諸見本無身心世界之相但有 自心眞個如此廣大靈明寂滅始信心佛衆生本來 切妄想情慮如湯消冰應念化爲真心矣到此方信 自靈明廓徹廣大虛寂本無觀毫妄想情慮清淨光 云心體離念雜念相者等處空界以其吾人心體本

平等了然不疑無復他念耳若果無他念不妨念念而竟何念哉至此亦無光景可得即此便是工夫不而竟何念哉至此亦無光景可得即此便是工夫不同光影門頭把作實事亦不可將他古人言句存在向光影門頭把作實事亦不可將他古人言句存在向光影門頭把作實事亦不可將他古人言句存在阿光影門頭把作實事亦不可將他古人言句存在不可說心在腔子裏黑漫漫地古人目為黑山鬼颯不可說心在腔子裏黑漫漫地古人目為黑山鬼颯不必分星擘兩也若一一搜求差排更增馳求妄想不必分星擘兩也若一一搜求差排更增馳求妄想不必分星擘兩也若一一搜求差排更增馳求妄想不必分星擘兩也若一一搜求差排更增馳求妄想不必分星擘兩也若一一搜求差排更增馳求妄想不必分星擘兩也若一一搜求差排更增馳求妄想不必分星擘兩也若一一搜求差排更增馳求妄想不必分星擘兩也若一一搜求差排更增馳求妄想不必分星擘兩也若一一搜求差排更增馳求妄想不必分星擘兩也若一一搜求差排更增馳求妄想

憨山老人夢遊集卷第十四

恋山老人 夢遊集卷第十五

者

福 善 日稣

人 通 加 編輯

HH.

嶺南弟子

劉起相

重較

書門

與陸五臺太宰

交願也往以未得瞻禮爲闕春時祇園暫對業已慶 荷山僧居常獨處山林每感護法深思未嘗不涕四 持像教數十年來注門九熙一絲唯老居士一身擔 伏惟老居士親授靈山竹屬來此末去現字官身匡 驚怖賴我老居士以衣覆被不獨使法門安堵抑令 快生平既而東歸海上復聞闡提作大法障難心甚

大藏表顯人天無復驚疑某每對三寶然香煉臂以 二藏公向未有聞想奉持之心益堅固矣 書法施乙心也致謝無量其臺山大藏因緣料巳不

與李廓菴中丞

憶昔長安月夜促膝談心香積良期飽飡不二回首 風塵從茲隔絕一別幾十年所矣念忠懷道誼耿耿

. ..

.

陽春惠澤不藏白毫光中看一照及罪垢頭陀以業 豈可再得雖絕徼遐荒而草木有知安能一日忘於 霜之高韻不減養皇太古山僧比業重徳墮茲瘴海 伏惟長者凝神澹泊遊刃玄虚引松竹之清風發氷 敢生人之內可謂無安極如火宅不獨炎洲赤土也 極樂以享四事之豐手況復魔黨横行夜叉四出而 下之珠不獨九淵無光抑且孤負貧濟又安能望臻 精明常目在高空雲漢閒也嗟嗟獨世道與時 福衆生不能賭縣鳳之祥惟無長者政若聽龍失額 僅持一息聊復四年朔雪炎方相縣萬里追憶奮遊

答許鑑湖錦衣

因緣而行佛道否

性耶殊不知此意人人本來具足不欠終毫似衣底 耶若果意自西來則祖師未來以前此土人皆無佛 揭比量牽鰭來目所云西來意者畢竟西來有何意 明珠向自有之佛祖但一指示原無實法與人也若 唇垂問法語數則鄙人鈍根庸流安可以副高望聊

作實法會則遠之遠矣所云坐禪而禪亦不屬坐若

以坐爲禪則行住四巖又是何事殊不知禪乃心之 異名若了心禮寂滅本自不動又何行坐之可拘苟 不遂自心雖坐亦剩法耳定亦非可八若言可入則 非大定所謂那伽常在定無有不定時又何出入之 有心本無相有相則非異心矣無有不定時又何出入之 之而不入者殊不知此乃古人一期方便如轂門五 之而不入者殊不知此乃古人一期方便如轂門五 之而不入者殊不知此乃古人一期方便如轂門五 一念爲主如寶劒橫空佛魔俱勤情墜何敢撄傍如 一念爲主如寶劒橫空佛魔俱勤情墜何敢撄傍如 一念爲主如寶劒橫空佛魔俱勤情墜何敢撄傍如 一念爲主如寶劒橫空佛魔俱勤情墜何敢撄傍如 一念爲主如寶劒橫空佛魔俱勤情墜何敢撄傍如 一念爲主如寶劒橫空佛魔俱勤情墜何敢撄傍如 一念爲主如寶劒橫空佛魔俱勤情墜何敢撄傍如 最自信耳

與孔原之

把臂手昨臨行作數語屬獨生留別足下且引王維一一一法清淨土中來山野自知嚴路忍拋足下寧不一一一一法清淨土中來山野自知嚴路忍拋足下寧不

歌知除老病推有學無生之句此蓋就文士痛處割 並足下即不能於此悟入願歸命三寶前受持圓覺 並足下即不能於此悟入願歸命三寶前受持圓覺 並是下即不能於此悟入願歸命三寶前受持圓覺 並是下即不能於此悟入願歸命三寶前受持圓覺 並是下即不能於此悟入願歸命三寶前受持圓覺

與郭美命太史

與吳運使

佛法禪道歷参真正知識以海融滓後**海**滌塵智而多舛駁不精難以著相定於是非之辨若非久留心至示名公書記欲山僧印證大段世俗之學佛法者

與黃子光

雄猛丈夫者不能也山僧就中略視一週已見大意 敢妄擬其優劣幸有管東溟居士法眼存焉東溟先 難窺實際即有真心爲生死大事且又執我見立牆 **但取依豨彷彿學相似語資談柄作影身草者斷斷** 不隨他人脚跟轉矣古語有云丈夫自有冲天志不 字字融通心地以至忘言契會自有一念相應處是 見管君長處公備若留心此法請讀圓覺經千萬偏 慮言言有本事事有君殊非漫語且就此中亦不能 然管君見性亦未放許透徹要之秉教奉行苦心深 斧鉞此正謂當仁不讓於師非具正法眼秉慧劒稱 執業於整何公今觀此書所以力教楚老之弊不避 **墨者又忍交涉今所謂名公者多矣雲外野人又何** 時公自有分曉不必廣求佛法亦不必多起知見定 以公眞心待三寶故山僧亦披肝露膽不避譏嫌爲 向他人行處行此非虛談公若果趨向此事切須眞 實爲生死大事一著喫緊萬萬不可作戲具增口過

在目溪壑滿耳未必不對法身而聆長舌耳春來動在門溪壁滿耳未必不對法身而聆長舌耳春來動者當迎杖易共升造數也去臂共行直使佛祖避舍三十分翼足下時與此老把臂共行直使佛祖避舍三十日來所作水月道場空華佛事隨見影響候莊嚴有日來所作水月道場空華佛事隨見影響候莊嚴有

仲氏炳然現我三昧也惟幽居遠市閉戸死心山色

時來安坐海印光中與諸幻衆揮塵默談頃閒賢伯

5

奥黄梧山

や其一作之

路今親其不能久住者始非佛日炤臨不深實在機 所足可安心異日感應道交依然海印三昧也 長空一般風月有何去來之相惟尊人無恙子光得 就手所願障翳頓除何患慧光不朗朽夫此行萬里 感者煩惙稠林障翳不淺耳又何以常情論成壞去 方如日月光於幽谷耳長松巨石稠林陰翳終天莫 則久住綠淺則易壞此理固然今海印道場之在東 **吾佛出世全在機處**因綠淺深以彰法之久近感深

與江吾與

發信心知有此道者多但緣未熟耳以今視昔之東 綠者則朽夫實所甘心否則七寶莊嚴皆屬有漏業 之事觀之但願得一人能不退菩提心成就最上因 生不避三途劇苦刀山火聚不以爲思以朽夫今日 因耳又何取焉今朽夫獅身魔界僅僅一紀而其開 來所使教化成熟一切聚生以此爲事乃至爲一衆 善知識出現世閒遊行自在如大獅子所作皆奉如

> 不欣然就道耶 今見足下書翻然改圖是不負此心雖萬里如面豈

與即墨父老

海之原轉文機之軸下成佛之種子孕作聖之胚胎 彼取此則諸君子可稱出世知已矣 者存焉又何以論空華凋謝醫眼較得失乎苟知去 幾百年也況復布慈雲於邊地明佛日於重昏開性 不能流芳適足以貽笑不知兒童稱說父子相傳於 得一世之榮不若得一世之名即山野之於山海固 山野心知此段公案深信上天之載自有無聲無臭 足之憂其不稱千載之知已多生之有緣手諺語云 諸君子一紀之數不減骨內之愛萬里之遣重遺手 飲一啄皆屬前緣一實一賤交情乃見若山野之於 知己念切於有緣在古聖賢猶然況恒品手聞之一 離合之情悲喜自昔去來之想夢寐爲勞蓋心苦於

與陸太宰長公

天眼目世出世法打成一片總歸金剛心地即山野 惟太尊人乘悲願力現宰官身作大佛事爲一代人

鄙循古今異代矣且一時從遊者惟足下習染最重

於智知者自出世以來乃至末後垂手之際未嘗一念捨護法心度生之事業也比雖順世無常隨乎幻化而法身體堅即三夾彌綸湛然常住不獨社稷之化而法身體堅即三夾彌綸湛然常住不獨社稷之化而法身體堅即三夾彌綸湛然常住不獨社稷之化而法身體堅即三夾彌綸湛然常住不獨社稷之化而法身體堅即三夾彌綸湛然常住不獨社稷之中實能令人痛絕也所幸居士爲克家之子不獨世其世家而亦世其出世家聲也所悲在彼所喜在此其世家而亦世其出世家聲也所悲在彼所喜在此其世家而亦世其出世家聲也所悲在彼所喜在此其世家而亦世其出世家聲也所悲在彼所喜在此其世家中傷以供真前想在寂光必數喜攝受顯居士念此片心聊引侍者代繞三市於座下幸無以荒唐而拒之也

與汪仲嘉

一息千日若從前造道如此可不讓古人今將總洗眼觀之自不見有絲毫去來動靜心登道坐此摩鄉日月向何去頃登道以業風吹墮羅剎鬼國昨南來日月向何去頃登道以業風吹墮羅剎鬼國昨南來隨往音從賢伯仲遊尙在兒童一別三十餘年不知

被愧鈍根不若臨濟當下三拳一掌耳知從前知見多落光影門頭荷不蒙 聖恩大施鉗知從前知見多落光影門頭荷不蒙 聖恩大施鉗前您不敢不勉力自策故於荷戈之際力死此心始

與管東溟僉憲

歷難以來獨以金剛正眼視之從始至今就中教喜 管書山樓對坐每聽立論是時尚在顕蒙雖不知維 等室中之秘蓋亦心知其為不思議人也別來三十 餘年謂如食頃信乎如來出世始終不出刹那際三 時心發道每自尅實徒生斯世枉入空門雖有志齊 古人然恨不得古之知識如臨濟德山雲門諸老為 之師匠模範即能以般若之火鎔佛生之金而欲求 為眞正佛祖面目者蓋亦難矣是以二十餘年苦切 此林個中未敢輕放一稜種種幻化之緣舉皆空中 山林個中未敢輕放一稜種種幻化之緣舉皆空中 山林個中未敢輕放一稜種種幻化之緣舉皆空中 自於謂鐵圓重關非此鉗錘不足以摧碎之也爱自 自於謂鐵圓重關非此鉗錘不足以摧碎之也爱自 自於謂鐵圓重關非此鉗錘不足以摧碎之也爱自

語痛念生此末法澆滴之世偶被業風吹扇好事者 以三十年來苦切此事至若千尺寒嚴萬年冰雪中 微尤難見信於一時至若生死大事實在已躬報佛 天下後世復遭此逆緣類墮俗數其迹既眇其心益 即以法門人數口之愧理不充行不備不足以取信 不敢望於古人而此一念精真即窮劫不退此非妄 徹骨徹心隣一生九死者又不止今日事也所恨歷 人倫所幸身託袈裟即當爲法王忠臣憝父孝子所 鍾鍾於忠義居常私念丈夫處世既不能振綱常蟲 於出關南華作於逐世是雖性情殊途而志則一致 深恩事無有地聞之人子之事親也以不辱其身謂 劫雪氣欲順盡於一世固其所難要且自知妙悟萬 學皆心假言詮志藉事表若夫貧道者自知智氣所 之孝今貧道斷變毁形旣不能爲世間孝子而罹罪 言宣志即事見心易演於美里職發於江濱道德著 異路然雖出處不同事行各別亦各有其志莫不因 佛力此心又惟佛可知也貧道常謂古今異代聖凡 之心不滅平昔且日昼過之所以彌感 聖慈深荷

我者其不以我妄乎聞之惟聖人能通天下之志適 亦足何暇顧雌黃審得失以適衆口之辨哉明公知 失人身萬劫難復駕或綠差異路換面數頭即欲以 衆人之情未聞天下龍通聖人之志衆人能適聖人 綠而就儻一言有契佛祖之心當知音之質則夕死 識豈可復得是以不知羞慚亦不計其可否但任因 今日之身作今日之事持今日之言求正今日之知 爲命誠恐一旦姿填溝壑即與草木同枯朽矣況 形巳消日雖長而生巳短苟不努力强持一息以法 俱已備歷顧此蕞爾之驅何當受此燒養志有待而 此公案者自念久居塞北走盡天兩人閒極品炎寒 **著諸書在干戈壁里閒不敢一息懈怠所以急欲了** 事一入瘴鄉不數日即以楞伽為佛事三年之內手 之心匡持佛祖之命豚既不失爲法王之忠臣是故 當捶楚之餘擲此瘴癘之地不敢一息忘於度生之 **厚行又不足以終出世事業眞僧俗兩失之矣豈不** 虚此生哉實欲於九鼎一絲之秋以程墨公孫杵臼

之情者也但禀於心不假於外耳細誦來教證美過

阿云第不審未死之年可能接足承願如今日之談 露向人或於楞伽案頭幸一印正則千里覿面夫復尊慈所以屬望於下劣者正如啞人吃黃柏難以吐情深感護法精心悲在同體不敢以世諦嵐也即荷

與馮具區太史

否

與唐抑所太史

嚴大施門開碩示實藏實所至望耳

仰唇同體真慈多方護念向聞炎方真同火宅饑饉

情重取法門之玷幸為謝諸故人仰惟炤攝更願以良不負此生平適足以報知已耳又豈敢以逐境生能假此鎔治鹽垢消亡精真獨露斯實。聖恩所賜餓殍枕藉道路山野私念極境窮冼為道緣爐鞴苟

道自重自愛

與王衷白太史

等謂一切聖凡皆依如幻業力而得住持則去來起一些報樂歌即填溝壑不能再瞻天日幸為謝諸故人於謂所為諸凡無恙惟專中連遭饑饉來非處言也山野何方何地所云情生智隔想變體殊非處言也山野何若慈被諸凡無恙惟專中連遭饑饉乍冒炎蒸蹈分數是大誠可爲喻山野諸所堪忍惟以幻化浮身難禁銷鑠恐即填溝壑不能再瞻天日幸爲謝諸故人禁銷鑠恐即填溝壑不能再瞻天日幸爲謝諸故人禁銷鑠恐即填溝壑不能再瞻天日幸爲謝諸故人禁銷鑠恐即填溝壑不能再瞻天日幸爲謝諸故人

又

所緣緣諸苦趣憶昔長安深夜燈前一見忽若再生滅之境耳想別來密證之功已深入無際聞之菩提世相空花衆生顚倒所搖目者惟智眼明見端然寂

现法界海慧照之則又了無陳迹矣 以法界海慧照之則又了無陳迹矣 以法界海慧照之則又了無陳迹矣 以法界海慧照之則又了無陳迹矣 以法界海慧照之則又了無陳迹矣 以法界海慧照之則又了無陳迹矣 以法界海慧照之則又了無陳迹矣

與高司馬

即法施之隆未必不自長者真心流出也 東華所志探玄理窮死性原者有年至若詩文原非本業即有一二口頭語慨以應化之迹殊非作者擅本業即有一二口頭語慨以應化之迹殊非作者擅本業即有一二口頭語慨以應化之迹殊非作者擅本 與地惟禪門著述頗有數部草物疾此行南中荷戈原非本業的有一二口頭語、大原,其一個人。

往者同江雪夜一夕千秋臨別教言泰山九鼎不獨

與王性海大行

虚陵米價竟無可與淨土勝綠業已深結承禪稅思 強當不負空生託鉢也別後抵戍所其地瘴煙復逢 後當不負空生託鉢也別後抵戍所其地瘴煙復逢

7

惟法屬有緣事如有待此經入震旦千有餘年況經前北來僧乾峰旦託問訊併致楞伽筆記奉求印可

點瑕疵如奪秦庭之壁是在座下勇健耳 此大寶和盤託出光照人天未必不假神力也願指 何以有此難思之事手就中不知究竟何如一旦以 野鈍根之手播弄一番誠非小小因緣也豈與座下 彰以至今日被座下拈出於急流中一語拶破入山 同受靈山之囑將鼓簧此法以救末代之弊耶不然 註疏者汗牛亢棟而獨不及此使達磨心印暗而不 三譯之手自昔弘法諸師若清涼主峰不少其人所

與傅金沙侍御

逃而下劣之心即得解脱無復成佛之想矣又何以 智力居多慶躍何如旃檀如來下劣荷擔艱難之狀 聖心有此回向法輪大轉光被海宇而立樞默運仗 夜無懈頃乾峰上人來幸接法音喜不可言具聞 梅不敢上資 力此感不容聲矣自入瘴鄉心知罪狀日夜精動懺 種種不能委悉今蒙大悲手眼拔出沈淪使法身不 念此萬里之行得盛使周旋直登彼岸何莫而非法 來去見如來住相爲布施哉種種因緣而求佛道皆 聖恩辜知已坐毒霧中以法爲懷日

> 分內事第恐當面 一錯過耳

叉

生手則不免於枯木朽株竟入丹霞火爐即墮落長 來之前座下出於山野既放之後然此佛事非山 觀之實有不可思議者存焉但佛如來出於山 老須眉又復何益又安能現身兜率降迹皇城使無 無以成始非座下無以成終諦視此段因緣若落衆 而後現豈獨佛界然哉法法皆爾以旃檀如來 惟如來出世本非一 種因綠必感應道交機宜冥會 野未 一事

中種種因緣行菩薩道者縱有彌勒騰疑賴又殊智 都門突出眉閉白毫相光偏照東方萬八千也就光 祝觀察為護法昨有報云已檄南雄擁沒過嶺矣第 量人天發希有心作苦海之津梁耶以此而觀諸法 伽 。眼 中使者汗漫伴行者無乃隨脚根轉耳不識何時至 蓋不可以思惟心測度如來境界也前作書致南韶 順令實證所謂順教法門者也顧座下二六時中不 必一一洞徹無餘不英疲極之人喋喋也奉寄榜 葉以供慧目蓋此經洞明吾人日用現前境界

可警忘此法耳

與張大心

老人自歷難以來直至於今返求本心中一念動心權心了不可得何況是非得失恩怨成壞見耶老人出世以來七歲即知有生死大事三十年來歷盡沐霜喫盡辛苦單單博得此一念奈何向沈幻化網中若非 聖恩一推打破不知又向驢年去也年來坐着非 聖恩一推打破不知又向驢年去也年來坐着期上間之必大生歡喜矣君甫年來應業何如此想居士間之必大生歡喜矣君甫年來應業何如此問話五於人前可省慚愧耳老人回觀往事眞同日成就立於人前可省慚愧耳老人回觀往事眞同日成就立於人前可省慚愧耳老人回觀往事眞同日成就立於人前可省慚愧耳老人回觀往事眞同时就立於人前可省慚愧耳老人回觀往事眞同日成就立於人前可省慚愧耳老人回觀往事眞同初心也

答柯復元孝廉

藥也足下有志了生死大事情乎入此法門不深前病從妄想生旣妄想爲諸病本即知斷妄想爲一妙詞足下病甚此心日夜縣念不巳吾佛所言一切諸

名大自在人也古人皆在疾病酃患死生關頭做出

會時草草放過將謂因緣有待不意生死逼之速如會時草草放過將謂因緣有待不意生死逼之速如會時草草放過將謂因緣有待不意生死逼之速如實時草草放過將謂因緣有待不意生死逼之速如會時草草放過將謂因緣有待不意生死過之速如會時草草放過將謂因緣有待不意生死過之速如會時草草放過將謂因緣有待不意生死過之速如

3

則百千萬劫生死機關一時類裂如此掉臂而行是地不得清涼伹就逼迫不著的一眼觀定此處著力本來自空但吾人未親看破若親看破則一切所有本來自空但吾人未親看破若親看破則一切所有此不得清涼伹就逼迫不著的一眼觀定此處著力。

與丁南羽

在青末面足下已見其心江干既見足下則暗其神 之工時時贈其像誦其言真足令人化血內之驅。 定之章煙毒霧中令人血淚迸流偏身毛孔也惟康 展之瘴煙毒霧中令人血淚迸流偏身毛孔也惟康 展之瘴煙毒霧中令人血淚迸流偏身毛孔也惟康 一之耳時時贈其像誦其言真足令人化血內之驅為 定之事時時贈其像誦其言真足令人化血內之驅為 之耳時時贈其像誦其言真足令人化血內之驅為 之耳時時贈其像誦其言真足令人化血內之驅為 之耳時時贈其像誦其言真足令人化血內之驅為 之耳時時贈其像誦其言真足令人化血內之驅為 之耳時時贈其像誦其言真足令人化血內之驅為 立時於性海中矣

與遊二南

竟是與足下別來親切境界不審法眼觀之作何滋如芭蕉此三世諸佛入理之門,吾人日用現證而不人生聚散如雲世事如夢流轉勢速如電此身不實

煥發恍若入資林而視滿月荷凉悅懌不言可知因

知居士長齋繡佛與德園居士伯仲結制西湖之上

Acres 10

4 A 4 4 4 . A

TALL BURE A STATE

味

與屠亦水

道緣爐鞴非虛語也彌感 此萬里調伏差勝三十年行脚古人以火聚刀山爲 本自具足回視昔日工夫大似含元殿裏覓長安即 閱楞伽於無生之旨脫然自信始知此事不能外得 所時值其地連遭三災眞同火宅日坐屍陀林中披 辱法門遺師友憂蒙 居士於王城靡不以此與慨貧道此以夙業重您取 入者多惜以無上妙慧作世諦流布耳間者晤德園 利者其志未心精貧道私念捷疾利根真能一超直 **嘗謂向上事屬上上根人即有志者其根末必利根** 耳時與丁右武聚首五羊每談明德必出手書光明 然此雖爲撮摩虛空適足以消炎熱報問極聲知已 則檢點觸髏眼開藏乾者亦不減維摩丈室中人也 有當於心者筆之成帙名日觀楞伽記今已脫稿暇 恩譴炎海於丙申春仲抵戍 聖主思大難舊於此經

少死此事喜得蓮師為證盟貧道遙空合掌讚歎不 已稱念利根大志如居士友如德國師如蓮池可謂 諸緣具足何患不一超直入真宇宙閒千載奇事古 人云若識佛性義當觀時節因緣慨斯末法此會此 養難可再見諒不虛貧矣讀普陀志護法真情字字 皆從光明藏中流出貧道三復不覺感激填心也嘘 皆唯我 聖慈一代弘誓累劫津梁非籍圓通手眼 遊纂其志安得居士俯垂一機擊塗毒鼓使錄腹降 心為祖道之光耶

與王念西太史

心苦樂在己心外無法眞不吾欺所入楞伽境界殆 增進但於今事門頭目前無異法耳古人謂淨穢隨 海波瀾惟遊泳者識其深廣耳,山野年來坐此無多 海波瀾惟遊泳者識其深廣耳,山野年來坐此無多 海波瀾惟遊泳者識其深廣耳,山野年來坐此無多

> 面無容贅談第願以法資神無忘度生事業是所至 地寄入慧目略見此番行脚不敢辜 聖恩資知已 地寄入慧目略見此番行脚不敢辜 聖恩資知已 地法華擊節亦自偶爾狹路相逢處拈來蓋發前人 所未發雖出一已之見實可諸佛之心願座下試並 類識諸法實相則眉閒白毫相光突出於座下一毛 量徹諸法實相則眉閒白毫相光突出於座下一毛 量徹諸法實相則眉閒白毫相光突出於座下一毛 對頭並此中生涯具見於此無餘蘊矣勺原同處經 年亦深用錐劑雖識痛癢猶未徹心酸鼻大段佛性 年亦深用錐劑雖識痛癢猶未徹心酸鼻

稿

與徐明宇侍御

事因緣何幸於宰官身中僅得再見不覺化悲爲喜。述末後一段光明全在公柱杖頭放出百千萬劫大已還鄉兼得中丞訃音悲痛五內旣讀札中語知中日還鄉東得中丞訃音悲痛五內旣讀札中語知中連得手書知信道之篤其於安隱快樂之地自得受

生欲習而欲勝之是猶滴水救積薪之火勢不能也 古人明言學道無他伎倆只是生處要熟熟處要生 人其餘則日月至焉由是觀之以日月之工夫敵多 故汨香而不明試思吾人自有知覺以來以至今日 又何如夫子嘗論弟子中能三月不違者獨顏子一 知非以來念道工夫比於欲習久近何如生熟緊慢 習於世故染於物欲日夜火馳未嘗暫止較自悔悟 學所謂習於性耳性本無物清淨虚明為物欲染習 久久純熟打成一片自然念念彌陀頭頭極樂矣來 也智相遠也又日學而時習之此智字豈但文字之 在散亂臨終安得定文忠大驚此語正吾人學道之 正公念力員切處方能見諦如此夫子亦曰性相近 標的也承示平時頗自檢點及至當境習念又生此 無有價云古人念念在定慧臨終安得亂今人念念 眞目前有此榜樣足徵佛法靈驗矣昔歐文忠公問 然此事雖是生平道力亦重賴善友提攜公念道情 僧云古人臨生死之際有談笑脫去者今何寂寥

> 以了此生不知緣分何如以是與公會晤更難但有 枕山林且於曹谿有休老之志欲借擔土掩此枯骨。 逼六十有漏之驅難堪十年瘴煙埋沒今鬚髮浩然 道之眞且篤且恨良晤之難不覺和逗如許貧道年 灌之久久純熟開花結實自有時節耳感公見信費 見惟公靈根宿植今既秀發願以念佛三昧水時 風便不妨數數致問也 無復故吾休息之心不離一念但業繩未解不敢高 自誤耳此事一毫假借不得正似鋪石真金入火自 辱禍患生死之際便見手忙脚亂此非他人誤已乃 耳竊見近世學道之士祗知貪求玄妙不知向根本 處下死工夫平居無事談論爽口豈不爲快及臨榮 不覺佛現舌端足見此老生平以此爲祕密行正當 公坐席中見其銜盃之閒念佛不離口雖唾嗟談笑 五欲烈燄中投此一念當下五內清涼若甘露運心 於念佛公案得力久久自有受用地往時每到 rþa 丞

又

往於海上有綠幸得一接光容睹其貌粹骨剛心知

假外求又何懼其不能得第恐信之不寫見之不真 望彼岸乎自古迷中倍人未有不如此者公旣知已 躬下本有的萬古靈明之性是則此性在我本有不 **涯際愈濶愈深而愈見有味安肯急流中猛省回頭** 以種種聲色香味諸塵境界埋沒如萬里奔濤杳無 業識纏綿於驅殼之中從來止知有此血內之身而 然此般若種子即吾人本有之心光一旦迷之而為 實信根爲生死事切如公之痛懇猛利者萬萬難得 發又難於遇知識也以其知識固有而求其大發頁 會晤良難至於道緣知識尤其相遇之難而信根難 持手書至不覺喜心倒劇嗚咽霑襟蓋以人生知已 子者一見即如磁石吸鐵欲自解於心必不可得又 安能忘於公平辛丑七月望後馮王二生歸自都門 結出世緣顧鄙人悲願習氣似深凡遇具有般若種 後發此心然之理也自獨鄙人以業力所使不得自 吐露譬若宿種已深特時節未至必待時雨漑灌而 爲最上根器第機緣未熟徒有亦心一片未敢遽然 一覽瘴海忽忽八年時時私念此生恐無復與公

是因循輕暖自恕自欺處者裏最要吃緊著眼決不

自覺時或已知已見俗惜護痛不肯一刀兩段此便

此便是最初得力處也若於微細情想齊淺暗長不

一書可爲羽翼願公留心念之

與陳劒南貳師

多一切世念已被不如意處消磨許多已得便宜不 根人不能湊泊以無工夫故耳永嘉集一書實是壇 從前未證法門多透許多此難與俗人言也其修行 直入只恐作話會耳楞伽最是直捷只是難看獨此 經註腳若見解依六祖用工夫如永嘉何患不一超 之方諸經俱有只是不要作玄妙話會若作話會多 是亦天之所造也且如鄙人處瘴鄉八年於此其實 少世人以爲失公必以爲得如老子所謂去彼取此 節公留心此事較之他人更易以其根利而困橫已 是披沙煉金砂土若去金體自純不患不到精耀時 裏弄聪明全於本地眞質處不相干若者裏認得便 般以吾人情昏智暗一向只在光影門頭識神影子 孔子曰毋自欺也此便是教吾人行路把手拖步一 可放過亦不可被他瞞過若輕放恕過便是自欺故 重障耳六祖壇經最爲心地法門之指南但中下

承示近日於楞伽壇經探討工夫頗進此則大爲足 之佛者覺也即吾人本有靈明性耳吾心本來是佛 空門非空無之空乃刳空之空麗居士云但願空諸 即六祖所云本來無一物若了此本來無物即順見 又出苦海之要津安可以淺近視之試爲足下略言 所有謂內空諸想外空諸緣內外皆空心境俱張則 相修為種種行門即龍舒淨土文所說乃接引中下 可成也言淨土者有二種謂事土理土在事則涉有 諸苦自絕此禪門出生死之捷徑也所云淨土文此 則佛土淨又云生則決定生去則實不去此乃上上 名常寂光言常則不變寂則不動光則不昧即吾人 根人之祕訣所言理土乃諸佛諸祖自受用之境界 自心本來佛性是名成佛頓教法門此外非別有佛 土者以念佛爲主蓋淨自心之方法耳吾人日用萬 根人所證境界壇經淨土之旨蓋謂此也所云修淨 自性之本體也故云唯心淨土自性彌陀又云心淨 苦交銷穩濁本心如汚濁水若急流猛跌念佛

以諸苦皆生於有故佛說三界苦趣謂之三有所言

下慶幸古人云生平無限傷心事不向空門

何處消

春雨也如膏之澤潤已蕉之芽此造化之機甚微是 此信心蓋宿種有在只待時而發今見淨土一書蓋 不得獻於父又安敢為世俗友人乎今足下猛然發 冷暖自知安敢向俗人道以此事臣不得獻於君子 今可自稱佛門上將不啻李廣飛騎此事如人飲水 動出三界破魔網爾時如來一大數喜此正所謂向 事生平所遇魔量甚多皆力戰而退然雖未出重圍 空門而消豪傑之氣者也貧道自幼離俗即切志此 敵勇決如此則生死怨賊衆苦魔軍不戰而自退此 所謂真將軍也佛經云與質惱魔死魔共戰有大功 然厭苦心切則然念自除不退屈也以此五訣單持 即安命也第四要認得真即不惑也第五要厭苦切 待三寸氣消過十萬八千佛土之遠哉此種法門第 月色無非真境獨目無非淨土譽念皆見彌陀又何 佛故心垢額除一念清淨所遇之境無非極樂風聲 則五內清凉諸苦頓歇此即佛教衆生之苦也以念 一念如大將身陷重團決志突出一人單刀與萬人 一要決定志第二要放得下第三要隨得緣然隨緣

亦足下受褔之始也貧道警誦吾人處世日用不過亦足下受褔之始也貧道警誦吾人處世日用不過一飽食一安眠耳此外皆長物也今既不得飽食安高此可稱智人乎既不得世閒事求之於人出世事求之於已在我所可必得者捨之而不爲可爲擬之至矣於已在我所可必得者捨之而不爲可爲擬之至矣於已在我所可必得者捨之而不爲可爲擬之至矣於已在我所可必得者捨之而不爲可爲擬之至矣於已在我所可必得者捨之而不爲可爲擬之至矣之中得清凉地者非別有方法耳此事非足下有此之中得清凉地者非別有方法耳此事非足下有此之中得清凉地者非別有方法耳此事非足下有此之中得清凉地者非別有方法耳此事非足下有此之中得清凉地者非別有方法耳此事非足下有此之中得清凉地者非別有方法耳此事非足下有此之中得清凉地者非別有方法耳此即而來文字語言大緣必不敢道恐掩口而笑耳只如向來文字語言世人

須大力量人乃可爲之昔人有言有將相之骨無出 之中得淸凉地者非別有方法耳此事非足下有此 之中得淸凉地者非別有方法耳此事非足下有此 以文字目之特淺淺耳舉世法眼者稀貧道年來混 以文字目之特淺淺耳舉世法眼者稀貧道年來混 以文字目之特淺淺耳舉世法眼者稀貧道年來混 於和光此四字從小知妙生平力學近於十年之內 於和光此四字從小知妙生平力學近於十年之內 至在逆境中做出更見受用且功更大日劫相倍此 全在逆境中做出更見受用且功更大日劫相倍此 全在逆境中做出更見受用且功更大日劫相倍此 全在逆境中做出更見受用且功更大日劫相倍此 以世俗泛泛而應故披瀝如此足下以此劄多之以 偏憐容耳足下發此無上心乃出世因緣也又安可 過越乃對使據案草草不覺葛藤如許蓋慣會爲侶 見面時難前札蓋先巳作臨封復讀足下來書感激 著空病亦然種如避溺而投火正謂此也以與足下 路若捨却目前別求解脫則非愚即在永嘉云東有 年工夫可稱一超直入此非抛却現前境界別求出 心則順悟本來曠劫生死苦輪順息此豈小丈夫哉 道住空無異今能翻然一蹋便破即順超登道三十 住於煩惱海中無二致也足下乃向住於有者與發 此則貧道自知向皆住於偏枯空寂之地即若世人 俗和光得力最初一步工夫是知菩薩應世之心妙 在無方無住爲最上乘六祖一聞應無所住而生其 上出世志也今三年之內方與交遊稱兄弟正是混 何也其心志在於獨行獨步不與世俗爲伍此乃向 之苦不啻足下萬倍然受苦之志則與足下霄壤矣 **資道自出家以來凡所稱謂與人未嘗言兄弟二字** 家之屬此語不淺然出家之難亦非細事貧道生平

消日月未必不爲淸涼散也

叉

前得來書有歸心淨土之說足下猛利如此因而對於家家草草盈紙不知所云大段極言物足下著實在不如意中討個安樂地所遇境綠難處就在難處中放下身心任他呼牛呼馬在我無可不可此段受用惟老子能之即夫子未得此法門未免處世為難及見老子之後被他痛處一錐直透到底當便得無量受用至若對門弟子說毋意毋必毋固毋我與夫空空如心此段皆了悟後的話頭決不是在前頭巾空空如心此段皆了悟後的話頭決不是在前頭巾空空如心此段皆了悟後的話頭決不是在前頭巾空空如心此段皆了悟後的話頭決不是在前頭巾心心中便乾乾淨净快活無喻何為而不可坦坦那心心中便乾乾淨净快活無喻何為而不可坦坦那心心中便乾乾淨淨快活無喻何為而不可坦坦那心心中便乾乾淨淨快活無喻何為而不可坦坦那心心中便乾乾淨淨快活無喻何為而不可坦坦那

叉

在省臨行種種夢事據其所述了然目前雖未盡信

萬世功德是大有過於此者敢不自愛今多方委曲 成此心頗覺自寬且法門佛事如空中雲原無定相 始遂藏迹之計況自今以室故吾不遠豈忍蒙不潔 道自視此身爲法門所繁將徼佛祖之靈託之以爲 方大有可畏者今秋極欲邀貧道往故力辭之耳貧 借乎氣過於躁而心過於慈故於小人之言易動而 又爲淨土之污辱乎鳥不厭高魚不厭深曹谿將爲 涯之毒海豈有智者所甘心耶去歲非貧道在則 區力已竭矣而事方無涯安能以有限之精神泛無 之鋒而與生民除其害之大者幸亦催僅自免今區 如瓦陽禱詞以精誠之至無不尅應天時人事其致 無斷貧道感知已之遇且為地方作福橫身於百折 一也曉公天性敦篇忠實君子即名教中所難得者 復何慕以此修崇之舉其功雖鉅不以歲月計其速 黔志願益堅燻微六祖之隱借一掊土掩此枯骨更 得之幸之幸心即老死溝壑又何憾焉是故休老曹 其人品未定罹患難者恐其功罪不明貧道今日兩 蓋於言外已得其微旨大爲快事自古操行之士慮 地

持已久香氣雖無而精神已滿知足下得此必能頓持已久香氣雖無而精神已滿知足下得此必能頓在耳今既須之謹將自持伽南香珠一串奉上但把此繫念工夫最親切向日不敢言者恐足下有恥心此繫念工夫最親切向日不敢言者恐足下有恥心

答楊元孺元戎

◆已下古本

界論實求之了不可得了不可得處即是諸佛祖師 然猛覺來如此則回觀生平向來歷過 境界置向夢中細細觀察看到昏沈沈重顕倒時忽 如夢話頭迥然不同矣即將一同處一念轉將目前 出生死第一關也 要的的看到不覺發一大笑處到此則頓覺尋常說 吾人處世先要將夢中事試舉向目前細細觀察定 一切種種境

松山老人夢遊集卷第十五

憨山老人夢遊集卷第十六 侍 者

福 善

日錄

通 加 編輯

門

嶺南弟子

劉起相 重校

書問

與周海門觀察

頭陀蒙以甘露見應清涼心骨順啓沈疴此段因緣

買非淺淺別後之懷大似空生晏坐石室時見法身

ふして市英宝全真名トン

上善根比雖入室者希而知有者衆歸依者日益漸 發揮六祖光明點開人天眼目庶不預此嘉會也 **性如菩提樹下與曹溪諸僧最難關伏近來回心信** 久湮幸得大悲手眼一發揚之使闡提之輩順發無 願輪而行也曹溪志今始刻完幸垂一語置之篇首 藏中流出足證居士此番宦遊實是龍天推出乘大 向者蓋巳十之二三矣惟此一段眞風皆從大光明 不離心目間也嘗謂個中事須是個中人嶺南法道

又

表正法命际實賴此君顧佛力加持以色力康强不 憶居士云人人皆上极第無大爐鞴耳此君非座下 何能一開發如此非上根又何能猛勇如此將來凝 能於憂愁疾病關頭頓然打破生死窠窟眞豪傑士 柯孝廉於五月省中相見如再生人此君根性猛利 患不如古人山野年來說法如與木人聽方外弟子

實踐者獨順德馮生昌歷此子少年靈根頗深鄉當 時節重無問老少及門者咸師事之其真誠動物

中近得一二人稍可鉗錘俗諦中一時信向而真覆

被字教如此觀此子决志則將來不退可起江門之 職類蓋嶺表法道機綠運轉之會也近聞與陶石賽 本史遊此公永雪心腸非一世淸淨戒中來與山僧 生中丞公蓋眞爲生死人近在林下深知愜懷第與 生中丞公蓋眞爲生死人近在林下深知愜懷第與 生中丞公蓋眞爲生死人近在林下深知愜懷第與 生中丞公蓋眞爲生死人近在林下深知愜懷第與 中受化之機前書已具聞之尚有二三未成熟者 市受化之機前書已具聞之尚有二三未成熟者 中受化之機前書已具聞之尚有二三未成熟者 佛所護如來所使併法門知已所望耳

答任養弘觀祭

覺知則雲散雨收光風霽月其樂自不可喻矣之第一義也第恐照力不堅被他流轉而不覺知若大力量耳承示此中得大淸涼安隱便是驅證菩提此段工夫只在急流中石火電光裏手親眼快方是

與就惺存觀察名以圖

我聞佛說一切有爲法如夢幻泡影憶音奉教周旋

今則恍忽如夢別後曹溪如命種種皆如幻事今則然忽如夢別後曹溪如命種種皆如幻事今則然忽如夢別後曹溪如命種種皆如幻事今則然忽如夢別後一段寶法光明終不可泯茲弟子輩手錄一往實事一段寶法光明終不可泯茲弟子輩手錄一往實事別為十款致乞法施為文作金剛幢當與六組法身相與無窮實千載之下中與一及因緣秋毫皆出慈心三昧即山長舌偏覆大千令見聞者普入大光明藏也

與丁右武大参字是非

公典山野此段因緣固自大奇海內藏者亦莫不稱 京夏由我輩皆墮世出世閒二種知見我慢大障智 整頓 之彼此人事不同而所遭爐鞴同既而所投苦 整破之彼此人事不同而所遭爐鞴同既而所投苦 整面且竟以性命相依同豈不欲出生死同證菩提 一面,以近疾法雷而 之與山野此段因緣固自大奇海內藏者亦莫不稱

處自己忍得過始也生忍若忍至無生則頓登佛地

又有何微妙伎倆以塗人之耳目哉前曾有聯云念

楞伽印心仍循故道而歸豈不負此良緣有孤天造 以公之上根利器自可一超直入正如涅槃會上廣 修眞千載一時慶幸多矣若公無禪喜見志山價無 奇事惟公固非昌黎而山野竊不敢望崖顯老山野 不泯然此數公陶治皆同而所遇不同故不稱千古 坡吾門覺範諸老皆是物心若昌黎之固執非大願 淇之堅誓山野定不捨跬步必追至曹溪原頭水窮 今幸相值豈肯輕易放過故山野不自知固陋而於 因緣固自有時節耳不意遠爾言別眞念百劫難逢 額屠兒放下屠刀便作佛事殊非區區者比蓋入道 耶所以同處經年不敢以此向上一著略露微芒者 雖有愧覺範而公不讓東坡即其今日因緣大越前 不化東坡之我慢非儋耳不消覺範之見習非瓊崖 風波之末若冀承歡喜一決死生無三水之猛省回 謂此則公案古人難調伏者都用此一機如昌黎東 **濁一洗殆盡耳不然何其同死同生亦至於此即營** 輩 Ш 盡大休大歇而後巳也所以然者惟公以菩薩信 顧將壓劫粗浮習氣人我是非恩怨得失種種 垢

> 何事愧於人哉吾佛有言一念瞋心起百萬障門開 **瞋慢習氣時時發現自障妙明故吐盡肝膽而人或** 光明堂堂獨露所以胸包屋家氣蓋乾坤直以租浮 今但願消得一分習氣便露十分光明除得一分資 此普賢菩薩利生之大思以瞋與慈悲不兩立耳唯 不見信費盡慈悲而人或不知感公諦思此外更有 公不以荷攬如來爲已躬真切事亦非所以愛山野 摘膽以呈公又何以慰知已之望報公非常之愛哉 奇公與山野之遇荷山野不以此段大事因緣兒心 從他謗任地非把火燒天徒自疲我聞恰似飲甘露 云不必別求放下便是又云看得破佛也做永嘉云 慢便立百分功德古人所謂不用水真惟須息見又 爾知已也此段工夫萬萬不難惟公真心本體般若 山野之心以骨肉待山野之身海内知已皆以出世 胸中不可入意的事一齊放得下只是人所不堪忍 **消融順入不思議於此足見古人無他長只是肯將**

生死關頭作一關吏耳此關一透則可掉臂遊戲戈 處易過難過處互相激揚以成一代偉績顧公先向 綺之戒公之所教但願以別後日用工夫省力費力 公書非藥石不發字字願效吾佛眞語實語不妄不 出世之盟訂之於此若果見信乞將從前與公札子 生世世同爲出世津梁共作慈悲眷屬度盡衆生而 不相捨離也山野今日之言方畢露肝膽痛絕常情 石不足方其盟是乃金剛種子歷劫不磨願與公生 一火燒盡不餘一字則百念成灰請從今以去凡與 以爲何如儻知已不以爲欺則芝蘭不足比其契金 人爵自至以此較之虚浮想相與作眞實不朽之功 平之氣象自有天龍拱手魍魎潛踪此正修天爵則 絲毫亦力力踔跳打起精神踢翻窠窟揭出斬新日 應者蓋霄壤矣如是可名覺非居士孟浪極此高明 月別立生涯如此方始是大丈夫蓋天蓋地不負生 事業回視從前半生行脚都是夢事一口吐盡不留 大此後願公第一入忍辱法門做省心工夫作放下 頭起處即看破事未至時莫妄生此言雖小可以喻

> **逼地願慧剣一揮不留毫愛惟高明努力圖之** 像可比萬一也別離不遠生死情長悵望各天葛藤 大佛事如是可稱出世雄猛丈夫殆非古今世諦豪 太場中是非堆裹處處頭頭放光動地現客官身作

又

一發則與有一夫當關萬夫莫當之勢又何敢較其 一發則與有一夫當關萬夫莫當之勢又何敢較其

樂一世不能陵樂千古若肯將生平所預聰明力量 **猶如鼠毒遇雷便發若病根發任作多少功名事種** 半點實用世出世閒通無利益何以故以病根未拔 不破縱將百千萬種佛法知見道理一口吸盡都無 若此處一破則百千萬種關棂子一時齊破若難處 夫氣矣此事端在關心愛情最難打破處著力一推 消磨纔有一毫不能消磨之念便墮怯弱就覺不丈 盡又如一聲叱吒千人皆廢如此又何思習氣不能 氣忽發但猛的一拶如霸王之力技山舉鼎一齊用 功名事業天資學問件件過人若病根不拔但能够 又何以稱丈夫頁超世之量哉竊歎居士人品才華 種伎倆都是病行大非雄猛丈夫行心既行非丈夫 尋常比耶大概此事直是貴在勇猛一踏到底若習 步者憂其不成武耳從古自有出格沒量漢安可與 煩惱業障 **遲速分其利鎮乎是川爲居士憂者如爲郊邯鄲之** 打破則將從前萬劫千生種種恩怨榮辱是非得失 齊收束聚精會神攢簇於此一大事因緣上一旦 一齊化成無上菩提光明種子矣從此

> 番出頭來凡有所作所為藏毫事業皆從此段光明 種子中發揮事事法法皆成不朽此吾釋迦老子棄 種子中發揮事事法法皆成不朽此吾釋迦老子棄 是席捲而囊裹之豈非一大雄猛丈夫哉常笑勾踐 以會稽之恥乃二十餘年臥薪嘗膽其志止於吞吳 以會稽之恥乃二十餘年臥薪嘗膽其志止於吞吳 是席捲而囊裹之豈非一大雄猛丈夫哉常笑勾踐 不止一吳以之際法淨土破涅槃城置身苦海漂流 不止一吳以之際法淨土破涅槃城置身苦海漂流 不止一吳以之際法淨土破涅槃城置身苦海漂流 不止一吳以之際法淨土破涅槃城置身苦海漂流 不止一吳以之際法淨土破涅槃城置身苦海漂流 不此一吳以之際法淨土破涅槃城置身苦海漂流 不止一吳以之際法淨土破涅槃城置身苦海漂流

5

叉

處轉得過立地便是聖人若轉不過依然墮在煩惱用此正是熟處難忘耳生死機關只在此一轉處此此遊境也觸著便怒即被他觸動動則有苦便不受此逆境也觸著便怒即被他觸動動則有苦便不受此逆境也觸著便怒即被他觸動動則有苦便不受地遊境心觸著便怒即被他觸動動則有苦便不受不過,是日用現前順境熟習慣便處不覺發現被將處只是日用現前順境熟習慣便處不覺發現被學成時,

電話裏此急流處一撥轉關標子便是撥天關之力 量非居士大力量人金剛心地斷難施展古人所謂 為真受用耳居士生平煩惱極大而快活處亦大即 今若能將煩惱窠窟一椎打得粉碎全身跳入快活 今若能將煩惱窠窟一椎打得粉碎全身跳入快活 是天下第一自在沒量大快活人也居士能以此為 上天下第一自在沒量大快活人也居士能以此為 是天下第一自在沒量大快活人也居士能以此為 與居士共之聊以此報平安耳

灭

養道此萬里之行仰仗諸佛慈力。聖主弘恩坐此 章鄉得了此一段大事真百千萬億劫最上因緣也 原念此丈夫之驅撑挂乾坤除却世閒事更有出世 閒念此丈夫之驅撑挂乾坤除却世閒事更有出世 別無窮樂地豈可以目前幻化世閒妄想便爲死竟 呼居士別來二載想於看破處脚跟一步必能漸入 生境矣居士金剛心中一咳唾耳何如

與湯海若祠部

利鬼國耳諒知我者不以此為迂也 是干一別眨眼十年舍利身光居然在目即種種幻長干一別眨眼十年舍利身光居然在目即種種幻長十二十二之期除奔走行伍供役之暇諸著述不下數十二十二之期除奔走行伍供役之暇諸著述不下數十二十二之期除奔走行伍供役之暇諸著述不下數十二十二之期除奔走行伍供役之暇諸著述不下數十二十二之期。 到鬼國耳諒知我者不以此為近也

與劉存赤

吾人多生積劫五欲淤泥七情業火深而且檢豪傑之士靡不爲其陷溺燒養求一念回心了不可得況是其生遠離心求出苦道專念栖心於淨土乎此又是其生遠離心求出苦道專念栖心於淨土乎此又出生死者要知生死之根欲求淨土之本殊不知淨土之本即生死之根也是在此心一念轉變之閒不過餘力耳願公諦於日用現前境界妻子團圖之際朋友交接之閒義利交攻之處喜怒未發之前預先

也

矣 極樂之境斯實身雖未到蓮華內先送心歸極樂天 於根本一念觀透則日用頭頭無非解脫之場盡歸 至矣所謂一根旣返原六根成解脫者正此謂也若 根株之弊垢心荷能力拔其根則淨土不求至而自 即當極力拔之然而吾心本淨其所以穢濁者實此

與鄭金吾

也別來工坐瘴鄉每生披厭則與懷座下不覺順增 窮而功德亦無盡矣下多走入瘴鄉瞬息千餘日愧 聊見空中鳥迹以尋道人行脚事不離車塵馬足閒 所作佛事法言數種奉慰慈念以報知已更試省覧 有漏之因不足以關無相之施願以法謝謹持近來 說之法所利之生皆出於座下之金剛心地行願無 便救濟志在必生而後已不減長者之於火宅諸子 無量勇猛度生之願今蒙 如傍劫火乃承座下橫放身心攘臂而援之種種方 **費道下多無似第一朽株耳昨者雷霆震驚時望者** 聖恩所賜餘年即其所

與何金吾

執事奉 未少假藉第側觀足下不忍之心油然現於眉睫蓋 若瀝霈雨於烈焰投廿露於枯腸順令五內清凉驟 如金石豈能當其爐韛耳幸賴足下一言而決之眞 時雷霆在上鼎鑊在前即昭昭耿耿之懷無容見白 於不報耳往者山野以無狀上干 際念足下高義未嘗去懷頃值貴僚友詢之始知足 巴深知足下爲仁人君子矣徒銘感於心然不知足 然生色亦不自知在刀鋸閒也在 言而心誠者蓋亦希矣何者人易感於心知恩難施 下爲何君也謹修尺素用布懷德之私 下爲誰氏也山野深入瘴鄉當饑饉之餘濱九死之 者有之至若當患難死生之際睇盼於縲絏桎梏不 **警憶古人白頭如新傾蓋如故與夫不言而道自存** 節監刑且低回猶豫於捶楚之閒藉令形 朝廷三尺之法 **宸怒下鎮撫鞫**

答鄭崑崖開府

慈容親聞妙義復荷甘露見避廛習順空踴躍之懷 遠蒙白毫東照萬八千土光中苦行頭陀儼如面醴

依依益增傾倒惟真慈攝受不捨有緣風便更希遙際一語真習目之金篦心親承有願接足無時妄情處不用別求般若諸塵透處即此便是立門伏誦實非言可喻資道聞菩薩妙行妙在壓境驗心煩惱空非言可喻

叉

一手是所欽遏

远安心此正塵塵解脫願善調伏以廣舟航是所至 遊窩用書溪乃六祖演化地禪門洙四內身在心質 其嶺南曹溪乃六祖演化地禪門洙四內身在心質 其嶺南曹溪乃六祖演化地禪門洙四內身在心質 其嶺南曹溪乃六祖演化地禪門洙四內身在心質 其衛南曹溪乃六祖演化地禪門洙四內身在心質 可息肩頃乞食凌江忽奉瑤函自天而下如天鼓 位可息肩頃乞食凌江忽奉瑤函自天而下如天鼓 於狹劣習氣似漸銷鎔誠如飲水然終似陸魚溥沫 以萬里為調病處劄錐感激熏心頂謝無量承示隨 處安心此正塵塵解脫願善調伏以廣舟航是所至

承示自幼即知自問心是何物將謂內團是心死後身尙在如何不靈於此覓心不得數語不覺驚歎不見以山野自入法向道入山修行以來今已三十餘年所閱海內緇白中,初心向道者蓋未見有此等發氣內淺深不一及多生所近知識聞熏種子那正頓展下所言皆多生親近眞正知識聞熏種子那正頓是下所言皆多生親近眞正知識聞熏種子那正頓是下所言皆多生親近眞正知識聞熏種子那正頓於切切橫在胸中扼塞不能暫捨是以吞不下吐不於切切橫在胸中扼塞不能暫捨是以吞不下吐不於切切橫在胸中扼塞不能暫捨是以吞不下吐不

如何能得脫獎籠哉豈不見古人道喚作一物即不色聞聲便與心作寃對耳此正謂含元殿裏覓長安

是將此心當作一物把聲色當作聲色所以日用見

喝會且處空是色一喝是聲由多生在聲色裏流轉

習熟所以今又被他流轉將去所以被他流轉者只

尋覓見指點虚空便只當虚空會及聞一喝又作

却寬不得生平思慮不能自信自決但逢人即向他

望

答葛自修

-232-

悟如何神光一悟永悟而足下聞喝之後既云疑團 神光不疑而足下更疑若謂即此不可得者就便是 與榊光有二則衆生佛性有二若與榊光無二如何 不知向何處去何以今日於祖師公案上又不通而 下語一樣如何神光便是而足下不信若謂足下志 接得個甚麼來且人觀光竟心了不可得一語與足 授手者且看達磨將甚麼物親手遞與神先又親手 自此以後此語流布人間謂之單傳直指六祖以下 與汝安光良久云覓心了不可得磨云與汝安心竟 自心反更別生種種思慮而他求耶豈不見達磨面 語而來足下必謂心是一物可向人覓而師資亦可 了生死者不可稱計是皆從神光覓心了不可得 南岳青原以至五家千七百則普天匝地說禪說道 壁時二祖神光日我心未寧乞師安心磨云將心來 足下自謂覓心不可得此等最是親切處如何不信 能令人死亦能令人活大概生者令死死者令活耳 中又云切层從他寬迢迢與我疎又云見色非 聞聲不是聲义云聲處全聞見外無法此等言句雖 調

與胡順菴中丞

法黨東歸之計知公肝膽決無遺策斯亦下願耳但 法黨東歸之計知公肝膽決無遺策斯亦下願耳但 法黨東歸之計知公肝膽決無遺策斯亦下願耳但 法黨東歸之計知公肝膽決無遺策斯亦下願耳但 法黨東歸之計知公肝膽決無遺策斯亦下願耳但

應何如些剛日月也千里之思無以爲獻此腐言用發公一 籍斯梏在轉爲濟勝之具矣又何汲汲却跡逃形而 籍斯梏在轉爲濟勝之具矣又何汲汲却跡逃形而 官身而作佛事豈可與爲一身之榮者同年而語耶 官身而作佛事豈可與爲一身之榮者同年而語耶 濟物廣行方便安然取乎大定之中如此即是現宰

叉

不能徹證上齊古人至若生死關頭良以自信一切不能徹證上齊古人至若生死關頭良以自信一切不能徹證上齊古人至若生死關頭良以自信一切變付之自然又何攖寧故自罹難以來一念清凉心學付之自然又何攖寧故自罹難以來一念清凉心地未嘗暫移從去冬十月於濟城馬首南向衛骨永雪於臘月至白下迎老母於江上歡然作別八日即場他而西心所賴情枯智竭幻影全消明鏡止水聊以自適此段因綠從大冶爐中煅煉將來幸無為我以自適此段因綠從大冶爐中煅煉將來幸無為我以自適此段因綠從大冶爐中煅煉將來幸無為我以自適此段因綠從大冶爐中煅煉將來幸無為我以自適此段因綠從大冶爐中煅煉將來幸無為我以自適此段因綠從大冶爐中煅煉將來幸無為我以自適此段因綠從大冶爐中煅煉將來幸無為我以自適此段因綠從大冶爐中煅煉將來幸無為我以自適此段因綠從大冶爐中煅煉將來幸無為我

Z

一本のでは、
 一本に、
 一本に、

叉

如然指能幾何哉居士春秋日高前景日窄從來濁如摩詰有言欲知除老病惟有學無生況百歲光陰力耶此可與知已者道難與俗人言也不審法體何力耶此可與知已者道難與俗人言也不審法體何如然指能幾何哉居士春秋日高前景日窄從來濁山野坐蠻烟瘴霧中且喜生緣日薄道緣日厚形骸

りか

嚴實地冀普使天人各懷智種靈蝡翹蛸角登覺岸

此非盧語居士諦思從前功名事業與夫兒女計皆 世滋味備嘗殆盡諺云到底鹽如此鹹酷如此酸到 士此等豪傑丈夫事山野二十年前即證居士言此 不著急打整選是不會猛省不猛省一下又大非居 不覺失聲自然著急打整自己脚跟下生死大事若 是他家活計如何是自家活計耶若一念猛省至此 了作何究竟古人云來時儘好只恐去時不如來時 混到今日就中一點赤心大似張良始終爲韓之意 與居士相與談笑十餘年只是虛華境界人情佛事 相照亦未嘗不知山野此段衷曲將期白首同歸共 而已其實未會打破肝膽然與居士一寸心腸炯然 生死矣況今同在乾坤之內經隔萬里天眼看來猶 了此事豈其一旦分崩離析亦至於此即此可以觀 別再出頭來不知可能如今生今日也與言及此大 比隣耳不能一重額接色歡如昔日何況生死長途 可悲酸山野受居士知已之義非此不足以報居士 一著故不惜身命願與之遊然雖牛積陰功半養身 別杳冥相逢何日儻山野不能生還是與居士長

山野不至此地又非所以答知已也

信

與周礪齊太史

答周子寅伯仲

循比降耳 董非此何以望足下伯仲間也行役萬里足下體此 以足下不獨振家聲於汞世適足以洗法門今日之

與焦從吾太史

字點掇尚未錄出容當請正字動頗有當心者但難以言語形容耳內篇曾有數

旦暮之遇也某昔行脚中嘗以二老爲伴時時祭其

與楊復所少宰

答載給諫

惡人雖未生而其人惡業固巳造就於多生之前冤前知惡人之說此理最幽而難明亦易信為必然者前知惡人之說此理最幽而難明亦易信為必然者前知惡人之說此理最幽而難明亦易信為必然者,不是惡之事此正因果昭然而易信者然百千年後,

對關償固已分明定於先世矣業因未熟惡緣未至其人雖在十方世界輪迴顛倒之中不自覺知而聖人蚤已照見於大光明藏中及惡緣一熟冤家會遇忌果成就即惡果之終一如惡因之始不待生心動之自然了知所謂觀彼久遠猶若今日此聖人眞常之心也且夫因果無差不昧分毫所謂假使百千劫之心也且夫因果無差不昧分毫所謂假使百千劫之心也且夫因果無差不昧分毫所謂假使百千劫之心也且夫因果無差不昧分毫所謂假使百千劫之心也且夫因果無差不昧分毫所謂假使百千劫之心也且夫因果無差不昧分毫所謂假使百千劫之心的。

與般參軍

東足下別來忽忽兩歲聞此時從征尚在黎中蒸暑與足下別來忽忽兩歲聞此時從征尚在黎中蒸暑與足下別來忽忽兩歲聞此時從征尚在黎中蒸暑與足下別來忽忽兩歲聞此時從征尚在黎中蒸暑

答鄭孝廉

· 」 與 厚書來 乃知潛心此道且云於日用中善念現前

至純善之地則性眞自復本體光明自然披露耳便是本來面目發現時心若時時現前念念知覺覺知則聖賢可立待也公即於日用善念現前不昧處知則聖賢可立待也公即於日用善念現前不昧處

答鄒南皋給諫

道自愛

叉

法如此嘗聞煩惱烈蹤正是聖賢爐治種種執著之言及接來教切切以此再三致意諺語有之要知山言及接來教切切以此再三致意諺語有之要知山主大非細事隨緣解脫誠不易得每憶別時叮嚀之主大非細事隨緣解脫誠不易得每憶別時叮嚀之主大非細事隨緣解脫誠不易得每憶別時叮嚀之

會別 國見 國大難關也此中轉塵勞為佛事更為六祖 愈見 國大難關也此中轉塵勞為佛事更為六祖 也中力竭正欲遣致尊慈作金剛幢適辱使者至斯 世中力竭正欲遣致尊慈作金剛幢適辱使者至斯 世中力竭正欲遣致尊慈作金剛幢適辱使者至斯 世祖意攝受哉敬以此中因緣述其大檗持入慧照 當和意攝受哉敬以此中因緣述其大檗持入慧照 此中力竭正欲遣致尊慈作金剛幢適辱使者至斯 以中力竭正欲遣致尊慈作金剛幢適屬使者至斯 以中力竭正欲遣致尊慈作金剛幢適屬使者至斯 以中力竭正欲遣致尊慈作金剛幢適屬使者至斯 以中力竭正欲遣致尊慈作金剛幢適屬使者至斯 以中力竭正欲遣致尊慈作金剛幢適屬使者至斯

叉

憂患人情皆本體也非握至真之符又何能轉煩惱 大頭絕響江門不起此得楊復老大樹性宗之檢查 生死關頭掉臂而過前輩不能盡知近年若羅近溪 生死關頭掉臂而過前輩不能盡知近年若羅近溪 生死關頭掉臂而過前輩不能盡知近年若羅近溪 生死關頭掉臂而過前輩不能盡知近年若羅近溪 是故居士種種三昧洞然無隱耳嶺南自曹溪偃化 人頭絕響江門不起此得楊復老大樹性宗之檢查 人皆在

可謂舌長拖地也呈上幸覧爲此墓蒙歡喜耳此亦開化之基昨復老爲作曹溪志序真赤心片片

與岳石駅

見樓閣門開也公其能無意手

叉

話令無數觸隨眼開光破黑暗誠不自知爲業力所畢竟忍俊不禁蚤爲吐露不識邇於寂滅海中時復畢竟忍俊不禁蚤爲吐露不識邇於寂滅海中時復畢生溫滅否貧道走入瘴鄉所賴佛祖神力攝受以基性温滅否貧道走入瘴鄉所賴佛祖神力攝受以

使又不知爲願力所致耶諒知我者聞之必賞一睡

耳

重空居士踞天目之師子叱露地之白牛遊戲於西 進空居士踞天目之師子叱露地之白牛遊戲於西 進於法性無虧第妄想者不無顧到見耳如居士以 雖於法性無虧第妄想者不無顧到見耳如居士以 雖於法性無虧第妄想者不無顧到見耳如居士以 雖於法性無虧第妄想者不無顧到見耳如居士以 雖於法性無虧第妄想者不無顧到見耳如居士以 此之至觀護法精心真能令人毛孔酸程差此末法 念之至觀護法精心真能令人毛孔酸程差此末法 念之至觀護法精心真能令人毛孔酸程差此末法

與樊友軒侍卸

現功德今仗加被業已苟完先致一部求正諒靜裏此良友蓋天綠心楞伽新疏因緣皆從無相心中變於此中三昧如人飲水冷燠自知柯君別經年亦能樂此中三昧如人飲水冷燠自知柯君別經年亦能

首推牽鄉正座下悲願地冀無悉津梁爲斯道幸門下諸生日益進我聞如來不捨一衆生以大悲爲遊目不無漏逗萬乞指摘金箆更爲一大法施心聞

與邢海陽孝廉

江州爲匡山諸祖近寺遭越地般若種子於此偏多正光之閒非足下同遊山靈何以生色貧道嚮惡久五老之閒非足下同遊山靈何以生色貧道嚮惡久

與霍洞觀

人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心心 大深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心 大深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心 大深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心 大深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心 大深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸愿在 人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸愿在心 人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心 人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心 人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心人深知滅裂有蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心人深知滅裂者蓋袈裟然切不敢增慢所幸辱在心人深知減失。

然願公爲道自攝無疲津濟是所至望然而熟正別與期不二慶慰何言歸來語念皆灰一心無寄日

又

承慈眼相視供以五燈會元即公惠我三昧也山曆 時時参請深愧鈍根下劣不能親見古人然亦略領 制除知見邊事恨不固地一聲以為慶快生平耳從 地拈轉話頭他日或當有報知已豈敢有忘因地 知新發意中亦有堪能大事者否願公不違本誓隨 知新發意中亦有堪能大事者否願公不違本誓隨 質問訊世尊無多憍慢嫉妒衆生否是當以此訊足 實問訊世尊無多憍慢嫉妒衆生否是當以此訊足 下願時時為道珍護

叉

心如初會者豈能再得惟居士利生之願日廣入理龍華一別直至而今回視世間眞同夢事思晤語印

憨山老人夢遊集卷第十六

護法擅度位看無盡法輪皆在一微塵內轉也

縫耳

5

之性源若夫於佛祖建立門頭曲唱傍通聊可以引 實以不虚此生矣顧此乃文言之末不足以發當人 論持請法眼決擇黨其不認則山野不獨不虚此行 究此經凡一言有得遂筆以記之不覺終軸謹併前 賜以空閒之地深悲無以贖壞法之乞荷戈之暇 木楊少宰稱千古定論楞伽每慨讀不能句鼻祖指 此爲心印而宗教兩途竟爲皆讎山野頃荷 是時還海上偶筆之成書日觀老莊影響論今始菑 士夜談三教之宗以唯識證二氏之旨唇心印相可 飲嵐癘之氣比及三年可免四大增損耳會憶與居 緣差竟過南康自入瘴鄉仗慈被頗能以氷雪心腸 別天池居士前擬取道黃岡入維摩之室不意路頭 必大爲之慶快矣丙申冬被放荷策南來時於都門 理障之坑此荷諸佛神力爲之勸僑想居士知我者 之門益深福慧兩足自他俱利之行直進手金剛心 地矣山野爲業風飄鼓一至於此且幸如幻三昧拔 聖恩。恩 力

整山老人夢遊集卷第十七

侍 者 福

福善

日錄

通燭編輯

門

嶺南弟子

劉起相

重較

書問

與汪靜峰司馬

因綠眞兩間奇事朅來倏忽幻化如斯惟正眼觀之憶昔長安大道把臂回遊策蹇長驅風餐旅宿此段

端若空花夢事耳惟三昧神力無不深入諸法夢幻實際也山僧自入瘴鄉仗光被諸綠寂靜種種皆為 實際也山僧自入瘴鄉仗光被諸綠寂靜種種皆為 助道具彌感 聖恩發破幻網重重可勝半生行脚 時來能不重此本願乎閩歸宗近蒙 聖恩頒賜大 時來能不重此本願乎閩歸宗近蒙 聖恩頒賜大 時來能不重此本願乎閩歸宗近蒙 聖恩頒賜大 時來能不重此本願乎閩歸宗近蒙 聖恩頒賜大

又

意餘生得遂高趴萬山積雪一徑雲封不減清凉寒 菩提所綠綠苦衆生惟居士以大悲願力置身苦寒 医固我相及孤調解脱者而能及哉是則紫雲千峰 整固我相及孤調解脱者而能及哉是則紫雲千峰 整固我相及孤調解脱者而能及哉是則紫雲千峰 整度著一毫妄想耶此吾本分事是不敢旁多屬也 摩摩著一毫妄想耶此吾本分事是不敢旁多屬也 學更著一毫妄想耶此吾本分事是不敢旁多屬也 學更著一毫妄想耶此吾本分事是不敢旁多屬也 學更著一毫妄想耶此吾本分事是不敢旁多屬也 學更

Ą

一般骨時也感念護法之心真不可以言謝

主之願新歲閒法駕業已抵家喜而不寐此荷 聖 養靜謐切願老居士早遂歸來之志同究竟此生淨無神力以消衆生定業唯率衆日誦華嚴經以新邊無神之以消衆生定業唯率衆日誦華嚴經以新邊

特

恩特出望外誠感佛祖神力加持以為法門證信耳恩小綠哉每思老居士坐此二載靜觀一念不啻鐵是小綠哉每思老居士坐此二載靜觀一念不啻鐵是小綠哉每思老居士坐此二載靜觀一念不啻鐵是小綠哉每思老居士坐此二載靜觀一念不啻鐵出生死海之恐肌也何快如之山野仰仗慈庇山居不及三載經營聊爾可極即將常住交首座為十方不及三載經營聊爾可極即將常住交首座為十方不及三載經營聊爾可極即將常住交首座為十方不及三載經營聊爾可極即將常住交首座為十方不及三載經營聊爾可極即將常住交首座為十方方。

與繆覺休

摩啄同時如居士者當使法幢光明照耀大地矣別 會之機妙在節拍成令耳私謂在處決綠假令人人 深仗旁通助顯此其王重仙陀佛欽內秘而調應偶 四江一帶法綠所賴智椎先白即以登道聊爾經過。 與居士多世法親支離岐路今他鄉驀直喜慰何如

有緣共坐五羊江頭相與披剝萬象亦奇事也 與而來固所大願但簽涉艱難忍不勝其勞順耳若 承接足否負道身嬰罪數難房孤雲儻杖屨乘秋發 諸故舊不能無懷又不知達師錫住何方可能一親 諸故舊不能無懷又不知達師錫住何方可能一親

又

東四省擊念第登道幻影浮踪尚託乾城猶然未登 東歐田事適來了此宿願乎右武去就因緣渠自有 中寒法輪機輔在此一轉今居士力荷擔之豈非前 中寒法輪機輔在此一轉今居士力荷擔之豈非前 吳平計此時返擢南州儻有遠師起居幷諸故人消 吳田 上再晤之日或不復以兄事之地居士東歸

與質知忍中輸

初地也

再達但達師半生以前行脚事跡都所未悉須與諸門、
一
一
一
一
正
正
一
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正
正

先從諸公筆尖托出山僧不妨作依樣葫蘆包法門高第探討商權以便執筆遠師一座無鏈塔樣

與于中南比部

又

披津濟是所願也

下天然本色全無刀斧痕也較之鋸解不開紐理橫交光肝膽盡露不獨見匠氏作者之妙葢亦深見足足下知鄙人旣讀手書具見真心兩相照耀若秦鏡往一交臂之頃鄙人郎敢以知足下自許然未敢許

容不屬之足下且令自負之矣吾輩雖堂堂直泥木

同参大案共有者鄙人似深知之是故荷擔之任不

之心以爲法則法無不振使蘇李之志以降魔則魔 黑直心熱腸横身以當涂轍者亦不多見況夫卓然 任若古之挺然傑出者固不可得至若具正信明白 忘生於道法與傷生於物欲者必有辨矣然用田程 除却死生真大事其餘都是可商量是知真見生死 私謂時雖末法循正法也自爾吾輩有高深堅利恃 紋雖有犯鼻之斤亦無容施其巧矣惟念世衰道微 死不變則餘不足論以此事為大則他皆細故是則 了然不變而不避者万稱堪任大事耳然能果了生 事因緣出現於世所謂一大事者果何事耶古德云 者平吾道之幸幸何以喻常竊論吾佛世尊以一大 **聚大城可保坐令安堵況復經營日新有身董其役** 爲外護然雖將頭不猛亦足以使魔外喪魄我此涅 順超濁世若足下與同多大眾一時亹亹者乎鄙人 愈流愈下非特求真實以生死為急務以道法為已 無不服則安攘法土之功莫大於是此足下深抱而

留達師主寂場是二老把住放行又在足下之手耳, 照未然而神運力持矣, 茲特遣迎龍華師歸窟中, 且委心相可是則凡在周防法幢者足下定以法眼洞, 委心相可是則凡在周防法幢者足下党契言外且辱, 也是以受燒香散華而作供養

又

呵呵一笑千里同聲併入慈照

職決學提攜乃能合職否則惡智一發不覺麼在黑 四竟失良唔幸江頭與達師抵掌信宿而別屈指後 四竟失良唔幸江頭與達師抵掌信宿而別屈指後 多與四年矣。世相遷流剎那不住惟道眼諦觀了無 等以性融之則平等寂滅及回五羊得右武爲侶朝 等以始融之則平等寂滅及回五羊得右武爲侶朝 等以銘之渠亦自發大願此後若不痛自策勵則不 當以人數目之此語出自痛陽第此事須時與善別 當以人數目之此語出自痛陽第此事須時與善別 面頭轉腦因贈之日覺非居士又爲 一割到底始知回頭轉腦因贈之日覺非居士又爲 一割到底始知回頭轉腦因贈之日覺非居士又爲 一點到底始知回頭轉腦因贈之日覺非居士又爲 一點以銘之渠亦自發大願此後若不痛自策勵則不 當以人數目之此語出自痛陽第此事須時與善別

山鬼窟此從來學道人所難者要在金剛心地立定山鬼窟此從來學道人所難者要在金剛心地立定上中波瀾皆性海汪洋科沐浴洪流優游巨浸而無此中波瀾皆性海汪洋科沐浴洪流優游巨浸而無此中波瀾皆性海汪洋科沐浴洪流優游巨浸而無武計學情內以此實事傾倒者亦不多見心頃楞伽已成字宙內以此實事傾倒者亦不多見心頃楞伽已成時遺侍者實往請正但此經境界非攀緣可到座下特遺侍者實往請正但此經境界非攀緣可到座下特遺侍者實往請正但此經境界非攀緣可到座下特遺侍者實往請正但此經境界非攀緣可到座下特遺侍者實往請正但此經境界非攀緣可到座下時遺時者實在請正但此經境界非攀緣可到座下時遺時者實往請正但此經境界非攀緣可到座下時遺時者實往請正但此經境界非擊緣可到座下

叉

座下亦可開用極矣

西達師及尊礼讀之忧若冰雪墮牀頭舉身毛孔清 能麻夜半扣門驚起則見大義持北來諸古人書首 無不減薊北新歲南征宿新興旅邸寒凛肌骨凍不 黑不減薊北新歲南征宿新興旅邸寒凛肌骨凍不 黑不減薊北新歲南征宿新興旅邸寒凛肌骨凍不

根器近道顯悟快便第般若不然天壤閉此等奇氣 火裏蓮花也右武自珠江臨別項門一錐透至脚底。 之心無時不在火宅中也年來生事何如令甥成就 法門威力也第習氣勇猛不能順入徽密耳劉貽哲 坐此憂患病苦中而細細作書如此足見三車長者 溪傾顏之極苦心欲為料理去秋入山路為整順似 師長安消息甚慰鄙懷從前門庭亦折合過牛惟此 事欲識佛性義當觀時節因緣料不負雅望耳得達 目所稀觀每相見但說眼前淡話從來未敢專著此 賴此機緣即年來居家杜門謝客修忍辱行皆仗此 何似惟此末法劫火洞然此中能得一片清凉地即 回時法育再至手之字字心光流溢进瀝奪人居士 徹宛在千丈寒嵒破衲蒙頭睡醒時也四月自雷廉 亦可觀所謂水月道場空華佛事觸處皆然何必以 追像法第叢林凋弊後生薄福不識可能蒙化否曹 不獨爲遠師福亦是法門厚幸末法中有此宗匠可 有所住心作無相福田乎此在護法心精所樂聞者 **贅**發一笑

與吳本如祠部

與晉金隨義部

屬累末世利生第一當起大忍力大精進力悲夫黃百年為蔑戾車之所倒置山僧初以避魔至此然不百年為蔑戾車之所倒置山僧初以避魔至此然不可年為蔑戾車之所倒置山僧初以避魔至此然不可年為蔑戾車之所倒置山僧初以避魔至此然不

面老深有懼於此時也然山僧自揣非大忍刀大精 意信乎法性原無彼此嘗謂世出世別乃生與無生 之異耳然日用現前種種業幻諸流轉者皆生死因 之異耳然日用現前種種業幻諸流轉者皆生死因 若不爲所轉不忘境界有可忍者謂之生忍不見可 恐亦無忍者爲無生忍若忍主無生則無不忍矣心 以稱有力大人我輩生居堪忍中若此處不破則無 可破者固當直以大忍力大精進力為第一義諦耳 可破者固當直以大忍力大精進力為第一義諦耳 之耶見面爲難不覺漏逗至此

V

居之狀就已深入如幻三昧當動靜不二也貧道向力量人一肩擔荷,執敢正視別後因緣無從委悉起劫不磨終當透骨而出此大丈夫之能事非居士大劫不磨終當透骨而出此大丈夫之能事非居士大

會對談不二端在何日惟同韻之悲定惟此枯朽頭問日幸增上道力所云大火所燒此土安穩非妄語問日幸增上道力所云大火所燒此土安穩非妄語此古人每以苦事為助道增上綠得力處正在於此地古人每以苦事為助道增上綠得力處正在於此地 古人每以苦事為助道增上綠得力處正在於此別時更增勝第此幻化空身居然火宅中也毗耶法為山鬼所弄加之夙業障緣致茲嚴譴是雖有玷法

與馮啓南孝廉

陀時時瞥興妄想也

老人與足下遊將二十年矣如在水月光中一切逆老人與足下游子多生一遇循時雨也各各種子因而有足下為之灌溉不至焦枯此段因綠誠非小小二有足下為之灌溉不至焦枯此段因綠誠非小小二有足下為之灌溉不至焦枯此段因綠誠非小小二有足下為之灌溉不至焦枯此段因綠誠非小小二有足下為之灌溉不至焦枯此段因綠誠非小小二十年,以與足下遊路。

入幻病三昧則此病爲精進幢也 是足下慣熟法門願室中不少師子座令諸來者同 矣生氣為難今寓湖東如生公住虎邱時也善孫從 北回不久將同蘆禪入身可一悉也知足下善病此 使及至征心頓歇觀南岳之靈爲諸祖所拔今已竭 不肯耳老人心知法綠為難此行蓋為山林秧習所 肯者但思今生錯過一失人身萬劫難復此則不容

與龍元温

不墜即千載如一日也又何有於去來南岳山靈已 人感足下般勤爲法惓倦苦心豈忍忘情但願此道 妈一切道場皆委於燒殊爲酸心恐諸老復起亦未 語言轉正要顯出當人作略耳奚以實法綴人哉老 付囑爲懷種種方便引攝有綠直使慧命不斷爲第 爲法門長也惟足下護法精心如金剛幢但以護念 十年來不在音聲色相閒老人今去粵賴足下居然 老人初入事時足下最先入法門爲居士長同遊二 眉穿卸耶昔世尊不許阿難以緣心聽法宗門不許 一義妙在離言之指自有接天鼻孔豈爲老人一萃

易畢也嗟乎道與時也安可强乎

與元温起南

幻化人今日觀之又夢事也老人初心妄意南岳為 衢道作諸幻事雖有種種妍醜欣感之狀總之皆歸 足下念老人與諸子周旋十八年來大似幻師於四

之二十年中跆瞬辛苦化爲無上妙樂之境矣信乎 人即此一日之安尤勝碌碌一生也諸子聞之豈不 喜者已蒙 聖恩浩蕩還我本來面目無復他慕其 之累且衰朽又無行脚濟勝具只得隨緣放下將就 諸子共之古人謂道路各別養家一般諸子果能日 爲我大生歓喜手修公同居時時提斯此事恨不與 山門應接賴有湛公荷擔老人自此閉門飽食高眠 淨穢隨心苦樂在已一切處無非寂光眞際也最可 湖東幸一二檀越助詹菟裘去冬誅茅結廬於逼除 一切禪道佛法束之高閣今日乃爲天地閉一無事 日已就安居當下在心頓歇生平所志願者一旦得 大休歇地及至乃知山不宜老種種不易皆爲身心 用於一切處以老人之樂爲已樂則老人所有亦諸

参見下古本

白椎耳 讓人乘之耶但有疲於津梁者啓南上座當爲大衆 中一萬眷屬常空數十座且人人脚下一片雲豈肯 楚水也今歲正是諸子願力成熟之時嘗憶文殊窟 人今日之事與諸子絕分但於日用妄想交錯煩惱 智慧力無畏亦然此語豈黃面老子自道哉莫謂老 子之所有老人所無亦諸子之所無也所謂一身一 固結處便是老人現前時節若當面錯過即隔粤山

答李湘州太史

礙貧道澄心諦觀只以理觀為主理觀一通餘文可 米通達因思佛楞嚴以一心三觀爲宗向以文字障 依回觀從前山河世界皆夢中事由是得大快樂一 中刻苦身心甚至一字不識之地忽然四大脫落無 究已躬下事在萬十年未有開悟遂匿迹五臺冰雪 **資道一入空門即抱向上志十九披緇遂棄筆硯單** 必信即法門疑者不無久幕玄解特請印正當有面 略嗣隱東海潛心力究忽然有得遂直述此書自爲 切應緣如鏡中像了無滯礙如此八年先是諸經實

> 日一決生平之素庶此道寥寥天壞不孤耳明發溯 決處此時苦以病魔作崇儻秋爽有期當與施關十

流回首徒有瞻依 寄高瀛臺太守

限傷心事不向空門何處消此實意之所望者 巴枯朽之懷無以爲知已道者儻公能降心寂寞享 清修之樂作出世一段因緣大爲奇事古云生平無 年近八十衰病日至幸藏迹空山荷延一息待死而 心大累乎杜智者之於重輕必有一以審處矣山野 爲國德忠固本分事第非其時似違用舍之戒況當 頃時事驚心公壯心勃勃讀尊草委悉近況然臣子 垂老之事居固窮之地正壯士失色之時豈不爲身

答談復之

項就湖東尺**地結廬於灌水之陰業幸就緒於月之** 十八日入室高队夢想順空足可娛老且喜得如足 得足下書中語似於知見上做工夫此足下信向之 下信道之士相與精神流通可謂不索寞矣行者來 為故榜嚴云知見立知即無明本此謂衆論之門也

5

自點檢果於知見上有何實際當不落此戲論場中 人於足下大生法愛故不惜眉毛以酬來意足下試 明伶俐知見把作正解恰似認聽糞作明珠若在美 於一念不存處稍見影響万可以言個中事若以聰 實受用處足下但將從前知見一切劃去藏毫不留 切世閉淫殺未除貪嗔放逸者皆是佛矣若作此解 知識門下存此知見則善知識亦成邪魔種類矣老 即是魔說豈可以邪見作正悟耶來語種種皆非真 用遂行耶若以尋常妄想情慮當作受用境界則一 迷以前言之耳不是迷中妄想知見當作佛之知見 許可也老人所云衆生知見即佛知見者蓋推本未 在善知識分上不是以佛法作人情便以冬瓜印子 以爲入道眞種耳深切思之 也若以妄想為佛知見則大地衆生皆已是佛又何 固篤入法未深便作如是種種知見語皆成戲論其 實悟處做出殊非口頭戲論當作佛法也足下信心 知見大非凡情妄想思算境界皆從實際工夫真多 又云知見無見斯即涅槃是謂衆妙之門也此中云

又

已靈哉以足下信老人心決定無疑故不敢負足下 若於當世口鼓子禪但資說鈴不究實際豈不孤預 以足下之根器加之篤實信心已具根本最為難得 高者納於功名路上如此而已幾骨有自己活計哉 至也世間多少聰明伶俐漢都納降款於五欲場中 方始蓋天蓋地若有志參究只須將從前知見盡情 歸心之望前書僭妄以特知已故不惜眉毛不是披 跳牆定有從中迸出一段光景方是真受用處殆非 處如壁立萬仞纔是得力時節如此用心辟如逼狗 方是八手時節此時正好著力敵工夫敵到敵不得 泛泛可到此地苟非真正丈夫有決定之志者不能 乾乾淨淨一物不留處放下又放下放到無可放處 言妙語當作已解只須眞参實死向自已胸中流出 直入此事決不是世別聰明伶例可能審泊亦不是 吐却即上大人孔乙巳字脚亦不許存在胸中吐到 俗習知見之乎者也當作妙悟亦不是記誦古人立 向上一路親近者稀不是真正奇男子決不能單刀 爲法施

新足下原足下指真實際不欲向門頭戶底隨恒品 新足下自謂向棒喝下承當足見大力量處要知古 其足下自謂向棒喝下承當足見大力量處要知古 斯望足下不淺故不惜忉怛政以足下有此大力量 助以千斤擔子累足下耳讀書之下試請大慧書問 故以千斤擔子累足下耳讀書之下試請大慧書問 一看便見老人不妄與也

與穆家玄侍御

山野向有休老南嶽之志去冬杖葉而來山居之緣出野向有休老南嶽之志去冬杖葉而來山居之緣出野向有休老南嶽之志去冬杖葉而來山居之緣此為獨盡力納向功名富實門頭肯於自已性命根宗在一路灣調古今豪傑之士一段般若光明多被世緣大究竟歸甯之地明公順能向此回視功名事業特夫究竟歸甯之地明公順能向此回視功名事業特上別方面上一路著剛者甚自難得以此大事因緣乃大支向上一路著剛者甚自難得以此大事因緣乃大支向上一路著剛者甚自難得以此大事因緣乃大支向上一路著剛者甚自難得以此大事因緣乃大支向上一路著剛者甚自難得以此大事因緣乃大支向上一路著剛者甚自與於其中,其一次

一劉玉受繕部

答杭城諸宰官

除生再見今日國不能言辦慚無地謹此致謝容當 之故與達師有死生之義悲蓮師有慧日之沉特不 之故與達師有死生之義悲蓮師有慧日之沉特不 之故與達師有死生之義悲蓮師有慧日之沉特不 方是者先施惡命晤玄津法師委悉法會之盛何幸 大長者先施惡命晤玄津法師委悉法會之盛何幸 大長者先施惡命晤玄津法師委悉法會之盛何幸

敬受單可以銷來劣

與新州南王

答荊世子

耳顧賢王厚自保愛

無以擬念重勞玉體也唯望三實慈悲足以利存亡

先王上御國事多艱殿下冲齡方在動學其內外事

念無可以感佛天加護者惟有至誠可以格天耳鼠經禮拜乃切已大事又不可以艱難退心捨此一以窓卸下以綏天龍萬無過傷以慰羣望其於念佛此不忘於心也然須自知保重節憂省惱以靜持心此不忘於心也然須自知保重節憂省惱以靜持心

答無錫爾兆吉廣文

公道念精純人倫師表願開示來學務真多實宪不 學光影門頭為第一義大抵聖學一宗果能多究禪 為流弊課人不少以在口頭非真知見也至若楞伽 為流弊課人不少以在口頭非真知見也至若楞伽 為流弊課人不少以在口頭非真知見也至若楞伽 正眼也願公留心時時披宪當得真正路頭以文字視非 正眼也願公留心時時披宪當得真正路頭以文字視非 無明眼人賴此為印證耳

與聞子與

力不市耳居常善病足下藏此病源乎他人之病從便是火裹生蓮但惜足下稟氣柔弱心力骨剛第色堅强勇猛誠難頓拔其根若於熱慘中發一念清凉

世別貪癡起足下之病從爲道貪癡起病雖不同爲 若以遠離爲報則重增父母之憂是返苦於親也何 若以遠離爲報則重增父母之憂是返苦於親也何 報之有以不得脫離日夜癡癡妄想以爲不遂其志 朝道未辦而苦芽先增長矣豈非大癡耶足下當自 思維妄想乃生死根即於病中處此妄想了無根帶 思維妄想乃生死根即於病中處此妄想了無根帶 則念念頓拔生死即此坐進此道法身日健心地日 則不待脫而自脫矣老朽處足下信心時不能忘聞 此下病尚未安故以此奉慰

與金省吾中丞

與嚴天池中輸

還山後業已具報率慰慈念山居卜地最為幽勝拮 還山後業已具報率慰慈念山居卜地最為幽勝拮 無所不窮唯有千峰積雪萬壑松濤盈耳眩目時皤 無所不窮唯有千峰積雪萬壑松濤盈耳眩目時皤 無不知有人世而人世亦不知乾坤之內有此物也 焉不知有人世而人世亦不知乾坤之內有此物也 馬不知有人世而人世亦不知乾坤之內有此物也 馬不知有人世而人世亦不知乾坤之內有此物也 居士聞此必無一撫掌

與王季和

居士言近來日多懈怠無精進力此自知之明極云

知是空華即無輪轉以知為嘴忌則定不為懈怠轉 完古德云心不與世情和合是真精進近聞同元初 完古德云心不與世情和合是真精進近聞同元初 完古德云心不與世情和合是真精進近聞同元初 一項寒波浩渺之中如坐大圓鏡裏且與勝友對談 一項寒波浩渺之中如坐大圓鏡裏且與勝友對談 一項寒波浩渺之中如坐大圓鏡裏,且與勝友對談 一項寒波浩渺之中如坐大圓鏡裏,且與勝友對談

與顧履初明府

書願公早發信心於此用力久之當有自得處也也出世眞修唯楞嚴一經應世之妙無逾道德一地心出世眞修唯楞嚴一經應世之妙無逾道德一地心出世眞修唯楞嚴一經應世之妙無逾道德一地心出世眞修唯楞嚴一經應世之妙無逾道德一地心出世眞修唯楞嚴一經應世之妙無逾道德不紊竟

與熊芝岡侍御

爾至言歷談處途一段精神所謂或行蠻和氣欲吞調至言歷談處途一段精神所謂或行蠻和氣欲吞調或一段精神所謂或行蠻和氣欲吞調或一段精神所謂或行蠻和氣欲吞明。 一聽之不覺毛孔熙恰私謂菩薩現宰官身定國安中聽之不覺毛孔熙恰私謂菩薩現宰官身定國安中聽之不覺毛孔熙恰私謂菩薩現宰官身定國安中聽之不覺毛孔熙恰私謂菩薩現宰官身定國安中聽之不覺毛孔熙恰私謂菩薩現字官身定國安中聽之不覺毛孔熙恰和謂菩薩現字官身定國安中聽之不覺毛孔熙恰和謂菩薩現字官身定國安中聽之不覺毛孔熙恰和謂菩薩現字官身定國安中聽之不覺毛孔熙恰和謂菩薩現字官身之極

回視向者直一唾耳實所望焉高明其有意乎

與虞素心吏部

與蔡五岳使君

答王於凡

> 不超生死登不退地所謂但得見彌陀何愁不開悟。 一定一意順悟,要在自知根器何如耳 一定一意順悟,要在自知根器何如耳 一等說則似易其實為難苟無二三十年死心工夫如 一等。 一時世人不知其妙視為淺近其實步步 至若念佛一門世人不知其妙視為淺近其實步步 生死業何會一念回光返照自心何會一念肯斷煩 性死業何酬是念念出生死者此一念不亂到 念念能斷煩惱則是念念出生死者此一念不亂到 念念能斷煩惱則是念念出生死者此一念不亂到 念念能斷煩惱則是念念出生死者此一念不亂到 本念能斷煩惱則是念念出生死者此一念不亂到 之心轉為念佛則念念虧煩惱若 本念能斷煩惱則是念念出生死者此一念不亂到 本念能斷煩惱則是念念出生死者此一念不亂到 本念能斷煩惱則是念念出生死者此一念不亂到 本念能斷煩惱則是念念出生死者此一念不亂到 本念能斷煩惱則是念念出生死者此一念不亂到 本念能斷煩惱則是念念出生死者此一念不亂到

妄想其念佛是以淨想轉染想以想除想乃博換之念佛之一念不移一心不亂比多禪更有下落總之恐不能如此豈不自誤此生又匱長劫生死果能以

榜即末後一名亦可又何必要鼎甲哉苟如所云多

禪徹首徹尾則五獨十方無非淨土此語甚痛快第

謝吳曙谷相國

與承翰教知明公時中以楞伽印心昔張方平偶得 其本恍是前生手書此亦明公懷中故物耳但此經 其本恍是前生手書此亦明公懷中故物耳但此經 此經何以不立九識葢佛應機說法教有權實以初 此經何以不立九識葢佛應機說法教有權實以初 出世時化機未熟不堪受大姑爲小乘劣根說六識 出世時化機未熟不堪受大姑爲小乘劣根說六識 三毒爲生死本即八識祕未敢說直至三十年後根 三毒爲生死本即八識祕未敢說直至三十年後根 一種問性故於八外又別立第九名無垢識以引進之 信佛性故於八外又別立第九名無垢識以引進之 信佛性故於八外又別立第九名無垢識以引進之 一个無生順同佛體故經唯有種種言 次名位但了一念無生順同佛體故經唯有種種言 次名位但了一念無生順同佛體故經唯有種種言

正令妄意如此惟明公留意焉。至今妄意如此惟明公留意焉。此是為人門工夫開卷即一切俱非便是佛觀極則不必更求九識爲實法也大段此經只是要離極則不必更求九識爲實法也大段此經只是要離設也明公但觀經中識藏即如來藏一語便是死竟

答阮儋宇太守

各黃聞挂冠東歸喜慰無量惟菩薩度生固是本行 喜劫獨時衆生垢重即釋迦不免蹙額奈何能盡顧 當劫獨時衆生垢重即釋迦不免蹙額奈何能盡顧

憨山老人夢遊集卷第十七

者福善

日錄

如此惟公天縱有餘所恨法門未能深入則護法有

久與諸子周旋散而無統大為可悲不意興衰之速

心而於的當放捨一著似未打破故於世法佛法不

無町畦若得大開重門內外洞然若揭日月於中天

人 通 炯 編輯

門

嶺南弟子 劉起相 重較

書問

與王醒東侍御

結夏見其幽勝遂有終焉之志了達師事即於丁巳辰夏即有吳越之行覓公音問竟不可得先至廬山嶽初有休老意因緣未果且達師有未了公案至丙益子冬別後次年大病幾絕更生及冬即度嶺之南

若公來遠唇書惠始知公內艱家居計釋服在通入所慕垂老始遂足知人生山林之福未易得也去夏餘生其結構之緣皆賴護法今幸巳得安居二十年

五月還歸匡廬下得山南五乳蜂下一邱一<u>壑足了</u>

公入社諸子一時之盛得馮龍二生表率人人可觀夜望之每念嶺南法道千年以來老朽雖未大振賴都可期升過落星舉首雲山一牛鴨地佳會之緣日

嗟哉二子繼逝所道寥寥獨特公荷**頁之力奈不能**

.

عرام والمد الله ديد المدا معال و حدد م

則曹溪衣鉢豈容陳腐若公大力量人不發無上善則曹溪衣鉢豈容陳腐若公大力量人不發無上善則曹溪衣鉢豈容陳腐若公大力量人不發無上善則也不可能公變之

答陳無異祠部

醫死之矣此外更有何術朝廷一時固多君子縱能有明確不以必完爽口快意爲尚所謂病不死人而有以必完爽口快意爲尚所謂病不死人而有以此當頭所當束手爲之奈何此者前車已覆惟其然即盧扁亦當束手爲之奈何此者前車已覆惟其然即盧扁亦當束手爲之奈何此者前車已覆惟

進如此則一 始一念未移從今而後只此一念更何別求既唯此 可做得願公諦信此心看破念念現前處則念念精 念現前處看破無生無生則本來無物是則遠從無 及故起將謂別有之心所以當面錯過却道承當不 勇此病在別求之心凡向道者皆以此誤公直就一 體出現又何有承當不承當耶以當人一念自信不 念現前者即本來面目如此念念著力念念無生至 自知之明若云承當不勇乃自信不及耳然透現乃 一念更教誰承當耶六祖云若論此事輪刀上陣亦 念念透現豈但時復第看破透現處本無一物則念 如何承示孤明時復透現第承當不勇若言透現乃 其閒令奕耆厭此吾佛所說貴善巧方便行耳如何 指點一著率收全功又何在於對奕耶第不宜攘臂 此土安隱世事如奕棋當局者迷若有明眼傍觀即 當即出補不必以治亂為行止所謂大火所燒時我 執經按脉恐出奇多方亦未必能取捷公釋服在羅 切處無非大解脫場又何有治亂之分

答曹能始廉憲

廣大心中必能建是希有之事也 廣大心中必能建是希有之事也 廣大心中必能建是希有之事也

答徐明衡司馬

耶因對晤時難不覺漏逗

則大不知恩況外慾薄蠲增益病本唯佛一人純一以金剛心地念念熏變故令此身全成堅固舍利得不讓耳嘗聞聖道之真以治身其土苴以爲天下國不讓耳嘗聞聖道之真以治身其土苴以爲天下國家此乃本末之論惟今志欲利人先立其本在所養家此乃本末之論惟今志欲利人先立其本在所養家此乃本末之論惟今志欲利人先立其本在所養家此乃本末之論惟今志欲利人先立其本在所養家此乃本末之論惟今志欲利人先立其本在所養。中軍持一呪或準提或金剛穢迹含之於心二六時中電海完不忘久之發强剛毅之氣自然熏發不待强而愈念不忘久之發强剛毅之氣自然熏發不待强而自强矣知高明信心篤厚故敢妄談

答王東里明府

此當自知不成一片過在何處以古人一片之說不中誰能壓眞與世外人茗碗爐香說無生話也承識上見閱楞伽有會心處甚喜以此經離文字相難心近日閱楞伽有會心處甚喜以此經離文字相難心症目閱楞伽有會心處甚喜以此經離文字相難心

歸法法顯露如此方可入一合相今若以見識相破 此事不是以知見道理當得實用也又云作一合相 六喻即一觀純熟自有十分相應若從楞伽入但於 如此作劇似有清誦若依經教中入必如金剛般若 正如油入麪何能破得況見識乃病根非破敵之具 忘正是悟到一片處不見有少法當情作礙頭頭消 有理在但一合相不以兩頭湊泊可入者以心境兩 閒時無事見有道理及對境遇緣便被奪轉去是知 此道理循在光影門頭其生滅心未會暫歇一念故 巴有解會處但未下死工夫如古人參話頭雖會得 此是話頭成片未是悟成一片也知公雖論信此事 無性 靜坐能見自心妄想流注方是工夫入頭又云妄想 觀以見破見以相離相以識去識以執破執此言固 胸中塞斷意根再不放行著實疑情蓋夜咬定牙關 州狗子無佛性萬法婦一一歸何處等語以此橫在 一念不給久纔純熟万即打成一片動即十年五年 是小事從初發心參禪即將 一語中得力便念念消歸若宗門中多只依六 則公案作話頭如 趙

不被一切境界轉若八識进破大徹一番則無境可 單看一念起處當下咬斷便消得去若妄想消得便 祖不思善不思惡那箇是上座本來面目此最真切 相亦不必怕境轉但時時隨心抱一則話頭日用中 相應則忽然墮入一合中矣惟今願公不必求一合 日用做工夫如此時時不忘不必求一合相忽一念 轉突無境可轉則心境一如此眞一合相也

透過此關是爲百尺竿頭進一步到此一味平常更 未有日也喜公進道工夫甚銳誠一日千里但趨修 坐光影門頭此處只貴步步埽除自然得到大休歇 如此則通身毛孔蓮放光明決不是思量境界決不 無甚奇特所謂依然只是舊時人不是舊時行履處 不覺墮落知見魔網此從古學道之難過一關心若 固易而忘功絕證爲難以耽著玄妙靜沈窠日久之 息青山白雲之中與世日遠公利生之願正弘晤言 東行幸見公眞正道人可謂不虚往矣山野老年棲

又

巳蹈省力安樂之境足徵大精進力所云舊時鼻孔 本非形骸可隔信非虚語委悉近日工夫日見平貼 奉手教唇法愛惓惓心神契會不隔絲毫光明 一毫著不得正是得力處但就中一毫著不得處更

矣

不坐在無可捨邊自然不被見縛則通身如大火聚

知也高明以爲何如昔從念念捨去捨到無可捨亦

是此中工夫雖無著精彩處而捨法見一著不可不

見道而法執最難遣多墮在此所謂認著依然還不

將來有甚麼氣息亦是病古人初以見道為難及手

忘已見猶存是一直競透得放過即不可子細檢點

亦是光不透法身亦有兩般病得到法身邊法執不

前有物是一透得一切法空隱隱似的有個物相似

難豈不見雲門道有二種光不透脫一切處不明

面

急走過正恐坐在無事甲裏若不勘破將來轉身更

有請譌在直須透過古人謂有佛處不得住無佛處

與鮑中素儀部

耳

以是餘年、幸陳赤石公作山門檀越將邀海內高 臺以是餘年、幸陳赤石公作山門檀越將邀海內高 鄭慈一念眞心流出其功德利益豈小小哉山野欽 尊慈一念眞心流出其功德利益豈小小哉山野欽 尊慈一念眞心流出其功德利益豈小小哉山野欽 尊慈一念眞心流出其功德利益豈小小哉山野欽 鄭道空讚歎第恨衰老無能一瞻禮耳頃卜匡廬一 臺以送餘年、幸陳赤石公作山門檀越將邀海內高 臺以送餘年、幸陳赤石公作山門檀越將邀海內高 臺以送餘年、幸陳赤石公作山門檀越將邀海內高 臺以送餘年、幸陳赤石公作山門檀越將邀海內高 臺山方。

又

念此人心洶洶之時屏迹傾誠誦祝之不暇又安敢 藍是靈一旦靈粉大可寒心止留李將軍一路遼極 藍生靈一旦靈粉大可寒心止留李將軍一路遼極 藍生靈一旦靈粉大可寒心止留李將軍一路遼極 藍生靈一旦靈粉大可寒心止留李將軍一路遼極 藍生靈一旦靈粉大可寒心止留李將軍一路遼極

之以竢後期一事可虞故不敢輕進特此奉啓伏乞慈諒姑徐圖其不來恐地方不便此其二也始以一行爲快嗣有其不來恐地方不便此其二也始以一行爲快嗣有避食之徒無措足地鸞聞山野所至望風而禮難必輕事邀遊乎此其一也且聞京師震動南北禁僧而

又

著力深深追究忽然看見此一念本無生處若了得 堵截雜念歸之於一若窮冤此一念深深觀之觀來 此是爲單刀直入更不容思前算後種種計較纔有 為有力不在多求知見此中一字用不著只是先要 心惟今老居士做工夫提話頭著力處只看此一念 永劫情根當下順脫此名為悟非是別有**立妙可悟** 只是一念今無奈難念紛紜故古人教人提一話頭 生越見得心中妄念紛紛紜紜如此之多其實不知 盧當下冰清矣此所謂雖念相者等虚空界然因衆 思算遠之遠矣老居士有志此事試如此下手何如 灑灑落落一絲不留看他一念起處便著力追究如 將胸中一切妄想知見一齊放下放得心中空空地 無住生心也若求立妙便是有住矣如此直捷處最 觀去原無起處本自無生若一旦了悟一念無生則 做工夫究之即話頭亦是妄念以但將此一念話頭 一念無生則從此一切念念皆無生矣此六祖所謂

不謂天賜餘生尚有今日向以衰殘多病將匿影窮山適以雙徑有未了因綠義干生死不得少此一行此題以雙徑有未了因綠義干生死不得少此一行為悵然適辱慈音遠及法供種種捧誦再三彌感情系长於適辱慈音遠及法供種種捧誦再三彌感情不經一點文室作云慈航會待於錫山當面錯過大學擬一點文室昨云慈航會待於錫山當面錯過大學與一點文室時一行湖上無多留連歸次吳門必入毗耶尚有雲棲一行湖上無多留連歸次吳門必入毗耶古有宝巷中行湖上無多留連歸次吳門必入毗耶古意大學與一行湖上無多留連歸次吳門必入毗耶古意大學與一行湖上無多留連歸次吳門必入毗耶古意以養養多病將匿影第

又

山野后常恒憂法門寥落即外護金湯難得真毫荷 山野后常恒憂法門寥落即外護金湯難得真毫荷 上心一向老病相侵幻驅故有歷疾作楚多來方覺 更感惓惓別後仲夏堅後抵匡山卜居山南七賢五 更感惓惓別後仲夏堅後抵匡山卜居山南七賢五 北心一向老病相侵幻驅故有歷疾作楚多來方覺 上心一向老病相侵幻驅故有歷疾作楚多來方覺 上心一向老病相侵幻驅故有歷疾作楚多來方覺 上心一向老病相侵幻驅故有歷疾作楚多來方覺 上心一向老病相侵幻驅故有歷疾作楚多來方覺

山野深愧破器有玷法門況復久沈瘴海甘填溝壑

答錢受之太史

施流通利法不選其稿英明春當專持上路得宗門正眼我明法運大開賴有此為衡鑑若刻

51

又

生死 在正人心護法門在正知見然正人心必以正知見 門家落之秋非大力量人出誰為巨持管謂匡世道 節即法門中更難言之爲可流涕方今世道澆滴法 肯親近教乘求真正知見實爲難得宰官中向三十 功夫將身心世界大破一番揭露本有大光明藏方 由一羣情而定衆志哉然無我之學心從法中多究 爲本所謂不偏不黨王道蕩蕩非至公無我之心何 狀領過從前目中數大名者可樂見矣此時不但世 亦不多得大段士大夫太煞聰明無論若禪若教 年來護法大心者不少而求真眞潛心本地功夫者 近來東南衲子中参究向上者多苦無明眼宗匠指 能觀身世如空花泡影視功名如夢幻水月自然齊 示都落光影門頭掉弄識神被冬瓜印子印度又不 向致楞伽筆記此經的為心宗正脉未審會留意否 一是非超毀譽如此方敢言視天下爲一家視

基生為 之他日更有請焉 解者未盡發揮山野此作大非故轍似更易入其法 此經廣博包含一代聖教迷悟因果理無不徹向來 乘時架畜厚養以胥 人然後可言太平之治且天道運而不息豈斯世而 未嘗不無卷而歎也季世末習大有不可挽者必若 於此故能羽翼 則不辨知見邪正之是非此三經者居士宜深心究 苦心不知楞嚴則不知修心迷悟之關鍵不知楞伽 華涵義亦盡翻舊案不知法華則不知如來救世之 爲贅幸蚤刻之爲望近拙述楞嚴通議先已令致覧 重加批點但就諸祖塔銘開正眼處略發一二則已 翹足極矣安忍不發深心重願乎護法編文章不必 憂法之心如出諸已故所望於居士者重且大切願 絕無斯人哉山野自愧為法門棄物生無補於世而 致君澤民之效無越於此矣諦觀宋濂溪之學實出 身廓然大公斯則人心自正世道可追而 聖祖開萬世太平之業讀護法編 天眷其於 社稷蒼生引領

叉

章耳則不必也今以後寄底本覆上若早刻一日則 之見者大同亦不敢更增染汚其於碑記序交特女 受評盡無遺此古今絕唱一書非他掇拾乙此今但 法門早受一日之惠也山層向讀 就宗門諸大老塔銘中者以正見正行爲主如居士 法深心無字不從實際流出其於教法來源顯密授 部足見昭代開國君臣一體亦古今所未有也惟居 佛教及諸經序文幷南京天界報恩靈谷能仁雞鳴 所取大今於臺端頭身寫出不獨文章之妙其於寶 其人則根器師資悟門操行建立王若末後一著尤 護法蘇即禪宗之傳燈和其所重在具宗門法眼觀 集成一書以見 五放建寺中各有 唱祖護法之心若同此錄共成 欽錄簿中所載要緊事蹟意要 高皇文集有關

又

士乘此留意一尋最爲勝事實山僧所至願也

贊歎顧捨所居而已此何時也求安且不暇又何以所切心不待今也養老社盜自慧誠首座願力山野犀手教委悉近況且述眉公札中末後句此山野久

又

以告

片亦心耳荷材具不充何敢言天下大事哉此山野 屬望者第自端其具孰與於諸公耶其所存者特一 事哉即如東坡亦文章氣節耳惟今居士乃一時所 於胸中如范蠡子房武侯進退裕如豈以空談爲寔 具兩全者維其人哉故古之建不拔之功者皆預定 操有必可爲之具不用則巳用必見效即如當世才 本而欲貴其寔豈非過耶故古之忠臣有一定之材 其發言議論有能一定戡亂扶危之識見者乎無其 者即其人也万今目中天下人物有一於此者乎觀 不易如文信國明之孝孺諸公生性一定而不可奪 果敢習氣剛方中正確乎不可拔者勘定大事堅持 公即其人也三則亦自般若願力中來員多生忠義 心審處諸公可爲之事業。而能爲之至若戡亂扶危 向者切切望居士深所養者此耳以老朽觀居士之 用如探囊中百發百中此留侯諸葛與平原忠定諸 內稟般若靈根外操應變之具先有其本及臨時運 同時英雄皆其人也二則天生應運匡扶世道之人 現非妄想思慮計較中來無論在昔即如我 聖祖

大手作略豈爲以顧面從人而以驅命付之爲得耶就相時而出一見便爲如蒼鷹拏兎不留影迹方是能覺以知居士將有出山之意故特遣訊幸緩前級其具幸無以驅命付之爲全策也天下皆迷豈一呼其具幸無以驅命付之爲全策也天下皆迷豈一呼其具神時不必有意或就大業萬勿輕脫若素養已報,相時而出一見便爲如蒼鷹拏兎不留影迹方是被何辦以爲之是豈旋旋從中煅煉而能者耶即今

叉

高明以爲何如

唐得居士去秋出山手書云養身有待數語極慰都 官得居士去秋出山手書云養身有待數語極慰都 官得居士去秋出山手書云養身有待數語極慰都 實處心所謂大道之妙難以言傳耳山野年來衰病 一种意非久處人世者此生無復再晤之時矣言之 一种意非久處人世者此生無復再晤之時矣言之 一种意非久處人世者此生無復再晤之時矣言之 一种意非久處人世者此生無復再時之時矣言之 一种意非久處人世者此生無復再時之時矣言之 一种意非久處人世者此生無復再時之時矣言之

逃書之一也惜乎早逝音尾関数行南之行所得印心弟子一人為馮昌地者即四先生法之心如居士者指不再屈豈持金剛幢耶山野嶺

與徐清之中翰

復段幻然給諫

能自決耳前云曹溪亦不可隱若以地言之誠不可

所試至若奉佛定業之訓生平蓋有年矣今不幸垂思世顧為法王之忠臣慈父之孝子此非虚談蓋有辱問慮於山僧者情何至也山僧人雖草木素抱懷

是我国切且来在山僧有不能奉教者五故趦趄不 是我国切且来在山僧有不能奉教者五故趦趄不 是我国切且来在山僧有不能奉教者五故趦趄不 是我国切且来在山僧有不能奉教者五故趦趄不 是我国切且来在山僧有不能。 是我国切里。 是是此五不能也老居士之愛我 我為奇貨且老特不字此四不能也老居士之愛我 我為奇貨且老特不字此四不能也老居士之愛我 是我国切里。 是此五不能也老居士之愛我 是我国切且来在山僧有不能奉教者五故趦趄不 是我国切里来在山僧有不能奉教者五故趦趄不 是我国切里来在山僧有不能奉教者五故趦趄不 是我国切里来在山僧有不能奉教者五故趦趄不 是我国切里来在山僧有不能奉教者五故趦趄不 是我国切里来在山僧有不能奉教者五故趦趄不 是我国切里来在山僧有不能奉教者五故趦趄不 是我国切里来在山僧有不能奉教者五故趦趄不

必爭者此無憂者二也然道場今已千年慶經更代

者一也然山雖不深而地處偏安即天下大亂乃不

以海寇為憂然曹溪去海將千里揚凱不至此無憂

隠若以理揆之此老居士所未知也然云不可隱者

生乃死此無憂者七也聞之忠者以身殉國若死於 不必待他人此無憂者六也且六祖道骨如生乃法 越即現在之山田可耕蔬菓可食不必遠求於此亦 不必投入此無憂者五也然所養膽不但舊日之檀 家不勞遠逐終南此無憂者四地且曹溪之兒孫皆 林生平功業惟存此一事色色皆我之固有往如歸 爲護法無憂者三也且祖庭禪堂乃山僧所興之叢 封疆則死且不朽今山僧願爲法王之忠臣以佛祖 身常住若依此中則與法相依爲命若法身壞而柔 山僧作養之弟子今彼思我如慈父往則如父視子 超之靈捨管地爲供贈田至今爲黃巢莊是以魔王 大亂不過唐之五季而黃巢最慘且親兵至此感六 使佛法不斷山僧於此縱遇大亂即定業難逃死且 之無益若於曹溪以一日之暇開導來學以續慧命 **慧命爲重若在匡山眞非逸老之地即守定業亦死** 可不幸哉況遠五可憂而得七無憂抑乃取之於固 不朽政若以身殉國者死於封疆則死亦得其所矣 有又何懌而不爲耶彼中方伯監司已三致書請回

> 流言悚聽也惟心諒之 大教故敢一一備陳奉慰護法之深心萬萬不必以 皆情不得已應命而住誠恐老居士聞之以我有違 山三年矣今本府具書出帖差價來請。坐守於此山

答袁滄孺使君

幸甚幸甚且云但於天如淨土遠近如想天竺之喻幸甚幸甚且云但於天如淨土遠近如想天竺之喻未決然此喻原不親切至引夢喻最切且又未分別未決然此喻原不親切至引夢喻最切且又未分別未決然此喻原不親切至引夢喻最切且又未分別為過程。
一學幻又云生死涅槃循如昨夢又云淨穢隨心又云夢幻又云生死涅槃循如昨夢又云淨穢隨心又云夢幻又云生死涅槃循如昨夢又云淨穢隨心又云夢和經濟想納則變穢土而為淨土矣如人想淫則故念念淨想納則變穢土而為淨土矣如人想淫則治然想有染淨皆生死本故曰一切世界惟想所持然然想有染淨皆生死本故曰一切世界惟想所持然然想有染淨皆生死本故曰一切世界惟想所持然然想有染淨皆生死本故曰一切世界惟想所持然然想有染淨皆生死本故曰一切世界惟想所持然。

「學有欲事然欲事雅版在夢不無即以為遺若人自夢有欲事然欲事雅版在夢不無即以為遺若人自身。」

要心到若是專心念佛念念觀想淨土境界久久純 之則淨土遠近可知矣然五臺尚要身到而淨土只 人但在雪山中行及後到五毫儼如昔所想以此觀 熟則現前日用步步頭頭如在淨土中坐臥經行即 因而切切想住此山因而日夜想之久久但見目前 唯心之旨山野少年聽華嚴經聞五臺山萬年冰雪 步頭頭皆是淨土如此豈有十萬億之遙耶然經說 華會上三變娑婆而爲淨土要指目前日用行履步 耳若言唯心即華藏亦是唯心況極樂耶請以近喻 土有極樂國乃阿爾佛所居實報土令人知所歸向 十萬億者乃佛指華藏世界娑婆之西越十萬億佛 娑婆是穢土深生厭患以不了即穢是淨故佛於法 見之是清冷之水餓鬼見之而爲火是以二乘人見 純 故曰想澄成國土然婆婆穢土全是衆生染想感結 設所以佛說唯心海土者專在一念淨想所感變耳 即爲實事此則淨土但在夢覺之分豈有近遠之實 座雪山經行坐臥皆在此中縱經間市亦不見一 穢惡而蠡髻梵王見之純一海土正如恒河人

佛方稱大學此乃明言具載華嚴經明明證據只是 默然自信如人飲水自然精進矣來云久在台宗今 自心試驗生淨土準不準只在一念亂不亂上看則 是一心不亂是究竟語其實此語亦不易到老居士 從來說者未會拈著老居士於此會得則淨土遠近 夢中佛事故八地菩薩如夢渡河猶未存覺直至於 之說不是譬喻乃是實話以菩薩修行乃至七地以 實地非是說道理也只是要一念淨想純熟博換 則 前皆未破無明之夢一向教化衆生成就得土皆是 遠耶此所謂生則決定生去則實不去乃是眞眞實 便登極樂國如前夢境無異如此豈有十萬億國之 耳聞一切音聲皆是念佛之聲矣如此念到命終時 過穢想則自然變穢邦而成爭士矣然生淨土 佛與諸菩薩親來接引神識安然直隨佛往生當下 精進不亂目前但見淨土境界或蓮花現前阿爾陀 切疑淨盡無餘矣然念佛法門彌陀經中所說只 — [4] 世閒雜念都不現前惟有 一念阿彌陀佛則 一如夢

要淨土台宗三觀和會此事妙宗疏最是分明台宗

more of the time total test to a dette with a

Y

無震災不是只想著話頭為提心馬鳴云心體離念 富急時也但參究工夫一向都說提公案話頭若大 京三夫做出但於中用心有多不同今時說提話頭 頭工夫做出但於中用心有多不同今時說提話頭 頭工夫做出但於中用心有多不同今時說提話頭 可工夫做出但於中用心有多不同今時說提話頭 可工夫做出但於中用心有多不同今時說提話頭

出生死的時節也近世不知向放下處求難念一著

死死執定話頭故返增障礙加之更起種種思想先

嚴故不得受用耳百千方便惟有放下一著最省力

當此省力處做則日用念念即真實受用也高明省

以未經說破放下一著也只被立妙習氣影子作障

存立妙知見此是障道根本即老居士参究心雖切

團則本來面目自現即此便是一念真無生意也學

人但得此一念無生現前則一切處得大受用乃是

等處空界又云雕念境界唯證相應以心體本來離 等處空界又云雕念境界唯證相應以心體本來離 中期自孤更向此孤處快著精彩直追忽然迸裂疑 中期自孤更向此孤處快著精彩直追忽然迸裂疑 中期自孤更向此孤處快著精彩直追忽然迸裂疑 中期自孤更向此孤處快著精彩直追忽然迸裂疑 中期自孤更向此孤處快著精彩直追忽然迸裂疑

Z

與袁公寥

會謂自古豪傑之士能建大功立大業者皆自忍辱中來即成佛亦以忍行為第一故曰無生法忍一切中來即成佛亦以忍行為第一故曰無生法忍一切此至韓信張良傳見其人能建大業看他畢竟從何處來因細辭其行事忽於淮陰市上受惡少胯下之處來因細辭其行事忽於淮陰市上受惡少胯下之處來因細辭其行事忽於淮陰市上受惡少胯下之處不因細辭其行事忽於淮陰市上受惡少胯下之處來因細辭其行事忽於淮陰市上受惡少胯下之處來因細辭其行事忽於淮陰市上受惡少胯下之處來因細辭其行事忽於淮陰市上受惡少胯下之處來因細辭其行事忽於淮陰市上受惡少時下之。

與周海門太僕

金剛正眼一為照破暗冥又為此法大助緣也皆已梓行,託汝定請證惟瑯琊山中野狐潛踪敢乞明直指之宗若楞伽楞嚴法華三經大翻文字窠臼概毫即向上一著亦不堪舉似向人所幸於教眼發

與賀圅伯戸部

一心遊泳智海觀察流注妄想久之澄徹淵源是則借心遊泳智海觀察流注妄想久之澄徹淵源是則借他遊綠為進道之資矣所不足者苦無明眼知識相伴提斯恐於文言滯礙大段此事以教印心如蜂探伴提斯恐於文言滯礙大段此事以教印心如蜂探伴提斯恐於文言滯礙大段此事以教印心如蜂探門當此妙齡精力有餘能蚤收攝如此不唯蹈大方言冥合眞心矣政不必以不會作障礙也公賦性高言冥合眞心矣政不必以不會作障礙也公賦性高言冥合眞心矣政不必以不會作障礙也公賦性高言冥合眞心矣政不必以不會作障礙也公賦性高問途且爲福壽之資天之所以成公者大矣幸自保理。

答吳觀我太史

中安居殊未易就投閒入山而返爲山累衰朽之年吳越之緣草草了事以不耐應接故即歸匡山而山

方矣黨有緣徐會一談亦此生之餘幸也太即都子中真心實行者亦不易見奈何法門澹泊太即都子中真心實行者亦不易見奈何法門澹泊蟲已淨繼者果得人乎法門寥落不但明眼宗匠難蟲已淨繼者果得人乎法門寥落不但明眼宗匠難

又

年來山居雖與世遠每閩東西多警不無驚心然在 者事惟老居士心棲爭土能無悲懷耶天造大運惟 者事惟老居士心棲爭土能無悲懷耶天造大運惟 者事惟老居士心棲爭土能無悲懷耶天造大運惟 我 聖祖德侔三五功超百王 社稷靈長當享無 此回望興盛之時難再得心切念華嚴一宗為吾佛 此回望興盛之時難再得心切念華嚴一宗為吾佛 根本法輪清涼爲此方著作之祖其疏精詳真萬世 根本法輪清涼爲此方著作之祖其疏精詳真萬世 宏規且鈔文以求全之過不無太繁敢使學者望洋 宏規且鈔文以求全之過不無太繁敢使學者望洋 宏規且鈔文以求全之過不無太繁敢使學者望洋 或未及的指說者之意心切飢此大法失傳其如將 或未及的指說者之意心切飢此大法失傳其如將

A 4 person 4 A 4. 4 5

無人矣山野自少留心於此法門今嗟老矣掩關山中注意研窮欲單觀疏文提挈綱要去繁取簡務明中注意研窮欲單觀疏文提挈綱要去繁取簡務明明本文以爲易了雖不能如識之宏肆而因疏明經明本文以爲易了雖不能如識之宏肆而因疏明經但取脈絡貫通亦不敢附養此亦山野老年作懺悔但取脈絡貫通亦不敢附養此亦山野老年作懺悔。且爲來者申法供養耳前二年因病不能致力幸。且爲來者申法供養耳前二年因病不能致力幸。」

V

公之深心於法門,有王蠋存齊之意觀末後踞華座公之深心於法門,有王蠋存齊之意觀末後踞華座

答吴生白方伯

曹溪僧持法旨至拜展三復深凊尊慈所以念祖庭 起着為山僧漂零苦海二十餘年今幸投老匡山 以境幽心寂諸妄皆息無復他念矣令仰體尊慈以 超庭法道為心誼不容已但匡山道場迺諸宰官檀 越特為山僧建立為逸老地經營尚未結局難以經 成若安頓不妥大負一時信心有所不忍以此趦趄 成若安頓不妥大負一時信心有所不忍以此趦趄

答李三近

而鳴若夫木石則徒勞耳若夫靈雲見桃花而悟道力乃本分功純遇綠觸發啐啄同時譬之鐘鼓應擊也助發耳至若一鍼一鏡即能透悟者此非師友全來云修行感賴師友自古皆然要之力行在已師友

在操志不剛次則我見堅固有此兩者如病者忌醫香驗聞擊竹而明心何借師友哉大都學道人之病

答沈大潔

則盧扁束手矣

鄭白生來云足下有薙髮之志鄙意未敢心然不意 製的生來云足下有薙髮之志鄙意未敢心然不意 與所許此菩薩助成心覺來問六則惟首二條為急難欣許此菩薩助成心覺來問六則惟首二條為急難欣許此菩薩助成心覺來問六則惟首二條為急難欣許此菩薩助成心覺來問六則惟首二條為急

答郭干秋

本以令師塔銘見委愧昏耄疎陋不足以當盛意但本法門所係甚重誠不敢不申讚歎又不可以充唐古之僧史別傳則有禪師以六祖之下五宗血脉爲古之僧史別傳則有禪師以六祖之下五宗血脉爲正有法師以賢首淸涼天台教觀爲主有神僧以佛上有法師以賢首淸涼天台教觀爲主有神僧以佛上有法師以賢首淸涼天台教觀爲主有神僧以常盛意但

5

The state of the s

参出で古本

序

嶺南弟子

刻方册藏經序

憨山老人夢遊集卷第十九 憨山老人夢遊集卷第十八 惟高明裁之黨不可采不刻可也 節生平以念佛爲法門當與遠公並駕宜在高僧之 列乃敢略載其正行以取信為主始非敢妄意貶損 聞不敢以處飾有累實德故單取本色住山苦行清 也令師清修苦行山野仰慕久矣覧持來行似非所 公高操爲主四科之外其餘建立有爲功行者不與

門 侍 者 劉起相 温 炯 通 善 重較 編輯 日錄

覺而可流通者哉今所傳者特大小化身四十九年 法也以法界無盡身雲稱性而演普門法界修多羅 法者隨方建立曲就機宜故日或邊地語說四諦或 西夏流來東土者又貝多之一葉耳付屬流通諸弘 猶不能盡其名目量出少分釐爲三藏二十部廣布 三百餘會 隨俗語說四諦或現已身或現他身或示已事或示 塵說利說熾然說斯豈紙墨文字而可涯量見聞知 隨機施設方便法門集之龍宮六通大士

許以金色界未幾諸綠畢集越庚寅秋幻余本公問 本二公從赴清凉以卜居質疑於曼室大士即蒙印 未開荊榛未闢意將有待而然也日而達師西遊開

人說

復何言嗟夫人情之惑久矣。迷方者衆顧玦數學而

方便第恐執梵筴而致疑者煩頻解之至詳且

。恭夫

為大

不從此法界流也且口方册類俗諦固以流通

字官長者居士綠起語備殫始末字字真心信乎無

稽首再拜受之喜徹殿心法香熏偏毛孔及讀諸大

余來入海印出所刻棗柏大論若干卷示清力焚香

不能悟一愚羽況大道乎嘗試論之始吾佛聖

樂歡喜者今所化之機有四衆計絕白之分若牛緇 又何以令諦信令人人由之而悟入耶況衆生有種 切衆如我等無異非此又何以見佛身了自性出苦 林昧之久矣故世尊自矢之曰我本立誓願欲令一 一惡竹兵如黃花般若斯又是區區華梵可分紙氈 角而白毛能化之法者獨擅是則投繼而拒白其猶 種欲種種好樂苟弘法者順其欲投其所好無不信 得樂住佛所住以適其願耶以此而度非隨順方便 佛真法身一切衆生自性也悲夫人者沈酣衆苦稠 故順之則依逆之則違此常情耳今夫斯藏所詮乃 機宜應以何身何法而得度者即隨所應而度脫之 爲是非信子是謂朝三也是以世尊利物妙在隨順 路復何怪哉藉令始也契書華筴而梵策又以彼此 長短可較嚴雖然語固有之人情安於常習惑其希 綠即宗至若水流風動器演圓音鳥噪遠吟皆談不 所現故世諦語言資生氣等皆順正法法本無住遇 同具生身各各法門無非毗盧遮那海印三昧神 種種所行皆菩薩道觀夫雜花所出諸善知 - UIII

以知其然耶嘗試觀夫世智辯聽率多殉耳目陸沈 役也吾輩且息肩其循庖人不能治庖尸祝將越尊 門所擊九鼎一絲外患內憂猶楚入郢悲夫悲夫當 維多則惡重惡重則智輕智輕則根鈍學皆是也何 此欲令人人而得度復何望哉且眞丹云多思維思 取角而棄毛何其一體異視而示吾法之不廣也如 大而響齊故 自顧所積何如耳聞之大塊噫氣萬竅怒號由其聲 俎而代之也以彼易此兩其無幸哉雖然勿謂無人 如此故吾觀眞諦眞諦不有吾觀俗諦俗諦不無是 者豈非地涌之衆親受付囑而來耶不然何以勇健 遠且大矣睹其金湯外護高深堅利若諸宇官居士 **雷秦庭之哭眞有敗軍拔轍之意其恢復法界之圖** 是時也執能力起而振教之若大師者斯刻之舉不 死良亦可痛況茲末法奉教例多俑人豈稟鈍根 去此取彼即般若內重又道不勝習奈之何躊躇生 欲泥別有靈根宿植負英傑之氣者大都發於功名 斯藏之役將計日獻捷斯刻之功將浩劫而不窮直 一唱而萬和同聲相應豈成虛語是知

然不增不減試將以此廣大法炬偏週沙界窮未來 方便之最上第一義諦廣大威德法門也或曰方冊 端觀毗盧於當下斯可謂人天共仰真俗交歸隨順 流通者譬若分燈即大地俱焚會未擇薪而本火固 減敬將無慢法之罪耶予日性性湛然般若圓明諸 使人人因之而見佛物物以之而明心睹法界於毫 際燒盡闡提即使衆生界空而本法循湛然常住也 劒不利怯弱不敢先登敢辭執鞭之後 一公勉矣前旌嗟予小子惭愧形服以禪弓不張慧

是則南海爲禪道佛法根本地也夫何千年以來道 達贈航海西來由至五羊而入中國盧祖崛起新州 化不敷宛若佛未出世時不知三寶爲何物始予蒙 衣鉢終止於曹溪般刺臂裹楞嚴房公筆授於制止 紹公發心結社效東林故事專修淨業十餘年來如 若識佛性義當觀時節因緣也於時淨慧弟子喬宗 而法性諸弟子率爲上首不數年閒教化大行信乎 恩以逆緣來因開法於青門一時緇白翕然歸向 淨慧寺喬宗紹公請方册大藏經序

> 佛如鑿井之人今請大藏若指珠之親友也若各得 賴親友指示使自披襟而得利益是則公之結社念 利人天適予初歸曹溪公作禮拈香具白其事予聞 之耳如是展轉無窮將見迦維之化周偏炎海之爾 利濟之益要在人拂襟解帶之閒非公與之實公指 無形必呼而後應又如貧子衣底之珠味而不覺須 侍別求本自有之雖然水固本有必鑿而蒙潤響雖 而喜曰佛性之在人心如大地之水空谷之響此不 日也頃者公以教化未廣見聞不博願請大藏普

較其功德豈可得而思議耶

大藏教五時三乘聖凡真妄迷悟因果疑法無遺修 首楞嚴經者諸佛如來大總持門祕密心印統攝 導矣判教者局於一時一教豈非管閱盡測哉自入 果可謂徹一心之原該萬法之致無尚此經之廣大 證邪正之階差輪週顛倒之情狀了然目前如觀掌 總備者如來以一大事因緣出現世別捨此別無開 中土解者凡十餘家如會解之外近世編白各出手 首楞嚴經通議序

文字爲障不能融入觀心猶以爲缺故予久有通議 究竟不離三觀以提大綱但以理觀爲主於文則略 閔此經一夕於海湛空激雪月交光之際恍然大悟 之嘆余昔居五毫米雪中多死向上以此經印證堅 辨之意所謂議其條實而通其大綱是於向上一路 夏粤門人超逸侍予最久甘苦疾病患難靡不同之 鏡一卷乃依一心三觀融會一經關迷悟不出一心 凝正心以炤爥之豁然有得及至東海枯坐三年偶 入室請益懸鏡觸發先心遂直筆成帙廣發一心三 **醞籍胸中及投炎荒雖波流瘴海而一念不忘者二** 如華嚴法界之設意在得養而言可忘也說者又以 忽身心世界當下平沈如空花影落是夜秉燭述懸 未見會通故言句雖明而大旨未楊學者未免摸象 觀之旨題日通識蓋取春秋經世先王之法議而不 十餘年萬曆甲寅投老南岳寓靈湖之萬聖蘭若結 蘊又何俟蛇足哉但歷覧諸說有所未愜者獨理觀 眼而宏通者非一披文釋義靡不多詳精確發無餘 實以爲贅其於初機之士可以飮海一滴而吞百川

民族、中国 (1) 中国 (1

妙法蓮華經通義後序

會其義明年冬予赴南岳故人之請遂去專至衡陽 忍初學難窺越壬子歲身弟子衆請益仍爲品節以 及至神力後八品古判為流通子深見其非也遂以 現實塔品了然如睹家中故物即信此爲示佛知見 請述楞嚴追議葊成衆請就講演一周逸輩復請述 知有宿因也够弟子通岸超逸二人相從先於甲寅 成欲鎮之未就夜夢一僧告予曰何不云墨華覺而 止於靈湖之萬聖寺一二護法爲詹安居於寺右落 通一經始終之旨法門閒有許可者予以文遠義夷 者各各踊躍歡喜罷講請筆之因爲擊節遂以四字 開示悟入四字判其全經後乃入佛知見也時會聽 **閒集弟子數十輩諷誦法華以了前願衆請講演至** 申三月至行閒越戊戌乃結法社於五羊青門壘壁 南行過龍江師候別予於江上告以許經之故予丙 難報初意其必死乃對佛爲許誦蓮經百部祈庇予 觀大師與予期禮曹溪乃先遲予於匡廬及聞予罹 有礙眼無幾何乃因弘法上屬 再於實相之旨恍然不疑猶於經文言未大透徹似 聖怒遣戍雷陽達

法理演義將會品節以通全經也予自念老朽無量法理演義將會品節以通全經也予自念老朽無量於乙卯六月朔屬草至八月朔擱筆但宗華嚴始終於乙卯六月朔屬草至八月朔擱筆但宗華嚴始終於乙卯六月朔屬草至八月朔擱筆但宗華嚴始終此以大事因緣之本懷其後六品判爲入佛知見雅世以大事因緣之本懷其後六品判爲入佛知見雅世以大事因緣之本懷其後六品判爲入佛知見雅世以大事因緣之本懷其後六品判爲入佛知見雅世以大事因緣之本懷其後六品判爲入佛知見雅世以大事因緣之本懷其後六品判爲入佛知見雅世以大事因緣之本懷其後六品判爲入佛知見未必無助為所以主義,

合刻法華文句記序

後之覽者理觀分明由觀以達諸法實相悟佛知見 之說觀者了然自信其於佛之知見躍然而入得此 相之旨顧顕十万佛土中惟有一乘法無二亦無三 是九旬談妙故有立義文句口授門人章安記之唐 昧也非子莫證非我莫識自是大師以三觀釋經於 親見靈山一會儼然未散求證南岳岳日此法華三 三百餘年無能識者天台智者大師持此大經一日 化身既隱此法獨存千年之下大教東來此經流傳 上方信佛心始有歸家之分一一授記豈細事哉及 出世本懷嗟乎衆生垢重信之者希況入之乎是以 其於入佛境界是猶乘萬派順流而入於海固無難 公深悲末法理觀之不明以覺公原稿合刻於經使 記義有未盡紹覺法師通會一律草成未行智河行 經記各刻學者智男難於會通前有會立籤而略句 開示無餘蘊矣即以觀心而見佛心豈假外耶向以 有荊溪釋籤以發其趣意指百界干如備彰諸法實 靈山一會英傑之士猶費藏擊四十餘年至法華會 質相普令衆生知此見此同八平等法性万稱如來

> 定位大師舊判經後八品為流通分子少從壽書即 有疑焉及住山多年偶為學人演說至現實塔品代 情示佛境界即以此為示佛知見出以開示悟入各 從品目則以後六品為入佛知見此似與流通相左 從品目則以後六品為入佛知見此似與流通相左 從品目則以後六品為入佛知見此似與流通相左 以左而義實符學者苟不以人廢言了此則誠不敢 是今非古以啓謗法之罪也居士額廣階發心力荷 是今非古以啓謗法之罪也居士額廣階發心力荷 是今非古以啓謗法之罪也居士額廣階發心力荷

重刻心經直說小引

在文群軟佛言願乳不成醍醐特爲不信者言之耳 是不為楚南鄙其俗能敦詩書者則爲上至佛法則 是不未叫予隱南岳會參知馮公守茲土邀予過遊 從來未叫予隱南岳會參知馮公守茲土邀予過遊 從來未叫予隱南岳會參知馮公守茲土邀予過遊 從來未叫予隱南岳會參知馮公守茲土邀予過遊 從來未叫予隱南岳會參知馮公守茲土邀予過遊 從來未叫予隱南岳會參知馮公守茲土邀予過遊 從來未叫予隱南岳會參知馮公守茲土邀予過遊

金剛決疑解序

殿若真智為衆生佛性種子各各具足而不知故我 世尊特為此事出現世閒而開示之欲令悟入以脱 世尊特為此事出現世閒而開示之欲令悟入以脱 言習氣深厚動則隨語生解潛起意言分別是以隨 之法不涉名言思議而常情所執我法封蔀向以名 之法不涉名言思議而常情所執我法封蔀向以名 之法不涉名言思議而常情所執我法封蔀向以名 經為入大聖之初門以拔二乘偏空之疑滯以實相 擬為入大聖之初門以拔二乘偏空之疑滯以實相 類空為宗以斷疑生信為用空則空其所執之情信 」。 即信其本有之智以空故行無所住信則心無所疑 般若真智為衆生佛性種子各各具足而不知故我

智相應耳於是恍然了無剩法始知其疑不必拘其

分別如宗門所謂截斷衆流直使纖疑淨盡方與本

般若立旨燦然若眡白黑矣門人如釋法性弟子超

經文以爲破敵之具如此始終一貫直至情忘執謝

一十七則即於隨聞所起言外之計預揭於前則本

說隨起延情處當下剛絕不容擬議搏量以破意

夫得意忘言又在其正眼者決不作區區文字見也見聞隨喜同悟般若之正因以為歷劫金剛種子若透通燗各捐資重刻以廣其施余因序其始末將冀

刻金剛決疑題辭

表學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 養學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 養學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 養學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 養學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 養學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 養學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 表學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 表學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 表學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 表學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 表學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 表學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 表學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 表學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而 表學執签失指從前得意忘言者希子自幼能誦而

春秋左氏心法序

夏罰以秋冬蓋象天地之生教而順布之故春秋者夏罰之名也質罰明而人心覺覺則知懼故曰孔子成春秋而亂臣賊子懼周道衰諸侯僭禮義亡而綱成春秋而亂臣賊子懼周道衰諸侯僭禮義亡而綱成老於人之不淪於禽獸者鮮矣天生德於仲尼蹶然此形因魯史以見志故曰吾志在春秋春秋云者亦臣賞善罰惡云爾善惡之機隱而彰實罰之權志而自賞善罰惡云爾善惡之機隱而彰實罰之權志而自賞善罰惡云爾善惡之機隱而彰實罰之權志而與及諸心而知懼一懼而春秋之能事畢矣由是親則反諸心而知懼一懼而春秋之能事畢矣由是親則反諸心而知懼一懼而春秋之能事畢矣由是親則反諸心而知懼一懼而春秋之能事畢矣由是親以春秋者聖人質罰之書也何名乎春秋古者賞以春春秋者聖人質罰之書也何名乎春秋古者賞以春春秋者聖人質罰之書也何名乎春秋古者賞以春

學之無聞特據愚見著爲是編書我高皇帝以春

之丘明之心即仲尼之志也不求其心而求之事與 也易治之於未萌春秋治之於既亂易言神道之吉 經聖人之言也易尊卜筮春秋尊君父皆聖人之言 畏畏天命畏大人畏聖人之言畏之爲言懼也卜筮 其好言鬼神卜筮之事斯言過矣孔子曰君子有三 凶以懼之於幽春秋言人道之賞罰以懼之於顯二 鬼神吉凶之先見善惡之昭明天命也君父大人也 者畏之以爲天命而不知悔之以爲異悲夫左氏之 所始所謂俟諸聖人而不惑質諸鬼神而無疑者知 以春秋之事詞闡易之旨其所深識者違小蔑配與 韓宣子聘魯見易象與魯春秋日周禮盡在魯矣吾 者相須如衣之有表裏如木之有根株豈有異哉故 詞之閒無當也先儒有言左氏藝而富其失也異譏 年東詩書從竺乾氏業將移忠孝於法王慈父也旣 心不明而聖人之志隱亂臣賊子復何懼乎某以丁 僭君叛父同歸於敗善惡必稽其所終禍福必本其 今而後知周公之德與周之所以王誠知言也左氏 因弘法羅難幾死 部獻蒙 恩宥遣雷陽置身行

子也天命之矣因內訟徳尤究心於忠臣孝子之實 其本也觀其所載列國及諸大夫之事委必有源本 偶讀春秋忽於左氏之心有當始知異之爲言未探 也非仲尼之心法也千古出世經世諸聖人之心法 伍閒不復敢以方外自居每自循念某之爲孤臣孽 夫婦朋友人倫日用之際而因果森然固不待三世 其始爲因其卒爲果如華實耳不出君臣父子兄弟 也何以明之心者萬法之宗也萬法者心之相也死 身處地每於微言密旨欣然會心輒援筆識之勒爲 必有末吉凶賞罰不謀而符俯而讀仰而嘆不啻設 心春秋扶植三綱申明九法而總之所以傳心易之 生者心之變善惡者心之迹報應輪迴者心之影響 而後見也楞嚴殫研七趣披剝羣有而總之所以澄 吉凶利害憂處悔吝楞嚴之四生十二類生天墮獻 一書命日左氏心法非左氏之心法也仲尼之心法 而已乃獨以左氏爲異豈不冤哉某用是深膩憫末 左氏之與亡善敗與奪功罪總皆一心之自爲感應

亡者有知爽然知聖人賞罰之微意以服其心後世 國之事無與者則略而不錄恐其枝也以意在心法 重在一條但以當國爲主或事在彼而始於此或始 之重輕有一世二世而斬者有三世五世而斬者有 於襄百七十年左氏因而於始之此其凡也暨於一 以魯先之如伐鄭之事仲尼之本意也背於桓而服 夾輔周室故晉主盟而魯主會凡討罪必害公如晉 於彼而終於此者不避混淆併載以見其因果若他 響之徵鬼幹幽明死生之故隨事標旨據案明斷使 國奧亡之所係一人善敗之所由得失之難易功罪 之首以親非以功也天王命二文專征不庭命魯公 百世配而不絕者皆令皎然如眡黑白其中報應影 也五霸錐假其意在於宗周也晉乃宗藩故列五伯 本末某服膺聖訓惜未見其書籍師其意妄以王覇 學傳藻等纂分列國而類聚之附以左傳名日春秋 秋本魯史而列國之事錯見難究始終乃命東宮文 一途通纂爲七傳周王道之大統也魯王國之宗臣

刻起信論直भ後序

第一義論嗟乎衆生之迷也固矣當佛入滅未久而為教何莫而非直指一心之法耶但衆生根鈍惟佛嚴教何莫而非直指一心之法耶但衆生根鈍惟佛太慈悲放婆心太切曲垂方便種種開示無非指歸大慈悲放婆心太切曲垂方便種種開示無非指歸大慈悲放婆心太切曲垂方便種種開示無非指歸大慈悲放婆心太切曲垂方便種種開示無非指歸大慈悲放婆心太切曲垂方便種種開示無非指歸

2717月五日ご言を一し

此豈真究大事者哉予蚤年即乘講義初聽諸經不 發明性相一源之旨如白日麗天而後學竟不一觀 之偏執圭山著禪源詮以一之永明又集宗鏡百卷 哉嗚呼西域性相之執馬鳴旣力破之即此方教禪 之指南一心之朝鑑視爲文字而讎之記非大迷也 教乘甘蜜愚迷固守偏執爲必當即此一論乃教禪 心但執文言爲究境多禪者緊以盲修爲向上痛斥 墮落邪見以破壞正法耳夫何近世親教者不務明 指楞伽以印心所以然者正恐末世修行正眼不明 印之宗師乃宗楞伽以著論達摩乃禪宗之鼻祖亦 會一源引三乘而執至極約及萬言即屬至復起亦 立門庭甚至分河飲水其來已久當六百年有馬鳴 不能增一語可謂修行之圓鑑也嗟夫馬鳴爲傳心 知爲何物切志多究既性地一開回視文字真似推 大師出蹶起而大振之乃宗楞伽等百部大乘奧義 著起信論以破邪執大開一心法界之門攝性相而 執爲已見自滅正法況其他乎故西域性相二宗各 邪見横興破壞正法無論外道即佛弟子親習權乘

之正因種子也且參禪動以難心意識既能難心意 門落臼於楞伽則有筆記於楞嚴則有懸鏡是皆即 此論舊遵賢首疏而長水記更繁衍學者望洋杳莫 非學者之過良由節承正眼不明妄執已見之過耳 識求向上豈不能難文字悟言外之旨乎法門此繁 守妄想增長我慢爲參禪又不若親持經論爲般若 字而執落組機緣爲向上機緣豈非文字耶予謂固 可誰何無怪乎視馬鳴龍樹圭峰永明爲門外漢謂 不師古參禪者概以予爲文字師予雖舌長拖地莫 教乘而指歸向上一路奈何世之習教者概以予爲 故祖疏義爲直解就本文而疏通之直欲學者從此 末法之大關鍵也此解見者多喜其直捷既刻之於 可究予向纂舊疏去繁就簡爲一貫既而語似欠顧 嶺南安成今復刻之新安其倡導助綠者皆一時四 衆法侶也 一大藏經爲揩膿涕帋也且斥發明一心之說爲文 門而入則教可離言得義而禪亦不墮邪途是救

註道德經序

文簡古而旨幽玄則莊實爲之註疏苟能懸解則思 龍聖不自聖豈無謂哉故老以無用爲大用苟以之 得義遣言因言以見義或經旬而得一語或經年而 經世則化理治平如指諸掌尤以無爲爲宗極性命 論則駭俗故爲放而不收也當仲尼問禮則嘆爲猶 義此立言之本也故莊之誹薄殊非大言以超俗之 宗於仁義老宗軒黃道重無爲如云失道德而後仁 故不厭貫通要非技心嘗謂儒宗堯舜以名爲教故 五年乃能卒業是知古人立言之不易也以文太節 得一章始於東海以至南粤自壬辰以至两午周十 過中矣空山禪暇細玩沈思言有會心郎託之筆必 得為因謂註乃人人之老莊非老莊之老莊也以老 爲文若與之角則義愈晦及熟翫莊語則於老忧有 子少喜讀老莊苦不解義惟所領會處想見其精神 非國矣或日子之禪貴忘言乃曉曉於世諦何所取 金雲泥自別所謂真以治身緒餘以爲天下國家信 爲真修即遠世遺榮殆非矯矯荷得其要則眞妄之 命脉故略得離言之旨及搜諸家註釋則多以已意

> 以尚之者衆故施不厭普矣 以尚之者衆故施不厭普矣 以尚之者衆故施不厭普矣 以尚之者衆故施不厭普矣 以尚之者衆故施不厭普矣 以尚之者衆故施不厭普矣 以尚之者衆故施不厭普矣 以尚之者衆故施不厭普矣

紫栢老人全集序

太原寥廓長風鼓而萬級怒號珠音衆響皆一氯之太原寥廓長風鼓而萬級怒號珠音衆響皆一氯之以不思議智流出一切音擊陀羅尼故世諦語言皆以不思議智流出一切音擊陀羅尼故世諦語言皆態如谷響者手是以從上諸祖證無師自然智者即勝如谷響者手是以從上諸祖證無師自然智者即勝可在響者手是以從上諸祖證無師自然智者即勝可在響者手是以從上諸祖證無師自然智者即勝可不不立文字而曹勝可上堂入室示衆舉揚機如雷電凡垂一語心緝時或上堂入室示衆舉揚機如雷電凡垂一語心緝時或上堂入室示衆舉揚機如雷電凡垂一語心緝時或上堂入室示衆舉揚機如雷電凡垂一語心緝時或上堂入室示衆舉揚機如雷電凡垂一語心緝

李陵之血戰縱張空拳循揮駐日雖未犂庭婦穴而 而力振之得無師智秉金剛心其荷預法門之志如 石二百餘年有達觀禪師出當禪宗已墜之時蹶起 類心蓋借語傳心因言見道言其所絕言耳今去楚 也一唾便休弟子筆而藏之者伯什師初往來於金 老見客未效一額手雖未踞華座竪椎拂然足迹所 末法一大雄猛丈夫哉然師賦性不與世情和合至 沙曲阿之閒與于王二氏法緣最深于潤甫居士每 而倒無非指示西來的意稱性衝口會無刻意為文 慈長杉館師之法語留邢氏者亦多師化後潤甫屬 得師片言隻字藏貯如拱壁及遊匡廬主邢孝廉來 可億計以自性宗通故隨機之談如千鈞弩發應茲 至半天下無論宰官居士望影歸心見形折節者不 王君仲橐結集爲一部予久沈瘴海爲師了末後因 之提如一人與萬人敵者予獨見師其人心睹其發 余三讀其言喟然而嘆曰嗟乎末法降心力拔生死 綠過金沙之東禪潤甫捧師集示余稽首請爲其序 一念孤忠與屬雪吞氎者未可以死生優劣議也真

集蓋非童於俗數也觀者當具金剛正眼視之於言學音色相求之者耶佛說欲為生死根師凡所專言學音色相求之者耶佛說欲為生死根師凡所專為又何庸夫門庭施設哉者覺範禪宗妙悟超絕語於三致意痛處卻雖直欲劃絕命根即此可當金錢必三致意痛處卻雖直欲劃絕命根即此可當金錢。

佛未出世祖未西來一著編參諸方有所發明滋挂一門外語不然以世出世別情與出情之異耳蓋佛所獨佛語不然以世出世別情與出情之異耳蓋佛所語當歸第一義況本於文而超於情者乎予讀雲樓夫執永而求火也豈特佛經即從上諸祖屬言及細夫執永而求火也豈特佛經即從上諸祖屬言及細表執所不文人也豈特佛經即從上諸祖屬言及細表的事。

實而易喻直捷而盡理如月照百川清濁並映能領 師稱述佛祖之道而溺於情讀者如絮沾泥求其平 其言者大有徑庭不近人情故望洋者衆即文字之 耳然禪門載道之言除佛經諸祖傳燈直指向上特 聖人影響於世豈常人所能盡知耶信乎文者糟粕 而竟莫能入然則諸子所記之語豈盡孔子哉於數 知孔子之嘆莫我知心即選子高弟但日鑽之仰之 前二十年無人知爲何事者空生今日始乃窺之固 有世尊予忽然如大夢覺是知世尊處世與人周旋 佛持鉢乞食歸來飯食洗足敷座而坐行生忽嘆希 機之妙不知其謂何及老年讀金剛般若諸弟子從 嗟乎豈以是盡大師哉予少依講肆聞說者談佛應 來者如量飲海應量而足諸弟子記其語者謂之文 鑑照物所強順應故無臧否無指適一任其本懷故 居者平常故於應機接物無門庭絕城府無崖異如 林立久則雲屯霧集皆有請焉以師所造者隱密所 乎久之聲光獨羅緇白問道而來者初則履滿次則 至整迹雲棲以恬養知非有意於人世也沉爲文

之者如飲甘露無病不瘳如是而爲佛祖之亞者予之者如飲甘露無病不瘳如是而爲佛祖之亞者予實謂於雲棲之文見之矣議者謂師爲老師宿儒予舊謂於雲棲之文見之矣議者謂師爲老師宿儒予舊謂之功臣數

China Chin

方外遺書序

書店来諸賢宰官棲心禪悅者載之簡册如裴楊張 若刮垢潛光敲骨打髓用本色鉗椎煆煉習氣則施 若刮垢潛光敲骨打髓用本色鉗椎煆煉習氣則施 者不易而受者良難放不多見丁巳臭春子玄馮延 於送我吳門舟中乃祖開之太史所受達觀蓮池二 大老遺書皆手蹟不惟叮嚀法門克荷大事其於應 大老遺書皆手蹟不惟叮嚀法門克荷大事其於應 大老遺書皆手蹟不惟叮嚀法門克荷大事其於應 有起聚如扁鵲之醫洞見肺腑而調劑之方不特砭 香育起廢疾而巳以此傳家子孫實之當爲慧命非 香育起廢疾而巳以此傳家子孫實之當爲慧命非

獨墨實手澤巳也

雲棲大師了義語序

了義語者乃直指一心究竟與了之說也吾佛出世

顯密所談者不一而足以執教者迷宗執禪者毀教 道名爲禪宗頓門然此順宗之旨非獨一禪諸教中 領漸至末後拈花直指離言之道達摩西來單傳此 名爲覆相之談俱未顯了至於分明指示一心了無 特爲衆生開示一心使其悟入徹法無遺從淺至深 根圓收順漸一生取辦無越此者從上佛祖極力開 行皆是求明一心之行較之於禪但順漸不同及其 皆不達佛了義之旨耳非獨於理至若所設六度萬 刺法令其直下順悟方名了義以迷有深淺故教分 始於執相破相以至性相雙融三乘之設皆是邁護 非自誤也耶嗟乎宗門久無明眼知識莫與正之至 示已非一矣無奈末學志尚虚立以禪爲高薄淨土 成功一也至若淨土一門修念佛三昧此又統擬三 若義學之徒虛事浮談多乖實際不惟無禪而教眼 多自欺而不量已之德器但隨聲妄和會無實行臣 而不爲時當末法衆生垢重豈得人人皆稱上根以 主張淨土以救末法之弊自建叢林身教弟子日夜 不明亦無甚於今日也雲棲大師蚤悟唯心因極力

> 闡淨土之旨居多心空居士朱君爲入室弟子所錄 此語目曰了義誠禪宗之圓鑑一心之指南直抉末 予三復三嘆僭爲代一轉語於編首 法督眼之金箆也頃宦遊星渚入山過訪以稿見示 彌陀疏鈔發明殆盡至於尋常開示言句提唯心以 無替者幾四十年故海內緇白信從者衆大師所著

憨山老人夢遊集卷第十九

憨山老人夢遊集卷第二十

美

通 日鉄 編輯

門

嶺南弟子

劉起相

重校

序

淨土指歸序

生所說法門方便非一而始終法要有性相二宗以 淨土指歸葢指修者歸於淨土也吾佛世尊攝化羣 其機有大小故教有顧漸之設末後分爲禪教二門

生者此以佛力加持行人念想增勝此以勝想彼以 若十惡之輩臨終柔勝在獄苦事已現在前但爲苦 現而往生之功已成實由自心冥感之力亦非外也 大願願與念接自心與佛默爾相應雖浮土之境未 夫愚婦但緣十善精持五戒專心念佛臨終必得往 毫實由自心之所感現譬若夢事非從外來至若愚 土者此也中下之士修持淨戒事心注念觀念相樣 士安可以淨其土耶斯則禪家上上根未有不歸淨 逼極脱苦心切極苦之心而成念力極盡悔心悔心 臨終必得往生雖有去來之相而彌陀相好實樹華 謂唯心淨土是則土非心外淨由一心苟非悟心之 淨穢之殊皆從一心之所感變故云心淨則土淨所 力而稱揚之說者以爲俯提中下非知淨土之旨者 何耶良以十方世界一切衆生依正二報雖有勝劣 心之士未有一人不以此爲歸宿者如龍樹馬鳴極 機不攝所謂橫超三界是爲最勝法門從上諸祖悟 公案其來尚矣若淨土一門普被三根順漸齊入無 教則引攝三根禪則領悟一心如一大藏經千七百

> 必由向上一念而得成就故此法門豈特權為中下 奪根雖少劣而志實上上且修之惟難以斷變提爲 到也中下之士依觀念相擴不爲愛綠業習之所領 之境顧現不借功動是為上上殊非淺智稱信者可 空自心空淨與佛冥一惟以一念願力莊嚴而淨土 心斯則唯心淨土之旨皎然若眡白黑矣以佛體如 功實非外得由是觀之三界萬法未有一法不從心 輩亦得往生然此淨土之境良因目心全體轉變之 持應念現前化刀山爲實樹變火變爲蓮池故此惡 彼放下屠刀便作佛事又差勝矣然此萬萬無一世 內熏所發根雖惡多即一念勇猛之心超於上上較 難耳惡輩往生更難雖云帶業亦由多生夙暫善模 論悟與不悟上智下愚之士但修而必得者皆由自 生淨確之境未有一境不從心現所以淨土一門無 已極即此極處全體轉變一念與佛相應故佛力如 人若必待此而求生謬矣以愚所觀根無大小究竟

敦詩書談兵之暇留心淨土法門所謂以慈用兵者

而設耶貳師將軍愛柏徐公以文武發家說禮樂而

海之慈航長夜之慧炬也豈小小哉 本之慈航長夜之慧炬也豈小小哉 海之慈航長夜之慧炬也豈小小哉 海之慈航長夜之慧炬也豈小小哉 海之慈航長夜之慧炬也豈小小哉 海之慈航長夜之慧炬也豈小小哉 海之慈航長夜之慧炬也豈小小哉

刻瑜伽佛事儀範序

吾佛設教以一死生之理通幽明之故遠鬼神之情 是原語瑜伽此云相應謂心境表裏如一也然教有 定然語瑜伽此云相應謂心境表裏如一也然教有 定類語瑜伽此云相應謂心境表裏如一也然教有 主頓脫劇苦皆度生之儀軌心真言本自灌頂部中 生頓脫劇苦皆度生之儀軌心真言本自灌頂部中 生頓脫劇苦皆度生之儀軌心真言本自灌頂部中

皆出自西域神僧而流於震旦傳爲故事從不空三 言演諸如來之心印一偈而變地獄爲淨土一語而 之天界爲禪報恩爲講能仁爲瑜伽遵國制也此後 豈細事哉失其旨不惟無益而自損之奠之省也楚 化變易為蓮池法音及而罪即滅鐘聲至而苦遂停 生之本懷即其疏意達孝子慈親之情個而懿密翼 流俗漸弊疑爲非破律儀視爲嬉戲然深失如來度 食津濟疏文以試瑜伽能通其一方許爲僧今南 科度僧以楞伽金剛佛祖三經以試禪講以錄口施 瑜伽佛事其來久矣至我 通三界幽顯靈祇靡不畢申其情自此僧徒相因爲 度帝請誌公和尚集諸大德沙門纂爲水陸儀文則 藏而宣密言漸至於梁武帝因都氏夫人墮蟒身求 面然鬼王遂啓施食之教至於呪水呪食普濟河沙 **僧某以瑜伽發足嗣参雪浪諸大講師聽習經論了** 如來度生之意及歸乃慎其流弊遂本水陸儀文纂 各據其情盡其誠而沙門釋子亦得展悲心披誠数 **案科儀以随時變分條析理章章不紊使有所聽者** 聖祖制以禪講瑜伽三

和吾佛度生之遺意也

干佛徽序

條鐵至罪滅慧生諸佛現身感應道交可許入道法

若上根利智業輕惑薄者自可直入中下之土積劫 是但以無明深厚不自覺知逐妄迷真起惑造業長 是但以無明深厚不自覺知逐妄迷真起惑造業長 是但以無明深厚不自覺知逐妄迷真起惑造業長 是不此自利利他二種行門利他之行至廣而自利 之行最捷無非了達自心以為要妙至若了心之行 最捷無非了達自心以為要妙至若了心之行 是,其事種修 有頓有漸頓則無踰參禪漸則不出止觀即此二行 不出自利利他二種行門利他之行至廣而自利 之行最捷無非了達自心以為要妙至若了心之行 最,無非了達自心以為要妙至若了心之行 是,其事種修

為藝物者心即如華嚴圓順法門普賢為法界導師而所修十顯必首以禮敬諸佛次重懺悔業障楞嚴而所修十顯必首以禮敬諸佛次重懺悔業障楞嚴而所修十顯必首以禮敬諸佛次重懺悔業障楞嚴而所修十顯必首以禮敬諸佛次重懺悔半行最

華為實相大乘天台釋以百界千如具德圓宗列為上觀而必精嚴儀法以發真修宗門來明禪師親證上觀而必精嚴儀法以發真修宗門來明禪師親證上觀而必精嚴儀法以發真修宗門來明禪師親證上觀而必精嚴儀法以發真修宗門來明禪師親證上觀而必精嚴儀法以發真修宗門來明禪師親證上觀而必精嚴儀法以發真修宗門來明禪師親證中人一一皆得成無上道所以稱三千諸佛是也其有已成未成而名號具彰藏典愧未盡探其始末因有已成未成而名號具彰藏典愧未盡探其始末因有已成未成而名號具彰藏典愧未盡探其始末因有已成未成而名號具彰藏典愧未盡探其始末因有一樣自昔流傳陳情之文雖備而三千佛號未圓宗列為統近世之禮千佛名者但有佛號而無按鑿之文梁衛而其往後自古流傳陳情之文雖備而三千佛號未圓宗列為

之所障蔽則禮恒沙之佛以消之未見其多法本是 之舊章增未列之佛號釆教中之成言敘披露之情 利濟之心良亦勤矣閒有議其非者皆未原述者之 入實借多佛之慈光消我多生之積罪又奚止赫日 佛法身入我性我性同共如來合如鏡交光互相攝 千諸佛皆吾本師開導法味既同而同一禮敬則諸 心則何法而非妙行耶幸無以佛多而生披厭也三 心亦未信夫自心者也有信自心是佛爲恒沙菜垢 個始終條貫如出一轍述而不作無胸臆之論觀其 要無越懺悔一門矣吳門某所集千佛懺法祖聚朝 現前禮敬諸佛以同體大悲感應加庇故其出苦之 消霜露哉十日並出大地焚燒三千佛現罪垢順滅 信禮佛滅罪之功大而不必計作者之與否也特序 不待求證而必信無疑矣觀者但自求出苦之心眞

無非開示此心之指以衆生惡有厚薄根有利鈍故 如來始從鹿苑終至雙林四十九年所說一代時教 楞嚴接光錄序 之以爲眞修者勸

非欲明佛意惟佛智海一地望洋況居有漏乎故探 教者如飲海魚龍蟲喇亦各盡已量豈能盡海水耶 然一滴巳具百川之味矣予逸老匡山閉關枯坐四 授公以所著榜嚴接光錄見示且欲予一言以弁

則故以楞嚴大定為究竟圓滿歸越此我本師出世 緣而扬三界生死之纒以明定以三觀而破定有之 設三乘之漸次以十善而免三途之苦以明有以諦 執以明中然雖巧設多方必以頓證法界一心爲極

心攝一代時教揭三觀妙門顯一心之旨無尚此大 時而教海汪洋末法行人難究其趣若夫廓法界一 一大事因緣始終之化法也是知三觀之設散在五

佛頂首楞嚴一經矣大哉頂法真順證一心之懸鑑

也以十二部經之廣演而收於十軸之文詳十法界

三觀妙門以曠劫難成之佛而圓滿於首楞嚴一定 之因果而敷陳於六萬餘言之內以無量行海攝歸

古今解者不啻數十家雖知見不一而各有所長或 可謂至簡至要最深最奧之法門也此經自入震日

尅文言而昧其通途或尚理觀而略其文言要之無

他子老矣目已惶惶智乏藻鑑思不關微安能發其 學與她力一閱則見其提掇首尾指點血脈批導文字如遊刃焉以公廓達之才縱橫之筆脫落畦徑似 不拘拘矩嬳若以楔出楔亦從前所無愚謂有便上 不拘拘矩嬳若以楔出楔亦從前所無愚謂有便上 不動狗矩嬳若以楔出楔亦從前所無愚謂有便上 不動狗矩嬳若以楔出楔亦從前所無愚謂有便上 不動狗矩嬳若以楔出楔亦從前所無愚謂有便上

重刻六祖壇經序

墜之緒因見經本數刻多有改竄不一蓋以後世聰 傳是爲心印達摩東來直指一心不立文字六傳王傳是爲心印達摩東來直指一心不立文字六傳王傳是爲心印達摩東來直指一心不立文字六傳王明經五十八八聲逐塊稱之日壇經其所指示雖般若一心心外無法則口說者如天鼓音空谷響耳豐實一心心外無法則口說者如天鼓音空谷響耳豐實一心心外無法則口說者如天鼓音空谷響耳豐實

明君子將謂老盧本賣柴漢目不識丁怪其所說無

為禪將軍其有以發見聞之勇猛於此事者勸 於及此經已重刻行感公力能荷法乃序之以見公 所文之有。子偶得古本乃為勘訂其所記参差者復 所整齊分為十品以雅稱經名也刻於山中灣以此經 軍張君樂齊先開府於粵閒訪予於山中灣以此經 軍武司樂齊先開府於粵閒訪予於山中灣以此經 對之別十年公歸林下予過錢塘公一見歡若更生 對之別十年公歸林下予過錢塘公一見歡若更生 對之別十年公歸林下予過錢塘公一見歡若更生

刻法寶壇經序遠籍

うけか

無事無事則又何計佛祖出世不出世說法不說耶毫迴避處悲哉人者覿面不知知則諦信不疑本來字直指自心心外無法法外無心一味平等原無纖

因明入正理論寐言序

是則此刻刻空中鳥迹耳

兄雪浪恩公按轡先登蘊樸愚公從而步武萬歷庚寅秋公挂錫薊門一夕感夢金人名七銀人勝十告寅秋公挂錫薊門一夕感夢金人名七銀人勝十告寅秋公挂錫薊門一夕感夢金人名七銀人勝十告演和完旣而果遇界公新解值虞公長孺激發矢心寫力完旣而果遇界公新解值虞公長孺激發矢心意盡識夢也噫徵夫那蘭紀歲睹史質疑由是觀之不能祠見立微彈花摘實至謂異品無其所立遮實有相相違改品以釋是非番我以明集聚斯皆出過惡中語固有之因修者易草物者難且夫託鷄鳴而過解假弄丸而破敵者談何容易觀者若因是以明宗由指而見月直欲睹緻塵而知大地闌一隙以見宗由指而見月直欲睹緻塵而知大地闌一隙以見宗由指而見月直欲睹緻塵而知大地闌一隙以見宗由指而見月直欲睹緻塵而知大地闌一隙以見宗由指而見月直欲睹緻塵而知大地闌一隙以見宗由指而見月直欲睹緻塵而知大地闌一隙以見宗由指而見月直欲睹緻塵而知大地闌一隙以見宗由指而見月直欲睹緻塵而知大地闌一隙以見不能到於其下之外距直排布之方也即隱几據梧太塵則於法界之功匪直排布之方也即隱几據梧太塵則於法界之功匪直排布之方也即隱几據梧

参◆ 七一 古本

二十五圓通圖序為至憲

長

學一毛孔編則毛毛皆偏在境則拈一微塵偏則塵毗盧遮那以法界為身則根根塵塵皆偏法界於身

屬皆偏於心則念包十世古今劫念同時則念念皆偏如是則無一法而非國通又何根塵識界七大之保量可局乎惟此乃善眼大人之境界党劣解者可能入歲是以楞嚴會上世尊特借二十五大士晋為諸人傍通一綫大似含元殿裏指長安蓋曲為鲍根諸人傍通一綫大似含元殿裏指長安蓋曲為鲍根諸人傍通一綫大似含元殿裏指長安蓋曲為鲍根諸人房通一綫大似含元殿裏指長安蓋曲為鲍根諸人房通一綫大似含元殿裏指長安蓋曲為鲍根諸人房通一綫大似含元殿裏指長安蓋曲為鲍根諸人房通一綫大似含元殿裏指長安蓋曲為鲍根諸人房通一綫大似含元殿裏指長安蓋曲為鲍根諸人房通一線大似含元殿裏指長安蓋曲為鲍根諸人房通過大士等人與通過大士等人與通過大士等人與通過大士等人與通過大士等人與通過大士等人與通過大士等人與通過大士等人與通過大士等人與通過大量的表別。

刻十無盡藏品序

財充滿心量名無盡藏行惟此華嚴所宗法界心體因中稱法界心而修稱為藏者以此心在衆生名為藏藏在佛名如來藏心故在依果名華藏世界蓋藏藏。在佛名如來藏心故在依果名華藏世界蓋藏藏。其一種,一個一個一個一個一個一個一個一個

見自心無盡之妙行苟信而持之則華藏莊嚴步步 數日大哉妙行曾照迷方誠如慧日之朗重昏也請 門人觀衡遠來相訊見予批閱此品歡喜稽首而 自私不能擴自心之量耳子掩關靈砌之曇花精舍 德醫夫聖人損有餘以奉天下盛治之事也故曰有 化為無盡功德藏矣。正不成一大事因緣哉 可登而佛果菩提念念可證其狹陋自私之習亦將 序之刻以別行子喜作法施願見聞隨喜者即此以 華藏莊嚴之妙事豈向心外求之哉第以衆生狹陋 佛地住行如積回向如散所謂積而能散由散以成 衆生菩提及以實際積行以成藏行散而果成故趣 法藏濟係自性之衆生資以莊嚴唯心之果報觀夫 之以爲利無之以爲用是以吾佛世尊以盡法界之 有十 而以妙行為莊嚴固滿具足故名為佛然所 向故修此十無盡藏行蘊積一心即回向三處謂 往十行十向十地之別此品當十行滿 心將趣 修 齿行 讚

重與靑原山七祖道場序

佛法託之像教禪道寄之祖庭故瞻梵利而三實現

以尋常建

一利数

尹爲七祖忠臣予聞之躍然乃先囑其妥神祠 尹氏發心重整青原持鄒給諫公書為先談且云子 徘徊而去閒嘗與紫柏禪師言謂禪宗寥落必源頭 諸賢事天然各尊其道理或宜然恐神有所未安也 功雖未圓中興之機已見辛亥秋日安福鄒匡明子 溪之原以爲禪道重興之兆辛苦八年而祖庭始開 乙未予年五十以弘法致譴放於嶺外因得重濟曹 雞塞當同疏導之師大以爲然師先候予於匡山及 像惟諸賢祠字尊祀其中時則慨然歎曰諸天奉佛 以諸祖法崛之不可泯者若人身之血豚不可一息 所關最重予少年會禮七祖見其僧非拔俗寺委荒 青原南岳為的骨子兩人執幟大盛於江西湖南其 閉也任道君子可不爲之留心哉惟禪宗鼻祖西來 月千百年來醫然而愈章者是知茲山爲人心世道 下五燈分簽皆以二老為燧人此道昭昭如中天日 直指最上一乘令人富下成佛此道六傳於曹溪而 前指道場而慧燈發燄葢由道假人弘事因理顯是 義是時因緣未遇遂寢越癸丑遂之南丘踐金簡 ◆聽館市 英

> 社重開石門禪期已結予大歡喜不三日而給練公 之本願其祠已安而肖爲檀度願成主佛者則劉晉 峰之後漸微我國初不多見矣予自濟曹溪不數年 歸根禪道自曹溪一脈始於齊原而傳燈諸祖 書亦至云大修青原冀得一指點葢子尹夙心述予 溪一派重行也丁巳夏歸匡山作休老計見東林蓮 卿張壽長郭陵易也子乃浩然數日六祖有言葉落 越之行至雙徑見禪道大振多究者衆予歎日此曹 而此道復振於越之天目雙徑之閒今且引歸匡山 **膏儀部約公欲振之力未能也丙辰予弔紫柏** 至中 有吳

將來八十一人同出馬駒之下者是有望於今日斯 以助堯天舜日期與斯民共享無爲之化也又豈可 再見於青原是知道運旋轉與造化同流信夫意者 替之由以告諸同志不在莊嚴佛土而在光輝佛燈 役也擅度之功任之者衆不俟予言改特逃禪道隆 一字為佛事者同日而語耶萬歷

歸根之藏哉惟昔盛時莫盛於西江馬祖今也重振

石門適靑原大興千年之後復見今日豈非應葉落

四十五年仲夏十日

續華岳寺法派序

也自後禪林日衰師資口耳天下叢林但於開山之 達摩西來單傳直指以心印心妙悟者為的骨兒孫 宗者但以建立宗旨命知歸趣亦非以假名爲道脉 各從授受亦不拘拘及五宗各立門庭則稱某宗某 原無名字及六傳曹溪下從南岳青原道分兩派以

十字日紹宗希普導正克嗣通玄圓明眞性海法行 華藥寺本從臨濟出以重開山僧紹秀爲始祖立二 下战海內梵刹多推之特世諦流布其來尚矣衡州 祖原系某宗下各尊為鼻祖以五家獨臨濟道偏天

持等領大衆焚香體請立其派予無復異即以源字 復崇源今日盡矣適予來寓靈湖且將東遊時寺住

爲始起續四十字偈曰源自曹溪濟燈從南岳傳廣

來微密意福慧永無邊是足以嗣宗風手特以假名 開清淨理妙悟祖師禪頓了唯心旨歸依實智詮西

說實相令不味其本源耳後之子孫其尊奉毋忽

南岳重興天台寺建諸祖影堂序

散求證南岳思大師師日此法華三昧也於是智者 昔天台智者大師誦法華經親見靈山一會儼然末

拜臺現存曾護部金簡欲石刻楞嚴經於臺上以滿 經今南岳天台寺即智者大師拜經處也千有餘年 旨相同大師聞之日夜西望禮拜一十九年顧見此 乃蓍止觀妙門西域鷲師日此與西域首楞嚴經大

爲法門知已久期終老南岳癸丑冬月長公扶搖攜 智者之望大願未果此天台一段因緣也予與會公 乃爾書迎予往湖東予應命至則見諸祖道影八十

八軸乃達觀禪師命丹陽弟子賀知忍貢請丁南羽

岳者向久藏賀氏庚戌閒晉公遊南海道過曲阿賀 高士名筆也有三堂其二置五臺峨嵋此一專爲南

予於是展體道容如入諸祖丈室也比即發心願建 君屬其請歸南岳向以山中無可置之地故存湖東 影堂以奉之乃爲募疏太僕蔡公槐亭身爲行先願

子如釋書來云已復天台欲重與之適會長公遵先 竟未果丙辰東遊吳越隨投老匡山越六年辛卯弟 人遺命以祖影送入天台供養及予前疏併付之予

三觀一心之旨以暢智者未見之懷如釋今得居其 之究竟歸越不期會而自會矣予居湖東欲奉諸祖 水從來舊矣無論西域即此土教由天台說三觀以 地復奉諸祖於其中不但了余未了之緣抑滿智者 畢集於斯即楞嚴一經統教禪而會歸一心此二宗 明一心禪自拈花二十八傳達摩東來爲鼻祖五宗 性相二宗本乎一致佛滅未幾而性相角立分河飲 此予即老矣尚能坐拜石演楞歐代我廣長舌相使 未盡之心也幸何如哉釋也果能竭力忘身從事於 而顯未滿第著榜嚴通議以發明佛祖向上一路會 列派各立門庭互相點管率莫能一今也諸祖道影 述道影之因緣併釋興建之始末告諸檀越以爲開 海與諸祖一時聲欬彈指也其募疏已有前作故但 定側耳於常寂光中習氣猛發亦當起舞於蓮花藏 千峰點首萬象低眉虚空結舌異幟盡降智者大腳 為顯晦亦運而已矣惟佛所說萬法統乎一心故有 聞而喜日此予末後未了願也嗟乎法緣與時互相 導前茅也是爲序

焦山法系序

內列刹如雲在在僧徒皆日本出某宗某宗但以字 型此後宗門法系蔑如也以無明眼宗匠故耳其海 曹溪一法不立及五宗分派葢以門庭施設不同而 實法也嗟乎禪道下衰真源漸昧自選摩西來六傳 傳燈所載諸祖法系惟以心印相傳原不以假名爲 姓如衆流入海今推原五宗真傳則法眼早入高麗 世皆然豈止一方而巳耶況佛制四民出家同一釋 派爲嫡而未聞以心印心由此觀法則大可悲矣學 宗旨不異及宋而元燈燈相續至我明國初尚存典 迷方者衆誰得而正之哉京口焦山某禪人遠來巨 為仰絕響雲門在宋尚存而曹洞則少林獨擅方今 其源禪人憂之乃考十葊先後之次緝爲譜系正名 脳心禪師本臨濟旁出爲賈菩薩者近代兒孫皆迷 山以法系字派爲請且云茲山十葊原自始祖覺初 可莫可考葢隨人自立譬夫王綱失紀而僭者橫出 天下信寺法系多稱臨濟一派盛行至若正枝旁出 分以垂後裔然雖假名是亦因名<u>立</u>教儻亦賴此以

宗則臨濟自謂正法眼藏早滅却矣
六傳巳盡故爲續其三十二字以從俗論若指此爲六傳巳盡故爲續其三十二字以從俗論若指此爲,不可則或其先十一之以保我子孫亦存羊之意尚亦有利哉其先十

鼎湖山詩後序

鼎湖山白雲寺其來久矣昔曹溪法道盛時出其門 縣為所華猶存靈骨藏之於此信其為法門巢許也 於焉梵幢猶存靈骨藏之於此信其為法門巢許也 於焉梵幢猶存靈骨藏之於此信其為法門巢許也 余少能讀書時則知有蒼梧之埜鼎湖乘龍之故事 是個王公吉為郡端州時命父老重葺今又圯矣余因 伯王公吉為郡端州時命父老重葺今又圯矣余因 伯王公吉為郡端州時命父老重葺今又圯矣余因 企當休老焉貴公以余言遂忘形事心以常公為任 余當休老焉貴公以余言遂忘形事心以常公為任 余當休老焉貴公以余言遂忘形事心以常公為任 余當休老焉貴公以余言遂忘形事心以常公為任

徑山志序

聯自衡湘迤邐數千里直聳黃山白岳而蜚涌二目 與琳宮梵字皆託迹於名山勝地者在在星羅此葢 與琳宮梵字皆託迹於名山勝地者在在星羅此葢 與琳宮梵字皆託迹於名山勝地者在在星羅此葢

うけか

今中與法門之大業非圖籍班班後世將何考焉是 氣博厚又何能貧重法哉於戲因修者易物業者難 此而拓法王之疆土者必大賴於是矣非此山之鍾 矣黃貞甫有言蕭何入關子女玉帛秋毫無犯惟收 來藏海而注於茲爲法門之全提則因緣勝前萬萬 者雖善舉揚宗乘但引法海之一滴耳今則全攝如 鵬摶峰下與大慧同條是豈小綠哉然昔之住茲山 禪師蹶起立宗門赤幟時叛刻方册大藏初議五臺 人頃百年來法幢傾比僧徒寂寥萬歷己丑閒達觀 非山川蘊結之厚何能若是之悠久耶國初尚不乏 徑山之志不得不作非徒紀勝而已故重緝之以便 其圖籍卒以王漢今大藏乃法界之圖籍也盡收於 師入滅弟子澹居鎧公克荷其業而達師竟得塔於 議啓古化城為藏板地當道潘泉諸公深心恢復達 亦因是重新乃法輪再轉之機也后頃之馮太史復 僧徒往請者置足數千里未幾遷於山之寂照殿宇 元我明上下千載其閒相繼雄長法門者八十一人 融結茲山以鍾靈秀故佛剎始剏唐某年閒而歷宋

考覧而特爲之序

菩提菴妙明堂序

大衆請開示老人意取楞嚴經中性覺妙明本覺明 余坐菩提菴新構文室主人請堂名余題之日妙明

難措口故墨尋常所說性覺妙明本覺明妙二語雙 關以詰之然上句不屬迷悟天然妙性本自靈者故 起疑曰既是清淨本然云何忽生山河大地諸有爲 覺明妙謂今雖修成而不從外得是各人本有之覺 云性覺妙明下句乃從迷中不失而修成者故云本 法邪將謂清淨界中不容生此諸物也世尊到此實 妙二語也以滿慈聞前根身器界一一清淨本然因

滿慈果認本覺明妙一語爲得將謂性覺本自靈妙 耳以此二語詰之者佛意將借迷悟關頭以開發之 而明不假更明者斯則但有能明之明則無所明之

明其覺然有明有覺能所宛然故向下發明能所之 生生死死生法法皆從清淨界中無故强起一念要 之覺則能所對待無窮妄法從此而生矣以一 覺耳意在有所明之覺乃恰當耳殊不知纔有所明 切衆

五臺山觀來石金蓮社序

先後集者約一百二十三人且獨稱十八高賢現生 流而度者上下千餘載幾何人斯遠公物匡山蓮社 者幾何人哉淨土為苦海之彼岸占夫操舟揚凱截 長年捩柁不惜餘力耳 慈航楊駅安流而徑登彼岸又何以百什計哉是在 官身何以有此余知斯社之與將與一萬眷屬同篇 百世之下抖擻濁惡揭厲樂邦非具宿世根力現字 西方遞相接引此自道法東來第一勝事李公與於 徑之行鏡公特訊於山中且歐余敘其事余喟然歎 即捐黃屬修蓮社效匡山故事修念佛三昧余有變 談臺山勝處言觀來石主人鏡亭有苦行公遂歸心 於靈鷺以寄焉旣而欲自爲念佛社因五臺僧幻住 結金蓮社於五臺先聞妙峰大師遂往歸依建靜室 公生於此而結蓮社於匡山我何忘其故鄉耶遂願 進士官至屬平兵憲因遊樓煩忽自憶往事乃日遠 日寥寥宇宙泛泛波流往而不返者衆矣能知歸宿 呼之即止公長而問母母言其初夢所以後登癸末 母時呼日爾僧性也至七歲循常號不樂母每以僧

交如水澄月現又大不可思議者矣由是觀之其佛

斯則木石無情乃應緣而成事此情與無情感應道

土成住壞空業已不可思議即其人而知施者作者

院而天聖則宋時重建以年爲號者非此莫知其源

寺其基廣九十三晦時刺史王公表請額爲景清禪

重修湖州天聖寺因緣序

其龍歸殿而左右錯盤又名之日錯盤龍殿此其不 動宛若生龍左右升降管遊戲池中寺僧見而叱之 之上梁栱之閒絕無纖塵故名之曰無塵殷此不可 歲事寺僧祖定訪予京之慈氏樓閣偶談寺之因緣 生心行不可思議今於湖之天聖寺具見之矣甲午 六道善惡業行而不自知故日佛境界不可思議衆 心智光中莊嚴佛土調伏衆生及造十惡五逆三界 光相羅彼彼無雜亦無障礙而一切衆生於一切佛 化衆生種種神通妙用處處同時充滿亦如網珠交 孟頫讀書其中而心悅之兩整畫瀟湘煙雨圖二幅 可思議三也其殿壁經橫二丈有奇向爲粉地昔拍 思議二也其兩楹露柱雕木爲龍頭角須眉爪牙飛 唐其原先不可考歷宋及元至今幾千年矣而各道 重疊獨如羅網此其作者不可思議一也葢始粉於 則日其殿廣博酒如空虚莊嚴密級斗棋攢簇舞蹋 者空者俱同一際一切諸佛與諸菩薩海會說法教 雜花說十万佛土如帝綱孔挂於虗空成者住者壞

議也海印沙門聞此因緣數末曾有欲重宣此義而 花藏海此段廣大功德因緣其實種種不可得而思 心中成等正覺轉大法輪使一切見者聞者皆發無 天人修羅宇官長者優婆塞優婆夷四衆人等各各 念必使諸佛讚言奇哉奇哉吾今成佛時曹見一切 上菩提之心向之成者住者壞者空者一齊同入蓮 成勞吾意空花亂起必彌滿太清滴水爲嚴必橫流 未來一際平等耳況佛境如空無所依至若因緣成 大地是將見妙莊嚴刹建於一毫清淨法身顕於一 員經作難思之佛事譬若晴空望彼纖雲豈不過目 就如雲起長空又豈可得而思議耶今比丘定者苦 所謂交光相羅如實珠網淨嚴齊現善惡同彰過去 之心斯則成者壞之因壞者成之緣若即境觀心正 因果昭著總之皆不可思議也始也成者之心固不 旦炳然齊顯於諸佛大智光中如鏡現像觀毫不昧 心窮慮欲建空中之樓閣嚴象外之法身演無字之 知有壞者之心而昔壞者之心又安知有今日成者 成者住者莊嚴者被壞者善惡心行種種不同今一

說偈言

佛身如虎空智光如湖月其空偏一切月光與空等一切眾生心與佛智無二善惡隨因綠葉行固不同一切佛境界生心與佛智無二善惡隨因綠葉行固不同一切佛境界生於與佛智無二善惡隨因綠葉行固不同一切佛境界生於衆生心譬如空中花依空而出現不量及地獄實護衆果報苦樂諸受用無不從心造官作自受用莊嚴自法身直從有相中即登常住果實能請佛子決定信自心各捨所愛珍莊嚴佛自土世閒皆是苦無常復無我生無一物來死無一文去來去本是空如何苦貪著遇此大因緣而不發勇猛不去本是空如何苦貪著遇此大因緣而不發勇猛不安學及順成無上覺凡是有緣人終文

築三潭護生隄引

明獨雲極大師而已其放生池除城中上方北園其苦隋天台智者大師唐惟宣律師宋永明大師至我法孝順一切衆生然則奉佛戒者不能推及衆生自佛說孝名爲戒謂孝順父母孝順三竇孝順至道之佛說孝名爲戒謂孝順父母孝順三竇孝順至道之

隄甚單薄不能與所放之生作金湯外護恐春水 一 光明幢昨偶有聚沙之夢巳有成議矣又觀三潭之 湖心寺知舊有三塔久廢今欲重建與所度之生作 濟西湖三潭其廣大之心足以度恒沙衆生矣予至 外則自贖萬工池而弟子居士虞德園同大壑法師

旦夕計正在躊躇偶至長明寺會湯養惺居士乃雲 漂則已度之生尋復漂流苦海矣斯則不惟虚其前 功抑終不能收其後效大可憂也又且聚沙不可以

背佛無子以視三界衆生如一子至今人人皆稱爲 栖之內親也言及無子將求度脫子歡喜而策之日

潭者能氣保障以防護之使其中衆生如極樂國則 父之稱光滿十方世界矣爲今當念已度之生在三 慈父居士何不以念子之心念一切衆生則將來慈

別求乎諸有智者一聞萬感不俟言之畢矣老人大 彼現前皆稱怒父矣又何俟於將來乎願居士一倡 而顯爲慈父者衆矣是則天官淨土又何捨目前而

憨山老人夢遊集卷第二十 有所望焉

憨山老人夢遊集卷第二十

侍

黿 善

日錄

嶺南弟子 劉起相 重校

通

畑

編輯

序

院序園 贈無盡上人授僧錄覺義住持平陽淨土禪

偏参知識調練牛峰發明少室逐迹終南接納五頂 子蚤歲就髮於那之淨土院每志向上乃擔签百城 之內外即二氏之徒亦預焉無盡上人晉平陽楊氏 結法社五十三人窮教海一十二部究徹一心備歷 聖天子在宥之二十三年以四方饑饉東西多故司 題效一割之用者聽循例輸聚各授職有差無論方 農告價 命大開恩例令草野之民凡有懷材抱藝

住持上賴 開覺路都城名藍知識若淨葊潔上人輩咸爲一方 國家名器爲護法地將以廣布津梁大 說法乃各捐金遵

明例輸授僧錄覺義爲淨土院

萬行因過故里其鄉宰官長者居士四衆人等願請

以發明向上第 名位為榮也今無盡上人抗志塵表迹超方外其所 弘法利生爲能事即古以道屬一方者爲之殆非以 邑郡邑谷設僧綱正會以領諸寺其品有差選道行 其徒繁衍乃立官以綱領之兩京設僧錄以統諸郡 惟我 非一也故歷代君天下者崇其教重其人其制不一 護持佛法正要即世諦而證眞諦尸其任者大都以 俱優者次第授職各有攸司所以然者葢藉世法以 家教遐敷即依法修持權實並運而彰明其道者又 滅者爲得爱自法派東流由漢迄今二千餘載無論 證真如因衆行而齊極果固不以端居無為沈酣寂 名而說實相者妙在圓悟一心明融萬法即世諦而 之漏禮由是觀之其出世之法果雖世哉故不褒假 感交映如水澄月現不涉思惟若觀音之普門善財 圓融無不含歸故不擇類而應身在隨方而利物機 法道賀乞不慧爲又以贈之曰四大雄氏之御世也 迹現迦維道被三界其設教也主清淨出世以廣大 聖祖神宗物業垂統其法度品詳該羅纖悉 義諦者固在所祕即其四衆歸望

> 大之行。正可以執假名而味實相者比耶經云若以人之行。正可以執假名而味實相者比耶經云若以 音聲色相求法者非見法也余故曰今此四衆若以 聲色求菩提有資上人上人若執假名而說法有資 哪不聞之資師者墮資衆者慢有一於此又何以明 佛日報,朝廷護法之恩乎上人行矣儻道經金色 世界其以毗耶病叟之言質諸曼室將以普告大衆 照各各即假名而證實相藉此津聚顆超彼岸也時 照各各即假名而證實相藉此津聚顆超彼岸也時

送建上人遊八桂序

喜而語之日善哉佛子應知諸佛菩薩凡有所作常 皆發無上菩提之心爲出世津栗之初步也老人數 哲愛無上菩提之心爲出世津栗之初步也老人數 皆發無上菩提之心爲出世津栗之初步也老人數 皆發無上菩提之心爲出世津栗之初步也老人數 皆發無上菩提之心爲出世津栗之初步也老人數 皆發無上菩提之心爲出世津栗之初步也老人數

名獨覺朗然大徹照破重昏故稱大覺日用而不知 已則 見有物從人則不見有已不有物則萬物皆妙不有 閒種種方便而開導之所謂自覺而能覺他即先覺 懷實迷方枉受辛苦驅馳生死甘墮苦海可不哀與 知可不哀與不知即不能用不能用則如持珠作丐 各具此靈覺之性第日用而不知嗟乎具有而不自 者也所言菩提者乃梵語也此云覺也覺者乃一切 苦亦所甘心故聖人所行不虚其事皆實以世出世 覺後覺也夫自覺者則於物不迷覺他者則於物不 是故聖人不哀其所不哀特哀其可哀所以出現世 故云不覺不覺則爲凡民凡民即衆生也以衆生各 衆生本有之佛性靈知寂照故曰眞覺了然自悟故 閒無有一法過此菩提心行此菩提行作此菩提事 險道備歷三途但有能使一人發菩提心者即娶衆 弃不迷則會物歸已不弃則捨已從人由歸已則不 即出生入死因此緣此除此一事更無餘事雖身經 爲一事者謂以此菩提心教化衆生故爲一大事也 已非真知已非真則已即物知物皆妙則物 **今一温烈字**

5

壽僧綱一山敬上人序

目連故事以此為報親恩顧問極也余時爲衆講楞人時屬休夏自态上人亦建孟蘭法會飯十方僧效 上及諸比丘四衆人等各持香花而作供養以祝上會發 一山敬上人六十有一歲也爾時城中宰官居 余被放嶺海之四年己亥秋七月望乃法性寺住山

樹來裁於壇側且日百六十年有內身大士於此樹 依止之及傳二祖且指楞伽為心印及智葉攜菩提 今宗分五派道被寰中皆以此寺爲初地即達摩之 下出家演最上乘及六祖果發迹於斯若合符節迄 **跋陀攜楞伽四卷至即建籾戒壇於其地達摩來必** 至菩提達摩達摩航海而來初至五羊先是宋求那 十九年末後拈花以正法眼藏付大迦葉二十八傳 者凡重臘是以戒爲本也以戒爲本即佛之慧命所 年而以初入受持戒品三月安居戒體無虧爲一臘 **歎而作是言曰夫世人之壽不出我人衆生所謂壽** 而爲僧耶所謂讀佛慧命以是故耳惟吾佛說法四 品即順獲之豈不以自性清淨而爲佛達自性清淨 若人受佛戒即入諸佛數且你壽無量而日緣登戒 孫矣是故戒退淨則慧命頭戒本固則慧命長極云 住者法臘故古之高層日世壽又日法臘葢不拘歲 者相也吾佛不取而僧亦不住然佛所取者慧命所 由以臘不以年故有年高而臘少者有重年而耆壽 伽新經罷正以此為佛事聞上人發如是心歡喜讚

> 中興之機又在今日上人功德無量即上人之慧命 效上人行從少至老由子及孫如此則化化無窮源 本又能親近知識隨顧修行後之弟子荷觀上人心 如是心作如是行以佛事而報親恩以淨戒而爲壽 豈小綠哉余初入粵至其寺叩其門至再呼而不應 地即是佛受用今上人住此地統此僧見六祖如生 士歐起鴻輩各持香花重宣此義為上人壽 無窮矣又豈以區區世壽爲匹哉乃命弟子逋岸居 源不竭萬一有六祖者出翻然如昔之盛時則此法 然荣茂而不自知其然矣今上人年六十一一旦發 導之功又在主之者力行則四衆歌感如時雨降 幼皆發菩提心煥然一新耳目是置諸人佛性昔 者今予居此不三年而諸僧濟濟一時翕然無論老 延長由古及今以至永永無窮耶故經云佛子住此 道法不泯六祖之眞身猶存豈非以戒根堅固 而今適有耶葢佛性人人本具但無知識開導耳 慧命 油 無 開

送蘊素穩禪人還金山序

余少貧遠遊之志以病未能隆慶己已買舟過金山

うけけ

喜心倒劇嗚咽霑巾者也嗟乎人生一世歲月遷說 託問訊於山靈海若余將返棹楊予江頭重訪三山 今且言歸余因紋往事記別後之懷以謝諸故人且 回首人別居然夢幻耳余事竣還山隱公相隨曹溪 讀知爲金山虚舟鋐公之孫也予感舊興懷誠所謂 之滸適有上人從豫章持大多丁公書來謁開函配 雷陽以了前件歸五羊謁東司以聽從事維舟珠江 承也丁未春莫子蒙 恩在宥走端州謁制府奉撤 善財石上月色潮聲可似當年風味否然亦無從問 情乎遠隔萬里親舊凋疎音問零閱嘗念妙高峰頂 蒸每一與懷則肌膚生栗毛骨清凉時特以此片石 長流枕撒於連廬重壁之閒爲消塵解煩之利劑也 沈瘴海十有二年飲蠻煙而食毒霧馳火宅而坐炎 臨縣鏡自爾一別四十餘年忧忽思之端若夢事深 高空明月之下秋水長天空洞一色眞若履玻瓈而 子從遊者衆每飯食之餘與一二高士振衣濯足於 然頂天立地氣象山主同公旻公款余居二載諸弟 余愛其萬里江流拳石撑空孤標獨立眞若丈夫挺

> 復似當年粥飯氣矣。 羅瓦鉢閉也儻有問者為我報道今已獨變皤然無蘇公與張方平未了公案穩公持此其無乾沒於飯於妙高臺上坐楞伽室以說藏識海浪法身境界了故事幸為驅風伯以淸江流埽浮雲而放明月延我

送吳將軍還越序

老舍將軍指不再屈遂力請出將軍多方調護置之者舍將軍指不再屈遂力請出將軍多方調護置之者舍將軍和將軍的不敵其能而斬誠俘擴之功最於大將軍知將軍的人。 一大將軍知將軍的不敵其能而斬誠俘擴之功最於大將軍知將軍的不敵其能而斬誠及花封攻巢破穴楊 大將軍知將軍竟以忘身一數心警俱竭事竣一病而死 大將軍知將軍竟以忘身一數心警俱竭事竣一病而死 其不偶也乃負妻戴子而歸將為五湖之遊矣將軍 上在力也余以是知將軍若九方之相馬豈可以牝牡 也之別非余所以稱將軍也行過曹溪將則余適 是一之別非余所以稱將軍也行過曹溪將則余適 是一之別非余所以稱將軍也行過曹溪將則余適 是一之別非余所以稱將軍也行過曹溪將則余適 是一之別非余所以稱將軍也行過曹溪將別余 是一之則非余所以稱將軍也行過曹溪將別余 是一之則非余所以稱將軍也行過曹溪將別余 是一之則非余所以稱將軍也行過曹溪將別余 是一之則非余所以稱將軍也行過曹溪將別余 是一之則非余所以稱將軍也行過曹溪將別余 是一之則非余所以稱將軍也行過曹溪將別余 是一之則非余所以稱將軍也行過曹溪將別余 是一之則非余所以稱將軍也行過曹溪將別余 是一之則非余所以稱將軍也行過曹溪將別余 是一之則非公內食者

周子悟一篇序

學也解不及意笑不在言

海內名公大人莫不折節傾心信若谷響以其言有周子希顧字如愚泰和人三世孤登篤孝苦心堪輿

視陽春則化工不易一樓矣由是而知周子之親形

之融會而爲穴故凡人之生也病苟砭得其穴則足 後誠不可言傳而在妙悟故周子之論山川必本緒 中且眼不能著纖塵而日容山河法身不可以色相 以發其奧耳嘗讀王維詩云山河天眼裏世界法身 陽不經故也以其左來而右去故始大而終小即此 太守任使君入曹溪曹溪爲六祖大師法身住處其 也陰陽一氣也死生一致也以一氣而視大地則目 以啓死生人之死也葬若阡得其穴則足以化凶吉 **真氣真氣聚而成形譬若人身必有周身之血豚脈** 而日包世界繇是觀之又奚可形色言之哉此理之 及出悟一諸篇益見周子之得於自性之異特籍形 不世道場也余以凋弊竊疑之質諸周子周子日陰 山粉開於梁初神僧智樂大師謂與西天寶林無異 無全牛以一穴而視死生則脈無遺變若從一葉以 固其理心語曰天地同根萬物一體是則大地一 **徽而事不爽故聽若聲音奇驗非一己鄭秋杪因韶** 一言疑滯頓釋由是而知周子之言形家非面形也

告本於性情由性味而為空太極也空暗而結色四大五彩於是乎變形之本也性變而成形天地而位大五彩於是乎變形之本也性變而成形天地而位矣傳曰致中和天地位萬物育此理之至也內外五矣傳曰致中和天地位萬物育此理之至也內外五分原出於一情與無情共一體也人之生也動而有知得天地之中者則於一身為聰明利達故其死也知得天地之中者則於一身為聰明利達故其死也知得天地之中者則於一身為聰明利達故其死也知得天地之中者則於一身為聰明利達故其死也如得天地之中者則於一身為聰明利達故其死也不能是知世惑於堪與而妄爲禍福之論者皆不識一之故也周子之悟一非特爲形家言而其術亦非爲成形者說蓋本諸身而求乎性也故其名曰悟一官或是知世惑於堪與而妄爲禍福之論者皆不識一之故也周子之語前無周子不能發古人之必後無不形知陰陽之實余謂其書可傳故三復深飲

脂太和老人序

而致意焉特序以發之

其無量億衆矣雲行鳥飛飄然度嶺來遊於專余睹身佛事到處指迷見形而歸心聆音而解縛者不知老人不知何許人抓髯瓊璋肩橫一杖足徧諸方隨

論風生機鋒電捲隨其所應而爲現身說法察其根陰應以何法而得度脫即其所應而度脫之於儒則捏應以何法而得度脫即其所應而度脫之於儒則因主,以其道不度授言不度發如養由之射師文之奉出故其道不度授言不度發如養由之射師文之奉出故其道不度授言不度發如養由之射師文之奉出故其道不度授言不度發如養由之射師文之奉出於廣源之野不知此身之在天地外物之在此身心神怡心醉如兀如疑老人方將曳杖而遊於事為企識然驚覺追之水瀕乃歌以送之歌曰雲之產,所余蓬然驚覺追之水瀕乃歌以送之歌曰雲之產,持君之心兮不生我所思兮神征望不及兮天聚重情君之心兮不生我所思兮神征望不及兮天聚重情君之心兮不生我所思兮神征望不及兮天聚重情君之心兮不生我所思兮神征望不及兮天聚重情君之心兮不生我所思兮神征望不及兮天聚重情君之心兮不生我所思兮神征望不及兮天聚重情君之心兮不生我所思兮神征望不及兮天聚重情君之心兮不生我所思兮神征望不及兮天聚重

歸來分夢驚

十甲子矣七月二十三日乃出胎時心山中諸大弟曹溪前住持東湖賢公生於前丁亥歲今歷四百八壽曹溪前住持東湖賢公八十一序

故以心印心如纜長夜之燈以證不生不滅之果斯 無生則真常寂滅斯則寂滅而生則無生不生即生 實由生以入無生因滅而至不滅不滅則法性常生 古不磨千秋若在是以吾佛自謂我處靈鷲山常在 由是觀之則人同此心心同此壽無疑矣惟公生於 而滅則滅而不滅此實千聖之眞傳一心之要旨也 燈所載于七百人盡出曹溪一脉是皆悟明此心者 見孫者端在悟明此心不以世數為久近也歷觀傳 骸之可拘拘色相之可擬議者哉是故吾徒爲佛祖 時而不遷括十方而無量故古之眞人悟此心者萬 以其此心先天地而不為老後天地而不為終超四 德也是以德不以年日無量壽者是以心不以形也 我人衆生也故吾佛世尊斥而不許且云童壽又云 而不滅若吾師六祖道骨凝然法身常住斯豈以形 無量壽是又以獨稱何耶葢童壽者謂童年而有耆 緣以壽公余欣然爲梁而作是言曰夫壽者相出於 歌喜燒香散花而作供養一時作禮請予作具壽因 子獨稱公爲最上耆年感公德教素字於衆心各各

> 曹溪而受於法門老於佛事由先以已身爲衆身故 今得以衆壽爲已壽且茲山之衆千人人各有心心 今得以衆壽爲已壽且茲山之衆千人人各有心心 各其壽誠以衆壽壽公則復以公壽壽衆如是展轉 以歷無窮如以一燈傳千燈燈燈相續而無窮無盡 以歷無窮如以一燈傳千燈燈燈相續而無窮無盡 知八十之年如馬體之一毛太倉之一栗也今也樂 衆心以祝公期公以此心而爲壽以公之歲歲歲如 宗亦以祝公期公以此心而爲壽以公之歲歲歲如 今壽公之人人人不減回睹世尊拈花之日非逾六 會壽公之人人不減回睹世尊拈花之日非逾六 會壽公之人人不減回睹世尊拈花之日非逾六

贈良醫杏山梁先生序

所邀即請先生視之日此蜂窠疽也形如蜂寶寶日門道若獨孟楚痛難堪醫者束手談者皆推聚先生實值若獨孟楚痛難堪醫者束手談者皆推聚先生實有者誘導,有古人風予病篤時市人告予僕日聞里循循謙讓有古人風予病篤時市人告予僕日聞里循循謙讓有古人風予病篤時市人告予僕日聞

別陳生明瞻序

今日之活我若人也先生向未生子醫予之次月二 日舉一男咸謂冥德之報也故喜爲先生賀而贈之 治天下國家應手而捷則先生之澤流無窮又不止 不實報積爲陰德願先生之子若孫推先生之術以 生之功難矣先生之活人若有神回生之功非一初 身也醫治者誰耶即有盧扁之手舉之未必信信之 達則爲良醫方今天下之病百孔千瘡不啻予之一 先生之治予病因思古語丈夫處世達則爲良相不 心虚時從醫未決請禱再三獨許先生誠天假也感 色既而他醫治不可先生復來無異辭是知藝高 神焉初先生治數日或學他醫先生欣然讓之無難 先生之治病傷洞見肺腑技若弄丸尅期此功若有 而未必用況諱疾尽醫欲求完復太和元氣而收回 腐漬隨病應手無不立效藥無金石咸用菜草予視 生三子若日久則層疊侵骨不可治矣幸早發藥可 無慮先生治之之術多方言痛痛止言腫腫消言腐 而

漢漢澹然了無世俗態余器重之每見默無一語且 今上下人物咸指其所重者界之以融其性智此又 翻翻有出塵之思明瞻則精敏沈潛循循雅飭溶溶 則成千古時晤明贈爲愛弟也夷山先生豪畢超卓 **地子曰君子不重則不威學則不固是知君子之學** 明瞻養得其重矣無惑乎明瞻不屑屑以輕於浮俗 公以子視之及長而菜公且投閒日與明瞻討論古 贈八歲能舉子業十歲能誦古文辭其父見背菜峰 而長於重且習於重不獨知所重而固有所重也明 兩國之間一飯必以明瞻先明瞻從二老無外遊憶 於龍津與浮丘光禄惟吾王公密邏時時招余齊食 於予言無不悅及乃兄勛卿荣峰公挂冠歸卜西園 聞焉丙申歲余奉 先生同客燕市自爾余謝人閒世先生亦遊宦途無 固以重爲本也嘗試論之人生之性也本直質而無 識予爲畸人遂與莫逆予時先知嶺南有歐慎伯與 萬曆初余乞食長安市會夷山陳先生衆中 一老節義爲一代人倫冠不獨重嶺南明聯生於重 韶遣嶺南二月至五羊訪先生 見即

en de la companya de la co

方子振奕微後序

若李本寧太史所言非特奕也及余被放嶺海丙午市所遇靡不亟稱之殊無議其短長者私識其人誠 余少知方子振童年以奕鳴而未見及余乞食長安

軋軋則氣勝而實德尟子振獨不然循籍雜飭不以 以稱哉予雖不知奕今見子振對蕭公局愧不若浮 爭斯其品異而技亦神矣彼矜矜操刀而割者又何 固謂子振之奕以道而進乎技也余觀子振非獨技 追敵來而順應因是而知其微乎微矣說者以奕喻 澄波心如皓月機先而預定神動而天隨客往而不 處勝而若不爭意氣閒閒笑傲自邁胸衣翰然局若 長自多臨局若無意遇敵若不知敵虚而必告以實 射與秋之奕諸皆有述焉奕爭道也凡爭者以名相 芝素以草聖何獨藝而技亦然若市僚之丸養由之 聖道德無論已若夫藝者左馬以文聖鍾王以警聖 山之對歐陽公因棋而說法也 而其人亦然老氏有言夫惟不爭故天下莫能與之 兵余則謂夾可類禪葢處乎不動而運手動者也余 也嘗試論之道在天地凡得其精而神其化者謂之 及觀與蕭公對局則知子振之爲奕以道而進乎技 中人異哉迺出近與黃石甫所布奕微余尚不測識 秋杪子振同蕭觀察來專過訪曹溪一見居然心鏡

之居無何堅音怒公至一衆歡喜懇請公初以歸宗 之二年耀公以障緣去一時檀越皆望予令人以主 畢備乃聯諸同志結青蓮社背誦妙法華經遵戒定 謂以金剛心之所感結故菩薩修行必以此心而爲 是以吾佛於菩提場初成正覺其地堅固金剛所成 謂之日大哉法界以緣起爲宗也故一切諸法皆緣 爲家山未妥乃還安置今應命往過別五乳子喜而 因緣即投老匡山耀公涕泣留之未能也及予入山 爲末法一最勝道場也讚歎久之子了達大師末後 而來睹其規矩雅肅安居精潔四事豐美人境俱佳 公與諸檀越特建佛種堂迎予休老丙辰冬千東遊 慧三學以爲梵行不數年而能誦者三十餘人往耀 佛心地法門故命千百億釋迦流傳此法所謂爲 行本所言金剛心者即然網所說金剛實戒名爲諸 粉其始太史王公成其終先得很崖耀公住持莊嚴 金沙東禪古利也自達觀大師重與弟子孫氏伯仲 心之所建立佛土淨穢隨心感變而成壞亦以之

a Assess take take A a seath with.

其中經行及坐臥如此則不負檀那亦不負自己出

聚會箇箇無爲又何有於子孫之業公以如是住如 禮界手低頭皆為妙行則一切因緣無非佛事了無 之旨成佛之要無出此者乃目前現成公案也公今 宗然網論宗起信是則此三皆最上一乘發明一心 故耳即此社規遵三學之制三藏之中經宗法華律 水兽沾何有一已之私若以大圓覺爲我伽藍十方 專淨業苟以大悲爲心則普視同體冤親等觀了無 息日用頭頭皆眞解脫且公素持行願普門二品以 披厭若以智照一心了達無明則煩惱不生諸障自 寂然是爲人如來室若以法華爲佛種子則一 往矣若秉佛心而爲住持即其地爲金剛所成身心 遵此戒則凡所建立世出世法皆不成就以無根本 行成於一念所謂佛子住此地即是佛受用常在於 是持如是安居則當下轉穢成淨三學圓於一心萬 人我之相若以普賢爲行則捐捨身命以供大衆滴 爲成佛之緣故曰佛種從緣起吾徒爲佛子者苟不 大事因緣出現世閒葢特傳此金剛戒耳惟此 贈 戒

長舌相 世一大因綠屯當以此語揚之佛種堂未必不爲廣

送無言道公住持少林序

元無實法與人豈期人人病眼空花且又邀花結果 以不生者世其業無言道公承二十五世幻休潤大 回頭頭知本有此則知之一字衆妙之門矣噫佛祖 出身爲人說破靈山百萬衆傳燈千七百都皆一 具足由其具足而不知故黃面碧眼忍俊不禁特地 喜合掌而言曰佛未出世祖未西來現成家業人人 官居士衆皆歡喜讚歎予來自東方那羅延堀亦隨 師法流令人天推擁而住持其家諸大比丘刹利字 歸之其心大矣厥功懋哉自是當家種草代代而生 此而出其如派多而源混故我雪庭大師總衆流而 摩以震旦少林爲菩提初地十方無盡法流源源從 世尊出印土踞蠶山以優休羅華爲菩提種子既達 唤

界為家大地為菜虛空為量若不立一塵則不能現

不重刮金篦何以世其家業陸乎難矣然佛祖以法

佛祖之心然哉此則知之一字衆禍之門也吾人若

念之若不立一塵則資佛祖若立一塵則非佛祖所 身若立一塵則不能度生今公以亦身而全荷其業 拽百川而歸源豈易易哉公且行矣諸聽諦聽善思

以第公者公其勉諸

送仰崖慶講主畫諸祖道影序

旃檀香往刻其像驚子慮衆工凡品無足盡其妙好 背世尊居忉利三月優闐王思之不巳乃命工者 意諸祖皆同一身一智慧力無畏亦然故日心如工 種莊嚴偏十方界者皆自旃檀始應夫豈佛然哉吾 爾度生無量其像亦垂手而答之故凡雕刻彩畫 遂以神力化三十二人各注一相相成請歸王城觀 多身慶公於一念頃圓成度生事業而達師 多人而方成一像今丁生以無作妙力從一手而現 事業皆不難一毫端三昧耳嗟乎鶩子極盡神力以 事業又安得而畫之哉居常闕然及讀達師述丁生 畫師畫出諸形像夫形像可畫而神通妙用及度生 者與生佛等及世尊從天宮來乃拜之日吾滅後賴 畫諸雅道影序幷送慶公求畫是知神通妙用度生 彈指 持

恩隆重香火無託故荷延耳禪師因問熟堪荷寺事

佛法付囑國王大臣故歷代相承惟我國家崇其教

重其人上下一體至我

聖母弘通三實超越前代

涅槃時有六萬億菩薩願於末法影響流通且又將

家業撈漉人天哉今躋末法六百餘穓矣當世尊將

實希者以教理存而行果關網已半弛將何以網維

其人葉葉相鮮花果茂實且日無果至於末法則秀

事何師潜然泣數行下日在非戀戀浮名第念 聖事何師潜然泣數行下日在非戀戀浮名第念 聖天子臨御之初年正沖 太上母憂勤鞠育惟 聖天子臨御之初年正沖 太上母憂勤鞠育惟

- 315-

平公輩止於此豎大法幢人天衆集和尚據師子座、法之處和尚初隱終南發明心印後攜其弟子變松王舍城北有大精舍日廣濟乃大知識實藏和尚說

贈大輪端上人住持廣濟寺序

也香年閒說皆大歡喜即持此一葉以問訊上人上 續佛慧命上報 擬議其精粗優劣耶上人果以此法住持是將可以 大光明藏與十二大士密說圓滿修多羅門乃日以 空生空生間佛所住世尊乃告以應無所住而生其 份臘高八十而道風與日俱大振平公謝幻緣去復 俱奪理事雙忘此又豈可以王城精舍圓覺伽藍而 揚眉瞬日一棒一喝之閒五教齊敗千門頭會人境 授法於實藏和尚和尚得法大川禪師據臨濟正令 滅場修無作行又豈以有所住而住哉雖然上人親 大圓覺為我伽藍身心安居平等性智此所謂住寂 伏其心果何住耶雖然登以無住爲住哉抑聞佛住 心不住色聲香味觸法生心且日應如是住如是降 桓精舍其弟子干二百衆各推所尚爾乃以長老稱 咸皆數喜乞一言以讚歎之間之佛住迦毗羅國祇 以其徒端公繼山門事都城耆年龍華瑞菴上人輩 平公即領住持事接納四方名領海內三十餘 人其無謂我毗耶病夫非奪妳之手也是爲序 國恩誠所謂佛子住持善超諸有 年和

爾布織塵學而大地全收不分而偏則需澤善施不

有是哉子作去來之想耶嘗試觀夫片雲起而太虚

姑捨子去終當攜手同歸焉幻人于徐而進之日語

送方山暎川法師幻遊序

败鯨波而吞滄海叱大塊而噫長風直使萬竅齊鳴 林饑則飲醍醐而食栗棘時或鼓腹搘頭捬髀雀躍 海印之光捫摸虚無指揮萬象倦則鋪瑤草而臥長 把臂而遊登金剛之峰入那羅之窟乘堅固之後泛 山子聞而喜之即杖策而來搜我於窮髮幻人相與 幻人方避影東海據長空大谷與煙霞麋鹿爭雄方 依寂滅場現諸幻事揭大藏於龍宮受天人之妙供 心已而幻人從幻緣去方山子即入如幻大解脫門 幻人往遊都市遇方山子於大幻場中相與莫逆於

参巳下古本

喜而忘歸不覺兩更四序一瞬矣時則方山子蹶起

而謂幻人日聞之不死之鄉非蜉蝣之所擬廣漠之

野非蠟製之所知信乎顧當與子死此耳幻緣未盡

又何浮光幻影野馬塵埃而點太清之量哉方山子

殊流鏡驟曾不知爾我之在乾坤朝昏之爲日月也

憨山老人夢遊集卷第二十一

子死於那羅延堀

彈而刮之若珠破臀除其無忘我交臂之盟誓當與

立處耳子當勉矣無作去來之想也雖然空花結實

散而周則山岳競秀由是觀之則諸法未嘗離於起

警目之所愚水泡穿珠癡兒之所惑子其行矣試爲

憨山老人夢遊集卷第二十二

侍 者

福 善

誦 脚踏 日錄

門

嶺南弟子

劉起相

記

復涿州石經山班公塔院記

佛法以待慈氏斯巳甚爲希有矣及觀光上國游目 昔嘗閱藏教略南岳思大師願文願色身常住奉持

寺沙門靜玩尊者忍三災壞劫慮大法湮忍欲令佛 小西天見石經何其偉哉葢有隋大業中幽州智泉

兎同巢突師愴然而悲即以 琬公是時塔院業**已**為寺僧賣之豪家公骨將與**狐** 燦若金剛恍如故物一衆稱異悲喜交集巳而再禮 有函函中得銀匣銀匣盛金匣貯金瓶藏舍利三顆 禮石經於雷音寺時忽光屬嚴壑及揭殿中拜石石 后聞之遺侍臣陳儒齊齊具往供儒隨師再過雲居 完越六年壬辰六月走都下屬太僕徐君珠造現函 將送置蘆芽萬佛塔因暫憩潭柘 遊義帰回至金壇爲報父母恩手書法華楞嚴二經 若亡子見父母廬墓也抱幢痛哭徘徊久之而去南 起其是之謂手初達觀可大師於萬曆丙戌秋訪清 於那羅延堀北遊雲居至琬公塔一見則淚墮如雨 師尚未卒業其事顛末具載芸居各樹磷幅別惟我 唐及宋代不乏人至有元至正閒高麗沙門慧月大 有七河洞洞皆滿由大葉至唐貞觀十二年原未終 而化門人導儀遷法四公相繼五世而經亦未完歷 種不斷乃规刻石藏經板封於涿州之西白帶山山 明無聞焉何哉噫苟非其人道不虚行佛種從緣 聖慈所供齊親金贖 聖母惡聖皇太

此法處剛求而得之即於一毛端頭現實王利一 劫觀十方界無芥子許不是捨身命爲衆生故而求 法者則為報佛深恩矣靈山會上佛欲以此法付驅 須復安舍利以此中巳有如來全身故是以能持此 吾佛骨血心髓也故日此經在處皆應起塔供養不 塵裏轉大法輪是則所說三藏十二部言言字字皆 卷唯智眼能見以如是身說如是經是法甚深夷少 有在是時人天百萬無一人敢吐氣荷擔者顧此大 有能信者信之者登易易哉是以吾佛世尊於廣大 盡大地爲常住法身唯至人能知一微塵有大干經 火資達師命清記其事順清何人唯唯而作是言日 **朽哉因感遇與珠君共捐金購地若干畝爲守奉香** 眾豈非英傑丈夫哉況親承佛教·心預佛恩而獨浚 日而至右繞三而默存儼然凛凛生氣嘆日公其不 師躍然而喜即拉滿同過雲居禮讚焉冒雨衝泥窮 **捬掌痛飢食頃師上足密藏開公持贖院券同葵至** 避暑上方山清亦來自東海關師於兜率院談及此 之不足中實 人楊庭屬弟子徐法燈者助完之師因

耶抑六十二億之一耶何其願力廣大如此也飢夫 劫衆生受其賜微公佛亦左在矣是親承密印而來 條法界一始終同休城苦心深慮克紹如來家業者 戲因修者易草物者難續發傳燈代有其人若夫解 **濁世知公者希則公者實至若知公則公又唯我達** 除慶喜去童壽唯我班公一人而已愿公功大矣窮 觀大師 **琬**公無以續其業班公固高非慧月無以繼其志於 方惟我南岳大師總持以願論不若琬公見之於行 以明自心心不明無以護正法法不護又何以報佛 事雖然佛業固大非南岳無以振其綱岳題固弘非 恩稱弟子哉惟其佛滅而法滅法常則佛身常住矣 佛非法無以成正覺法非佛無以度衆生生非法無 **慈氏獨二炎歷窮劫手足見持法之難也如此由是** 佛以常身據法界建大業至若守護封疆者固其多 觀之能起一念護法深心者則爲諸佛護念矣良由 何以故且又但許如來滅後五百歲如是而已況待 巡畏縮如此必待從地涌出六十二億恒沙衆者此 一人而已唯公與師正謂千載旦暮之遇也

> 院子世不知公則不知佛然不知師又何以知公哉 問謂公心即佛公骨即經廣長舌相不滅不生佛法 不朽賴公骨存骨與法界相爲始終今師與公生死 不朽賴公骨存骨與法界相爲始終今師與公生死 界之經也豈小綠哉嗚呼公之骨託於師師之心刻 於石後之覧斯文而不墮淚者猶人聞父母心血骨 於石後之覧斯文而不墮淚者猶人聞父母心血骨 於石後之覧斯文而不墮淚者猶人聞父母心血骨 於石後之覧斯文而不墮淚者猶人聞父母心血骨 於石後之覧斯文而不墮淚者猶人聞父母心血骨 於石後之覧斯文而不墮淚者猶人聞父母心血骨

涿州西石經山雷音堀舍利記

隋大業十二年歲次丙子四月丁巳八日甲子於此一時八業十二年歲次丙子四月丁巳八日甲子於此學皇太后聞之遣近臣陳儒趙贇等爰齊供資五月寒申朔十二日辛未師攜侍者道開如奇太僕徐琰康申朔十二日辛未師攜侍者道開如奇太僕徐琰康中朔克变刈之是日光燭嚴壑風雷動地翌日寺住持明亮变刈之是日光燭嚴壑風雷動地翌日寺住持明亮变刈之是日光燭嚴壑風雷動地翌日帝在持明亮变刈之是日光燭嚴壑風雷動地翌日帝在持明亮变刈之是日光燭嚴壑風雷動地翌日帝在持明亮变刈之是日光燭嚴壑風雷動地翌日帝在持明亮变刈之是日光燭嚴壑風雷動地翌日帝在持明亮变刈之是日光燭嚴壑風雷動地翌日帝在持明亮变刈之是日光燭嚴壑風雷動地翌日帝大震,

檀金紫磨光聚三業六根內外瑩徹即無常身證金 剛體放大般涅槃諸大弟子諸天大衆各執旃檀沈 心演戒定慧光明薰蒸有漏無常三業變化所成而 合掌而言口原夫舍利者乃吾佛因地最初發金剛 劫生生世世緣會再踏命沙門德清記其事清一心 許中盛小金函半寸許中貯小金餅如胡豆粒中安 德圓滿故隨緣所現色身相好光明絕如實山閻浮 有生身法身全分之別始從發覺以至習漏淨盡三 辰八月戊子朔二十日丁未復安置石穴題住持永 銀五十兩乃造大石函總包藏之於萬曆二十年壬 迎入慈寧宮供養三日仍於小金函外加小玉函玉 所師歡喜禮讚既而走書付趙贇屬徐法燈者請奏 佛舍利三顆如粟米紫紅色如金剛開侍者請至師 水為養以焚其驅則皮骨血內變毛爪齒隨火光流 函復加小金函方一寸許坐銀函內以爲莊嚴出智 貯靈骨四五升狀如石臟異香馥郁中有銀函方寸 函內安置佛舍利三粒顏住持永劫計三十六字內 聖母皇太后太后欣然喜齊宿三日六月己丑朔

生具有如來智慧德相但以妄想無明業行所黨而 也分見而已是故其色但隨皮骨血內變毛爪齒而 力所見故學世尊生身全體止獲入解四斗耳且分 壞一一皆爲法身舍利豈有量哉但以隨衆生心緣 切山河草芥纏塵無非成佛真體畢竟堅固不動不 身心而爲常住金剛矣若演此光明普照大地則 进瀝八萬四千毛孔一一光明照耀無盡即此無常 成無常敗壞之身即日用現前念念潛注真光獨露 謂幻化空身即法身豈虚語哉由是觀之則一 處靈鷲山常在而不滅豈非法身全體耶噫永嘉所 者宛轉餅盤終古不息其願力者有求必應若曰我 動不流動現異不現異其禪定者凝然常寂其行道 珠如栗如菽又因禪定行道願力三種所薰故有流 有紅黃白黑色色不同小者大者圓者直者如露如 如水銀隨地類額皆圓名日含利此云骨生此生身 爲三而天上人閒龍宮各取建塔而供養之其流布 人閒者即阿育王以大神力遣使鬼神所建窣塔滿 一化爲金剛種子最極堅固入火不焚入水不溺 切衆

王適居首焉蓋亦二智所薰者是耶其我金陵長千 閻浮提而我震旦可目而數者一十有九則明州育 利感應記見隋神尼智仙得舍利一顆文帝初生尼 神僧康會所求豈願力所薰者非耶至若代代高僧 級舍利付騙之日兒當爲普天怒父重爽佛法用是 即擊而育之及文帝長頁大業思報神尼尼但以所 無數其所及者豈止十數而已哉竊自疑焉及讀舍 故稱赤縣神州況其土人多大乘根器而吾佛舍利 凡三學圓滿者閒多有之但日堅固子耳嘗謂震旦 經藏將示少分真身欲令衆生順見全體耶今我可 **琬公親荷文帝授手而來者耶抑我世尊願力所持** 山所至塔廟故大隋居多愚謂此堀所藏舍利者豈 盡建浮圖足矣何報我爲帝受之如命凡今城內名 富三吳時江左佛法未至而含利何緣先在地中光 所逮也耶不然何其感應道交昭善之如此也稱謂 三七種求而至吳人由是愛幻怪爲尊信法道流通 **騰霄漢僧會尋光而來吳尙異之及談此舍利且期** 師一至而含利即出因以授受 國母豈亦夙緣

> 崇敬事超越百代且賴此爲金陵定鼎萬世洪基迄 今浮屠光明照耀莊嚴妙麗與佛身等豈細事哉且 爱自此始代代相承千有餘年至我 窮劫豈值億世惟此舍利埋之久矣今我可師一至 此石經乃我琬公乘南岳願輪以待慈氏經三災歷 其半泊及我 故耶抑考琬公所刻石經由隋及元六百餘年甫成 至豈非吾佛以大願力弘護三實應時出現以延我 不待求而出現惟我 法身慧命於窮劫者耶不然何其出現易易之如此 如華一葉見無邊春欲令衆生從此經藏遠續如來 也故清得以詳記始末以昭後世使見聞者知聖不 虚應應必有由矣豈徒然哉是爲記 宗社福庇蒼生永永無窮使正法流通佛種不斷 明則翼然無聞豈我世尊示此少分 聖母尊居九重不期見而 聖祖神宗尊

大都明因寺常住碑記

誠之日日中一食樹下一宿以示族泊獲生一往不尊姓淨行者不度非入無生者不住故所住無常但惟吾佛世尊降神靈驚說法度人而諸弟子輩非出

. 20

non a Assess take land. And taket ather a 14.9 a

屬大師年登二十即輔定師以開拓之厥功大矣豈 而建利日龍泉寺爲往來休息曼殊法道於是乎大 絕先是有無住定大師以少林業依舊路嶺闢盜巢 方偏多知識初五臺道場為羣窓捡其咽喉歸依阻 大宗師所建也師生於保定甫七歲即披絕十八遊 四語禁心都城之南有寺曰明因舊名三聖葢雲崖 滅是則不但非福地且翻為毒海矣惟此未嘗不涕 生者耶是故建之者不無給孤應之者未必如佛居 之者未必盡老病無生者也故曰不納答僧吾法當 故百丈禪師起而大振之立清規以夾輔毗尼翼返 基分星布煙火相望鐘鼓相聞去雲逾遠本旨大乖 初制嗟乎人者居之豈盡尊性遺榮操淨行而契無 為老病者設置圖今日之事哉教法東流琳宮大利 豐美地後因老病不能行乞者立常住是則常住葢 乎啓大衆安居亦自此始然猶逐日行乞四事未嘗 林造精舍以延之不惜布金偏地而重閣講堂於是 王城利物以給孤長者將請佛說法乃就祇陀乞園 復初非有意人世高廣安居豐美口體之謂也旣而

心為住持以百丈心爲常住今後之居者以無分別 第屬余紀其事余聞之**歉喜踊耀而讚**日公以如來 月鐘明以紹隆三寶將以報佛恩祝 不許私凡所田產許守而不許賈願世世香火如日 不許損凡我子孫許住而不許及凡所施利許公而 病者安之往來者內之凡常住所須執事者許增而 自今而後凡山門一食與衆同賢者可得而居之老 至若醫身守綱者奈菜累何慶願以此為汞汞常住 壽慶公從禪師關余日明因固吾祖所物也慶因獨 目諸方梵刹往往居之者不體先聖所以建立之意 師也萬曆壬辰秋余隨緣王城會達觀禪師於大慈 母捐金重修其寺額日護國明因蓋功德本於大宗 其業然公以學行重當時據龍泉以說法內感 因寺又十年而大師入滅又五年其孫仰崖慶公世 華座傳毗尼法有年其道登昌於萬曆三年復修明 三聖寺以納四方又五歲入選爲大宗師奉飲命登 非夙願耶公居龍泉十載始入大都登壇受具即置 聖壽縣遠無 點

爲妙行借使天下聞風而樂起者處處不減祇園矣

正法嘉謨將或見於今日也公之功德可量哉聊以

公心刻諸真石以昭後世云

開錦屏山觀音洞碑記

以銘之日

時之未至久被塵埋時節適逢一擬便開聲振天門有力量人將金作由圓通大士蹈類現身豈獨於此有力量人將金作由圓通大士蹈類現身豈獨於此本不有聲湯湯流水有耳皆聞處處道場無往不在本不有聲湯湯流水有耳皆聞處處道場無往不在

。稷 光騰大地見聞功德不可思議 上祝 皇圖奠安社

聖壽無疆千秋萬祀

修五臺山鳳林寺下院方順橋大慈宣文寺

碑記弁銘

修行綠山素著中外。 師為首座師名德胤字徹天山西太原人始終發迹 下名山自五臺始延高僧十二員以鳳林寺二虎禪 文明蕭皇太后爲資 歲層崇及我 唐宋元累代國家帝后妃主崇奉之典班班可指我 靈異多端爱自漢永平摩騰者迹沿及三國六朝歷 五臺爲文殊道場有一萬菩薩於中說法應化無方 成祖文皇帝延大寶法王居之以後琳宮梵字蔵 今上御宇萬曆初我 先帝保 聖母為建鳳林寺以居之寺 聖躬大作佛事天 聖母慈聖宣

> 皆我 神之貢乎寺落成命沙門清紀其事謹稽首爲銘以 守此土者豈不推聖心所自敢忘君親之惠而取鬼 亦將共其悠久必有鬼神阿護於其閒後之近此地 計哉惟我 衆僧資色身與慧命堅牢其功德福利豈可以數量 香火星羅將以上祝 吳公輩皆深重師故其道場隨處成叢林晨 聖母慈恩廣大實師有以感之也今斯地為 聖母慈恩與天地同其博厚而此功德 聖壽無疆保 皇圖億載固 鐘夕梵

銘之日

如膏有衆如雲 若堵思修慧命心藉色身不勞持鉢香積盈盈有土 施為無非為國建此名盛以延梵侶從十方來如雲 珠宮梵字隨處叢林惟我 惟聖道場羣靈堀宅爱枕北方外證藩籬內拱神京 至哉坤元萬物資生職概太行為天地經卓彼清凉 聖母聖心以土爲金此地常住惟 聖母育成 帝德凡所

功不 析就我 帝釐天長地久

爲給侍師道重方外名達內庭

聖也隆重超越常

流若供奉徐公清明王公時及諸搢紳先生大司馬

寺地十頃餘畝以護香火將垂永久仍度沙彌明理

縣方順橋邊置接待寺一所額名大慈宣文叉置膽

完以臺山去京千里山深數百里仍就保定府滿城

自迦維降迹梵刹始與白馬東來僧居肇啓歷代終 伏牛山慈光寺十万常住碑記

5

莊田二所爲永遠供奉香火命僧智明住持寺事明 山建造慈光寺爲十方海會叢林置太河川黑峪保 盡化伽藍乃捐膳羞之資命近侍太監姜某於伏牛 隆三寶建大法幢使城內名山皆成寶地寰中勝迹 聖母慈聖宣文明蕭皇太后承悲願力現崗太身興 費此世尊所以攢眉至人因之發慨者也恭惟我 專門抑且人存我相使二利之誥徒存四事之緣虚 與 心以法爲命以十方爲常住以衆價爲叢林一食必 聖母素所崇重者明行日和尚因誠之日爾以一介 初受業於京西天台寺實珠和尚以苦行聞當代 心安居者以和爲事世衰道微去聖愈遠不但法無 事冊執已班慢人蓋夜六時磨鍊三菜精勤萬行屏 凡愚叨承 練魔之業無非精修一心調伏三業雲來者以法為 崇之典十方海會之林由百丈弘律制之規伏牛設 絕諸綠將以祝 我今日之言明奉戒而行以此聞 、衆同 一事必通衆議以道德爲首領以公廉爲執 慈命撫心自省豈不永懷爾其以佛為 聖壽無疆報 慈恩永劫其無忘 聖母且以修途

> 薪火之傳永永無盡也是為記 林永為後誠將來住之者,又以此誠復誠後人,其如碑記茲以智明所以住持其業者,併誌之以垂範歡稅,就是以智明所以住持其業者,併誌之以垂範歡稅,就是以智明所以住持其業者,併誌之以垂範散

重修之罘山神廟記弁銘

發那城東南十里許有之眾山山有神日浮佑疾是 無所考嘗周覧方與大概自崑崙東折而渤海注焉 您金銀而神仙率都居之稱不死之鄉秦皇以是東 您金銀而神仙率都居之稱不死之鄉秦皇以是東 遊黃腫而窮成山登之眾以臨朝陽刻石記焉則茲 此始封其來尙矣迄今千五百年雖往來代謝觀其 故事如指掌維是黔首歸依歲時伏臘而山亦產英 效靈風雨時若使物不寯而年穀熟故廟祀不絕全 效靈風雨時若使物不寯而年穀熟故廟祀不絕全 於事如指掌維是黔首歸依歲時伏臘而山亦產英 於野四楹左右廊無畢備不期年落成嘗清杖策過 然出資若干鳩衆命工而一新之經始於萬曆丁亥

海印請子為記廼為之第日

照鐘圖鼓朝吼莫吟祝我 帝臺山高海深 百川以歸崑崙東指之眾巍巍秦始來登蓬萊彷彿 百川以歸崑崙東指之眾巍巍秦始來登蓬萊彷彿 漢武神人大言恍惚惟山之靈千秋萬祀真我邦家 漢武神人大言恍惚惟山之靈千秋萬祀真我邦家

其實以序之日嘗聞吾佛世尊度生巳畢宜乎說法

故山之天寧乃因龍華瑞葊大師持師狀乞記乃按

其徒某皆多少室小山和尚嗣曹洞血脈即今開法

四十九年未談一字末後拈花爲別傳之旨自靈山

量計而竟不許其枝流深有旨焉及六傳之後南岳

青原下則分爲五宗其門庭施設建立不同猶耳目

迦葉破顏之後西天四七東土二三所施不可以限

孤硬澹然若無所寓納衣數食二十餘年內府太監張公邏電閩而認之捐金重新梵字諸方學者日益提居無何師念家山寥落有歸歟之喚杖策西遊祖進居無何師念家山寥落有歸歟之喚杖策西遊祖理居無何師念家山寥落有歸歟之喚杖策西遊祖明永宗覺性今將已矣師何以續之師因說偈曰智能廣達妙用無方蘊空實際祖道崇香諸弟子唯唯志之未幾尋歸吉祥滅影人世接納四來道風日益志之未幾尋歸吉祥滅影人世接納四來道風日益大振一日無恙召衆說偈安然危坐而逝萬曆二年大振一日無恙召衆說偈安然危坐而逝萬曆二年大振一日無恙召衆說偈安然危坐而逝萬曆二年大振一日無恙召衆說偈安然危坐而逝萬曆二年大振一日無恙召衆說偈安然危坐而逝萬曆二年大振一日無恙召衆說偈安然危坐而逝萬曆二年大振一日無恙召衆說偈安然危坐而逝萬之隱寂石洞

重修巨峰頂白雲菴玉皇殿記并銘

重修悟山觀音菴記并銘

耶是爲記

即引長波儼然坐蓮花而觀水月也卷構成乞余為所因以名之。 明嘉靖中有僧名近悟就址結茅以所置以名之。 明嘉靖中有僧名近悟就址結茅以所置以名之。 明嘉靖中有僧名近悟就址結茅以居重修觀音大士殿三楹左右夾以耳室窗吞雲霧居重修觀音大士殿三楹左右夾以耳室窗吞雲霧

A: 1

金銀而神仙在焉故居塵埃而處混濁者聆之則神

東西識別大士隨處現身一微塵裏轉大法輪苦海無涯 原無盡燈照破暗冥水中火發火裏蓮生是眞實法 亦來於此證三摩地一草一木盡屬法身是名常住 亦來於此證三摩地一草一木盡屬法身是名常住

為記嘗閱之海山有三山日閩苑蓬萊方文宮闕咸 為記嘗閱之海山有三山日閩苑蓬萊方文宮闕咸 為記嘗閱之海山有三山日閩苑蓬萊方文宮闕咸 等最為奇紀項有菴日白雲故稱古利就廢至我 時最為奇紀項有菴日白雲故稱古利就廢至我 時最為奇紀項有菴日白雲故稱古利就廢至我 時最為奇紀項有菴日白雲故稱古利就廢至我 時最為奇紀項有菴日白雲故稱古利就廢至我 一峰傑出日巨峰當二年之尼上揮重霄下臨無 則一峰傑出日巨峰當二年之尼上揮重霄下臨無 則一峰大山市建玉皇殿三楹邑人周氏某率萊中丞出 是遊目海上探索形勝策杖其顕逝下居太清乞余 為記嘗閱之海山有三山日閩苑蓬萊方文宮闕咸

銘日 者哉無建立功德自與山海共之又焉用記乃為之 坐際在梏何必駕長虹而挾羽翰假安期而採秘術 不能止信目前之眞境人世之蓬壺藉能順解天叨 殿舍莊嚴羣靈託迹慕之者可望而不可即能至而 可以息形芝朮可以充餌幽深香渺磨氛懸絶加之 然哉葢欣厭相敗耳目實賤者也若慈峰之秀洞宇 望洋淼漠無津涯非羽翼莫能之竟恣為荒唐豈是 思畫動願超脱高舉即離人世及至何無睹焉以其

為彼瞻依斯民之保莫匪爾功莫匪爾德志彼後置 天地肇青山川是府羣襲以歸衆甫之祖唯山之高 塵機不息仰矣穹蒼俯兮谷王配言聖壽億兆無疆 唯海之深九茲上帝實梁苦津紺殿輝樂白雲繚繞

即 里頭有大覺寺葢唐宋古利其來湮沒不可考至我 嶺俯華樓而頁靈山殊大觀焉靈山去治北三十 墨當三齊之東披山帶海是稱雄邑左天柱而右 成化閒始遷山之北麓當社之乾肘故里俗休

重修靈山大覺禪寺記

晨鐘夕梵惺吾之昏昏吾之勤吾生是賴今圓然矣 浮切有志万外少焉葉所習扣黃老逃形之術乃日 誰爲吾津梁之非大善知識又無以自樹立乃僉議 祥以之歲久殿堂日就傾圯法身頹然荒草中里入 **資奇氣為人魁梧倜儻始從學周孔家言自視生如** 禮請桂峰禪師尸之禪師諱性香先出平度巨族少 張某輩聚族而謀之曰大覺吾之望利心憶普盛時

僧在爐錘別耳遂矢心釋氏**禮邑之某寺某師**已而

宗旨再多少室小山書禪師傳達摩心印學究華梵 躡屬擔簦西遊上國初從曙堂曉法師受天台賢首

業隱約數年聞有茲山之請忻然起曰昔吾大愛氏 宗通性相一時義學之士莫不虐左斂衽遂東歸舊 降迹靈山法幢竪而邪風墜吾志在是矣即杖錫至

年計資若干乃出與張子輩構材鳩役開林拓土以 自居是孜孜建立捐衣鉢節飲食焦唇瀝胃儲積數 風大振邪宗異端及門揮斥而規正者不可勝計師 院披草萊翦荊棘日與諸弟子講明所業未期年道

某年某月首某年某月落成殿堂廊無方文廚庫山

旃檀如來藏因緣記并置

且與師先後步武寂場故詳爲乙記

吳氏最著康虞居士生長其閒獨傑然志向上事苟慶旦財富聚東南而鉅商大賈稱淵藪飲郡之溪南

the record of determinations, really to exceed with a district of the contract of the contract

各各身量大小如菽如麥學皆鱗次重重以彰無盡 許堅鏤香水海雲雲中星羅十佛以像伴利圍繞者 **象此方主刹三世十方雲來集也其兩邊柱關二分** 寸半許其狀如空空雲重疊每列十佛共三十驅以 中亦各設伴佛十五以象上下二方證法者此上餘 如欖核伴佛十一先後圍繞以象八方上下二重閣 上一五楹各高一寸許中央設毗盧主佛一尊身量 衛之以二力士次第三級級置樓閣一重下二七楹 臺於蓮花中欄楯行列亦高牛寸許臺上結金剛 鵡舍利共命等鳥狀如巨蟻充雜花閒池上峙金剛 最下半寸許利七寶池池中蓮花閒數白鶴孔雀鸚 其像二百有奇通為十方佛利含磷其中其裂整牛 徑二寸許中分爲二裂而爲三鏤諸佛如來秘密藏 如來藏瞻禮之其藏本以海岸旃檀香一枝高五寸 冬余將之雷陽道過眞州居士延之丈室偶出旃檀 達觀禪師是於法門有聞余向深知而未見也乙未 此正年也其次半又分爲二即爲兩門圖則爲 非夙習般若根深安能抽蓮花於愁泥耶士久執業 闢

雲中結一龕室高寸許安置毗盧變象三首六臂坐 作供養以摩尼寶雲而覆其上種種雜寶而校飾之 蓮花臺端嚴自在以象尊特總之佛境重重精嚴妙 宛若為香娑揭跋陀二龍王從海涌出手執香花而 高二寸許七寶開錯以爲莊嚴海水流復金沙布底 其幢也其下建立香水海中七寶輪圍衆山之上山 琉璃餅盛多芥子無邊海會炳然現於方寸之中此 回裹十處包容三世取象三德秘藏焉主件重重如 等身量各有差如芒如芴咸皆合掌相向曲盡威神 至若樓閣莊嚴微妙纖悉靡不具足不可名言總之 列其異生衆內外雜否合三十二以象隨應諸如是 十方雲來集也關外有諸天八部持香華雲冉冉而 來各各種種吉祥供養輪圍邊輻豁宮殿雲充滿羅 亦各雲中列十五佛合為三十以象他方件到三世 兩辦各列八佛共四十八以象大願此上與虚空等 象十地菩薩濟度五濁惡世者此上樓臺三重每重 相若則各鏤二寶舟舟中各坐五大士合而爲十以 而爲三以象總持製與正等其最下方與蓮華海會

在居士從子家藏久矣余謂是必出於西域巧幻術 議者存焉原此幢不知所由來意非天府不能有向 於目前見法身於當下斯則作者神力大有不可思 也医手觀者苟能藉此薰修一旦轉變自在睹華藏 變三毒而爲三德祕藏直使十方佛土了然心目閒 之爲三合而爲一重重佛境具在其中正令觀者心 存目想即此五蘊幻妄身心於一念頃頓見本真蓋 思佛事也余觀作者特以旃檀五寸而表示之然難 於日用而不覺沈冥久矣殊不知方寸覺心含攝難 衆生本有法身爲無明業力所薦變成五蘊幻身故 八無閒之意耳故日唯一堅密身一切魔中現良以 表法深有旨哉然以旃檀象法身蓋取清遠潛通祭 此雕鏤密級之技深有不可得而思議者矣藏者謂 非神力不能致此美觀余謂不然夫聖人所作常為 不可思議今以不可思議業力而作難思之佛事觀 能狀非可狀也嘗聞諸佛神力不可思議衆生業行 麗居然廣大佛剎攝入方寸閉此皆狀其可狀而不 事大都因物設象因象見心故棄柏論大經歷事

文夫善勇猛而於五欲中力破生死關如蓮花出水

始知眉睫間方寸覺心地現此希有相不生奇特想

得而思議者焉余欲重宣其意以偈讚曰 之心將亦自知功德妙利較之區區毫末大有不可 剛種子斯則居士賈於佛性海中轉為度生事業矣 **豐非慈善根力所攝持耶非荷然也余瞻禮殷勤慶** 異日儻能破一微塵而出大千經卷不獨以見作者 麗不 已故 詳 記 始 末 以 俟 觀 者 冀 即 境 明 心 以 作 金 何以有此應欲證佛性義當觀時節因緣居士得此 落江南民閒沿緣今日以得現身於居士前耶不然 者之手或自晉唐梵師所持來者想至宋末散失流

借此彈指力其門忽然開頓見虚空中不滿十方利 只在一後塵含大千經卷況以五寸香而不具法界 唯以智眼觀了此難思業攝念樓閣前願見諸佛境 種種妙莊嚴不可思議者我今觀此幢居然華殿海 流轉生死海茶毒苦無涯爰有大智人巧施方便力 諸佛妙法身墮在五蘊中廣大神通力變爲妄想業 乃以旃檀香修成祕密藏無量諸佛境含攝在其中

> 能以功德財建此難思事安置生死据為出世因緣 見聞瞻禮者讚歎及稱揚一念隨喜心順成無上種 無量法門海流在一微盛願轉此法輪直至未來際 日用當現前明暗不捨職不動跬步閒偏多衆知識

憨山老人夢遊集卷第二十二

憨山老人夢遊集卷第二十三

侍 褔

善

門

嶺南弟子 劉起相

記

觀楞伽實經閣筆記

識談即如來藏顯發日用現前境界令其隨順觀察 觀榜伽賓經記葢爲觀經而作也以此經直指 自心現量頓證諸佛自覺聖智故名佛語心非文字 衆生

也又豈可以文字而解之哉故今不曰註疏而曰觀 經記蓋以觀遊心所記觀中之境耳此經為發最上

未昧實仗此法門威德力也頃蒙 枯禪直至一字不識之地一旦脫然自信回視諸經 白黑因憶普五臺梵師言遂落筆記之至生滅章其 辰夏余居海上偶患足痛不能忍因語此經置案頭 之暇乃以楞伽金剛佛祖三經試僧得度如儒科特 患即愈及乙未春因弘法罹難幽困之中一念孤光 潛心力死忽寂爾忘身及開卷讀百八義了然如眡 果了然如視歸家故道獨於此經苦不能句萬曆壬 謂文字之學不能而當人之性源貴在妙悟自心心 清幼入空門切志向上事愧未多歷講肄會見古人 乎昔達摩授二祖以此爲心印自五祖教人讀金剛 春過吉州遇大行王公性解於淨土中請益是經因 者衆矣惟我 則此經不獨爲文字且東之高閣而知之者希望崖 一悟則回觀文字如推門落白固不難矣因入山習 老師宿學讀之不能句況遺言得義以入自心現量 乘者說所謂是法甚深奧少有能信者以文險義幽 命僧宗勒等註釋頒布海內浸久而奉行者亦希 聖祖以廣大不二員心禦寰宇修文 恩遣雷陽丙申

光明幢哉願廣法施遂爲疏募衆梓之諸宰官長者與余同伍道過仙城問雷陽風景何如余笑日在人與余同伍道過仙城問雷陽風景何如余笑日在人與余同伍道過仙城問雷陽風景何如余笑日在人

制臺左司馬陳公傑念名山寥落欲以余託迹焉余

近嚮風金栗雲委六時禮誦鐘梵交參雖無華座之

師而音聲色相足以感諸天而驚叫衆三年如一日

爲始至辛丑十月望爲終當結制之初刹竿方竪遠

僧四十八人跪諷華嚴大經若干部即卜是年十月

事乃與於權泰輩竭力經營志結千日長期糾實行

叢林凋落之甚不覺豫下霑衣一食而去居無幾何 關外道路閒關故高人上士足迹罕至其徒見聞狹 關外道路閒關故高人上士足迹罕至其徒見聞狹 屬外道路閒關故高人上士足迹罕至其徒見聞狹 恩遣海外取道覲六祖內身視其香火崇祀之嚴 思遣海外取道覲六祖內身視其香火崇祀之嚴

之嘉謨菩薩所修之妙行也上人聞而歡喜躍然從

喜合掌而為之讚曰 東自非六祖大師寂光朗照山靈呵衛何以至此斯 東以此施者受者著名貞石用以彰往開來以垂不 原以此施者受者著名貞石用以彰往開來以垂不 原以此施者受者著名貞石用以彰往開來以垂不 原以此施者受者著名貞石用以彰往開來以垂不

重修彭城洪福寺記

洪流滔天爱有神禹鑿龍門疏九河導百川而下抵以海爲極惟黃乃四河之一從崑崙東注眞丹始也佛法引攝衆緣若合殊流而歸於海故曰辟如四海

大開法社屬開黎慈峰朝公令其精持性戒即爲疏

攝衆綠普會而

新之將使往者過來者息各各同

流將爲有土蒼生汞汞之屬故今之傳者亦曰洪屬 者主之耶達觀可禪師北遊頻駐錫於此深慨焉因 其旨微矣寺今亦爲河水漂突豈非妙達性水真空 見於性相之源義取相融融則不相陵奪則滔滔安 城北乃建黃福寺以枕洪流託之棲禪然居士深有 古之憂乃築黃樓以彈壓之蓋黃土也取克治之義 即有神馬獨且奈之何哉東坡居士會守是郡懷終 此可謂極矣其奔騰迅歐孰能當之故其爲害不遵 差別之機緣而會歸覺海豈易爲力哉非等心死誓 後成功今也吾人緊無明之堅礙疏法性之洪流蹟 新斷手難矣彭城當黃河之要衝天上傾流建筑至 迹況乃腓脛剝虜三過其門而不入必辛苦憔悴而 叛之功臣直神禹且禹之所治者,非性水也有爲之 大利珠宮梵字凡所以流通道脈源源不絕者其開 古一脈耳吾法自西至東亦猶是也竊戰中國名山 徐開呂梁引衆派而歸之海逝者如斯則治之功終 入法性海中以導西來一脈期為大地衆生永永之 福惟師之心神禹哉良亦苦矣諸大宰官居士一時 同發無上道緣此猶三門旣開七井旣鑿中流砥柱 尼立頹波而千里安流風肌往來舟檝上下則引攝 吃立頹波而千里安流風肌往來舟檝上下則引攝 於細嘗謂滴水入海與渤海同枯苟不讓細流漸成 於細嘗謂滴水入海與渤海同枯苟不讓細流漸成 於細嘗謂滴水入海與渤海同枯苟不讓細流漸成 文方亦易易耳朝公乘橇跋涉當不惜腓脛必等心 死舊以此前驅則萬鈞易舉異日輪與莊嚴如祇桓 漢大師璽足數千里北走唁余期會於此及余至 之所已買舟南下矣主人出其疏讀之憮然長甑 送秉燭信筆書此以結他日之緣語似不倫亦慣 營為旅偏憐客耳

柳建長壽葊記

中來衍化及此一時富商大賈及居人之有名行者地蘊靈秀由來久矣萬曆庚辰有禪僧如受者自楚粵城西三里許日小圃園負山帶海爲叢林奧區其

之隨所行處皆是如來因地隨所施爲即建道場況

夫瀝膏剔髓汗血泥途而爲輪與莊嚴者乎固在施

者受者何如耳苟施者不著相則功德如空應量無

長之有諸大衆聞說歡喜作禮而退遂以此書 綠雕相則心境俱空而所作功德亦如空所護果報 非樂土廣之以極十方無一人而不證眞是則菴即 則假我偷安雖居兜率住梵天亦祇以增生死業果 水土木石有爲四相代謝遷流不啻陽燄空花又何 極樂場人即無量壽如是其志之日長壽宜矣否則 之壽以培斯民無窮之圖推之以盡大地無一處而 梵水月松風皆演無盡法音以祝我 亦如空是則此葊雖小可以含法界包虛空晨鐘夕 況能自他二利開人天眼乎諸佛子施者受者能忘 非極樂如是則高嚴深谷樹下塚閒皆常寂光等否 乎苟受之者不滯迹則唯心淨土自性彌陀觸目無 沙適足以增有爲業累况得無上福田爲菩提種子 法界性與慶空等否則計功思利雖施七寶滿恒河 際而果報不可思議如是則束草滴水粒米莖菜皆 聖天子無疆

爲文憲大雅之風洋洋中國即琳宮梵字在在稱雄嶺表僻處東南與諸羌接周秦貢服不稱今也不獨

重修英德縣堯山天心寺記井銘

用垂不朽。余因感公德意嘉惠斯民乃爲銘以銘之 堂廊無山門僧舍煥然一新公屬爲文以勒之貞石 事於是年冬落成於辛丑秋風聲響應百力馴集段 之靈禍福之宰也況佛聖爲世所尊梵剎爲民之福 無擾邦人受公之惠亦巳厚矣巳亥秋行部至英德 良民募衆力以成其功未幾而緣果集鳩工輯掉首 深窮礦所道徑廢寺公乃愀然謂父老日神者山川 監太監李公至粵督其役以萬曆戊戌秋七月至青 田安可荒凉若是乎遂捐廩金若干復以疏付土之 海犯風濤陟山冒虎兕事上育下以忠愛爲心安靜 農告置再下開礦之命總歸於公公奉 點未幾復以 東宮大禮先有採珠之令特遣 制自前代豈曹溪之苗裔耶湮不可致 今上證 去曹溪咫尺府治之西百里許日堯山天心寺葢亦 川私其氣哉固在弘之得人行之以時耳韶之英德 曹溪而禪林道化爲東土宗斯豈以天地限其道山 爱自梁朝達摩航海來於西些有唐六祖衣鉢著於 兩宮三殿災方事大工東西軍與司 乾清宮近侍御馬 命唯謹入

次帶礪同盟咸皆額手

號靜海勞我王師干戈歲無寧日而海畔蒼生死者。與平會一本猖獗於嘉隆閒橫行海上黃纛豬衣竊從來舊矣無論倭夷內侵即此輩跳梁接踵而發若峻嶺長波巨浸環紆襟帶諸島星列恃爲金城天府峻嶺長波巨浸環紆襟帶諸島星列恃爲金城天府

澤若焦矣及一本說擒其餘黨若鄭大漢林道乾朱 業從史椽奉部撤爲制府記室司馬殷公心識其能 良寶許俊美林鳳紅老輩各蜂分一隅更為流毒時 越人吳天賞者先藉名豁生閒屢試不售遂粟舉子 司馬公大奇之遂力薦之 因引為多軍時與籌畫諸巢穴部曲事每發無遺策 部議擢賞於行閒起爲招討將軍領白鴿寨軍事而 樹赤厳自園廣一帶環海之涯嚴守備設方略即大 將軍父子兄弟皆在軍旅從事焉先是以將軍策大 將軍下無論諸將領士卒皆知將軍能無不嚮將軍 軍之子汝實尾其後追之未獲所遺者唯鄭大漢據 意指者因而羣益日就擒獨道乾乘大艘逃暹羅將 盗卒徒皆精銳梟悍凡轉戰無敢當鋒者將軍以撫 祥力當之大漢者廣人魁梧奇偉身長八尺勇冠墓 遂斬老及黨三百餘級而鄭大漢則以將軍及弟天 柳杜澳紅老據珠池未下仍以實提兵千人襲紅老 民二千人皆素不識兵者軍杜澳會戰天祥貿勇先 登陷陣遂力戰而死將軍奮怒一呼鼓而乘之大漢 天子先後七確始報可

意文司馬公大奇將軍功而哀祥死乃具報 天子 食矣司馬公大奇將軍功而哀祥死乃具報 天子 食矣司馬公大奇將軍功而哀祥死乃具報 天子 是一章以死易其生乃立廟貌歲時祀之額曰忠勇頃以 難以死易其生乃立廟貌歲時祀之額曰忠勇頃以 難以死易其生乃立廟貌歲時祀之額曰忠勇頃以 是以司馬公命往日本閒諜之關白果死實乃攜碧 即走余乞一言以紀其事余聞土人備談其故事之初 即走余乞一言以紀其事余聞土人備談其故事之初 即走余乞一言以紀其事余聞土人備談其故事之初 即走余乞一言以紀其事余聞土人備談其故事之初 即走余乞一言以紀其事余聞土人備談其故事之初 即走余乞一言以紀其事余聞土人備談其故事之初 即走余乞一言以紀其事余聞土人備談其故事之初 即走余乞一言以紀其事余聞土人備談其故事之初 即走余乞一言以紀其事余聞土人備談其故事之初 即走余乞一言以紀其事余聞土人備談其故事之初

電白苦糜嶺化城菴記

祀其福無涯

靈歲時代臘山傾海吞餚山醞海飲之啄之千秋萬

旅桓桓虎將郊壘是恥窮獸逃林猛虎突舞驅市而

長蛇封彘嗜腦吸膏日無寧巳於赫

皇威爱整其

皇皇上天福善禍淫彼桀黠者胡爲有生桀黠旣生

戰祥用先登以虎博虎其力兩當牙銛爪利秃者先

傷禿者既傷亦折其利遺臭流芳處死則異其芳愈

流其榮愈久關貌如生童梅婺走童梅婺走生氣益

以行無窮之利益也故特具始末以垂貞石翼不朽。炎方應甘露於瘴地作苦海之津梁濕火宅之乾躁、六時是余南來立一莖草度一頭陀將期傳慧燈於一大時是余南來立一莖草度一頭陀將期傳慧燈於一大時是余南來立一莖草度一頭陀將期傳慧燈於

性寺優曇華記井第

云

本世所希見者如佛所云優曇華解之日瑞應豈是 基世所希見者如佛所云優曇華解之日瑞應豈是 基世所希見者如佛所云優曇華解之日瑞應豈是 基世所希見者如佛所云優曇華解之日瑞應豈是 基世所希見者如佛所云優曇華解之日瑞應豈是 基世所希見者如佛所云優曇華解之日瑞應豈是 基世所希見者如佛所云優曇華解之日瑞應豈是 基世所希見者如佛所云優曇華解之日瑞應豈是 基世所希見者如佛所云優曇華解之日瑞應豈是

於蕉本觀者日數十萬指識者謂爲法道之瑞未幾 守愚先師住裝師塔院先是三年殿庭忽涌金蓮產 內如是二月不養疾竟以養長老咸謂宛如裝師塔 大倍今之所見者每侵晨接甘露盈杯飲之清凉五 手植蕉一樹其葉扶疏高丈餘其中抽金蓮華一 雪浪迄今名播賽中不添慈恩之窺基此余閒此攀 而迎先師居其院江南法道之與果自此始余法兄 稱並頭連耳皆憶余配年初葉家吾祖西林大師延 羅什莫遂與鐵甲之師十萬以呂光爲大將伐龜茲 殿庭占之謂有西方聖人至因訪襄陽之道安安蘭 之謂手經云佛現於世閒譬如優曇華時乃一出正 從遠遊以至今日而今之所見此華者再也豈無謂 而獨之者一也及余年二十五臥病三月先於庭前 而求什什至而秦之佛法自此奥葢連理華即俗所 猶鱗鳳芝草之生於嘉運耳昔姚秦時連理華生於 耶且夫蘇屬芝草爲造化之精英天地之正氣鍾之 院者余私喜日斯豈佛法之北耶是年冬子即栗家 在物爲嘉祥之瑞應在人爲羣生之利見故如來出 杂

、 是有望於今日也廼記其始末而爲之銘曰 呼優曇再現佛日重輝曹溪酒而復漲覺華凋而 口葉落歸根來時無口有情來下種因地果還生鳴 而此地寥寥幾千載矣豈非枝之大者披其本耶祖 **穎於風旛賽林開墓曹溪布派光昭日月道被寰宇** 日百六十年有聖人出及達摩初至於五羊盧祖 於專也既陀建金剛於法性智樂種菩提於戒壇且 由是觀之瑞不虛應應必有由矣昔者禪脈東流其 世如優曇華孔子曰鳳鳥不至河不出圖吾巳矣夫 再

逝之極矣無往不復優量出矣優量載出於窪之隆 航海越漠於茲立職拔者伊何羅人之隊職之拔矣 其味若斯連理於庭鐵甲於疆至人實來斯道孔章 從空湧見豈日無謂閻浮之金華色如之甘露之漿 鱗兮在野邈矣王人我思曷巳彼曇者華爲蓮之瑞 耿耿景星燁燁慶雲瞻彼至人我心匪寧鳳兮在郊

我生三見斯道何窮 重修龍川縣南山淨土寺記

南粤名山多福地其源自衡岳而下度庾衛至韶石

川古循州也其治據惠上遊當歐粵之衝地接處意 仙蹤些概為鉅麗焉又東數百里適潮惠之中日龍 結爲曹溪開禪源 脈又東千里經會城 而出

吃歸仁始知有君至唐韓公祭鱷始知 有**文**其化自 蒞茲土者鄙視爲傳舍坐瘴煙毒霧中憂悲眩瞑將 崇山峻嶺隨搖雜處往多賦巢民礦猂而難治昔之 大江山川奇絕林木蓊鬱其寺始於唐意剏自大顯 將資淨土以修冥福是皆神道設教即事見心爲苦 南山佛刹則皆亡夫人之簪珥奩具盡捨以作莊嚴 學田建梅閣造橋梁築新城皆捐俸廳爲之至若修 邑不三年而化成摩民以義導蒙以漸因事以權置 人往時以遷客名未聞以東治振者今孫公之治茲 傑則地靈良有以也若循之山川猶故吾民俗猶昔 化無常準山川之待人若形之待心心真則形化人 六祖傳衣大顛振錫始知有佛是知天地有常經造 自治之不暇又何暇治禮義與教化哉其俗自漢趙 禪師法盛時也後因故址爲二賢祠以祀宋門下侍 海之慈航長夜之慧炬也其山當邑南面嗷峰而 環

休糧山社記

沙人記之者白下長干骨德清化

一余昔行脚時同妙峰師過平陽之塘結霍山之陽遙

寧李太史序予讀之喟然嘆日嗟乎山川之勝待人 寥寥千載今空師重開竹林大弘圓顧之教十方雲 嚴於五臺道被實字爲有唐七帝之門師自爾以來 域內名山在在皆爲唱道之所從古至人未有不踞 皆隨緣應化之迹此葢法社所由啓也道法東垂凡 迦維應真英傑之士萃於靈鷲因綠唱道祇桓雞園 雲集諸緇白勝流開不二之門建平等之會六時蓮 懷志尙幽棲心存白業追休糧之遺事布法兩於慈 集萬指圍繞豈非一代之盛數今其徒能以體道爲 勝概託靈秀而能永垂法化者清涼觀國師制 而奧苟非其人道不虛行豈無謂哉緬惟釋迦降神 散隱居擇名勝以養道緣因出師休糧山社約及本 因詢師法道之盛且云諸弟子輩久受法利者皆各 春清凉竹林空印師遣弟子悟慈持書訊余於瘴鄉 望羣峰蒼翠秀披雲漢煙林蓊鬱意必有聖道場者 海之嶺外迄今三十七年居常恍然心目閒也壬子 建梵刹日慈雲予未及登覧而過焉予居五臺去東 師日此休糧山也昔有道者啖柏於此因以爲名後 演華

職一念精修查則講演以明宗夜則安禪以息念戒 幸波維行選般若順使嚴樹庭莎斌號騙赆皆挺法 身而宣妙義向者幽陰窮寂之鄉獎爲耀古輝今之 地豈非山靈有待於人道與時行機緣會合而然耶 地豈非山靈有待於人道與時行機緣會合而然耶 其形勝今居瘴郷遙聞斯舉心地清涼想見其嘉會 其形勝今居瘴郷遙聞斯舉心地清涼想見其嘉會 其形勝今居瘴郷遙聞斯舉心地清涼想見其嘉會 其形勝今居瘴郷遙聞斯舉心地清涼想見其嘉會 其形勝今居瘴郷遙聞斯舉心地清涼想見其嘉會

里修海會芽配井蛇

所名日海會葺始於萬曆已卯迄今癸卯又爲風雨所名日海會葺始於萬曆已卯迄今癸卯又爲風雨之八經單棲者久而遂成實坊福地爲一方觀望隨地有焉宜章當兩山之中近韶石而隸衡陽往來通地有焉宜章當兩山之中近韶石而隸衡陽往來通地有焉宜章當兩山之中近韶石而隸衡陽往來通地有焉宜章當兩山之中近韶石而隸衡陽往來通地有焉宜章當兩山之中近韶石而隸衡陽往來通地有焉宜章當兩山之中近韶石而隸衡陽往來通地有焉宜章始於萬曆已卯迄今癸卯又爲風雨所名日海會葺始於萬曆已卯迄今癸卯又爲風雨

施左右方式源局諸所畢備有田百畝可輸置二石極左右方式源局諸所畢備有田百畝可輸置二石基所可給十餘人往來雲水一度一宿可無外求斯以雖大師執護場役養僧如堯謁余請記因直記其六祖大師執護場役養僧如堯謁余請記因直記其內潤大師執護場後,當獨外八年當道延入曹溪為東衛高盤寶林中峙曹溪水寒曹溪之水源從西經東衛高盤寶林中峙曹溪水寒曹溪之水源從西經東海高盤寶林中峙曹溪水寒曹溪之水源從西經東海高盤寶林中峙曹溪水寒曹溪之水源從西經東海高盤寶林中峙曹溪水寒曹溪之水源從西經東海高盤寶林中峙曹溪水寒曹溪之水源從西經爾高點寶林中時曹溪水寒曹溪之水源從西經爾高點寶成新達賣了時代城不遠寶處所近接彼疲息齊來歸命歸命我師代城不遠寶處所近接彼疲息齊來歸命歸命我師

南雄水西集龍葊記

若空中乾城遡流而上者若登天摩雲可望而不可其要心郡城員嶺襟江兩河合抱居然雄峙望大海其咽喉屏喻中原實東南都會挈建瓴而督百川此其破喉屏喻中原實東南都會挈建瓴而督百川此其凌水則背馳而逝入南海雄府據上流綜百粵控

也陰陽一氣也山骨而川脈夫龍德而隱者也性睽 伏凡術之靈者必至要不知者以爲神奇然物有所 浮屠設鐘鼓猶夫治膏肓以鍼艾也且而天地一身 穴得則輝蘇如燉然何耶蓋鍼灸而得其脈則擅起 必建廟貌竪严屠設鐘鼓以當之往往奏捷如聲響 好則必有所惡如人惡濕敏惡燥水火相制寒暑相 以鐵艾而達之是知截風龍注地脈則必建廟貌竪 而莫能制造之縈龍者必有術為操其術則望影而 死回生之功如人之疾在膏肓者藥飲不能達則必 為至若堪與家言九流之不齒也且日尋龍而銀其 者為龍放人君象之聖人猶龍而雲行兩施萬物資 而人竟莫知其故謂試言之凡物之靈而變化莫測 川之志則必爲之假人力以補之凡有事於此者則 者稍具法眼則不免乎盡目之憂而有親頹波障百 **植**人以裁减是以補大之說非 驱 也 親 昔之 治 茲 郡 者蘇矣故天地山川如四時之不並難得而完固必 遑逐利如逐波選求其股賈集齡以備一歲之不時 即此其山飛水走停蕭不滀則生理不留放民生遑

門實精華而保元氣實於雄郡生死相關者也豈特 休戚巳耶儻能拓其基址弘其規模考伐其鐘數諷 龍之術者何以與此此塔之施艾如塞星間以收命 院以鎮之如扞門然噫斯譽也非夫具法眼而操降 爲要者情乎規模狹小而不足以當之如體大氣源 塔此腰腧也至若水西則命門也卷曰集龍豈無謂 以聲而隨入之則化是可以留掌握件形影而不離 降龍者必以鉢面鋼鐵也故能馴其性而匿其形故 誦其經聲翰精誠以達神明使龍聞而伏天聞而悅 而再振勢使然也今天三峰水口衛尾関也比建塔 疾深而刺微況復尾閭以洩豈易捷耶故昔之幾廢 哉葢若周身之脈而綜於命門包氣海而注精爭最 此其祕者無他得其性也故地亦以之曹籍觀夫雄 人聞而感化物沾而敷榮雨鳴時若災群殄若福斯 銀以延祥之塔此百會也西河右腋則銀以仁和之 郡之勢山水羅如飛龍也豈易制哉故東河上流則 繼鐘鼓是以身觸則戰耳屬則震心觸則伏故古人 劇固其理也復何難哉夫龍好隱而惡期畏金鐵而 竟茲土旬日而得其說因茲菴之小以喻山川之大 脈山川之靈得人以多贊之又薄法雨於恒沙潤靈 羊門人如鑑至此憩息跪誦襍華經滑苦三年那人 貨置贈僧田若干畝未幾化去其徒不能守予居五 那要且爲衛外雲水衝也余又將聚雲水爲龍之命 癸卯冬余往曹溪執役六祖親過此菴知不獨爲一 之一福之聚龍之集也養名集龍以龍之集集於是耳 根於浩劫斯其福利又不獨為一郡一人而設心周 菴之叛其來不可改隆慶初僧眞亮苦居之以誦經 信禮之欲行而固留乃大更新又三年而功苟完越 皇圖於永固保斯土於無疆由是觀

認山老人夢遊集岩第二十三

直發其蘊以告末聞

怒山老人夢遊集卷第二十四

侍 者

褔

善 日錄

嶺南弟子 劉起相 通 畑 重校 掘掘

門

祀

瓊獬探奇記

子被放之十年萬曆乙巳春三月自雷陽杖策南遊 於明昌塔院院乃許公議建以補那城艮方之不足 獨立中天高標雲漢登覧四顧若御冷風而遊空深 天池探瓊解之奇且踐宗伯王公給諫許公之約寓

潮音動天水色澄虚又若鈞天而臨明鏡巍然一大

奇觀也居旬日諸弟子日益進盤桓閣上相與論道

有閒陳生於宸邀予尋毗耶之金粟求蘇公之白龍

里許邨園蔬圃連絡鱗次礧礧落落疊石爲塹壁土 許岡極蔓行一望蒼翠指石山而南二十里出郭三 龍泉乃欣然命策孟夏之十日也湖去郡西二十里 具得其真樂而忘返又數日劉多軍遨遊西湖觀玉 爲畦骨露肉藏外精中腴林黍菽麥嘉蔬細栗五穀

壘石爲壁形樸色古蒼蘚靑藤延蔓交絡如珠瓔之 往漆廻周市如渭川淇澳恨無入雲修竹耳椰樱檳 林益深石岸夾溪則見沃壤平疇禾稻如雲流水灌 在武陵也位立須東余掀舞長嘯出郵舍西石漸巨 修眉麗首著牛鼻裸楸衣垢面捉襟肘現望之若不 挂天冠也余喜而忘倦因倚杖入門良久一老人出 聞雲中犬吠不見煙火小轉即入郵墅居人環堵盡 則臨大溪度石橋俯流濯髮肌骨生栗乃拽杖散步 清流照人可鑑毛髮心脾一洗炎蒸順蘇不數十步 林行數里菊鬱蔽野不辨高下穿雲踩石步出小溪 咸備觸目燦然儼若薊門西山也迤邐曲折漸入深 避神怡足健經過十餘里皆碣石為塹如丸如拳如 知爲西轉也棘刺奉衣林草塞路披雲撥霧攀轟踹 穿田度塢不辨東西行又數里許過小溪登平岡則 極處處據天此世所無其澳所不易者余鬼屐沿流 見問之則不應儻然若忘掉頭而入余是知秦人不 **毬如案大者小者欲者側者方如切者斜如壁者砌** 爲隄環密如羅紋天然峭列無不中度大如丈室殿

木如張幕下有古殿三楹棟梁皆石殿後有池額日 之至今率爲常入石門百步渡小橋連一池池上古 鐵形狀巧妙大似蓮盤小如蜂寶奇形異態行行不 指為石湖心窩姓之其石鋪地面一平如掌色如古 深窈窕非人閒世矣又小北轉遍見雲中華表從者 隱出灌木末参差列如層城四顧茫然寂無人聲幽 也登高遠望連阡偏野處處皆然異哉徘徊瞻眺隱 如宮牆至有萬夫不能學者纍纍垂垂疑其爲鬼工 居人一日風雷大作龍從石出大水沸涌屋字盡沒 池中著玻瓈蓋耳不知誰爲鑿之也相傳此地背爲 數十里四面皆高中凹一湖如照天明鏡又若生盤 見其蹤小轉入石門灰徑逶迤始知爲一石天成周 龍泉自石罅中出噴薄如珠大如車軸注於方池池 玉龍泉池上有古廟三楹即玉龍之神女像也左有 石湖龍也於之富得雨太守往於輒應建廟貌以祀 為湖天旱水涸石有龍形嘗大旱現夢於郡守日吾 上有亭址池下有長灣皆看故事今亡矣池東隔小 石嶺嶺下有溪日篁溪溪下望之嵯岈嶔岑石空洞

著梧貴水過峽蜿蜒出靈飲入獬爲蓬壺轉珠崖突 涼如坐廣寒對冰壺而臨玉鑑殊不知爲炎荒解解 生濯足尚流散變披蒸盤礦池上消風四至毛骨清 橋則直東而會大河領源人際夹余與各軍湯黃二 萬山剛穿田過峽從石塔山外過那門入南渡響水 中如盤池者多奇絕林草翳蔽不能入而水產為流 高陽而忧夢遊覺而紀之因論之日瓊自中原來脈 心日莫返策因循水道望之則自源頭出谷曲折由 曲折鹽伏會歸一寮且日出前鄭之石橋從之環繞 從南岳轉西粵抽枝下桂林左右兩江夾邊而南至 西掠南直東入河似與郡城無擊屬焉窮日而歸臥 瓊甸邁當百粵之捍屏實獬外一大都會也五指回 鮮而右安南若兩翼然日本呂宋邏羅諸島列於外 五續山水背中國而南犇入群故按環群大形左朝 何數千里豈非天眼哉曹歷覧方與南衡而下春分 **運天壤一大奇觀也 聖祖有言南溟浩瀚中有奇** 然涌出五指多天北向中原為南甸鎖錦環三千里 拱特起中天為瓊之祖龍山北向而水北流腰結定

幹龍由石塔繞城西南隔過門而左低瀋爲南湖而 中為石湖委蛇而南橫續為郡案續後為曰水緊纏 左張曆入羅為後能小水隨之。右拖長續方數十里 安水左旋右折衝龍而趨橫跨那東而直入辭 未幾月而地大震東門地拆城陷屋宇羅塌官民露 **鉴於人哉余坐閣上每夜登塔望山川之氣案然指** 明昌而始入河以完生氣居然一天造也竟不遂豈 口議將引石湖之水繞城南抱東郭會白龍金栗 如形家所謂氣散矣許公建明昌塔於艮方以塞水 東而旋今則返跳直入河如弓以背向那城而不顧 繞脊牛館聚東湖之迴西北韓自新橋會白水抱城 石湖水外流包內案度響水橋古從馬坡迤東北週 東側回顧若遊龍額下之明珠結爲郡城石山爲首 右犇遵西澥而北結石山舉首開口中吐真脈盤而 人者是無氣心時以為安余孟夏既望乃渡辭北歸 謂從遊諸子日瓊必有災以山川寂寥而城若空無 處而塔亦側其半金馬之關亦傾搖颺不安者半年 至今記金書者以爲數國併記之 山則 外達四肢徹於皮膚下至涌泉上極泥洹變毛

文明之象也地浮解中火金生水故蓋炎而夜寒以

乾坤之真氣極於斯而鍾於斯故山川之金銀明珠

文萬名香珍奇異數實藏與焉百物備焉人則仙靈

瓊州金栗杲記并銘

韶余於明昌塔院邀宗伯公同過天寧方文茶語及 泉浦於南天相懸萬里且隔解津胡爲手來哉此智 當也汲水烹茶味甚冽啜之毛骨清涼如在毗耶方 摩金栗如來李白自稱為後身今於宗伯學士若有 皮出米如新護者余甚奇之因命名金粟泉意取維 此因杖策而觀之令僕探取沙泥中果得栗數粒撚 王公給諫許公且探瓊解之奇陳生於宸博雅士也 方之布穀至冬日氣飲泉温其粟出芽如秧鍼利水 粒燦然如珠光解眼人取而武之去殼出精宛如北 瓊郡距解可十里城東北隅岡足水跌有泉涌栗粒 者所必疑常情所未測也敢問其故余曰噫嘻此蓋 文吃香積飯也陳生畜疑避席而問日栗產於北土 爲栗泉萬曆乙巳春三月予自雷陽渡澥訪大宗伯 是則實非幻出也時人怪而異之不知所從來概呼 難與俗言也請試論之大地浮水上如一葉耳水之 酒流四天下地如人血脈之注周身由生於心而養

> 吞吐乾坤鬭圖畫夜往來無一息之停機如人日用 也萬物一體也水火相射山澤通氣風雲呼吸潮汐 爪齒靡不充足不充則不仁矣由是觀之天地 企息起居耳復何怪哉昔有神**僧從西域來飲曹溪** 不達斯實事也告蘇長公居備耳嘗品三山泉謂與 納於井中及歸而取之盡從井出以足其用至今向 惠山相通因名惠通泉是則太詹寥廓萬家融通人 閣高百尺像高八丈有唐異僧偏化金錢銅木在在 水香美而甘繁日此吾西天實林水也中山大悲閣 **咸謂中原土厚故將相多出於其閒余則謂不然瓊** 甲厚凡人甲厚者必多壽故地土厚者必多材設者 如人一指之甲耳甲乃筋之餘也血以養筋筋固則 特有心限礙耳竊觀瓊海地發於西北氣結於東南 有一木存焉由此觀之大地之水未管不通物未管 居南離離乾體也以吸一陰外剛而內柔虚而遷照 二指

日奇哉時在座有沈生成德等相率再拜稽首請銘東以辨春秋耳復何怪哉宗伯聞說雖然歡喜再歎一塵造化密移昧者不覺聊遜一粟以示之如從一文名忠臣義士往往出焉此天地之一隅如太虚之

大地一應滄海一栗充編十方何所不足似毛在體 如血周身觸處即見於何不眞次離水火乾坤在我 如血周身觸處即見於何不眞次離水火乾坤在我 如血周身觸處即見於何不眞次離水火乾坤在我 如血周身觸處即見於何不眞次離水火乾坤在我 造化密移不屬聞見聊借一粒以觀其變苟知一粒 走下周流終而復始大道循環無往不復道脈潛遊 上下周流終而復始大道循環無往不復道脈潛遊 上下周流終而復始大道循環無往不復道脈潛遊 之以曉未聞乃爲之銘曰

仙龍之城兩翼合抱如老蚌含珠孤峰絕磵深林豪雲白雲固多奇勝而景泰為最以踞白雲之腹而撫南直抵五羊五羊之主山日粵秀粵秀之祖龍日白專之山川發於衡岳折庾嶺而下腰結曹溪逶迤而變之山川發於衡岳折庾嶺而下腰結曹溪逶迤而

奉詔還山寺僧正裔持此圖以請聊為記之表,大海如鏡壁立於眉閒明月如珠光流於唇吻信表大海如鏡壁立於眉閒明月如珠光流於唇吻信居五羊三年戊戌攜禪侶遊觀極為佳勝丁未春仲居五羊三年戊戌攜禪侶遊觀極為佳勝丁未春仲居五羊三年戊戌攜禪侶遊觀極為住勝丁未春仲居五羊三年戊戌攜禪侶遊觀極為住勝丁未春仲居五羊三年戊戌攜禪侶遊觀極為住勝丁未春仲居五羊三年戊戌攜禪侶遊戲極為

端州實月臺記

奇峰洞字千態萬狀文殿錦石雲蒸霞燦拳砆片石。 足為世珍此造化之精英山川之蘊奧也星駿羅列 抽幹而下越懷四注鼎湖爲端郡之祖龍挺挺雲霄 必形家之具法眼者閒嘗閱覽東粤來龍遠宗衡岳 日美哉山河之固異哉天造之奇也因思臺始命名。 畫棟連雲丹楹映日余時登覧撫景四顧超然遐想 十月落成於戊申秋七月規模壯麗宏敏高出中天 之至功也公慨然捐俸吃工首事始於萬曆丁未冬 若橐藉大士之靈以主之始謂天人合德以還造化 琉璃含實月也予緊公見招因與公議將補前之缺 略後建閣五楹前列鐘鼓二樓葢取形圓象月勢高 士像披珠纓而臨空水坐火宅而遲清涼端然如淨 地相爲悠久也公乃捐俸就臺殿之中極造白衣大 功者必人為而神守恃有常主不失其配故能與天 則名水有龍則靈言得其主也故凡建久遠不拔之 副月圓矩方形似失真是則人未合天也且山有仙 臺周覧曰美則美矣猶未盡也且以隄爲臺名實未 **第西走列障橫開明堂廣行垣應紫微融結七星**

> 忠孝節義乘時而與起者實馮大士之靈也若夫莫 **豈偶然哉水有龍以靈龍有珠以神若騎龍犄角搖** 之神以明之以爲常守惟斯舉也諸子大夫萃美 利奚值遊觀之美而已哉是爲記 斯士以鎮華夷布慈風以翊 破重昏鐘鼓交参潮音选奏上祝 臺翼二刹左慧日而右靜明若日夜相代照迷方以 領批鱗而奪之者則其人也故茲土之爲靈也久矣 時顧盼之閒美流萬世所謂待人而與仁智之實也 之得於重淵以還化工又一奇也缺而補之引而伸 天然之巧能取而象之固巳奇矣神珠旣失罔象索 乎意取明月之珠爲世至實故名實月有旨哉且夫 上遊由黃岡而西結爲郡城按形察理則回龍顧祖 蛛絲遊蟻點緩平川東折羚羊峽爲端捍門左逆水 轉望七星志稱斯臺平陽突起非若驟龍額下之珠 皇度誠萬世無窮之 聖壽下福斯民

夢遊燭溪記

於端州往來期年事竣選山時當齊暑霖雨大作江萬曆已酉仲夏五月十有二日余以重修實林構材

建足而立領耳而聽掀髯而喜日噫斯莊生所謂地 石鏗鏗若和繼之夜鳴者洞中流泉凉淙之聲也余 號羣走旦者細香如雷如霆如崩如犇如篁如笙金 **穴水盈一竅如口乍聞其聲若獅子吼衆音雜沓若** 所從出漁父日此端溪小殿也即名硯之所產者殿 中發延位良久四顧茫然窺懸嚴敵幽壑始宪聲之 攜衣跣足拽杖穿雲緣溪小轉百餘步懸山之麓有 刺船入溪以遊目焉少焉風雨蹔止霧飲山憲余乃 鼓其聲自天隱隱窿窿不知所從將謂蛟龍之堀宅 涌升不能進乃維以避之神搖目眩隱几假寐而夢 之峽過蠲溪之口使忍四山雲合風雨爐來波濤海 層臟望山腰如雉蝶者採石之署基也東過小衛數 沒者手何其殊音妙響若是之奇也徘徊久之左陟 神運焉謁荒縣中少憩石上數十步近聞異響若空 神人之洞府空谷之足音也余跫然而喜乃呼漁父 臨無地遠聽溪流泙湃激隊衝巖如考洪鍾而擊亂 遊漏於是平仰望峰樹奇秀上干重霄怪石嵖岈下 水泛强兩溪渚涯不辨牛屬於是乘流放舟下羚羊

之其中深不可測整空度實積水成潭澗數十丈杳 香藤翠篠蔭蔽其上幽灣香夢莫辨其戸漁父日門 重子往視有碣苔封不辨歲月但識陳孟輔之墓傳 兩山合抱中若掌心望之若古墓焉高不能上乃命 由是而知端硯注水而不飲者生於水也嚴面而 工以及亭午路見崖際石工編篾而取之不易得也 萬夫之力不易竭也即有事於此以車出水子夜施 不可渡上通衆級下接尾閣湖汐盈虚與時消息雖 居水底亂石封固即官家採取亦待三冬水涸而啓 屈於其下者漁父指顧謂余日此觸發大廠也但見 羣蜂倒影捫뾽俯視鮹壁臨流淵猱瀞默若胂龍鱕 可爱而不可拾目擊心怡足躁神曠攀援而東披荊 千萬落諦視其狀若切鳥玉以截瓊枝剪雲霞而散 掌如指如耳如齒如蜂如蜨如翅如尾而不知其幾 百武二 棘履巑蚖下嶺入溪清流如鏡毛髮可數一碧酒虚 綺穀者文石之東涕成才之土直也可翫而不可把 星錯落裂錦紛披者鑿石之場也其有小者大者如 澗相繼雙嶽若冥磡之兩季碎石碞碞如禁

名不及實而遊戲之者繁奪朱也全於是平力命意 子批沙掘泥擇而簡之大者堅不能舉小者盈把可 身邀遠不易見知於世也亦有得其形似用不稱職 **心其有墨卿翰史求之而不得惠之而難見者以託** 精文物之英上天所禁恒民不可得而襲取也漁者 可觀余憮然歎日信乎美器造物情之是知山川之 言威撫摩玩弄而洗濯之拔變刮垢凝脂鹽嫻燦然 亂石如蟻鱗鳞齒齒巨者細者如羊如牛如豚如狗 腦不可上遂捨舟入溪援揭羅溪數羣石而嬉遊焉 如其如斗如拳如手然其大者內納骨露天然渾圖 網路維者斧斤時過慘然而不顧者以其無所可用 小者鎚鑿之餘獵磨光瑩而與頭石同波皆難以名 **東波激湍屬石噴珠灘面湮變毛悚肌栗水淺舟大** 羅也余解衣磐鶴披襟散髮濯足淸流刺船少進則 若流霞散綵於水面可觀而不可挹者石之餘烈遺 清溪探殿下亂石墨疊於水底者洞門也波光蕩漾 說先朝採使本於役遂賜葬於此若使其神守焉者 余院然日山川如故人書幾何此其驗也呼流舟夜

廣州光孝寺重修六觀殿記

普佛末出世時含縮國王祗陀太子有國林豐美足 當就想及佛出世內密國王祗陀太子有國林豐美足 為武樹園蓋人以勝地名也趙佗為兩海尉選訶林 進戒壇以待聖人梁天監初西天智藥三藏持菩提 建戒壇以待聖人梁天監初西天智藥三藏持菩提 建戒壇以待聖人梁天監初西天智藥三藏持菩提 建戒壇以待聖人梁天監初西天智藥三藏持菩提 建成壇以待聖人梁天監初西天智藥三藏持菩提 建成壇以待聖人梁天監初西天智藥三藏持菩提 對一枝植於壇側且誌之日百六十年後有陶身菩 樹一枝植於壇側且誌之日百六十年後有陶身菩 樹一枝植於壇側且誌之日百六十年後有陶身菩 樹一枝植於壇側且誌之日百六十年後有陶身菩 樹一枝植於地名也趙陀為南海尉選訶林

天祖道有逾於佛法耶點人相傳應運出世授受之 曹溪道化被於寰宇至今稱此爲根本地然佛祖之 待也無待則應緣之迹斯亦幾乎息矣惟今去我六 際閒不容髮第願力有淺深故化練有延促譬若四 場今見訶林覺樹殖聞鐘梵之響是南專靈異於西 道原不二則祗樹王園亦一也豈非人以道勝地以 下登壇受戒推爲人天師以符玄識自爾法幢豎於 五年至儀鳳初因風旛之辯脫復而出果披剃於樹 寺高宗龍朔初我六祖大師得黃梅衣鉢隱約十有 隆替在在淪沒者多粵之梵字百不存一種曹溪流 祖大師千年傳燈所載千七百人其化法之場隨時 時成功者退是則化聲相待待而有待有待而又有 人勝耶嘗閱立奘西城記云祇園精舍今爲荊棘之 事其迹邈然而人不知僧期年而乞食行三年而齊 申春初謁六祖大師於曹溪瞻覺樹於光孝訪其遺 又地以道存人依法住也余少事枯禪因法獲譴丙 而不涸覺樹榮而不凋詎非斯道有所託而然耶此 **戒修放生學五年而曹溪新戒壇復十年而教法**廣

> 信道衆蓋大運然也告人以菩提樹下為大師雞髮 之所因建殿以奉法事其來遠矣風雨薄蝕亦因時 之所因建殿以奉法事其來遠矣風雨薄蝕亦因時 之所因建殿以奉法事其來遠矣風雨薄蝕亦因時 有情而檀波維蜜爲第一旦即非莊殿是名莊殿荷 有情而檀波維蜜爲第一旦即非莊殿是名莊殿荷 不昧此又事額人爲人因事重也然佛以六度攝 不時二壇植樹既有待於六祖今迹存而事終人亡 平昔立壇植樹既有待於六祖今迹存而事終人亡 不當爲妙行矣若通維者刻桷雕線豈非淨土之實 在當爲妙行矣若通維者刻桷雕線豈非淨土之實 在一道在豈無待於後人耶且王園之勝較之祇園彼 往而此來又有閒矣是爲記

衡州府開福寺因緣記

原丞相趙忠定公汝愚謫永州道經衛病作為守臣 即與其弟無絕同建道場師期開福紀於西鄉金蘭師開山於此禪師法系載傳燈錄初與法照禪師結 師開山於此禪師法系載傳燈錄初與法照禪師結 剛界皆有龍神護法以守之雖窮劫不泯也昔世尊 望咫尺會公重建湖東迎子主之癸丑冬子自事中 復其舊經營五六年閒始建佛殿三楹湖東開福相 志乃爲之記日自古佛祖說法地所建道場爲結金 至其管開福諸善士來請予往視之感其心而嘉其 等併力鼎新郡司馬尹公雅重三寶力爲之主以其 建君今號馥海豈前後身耶君宜新此以志不昧本 地久廢多沒於民閒基址迫狹二祠亦湮沒無能恢 予開福土地神也是年杜君譽鄉進士乃以夢語其 孝廉杜君友桂居與寺比隣一夕夢老人擁上馬日 郡善士養遐等重緝其養以僧如禄守之萬曆庚戌 因也杜君欣然約鄉善士劉子濂綦遐文學劉鳴鸞 親會儀部金簡公公日考郡乘開福乃福海禪師重 悲寺我明宣德別寺又廢士民建小養於光址地僅 於此歷久寺廢胡元元年有福海禪師重與并新大 子憫公有惠政歲荒全活數萬人百姓感之亦立祠 錢鍪所窘暴卒殯於此因立祠歲時祀之後那守向 區殘僧數輩守至今幸不沒於民閒也隆慶壬申

徵杜君馥海之光桑中之環益較然不爽矣予故概 哉諸善男子其尸视尹公於其寺又將爲後之玄度 讚歎隨喜者豈非後之護法福田功德固有不亡者 記其始末以告來者諺云千年田地八百主人今之 **真昔日浮屠今如故度聞語遂修之塔內石刻果有** 親故物益在因果不可混如許詢建浮屠未終而逝 存可不信哉 林寺金剛堀中前三三後三三因緣會合豈可思議 是諸人者往往來來彈指出沒會不離文殊尸利竹 文殊予今發迹五臺投老湖東邁遇開福重樂之日 然者昔者無著法照發迹湖東皆遊五臺並得親見 公與會杜二公唱導與復皆於佛地有大因緣非偶 緋衣宰相之誠由是觀之開福蕪廢千有餘年而尹 後裴度爲相謁其寺主者一見而言曰許玄度來何 棋布雖墮死榛其名不朽即有與之者發其幽隱如 也震旦自有佛法以來天下叢林在在琳宮如星羅 刹時賢於長者即插一莖於地日建梵刹竟此其證 與帝釋行次指其地日此過去七佛說法處宜建梵

进乏山肥

為闡提所毁其地最為幽勝後有洞宇可坐數人又 西轉穿石碴研從院中登陟而上折盤數十級為山 由山足入江又西轉數武爲殿一楹舊縣塑三大士 曠天瓊溪流曲冠羊腸九折如天衣飛帶飄颺到懷 高麗之下則開數昭廣衆山羅列如在眉睫下則平 餘地爲龍首邁障不可縱觀又轉而西爲觀音關倚 轉而西則奇峰獨遊縣最秀削禁宇飛甍依嚴統石 從西江之岸沿緣里許說山蘆遷迤而上又里許登 予為九疑之遊以是月晦王則見承郡山水清勝若 日芝山寺乃萬曆乙巳比丘明齡開山柳建寺前無 小衛望草峰举掛不可聽後乃下嶺入谷二百武小 弟子釋超溫同遊芝山寒雨運朝時則小霽乃拽杖 避和文學呂旭谷邀谭州屬伯孔四明張漢槎嶺南 小樓坐覽江山之勝如在几席冬十月九日孝廉唐 仙都洞府未可以鹽寶藏視也寓瀟江之西滸石上 即秋九月多知馮公從武陵移鎮湖南駐節禾州招 余隱衡之靈湖有談丞州芝山之奇勝予心嘉焉乙

宜章高雲山藏經閣記

峄綿亘羅列屋斗自六祖開化護師分流道脈實中四出而曹溪源根於南岳南岳曹溪相望于餘里諸城內名山英灩奇秀鍾天地之精者五岳居尊支分

三十里有山名高雲脫融之孫也爲靈久矣嘉靖甲 力重修壬午歲工落成建塔於龍首迎海公徽骨歸 以安廣衆通邑歸依爲福田實置香燈糧八斗未幾 戊居人歐陽氏知蘭若迎沙金海公居之擴建梵字 粥需由是諸方威稱之僧既集深山窮谷之氓皆知 藏是爲開山祖弟子日益進十方往來於曹衡者莫 **尼於回蘇海公去隱於閩之支提山弟子悟丹輩一** 供水陸儀以宣利濟居然一大道場也事克成公弟 歸者如市工始於某年月落成於某年月將啓法會 董公爲**檀**越倡導之出信疏以告四方聞者歡稅來 夏六月迺迎大藏歸四衆數睹若白馬自西來也養 有佛若僧矣第僧尚未聞有法也有法孫性成者志 不過而止焉邑人袁氏文憲施田三十畝供雲水齊 川之蘊奧故道脈特有託焉宜章介曹衡之中治西 而韶陽上下肉身大士以十數迨今如生者詎非山 居山頂林木蓊鬱雲霧蒸溼慮經藏之難久法孫眞 求大脳經於金陵苦心一十二年願始就萬歷已酉 桂等議擬建閣於山之麓日南莊時大尹鄭公守戎

子悟紹從余曹溪乃乞余言以記之日古德云盡十方是常寂光上徹大地是普吸眞經斯則佛土不修方是常寂光上徹大地是普吸眞經斯則佛土不修明而告淨經卷不展而自明雖然夏由心淨而土現眼明而法彰此所謂人能弘道非道弘人也高雲之道場東來之大藏非海公之成始諸孫之繼業檀越之成終又何能使披荊棘而爲寶樹變沙礫而成梵宮成終又何能使披荊棘而爲寶樹變沙礫而成梵宮市人礦唱無盡凡在見聞隨喜者如善財之入彌動中人礦唱無盡凡在見聞隨喜者如善財之入彌動中人礦唱無盡凡在見聞隨喜者如善財之入彌動中人礦唱無盡凡在見聞隨喜者如善財之入彌動中人礦唱無盡凡在見聞隨喜者如善財之入彌動中人礦唱無盡凡在見聞隨喜者如善財之入彌動中人礦唱無盡凡在見聞隨喜者如善財之入彌動中人礦唱無盡凡在見聞隨喜者如善財之入彌動中人礦唱無盡凡在見聞隨喜者如善財之入彌動

題江木六公奉佛記

整詩翩翩有夜雲氣楊用修太史大為稱賞相傳至湖南過訪永州談及往遊眞南諸勝事出武陵稿子湖南過訪永州談及往遊眞南諸勝事出武陵稿子時麗江奄有疆土六傳而至公稱六公云其先在國守麗江奄有疆土六傳而至公稱六公云其先在國

共帶耶是知佛性雖一而習染厚薄有迷悟之不同 世諦語言資生業等皆順正法所謂實際理地不受 不葉一塵一毛方識法界之甚深由是凡對字官相 無一事而非佛事以不捨一衆生乃見佛慈之廣大 故論種子從貪與而發者資貪與從般若而發者資 冥心絕域若蓮出淤泥幡然而不滓者安可同條而 而膠固貪癡綢繆世態音與夫身居世網志出塵埃 與語者不更窮支體妙唯以了悟自心廣行萬行即 親大教日深讀雜華觀普賢妙行無一類而不現身 棲吊影於窮山絕壑草衣木食守枯禪而爲上乘及 化應現者乎予初入空門不知佛法之廣大將謂單 家常行履豈非多生久植善根乘悲願力而影響攝 養婦頭陀尤廣檀度是皆富貴之所難能而公特爲 資刻意禪那愛接方外法侶相與禮通精修頹然如 則迴超前哲特出風塵之表矣公天性澹溥於世味 一無所嗜好忠孝怒愛唯以濟人利物為懷歸心三 慶今事門頭不捨一法若夫浮慕虚尚高談脫歷 一松鶴辭翰逸格而蓮社清修發枫覺路至六公

各知有慈不令而民從不威而民服熙熙皞皞含哺 誠格物以佛事化民使家喻而戸曉人各知有佛心 鼓腹窮ሺ邊徼洋洋佛國之風公如坐蓮花而端居 推其佛心而教化之語曰一家仁一國奧仁公以精 觀心六根消復則虚空殞亡洞觀法界則山河不隔 嚴大疏於雞足其有得於此惟是道路閒關無大手 心之土攬長河為酥酪變大地作黃金豈有他術哉 極樂即太古之治在掌股間又何勞跋涉山川視浮 假於外也且公有土者也以山川之廣人民之衆即 方不起坐而承事諸佛此自性天然本元具足會不 將視華藏於毫端攝淨土於塵芥不動步而遊履 宗匠開公頂門眼故公志慕方外欲事遠遊参訪 以達人無累於情者以其智勝而智溥也故古之悟 心廣大則形骸不能拘觀法界空則萬有不能礙所 識以世法纏牽而不可得愚意則不然即公能靜 唯得自心之妙滿法界之量心外無法改也公刻華 臭腐臭腐化神奇體 般若般若深則貪瞋薄般若現則貪瞋消如神奇化 一而用異學凡由是而分焉 坐 知

當龍華三會中予定知公爲釋迦末法中之宰官佛 **\$\) 以南詢望毗耶之室如眉睫閒願與公結異世緣** 耿八難之地定為悲願之應身第恨老矣不能持一 光泡影而為究竟佛事者乎予因先生而知公居遐 子也公其無意平

法相寺長耳定光佛緣起記

杭之山水甲天下古聖示迹刹学相望者如林亦域 耳長出家参雪峰存禪師發悟遂行脚至四明隱於 生異狀兩耳垂肩下可結頭人皆怪之七歲不語或 內無兩法相寺居南高峰下幽深杳眇林木蓊鬱泉 流時乞食於市人皆異之小見叢逐見師耳長左右 錢塘隱於南高峰潁秀塢初無水師至卓錫有泉迸 山中爲鬼神說法諸天散花猿鳥獻果既而出山至 指日此兒啞耶師即開口日不遇作家徒撞破額額 石清奇葢昔人迹罕至五代有異個棲遁於此後遂 爲道場師名性真闡泉州陳氏子母夢吞日而孕師 日作福可邁百醜乾祐三年吳越忠懿王誕日飯僧 扯. 乙師隨轉但顏然嘻笑而巳人問作何事爲好師

最上之法觀二師同時出現蓋可知矣永明悲末法

然而入其長耳者以異狀利生始終無法可說惟以

慈心三昧攝化衆生以衆生生死愛爲根本而以男

性相難明故設宗鏡揭一心之旨使見聞者靡不躍

行順行皆大權示現方便利物或語或默無非演說

人處處爲語衆生開示演說此法而度脫之是知逆

百年像法已壞衆生濁惡最難教化且日我遺變化

照大師師曰宗慧大師嗚呼佛說法時往往以後五

至今存焉王有感以二師事併奏聞請證賜永明宗 言

記坐

逝王回禮

壽遂

化王因是
建寺留師

肉身 晏坐一室齊罷王問壽日今日齊信有聖僧降否壽 徑坐上座衆皆惡之王見之大不敬遣之即歸山中 永明寺時智覺壽禪師正開大法師赴會**偏身疥癩** 弟子肉眼凡夫不識古佛願求懺悔師日彌陀饒舌 日長耳和尚乃定光古佛應身也王悔檀駕往禮口

說之說其說熾然而道場晏然香火縣遠則窮衆生 今世之乏嗣者無不求之求而必應捷如影響此不 女爲愛根欲以愛治愛故令無子衆生求者必應至

Auton

A A come tank

tell & a sale alle a d a

界愛根米盡而法音常然豈不信哉是爲記

嘉禾金阴寺大定堂記

先過吳門會耶溪法師見其道貌蒼然喜法門東南 有師表焉予往居南岳著楞嚴通議成刻之姑蘇法 役法師遂願於此弘演之及還山旬日遂物化嗚呼 業以廣法施罷講歸過金明顯公向依法席執弟子 師適應講期見而歎日此揭養學之重雲也顯請卒 一時完足爲道場之偉觀予來雙徑雲棲用二大老 語經語信者益眾復構禪堂齊寮厨庫先所關略者 貞諸君捐資贖之嗣請立津法師講法華圓覺金剛 經遂成叢林其寺右有地十畝許舊為禪堂址向為 有力者所緣居士包心弦沈汝納王季常沈爾侯仲 觀音大士闊及天王殿併一新請耶溪法師講楞嚴 說而化禪人道顯以受業願繼其功閣竟成而佛殿 而僧不乏配質於庚子歲秋潭姓公始重新佛閣永 伽藍之地鬼神護之然竟未為草莽也向殿宇雕順 金明爲嘉禾名割其後爲范蠡湖今爲郡城倉海桑 田也寺始於宋乾道間靜慧禪師開山翼廢不一而

點山老人夢遊集卷第二十四

如此

數百尺如空中浮層日金輪晉梵師耶圖尊者負鐵

松山老人夢遊集卷第二十五

嶺南弟子 劉起相 重較門 人通知 炯編輯

記

廬山五乳峰法雲寺記

> 城此五老之南面也其乾嶺北行至松光嶺分二派 拖岡嶺館含都分水邁西而南下至星渚爲南康郡 東北一幹為蓮花峰下走為吳障山直抵湖口內有 花蜂又二十餘里爲九江郡城其衞北幹西折爲鳥 **慧日諸蘭若外衍平岡十餘里爲周濂溪亳南面蹇** 十餘里爲東林遠公蓮社處回望香爐峰白香山草 龍潭下抽一技十餘里入平原爲太平宮委蛇左轉 走中夾一谷最高者曰大漢陽峰爲南面之主山雄 此盡東幹之形勢也其然花南發大幹逆背來龍西 中日黃龍潭如花心一蕊諸利蘭若列布如蕊香幢 故爲山之主刹殿下爲石門即一山之水口其山之 亭竹林佛手殿講經臺香爐諸勝結天池回顧桃花 堂在焉基尚存其烏龍西行經獅石大林水口御碑 星拱北一目千里直抵湖口回抱五老此實東南 峙中天面吞兩湖遠挹江南一帶諸峰羅列天際如 淵明故里從半中而下南抽一枝腰聳一峰孤立高 大觀也漢陽之西盡處為谷簾泉前下平原為柴桑

果英邵武月公晦寶峰院元首座諸大老隱居處久 蓮花中有石佛擊竹寶慶三蘭若而寶慶爲昔大慧 棲賢曰玉淵潭水滙爲河入星渚左障內抱如倒捲 東走而下外結為棲賢對五老由含都分水而下繞 三十餘人在昔西江法道獨盛故爲茲山首剤此匡 爲萬杉寺此漢陽前之右障也其障正中獨抽一枝 瀑布從空而下注為潭潭上大石多古名人刻前為 存此漢陽前左障也其右障列果子囊諸峰王黃巖 爾守南康時往來其中刻出師表於石菴慶石刻尚 廢今里修又西為臥龍岡岡下一谷谷中有港朱晦 南之大勢也其五乳則自大漢陽峰南面正中特抽 七佛偈於崖石王陽明破宸豪有題寺左轉過一岡 開光寺乃李中主買建伽藍爲諸祖說法處山谷書 池故寺與東林角勝自唐亦眼禪師說法於此相繼 於此後遇梵師跋陀多羅遂捨宅爲寺今有墨池羯 稱之峰下平原爲歸宗寺乃王右軍守江州時建宅 建塔藏佛舍利於峰頂下二里許為董奉杏林至今 校起伏數節即大開一障左背桃花日石人諸峰

不可改遺礎存焉後見崖刻至正壬申四月重修工 處詩云我昔家玉京是也五乳水口有石峰高數丈 處也其中衆水歸壑繞寺而下出石罅中約五里至 如戟技蓮其寺深藏如蓮中之藍爲山南牛腰最出 里單提環抱中開一掌為古寺基倚七賢而面五老 軻有書院後改爲凌雲菴在七尖下古寺兵檄事迹 上有磐石方文名劉軻讀書臺至今土人稱之誌載 山足會玉淵河流內繼玉京山入湖山乃淵明舊居 連起日石鼓冉冉而下蜿若雲中遊龍曲折線 龍潭分水而下此五乳之左龍也由胡鼻拱揖一峰 七賢之下有五突如乳故名五乳上下相連東抵臥 清甥魏愉時遊其中故以爲名土人俗呼七尖霸也 於峰下後晦庵攜其子與門人陳正思陳彦忠兪季 如馬鬣下垂峰腹特起一峰如麟角日胡鼻左曳如 壑意將息焉且卜居適黃梅孝廉邢懋學用值購之 予自南岳東遊避暑於金竹探幽及此愛其一邱 屏七峰幷峙上捕重齊日七賢昔唐高士劉軻讀書 完其寺山場田地至嘉靖初始為民業萬歷丙辰歲 亘數

在今得之荒榛中又左臂為歸一卷即接臥龍分水 谷中名香谷有石屏前一大石面如几石下一洞異 之由是四方衲子日益至遂成叢林居然蓮花一葉 在山南獨五老七賢為最勝其寺居壑中倚漢陽諸 身在此山中以山似蓮花居者如坐花中故面目惟 會歸大河又一區也東坡云不見廬山眞面目只綠 寺左谷中有觀音葊遺址誌云有古井二口不知所 石菴葢見志也予亦有銘是皆區內若花心蕊也其 香從洞中出冉冉襲人不絕一在近寺龍水崖日木 五老而弱臥龍羣峰羅列如在几席由養入數里大 香十方雲來聽法衆也一在七賢蜂下,日芙蓉養面 望湖外諸山一目千里羅列於前如坐華臺出廣長 蘭若一在石鼓峰下日沖默齋予有銘最幽勝高敵 中也寺左嶺舊有望湖亭乃晦菴建基尚存其谷有 工肇於丁巳落成於己未郡守袁公懋貞爲文以記 沙於公玉立居士繆公希雍捐置香火田故得安居 越浮梁尚寶陳公大受約某某捐資鳩材寺遂成金 爲予逸老地時黃梅大司馬汪公可受願爲果建檀

> 等又與茲山啓生色.第未能効遠公刻蓮屬禮六時 育又與茲山啓生色.第未能効遠公刻蓮屬禮六時 日誦華嚴經聲琅琅達鼓交參與松濤泉響共演潮 外雲山千里內拱暗列於前儼一華藏玄都也梵侶 外雲山千里內拱暗列於前儼一華藏玄都也梵侶

西湖淨慈寺宗鏡堂記

耳

南渡崇五山十刹而首茲馬寺始於周顯德吳越錢南渡崇五山十刹而首茲馬寺始於周顯德吳越錢南渡崇五山十刹而首茲馬寺始於周顯德吳越錢南渡崇五山十刹而首茲馬寺始於周顯德吳越錢南渡崇五山十刹而首茲馬寺始於周顯德吳越錢南渡崇五山十刹而首茲馬寺始於周顯德吳越錢南渡崇五計入心見性成佛是為禪宗於是遂有教外以唯心唯識立性相二宗冰炭相攻以至分河飲水以唯心唯識立性相二宗冰炭相攻以至分河飲水以唯心唯識立性相二宗冰炭相攻以至分河飲水以唯心唯識立性相二宗冰炭相攻以至分河飲水以唯心唯識立性相二宗冰炭相以以至分河飲水。

千年矣自非大師蹶起而大通之竊恐終古曉曉究 之由是執筌之徒認指失月熟能正之世尊入滅一 妙但佛開遮心病末後拈花自語而自異卒無以一 資生無不引歸實際又何教禪之不一知見之不迟 名日宗鏡錄因以觀堂意以一心爲宗照萬法爲鏡 部西天此土賢聖之言三百家證成唯心爲書百卷 竟了無歸寧之日也是知大師厥功大矣集吾法之 哉良以衆生之執迷久矣雖性相教禪皆顯一心之 攝殊流而歸法海不唯性相雙融即九流百氏技藝 撒三宗之審難題一心之奧義其猶縣義象於性天 賢難師則以心宗之衡準平之又集大乘經論六十 義學精於法義者百餘人館於兩閣博閱義海更相 於是大師整佛日之昏也乃集賢首慈恩天台三宗 大成使釋迦復起功亦無越於此者豈非夫子賢於 年來海內學者院曉乾辯卒不能起大覺以折中之 **堯舜遠耶或日從前諸祖皆了悟自心者乃云向上** 故紙又見世尊初生指天指地即要一棒打殺乃至 著三世諸佛不許觀著又日一大藏經是指倉廳

皆知頭數閻浮提兩皆知其滴如此是名海印三昧 遣調伏衆生之法藥耳非實法也但今初心沒智不 法見貶向鐵圍山中又文殊亦看持刀殺佛其諸弟 明互起偏見故作今生之事耳即古德機緣皆顯如 抑諸古德有違一心之義耶日此正以西來大意不 以和會性相强合一心豈非有違達摩西來之指耶 上堂示衆未嘗不痛斥文字不許親近教義大師今 由是觀之則無一物不是佛心無一法而非佛事無 如印文如來說法以平等大慧圓照法界衆生心念 中而大海波澄虚明洞徹則空鏡之景現於海中麵 大地山林草芥人畜森羅萬象靡不現景於空鏡之 以海印三昧印定諸法謂虚空爲帝青寶虚明如鏡 悟如來平等法界故不能達離相之旨惟如來說法 子入維摩文室種種受啊是皆諸祖之機用但爲邁 來之大機大用未營非佛之作略即如文殊起佛見 者乎是知宗鏡之稱以以一心照法泯萬法歸一心 一行而非佛行一切諸法安有纖毫出於唯心之外

則何法而非難師心印又何性相教禪之別乎是則

整水而得之移置於堂後斯實大師法身隱而復現。 整水而得之移置於堂後斯實大師法身隱而復現。 整水而得之移置於堂後斯實大師法身隱而復現。 整水而得之移置於堂後斯實大師法身隱而復現。 整水而得之移置於堂後斯實大師法身隱而復現。 整水而得之移置於堂後斯實大師法身隱而復現。 整水而得之移置於堂後斯實大師法身隱而復現。 整水而得之移置於堂後斯實大師法身隱而復現。 整水而得之移置於堂後斯實大師法身隱而復現。 整水而得之移置於堂後斯實大師法身隱而復現。

徑山淺霄峰記

綠之句既而古鼎禪師亦居十年由是觀之則先代聽外日淺霄之關是峰頂有關又記峰頂時見五色遊外日淺霄之關是峰頂有關又記峰頂時見五色遊外日淺霄之關是峰頂有關又記峰頂時見五色按志龍遊園居器峰之頂畫拱璇題承雲納日而虗

在山縣不愛其孤絕但峰頂無水風高迥絕非臟修在山縣不愛其孤絕但峰頂無水風高迥絕非臟修

海虞尊勝菴記

祝 耶使雲棲之清規不墜靈山之法道常存若天帝拈 **惰者勤勞者息飢者食渴者飲何莫而非尊勝功德** 禮誦經聲佛號鐘鼓交多使老者供病者安愚者智 祇園以明公之建化何侯百丈即以禪侶安居六時 綠會合感應道交則彈指出現以爾君之舍地何必 啓工於萬歷丁巳夏落成於戊午秋以公生平持尊 井一口水甚甘冽疑即舊址也滄海桑田豈劫進哉 一莖草爲梵刹殊未可以思議較計求之也且以上 勝咒送以尊勝名走書乞予以記之日大地衆生無 於宿願邑乘載有尊勝養久廢開基入地丈餘得古 約十畝建十方禪院及養老靜室公喜以爲得地可 就因循十年壬子秋邑孝廉爾兆吉願捨寺前空地 所依歸因發顯儻有把茅當與十方老病共之借未 祖 一人而無佛性十方世界無一塵而非道場第在機 意壬寅復往諸方所至見老病者叢林多不納無 **善年下與斯民共躋仁壽又爲大海酒流潤澤**

無窮予也不敏何得而名焉

錢吳越忠懿國王造銅阿育王舍利塔記

以法界爲身即草葉樓結皆成佛真體況託家者手 遊訪太史過河間上座觀其塔奇其事因記之日佛 公得此自號聚沙居士志因也乃送奧福蘭若予東 虎右則月光王捐捨實首四事文理密級 滲以金飾 錢弘俶敬造八萬四千寶塔乙卯年記一十九字外 良以衆生迷本法身變爲三毒成八萬四千煩惱佛 顧爲錢太史之母舅因公爲忠懿王後遂以塔付之 救鴿後則慈力王割耳然燈左則薩埵太子投崖飼 代時錢吳越忠懿國王承先業敬事三寶如式造小 見不同亦有不見者葢因障有厚薄耳二千年後五 四面鏤釋迦往因本行示相前則毗尸王割內飼隱 銅塔高五寸許如阿育王塔式內刻款云吳越國王 萬歷初常熟顧耿光造其父憲副塋地中掘出一小 銅塔八萬四千座埋藏國內名山世末有知者我明 浮提震旦國得一十九座而明州阿育王塔乃其一 人閒龍宮各建塔供養爾時阿育王親受一分散圖 **也其式亦出自西域而舍利燦爛光明變現隨人各** 昔世尊入滅茶毗得舍利八斛四斗分作三分天上

人喜拜謝而去嗚呼異哉業報昭昭不爽如此觀曹

為一樣, 四千功德育王所造蓋表功德之數量也吳越王做四千功德育王所造蓋表功德之數量也吳越王做 對於如其數盡埋地中意表功德藏於衆生心地 對於一樣則見一種功德即睹法界之全身如從一 其啓一塔則見一種功德即睹法界之全身如從一 以普光明智慧三毒為三德祕藏故變煩惱爲八萬 以普光明智慧三毒為三德祕藏故變煩惱爲八萬

讀異夢記

> 諸人幷落異道余獨爲豬葢余生時性多怒罵舌鋒 胡則尋屠其城取快一時何知死受冥譴一時同事 譴罰尺寸不爽乞公拯之王受聽之悚然因云余尚 益毒既得豬報聲多嚄嚄或見擒捉呼號四徹冥中 乞命即命奴畜之踰年自斃夢中明憶往事即應日 怒可憶往年有所見夢荷公再生者即予也蓋玉受 凡夫何以脫公其人云公性慈悲每見予輩雅相憐 實有之但不知是公耳今則余安所見公其人云葉 在唐太宗朝爲一小吏聽一法師說四十二章經某 報無定昨償一近縣八債不意有緣於此得復遇公 **曾於戊申春家奴以其租負數有豬慣者夜夢一人** 受此果然幸有夙種善因今得遇公自今乞公凡遇 為設供感世世為宰官及宋初而報盡遠作惡業轉 今番又不知業運何所言下泣甚哀徐收淚云某幸 我輩或見執或聞聲或見食余內為持準提咒或稱 惡業員公也玉受曰此余夙心也別奉教敢員約其 彌陀號余暫堪忍其苦定脫此報生人中暫不更造

太和縣真如花記

擊妻子出家**就變於廬山淨業堂受戒於雲棲大師** 子廣果所建心果吉安人早歲茄素敬事三寶中年 太和之西北四十里早禾市有眞如菴者乃雲棲弟

理事雙修真妄一契者心又何以建立爲事行哉若 昔為荒國今爲道場質成於一念由是觀之則四方 淨戒不十年而道場隨建豈非淨土唯心哉且此著 果藏人居然一俗士也中年挈妻子同出塵勞順修 雖真擬之則聖果難克苟能達性空而建萬行可謂 望濟其飢乎所謂有爲雖偽棄之則功行不成無爲 未悟空宗之體而棄有爲之行詎非枵腹以待王贈 帝云有爲之行實無功德淨智妙圓體自空寂雖然 其資買田若干畝為常住將以永供大衆四事無缺 黎丽如昨夢況世諦有爲莊嚴功德手音達摩對武 實而於院覺後雖空夢時未嘗不有也所謂生死甚 淨則上淨譬如夢事實人夢苦事而呻吟養人夢金 乞予為記予因謂之曰當聞十方淨土唯心所變心 可以安居精修淨業無外募也事既就緒果走匡蘆 之雲集日益衆建殿二座雲堂盛厨諸所畢備嚴然 **给地五畝建菴請居之以接納往來八年於茲矣久** 復從古心和尚謂練具足歸鄉至太和孝廉雜招奎 一道場也慮無以膽大衆乃集信心作百子燈會歸

淨土不離於目前。而不信哉

天風時吹萬餐齊發洞心徹耳此塵中最勝處也圖 **警而百病作是知暢乃氣之和而情之適也嗟彼沈** 之反也故天地響而厲氣發糞壤鬱而毒菌生人情 及予歸匡盧居士走書乞記予因謂之日夫暢者鬱 節儉清修之意予丁已初夏過惠山居出周旋問法 南居士誅茅結廬宴坐其閒顕日清暢意取晉徐遼 林木蓊鬱湖光漭漾一碧如鏡岡嶺逶迤萬松叢翠 京口爲山川都會而曲阿尤異奧區惠山資郭枕流 者曰此半夏毒也謂鷓鴣以半夏爲食嗜久而毒充 有宦於西粤者嗜臨胡味以地多產此足元其欲非 也譬夫食毒爽口殊不知禮久毒發而脫其生也昔 **湎富貴躭荒物欲取快一時而爲楊是以鬱爲暢者** 居士軒冕桎梏富貴浮雲博學强記潛心佛理究性 此不下食旣而官歸疾作舉體腫潰良醫束手有識 五臟殆不可救世之嗜美疾而發毒者皆鷓鴣類也 命之源達死生之故放情霄漢寄興雲林而與造物

課子讀書於其別將以此場世其業也予特為之記以為家又豈特節儉清修而髣髴其神理者哉居士

放生功德記

施者又豈可得而較計耶故佛教弟子以護生為勝行此獨拘拘世外若夫涉世閒統實賤定智愚無若放生為妙行也近世雲棲特標此行戒殺放生功德放生為妙行也近世雲棲特標此行戒殺放生功德感應著之驚章海內奉行甚廣予往過皖城觀其俗多牽佛葢由宰官吳公身以倡之家諭戸曉洋洋佛國之風矣可鏡湛公奉雲棲法學放生社置恆產以長轉無盡大悲法輪予聞而喜之曰昔智者大師以長轉無盡大悲法輪予聞而喜之曰昔智者大師以是所放之生感報地湛公引一時宰官居士之法流是所放之生感報地湛公引一時宰官居士之法流是所放之生感報地湛公引一時宰官居士之法流是所放之生感報地湛公引一時宰官居士之法流是所放之生感報地湛公引一時宰官居士之法流是所放之生感報地湛公引一時宰官居士之法流過於一紀二紀之閒收功不遠必有目睹其驗者可德於一紀二紀之閒收功不遠必有目睹其驗者可德於一紀二紀之閒收功不遠必有目睹其驗者可德於一紀二紀之閒收功不遠必有目睹其驗者可德於一紀二紀之間收功不遠必有目睹其驗者可德於一紀二紀之間收功不遠必有目睹其驗者可德於一紀二紀之間收功不遠必有目睹其驗者

歸宗寺復生松記

唯心之義耳鷹山歸宗寺乃亦眼禪師說法處相繼顯三界唯心之旨及於無情成佛世所難信是不達願武別山河大地草木叢林皆成佛真體共轉法輪意

乎徵矣因記之以告來者知此松爲法身常住也後

人以吉凶七十二鑽而無遺策唯在志誠其應如響 公說法而石點頭以法非心外感變由人即枯龜告 所謂若能轉物即同如來人物同體共轉法輪於是 感變而唯心之義彰明矣觀孟宗哭竹而冬抽筍生 株耶若謂無情能若是乎雖然草木無知是在精誠 殿宇翻五礫爲淨土其轉變之機豈不先見於一枯 公重興其寺竟感 果重長皮膚完密枝葉榮茂未幾歲大饑寺有發質 當重與此松復生如故徘徊賦纍九爾而去不數年 率諸弟子運石甃團以土培之爲之呪願誓曰若寺 其下願乞米以贖匠氏感之乃已不數年閒果清湛 以松易米而食匠石睥睨顧將伐之適有丐者息蔭 將推折時達觀禪師過而問之數曰此歸宗惟存此 立撑漢其根下為樵人剝到已去其半枝柯枯悴勢 者明眼知識三十六人其地踞匡山之勝爲靈久矣 一刹竿耳奈何遭於斧斤無此則道場之迹泯矣乃 既廢之後,琳宮梵字委之草莽獨寺前古松一株挺 皇上頒賜大藏一時當道爲建

世黨有損其一毛即爲戕害法身斷佛慧命可不念

哉

盧山金輪峰釋迦文佛舍利塔記

會至建康設像行道求舍利於長干里吳王建塔以 藏之物建初寺此江南塔寺之始也東晉成帝威康 五季而宋道漸衰寺漸頹宋景德皂祐閒再重修之 振於茲山自此相機說法者三十餘人皆載傳燈及 皆門下高弟一 **頁鐵以爲浮屠此西江塔寺之首焉至唐元和閒亦** 乃以所攜釋迦文佛舍利建塔於歸宗金輪峰頂身 廬山開蓮社於東林然師耶舍尊者王遠公邀入社 見而異之乃舍宅建歸宗寺以居之義熙中遠公至 中梵師達摩多羅持禪經至時王右軍羲之守江州 佛法自漢永平始入中國吳赤鳥閒西域梵師康僧 場田地盡爲民業矣萬歷癸丑達大師弟子果清湛 元豐中僧文淨復振及元末機於兵自是塔寺慶山 眼常禪師得馬祖心印開法於歸宗而匡南諸名刹 公因禮塔過而歎焉遂啓恢復之志獨謁諸薦神惶 時之時號稱法堀西來單傳之道大

> 越同時一 塔購鐵數萬斤未果即遷化甲寅修慈於吳中造毗 其山場田地居然一大道場也癸丑邁公欲重修其 **慈爲住持當道建殿宇黃梅孝廉那懋學捐資盡贖** 次聞者皆知其爲舍利瑞也慈恐鐵易薄蝕外以磁 見舍利數百粒五色資光眩曜人日瞻見者敬禮 灰米汁醬而護之取堅密可垂久也予於丙辰夏自 不感悅是年秋九月安藏之期山谷震吼如雷者七 乙卯春慈秉師遺命治鐵鑄浮屠十三級重開塔廠 結子如塔狀者五高八寸許各十三級遠近咸異之 盧大像回時塔舍利放光者三度照耀山谷寺後松 然ル子爲記之曰皆釋迦文佛入滅茶毗得舍利八 頂不二丈許石穴數尺僅容塔藏蓋天造地設非偶 南岳來瞻禮見其奇峰的拔獨立撑空狀若浮屠峰 一力致感 皇上敕頒大藏 部層其

所成者以其血肉毛變齒骨之不一故有五色之異大顆間焉此豈其一耶舍利乃戒定之餘薰凝四大於我震旦者一十有九惟明州建康者名最著其他於我震旦者一十有九惟明州建康者名最著其他

不動者有流動上下其狀變化不一者蓋各隨感而然也隱諸佛衆生同秉此心衆生以無明三毒妄想然也隱諸佛衆生同秉此心衆生以無明三毒妄想所濕故其體臭歲終成敗壞諸佛以金剛心戒定所所濕故其體臭處終成敗壞諸佛以金剛心戒定所所濕故其體堅固光明照耀常住不壞正報如此依報所之。 實莊嚴於雜花云其地堅固金剛所成是所謂唯心所變豈他力哉佛非淨土不居故舍利非勝地不載所變豈他力哉佛非淨土不居故舍利非勝地不載所變豈他力哉佛非淨土不居故舍利非勝地不載。 正而佛法身舍利常住其中豈小綠哉雖眞常不壞 正者之心與恢復者之志必有願力存焉是爲記

調伏衆生淨佛國土其不壞者微妙功德成就莊嚴

迴業果歷劫不忘菩薩以之爲定慧熏習得意生身

五蘊腥臊臭穢不淨無常敗壞之身其不壞者爲翰

變之不同耳以衆生無明業力念念熏蒸故感四大

明州鄮山阿育王舍利塔記

受問別人大涅槃時彼國王如法茶毗得舍利入斛 分為三分天上人關龍宮各起塔供養而人閒八國 分為三分天上人關龍宮各起塔供養而人閒八國 子阿育王有大神力能役鬼神乃解七寶末造八萬 四千塔偏散四洲而南閻浮提為身教地故塔局多其來震旦者一十有九惟金陵長干與明州鄧山顯 其來震旦者一十有九惟金陵長干與明州鄧山顯 其來震旦者一十有九惟金陵長干與明州鄧山顯 其來震旦者一十有九惟金陵長干與明州鄧山顯 大至明州蚤聞感應之徵今見理公所寄育王山志 清之感而新日此我本師現在世閒說法處也夫舍 清之感而新日此我本師現在世閒說法處也夫舍 清之感而新日此我本師現在世閒說法處也夫舍 清之感而新日此我本師現在世閒說法處也夫舍 清深生本具故佛出世特為開示使其悟入顧師西其來指之為心印是知衆生與佛無二無別第染淨濕 來指之為心印是知衆生與佛無二無別第染淨濕

化則丈六金身示生人閒與民同患而衆生見者但 塔況佛知見又爲文字所障至若諸祖直捷示人而 以此知見即法身慧命故云此經在處應以七實起 欲令見者當下了悟自心順見法身不生滅性此與 生死今者何幸何緣一遇希有難遭之事獨自迷頭 說不生滅法而人不悟諸己概以光明瑞相視之誠 別有玄妙故悟之者希今者親見法身如來觀面爲 形於棒喝譏呵怒罵之閒而人又以機鋒目之將謂 指示此一大事而於法華一會開示衆生佛之知見 靈山踞座末後拈花有何異哉故佛出世說法無非 即法身應機說法以難言三味直指衆生本有佛性 現光相種種瑞應不可思議隨衆生心感而應現者 金剛不壞法身常住世閒本無生滅去來之相故所 常故入般涅槃而國舍利攝受眾生名力持身以示 見緣生之佛不見法身眞體將顯法化無二無常即 身則無量光明相好居華藏莊嚴名實報身其現小 催 謂當面錯過矣可不哀哉嗟夫吾人沈淪多劫流轉 一佛證之爲清淨法身常住寂光身土不二其現大

矣劉薩訶身陷地歐將無出期乃聽梵僧指求舍利 之忠臣孝子志士仁人凡所施作致君澤民而爲不 均皆普賢物語之意也若夫種種莊嚴供養守護讚 為懺罪地故感實塔從地涌出是知康為人劉為己 聽餅中鏗然有聲光爛天地啓之則舍利宛在餅 佛種矣於是痛攀佛號三稱偏身毛孔血汗进 哀請日佛以慈悲爲心苟不應則使此方衆生斷 舍利期以七日不應展三七日中夜猶不應會稽首 學之三者義昭於此初僧會至長干吳主孫權 十大顯顯示法身乃日請佛住世勸轉法輪常隨佛 空言未有若此見諸行事之深切著明者惟曹賢以 佛於法華會上自說法身壽量常住不滅此但託乙 與隆者詎非法王之利見乎總之無一衆生而不具 朽之事業者豈非法身所流行手其歷代帝王崇奉 迷矣若夫般若光明常照而不昧者發於行事若世 **敷者豈非常隨佛學者數且也佛性之在衆生固其** 認影豈不上負真慈自昧本有可不爲之大哀數昔 有此性故見聞隨喜禮拜供養者無異親承接足即 灑 命求 滅

布身命磐所有蝎內外施而為莊嚴特為自性受用

地耳若夫一睹含利順破無明了悟法身長揖生死

者不無其人也由是觀之累代王臣與建於前太字 **永出迷途者是在上根利智夙具聞熏綠熟於當下**

陸公重與於昔司馬郭公再振於今且託法身於毛

圖三昧以見不朽是又皆曹賢願輪所持也理公豈 佛稱空生身子為長老平子自信靈山一會儼在目

前說法音擊熾然無關故特書此以告見聞隨喜禮

拜供養者不得以色相求之也

憨山老人夢遊集卷第二十五

憨山老人夢遊集卷第二十六 侍 者

F Ā 鬺

善

日錄

嶺南弟子 畑 編輯

劉起相

aE

鷹山大悲懺堂記

苦不期出而出矣公以大悲心為苦海舟航之慈楫 之應岳結慝單棲願廣此法以度四衆故建徽堂以 之所親立其來尚矣良以衆生藏藏幽關非祕密心 以人人本有之法而指示之如以甘露羅焦枯而清 熏變葉性是以水投水似空合空但有信者於生死 生皆本法身既迷而爲生死業海令以法身心印而 凉心地不待告而自知矣法性無盡衆生界不可盡 示素修之機堂既成乞記於老人乃謂之日一切衆 於雲樓藏修南岳志以懷法為佛事信奉者來旣而 印不足以破之是爲脱苦之良藥也直指滿公受教 法身所流是為砒盧心印始於四明尊者準大悲經 岸此大悲懺法所由立也其呪本出禮頂部乃中道 令其持誦薫修欲令來生出苦海見本法身登涅槃 行潜入一切衆生妄想海中而為之濟度設陀羅尼 出生死證本際也是故觀音大士稱法界心行大悲 終莫知出自非大悲願力無由以獨苦海消妄業而 唯佛法身無際全體而爲案生案生妄想無際全體 而爲生死之妄業妄業不消故衆生苦海亦無際而

此法亦無盡又何以永永爲計哉

廬山雲中寺十方常住碑記

幾而轉匡山初結卷講經臺居三年以往來為類仍 林後為團瓢以供宴息山門榜日雲中志最高也師 林依大千和尚多達摩西來之旨居十載尋之京師 以衆爲懷精練三案稟明一心居二十二年遂成叢 標榜四事任緣關則親行乞以供之雖寸絲粒米咸 我以道相忘不設規繼無約束人人自律不以世俗 居之草衣木食十方英靈衲子多集師脫形骸無爾 遷五老峰又四年至雲中愛其高絕乃誅茅縛緣以 同往居三年諸所建立多咨之頃又棄去入牛山未 師心知爲法門之傑予去東海妙師關蘆芽因拉師 復禮偏融諸大知識印決心要因之五臺會予與妙 抗之 靈際達機和 尚為弟子執 養三年 思大事未了 仰天坪以其高而無上也昔爲虎狼之巢有雲中寺 遂依講肆聽了義諸經循以文字爲障礙渡江之少 乃敬堂忠公所教建也師諱法忠本欽人年十九禮 廬山禪林綦布山之絕頂九奇峰下最爲幽勝俗呼

好栽松計十餘萬章糞化龍以紀年也予自南岳來綠住此山三十年矣今浮光不久即此道場雖幻綠綠住此山三十年矣今浮光不久即此道場雖幻綠綠住此山三十年矣今浮光不久即此道場雖幻綠縣住此山三十年矣今浮光不久即此道場雖幻綠為高我伽藍身心安居平等性智是佛以十方為懷也四江有言十方同聚會個個學無為此是選佛場心空及第歸是祖以十方為心也惟師生平志在無我於随所建立皆無我今一旦而委之十方是究竟無於随所建立皆無我今一旦而委之十方是究竟無於流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常住而光水流風動皆演無我之法音師廣長舌相常性而

廬山萬霽寺莊殿佛像記始末以告來者

巨瀰中有寺日萬壽葢唐僧德英所建為禪堀也歲林木蓊鬱太乙漢陽桃林諸蜂叢列雲中衆水會於廬山之南刹竿相望其谷之大者日棲寶嚴壑嵌本

迷或一棒一喝之閒使人順盡凡情立登覺地即所 特傍無一呼振起者耳傳燈諸祖大開爐鞴陶冶墓 今轉爲此身是欲覺而復味如人酣睡將醒而復困 濟德山之棒喝涂君一 謂一呼而醒大夢者由是觀之則予之一疏不減臨 目前圓三祗於當下可謂捷疾利根者也斯則同施 之佛性也若涂君者宿生爲信是欲望躋覺路者也 今之莊嚴此像匪直飭金木之幻形質所以開自心 佛不覺則佛即衆生故日心佛與衆生是三無差別 覺之自性也人有此心則人皆有此覺覺則衆生即 新山光拖映若睹毫彩於靈鷺為人天說法時也仍 倡於衆施金若干聖持歸以莊嚴金像殿字煥然 乞予記之日夫佛者覺也為生靈乙大本即衆生知 前身爲僧因字日悞來志不忘本也見疏與心遂先 遣其徒本聖走故鄉新城行乞焉孝廉涂君世延以 薄蝕凄然蒼蘚古瓦閒也楞因發願重新乞予爲碗 慧楞緝而居之古殿數楹不蔽風雨佛像金容塵全 久而毁我 明正統閒信明安重修今亦玘矣禪人 獨而悟本來即能現八相於

皮而出基言性真之不昧也謂記之以爲他日法門像而已哉此佛性之緣經說如人食少金剛終竟透所謂一大事因緣也又豈值施不慳之財節幻化之所謂一大事因緣也又豈值施不慳之財節幻化之世生生於夢宅中遞相呼斥必皆至大甕而後已是

嘉爽平湖縣紫清寺**齊**僧田記

智種靈苗日夜秀發而菩提之果可冀否則墮為無別亦非佛弟子矣然而食此田者亦當知推此心則以永供三寶是爲常住丁巳歲禁公入寂遺殲染子以永供三寶是爲常住丁巳歲禁公入寂遺殲染子心故孝順父母爲敬田拔濟貧苦爲悲田供養三寶出而不力酬有所荒穢者失敬則逆失悲則盗無福即佈之禁命斯斷絕矣其有不及念及此者不爲非田而不力酬有所荒穢者失敬則逆失悲則盗無福即佈之禁命斯斷絕矣其有不及念及此者不爲非別,非佛之禁命斯斷絕矣其有不及念及此者不爲非以亦非佛弟子矣然而食此田者亦當知推此心則

全椒縣三汊河建昌化菴記

中虚若天有關也里人夏讓性篤善而喜奉佛發心 道場其形勢則與山相雄時而制其波流使富不便 建佛刹於河北之滸正殿山門齋堂厨庫居然 盜有時焉我 南二十里與黃山水會三汊為邑之水泄當河之左 有山蹲時若捍門而右隄平衍則水泄無制氣散而 非天地大化之運乘時而昌者耶邑城之水自西而 閉鐘鼓相聞即窮鄉下里奉佛齊心者葢連比也豈 與循寸王也藏輝欽潤向含而未暢若陽春之發育 欽 而施有餘也養既成走廬山言其事且問額於予予 獨朱明之會也今則洋洋佛國之風矣不惟附郭之 久矣全椒當郡之西雖彈丸黑子僻在一隅爲滌之 惟我 聖祖龍飛准甸肇亦滁陽山川之靈固巳 明二百餘年嘉隆之際文運始開時 勝

山高水長

金沙重與東禪寺緣起碑記

此而昌即以此而祝

聖壽保斯民亦大昌於王化

II

躋

仁壽而登極樂之鄉也故略記其事且爲銘曰

IIII

讀之乃知爲大觀閒貢士路亦臨所撰鐘樓記也

桑梓也稔知其故乃題之曰昌化意謂法化之運由

志盡命豎立焉會修茲至遂與法侶海印道成輩議 冀成叢林未幾清公去繼者或去或化乃請獨高原 法師原又去遂以偏弟子浪順海羅爲住持羅則 供禪侶遂成道場清公力守之環寺經行持呪種松 楹伽藍祖師堂各三楹先因達師弟子密藏開公募 子懋銀捷壬千懋鋙捷坊資各如例於是建禪堂五 捐坊資尤修造壬辰雲仍特選應貢及癸卯太史從 子堅音修慈古潭如淸願肩爲十方院時麥浪中敗 達師補其文而存之於是遂發與復之願達師去弟 百金以助粉始庚戌閒太史乏嗣欲捨宅為寺乃賣 最勝法緣也約既就太史從子鏡承父字望遺命捐 止觀妙宗專於淨土社名青蓮耀公主之此末法一 則起信先以讀誦受持爲業熱則如說修行然定主 建法社遵佛三學宗經律論經則法華律則梵網論 萬歷辛卯八月二十八日上梁雲翼登鄉薦報至遂 信頃之遠近果集居士孫雲翼雲仍造禪堂三楹卜 別業千餘金悉捨爲修建實凡造正殿三楹西方殿 屋三楹爲黃冠耕藝所也清公即就處水齋以發衆

遺命以已像供於寺顧為伽藍如南宮之於鶴林也 在北以太史精於形家故也發出秋太史不幸捐館 功之不易也豈獨天下國家爲然而叢林亦以之且 城至衆信喜爲本發心人固留居之居士雲仍爲開 公涕泣攀留竟不可會耀公以他緣欲去予在匡山 予以用達大師未了綠喜而應之以是年冬十月至 貫休畫本漆布為質脫沙為之精妙絶倫爲世一 夫法王御世以安樂行爲家範以梵網戒爲條約賞 法約天爲十方常住予爲憮然而歎曰自古建立成 山檀越備述始末因緣乞予爲記且謂爲定規繩立 聞之重遺書留本懷印公守之未幾堅音慈公自皖 丙辰春耀公集諸**檀越**致書請予主其社以休老為 申品初以舊堂爲主坐北遂以正殿坐東其山門利 三楹新禪堂五楹其制則四合一 存政學固在得人何如耳沙門釋子荷知吾佛歷無 罰森嚴何昭著也所謂文武之政布在方冊者其人 居無何即之雙徑明年丁巳春子志投老歸匡山耀 洞見居然一大道場也殿成其像則耀公監製 局規模軒豁 做唐 目

獨現誌公此丘身久而登著初武帝命張僧繇寫大

極神念念以生死大事為懷又何庸則求佛法哉是 整纖塵滴水皆信心之膏血一思及此身毛皆暨維 雖纖塵滴水皆信心之膏血一思及此身毛皆暨維 雖纖塵滴水皆信心之膏血一思及此身毛皆暨維 雖纖塵滴水皆信心之膏血一思及此身毛皆暨維 數均捨身命而求菩提即今出世猶受雪山六年凍

新安仰山實誌公畫像感應記

新安四塞山奇秀甲東南而仰山特幽勝乃梁開山 為實誌公道場顯名於唐寂禪師久廢無聞焉里俗 業不知佛特奉誌公甚嚴凡講兩前嗣災祥求之立 常遠近皆化源中巨姓聚族而謀請公興復仰山公 常遠近皆化源中巨姓聚族而謀請公興復仰山公 常遠近皆化源中巨姓聚族而謀請公興復仰山公 常遠近皆化源中巨姓聚族而謀請公興復仰山公 常遠近皆化源中巨姓聚族而謀請公興復仰山公 常達近皆化源中巨姓聚族而謀請公興復仰山公 常達近皆地源中巨姓聚族而謀請公興復仰山公 常年,被舊鼎新達成一大道場如天降地浦四境之 大大東東山下田以易其地率弟 等年,被舊鼎新達成一大道場如天降地浦四境之 大大東東京。

三被火栗之而不燉以是知非我所宜有也今送師 綠予聞而甚異之惟大士應身無量然皆一過而 同心泰昌改元嘉平月靜光來匡山授戒具悉其因 大士弟子靜光供養者因知其人前所愕者怪其名 將與前二合併耳光受而展之則見額載武帝敷賜 分兄弟三人前兩弟者巳歸上刹矣小子所藏者家 客日先人爲石工修報恩塔得誌公大士畫像三幅 其故運數日衆赴齊光又後頃之前客至光與之坐 以爲鬼物越數年伯子遠行歸途失道誤至山下革 之玉覺二公得之以爲神物久之伯子家火速戒家 路光指之客感而問其名報日靜光客愕然光不知 所時個俱赴齊而靜光禪人獨留頃之一客揖而問 幾李卒仲季二子日就質知誌公道場在仰山遊獻 懷歸其人乃新安讀溪李氏也有三子各分其一末 利塔匠氏得於金頂實辦中乃梁張僧繇手筆卷而 人業像而搶券及撿之像存而券懷如是者三述怪 三幅流落民閒不知其所萬歷辛丑金陵報恩修舍

葬於鍾山之陽我 關然未聞在仰山也大士入滅武帝以二五紅為龜 葬於山東之靈谷建塔寺以奉之立像於城中雞嗚 長滿手託一板題日梁實誌公 乃知其爲化身也傳載存日多往來於潛山太湖之 不謂於仰山荒榛荊棘中放光現瑞足見至人應化 寺設春秋祭祀以麵爲犧牲太常典禮至今如一日 士真慶易不肖大士以指劉砐面皮現觀音大士相 萬八千兩命工部侍郎吳世良同聖師弟子靜光造 後一額有金字敕載大士滅後武帝思之乃賜銀十 乃生前封號較其一乃身後武帝讚必僧繇手筆其 無方神妙而不測也予循覧三像因緣前二像其一 養一賜大士之弟子靜光禪師復賜田若干未載其 臣說戒三屬合一板成止許印二幅其一留宮中供 歷安奉乃命刻殷式及武帝御臨上香幷大士爲諸 地是則三像原非一處也然梁至 上自定之啓土得瓦龕開視見肉身如生叉髮 一而仰山父老何從聞而知之耶此其可恠 聖祖定鼎建康親卜壽宮於山 聖祖大異之乃移 國初巳千餘年

豈期石工為那人此其五也雖像集新安二子縱歸 安佛利特獎於仰山僧實始現暄公而誌公畫像完 千古而不泯常住於蒼崖石壁以發度戾之善根新 此其七也故予聞而甚異之感歎無巳以見至人濟 也且像始於大士生前身後而歸亦如次道場成而 山中而伯氏不遭三災亦竟無合併之日矣此其六 也縱像從塔出藉使一落他人之手則仰山何望為 人閒之理何仰山重與之時適當修塔之日此其四 乃傳言於今日耶此其三也然像安塔頂無復再見 像置於空中且像既歸塔頂仰山父老何從而知之 **也報恩塔建於不樂宣德閉內藏豈無恤實而以三** 府民幸運散不常何三像竟歸天府亳無虧損此二 形為物法身湛然偏十方而不分經三災而不壞歷 歸則在玉覺二公及靜光諸孫梵刹重新之日孰非 圖乃現藉使靜光之名不同亦無以發伯氏之信心 記之以示永久使觀者因三像因緣知大士感應乙 我大士法身常住慈悲威神玩受之力也哉子故委 也況千百年期更朝換代兵火離亂不知其幾公

大師開化於曹溪則以戒壇為根本地弟子往來於 晉耶舍尊者乘番舶抵仙城建梵利種詞子成林故 子通炯超邁數十輩皆位授教博士弟子亦多歸焉 如生造化密移世道不古久之循不知有戒人不知 其中故今寺僧皆從衣鉢中出千百年來香燈供奉 分戒乃歸曹溪禪宗實自此發源也戒爲成佛之本 菩提樹下實應其識遂從智光律師登跋陀壇受滿 號訶林宋求那跋陀攜楞伽四卷至止訶林立戒壇 歷丙申春予蒙 有壇清淨覺地化為孤堀歲月更歷幾易其主矣萬 大智人於此出家及我六祖大師出黃梅衣鉢剃髮 師智樂三藏攜菩提樹植於壇側記曰百七十年有 於林中議曰後有內身大士於此授戒梁普通關於 其由水而至五羊豈以性海一脈潛流於大地耶自 佛法入中國教自白馬西來從陸而至從陽禪泛重 越七年壬寅諸弟子相聚而歎日戒壇乃吾祖 **廣東光孝禪寺重興六祖戒遭碑銘并序** 恩徒海外開法於堡壁開樹下弟 師規

本地奈何湮沒無歲忍坐視乎爛邁寡賣鳩材居士太五羊越八年逸老匡山炯逸從遊未離窗然依棲去五羊越八年逸老匡山炯逸從遊未離窗然依棲去五羊越八年逸老匡山炯逸從遊未離窗然依棲去五羊越八年逸老匡山炯逸從遊未離窗然依棲去五羊越八年逸老匡山炯逸從遊未離窗然依棲在無出沒常寂光土安有去來人世變遷任運佛國本無出沒常寂光土安有去來人世變遷任運佛國者之人後之來者事無今日之衆耶此佛種從綠塵替之人後之來者事無今日之衆耶此佛種從綠塵對不味燈燈相讀而無盡者也乃爲第日

大海灣流四天下地禪宗一脈自南而至爰有至人 大海灣流四天下地禪宗一脈自南而至爰有至人 大海灣流四天下地禪宗一脈自南而至爰有至人 大海灣流四天下地禪宗一脈自南而至爰有至人 大海灣流四天下地禪宗一脈自南而至爰有至人 大海灣流四天下地禪宗一脈自南而至爰有至人 東省益盛聖凡不分龍蛇乃混枝柯旣枇枝本不固 集者益盛聖凡不分龍蛇乃混枝柯旣枇枝本不固 大海灣流四天下地禪宗一脈自南而至爰有至人

acets and mail All And Are a few and

惟此道場如是如是如是 如出礦金縣未來緊將傳此心虚空可殞心光不昧 **薬落歸根來時無口實我祖師將心自剖此壇旣復**

不踐實仍打餓七者三不米食者期年已而隨師禮 和尚心相契可以大光字之時歸依焉公自以爲行 發明乃乞印證諸方萬歷乙未至襄陽潭溪遇無聞 二十二年復之伏牛煉魔場打長七三月至是心有 年未有所悟入尋出山行脚偏歷諸方參請知識者 執侍未久即入終南百草坪嚴居荣奠飲水面壁九 武當參不二和尚開示念佛法門遂薙變韶名眞月 傳舍哉公諱真月晉之汾陽人也姓燕氏父維時母 饑寒孰得而問焉非月公以身命布施則曷能爲此 大名山之所必由向無息景之地則長途困頓風雨 楚為漢南一大都會當天下之衝方外絣錫往來四 普陀蒙丁酉至武昌因見十方衲子往來無所棲泊 宋氏感異兆而娠年三十順乗妻子出遊方外先至 遂志建接待處乃持鉢行乞至東郭雙峰之下有古 武昌府雙峰接待寺大光月公道行碑記

終則信其爲真實行也原夫衆生所以常寢生死者

頭目髓腦而無恪惜雖百千劫而無疲厭始而驚異

生自度矣我人既空則衆生界盡衆生界盡則煩惱

業果何從而寄耶成就妙行無踰此也一切聖凡因

以其有我而爲障也菩薩度生須先度我我度而衆

名所鵬願獎復焉於是坐荒樣中不食者二七日經 刹盡廢唯白衣大士像臺泥土中公悲痛良久即稱 而復無復水齊百日人見其精誠無不警動公律已

年閒遂成叢林予丙辰夏自南岳之雙徑舟次江上 甚嚴自廿淡薄粒米莖菜與衆同之接納無倦出入 以身爲大地荷頁衆生以身爲橋梁濟渡衆生乃至 嚴知菩薩利生行非一種率以廣大深心視物同已 見其爲人端嚴誠愁信其爲四衆依歸也予嘗閱華 施利因果皎然毫髮無爽一方檀越日益信重不十

莊嚴本非分外故如公者始以如絲一命以願點之 果依心建立隨願所成心空顧固則應念現前淨土 此有作幻化因緣又何足以盡法界之量耶雖然嘗 而竟成如許廣大佛事豈非從空建立由是觀之則

因感公之行遂記之以勒貞石爲法門将來者動一滴以知大海路一隙以見太虚由是有以知公矣

都昌縣重與佛殿山長慶寺記

會豈小緣哉經云想證成國土今之與者施者助者 滅猶然長慶未至時也今此道場之興粉始由於性 場景鐘夕梵示肌 後之居者守者能知建立之心一草一葉盡爲金剛 之勝事使山林草木同放光明超越前修而若是耶 居閒而效力者荷非同一金剛心地安能類成不朽 念綠會由於拙公克奴則實資於學南父子一家際 聲皆爲廣長舌相演說無生無二佛法矣及緣散而 耳茲山當長慶末至時奇峰絕壑唯草木蒙茸猿鶴 山河皆一眞法界處處無非道場唯在緣之會不會 生無有則生本無也世出世法莫不皆然是知大地 故曰一切諸法緣會而生緣會而生則未生無有未 種子則此山此地松聲泉響皆演法音汞爲菩提道 聞瞻禮頓發無上菩提之心向之山林草木一切音 嘯唳蛇虎縱橫而巳及長慶一過遂即建法幢使見 具述因緣乞予為記予喟然數日法界皆從緣起也 人天有漏而擬議耶因述其始末因緣以昭來者 聖壽無疆矣如是建立又豈可

吳江接待寺十万常住記

... ... 1 2 sem

The same of a

万雅重之叢林日益振念法門之老者無所歸乃設 久過化於此法緣最熟勤公立行端確不忝其嗣一 勤乃達觀禪師之法孫密藏開公之上旨也以禪師 捐資建禪堂立永遠十方常住了空後得無邊海公 接待院尚書五臺陸公中丞太素沈公善士吳氏等 其衝寺建於宋紹熙閒僧寂照開山額承天萬壽元 簽老延壽二堂建普同塔此爲最勝悲行也諸護法 繼之至庚戌海遷化邑縉紳居士延念雲勤公居之 非化城暫息無以濟其凱渴勞苦此接待之設尤爲 者是以十方僧徒往來繩繩不絕如縷而中途疲乏 恒產以供來者緣既具勸公走壽乞予以記之日自 者為久遠議設長生田蒙計三百六十畝於是寺有 至正閒僧正壽增修改名接待萬曆初層了空重開 第一最勝行也吳江爲南北孔道津口接待寺適當 女之有知者靡不歸心爲實所其南海又近而易至 **慶日五臺峨嵋補陀三山爲三大士攝化地墨爾男** 雜花云毗盧遮那偏法界身以智悲行而爲莊嚴我 古叢林非建立之難而守業之爲難也以佛教菩薩

> 專以利他為任故方文立清規凡在伽藍衆僧之物 身潰爛極言其不可輕易染指也粒米莖菜尚不敢 身潰爛極言其不可輕易染指也粒米莖菜尚不敢 身潰爛極言其不可輕易染指也粒米莖菜尚不敢 為福田種子佛說食者苟非良田則不免復身藝價 之心不普必不能成此業後之守者非若勤公之心 之心不普必不能成此業後之守者非若勤公之心 之心不普必不能成此業後之守者非若勤公之心 之心不普必不能成此業後之守者非若勤公之心 之心不普必不能成此業後之守者非若勤公之心 之心不普必不能成此業後之守者非若勤公之心 是為因圓滿毗廣告海之津梁平若明察秋毫不味因果 於行利濟無窮悲田益廣則為觀音之大悲三者具 足為因圓滿毗廣法身之果是則成佛妙行無越於

予昔東遊弔達師信宿其地且知勤公之操心立行

数此功德最勝故詳爲之記

是矣又何庸登山涉水廣參知識別求玄妙佛法手

兽度菴記

生命取其血肉以資口腹即一食之閒一器之內傷 萬生之苦矣何況一生所作耶稷業一種已無涯矣 緣非漫爾也予初至曹溪居士遠來多禮請爲之記 百千命若計藝慣因果不爽其一日之業已招百千 取三途惡道之劇苦百千萬劫無由出難且如殺他 佛性變爲妄想造貪眼凝盜殺盜淫妄種種惡業自 **盗動含靈皆共有之第迷之不覺日用而不知將此** 予聞而讚日善哉廣大之心也惟此佛性聖凡同稟 況多業乎積業既深且廣是為苦海荷無舟航濟度 **颜日普度願同里長幼各各發隨喜心同結出苦之** 法門廣大以普度爲心建精藍一所奉觀音大士像 發心向道歸依三實見龍舒淨土文歎日此迷方指 願長齊繡佛屏紀家綠專修淨業三年於茲矣因忠 南也隨得雲棲彌陀疏披閱再三益諦信不疑即發 不售每念人生虚幻徒碌碌耳思所以求出苦之方 最鉅煙火萬餘家居士李宜慎字彦周幼業儒像材 番禺之東南沙灣宋丞相李忠簡公之故里也居族

> 亦一大事因緣也是為記 亦一大事因緣也是為記

寧都金蓮菴記

即化為西方淨土境覺而數日天宮地獄善惡隨心即化為西方淨土境覺而數日天宮地獄種種變相頃地高廠先是父老傳聞忽生金蓮數采知可為道場地高廠先是父老傳聞忽生金蓮數采知可為道場地高廠先是父老傳聞忽生金蓮數采知可為道場地高廠先是父老傳聞忽生金蓮數采知可為道場。

常住者是以袈裟換毛角以實地易泥型可不懼哉 能體作者之心於中精勤三業專淨一心則是其地 之曰山河大地觸目道場淨土娑婆隨心轉變故古 經日夜精勤無倦由是一方感化予居匡廬之四 了此俗姓廖氏爲邑之望族十八出家法名如曉其 四事現成縱放身心夤緣俗業以致外侮見侵損壞 棘而成實坊亦可以變道場而爲業海若後之守者 乎此實從金剛心之所建立也然既能以一心變荊 人拈一莖即建梵剎況修崇殿宇僧坊種種具足者 庚申冬公同難名道公來謁乞一言以紀其事予謂 感變耳因而發大誓願切志修持專心持誦華嚴大 堅固金剛所成永永常住不動不壞若以安居如意

揚州府興教寺放生社建接引佛閣

弟子某等併記之

寺延覺賢尊者譯華嚴經故名小與嚴比尊者翻譯 維揚東南一大都會也法門之叛自晉謝安捨宅爲 時感二童子日送水問之日龍孫也由是道場始開 相沿時代改名獎教嘉隆閒我先師無極和尚弘法

故多生然放一生即成一佛是則順使胎卵溼化無

量無數無邊衆生皆悉入於無餘涅槃實無有一衆

矣愍物更迷若夫飛濟鑫蝡何能使其自覺耶故推

我同體之悲以拔之仗佛真慈以蹟之故念多佛以

歎曰此吾佛所設自利利他最勝之行也聞之佛者 行結念佛放生社以月八日為期建接引佛閣以示 佛也一念覺而一念佛念念覺則念念佛若常覺不 門唯念佛最為簡捷然念佛非他乃呼目性天真之 覺也即五人本有知覺之性上與諸佛下及衆生均 歸心有地冀且垂化於永久也乞予爲記予聞而讚 白業一時鄉薦紳先生雅重之由是引攝於慈悲之 於江南四方學者多往來首座餐堂璋公挂錫於此 味則爲常住佛矣自利之功無越此者然而自既**覺** 此怒物迷之特現世閒普爲開示使令悟入方便多 性不迷而爲佛迷之而爲人顚倒而爲物惟吾佛 同體所謂眞淨妙明虎徹鑿通卓然而獨存者也 賦而同稟者裴休曰血氣之屬必有知凡有知者必 璋法孫靈裔燈公往受業於先法兄雪浪之門精修

大而難能故德廣而益大所以文殊之智普賢之行

觀音之悲皆與法界等者葢推無我之心之極致也

是則此養雖小足含法界即三大士常住此中而驅

故也故菩薩萬行攝於六度又以施為總持以其心

之時大經云我今於一切衆生心中成等正覺謂是

廣而成佛之眞種盆深如是功德豈可得而思議耶聞隨喜者一瞻一禮與起普濟之心則同體之悲盆我之願仰憑佛力故設接引之像建閣以奉之令見生得滅度者如此豈不爲最勝二利之行耶是則以生得滅度者如此豈不爲最勝二利之行耶是則以

田利登豈可得而思議哉故予詔居士之名福田志

卷七百下古本

塔銘

徑山達觀可禪師塔銘

窓山老人夢遊集卷第二十六

其行也是為記

裏山村ノ東京美典名第二十一

整山若人夢遊集卷第二十七

者福善

日鉄

通 炯 編輯

野壯其貌因以全藏之遂同歸寺具晚倉職甚聞信

嶺南弟子 劉起相 重較

起一擊碎之掉臂獨往者自非雄猛丈夫具超世之夫大地生死頭與長夜情調固閉藏鎖難閉有能源

尊者重法故心其先句曲人父沈連世居吳江太湖,觀禪師見之矣師諱眞可字達觀院號業稻門人稱」

之繼缺師其季子也母夢異人授其附葉大鮮桃寤

而香滿室遂有嫉師生五歲不語有吳僧過其門摩

田子助之遂往平湖巨室門外跌坐主人進食卸不食主問河所須師日化鐵萬斤造大鐘有即受食主, 原子讀書年半不越圖見信有飲酒茹葷者師日出家兒如此可殺也皆成畏憚之年二十從講師受良。 家兒如此可殺也皆成畏憚之年二十從講師受良。 家兒如此可殺也皆成畏憚之年二十從講師受良。 家兒如此可殺也皆成畏憚之年二十從講師受良。 家兒如此可殺也皆成畏憚之年二十從講師受良。

嘆日視之無內喫之有味覺欲化鐵萬斤造大鐘師

驚諦剃髮滋禮覺為師是夜即兀坐達旦每私語三

有大寶何以汚在此中耶解腰纏十餘金授覺令設

夜誦八十八佛名心大快覺便長入覺室日吾兩人

雄猛慷慨激烈貌偉不羣獨不好弄生不喜見婦人遂能語先時見巨人跡下於庭自是不復見君年性頂謂其父日此兒出家當爲人天師言訛忽不見師

女無敢近者長志日益大父母不能拘害有詩日屠

拘雄心示易消益實錄也年十七方仗劒遠遊器上

行至蘇州閶門遊市中天大兩值虎邱僧明覺相顧

浴不許先一日姊誤前就浴師大怒自後至親戚歸

- 386 -

處至京師多偏融大老融問從何來日江南來又問 孤 **磯師直嶘施傍僧顧謂師曰脫了一層還一層師笑** 揚化融口你須清淨說法師日只今不染一塵融命 來此作麼日智講又問智講作麼日貫通經旨代佛 既生後如何宿展兩手師於言下領旨尋跡之失其 領之遂留掛塔知識嘯嚴法主選理諸大老師皆及 底至日行二百里乃止遊五臺至峭壁空殿有老宿 匡山窮相宗奧義一日行二十里足痛師以石砥脚 使我在臨濟德山座下一掌便歷安用如何如何過 俱腫一日孫次忽悟頭面立消自是凌蹀諸方嘗日 錯他不錯師大疑之到處書二語於壁閒疑至頭面 員如亦是邪師日錯也當云方無病不是邪僧云你 日吾當去行脚諸方歷多知識究明大事遂策杖去 一日聞僧誦張掤見道偈至斷除妄想重增病趨向 此足矣遂之武塘景德寺施關三年復回吳門群覺 嘉興東塔寺見僧書華嚴經跪看良久歎日吾輩能 去九年復聞虎邱省覺乃之淞江掩關百日之吳 坐師作禮因問一念未生時如何宿竪一指又問

不死心坐禪徒增業苦如能護念罵佛猶益真修遂 明月一輪簾外冷夜深雪照坐禪人志欲恢復乃靈 **電往参叩及至見上堂講公案以口耳為心印以帕 引錐刺臂流血盈碗書之自是接納往來後二十餘** 公施建禪堂五楹既成請師題其柱師為聯語日若 開公任恢復之事而屬太宰爲護法太宰公弟雲臺 長水疏經處久廢有力者侵為園亭師有詩吊之日 尋即南還至嘉禾見太宰陸五臺爾心大相契先是 子為真傳師耻之歎日西來意固如是邪遂不入衆 遂作禮之天池遇管公東復聞其語深器之師因拈 師風往歸之師知爲法器留爲侍者郡城楞嚴寺爲 有密藏道開者南昌人東門於出家披剃於南海聞 德問公公無語因罰務一供遂相與莫逆時 薔薇一帯二花問公公日此花同本生也師分為| 日此花是二師何言一師日我言其本汝言其末子 子一日搦二花問師云是一是二師日是一子關手 蘇聊城傅君光宅為縣令其子利根命禮師子不懌 極之三年大干潤公開堂於少林師結友巢林介如

至此 覺慚服願執弟子禮親近之師來之日覺夕飡飯盂 臥小 忽墮地迸裂其滅感如此師初過吳江沈周二氏聚 公覺已還俗以醫名聞師來憎甚師偽爲賈人裝僵 **越云師於嘉禾刻藏有成議乃返吳門省得度師覺** 復化城爲徑山下院藏貯經版固吳公信力亦師預 議曹郎参師入室從容及刻藏事師遠日君與此法 有大因緣師化後吳公出長斯藩用馮司成初議修 幻予本及最後弟子澹居鎧也初桐城吳公用先為 行開公以病隱去續蔵其役者弟子寒灰如奇奇子 五臺居四年以永雪苦寒復移於徑山寂照庵工既 翟公汝稷等定議命開公董其事萬曆己丑創刻於 遂與太宰公及司成馮公夢顧廷尉會公同亨問卿 爲流通普使見聞作金剛種子即有誘者罪當自代 重多遐方僻陬有終不聞佛法名字者欲刻方册易 象季法道陵運惟以弘法利生爲家務念大藏卷帙 年太守槐亭蔡公始克修 耶今且奈何覺日唯命是聽師立命剃髮載去 舟中請覺診視覺見師大驚師涕泣日爾何迷 復 蕊師 願力所持也師見

> 詰朝將長發是夜一見大歡笑明發請還山 長安聞之極促裝歸兼程至即墨師已出山 公塔院地已歸豪右矢復之而未果乃決策西游峨 石經山禮隋琬公塔念琬公慮三災劫壞正法澌滅 心相印契師即以予爲知言許生平矣師返都門訪 謂弟子曰死生關頭須直過爲得耳衆心欽服予在 師解衣先涉疾呼來水已及肩師雖然而前既渡顧 **創刻石藏經藏於嚴洞感其護法深心淚下如兩碗** 窟慈聖皇大后爲保聖別延國祚印施大藏十五部 師携開公走海上至膠西秋水泛漲衆度必不能渡 皇上頒降海內名山首及東海予以謝 月也子以五臺因緣有聞於內避名於東海那羅延 與計藏事復之都門乃訪予於東海萬曆丙戌秋七 在焉聞妙峰師建鐵塔于蘆芽乃送經安置塔中且 於于園書法華經以報二親頭書經處日墨光亭今 族而歸之至曲阿金沙賀孫于王四氏合族歸 恩入長安 留旬日 在脚院 。禮 師

帽由三晋歷關中跨棧道至蜀禮普賢大士順流下

罹塘過荊襄登太和至匡廬尋歸宗故址唯古然一

客至誤先舉一食乃對知事日今日有犯戒者命爾 交睫信為生平至快事偏融老已入滅為文形之有 嗣德不嗣法之語師在潭柘居常禮佛後方食一日 作記回寓慈壽同居西郊園中對談四十晝夜目不 **壑**因請舍利入 音寺啓石室佛座下得金函貯佛舍利三枚光燭嚴 披紫施與高人福倍增儒隨師過雲居禮石經於雷 侍陳儒致齌供特賜紫伽黎師固讓曰自慚貧骨難 弟子心師復北遊至潭柘 謁請出家遂薙髮於山中師銘名曰法鎧所謂最後 馬祖庵師喜其境超絕屬建於利江陰居士趙我聞 駐錫匡山未果遂行過安慶阮君自華請遊皖公山 復其願力固如此江州孝廉邢懋學延居長松館師 爲說法語名長松茹退鄒給諫爾瞻丁大参勺原留 砌石填土呪願復生以卜寺重與兆後樹日長寺竟 以存寺蹟師聞而奧感樹根爲樵斧制斵勢將折師 株寺僧售米五斗匠石將伐之丐者憐而乞米贖之 聖母齋觀餘金贖琬公塔遂拉予偕往瞻禮屬予 內供三日出帑金重藏于石窟以 慈聖聖母聞師至命近

長州子度嶺之五年庚子上以三殿工權礦稅中使 憤以緩死師在匡山聞之日時事至此其如世道何 之再三歲行師囑曰吾他日即先公死後事屬公遂 孫杵臼之心我何人哉公不生還吾不有生日予慰 放遂待於江滸是年十一月會師於下關旅泊庵 部冀施不死即往採曹溪回將赴都下救予聞予南 半個囑誦滿十萬當出獄吳持至八萬家 遂策杖赴都門吳入獻師多方調護授以 者駐湖口南康太守吳寶秀刻 執予手歎曰公以死荷賀大法古人爲法有程嬰公 死遣戍雷陽毁其寺師在匡山聞報許誦法華經百 成以別綠觸 也越二年乙未子供奉 往濟曹溪以開法脈師先至匡山以待癸巳秋七月 師與予計修我 智氣如油入麵牢不可破苟折情不痛未易調伏也 痛責三十棒輕則陪之知事愕不知為誰頃師 自伏地于佛前受責如數兩股如墨乃云衆生無始 聖怒記逮下獄鞫無他辭蒙 朝傳燈錄予以禪宗凋敝與師約 聖母賜大殿經建海印寺 奏被逮其夫人哀 毗舍浮佛 上意解 恩免 飾

、及 說由是注意適見章奏意甚憐之在法不能免因逮 公學程以建言逮繫問道於師聞之急趨至撫之日 下濱紙疑當更易遣近侍曹公寶於師師以偈進日 仍作這般去就耶乃說偈說端坐安然而逝御史曹 無他辭送可冤時執政欲死師師聞之曰世法如此 發震動中外思者乘閒刻師師竟以是罹難先是 師 幸謝江南諸護法道人哭師叱之日爾侍予二十年 久住何爲乃索浴龍囑侍者小道人性田日吾去矣 御行一滴萬世津梁無窮法藏從此放光上覧之大 聖上以輸主乘願力敬重大法手書金剛般若偶汗 師入山中報書直云捨此一具貧骨居無何忽妖書 王舍城矣癸卯秋子在曹溪飛書屬門人計偕者招 不歸則我出世一大負礦稅不止則我救世一大負 傳燈末續則我慧命一大預若釋此三頁當不復走 視法幢之推則紹隆三寶者當於何處用心耶老為 去得好師復開目微笑而別癸卯十二月十七日 旨下云著審而已金吾訊勒但以三負事對絕 師以予末歸初服每歎曰法門無人矣若 4

之左日文殊臺卜於丙辰十一月十九日茶毗廿三 於死生無慮矣豈其驗耶師化後待 亦持否師日吾持二十餘年已熟何半若熟兩句吾 李卓吾事心最慟因啓羅拂面痛哭之至京口金沙 秋陸長公西源欲致師內身南還啓之安然不動予 不改及出徒身浮塵於慈慧寺外次年春夏霖雨 羅何法所致哉師常以毗舍浮师偈示人予問日師 俗弟子繆希雅相得五峰內大慧塔後開山第二代 秋九月也越十一年乙卯弟子塟師全身於雙徑 來雙徑爲雙樹貝葉如雲日目屯以是故耳時甲辰 曲阿諸弟子奉歸徑山供寂照庵師臨終有偈云怪 上下聞之無不歎服於戲師於死生視四大如脫散 十有奇師生平行履疑信相牛即此末後快便 也師生於癸卯六月十二日世壽六十有 日歸靈骨塔於此予始在行房聞師計欲親往用因 後司成朱公國顧禮師塔知有水囑弟子法鎧啓之 弟子大義奉師寵至經路河馬侍御經論以感 一紀未遂本懷頃從南嶽數千里來無意與期會 命六日顏色 一法 師與 臘四 一、著 皮

以師不出世故無上堂皆說示衆諸語但就參請機

綠開示門人緝之有內外集若干卷行於世入室緇

故凡入室不契者心愈怒而恨愈深一棒之下直欲 人不以常情為法求人如蒼鷹撰死一見即欲生擒 弟子必令自参以發其悟直至疑根盡拔而後巳接 激類如此師氣雄體豐面目嚴冷其立心最慈每示 有房侍者不哭師呵日當推墮汝於崖下其忠義感 働哭奉命既推刃因復自發師至此淚直进避弟子 城垂陷不欲死於贼授部將一劒令斬其全家部將 敬閱曆書必加額而後覧偶讀長沙志見忠臣李芾 地嚴重君親忠孝之大節入佛殿見 行於世性就山水生平雲行鳥飛一帶無餘無容足 音尊者所著諸經論文集及蘇長公易解盡搜出刻 異梵刹一十五所除刻大藏凡古名專宿語錄若寂 古利荒廢必至恢復始從楞嚴終至歸宗雲居等重 盡命立不近闖秉金剛心獨以荷賢大法為懷每見 者不寒而慄常露坐不避風霜幼澤母訓不坐圓則 家即以不至席四十餘年性剛屆精進律身至嚴近 得以少盡心焉於戲師生平行覆豈易及哉始自出 而預定祭日盡精神感字亦奇矣師後事子幸日整 萬歲牌心致

> 子矣姑錄大略以俟後之明眼宗匠續傳燈者采焉 濂雜諸儒遙續其脈以此證之師固不忝為轉輪員 若據堯舜之道傳至孔子孟軻軻死不得其傳至宋 地誠可遠追臨濟上接大慧以前無師派未敢妄惟 濟幾十幾代於戲邪魔亂法可不悲手予以師之見 師粒絕響近則蕭團未穩正限未明遂妄自尊稱臨 關主其門人為先師雲谷和尚典則尚存五十年來 雲門自舞大伯後剛縣見其人法眼大盛於永明後 其如慧命何原其曹洞則專主少林爲仰圓相久隱 其道及國初楚石無念諸大老後傳主弘正末有濟 則流入高蹇獨臨濟一派流布寰區至宋大慧中與 五家綱宗不振常提此示人予嘗嘆日綱宗之不振 日正法可無臨濟德山末法不可無此老也師每概 **豊常人品的其屬地直捷穩密當上追古人其悲願** 利生弘護三董是名應身大士有人問師何如人予 **認斷命根故親近者希凄然暖然師實有焉於數師**

白弟子甚多而幸官居士尤衆師生平行覆不能具

載別有傳乃爲之銘銘日

佛未出世祖未西來擊塗毒鼓龍其人哉驚衛拈花少室面壁只道快便翻成展籍黃梅夜半老盧竊逃。 並科嶺南有此薄瘡南嶽青原蒸膿涕漠多少癡人。 竟孫惡辣獨者先亡但放一線其家來島門戶孤單 命在一絲有救之者定是嫡兒如漢張良爲韓報仇 命在一絲有救之者定是嫡兒如漢張良爲韓報仇 發然國破宗就可求是生吾師如石迸笋出則凌霄 就知其本爲法力戰通身汗血大似李陵空拳不怯 教知其本爲法力戰通身汗血大似李陵空拳不怯 身雖陷虜其心不亡千秋之下畢竟歸王師金剛心

一死一生春在花技

雲棲蓮池宏大師塔銘

學行重一時於科第循掇之也顯志在出世每書生生而顏異世味澹如年十七補邑庠試屢冠諸生以生而顏異世味澹如年十七補邑庠試屢冠諸生以師諱珠宏字佛慧別號蓮池志所歸也俗姓沈氏古師諱珠宏字佛慧別號蓮池志所歸也俗姓沈氏古

未關乃懷木主以遊每食必供居必奉其哀慕如此 隨衆煉廣入京師多偏融笑嚴二大老皆有開發過 杖遊話方遍參知識北遊五臺感文殊放光至伏牛 痰乞昭慶寺無麋玉律師就擅受具居頭即單瓢隻 裂師笑曰因綠無不散之理明年丙寅訣湯曰恩愛 往之志決矣嘉靖乙丑除日師命湯點茶捧至案益 婚湯氏湯貧女藥疏有富者欲得師為佳壻陰閒之 至金陵五官寺病幾絕時即欲就茶毗師微日吾 何奇焚香擲载軍如夢魔佛空爭是與非師以母服 東昌忽有語作偈曰二十年前事可疑三千里外遇 往吾徐行耳師乃作一筆勾詞竟投性天理和尚 不常生死莫代吾往矣汝自爲計湯亦灑然日君先 觀哉前婦張氏主一子湯婦亡即不欲娶母强之議 耳洋生幾何吾三十不善定超然長往何終身事齷 心淨土矣家戒殺生祭必素居常太息日人命過除 死事大四字於柔頭從遊跡藝心折歸佛理業已棲 師竟納湯然意不欲成夫婦禮年二十七父喪三十 一母喪因第泣曰親恩問極正吾報答時也至是長 祝

定慧何依思行利導必固本根第 吾所懼也且佛設三學以化羣生戒爲基本甚不立 此法道大振海內衲子歸心遂成叢林師悲末法教 月牛月誦然網戒經及比丘話戒品由是遠近皆歸 久禁不行予即願振頹綱亦何敢違憲令因令眾牛 網滅裂禪道不明衆生業深垢重以醍醐 無大敗惟禪堂安僧法堂奉經像餘取敝風雨耳自 村吾願鼎新之以天吾福不日成蘭若外無崇門中 發其地得柱礎而指之日此雲棲寺故物也師福吾 注如足所及民異之相與纍纍然挈材木荷鋤钁競 也衆堅請師不得已出乃擊木魚循田念佛時雨隨 歲九旱村民乞師霧雨師笑曰吾但知念佛無他術 如玉等爲結茅三楹以棲之師弔影寒嚴督絕糧七 幽寂遂有終焉之志山故伏虎禪師利也楊國柱限 十人居民最苦之師發悲怒爲諷經施食虎患遂寧 日倚壁危坐而已村多虎環山四十里歲傷不下數 不知隣單性字隆慶辛未師乞食梵村見雲棲山水 息尚存耳乃止病閒歸越中多禪期師與會者五終 國制南北戒壇 而貯穢器

-

ter to be contrate at the 4 9

師以一心力當之何術哉師道價日增十方衲子如 刻之以示参究之訣蓋顯禪淨雙修不出一心是知 得力至是遂開淨土一門普攝三根極力主張乃著 高峰語錄謂自來參究此事最極精銳無逾此師之 宇取安適支閣而已其設清規益關衆有通堂若精 福。 百遍潮汐不至者數日橋竟成昔錢王以萬弩射潮 則功自不朽不日累千金鳩工築基每下一格持咒 土以制水也或言工大施微恐難峻事師云心力多 無論資富實賤人施銀八分而止獨用八者意取坤 潮汐衝塌行者病涉余公請師倡造師云欲我爲者 公良櫃請公詣靈芝寺釀之疫遂止梵村舊有朱橋 純鋼鑄就者向懷之行脚惟時師意併匡山永明而 爾陀疏鈔十萬餘言融會事理指歸唯心又憶昔見 網經疏發隱以發明之初師發足参方從參究念佛 師之化權微矣萬曆戊子歲大疫日斃千人太守余 師以精嚴律制爲第一行著沙彌要略具戒便蒙梵 之更錄古德機緣中喫緊語編之日禪關策進併 師 一以慈接之弟子日集居日隘師意不莊嚴屋

應昌大宰陸光公顧宮諭張公元作司成馮公夢顧 陶公望齡次第及門問道者以百計皆扣關鑿節徵 翅暄鳴非佛性哉噫佛說孝名爲戒儒呵有養無敬 即羽族善鳴噪者聞木魚聲悉寂然而聽宣罷乃鼓 設放生所救贖飛走豁生物充初於中衆層滅口以 內多牽尊之會講圓覺經於淨慈聽者日數萬指如 衆此中無一致諍而故犯者不盡局百丈規繼而 海內賢豪無論朝野靡不歸心感化若大司馬宋公 養之歲約費栗二百石亦有警策守者依期往宣白 增拓之今城中上方長壽兩池蔵費計百餘金山中 屏四匝因贖寺前萬工池爲放生池師八十誕辰又 警語蘇如也極意戒殺生崇放生著文久行於世海 時教獎古今叢林未有如今日者具如僧規約及諸 學功過行質罰蔥若米霜即佛住瓶桓尚有六羣擾 師於物養而敬且有禮者也非達孝哉師道風日播 板念佛聲傅山谷即倦者眠不安寢不夢布薩羯磨 鎖鑰啓閉以時各有警策語依期宣說夜有巡警擊 進若老病若十方各別有堂百執事各有寮一一 具 適

嚴壓壓奇哉王侍郎却被畜生惑猫兒突出畫堂前 生文甚嘉歎遣內侍賣紫袈裟齊資往供問法要師 减 或問師何不貴前知師云譬如兩人觀琵琶記一人 師日論格物只當依朱子豁然貫通去何事不辦得 樊公良福問心雜亂如何得靜師日置之一處無事 嚴品第一侍御左公宗郢問念佛得悟否師日返聞 床頭說法無消息無消息大方廣佛華嚴經世主妙 說盡一部華嚴經師三猫兒突出時如何王無語 拜受以偈答之師極意悲幽冥苦趣自習焰口時觀 不會經見一人會見而預道之畢竟同觀於場能增 不辦坐中一士日事格一物是置之一處辦得何事 聞自性性成無上道又何疑返念念自性耶仁和令 感物何能至是哉侍郎王公宗沐問夜來老鼠卿唧 自代云走却法師留下講案又書頭日老鼠唧 綠蚊邊無改容皆忘形屈勢至則空其所有非精誠 賢豪侯参者無加禮不設饌皆甘糲飯臥敗席任斷 **究大事靡不心折盡入陶鑄監司守相下車伏謁及** 黝否 今上慈聖皇太后崇重三寶偶見師放 神事 師

言非佛行不行非佛事不作佛囑末世護持正法者 著三十二條自警垂老自浣濯出溺器亦不勞侍者 水自有叢林以來五十年中末營妄用一錢居常數 設放 中班馬予則謂師為法門之周孔以荷法即任道也 性者古今除永明惟師一人而已先儒稱寂音爲僧 必盡修萬行若夫即萬行以彰一心即塵勞而見佛 依四安樂行師實以之歷觀從上諸祖單提正令未 知日總師之操履以平等大悲攝化一切非佛言不 終身衣布素一麻布幃乃丁母艱時物今尚存他可 餘金不屬常住則前此歲歲可知已師生平惜福嘗 藥救資病略無虚日偶檢私記近七載中實用五千 無儲蓄凡設齊外別持金銀作供者隨手散去施衣 千指不設化主聽其自至稍有盈餘 飘散施諸山庫 施利酌厚薄聚因果明單福養老病公衆僧不渗滴 用文理密察經濟洪藏不遺針芥即畫養林日用量 聲若洪鍾胸無崖岸而守若嚴城禦若堅兵善藏其 性朴實簡淡無緣節虚懷應物貌温粹弱不勝衣而 嘗有見師 座上現如來相者蓋觀力然也師天

能拔苦廣運六度何莫而非妙行耶出世始終無 以護法操足以動世規足以教獎主若慈能與樂悲 之師作三可惜十可嘆以警衆淞江居士徐琳等五 晚入堂坐囑大衆曰我言衆不聽我如風中燭燈 和尚追薦沈氏宗親云過後始知其懸祀也七月朔 矣有簿記師密題日雲棲寺直院僧代爲堂上蓮池 連下堂具茶湯設供與柔話別云此處吾不住將他 大士朗末法之重昏者何能至此哉臨終時預於半 可議者可謂法門得佛之全體大用者也非夫應身 惟師之才足以 念佛毋担怪毋壞我規矩·衆問誰可主叢林師 日無語城中諸弟子至圍繞師復開日云大衆老實 人在寺令侍者送遺囑五本、次夜入丈宝示数疾腹 油乾矣只待一撞一跌纔信我也明日要逐行 往矣中元設盂蘭盆各薦先宗師日今歲我不與會 月前入城別諸弟子及故舊但日吾將他往矣還山 **端然而逝离曆四十三年七月初四日午時也師生** 行雙全者又問目前師日 經世悟足以傳心教足以契機戒足 姑依戒次言訖面西念佛 聚留 日。 戒

之銘日 中亦不自言其本泄佛密因但臨終陰有以示之耳 足安能廣行利他護持正法始終無缺者乎予有意 而來略拾師之行事以昭來世其他具諸別傳乃爲 觀師之行事潛神密用安忍精進之力豈非地湧之 我等末世持經當具大忍力大精進力即有現身此 者即親蒙授記亦不敢入惟地湧之衆力任之且日 深念末法衆生雖度恐斷慧命靈山會上求護正法 子實真修勿顯異故多靈異不具載嗚呼我聞世尊 干計私淑者無與焉其所著述除經疏餘雜錄如竹 得度弟子廣孝等爲最初上首其及門授戒得度者 窗三筆等二十餘種行於世率皆警發語師素誠 **庵爲女叢林主先一載而化亦塔於寺外之右山師** 不下數千計在家無與焉縉紳士君子及門者亦以 嶺下遂至身塔於此其先耦湯氏後師祝愛建孝義 於嘉靖乙未世壽八十有一層臈五十師自卜 一手抑自為土而來乎不然從凡夫地求自利尚不 寺左 弟

> **鐘鼓交參雲霞綺互塔影高標法身常住 鐘鼓交參雲霞綺互塔影高標法身常住 運動変列與別響限膜根本不生枝葉自落大治紅鱸 以金剛鏡別響限膜根本不生枝葉自落大治紅鱸 と無用中法輪常轉若非什囑定是地湧豈屬尋常 後無用中法輪常轉若非什囑定是地湧豈屬尋常 後無用中法輪常轉若非什囑定是地湧豈屬尋常 養鼓交參雲霞綺互塔影高標法身常性**

一毒焰熾五熱周章孰能樂石順使清凉欲海橫流

故予日背司馬頭陀相為山以形與山相稱耳師欣 年大有開悟塔院主人大方廣公詞修清凉傳隨留 當留心此山深畜利器他時當爲金色主人師問其 當末運法門寥落撑持者難得其人公愼勿住人閒 講諸經聲光赫奕四方學者日益集未幾與雪峰 然應諾予即以所居紫霞蘭若居之師住此壁觀三 臺將建無邁法會集海內耆碩囑妙峰力招師果至 都師尋依講肆多窮性相宗旨融貫華嚴靡不該練 經學者數千指坐寒嚴氷雪嚴在金剛冠中也聖母 獅子窟建萬佛琉璃塔遂成叢林於中講演華嚴大 妙師分携預行不忍與師別夜談連宵力勸節日時 予大喜爲臺山得人時萬曆壬午歲也法會罷予與 意妙契心印一時義學推爲上首先是子遊京師法 會衆中獨目師當爲法匠旣而同妙峰禪師結隱五 如是者十餘年復從小山笑殿二大知識究西來密 壇受具一江邊西峰深守菴中諸大法師弘教於大 皇上為國所福注意臺山聞師風雅重之 西山 廣應寺引公為師得度為沙彌服勤三年 特賜大

弄唇吻為得耶爾輩當以此自勉吾將行矣居頃之 **注理觀脇不至席淵沉靜默老無惰容受法弟子以** 萬指圍繞意若無人天厨日至而麤厲自如居嘗專 津梁矣遂謝諸弟子單提末後一著默然兀坐衆有 建七處九會道場延諸大法師講演華嚴以師主第 安置大顯通寺 嚴正觀復於慈因寺講演諸經時妙師造千佛銅殿 千百計出其門者率皆質樸無浮習蒸有以師表之 衆寬不肅而威說法三十餘年三萬華嚴雖登華座 丁巳六月十四日也師生而安重寡言笑律身嚴御 示微恙危坐三日夜談笑如常中夜寂然而逝萬曆 爲念今老矣人世幾何學者以死心爲要豈復以 請說法者師日吾隨幻緣力任大法恒以生死大事 講華殿疏一周復修南臺爲文殊化境師自是疲於 所用多出內祭未幾幻出一大道場乃集諸弟子重 藏尊經安供尋復命師 其於講演提綱挈要時出新意北方法席之盛稽之 一座會罷師以古竹林寺文殊現身處也廢久復楫 上嘉其功行命里修改賜額永明 於都 城千佛寺講師 自

宸夷膺 等數百人多能開化一方明年戊午冬法孫方茂門 於竹林之左 稱法門知已銘捨予熟爲之乃爲銘日 人大謙持師行狀遠來匡山求爲塔上之銘予與師 之影響耶師得度弟子惟棟等七人受法門人遠清 顧隆恩之若此者豈非曼室應身而來者耶抑清涼 空印大法師應身之塔惟我 於嘉靖丁未世壽七十有一會臈五十有奇全身奉 若照真論因明起信攝論永嘉集諸解行於世師生 前輩無有出其右者所著有楞嚴正觀金剛正眼般 龍屋二百年來未有疆德深厚上致 上聞師遷化賜帑金建窣堵波額日 國初禪講諸師多路 答

> 律身精嚴潛神澹泊迴彼狂驗遠醇返僕不幻此身 風動水流圓音彌布千尺寒嚴萬年米雪日月無窮 人天師表於末法中實爲僧實塔影撑空法身獨露 光明不滅

憨山老人夢遊集卷第二十七

憨山老人夢遊集卷第二十八

侍 脳

X. 日錄

嶺南弟子 人 劉起相 通 炯 重較 調響

PT

塔銘

新城壽昌無明經禪師塔銘

昧唯得之者若獲如意實應用無窮其不思議力性 佛祖之道若太虚空亘古嘗然非晝夜代謝之可駒

近代寥寥不日無禪直是無師其果無也予於壽昌

自具足稟明於心不假外也從上諸祖奠不皆然何

干載而下適生大師芳規遠紹獅子的兒高踞窟中

炳然齊現居金色界據實華座出廣長舌雜華紛播

受有清涼曼室化身性海波翻義天星燦法界圓融

慧命是託了達性空說不可說西天此上代不乏人

法身無形遇物而彰文字煥發般若之光故持經者

發大時吼百歐震驚聞聲奔走雙提性相大開實藏

雨普滋三根應量名聞九重隆恩眷顧梵剎主要

-398 -

雲棲復之中原入少林禮初祖塔問西來單傳之旨

尋往京都謁達觀禪師深器重之入五臺參端峰和

之瓤終卷欣然若獲故物即與士言其意士奇之由 澹然無嗜好九歲入鄉校便問浩然之氣是箇甚麼 項日若論四句偈應當不離身師不覺瀝然因述偈 所教不遠如愚嘗疑金剛經四句偈一日見傅大士 名經師生而凝異不羣形儀蒼古若逸鶴凌空天性 氏子父某母某氏初產難祖父誦金剛經遂得娩因 發明大事決不下此山居三年人無知者因閱傳燈 年二十有四一日閱大藏至宗眼品始知有教外別 於廣山遂往依之詢其本名曰慧經執侍三載凡聞 然有向道志年二十遇入居士舍見案頭金剛經閱 師異之居恒若無意於人世者年十七遂棄筆硯慨 見僧問與善如何是道善日大好山師問措疑情順 山欲隱遁乃訪峨峰見其林壑幽邃誅茅以居誓不 見時以爲患癡久之有省於是切有参究志遂辭廩 傳之旨至於五宗差別竊疑之迷悶八閱月若無聞 有遍界放光明之句以是知為夙習般若熏發也時 是斷葷酒決出世志父母亦聽之蘊空忠禪師說法 禪師見其人矣按狀師諱慧經號無明撫州崇仁裴

> **廩山山知為法器師生而孱弱若不勝衣及住山極** 發日夜提撕至忘寢食一日因搬石堅不可學 隅而小天下乎師善其言遂荷錫遠遊乃過南海訪 堂厨畢具四方衲子聞風而至者日漸集有僧問師 立不厭其勞不數年百堵維新開田若干佛殿三門 忘却來時道之句時師年五十有一萬曆戊戌歲也 與乃應命先之於山掃師塔而後往有倏然三十載 如一日也邑之實方乃宋師實禪師故刹也請師 相乃爾至是始削染受具影不出山者二十有四年 山行年二十有七向未薙髮人或勸之師日待具僧 聞空山境喧乃日老僧不釆無窮遂居不閉門夜獨 通大好山知道始知山不好翻身跳出祖師關因呈 推之豁然大悟即述偈日欲参無上菩提道急急疏 住此山會見何人師曰總未行脚僧激之曰豈以 師住實方日益增精進力凡作務必以身先形枯骨 力砥礪躬自耕作鑿石開田不憚勞苦不事形骸每

尚鲜門 印契峰返詰師各以頌答語載別錄末後趙州頌云 我爲汝看破了也勸破在甚麼處峰云印是婆子勘 米徹處峰云大是立沙未徹師日趙州云臺山婆子 甚麼師日立沙謂靈雲敢保老兄未徹在何處是他 公案數則有疑乞師指示峰日請道師日臨濟道佛 機費回互妙叶五位是知洞上宗風由此必振自是 長安路一任風花雪月揚峰深肯之觀師語忌十成 破趙州師更請益峰云知是般事便休師作禮遂相 法無多子畢竟是個甚麼峰云向道無多子又是個 叢林所宜藏悉畢具不十年閒干指**国**繞豈師以 子望風而至者益衆戊申邑之壽昌乃西竺禪師所 公爲第一座師資雅合簧鼓此道激揚宗旨四方神 師心亦倦遊矣乃返錫實方始開堂說法以博山來 暗藏春色明露秋光有眼莫鑑縱智難量到家不上 隨緣任用數年之閒所費萬計道場莊數煥然鉅題 咸以師爲些再來云師住壽昌不攀外援不發化主 創也久類衆講師居之舊傳有誠師與竺同鄉同姓 庭孤峻師一見而契乃謂盛曰某甲於古德

宜每遇病僧必親調藥餌遷化則躬貧薪茶毗凡叢 林鉅細必自究心不謀而合度不擇淨穢必盡心力 作妙力而幻成者耶惟師之生也賦性直質氣柔而 其見重若此丁巳臘月七日自田中歸語大衆日吾 脫其不疲萬行者獨永明一人然未及其獨若師者 圓照無思而應者耶自古傳燈諸老雖各具無礙解 應關偈誦法語川流雲湧誠所謂般若光明如摩尼 供三百衆故生平佛法未離鑁頭邊也四十餘年會 勞侶耕鑿不息必先出後歸躬率開田三利歲入可 日不怒而威衲子一見失其故又隨機善誘各得其 志剛心和而行峻雖邊幅不修而容儀端肅嚴霜加 王衢師道德深加褒美因嘆日去聖時遙幸遺此老 可謂道契單傳心融萬法何發强精進之若此耶益 而爲之胸次浩然耳目若無所睹聞者迫七旬尚混 後 時在試問諸人知也無誠語諄諄後云此是老僧最 自此不復砌石矣衆愕然除夕上堂日今年只有此 一息以便自安雖臨廣衆未嘗以師道自居至於 著分付大眾切宜珍重戊午元旦三日示徵意

5

山山 **窣堵波師生於嘉靖戊申世壽七十有一僧臘四十** 人而恨未及見也因爲之贊有突出大好山千里逝 餘守三山常住有三會語錄予網聞師風丙辰避暑 有奇得法弟子若干人其上首元來今開法博山其 諸牙不壞餘者其白如玉重如金文五色塵於某建 也茶毗火光五色心酸如蓮花其細瓣如竹葉頂骨 指示擲筆端坐而遊萬層戊午正月十有七日未時 得效俗變孝違者非吾弟子乃案筆大書今日分明 口洗面拭身屬日不必再浴費常住薪水也誠衆無 毗自作學火傷命侍者徹宗唱偈學火次辰取水激 寫書遠近道俗且勉進道十五日吉水蕭孝廉來多 相見之語博山見之以予爲法門知師之深者乃具 師開示但看個萬法歸一勉其力死十六日分付茶 護情常住如命根老盾不惜命根爲安常住十四日 七日以偈示博山次第寫實方壽昌遺囑乃曰古人 衆不安以偈識之日人生有受非償臭爲老病死慌 第不食云老僧非病會當行矣大衆環侍欣若平昔 有門人持師圓相眞者予展之即知師爲格外

銘日

觀其昭然生死實践可知因次序其實行乃為之銘。機辨自在不唯法眼圓明一振照欄而峻節孤風誠度以起末俗至其大精進忍力又當求之古人雖影及以起末俗至其大精進忍力又當求之古人雖影然以懷起者獅്路路上之銘子痛念禪門寥落向未有

青山塔影松風長舌說法音聲常無閒歇 亦未曾去不信但看草芥纖塵何有一物不是全身

九華山無垢蓮公塔銘

為佛事虽有出世志初其地佛法未流時諸外道羣為佛事虽有出世志初其地佛法未流時諸外道羣如生死何因決志出俗年二十有二遂棄妻子破家如生死何因決志出俗年二十有二遂棄妻子破家如生死何因決志出俗年二十有二遂棄妻子破家與生死何因決志出俗年二十有二遂棄妻子破家與生死何因決志出俗年二十有二遂棄妻子破家與上,亦以休刀耕火種專以已躬下事為念久之事的出家此豈能了大事手遂棄去復得故鄉之牛事的治復歸故鄉之大山四方緇白聞風而至數曰所陶治復歸故鄉之大山四方緇白聞風而至數曰所陶治復歸故鄉之大山四方緇白聞風而至數曰新陶治復歸故鄉之大山四方緇白聞風而至數曰新陶治復歸故鄉之大山四方緇白聞風而至數曰書。

是者七年偶多日涉河水裂作聲墮水寒徹忽然有

省乃曰盾元來機鼻元來直渴飲饑食更有何事於方納子日益至公遂開梵利以接待為事至者無他方納子日益至公遂開梵利以接待為事至者無他技但精潔粥飯茶湯而已了無禪道佛法觀者諦信技但精潔粥飯茶湯而已了無禪道佛法觀者諦信水經九華聖道場地迎公爲叢林主公治已精苦忘水族大信而後已時人稱爲常不輕如是鐵廿年遠必族大信而後已時人稱爲常不輕如是鐵廿年遠必族大信而後已時人稱爲常不輕如是鐵廿年遠之衛時如響凡足跡所至或一食一宿之所皆爲道場上。

龍岑峰洞白沙山吉祥諸天隨地各建蘭若數十所

以修隱靜者居之咸有其徒主其業豈非忘身爲物

無心而成化者耶丙申仲春二月應來謝於三觀之

統山不數月百廢俱學遠近風動公復歸九華越明

年皖山四衆固請公去公首肯日去即去矣尚須三

至此山大事學矣衆不解其意二日示微疾竟終於

日明日偶過九龍訪一庵主四顧欣然乃謂衆日吾

行實乞為銘以余三復感公之操存可謂精於忘已上变公遷化月餘汝定即走嶺南訪余於行閒持公公弟子甚衆各面其叢林事其優婆塞就乞佛法者。公弟子甚衆各面其叢林事其優婆塞就乞佛法者。此至身塔於蘭若之右萬曆丁酉九月三日也公生此至身塔於蘭若之右萬曆丁酉九月三日也公生

者也故爲銘日

棲霞影竇珠公塔銘

大開法席海內學者一時雲集座下弟子若干人其 大開法席海內學者一時雲集座下弟子若干人其 大開法席海內學者一時雲集座下弟子若干人其 大開法席海內學者一時雲集座下弟子若干人其 大開法席海內學者一時雲集座下弟子若干人其

論窮性相宗旨精心教觀十有五年一日向師請問 之金陵棲霞從素庵弟子錫法師受具戒聽講諸經 家禮邑之月公爲弟子執事數載有遠遊志乃葉去 是向上事休日五乳鲜頭月單傳殿內燈公不契乃 教外刑傳之旨師曰此向上事自有師承幻休老人 又非立路可通子無以世諦流布也公作禮凡執事 却把須彌橫踏倒休日聲前一句妙叶潛通劫外裏 蕭挂搭同衆久參入室一日舉石霜公案有省呈偈 正主法少林汝可往参公遂之少室見休即問如何 事三壹公幼從父入寺聞僧誦華嚴經有感遂請出 某月某日也公世審幾十幾歲法職幾十夏得度弟 風幽微綿密從上佛祖授手之事非思量意識可到 日出門便是草寒林花發春歸早堪笑無足人解行 子若干人全身塔於山之某處予少事雲谷大師每 四年復歸棲霞自爾心不涉緣跡不入俗日夜精修 上巴鼻是豈可以尋常學解束縛死生者同日語食 過棲霞愛公道骨崚贈知爲法器竟不負生平得胸 一心無懈一日無疾索浴更衣儼然而逝萬層某年

乃爲此之日

耶溪若法爾塔銘

金灣洗足頭蛇謂日吾與汝作獅子兒覺而有數生音夢洗足頭蛇謂日吾與汝作獅子兒覺而有數生音夢洗足頭蛇謂日吾與汝作獅子兒覺而有數生一一夜悲泣母臨危屬日汝宿僧也無資本願言訛而日夜悲泣母臨危屬日汝宿僧也無資本願言訛而日夜悲泣母臨危屬日汝宿僧也無資本願言訛而七始雖染居常切念生死大事即之牛頭山立志多艺未幾從荊山法師聽法華經於天台即隱山中憤恐不幾從荊山法師聽法華經於天台即隱山中憤恐不幾從荊山法師聽法華經於天台即隱山中憤恐不幾從漸出法師聽法華經於天台即隱山中憤恐不幾從漸出法師聽法華經於天台即隱山中憤恐不幾後雪浪坐

面且末後不忘非宿緣歲乃叙公行隨之數而爲

予往吊雲樓抵武林月之九日公先示徹灰手予書 以成卷居三吳兩海皆宗公教化隨在列利開演論 北有永福寺故址廢入民閒潘本常贖建佛尉禪堂 公居之庚寅公年三十六陸太宰五臺營倉憲東洪 於如意觀其蓋然道骨喜法門尚有與刑也及公 聞其夙解有年矣丁巳予以雙徑因絲過吳門晤公 靈應明年蔣楞伽於淨慈壬寅棲息武林之飛來峰 劉柱史子威請蔣楞嚴於吳門壬辰壽法華於枕之 逝鳥呼公乘夙慧重真出家即志向上事及有發明 雪浪爲同門兄弟恩兄開法南都公爲上首弟子予 經論者三十餘處會五十餘期稱一代師匠云子與 避玄與萬曆已丑橋李椒繁華處沈司屬岳水部並 力窮教典爲人天師臣非願力然說生不清節自守 我留最後供心為獻之明日索浴自起更衣觸坐而 日本意追大師歸今予將長往不能待矣體弟子日 若根深入未易察職也嗟予老朽三十餘年惡公止 應世轉然三衣之外無長物臨終脫然無罣疑蓋般

生死去來法身寂滅公實產然是真解脫塔倚孤峰 自利利他緊無塵幸洞契佛心播廣長舌法音經耳 功報彌劫嗟哉末法公爲法幢願久住世魔外自降 生 黑智是故去來全不著力戒月悲華 慈雲法雨 死生膠圖靡不牽纏公何視之如此脫然以般若種

雲中普與禪院開山第一代住持古鏡玄公

不絕日夜圓音熾然常說

至京師於萬籌戒壞受具足戒偏禮海內名山參訪 厭俗禮郡定盛和尙出家志向上事長辭師操方初 別號古鏡雲中賈氏子父林母李氏生有異徵者年 在開化之功何如耳予於玄公徑有感為公諱義文 綠會過無不使令入佛知見轉腥獲而爲淨土者是 尊法身彌綸凡在有情無不具足維恐地篾戻苟因 日月麗天生育養益春回大地幽谷陽生故吾佛世

> 於雙徑大都龍華故人月清潭公走書持狀乞第乃 依王臣敬仰雲中遷地逼虜民情慓悍以公之教化 有奇塔於雲中郊外予於丙辰長至月用繁稻老人 於嘉靖丁亥入滅於萬曆乙巳世籌八十僧臘四十 **咸**爲外護建普與禪院遂爲開山第一代住持公生 而性柔和見者欣說景從內典外書無不該涉學富 而行高故處 轉殺機爲善種詎非現此丘身說法者耶公體豐厚 凡在利益靡不精心竭力以專利多人由是四衆歸 率堵以標人天跪誦往生咒三十六萬遍以資淨業 像莊嚴佛土繪水陸以拔幽冥修檔梁以濟獨揚建 代藩國主三世崇重吉陽端惠諸王

爲之銘日

春回大地時若至時無處不是公以緣現而以緣減 能以善化轉彼殺機以無我故知之者希日照中天 對面不見倘以妙用入衆生心如月在水愈済愈深 以水投水不妙自妙是故至人随處示現若是無緣 有情皆具善惡雖然其性不二轉化之機係於善漢 法身普遍無處不屬如月現水清獨同流是故衆生

具中年還鄉廣作佛事結飯僧緣不以數計造済金

知識決策已躬下事有所發明念驅慧未圓功行不

生滅去來了不可說表利凌空法身常住是知我公

直接逐至

方別號松谷陝西鳳翔岐山人族李氏父諱鐸母張 書禪師中與其道今遷公爲的關也師諱如遷字大 庭遂留依止朝夕入室陶鎔從上機緣乃蒙印可有 氏師生於落星里幼喜佛事每至佛寺則如舊居愛 元雪庭爾師揭洞上一宗於少林二十四傳至大章 章宗師開堂少林往求印證嘉靖辛酉謁章於立雪 示向上一路尋入青峰山弔影單棲有所開悟聞大 遠訪知識決擇已躬下事首多悅菴喜和尚授具指 乃捨禮本郡無踪本公為師剃染居三載簽志操方 佛教乃出世因志願出家年十七父母不能回其志 戀忘歸蛋入社學肄儒業心不真每向父母日見聞 禪宗傳燈所載皆本五家法脉修短不一其系自有 已腰包一鉢遍遊海內名山回至京師歷諸講學深 針頭玉線海底鐵牛日夜辛勤記伊保守之囑由是 知洞上宗風五位正偏之旨至是猶未泯也師得法 **刺賜龍岡寺大方遷禪師塔銘**

嘉靖戊戌世壽六十有一個臘四十有奇全身葬於 戊戌秋八月十有一日先示微恙端然而逝師生於 學揚宗旨戊子千佛寺請許諸經日邁萬指庚寅季 時四方學者開風遠至萬曆丁亥應大都慈雲推請 也予感師爲法門知已乃爲之銘日 歸故山時對弟子言有萬里之思故其銘待予有以 居恒謂學人點師當代宗門正眼也子被放嶺外師 少息有先德典型與予對談旬日夜無不抵掌擊節 **教必指向上為極則應機接物純一至誠動止未嘗** 孤標源源如立雪長松衲子多請不假辭色拈提宗 寺之西原師歿後二十二年萬曆己未弟子海雲走 刺御書大法實藏四字甲午春請回龍岡創寺安供 會者千二百衆 至致禮多請深相印契乃建帶含於龍剛延師要說 窮性相宗旨後至懷慶鄭世子讓調潛修白業 匡盧調子求塔上之銘予昔晤師於大都慈壽見其 聖母怒聖皇太后懿旨於慈奮寺開淨土法門在 欽造鍍金大佛像 賜大藏經證

花五葉二派五宗門庭施設各擅家風洞上真源

志述事卒乃師願乃完大像負師靈骨還山整於寺

章二枚4. K艺川虎刀改建身是3.4. 三川之鷹山千佛寺恭乾敬公塔銘

於國家知識以求印證道過金陵守心禪師隱居弘 整軍有出世志於伏牛山福田寺禮高港法師祝受 受具聽講經論參窮性相宗旨日夜無怠者三戰於 受具聽講經論參窮性相宗旨日夜無怠者三戰於 受具聽講經論參窮性相宗旨日夜無怠者三戰於 受具聽講經論參窮性相宗旨日夜無怠者三戰於 是持少林公盡業教義復往參究依棲十餘年數日 原場大爐轉中放捨身心打長七者三年有所悟入 廣場大爐轉中放捨身心打長七者三年有所悟入 廣場大爐轉中放捨身心打長七者三年有所悟入

> 史定字鄧公爲唱導功未及半公示微恙遷化萬曆 堂厨庫告成公之南昌寡造千葉賣蓮毗盧大像太 化焉吳公首唱爲建殼堂經營五年歲己丑三殿禪 癸未應黃梅五祖寺之請演法華經又三年乙酉應 於此以結十方部子綠遂誅茆輝盧弔影居之負春 及破關即判然入廬山將結隱以終身焉時萬曆七 閉關相與切磋日造深奧盡掃其支解如是者三年 在心悟守在靜密登山涉水徒費草鞋錢耳乃留公 三十有奇聯自山中奔赴哀號不欲生鄧公勉以繼 十九年辛卯歲六月初七日也世壽五十有一個臘 奧國吳公國倫請演楞嚴經彼方素稱剽悍人多感 此其所操進當不可量遂為莫逆盤桓月餘而去歲 辰達觀可禪師來遊見而異之日公能安心寂寞如 執役弟子智聯爲之助公得以絕跡者三年明年庚 濟操履密行爲一時推重一見大奇之乃爲公日道 日此五百人安居處也因與山靈誓願以身命布施 年己卯歲也公初入山卜地至金竹坪見其寬行數

侍公最久公之頭輪有所托焉入滅二十八年蒙丁

後時萬曆丙申某月某日也公得度弟子九人獨聯

*一三下古太

已諸孫各捐衣執建窣堵波請予為銘銘日 大道如空無處不通但雕室觀罪不包容淵深若海心量若空其道自備我觀我公忘已為物布心如塊心量若空其道自備我觀我公忘已為物布心如塊心量若空其道自備我觀我公忘已為物布心如塊有顯未終費志而設有子克家卒振其業梵刹聿裡有顯未終費志而設有子克家卒振其業梵刹聿裡有顯未終費志而設有子克家卒振其業梵刹聿裡有顯未終費志而設有子克家卒振其業梵刹聿裡有顯未終費志而設有子克家卒振其業梵刹聿裡有顯未終費志而設有子克家卒振其業梵刹聿裡有顯未終費志而設有子克家卒振其業梵刹聿裡

廬山雲中寺敬堂忠公塔銘

之親衆如一平等行慈無論智感賢不肯養久默化

而不自知故來者如歸家侍父母凡出語句觀切病

至聽者無不心領神會是以雖不上堂入室而一衆

不倦隨緣自守一辦之外無長物粒米莖葉心異类

坦夷無緣飾御衆不立規矩凡細務必以身先至者

納子亦漸集師手植松十餘萬本翼成叢林師居恒

 C

a been the test bearing

靈跡是寄法身常住盡未來際大願未終幻綠消歇掉臂而行了無言說一塔撑空香積世界是在吾師無作妙力用而不藏從空一擲

宣城華陽山道者法振鐸公塔銘

公諱大鐸字法振宛陵某氏子生而超羣神清韻則公諱大鐸字法振宛陵某氏子生而超羣神清韻則公此問諸先達皆不愜節一日逢行脚骨問日如何是道骨日此吾佛氏無意一日逢行脚骨問日如何是道骨日此吾佛氏無法應多諸教養居恒求悟自心不得其指復歸雲棲法應多諸教養居恒求悟自心不得其指復歸雲棲法應多諸教養居恒求悟自心不得其指復歸雲棲法應多諸教養居恒求悟自心不得其指復歸雲棲法應多諸教養居恒求悟自心不得其指復歸雲棲法應多諸教養居恒求悟自心不得其指復歸雲棲以居華陽亂於黃山白嶽縱廣一由旬周環四色養以居華陽亂於黃山白嶽縱廣一由旬周環四色養

若公之風可使吾徒之貪者廉狂者息躁者靜也又 行孤絕超然似古隱山之流此末法之難能者差乎 於空山寂寞之滇軍提一念以死生爲大事至其操 匍匐匡山乞予爲塔上銘予覧狀知公始以聞道可 於養之某處智浩多方歸省公已入寂三年突浩乃 戌入月二十四日世壽四十有五僧臘二十有八季 見豬相非相即見如來問衆日會麼來日不會公日 般若靈根如種在地遇緣而發若時兩應聞道一言 死一言發心順棄人閒世雖親教義不尚名言絕意 乃示二祖公案久之令浩多諸方去公單居焉緇白 心在甚麼處公棄几一下夏久問日會麼浩日不會 何事踞華座爲說法哉予有感於斯乃爲之銘曰 佛而逝時萬曆戊午七月十八日也公生於萬曆甲 乃日大衆各自珍重吾將行矣即沐浴更衣端坐念 請公說金剛般若要養公拈凡所有相皆是虚妄若 治寶楞較至數心處問日七處數心皆不可得畢竟 探松花以充食竟絕意人關唯一沙彌智浩執侍為 一切有爲法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀

北丘性慈塔幢銘

新門職送發心出家禮宇光法節於華山東測度授 蔣門審主法門專心一志雅修姓行專看老病心無厭 經習音認佛事後邁漢兩價性玉結伴遊南海誅茅 經習音認佛事後邁漢兩價性玉結伴遊南海誅茅 應習音認佛事後邁漢兩價性玉結伴遊南海誅茅 應門居十餘載玉惠病類年慈看侍殷勤如事父母略 無忘容玉竟無恙萬曆已未同禮匡山授具戒回書 無忘容玉竟無恙萬曆已未同禮匡山授具戒回書 於而玉病復作慈益加調護庚申歲慈惠法乳復來 人茶毗於紫沙州萬曆庚申五月一日也玉聞之乃 人茶毗於紫沙州萬曆庚申五月一日也玉聞之乃 人茶毗於紫沙州萬曆庚申五月一日也玉聞之乃 徑造雲棲大師見而器之爲授具戒開示念佛法門

参訪知識壓行為親知稱留不果<u>乃</u>宵遁單瓢隻杖

老多矣况二姓乎若慈與玉也蓋爾相逢以道相親者多矣况二姓乎若慈與玉也蓋爾相逢以道相親一心莫逆看病十年如一日慈能盡心力於生前玉一心莫逆看病十年如一日慈能盡心力於生前玉子故文序其事又以啓法門之義當以看病為第一

「國漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲銘日爲漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲銘日爲漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲銘日爲漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲銘日爲漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲銘日爲漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲銘日爲漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲銘日爲漢南尼明帝氏子世業儒故併記之乃爲銘曰

「國漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲銘曰

「國漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲銘曰

「國漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲銘曰

「國漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲銘曰

「國漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲銘曰

「國漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲名曰

「國漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲名曰

「國漢南昆明徐氏子世業儒故併記之乃爲名曰

「國漢南昆明帝、「四十八義」

「四十八義」

「四十八義」

「四十八義」

「四十八義」

「四十八義]

「四十八章]

「四十二章]

「四十八章]

「四十八章]

「四十二章]

「四

新安黃山鄉外養寓安寄公塔銘

生人也安忍化圖止之乃借佛布收飲供於所整之 不能動轉如是者七日遠近編白聞而被雪奔用見 室乃置坐於几上且恐形變急積薪茶靴值天大雪 文室雪乃止弟子相謂日此登末後事耶於是亦不 公顏色如生喜容可掬唇紅不敗手襲如綿戚日此 元年辛酉二月二日也初弟子不意公建化木理龜 吾行矣末後一事故等藏之言訛跏趺而逝時天啓 為乎竟勿藥唯安然端坐如不有身一日召弟子日 篇鄉人謂醫診視公日死生如客耳當行即行又何 方緇白歸信者衆圖南汪公爲結卷以后之一坐十 原誅茅殿終精進自第一念不移若忘人世久之一 以省師歸故山閉關三年萬曆庚戌入黃山之丞相 寄維那可謂稱職矣由是一衆咸推重之一坐八年 職爲最豈惟國家叢林亦然梵語雜那此云悅來若 和內外悅可衆心大師一日臨衆日朝廷設官以稱 那居常刻意精修單持一念謹東三葉嚴整致機調 日念佛無他伎倆專在一心不亂公服膺遂以充維 一年偶晏真疾竟不言動止如常人莫知之久之疾

下表明若厥子之食於死母也子於是有感焉乃為 那即佛祖之金剛不壞常住不朽亦由是而致否則 那即佛祖之金剛不壞常住不朽亦由是而致否則 整悟物無言而說法者耶嗚呼若公之於生死神往 忘人我脫略形骸無不愛而敬之豈非威嚴厲生不 忘人我脫略形骸無不愛而敬之豈非威嚴厲生正 忘人我脫略形骸無不愛而敬之豈非威嚴厲生正 容悟物無言而說法者耶嗚呼若公之於生死神往 容悟物無言而說法者耶嗚呼若公之於生死神往 容悟物無言而說法者耶嗚呼若公之於生死神往 容悟物無言而說法者耶嗚呼若公之於生死神往 不崇朝若厥子之食於死母也子於是有感焉乃為

之銘日

生生不退決定至於金剛之地或焚或存無可不可

其叢如蟻既有幻形寧免幻病果縛現存業由前定

如公形骸久而不臭想是其中心光無垢從此精練

在我固有豈不甚深戒定所熏金剛種子故舍利羅

其光雖小亦是精妙圓明之實何況佛性實覺明心

三界萬法爲心所造褒與不壞總在一竅螢火蚌珠

恐山老人夢遊集卷第二十八

實秋南還入浮山會聖殿乃宋遠錄公與歐陽六一

麼乾屎撕公猛省但點首而已自是見地即穩密王

因春說法處久爲俗業皖城澹宇阮公聚族復之謂

憨山老人夢遊集卷第二十九

者 褔 善

侍

日鋒

涌 坷

嶺南弟子 劉起相

徑山化城寺澹居鎧公塔銘

諸心皆為非心忽有省乃曰是吾所歸也還過浮山 者皆掉頭葉去一日入僧舍見金剛經讀至如來說 築志性命之學父母爲聘竟不願父卒乃杖策孤遊 上公往多未面門外作禮再調乃見求度未許師登 坐三曲洞潭血寫孝經癸巳遊皖城達觀禪師過江 登太和山遇羽士授長生之術過武昌遇講良知學 喜佛事倜儻遜羣長習擧子菜才名奕奕乃塵視世 族母夢僧趺坐於堂上遂生公公生而類意爲見婚 公諱法鎧字忍之別號儋居江陰人姓趙氏世稱巨 宿種深根雖丈夫亦未易為力也予於鐵公有異為 山之力而不能割愛是知能透情關掉臂生死者非 歷觀古今豪傑之土有戡亂之才而不能降心有拔

> 來空只如師子尊者二祖肇公等是了得也未聲未 即痛棒如是者再一日又問日永嘉云了即業障本 於終壽初入室便問某甲爲生死大事願師指示師 骨調昏睡其道登進後出關行脚至匠廬每過叢林 使的岳公大笑日真道人也久之下天日復過宣城 足腰嫌採薪因問你是澹和尚甚麼人應日我是他 年大有開發石帆岳公入山見公擊衣鑿頭垢面跳 天目誅茅於分經臺甲影藏修軍提向上極力多完 側及公主著白衣器水剃度師許之因命今名薙髮 坐廊下忽焉建旦寤寐一如心辛丑至都門省本師 掩關於西樂乃習荷重負肩試四十斤經行以苦筋 疏食不樣單衣露肘每降安心燃香蘇臂如是者三 授具戒時年三十有三師命參已躬下事公即辭入 馬 絕師連捧日會麼會麼公日不會師日本來空是甚 祖菴公偕阮公自華至是夜師夢披白鎧人侍其

予自南灣來赴甲盡法門死生之義主金沙爲文以 子仲直釋公行求善地改下於鵬摶峄之陽丙辰冬 蜀是年秋還徑山大師靈龕已入土司成文寧朱公 扎示左方伯本如吳公吳公按址畫界奪諸豪右之 火調靈骨入塔以關生平知已達師末後一段光明 往議遂登峨帽禮普賢乙卯春同直指若谷徐公出 道場太史具區馮公議修復為藏板處公簡得其手 照為刻場師靈龍亦歸之公欲滿本師願遂往庚戌 公之力也能日棒頭出孝子公實以之予歸匠山公 祭預定於長至月十九日及至會是日茶毗予因器 禮師塔按形家言知地有水議改葬公與師護法弟 手仍爲佛地又贖臨安太平寺田百畝供贈常住於 公至山見多霧濕下有化城故址乃宋佛日宣禪師 乃集諸祖入道因綠梓之初達師刻大藏以雙經寂 寺居常以本分爲佛事四方衲子至者唯示直捷處 是藏事有歸焉甲寅吳公開府於蜀公以刻藏因緣 爲母壽戊申應太史觀我吳公請住持浮山大華殿 公以居重新遠公塔瀝血書梵網經日課金剛般若

> 復生盡形畢命繼志述事光前絕後斯為達師末後 復生盡形畢命繼志述事光前絕後斯為達師末後 復生盡形畢命繼志述事光前絕後斯為達師末後 復生盡形畢命繼志述事光前絕後斯為達師末後 復生盡形畢命繼志述事光前絕後斯為達師末後 復生盡形畢命繼志述事光前絕後斯為達師末後 復生盡形畢命繼志述事光前絕後斯為達師末後 復生盡形畢命繼志述事光前絕後斯為達師末後 復生盡形畢命繼志述事光前絕後斯為達師末後 復生盡形畢命繼志述事光前絕後斯為達師末後

> > - 414-

弟子無忝的骨者也私謂公之才足以應世力足以

荷擔其為道也艱難辛苦難不備歷其於事也見義

於有形之外者曷能如此哉公弟子元亮具狀走巨

山乞子為銘子念法門之誼乃爲銘日

然如脫獎屣聪非大丈夫夙根披露心契無生寢處

勇爲不避刀鋸其視利養如空花水月死生之際超

門庭益峻壁立懸崖大有徑庭堅之者慄親之者退門庭益峻壁立懸崖大有徑庭堅之者慄親之者退神, 一條全無忌諱窟中獅子爪牙纏露是獅子兒 下線 一條全無忌諱窟中獅子爪牙纏露是獅子兒 神身荷擔不遺餘力恆沙法藏信手揮斥法輪無窮 軍身荷擔不遺餘力恆沙法藏信手揮斥法輪無窮 不自如如羚羊挂角分明指示撩起便行撒手歸去本自如如羚羊挂角分明指示撩起便行撒手歸去本自如如羚羊挂角分明指示撩起便行撒手歸去

南岳山主瑞光祥公銘

別求第一義諦公領旨作禮 慈聖皇太后大作佛 念佛法門不審是第一義諦否融日更不容念佛外 受具依接講肆三年遂棄去北遊大都多遍融和尚 喜菴愷公薙髮時年三十有二矣祸棲霞素菴法師 法門最為捷要公領之居頃南還決志出家禮本邑 **警警問日煙寒灰冷作麼境會公日山原是石冰** 事建淨業期請居首座三年期罷遊五臺之伏牛遍 逢南即止授以鉢袋屬日禪和往南走報道七十九 火絕衣濕侍者往見驚走報松松往視見公定乃擊 留住石室用影絕跡木食三年一日跌坐雪積滿床 参 請老宿時 栢松和尚牛山者舊也公見與語心契 一見問日汝作麼生公日某甲爲生死出家一向修 原是水雪飛滿崖不知所以松日此是暫息塵勞得 茂即往卜居未幾亦帝峰骨差然請主閱遊 逢南之記述之南嶽登祝融峰頂望古大明山林樂 **贾住大破石入越月苦切参究心地未安因悠松稻** 我也不多時大家相断守公達點笠徑造機帽體普 輕安耳若躭著此境即墮偏空勿滯於此宜行脚去

倦遊息肩於此誓死效遠公跡不入俗不敢奉命王 簡令旨以臺資散合山以廣王惠餘留鎮山門王營 遣前使費送華嚴經二部大疏鈔一部齋費百兩公 竟不納長沙吉王嚮公差內使往請公日山僧行脚 約三十餘石送公公日老僧豈以一鉢飯飲業怨手 人世當世君子聞風景仰廣西方伯劉公謁廟遭書 吾佛所阿衲衣在空閒假名阿練若苟不專心淨業 多王得公一振起居常藏諸弟子汝剃除鬚髮不知 出山日夜精動以豆爲珠淨念相繼至終身焉由是 請一見力謝不往衡州郡丞盧公配廟點失期者罰 大限到來將何抵對閻老子手聞者感泣公雖絕意 有生死大事但倚墻糞壁兼藏茫茫與作甚麼豈非 子遠歸之四事不思而至叢林不作而成南嶽寂寞 稱為豆兒佛云公住山絕無外緣聲光日露十方濟 寬顯元化主募豆四十八石公從此放下身心影不 **生適僧大寬留住側刀峰公應諾行三日藏經破燉** 宿夜半恍惚夢中告日此非師所居速去詰朝將 公以嘯殿開示念佛法門志終身從事欲以豆爲數

三日釆蘇而食公日夜禱于護法神有少年僧於山 見公慈心竊然又聞念佛音聲有感乃解腰機三金 江湖一旦棄妻子出家峨嵋名同融萬曆壬寅冬來 平隨衆年七十餘尚無法嗣臨江居士傅某向賈於 者不發化主不結外援不交權實所食遐綢常以糠 腦不至常不設方丈唯坐一無於佛殿不安康聚舊 公自居側刀峰帶修淨業三十餘年末常暫鞭居常 下檀越家化米豆百數十石選至詢問前僧無有也 辦齊而去其盜亦化爲苦行偕辛丑歲饑大衆絕糧 活命公實其誠納之冠以道巾兮随衆作務捕宮至 大盜買二唐九等七人被捕急來歸發露機悔哀乞 行念佛必荷鋤出遊凡見遺穢必以土拖之或日師 **麩為餅充食僧有投之地者公拾取煨而啖之每經** 無長物滅之日唯胡椒一版舊布數片而已無勞侍 於今見也麼心上不生何有見驚嚕點聊娑婆訶融 参心相印契即付衣鉢偏日西來大意問如何直至 何過勞如此公日一片清淨地恐山神見確矣公生 加重馬公接納往來不擇臧否一味平等慈悲耕襄

毗佛洞乃遣人往喚融至峰前聞音樂聲入室寂然

告衆日瓜子孰也正落蒂時堂中無知之者時融居

依棲以終焉公向與衆周旋無倦一日索浴體

111

公塔銘 - 公塔銘 - 公塔路 - 一代住持古風浪

母張氏師生即性不茹葷酒爲兒好跌坐及是不喜茶爲此丘相隨緣利物人莫測其潛符此豈可以二者明此可謂具正法眼若古風禪師者始以居士身務明此可謂具正法眼若古風禪師者始以居士身際一宗之通藥後美則日觸物明心單傳直指古之學佛

1.A 10.3 A. smit att. a 1 1

主壇筵精诚高格 文明蕭皇太后德意 隆慶壬申 文室延一江大干止菴諸法師弘天台賢首兩宗旨 衣焦公置重修普安寺迎師居之幾二十年師唯樣 洋洋中外如此者十餘年嘉靖辛酉司禮監黃公錦 佛事者率皆從之萬曆丙子今上奉 寶壇多就師所嘗賜千佛錦袈裟凡內經廠諸效爲 於四大分難妄身何處之語有所預契自爾隨處建 其受具從守心無礙二法師聽華嚴則覺楞嚴諸經 即從披劍執弟子菜師最居下板雖執爨負春未嘗 **工華嚴圓覺道場歲無原日王城感化岩迦維改觀** 不以身先成公有不可師事志益堅居三年公方命 治生產業父母爲娶師雖强從即善觀空爲難欲行 善知識實驗成公開法於王城師往參調有所感契 穎梧年二十七葉家家遊如京師登壇受白衣戒大 每獎諸善男子作般若則覺法會師爲衆中長天然 兩官學母為社稷所騙大作佛事凡建立 先帝始崇佛道就普安建吉祥道場師 恩屋預隆票置盡從中出 物建大慈壽寺成即遷師爲 聖母怒聖宣 今

> 干建塔以表旌之銘日 端坐三日熙然集衆念佛隨聲取然而逝萬曆九年 其涯沒多稱爲內身大士一夕召諸弟子告有徵意 奉師全身葬於寺之後園 八十餘人本在爲欽依僧錄善世顏今 慈壽住持 世壽七十有一僧臘四十有奇得度弟子十五人孫 四月十有七日也師生於正德辛未卒於萬曆辛已 爲密行者生平履歷不離當處而大播宗風竟莫冤 住坐趴每咄咄作私語見聞即為之敗容學莫識其 如幻三昧或拈提古人向上公案以警發之暇則行 幻即離不作方便難幻即覺亦無漸次之偈及楞嚴 盡皆知師爲大法幢奏馬常接納四衆但學圓覺知 首領之凡所弘闡佛事無不稱 住持命度沙彌一人為弟子及 聖母悼之乃 賜金若 旨是時海內法門 勒校續入大城節

而弘至道感應昭昭天人整穆默運環櫃龍降虎伏卓爾襟期作大佛事真俗雙彰形神俱妙不雕市壓何眞何俗即此丘身亦同空谷伊維古風津生像季法身如空非聲非色應物現形如水中月觸處皆然

5

空長松帶霧月色風聲真機獨藍 空長松帶霧月色風聲真機獨藍 一管春生養葭灰 建彈指歸空破顯微笑萬丈深潭只垂一釣表刹凌起大地揚輝烹從茲始師維何人為化爲幻詎受密起大地揚輝烹從茲始師維何人為化爲幻詎受密起 紫辰誠週北斗法道用昌和盤珠走梵刹纔

金臺龍華寺第八代住山瑞菴顧公塔銘 電局 中見者異之心喜佛事時喃喃作出家語龍華 墓兒中見者異之心喜佛事時喃喃作出家語龍華 墓兒中見者異之心喜佛事時喃喃作出家語龍華 等者茂公居僧錄左闡教有重行偶從孫氏齊次見 時十歲有奇氣因乞爲沙瀾遂命與上足蟹公爲 居常切志向上事年三十登壇受具大通法師教化 居常切志向上事年三十登壇受具大通法師教化 居常切志向上事年三十登壇受具大通法師教化 居常切志向上事年三十登壇受具大通法師教化 居常切志向上事年三十登壇受具大通法師教化 居常切志向上事年三十登壇受具大通法師教化 居常切志向上事年三十登壇受具大通法師教化 居常切志向上事年三十登壇受具大通法師教化

the state of

total the will all a a

影尋草堂羅什翻經處結夏圭峰望太白太乙略歸

函而東再入伏牛訪嵩少參鼻祖單傳哭潤公扣白

馬以歸居無何復奉

怒旨貴大藏往天台塵獄復

名山因出關走蘆芽渡河登華嶽覧長安閱雁塔留

法門推 居明年予亦東路海上且督與師同歸又明年甲申 立峰頂島棲然食者三年專精一行三昧有所發悟 本 **社壬午春會罷師復與予結隱太行及冬初師還故** 歸萬曆九年辛巳春師年五十有四矣居頃之妙師 岳求悟法華三昧處回入伏牛練曆衆中居三月以 滌除立覧以休過黃梅求印證焉復遊目武當抵南 **廬剛黃龍白鹿揖五老而望香爐遷又殊經臺三匝** 尋謝去回策東吳禮是干舍利派長江陟九華登匡 雪中居無何杖錫南遊禮管陀大士入天台隱於邇 妙師與子隱居淸涼師傾心慕之遊五項搜訪於冰 識凡為佛事者多出師門大都稱為功德藏丁丑春 與予建大會清涼師與雙林平公無邁充公齊入法 聖母慈聖皇太后命同妙師飯僧秦晉伊洛諸 漸亦藉資焉 今上崇尚三寶海內名藍 知 年五月廿三日也師生於嘉靖戊子世壽六十有二 當事公如我生公其视我不死耶又日法門寥落重 予所悲但不能與公同歸有貧山海之盟一旦是訣 耳生謂我不足死當我有餘爾其勉之予行矣爾其 期願當忘心爲法幸爲我謝居無何召諸弟子曰吾 無忘東海也爲我裁衣以謝言乾而逝萬曆十有七 賴爲佛子愧無補法門但生平此心不敢辜負佛恩 予所悲妙達二師密藏諸公輩皆信代俊逸爾我眞 當引領望公於淨土中至若所棄土直諸弟子輩屬 英固一代叢林師表也達觀可師嘗謂予日吾門之 上往問之師把臂泣謂予曰死生夢幻去來夜旦非 取之無不足者一時賞鑑如此師抱疾期年子從海 龍華循如秦鏡眞能照人肝膽又若絮裹如意信手 然暖然可親而不可近可慢而不可忽難非法眼之 物為事戒珠心月秋露寒空貌古神清長松孤鶴凄 付弟子輩居常自足無意於世生平後已先人不以 心顧德愧何以當乃引疾獨居屛人絕跡山門事久 遣清涼還報師喟然數曰一介微層數叨 怒命撫

> 法職三十有奇得度弟子二人孫智潭奉師確室全身葬於京西北海店之隆禧寺左是歲冬十月智潭奉師命持衲衣一襲匍匐海上計予聞之嗟乎悲哉生耶死耶師何人耶因具述行實如左乃爲銘曰 或居酈肆廛市山林無非佛事日惟我師化此丘相或居酈肆廛市山林無非佛事日惟我師化此丘相或居壓肆廛市山林無非佛事日惟我師化此丘相或居酈肆廛市山林無非佛事日惟我師化此丘相或居酈肆廛市山林無非佛事日惟我師化此丘相、武居酈肆廛市山林無非佛事日惟我師化此丘相、武居酈肆廛市山林無非佛事日惟我師化此丘相、武居酈肆廛市山林無非佛事日惟我師化此丘相、武居酈肆廛市山林無非佛事日惟我師化此丘相、武居酈肆廛市山林無非佛事日惟我師化此丘相、武居郡建入榜樣圓覺伽藍十方聚會來者應知、 一大章來香飯一鉢見者聞者皆蒙度脫壁破天台、 一大章來香飯一鉢見者聞者皆蒙度脫壁破天台、 一大章來者應知 一大章來者應知

五臺山龍泉寺正光后士徐公願力塔碑記

銘

假窣波而表願者是於正光居士見之矣居士姓徐有殊所以幻影多端浮光萬態至若憑願力以持心觀夫眞界凝然應化之徵靡一聖凡異路利他之跡

萬曆初 樞紐蠶理化機有大力焉鬱位日崇篤信三實於都 秘閣即能明習故事隆慶改元陞 應選進入官關列內翰局讀書進局官教內則職掌 氏弱州保定縣人父伸母高氏士生而有異微週歲 持又於真定曲陽縣北重修鳳祥寺一所置地三頃 奏聞 沙門永慶爲住持於山西五臺舊路嶺重修龍泉寺 城崇文門外建明因寺一區印施佛大藏經一部延 歷事三朝小心翼翼奉 能言前世事動止度若天人嘉靖三十四年甫七歲 聖母功德所被者靡不默助 餘畝以供龍泉香火接待十万域內名山大利凡 書金剛般若經普賢行願法華心品若干卷建窣堵 **蔬食每厭生死志求出離朝参慕禮寒暑不易剌血** 雨警點含主獲屬矣居士雖處深宮衣唯布案甘心 波於龍泉之東南麓以表顯力持心功流浩劫溼斯 猛燄永宅清涼期來世以歸依效一生而取辦以爲 聖母度沙彌遠健授僧錄左覺義爲本寺住 今上御宇紀勛陞 聖母起居朝夕楊麗調和 乾清宮內奏事牌子 皇猷敷揚 御前勤惧有功 慈化一

> 付屬而來耶抑以幻化人天而作佛事耶何其智深 金剛種子靈苗福田常住矣噫若居士者非夫親承 海印道人乞紀其事乃爲銘日 志固之若此也功德既成乃命家臣程進持杖稽首 乾坤造化毓癜產秀乃降哲人曷分左右哲人伊何 孤鶴偃師化人誰假誰眞獻珠龍女其事若神塔表 達人視死如生跡緊王宮心存丘壑勁節夜雲長松 經過暫捨此身徑登佛地嗟彼夢夫長夜冥冥偉矣 **廖**勞志求淨土稟受三歸 普修六度書寫受持大乘 爲國在在道場處處實所但願莊嚴孰分人我身處 調元著茲偉績蕩蕩怒風輝輝佛日率士普天無非 不有其人熟匠 唯徐之子氣亶丈夫幻形維女維女謂何內訓實題 長城奠安 畿輔上祝 聖母歷事 聲釐天長地久 三朝位班九列贊化

普濟菴始租實駁成公塔銘

心有年父蚤喪其母孀居天性至孝供養娲其心力鐵鏡閒即知以念佛從事如佛教金師之法如是用實藏大師者諱自成山東德州劉氏子幼習爐業在

阜城關外四里園接待十方往來嘉靖庚戌秋八月 將合圍適廣晉引胡兒數干騎馳至卷首飲馬盤礴 大廣犯京師都城三面無除率多奔潰唯西郭一面 苦澁師乃奪其柿以頻梨與之虜噉而甘之臟呼以 住都城之普安寺未幾白衣檀越張某建普濟養於 存焉已而結庵居大峪岳家坡中貴傅公集衆請師 然取職師大罵日此不可食香將爲賣已强食之甚 好妄動我物師預羅鮮菓於堵下齊長見柿如火欣 終母天年以茶毗法葬之建窣堵波以表孝義今尚 濟之遠遊四方每乞食奉母於尚下塚閒上壽爲數 窺得之刃將下師以手擊虜奪刃擲地其人竟以生 箭而去頃一房追王氏子入菴其人奔潛佛座下房 爲不欺已嚙指誠衆曰有人於此毋妄殺也乃揮令 **齊縣入港衆擁其後師望之類然憨笑且罵日會奴** 重之其供養日益贍師惟以一瓢之外無餘棒以此 不減鼎狙後至京之西山百花中船往來數年土人 習止觀門師將志行脚母老無養師以具稱其母荷 年二十有出世志從本省鐘樓寺潭公難染即立禪

先帝顧命之時今上 聖母建慈壽寺成延湻公為 未幾無疾而逝嘉靖三十九年二月朔日也師世書 有幹至若枝葉繁茂扶疎而庇蔭多矣汝等知之乎 院弟子日漸進初這公執業甚動師於衆中獨苦這 食盡則增門如故率以爲常後修普安寺成師復歸 越唯以坯堵門面壁忍餓而坐久有知之者爲爰供 米麵盡皆傾靈以濟資者若空無一粒亦不往自置 師師居常不事口腹帶衣糞掃一蛛無餘每得施利 土者夢伽藍爲師催供養傾心歸依建彌勒菴以延 **慈復建慈恩寺爲在別阮以休老爲公之子孫枝葉** 爲住持在以疾告退院又以其徒圓應世其業 八十有九僧臘五十有奇公滅後這公大興普安於 公祁寒溽暑陸沈賤役唯公以身先之百不一可無 將軍身而爲說法臣直一大將摧之力哉杭人韶善 身當房一面指麾談屬所全活者數萬是即現天大 住持以公弟子了寧爲替僧公化後又以其孫本在 人識其意者師將終日顧謂衆日吾之有湻猶樹之 居頃廣亦稍稍引去達觀可禪師常贊之日師以一

第乃為之銘曰年冬日余隨緣王城其孫了鑑與在等持狀乞余為 繁茂一如公言豈非天道冥冥報德之驗與萬曆甲

覆庇人天埋根千尺一利義然千秋萬襲 出塵離俗其德實基應化門頭其功匪一以異方便 出塵離俗其德實基應化門頭其功匪一以異方便 出塵離俗其德實基應化門頭其功匪一以異方便

慈慧寺無瑕玉和尚塔銘

形影相顧世出世別有何回互,昔日老麗破家散宅 是死機關只在一家善來善逝木人戴帽父子團圖 生死機關只在一家善來善逝木人戴帽父子團圖 生死機關只在一家善來善逝木人戴帽父子團圖 生死機關只在一家善來善逝木人戴帽父子團圖 生死機關只在一家善來善逝木人戴帽父子團圖 生死機關只在一家善來善逝木人戴帽父子團圖

三角山勉菴幻法師塔銘十方常住空壞塔存法身彌露

七十二年半僧半俗今日風光千足萬足一塔凌空

直出樊籠龐不嫁女公不拾兒一般主意各得便宜

通內與師與遊從最善生一日謂師日公唇掀齒露資奇氣幼業儒年十四即列諸生里有夏生治時者謹按狀師諱如幻字勉菴莆田林氏子父環師倜儻

相也師驚問何爲而可生日聞之誦觀音大士

若守教乘精戒律離欲苦行以慈利物若師之爲佳 法師聽諸經奧義諸老皆深器之已而有田將軍者 之遂去斬水馬牙山参無爲藏主居三載次體斗方 作甚麼師日小子閩人來為求長生融日有長必有 喝機鋒爲向上自多及察其操存則末也若是又不 相得數甚公因進而請日竊見常世談禪者動以棒 明心要翰林郭公正域以太夫人憂居調師於九峰 入溝渠遂拽杖歸九峰衲子駢集每以楞嚴爲衆發 耳師日然非禪之遇乃學禪者之過耳奈何去聖愈 斬人也見師雅量因漫之以世諦楽師笑日海龍肯 山又五載遂荷策北遊上都謁諸大知識依遷埋二 下落乃可為爾道無生師即剃染命名如幻依棲頃 短何不學無生日無生作麼學乞師指示融日汝試 閒二載入廬山多偏融大師融問日大**德何處人**來 剃除鬚髮屏息諸綠咬嚼一句無義味話久久得圖 日人命固如是乎何戀戀鄉井爲遂拂衣遨遊江湖 唇果脗合年十九倭夷寇閩父母俱喪於兵師大泣 **禧無不應第持其號自當驗師遂依持勤譽二年而**

今日看來大以未撤何如此公一竅不通生如鐵蟲

年煥然一新法席大振師一日謂衆日趙州八十尚 三載往谭州三角山爲馬租門人總印開山處不幾 之即拽杖去九峰走武曲憩吉陽寺閉關誦華嚴經 行脚我脚底豈乏草鞋一具耶遂拂袖之匡廬入黃 輩欲置香火地以券白師於沈公師大斥日方寸福 **跣足草屦而巳楚藩臬大夫沈君與師交最密弟子** 有請留傷師日辭世本無傷與人覓夢踪虚空無面 有末後一句子當與大衆商量即示恙六日告終案 龍寺留講楞嚴至二卷終師謂衆日姑舍是無論且 田不力蔣區區安向沈官人弟子不聽私請之師知 平無嗜好有所施戰以施人每有所往唯一鉢三衣 太史乞狀其行實萬曆壬辰秋九月因郭太史紹介 日面目問虚空弟子有問師靈骨可更之斬乎師日 遠法門下衰誠若公言可爲流涕也師律身清苦生 已世壽五十有九僧臘三十有奇門人火浴遂以骨 言託遂逝時萬曆十九年某月日也師生於嘉靖癸 愛重娑婆苦無情極樂天何須懷舊影寂照滿三千 石基於黃龍山之某處弟子性詮以遺命走江夏郭 老十六古本

於余爲塔銘乃按狀以敘而爲銘日

三草二木酸甘苦辣各得生長抽芽發幹除非無根 大海汪洋味至滴水娑揭喻之爲雲爲雨惟 自遭途炭日惟我師娑娟乙子毒氣逼人獨之者死 無內無外卷入毛端散周沙界需然雾電乾地普治 此

憨山老人夢遊集卷第二十九

憨山老人夢遊集卷第三十

侍

鬸

孤 酱 加 日錄

RE

嶺南弟子 劉起相 軍較

傳.

南京僧錄司左覺義彙大報恩寺住持高祖

不是如幻安能合空來無所從去無所著倒騎黃龍

踏折三角潭州之水。国山之雲彌滿六合是師全身

以水爲命變化無方去來不定流行坎止遇緣即宗

噓氣成雲縮氣成冰或寒或熱順時稱尊以身爲水

西林爾大和尚傳

公其承 通氣耳 眼 管日此何物應日金井 及 無一缺繇是宗伯甚重之嘉靖十年衆學爲本寺住 遠掌便行事也 疏別有體制須僧家當行可耳即專還公具疏草呈 諭作誦經佛事命呈疏草宗伯議須翰林祖看日佛 宗伯大喜即以遠爲僧錄右覺義以獨爲本寺提點 人狀貌魁偉喬白嚴為大司馬久與爾善遂舉兩人 皆不稱先是爾與僧名惠遠者號東林相與莫逆兩 恩無瑕玉公爲師翁生性耿介持重言動不妄少即 爲衆所推年二十即持金剛經至老不輟 祖翁諱永寧別號西林六合縣郭氏子幼出家禮報 上覽之喜日朕家有此層耶宗伯即以僧錄印付 上駕駐寺明日登大殿禮佛奉百官朝罷 上日何用祖爾日有佛舍利藏於塔下留此以 旨內外一切事宜皆祖爱至 上意解做道場七日其主壇場法事皆遠 駐蹕本寺大宗伯慮僧無可承旨者透選 上至塔殿見地下一孔問執殿役 上不懌租爾跪奏曰此氣 上駕行竟 武宗駕 Ł

教爲本業然飲通文義識忠孝大節須无從儒入乃 守愚先師南來五臺陸公為祠部主政謂粗動日冥 代教法皆爾慈心攝持教養之力也爾掌僧錄印一 知讀書文義及披削即知聽講習禪即雪浪中奧一 延儒師教某等十餘人讀五經四書子史某所以繼 僧多習俗不能對士君子一語獨居常謂僧徒以禪 與道場復寺業開法社爲接待養林自是禪道佛法 辭不可乃屬祖爾學嵩山善公為養蠶住持由是重 名教玷污法門耳初請先師雲谷和尚住三藏殿教 乃大行方知有十方接待皆吾祖爾力奧起化先是 公遊攝山見而雅重之即欲重興請師爲住持師整 親領往聽講從此始知同佛法雲谷先師居棲靈座 即禮請先師居三藏殿設常住供贈選僧數十衆日 見高信守愚法師講演甚明當請至寺教習信徒看 諸智禪者於是始知有禪宗數年先師去隱棲靈遊 為憂每見僧徒見輕於士林數日爲僧不學故取辱 覺義先是江南佛法未大行爾維居官秩切以法門 持綜理山門事二十年陞僧錄右覺義又五年陞左

1

佛某扶豫坐懷中寂然而逝十四年正月十六日也 示微疾請醫進藥爾日吾巳矣竟不藥某侍爾病中 伯請以老辭大宗伯慰留不九獨歸即封其印明日 娑巡寮遍謝合寺耆舊十日持僧錄印謁禮部大宗 事當立我像前聽此兒主張庶幾可保無處耳少觀 十有三當行矣門庭多故一日無老人則支持甚難 餘金皆借貸既葬合房舉無所措少祖憂之乃集大 聞誦金剛經不絕至十五中夜令舉衆大小圍遷念 艮山厚公以下皆唯唯受命明年正月七日爾具安 此兒雖年少饒有識量我身後汝等一門大小凡有 禮不可得也對於嘉靖四十三年臘月除日集諸子 之日此殿乃天宮淨土爾等懶慢如此他日求一 衆僧上殿祝延 小於祖爾像前議無所出於是某立主張將爾所遺 孫敘生平行履因屬後事乃撫某背囑之日吾年入 **敢輕棄視常住如眼睛故山門奧而法運昌也每率** 十五年諸山 一體奉法惟謹山門事務一草一葉不 聖壽見僧有懶墮不至者獨切賣 蟾

富論死合寺僧懼燕逃去某獨身往法司看管鹽菜 爲知人是年二月方丈燉明年二月十五日大殿炎 以田變價盡償之苟無貧累則衣食易爲耳衆如議 衣鉢什物凡可值者計之盡估以慣賃者儻不足當 未營少廢每隨行履見其端莊挺特足不挽衣鐵面 以梅齊俊公為師教習經書十九披剃侍獨十年行 化癸卯世壽八十有三今西林庵乃存日所修退居 體粥荷擔往來於中多方調護設法解教竟末減坐 事微細多不能記憶但見逐日侵晨持誦回向西方 也全身葬於智安寺某年十二蒙对度脫出家乃命 罰囚糧於是合寺安堵皆感誦獨爲知人獨生於成 本寺爲朝廷家佛堂凡物皆出 威嚴未見輕一啓齒笑容牽雲谷守愚二先師如對 乃設齋盡集諸貸主各執券照子母分給所負貸券 其撫某等讀書如憝母之嬰兒也懷感祖恩五十餘 大賓至敬盡禮即諸山尋常僧來謁不整衣冠不見 一夕盡焚於是率保其房門子孫不散少祖始稱看 旨以本寺官住頭首執事下法司者十五人以 內帑事干重典法

韶後裔庶先德典利世世如在也者十九切念後之子孫不知先人所自記其大略以年向在東海記翁行實甚詳因被難失草今老矣忘

室子先大師傳 室司天道循環與時升降而法道亦然故道將奧也 整可天道循環與時升降而法道亦然故道將奧也

受食食盡亦不自知碗忽墮地猛然有省比如夢覺

師氣字不凡雅重之信宿山中欲重與其寺請師爲

五臺陸公初仕爲祠部主政訪古道場偶遊棲霞見

師師食以飲食盡與所有持去由是聞者感化太宰

侵師竊去所有夜行至天明尚不離菴人獲之送至

師愛其幽深遂誅茅於千佛嶺下影不出山時有盗

千佛嶺累朝賜供鼈田地道場荒廢殿堂爲虎痕巢

厚之師拽杖之攝山棲霞棲慶乃梁朝開山武帝鑒 原之師拽杖之攝山棲霞棲慶乃梁朝開山武帝鑒 原之師拽杖之攝山棲霞棲慶乃梁朝開山武帝鑒 一切經教及諸祖公案了然如觀家中故物於是韜 一切經教及諸祖公案了然如觀家中故物於是韜 遊頂戴觀音大士像海宵不寐禮拜經行終身不懈 遂頂戴觀音大士像海宵不寐禮拜經行終身不懈 遊江南佛法禪道絕然無聞師初至金陵寓天界毗 廣閣下行道見者稱異魏國先王聞之乃請於西園 藍閣下行道見者稱異魏國先王聞之乃請於西園 養桂庵供養師住此入定三日夜居無何予先太師 養桂庵供養師住此入定三日夜居無何予先太師 養桂庵供養師住此入定三日夜居無何予先太師 養桂庵供養師住此入定三日夜居無何予先太師 養桂庵供養師住此入定三日夜居無何予先太師 養桂庵供養師住此入定三日夜居無何予先太師 養柱底供養師住此入定三日夜居無何予先太師 大江南佛法禪遺紀然無聞師初至金陵寓天界毗 大江南佛法禪遺紀然無聞師初至金陵寓天界毗 大江南佛法禪遺紀然無聞師初至金陵寓天界毗 大江南佛法禪遺紀然無聞師初至金陵寓天界毗 大江南城上本寺 之三藏殿師危坐一爺絕無將迎足不越間者三年 大江南東京 大江東京 大江東

移居於山之最深處日天開巖用影如初一時宰官 以應以慈愈切而嚴益重雖無門庭設施見者望崖 俗入室必鄉蒲團於地令其端坐返觀自己本來面 凡多請者一見師即問日日用事如何不論實賤僧 居士因陸公開導多知有禪道聞師之風往往造謁 能入山有請見者師以化導爲心亦就見歲一往來 再見必問別後用心功夫難易若何故流唐者茫無 南義林肇於此師之力也道場既開往來者衆師乃 住持師堅辭學嵩山善公以應命善公盡復寺故業 其教先太師獨每延入丈室動經旬月子童子時即 嬰兒之傍慈母也出城多主於普德臞鶴悅公實稟 座師一視如幻化人會無一念分別心故親近者如 城中必主於回光寺每至則在家二衆歸之如憲華 不寒而慄然師一以等心相攝從來接人軟語低聲 目甚至終日竟夜無一語臨別必叮嚀曰無空過日 斥豪民占據第宅為方文建禪堂開講席納四來江 親近執侍辱師器之訓誨不倦予年十九有不欲出 一味平懷未常有辭色士大夫歸依者日益衆即不

峰廣鉄一部持白師師日熟味此即知僧之為貴也 取傳燈錄高僧傳讀之則知之矣予即簡書笥得中 禮待之父母不以子禮畜之天龍恭敬不以爲喜當 師日汝知厭俗何不學高層古之高層天子不以臣 天界師力拔予入衆同多指示向上一路教以念佛 予由是决志華染實蒙師之開發乃嘉靖甲子歲也 家意師知之問日汝何背初心耶子日第厭其俗耳 誘見者人人以爲親已然護法心深不輕初學不慢 審實話頭是時始知有宗門事比南都諸利從禪者 丙寅冬師愍禪道絕響乃集五十三人結坐禪期於 四五人耳師垂老悲心益切雖最小沙彌一以慈眼 解脱而後已然竟罔聞於人者故聽者亦未嘗以多 仰體佛心房僧即序佛也聞者莫不改答釋然必至 求而往救必懇懇當事佛法付騙王臣爲外護惟在 毀戒諸山僧多不律凡有干法紀者師一聞之不待 視之遇之以禮凡動靜威儀無不耳提面 参師於山中相對默坐三日夜師示之以唯心立命 事為煩久久皆知出於無緣慈也了凡袁公末第時 命循循善

之者其操行可知已師居鄉三載所蒙化干萬計 借居恒安重寡言出語如空谷音定力攝持住山情 夜四鄉之人見師庵中大火發及明趨視師已寂然 夕常江南禪道草昧之時出入多口之地始終無議 修四十餘年如一日脇不至席終身體誦未嘗暖 生平任緣未常樹立門庭諸山但有禪講道場必請 之妙皆歎末曾有師尋常示人特揭唯心淨土法門 庚申世壽七十有五僧臘五十弟子真印等茶毗葬 而逝矣萬曆三年乙亥正月初五日心師生於弘治 坐方丈至則擊揚百丈規矩務明先德典刑不少假 臺同請師故山諸公時時入室問道每見必炷香請 未予辭師北遊師誠之日古人行脚單為求明已躬 思養徐公謁師扣華嚴宗旨師爲發揮四法界因融 益執弟子禮達觀可禪師常同尚書平泉陸公中書 公刑部尚書旦泉鄭公平湖太僕五臺陸公與弟雲 **鞋錢也予涕泣禮別壬申春嘉禾吏部尚書默泉吳** 下事爾當思他日將何以見父母師友眞毋虚費草 之旨公審教事詳省身錄由是師道日益重隆慶辛

於寺古子自雜師遍歷落方所參知識未見操履平實真慈安詳之若師者每一異想師之音聲色相昭然心目以感法乳之深放至老而不能忘也師之發然心目以感法乳之深放至老而不能忘也師之發然心目以感法乳之深放至老而不能忘也師之發為此門已遠東遊赴沈定凡居士齋禮師塔於棲真乃於述見聞行履爲之傳以示來者師爲中興禪道之祖惜機語失錄無以發揚秘妙耳

釋德清日達壓單傳之道五宗而下至我 明徑山之後獨拉將絕響突唯我大師從法舟禪師櫃如穩之原雖未大建法暗然當大法草味之時挺然力振其道使人知有向上事其於見地穩密操履平實動其道使人知有向上事其於見地穩密操履平實動能克紹家壓有負明教至若荷法之心未敢忘於一能克紹家壓有負明教至若荷法之心未敢忘於一息也敬述師生平之槩後之觀者當有以見古人云息也敬述師生平之槩後之觀者當有以見古人云息也敬述師生平之槩後之觀者當有以見古人云

師諱福登川號妙峰山西平陽人姓徵氏春秋續鞠

師示以法界觀於關中依習禪觀日夜鵠立者三年 矣三年被關往見王則具大人相王甚喜乃曰子雖 嘴師見之對佛作禮以線繫於項上自此絕無 口者片臭鞋底對將寄與爾並不爲別事專打作詩 不折之他日必在因取敝履割底封寄之乃書一偈 心有開悟乃作偈呈王王見之曰此子見處早如此 中條山之棲岩寺修蘭若令師閉關師謂益近之法 大事子師時年二十二即奮志遠遊王日未可妨就 因謂師日子臨大難不死此非尋常何不痛念生死 民居盡場師被壓將為心死則公亟搜之幸無恙王 他日必成大器公遂留為弟子居頃之值地夜大震 無何山陰王出遊見師奇之謂頭公曰當善視此子 僧朗公居之師至日乞於市暮宿於閣朗公憐之居 十八遂逃攜一瓢至蒲坂郡東山有文昌閣萬固寺 知本分事但未聞佛法恐墮邪見介休山中有講楞 嚴 而已師失怙恃年十二投近寺僧出家不得善視年 居之後也師生方七歲父母值囚歲亡無險具薦席 經者促師往聽授具戒師年二十七王謂師日子 三言

之師病臥於答察予往視則瘡腫遍身手不能學因 先大師講法華經於天界予居副講師就淨頭役予 覺日飲之其甘視之甚獨淨穢由心耳即通身大汗 波染時症病幾死旅宿求滴水不可得乃探手就浴 教印單瓢隻杖南詢遍參知識至南海禮普陀回寧 自著被衣獲外裰以藍縷手授之日此防寒也師受 爲僧未出山門如井蛙耳南方多知識子當往參他 予笑曰此眞道人也因坐談師日每聞師講心開意 有道者明日袖餅果往候以手投師欣然咽之大快 何謂也師曰但見行齋饅頭恨不都放下予心知為 問師安否師日業障身病已難當饞病更難治予日 燈瀝掃洗籌杖近窺之乃一黃病頭陀耳心異之久 每早起見厠潔即知行者為非常人育頂之見師執 病乃痊而運體疥腫至南都時隆慶元年多月也適 盆掬水飲之甚甘詰朝視之極穢濁遂大嘔吐忽自 日歸來可當老夫行脚也乃親為師料理操方具解 解英年妙悟如此予日此非本分事志將從師遠遊 多究向上一著耳不旬日竟師不得知潛行恐以予

友矣予日夙有盟公日果同行小子當爲津之是年 幸無孤遊小子視方今無可爲公師者捨妙峰公無 以不禁冰雪復回都門行乞左司馬伯玉汪公語予 別隆慶壬申冬月也明年春三月子遊五臺志居之 日法門寥落大自可悲觀公骨氣異日當爲人天師 他日妄想耳師日儻不棄某當為師前驅打狗耳即 日自別師無日不念今特相尋適來觀光上國以了 禮齊罷別去明日往候連床夜談具述水藏因緣予 得師日改頭換面也予日本來面目自在師笑而作 子熟視之見雙瞳炯炯忽憶為天界病行者也日識 歸無意人閒世乃於中條最深處誅茅甲影以居辟 識子於燕市舍館定乃物色於西山一見日識得麼 乃隨宦遊者至京師時予巳乞食長安師於馬上偶 北藏經於 穀飲水三年大有發悟即以宗鏡印心深入唯心之 旨王日重三寶於南山建梵字成延師居之且欲求 德知識在初學則以予爲一人王繇是亦念之師旣 爲累也師歸王見甚喜且詢所見法門人物師述先 大內促師親往師居山日久愛長未剪

會考道路不絕每食不減數千人會罷將所餘金穀

封付常住與師一沐飄然長別矣予東蹈海土師往

年壬午春三月圓滿期百二十日九邊八省編白赴

臣子一念之忠耳師然之以是年冬十一月啓會明

作為無非為

國報本也宜將一切盡歸之實方外

官於五臺時會方集於新寺子與師議日吾徒凡所

者即具輜重送師至荊州聽自監製用取足於王殿 世界十方佛剎圖萬佛菩薩像精密細妙遂成一大 掌師喜之乃鑿爲窟深廣高下各三丈五尺雕華藏 事王問費幾何師曰每座須萬金王欣然願造峨嵋 三大土像造鋼殿三座送三大名山己亥春杖錫路 水澗沙深乃建橋二十三孔亦竟成師素願範滲金 道場居無何宣府西院議建大河橋師應命至度之 往二年工既竣回蘆芽過寧化見石壁千個一平如 傾比鄉大司馬見川王公議重修延師居三年塔殿 山有唐聖僧舍利塔十三級高三百尺及大佛殿皆 見問心要有契公即願助南海者乃釆銅於蜀就匠 有殿成送至峨嵋大中丞霽宇王公撫蜀聞師至請 高廣丈餘淺金雕鏤路佛菩薩像精妙絕倫世所未 安認藩王王適造鎏金普賢大士送峨帽師言銅殿 鼎新頃之三原大中丞廓菴李公請建渭河橋梁師 頂造萬佛鐵塔一座高七級初蒲坂萬固寺為師故 獨得師就蘆芽 蘆芽結庵以居期年 賜建華殿寺頃成一大道場於山 聖母以求儲因緣訪予二人

遂成一大刹師乃造五臺者所施皆出於民閒未幾 立長壽由奉 茶菴 前所未有也師初入臺山以道路崎嶇於是溪設橋 請十法師演華嚴經所費皆出內帑道場之盛養從 明寺工竣乃建華嚴七處九會道場上下千二百衆 金往視卜地於寺建殿安奉以丙午夏五月與工鼎 遣御馬太監王忠 亦就乙巳春師躬送五臺議置臺懷顯通寺 遂卜地於南都之華山奏 氏於荊門工成載至龍江時曾陀僧力拒之不果往 像高三丈六尺山門鐘鼓兩廊寮舍規模宏敞又爲 接待院為往來息肩之所又於龍泉關外忍草石建 梁石鋪大路三百餘里修阜平縣橋 重重聳列規模壯麗 新創立以磚壘七處九會大殿前後六層周匝樓關 大道場 **預賜龍藏建磚閣安供後創七如來殿又於阜平** 刺賜惠濟院捨藥施茶歲常賜金若干隨蒙 賜額慈佑圓明寺置供贈田數頃師居 聖母建殿閣前後七層範接引彌陀 聖母遣近侍太監陳儒各賣祭 賜額 聖母 **刺建大護國聖光**汞 賜建殿宇安置 賜額普濟建 上間

聖天子 法界圓融性海所流不思議力而能若此也耶師自 蒙物色師於陸沉賤役中及年三十同行脚刻志修 福田善知識實不知其超悟處也嗚呼師果何人哉 醫致藥石及遷化公爲製塔銘常日人以妙峰師為 各令歸故山不留一人臘月十九日卯時端然而逝 湧投足所至遂成實坊果何緣而能致耶苟非心遊 行既而臺山一別三十餘年始以小王助道終至 起於孤微卒能於天人中作一代廣大佛事以子蚤 師問心要相契往返關酢多語句未錄師示恙公遣 五百匹爲葬事初侍御蘇公雲浦按山西因入山訪 之西問師功德未完者悉令完之 法臘四十有奇師旣化 師生於嘉靖庚子入滅於萬曆壬子世壽七十有三 所建道場上下立爲十方常住各得其人向來眷屬 橋長十里工未成壬子秋九月師以疾還山乃料理 海沱河大橋晉王請修省城大塔寺殿宇完修會城 五臺當建立時亦應他緣山西撫臺請修婷縣要路 聖母諸王爲檀越凡所管建法施應念雲 上聞之賜葬建塔於永明 聖母赐千金布

> 養跡操方住山行履從來一衲之外無長物恒隨侍 養師操方住山行履從來一衲之外無長物恒隨侍 整師宗者耶師院古骨剛具五陋面嚴冷絕情識孤 為其實心師之心難別三十餘年時居然在目如 為其實心師之心難別三十餘年時居然在目如 為其實心師之心難別三十餘年時時居然在目如 為其實心師之心難別三十餘年時時居然在目如 為其實心師之心難別三十餘年時時居然在目如 為其實心師之心難別三十餘年時時居然在目如 方其實心師之心難別三十餘年時時居然在目如 方其實心師之心難別三十餘年時時居然在目如 方其實心師之心難別三十餘年時時居然在目如 方其實心師之心難別三十餘年時時居然在目如 方其實心師之心難別三十餘年時時居然在目如 一百餘年其在法門建立之功行亦唯師一人而

已豈易見哉

變修則四十餘年足不離影而於法門之功富與清趣而一際作助道具建利如那蘭陀性相並做禪淨之自視也亦若是而已予常竊謂假能以似師之緣之自視也亦若是而已予常竊謂假能以似師之緣

刹而已也 医乎往矣其或俟師再來耶京東林比隆矣獨目華藏淨土莊嚴又不止三山十

雪浪 法 師恩 公 中 與 法 道 傳

禪始發圭峰力挽未能永明會性相歸一心目為宗 不悖及六藏而下禪道大學則不無尚執之呵而教 不尚文字由是教為佛眼禪為佛心禪教齊驅並行 圓音於覺苑也自達摩西來立軍傳之旨直指一心 來之性病榜樣法界之魚龍不異觀白毫於靈山聽 標定非一無非探其本源而攝歸真際總皆遊泳如 天下教義幽宗如揭日月於中天矣自是著述多門 旨始横流於大地吾佛一代聖教如大海潛流於四 窺基專業其門由是性相二宗之淵源一心三諦之 挹其緒而大法始昌明於中夏六朝盛矣然其眞宗 鏡而佛祖全體大用彰明大著矣惟我 開華嚴法界之宗清涼獨擅其美玄奘闡唯識之旨 猶未大樹立自天台標三觀以成一家有唐賢首始 廓清寰宇開萬世太平之業初 自白馬西來像教東與羅什淨名振其綱遠公涅槃 至建康劒甲未解 聖祖龍飛

朝宗自 集而南方學者習於軟暖望若登天惟我先大師無 大都而江南法道日漸靡無聞焉正嘉之際北方識 其講說妙義深契佛心吾念報恩乃 **新西林和尚日頃見北來高僧無極眞人天師心聆** 席亦唯通泰二大老踞華座於 禪侶以天禧居義學以能仁居瑜珈汪汪洋洋天下 心講明法性瑜珈以濟幽冥乃建三大利以天界安 偉與由是於一門制立三教謂禪請瑜珈以禪悟自 御駕躬臨 寺建普度道場於鐘山靈谷名流畢集大闡立宗 即崇重佛氏洪武三年 講教信徒居此安可絕無聞乎公爲住持誠能體請 金陵魏國公子見而悅之遂爲檀越請講圓覺經唱 者二十餘年具得賢首慈恩性相宗旨既而南歸至 歸寺大演法道開誘羣蒙法門之幸也師爾唯唯即 而不和聽者寥寥祠部主政五臺陸公往謁謂先太師 極和尚自淮陰從師一鉢往依焉飲冰屬雪廢寢忘食 北遷之後而禪道不彰獨講演一宗集於 親聞法喜而法道之盛不減在昔何其 韶天下高僧安置於天界 京師海內學者 聖祖所設之

先至飯堂坐第一座頃首座至咄日小沙彌何得居 也從此為沙彌出入衆中作大人相一日大衆孫公 之而已由是竟不歸父回告母遂聽之公時年十二 父往攜之父至强之再三公暗袖剪刀潛至三藏塔 也公生性超邁朗爽不羣唯好嬉戲作佛事及入社 事善化之風漸開時有居士黃公某者夫婦久持齊 諸山耆宿稍有應者久之則京城善士日集知供四 之三藏殿以玄奘大師髮塔在焉常住藏設常供太 我當居之座日汝通何佛法公曰請問座曰且問今 此座公曰此座誰當居座曰通佛法者公曰如是則 前自剪頂髮手提向父日將此寄與母父痛哭公視 公笑而點首父强之竟不歸父歸數日母思之切促 聽之留二三日父歸喚公公不應父曰若愛出家耶 也是日設供值講八識規矩公一聞即有當於心傾 學先生訓句讀略不經心督之第相視而嘻固無當 師爾乃選寺僧數十人躬領座下日聽講諸經附近 盡禮致幣敦請時嘉靖三十二年也師至安居於寺 日公攜幼子六郎往設供六郎即雪浪法師恩公

> 四足齒歲公年二十一佛法淹貫自是勵志始習世 學是解超零一衆敬服年十八即分座團講聞者悚 學是解超零一衆敬服年十八即分座團講聞者悚 學見解超零一衆敬服年十八即分座團講聞者悚 學見解超零一衆敬服年十八即分座團講聞者懷 學見解超零一衆敬服年十八即分座團講聞者懷 學見於公天性不羈略不爲意子十九葉變先大師於 學見於公天性不羈略不爲意子十九葉變先大師於 學見之義日阿叔有愧此公多矣公日是雕蟲技耳 學見之義日阿叔有愧此公多矣公日是雕蟲技耳 學見之義日阿叔有愧此公多矣公日是雕蟲技耳 學見之義日阿叔有愧此公多矣公日是雕蟲技耳

利生公之肆力於是豈無意乎予從雲谷先師習禪

卷書不知杜詩我說不讀萬卷書不知佛法常閱華

嚴大疏至五地聖人博通世諦諸家之學方堪涉俗

炙人口尺牘隻字得爲珍**秘嘗謂予日人言不讀萬**

翰意在筆先三吳名士切磨殆遍所出聲詩無不膾

閒經書子史百氏及古辭賦詩歌靡不搜索遊戲染

單提本文直探佛意拈示言外之旨恒教學人以理

遷化公據華座日邁萬指一旦翻然盡掃訓詁俗習

日清兄去吾無友矣既聞予在都下公瓢笠而尋至 然試略圖之公冒大雪方入城予即攜一瓢長往矣 結茅以居公開之即登臺山問予於冰雪堆中夜談 則予行脚他方公遂留京師及予同妙峰師入五臺 遂孤杖北遊公亦遊目嵩山至伏牛結冬而歸居常 公回山不見予不覺放擊大哭以此知公生平也予 安能終餘日歲公意戀戀不已予論之日兄如不釋 弟壽當幾何公日安可計此予日兄即能實歲月計 若必行俟吾少吃行李之實以備風兩子笑曰兄視 苦寒固難堪也無口吾姑攜子遨遊三吳操其筋骨 氣不至無可使之地決不能治此固予之志也公日 志益切以始閱華嚴知有五臺山心日馳之年二十 而後行未晚子曰三吳乃枕席耳自知生平軟暖習 難也公日若果能此吾則兄事之自是予於山林之 耳古德云若自性宗通回視文字如推門落臼固無 五志將北遊別公於雪浪港公日子色力孱弱北地 如三家村裏土地作麼頻激以聽講子日各從其志 於天界切志参究向上事公每見子枯坐即呵曰用

任此回乘本師老年就當侍座以收四方學者之心 能自爾凡出語言順脫拘忌從此安心禪觀及先師 之旨人或恥公公日文殊為七佛師何妨為釋迦白 棲霞拈提公案公折節往從尚確古德楼綠得單傳 林公東包往参竟中止既而遜菴昂公從少宝來至 大疏七講玄談公盡得華嚴法界圓融無礙之旨遊 以法爲任久參夙學皆却步矣先師弘法以來三演 派性海時稱獨步公素慕禪宗大章宗師開堂於少 他日登壇則吾家故物耳幸無多讓公既聞則挺然 他方也公即理策歸渡行予囑之日兄素未以法自 輕且師長暮年非兄何以光前啓後幸速歸無久滯 能振其家聲者兄乃克家的肖子將來法道之任匪 **湮幸本師和尙受佛付囑而開闢之觀座下似未有** 兄之緣在弘法以續慧命非枯寂比也江南法道久 念本師老矣奈何子曰不然人各有志亦各有緣察 因扣公志公日吾見若此心如冰醬將同死生耳第

之以威折之一時聰明特達之士無不出其座下始 隨方而應一兩兽霑三草二木無不蒙潤且以慈輝 三明明宗巳往現前若巢松浸一兩潤大唱於三吳 終說法幾三十年每期衆多萬指即開遊山水杖錫 櫓略無超脫之機及公出世如摩尼圓照五色相鮮 有先是識肆所至多本色無文所入教義如抱椿搖 霧而見天日法雷啓蟄羣囊昭蘇聞者莫不漸未會 觀爲入門由是學者耳目煥然 楊於准北海內凡稱說法者無不指點公門非具四 数者多分化四方南北法席師匠皆出公門除耶溪 十餘年門下出世不二三人亦未大振公之弟子可 所至隨綠任意水邊樹下稱性揮塵若龍驟虎嘯風 紅之力何能有此嗚呼豈尋常可測哉公每撒座則 **蘊璞愚晚振於都下若昧智獨揚於江西心光敏官** 動雲從自昔南北法席之盛未有若此先師說法三 宇為之振動此人所未知也天性坦夷不移城府不 修壁觀曹於長獎山中結茅督靜入定二日林木屋 避譏嫌以適意爲樂來去翰然如逸鶴夜空脫略拘 一新如望長空發雲

> 忌達觀禪師頗有嗛於公子曰師固不知雪浪吾觀 基後身也達師首肯曰吾自今不敢易視此公矣嘉 基後身也達師首肯曰吾自今不敢易視此公矣嘉 基後身也達師首肯曰吾自今不敢易視此公矣嘉 其因地聽唯識而簽心向藏塔而剪髮此再來人窺 斯傷哉難矣方今之世捨爾我其誰熟惜乎年輕禮 耶傷哉難矣方今之世捨爾我其誰熟惜乎年輕禮 可已完乎佛說大火所燒淨土不毀何期與之俱化 立口嗟乎佛說大火所燒淨土不毀何期與之俱化 立口嗟乎佛說大火所燒淨土不毀何期與之俱化 一中心二十餘年未嘗一日忘即五臺東海皆若子房 中心二十餘年未嘗一日忘即五臺東海皆若子房 中心二十餘年未嘗一日忘即五臺東海皆若子房

指日可成今且奈何子往矣兄試相時先唱當躬行

乞於南都以警衆之耳目予早晚天假生還尚可計

也公額之明發遂長往萬曆乙未冬十一月也予度

衛之三年戊戌公見本寺塔頂傾側遂奮志修理一

時當道助發給諫祝公百唱公親領衆數百次第行

乞於都市一時人心躍然興起金錢集者動以干百

江上促膝夜談及初志予日事機已就若不遭此蹶

未可以妄想求也及予罹雞被遭過故鄉公別予於

吾將行矣弟子乞師垂示公日如空中花本無所有 門人相從說法不輟即弱骨者日益强矣居常思結 於苦行於江東大市立捨茶菴公自增水日供不後 九日入滅於萬曆丁未某月某日世壽六十三歲法 悲感載道學人如喪考妣也公生於嘉靖乙巳九月 索浴更衣端坐而逝弟子輩迎葬於雪浪山化之日 用龕子臥死用棺材相錫打瓶且莫安排言訖頃即 說箇甚麼問日師即不諱用坐龕用棺木公日坐死 夜則說法二利並施三吳之士翕然信向即闡提亦 十万粥飯綠暮年就吳之望亭開接待院接納往來 也公生於富宝人皆視為性智軟暖及中年操履篤 唯 轉爲護法示幾示徵疾一日告衆曰汝等善自護持 躬操薪水執作具預學人作務日則驚飯晚則澡浴 柔條竟無小慈豊非心力所致哉會計所費數萬精 心苦極忽嘔血數升時管木即入在架之人如鳥棲 計大役遂舉塔高二十五丈其安塔頂管心木約長 七丈架半倍之則從空而下如芥投針其勢難矣公 聖母賜三千金其餘皆出民閒未動公家一變

> 灣心要且善相宗其唯識一論實從開發惜乎早天 傳法弟子出世者如前所列隱約者尚多多也嗟乎 傳法弟子出世者如前所列隱約者尚多多也嗟乎 學面開之菩薩往來人天留惑獨生尚有隔陰之昏 而不通於宿命唯自驗之於夢中智者觀之以習氣 而不通於宿命唯自驗之於夢中智者觀之以習氣 而不通於宿命唯自驗之於夢中智者觀之以習氣 而不通於宿命唯自驗之於夢中智者觀之以習氣 一點顯所堪無怪乎內眼忽之也苟非乘夙願力豈能 數顯所堪無怪乎內眼忽之也苟非乘夙願力豈能 對頭,堪無怪乎內眼忽之也苟非乘夙願力豈能

公傳

皖城浮山大華嚴寺中興住山期目禪師智

依出家滋雄變爲驅鳥後行脚遇黃道月舍人與聽居山公之父出家居此號白齊和尚公年十二即往居眞南生而倜儻不羣負出塵之志曲城之陽有朗因韓本智初號慧光曲靖李氏子先爲金陵人後徙

門諸大老若伏牛之大方印宗南岳之無盡廬山之 年十九受具白齊將順世公請益齋日是惡知不日 人傲物素少法門無撄其鋒者一日至天界寺問主 中峰華嚴蘭若居之未幾去白下給諫字這鍾公為 露由是機辯自在行脚北遊過六安大夫劉公為新 大安薊門之遍融月心皆一時教禪師匠威及其門 山参訪知識足跡半天下氣吞諸方八九矣南北法 暮爲人壻也公發憤即決志操方北遊中原遍歷名 熏發起即從事焉居常以生死大事爲懷切志向上 投機爲更其號日期目云白齊以華嚴爲業公以聞 經爐冶鉗鎚故若宗若教得其指歸第於參究已躬 **廖富作心鍾默然公日奠道天界即三千諸佛只在** 師天界寺還在心內心外公日寺且聞借問爾把甚 六安創鏡心精舍以待公皖之東九十里日浮山昔 陶公允宜宦此部相與莫逆陶左遷盧州別駕署篆 山僧拂子頭上鍾良久作禮自是始知法門有人矣 者曰善世法門可有禪者麼主者推公出見請問禪 一著以未悟爲切於是立禪一十二載始得心光透

乃奉

聖書持大藏歸浮山始自戊戌迄於壬寅五

年之閒而浮山護國大華嚴寺巍然如從地湧豈人

師會離廟爲慈聖皇太后

勅頒印施大藏尊經公

慶墜一言而興起之豈非願力耶寺既復遂北入京 嚴墜一言而興起之豈非願力耶寺既復遂北入京 慶墜一言而興起之豈非願力耶寺既復遂北入京 慶墜一言而興起之豈非願力耶寺既復遂北入京 一百元 與語是廣代盡歸我次陽之田百五十年之 是令一行闡提廣代盡歸我次陽之田百五十年之 是令一行闡提廣代盡歸我次陽之田百五十年之 是令一行闡提廣代盡歸我次陽之田百五十年之 是令一行闡提廣代盡歸我次陽之田百五十年之 是令一行闡提廣代盡歸我次陽之田百五十年之 是令一行闡提廣代盡歸我次陽之田百五十年之 是令一行闡提廣代盡歸我次陽之田百五十年之 是令一行闡提廣代盡歸我次陽之田百五十年之

何 於一鉢中耶藏者謂公親見業相吳太史日知師 供種種獨受一案鄉黎及水晶念珠留鎮浮度山門 接面於癸卯冬老人示邁王難感者驚眩公數日繁 王亦竟為華嚴檀越公雖往來都門與紫稻老人未 柘不唯逆行方便超脫生死甚為希有即以一死國 切俱非處正是清淨梵行王即歡喜滋執弟子禮所 意業佛法僧護俱非梵行擊竟何者是然行公日一 心及改香作禮請問法要因問華嚴然行品云身語 **经來因何見僧不禮生大我曼王悚然下座請入存** 因感斯妙果王日從三寶中修來公日既從三寶中 長揖問王日善哉世主富有國土貴無等倫作何勝 德使者覆王曰預聞法要心詰朝王坐中殿延公入 王深心外護法門若以世法相見則不敢唇王之明 入屬欲致一見公語使者曰佛法付屬國王久嚮賢 恩走光水致用焉藩王為佛法金湯利利中最聞公 力也哉養林就緒即什囑其徒圓某感劉公護法之 必在弟子耶自法門一變京師叢林震驚人人自 世主四十年崇教之恩法門無此老豈不盡埋沒 者

之古亭振百年而公適中與之由是觀之古亭罪遠 包寫笠者比觀其機辯迅捷蓋夙根慧種亦秉願始 中無人自少行脚橫越諸方如脱索獅子豈矩矩腰 時往來納子喧傳悉公人品魁梧命偉胸中無物目 賜金若干返靈骨於浮度妙高峰之南麓從公志也 始末因緣具載吳太史塔銘子居衛外聞 凍時目下如何逾日而化計聞 圖一晤了此寥廓且托以後事王答書有云滴水 舜鼎官兵部職方郎中先三日前公以書報別云行 十二月二十四日也公得力俗弟子唯墨池居士王 莊嚴吾所圖也今歸矣踞座端然而逝時萬曆乙巳 處忽告來日生死去來皆目皆所見耳吾行矣華殿 而來耶以遠公開浮山百餘年而墜久則古亭振起 楞嚴公初不應命與之及蔣二軸未終至同別妄見 法會於都南之廣慈為增上脫延 耶居二年乙巳冬 魔陣之殼然竟無知公徽首者距非代案相一轉語 危即素稱師匠者皆鳥驚魚散獨公晏坐金剛 慈聖聖母周三百六十甲子建 聖母悼恤有 懿旨請公講演 公名動 。地為 加

大太史公云古亭歸路為來路遠錄宗乘入教來此 人太史公云古亭歸路為來路遠錄宗乘入教來此 人太史公云古亭歸路為來路遠錄宗乘入教來此 實錄也然公雖未匡徒即末後一著而舌根不壞矣 質日聞之諸佛不捨衆生界菩薩不斷生死根故孤 所参知藏皆毗盧遮那眉光所現是以華嚴法界草 所参知藏皆毗盧遮那眉光所現是以華嚴法界草 一滴而見百川之味也以是觀公始終以華嚴為死 一滴而見百川之味也以是觀公始終以華嚴為死 一滴而見百川之味也以是觀公始終以華嚴為死

淨明沙彌傳

即署不能繼甘旨多方為之盡心焉祖母死病篤臥沙彌稱俗諱承惠字元字先皈依雲棲大師法名淨以彌稱俗諱承惠字元字先皈依雲棲大師法名淨明生平性介不合俗不治生產居鄉里多件衆即親以強不能變更重質性。

香臨危忽破額微笑口喃喃說偈曰一物不將來一

物不將去高山頂上一輪秋此是本來真實意乃命

家人作齋供佛請淨侶念佛回向願文至放光接引

屏家屬極力念佛默觀蓮花經七日奉族皆聞蓮花

要受沙彌戒被法服引鏡自照日吾今待死所矣因 其妻弟聞某見其孤硬可與入道類說之喜而不入 因導歸雲棲得名焉壬子冬得吐血症積三歲不痊 因專歸雲棲得名焉壬子冬得吐血症積三歲不痊 因專歸雲棲得名焉壬子冬得吐血症積三歲不痊 因為歸雲樓得名焉壬子冬得吐血症積三歲不痊 其一教我念自性彌陀耶念極樂彌陀耶閒日汝將 生日教我念自性彌陀耶念極樂彌陀耶閒日汝將 生日教我念自性彌陀耶念極樂彌陀耶閒日汝將 生日教我念自性彌陀耶念極樂彌陀耶閒日汝將 整受沙彌戒被法服引鏡自照日吾今待死所矣因

而逝時某年某月某日也

垂手提攜數容可掬乃起端坐開眼諦視佛像安然

幻人日間之般若如大火聚太末蟲處處能泊獨不

床褥閒極力治喪事盡禮郡人稱之性好施隣媼寒

聞仲子小傳

一方死之際積置現前心神恍惚方知淨業未純往來之弟也伸子姓聞氏名啓初字子與浙之錢塘人孝廉啓祥之弟也伸子幼善病故早戒舉子業素有出生死志之弟也伸子幼善病故早戒舉子業為生死大事願華變之子甲雲棲伸子作禮白言某為生死大事願華變而從知識後予曰不然佛性四大不能拘豈毛髮可而從知識後予曰不然佛性四大不能拘豈毛髮可而從知識後予曰不然佛性四大不能拘豈毛髮可而從知識後予曰不然佛性四大不能拘豈毛髮可所大喜曰信哉雄猛丈夫也初伸子自恃信力强勝乃大喜曰信哉雄猛丈夫也初伸子自恃信力强勝。 一方死之際積置現前心神恍惚方知淨業未純往來

不易乃蹶起大呼日亟請知識念佛助我知識既集念佛連日而習境昏擾乃復呼日生死根株知非他人可能拔也遂立起着衣盥洗對佛焚香煉臂懇倒人可能拔也遂立起着衣盥洗對佛焚香煉臂懇倒能識等出真境朗在目前怡然靜定急令剃髮披袈溦高音聞其語未見其人也予觀伸子臨終暫境心家也至有身陷鑊湯一念回光即變而爲八德蓮心家也至有身陷鑊湯一念回光即變而爲八德蓮心家也至有身陷鑊湯一念回光即變而爲八德蓮心家也至有身陷鑊湯一念回光即變而爲八德蓮心家也至有身陷鑊湯一念回光即變而爲八德蓮心家也至有身陷鑊湯一念回光即變而爲八德蓮心家也至有身陷鑊湯一念回光即變而爲八德蓮心家也至有身陷鑊湯一念回光即變而爲八德蓮心家也至有身陷鑊湯一念回光即變而爲八德蓮心家也至有身陷鑊湯一念回光即變而爲八德蓮心家也至其時人也予觀伸子臨終暫境。

震震

私山老人夢遊集卷第三十

黎山老人夢遊集卷第三十一

寺 者

驱 Š

A 温甜 日錄

1

À

貧南弟子 劉起相 重較

題欽

題端之類禪人刺血書華嚴經後在屬

r|t 作

廣大自在細徵莊嚴以示案生日用見證平等心地 經事統法界之經也直指毗盧果海性德國融無疑

受用耳觀夫佛等衆生等剩土塵毛染淨等劫念往

所以不等者良由吾人自昧於一念之差究竟有天 來三聚等迷悟因果理事等法爾如然居然自在其

瀾之酈所謂情生智隔想變體殊故日奇哉奇哉一 切案生具有如來智慧德相但以妄想顛倒執著而

微塵具含大千經等智人明見剖而出之則利用無 不證得若難妄想執著則自然業智當下現前如一

明耳豈更有他哉是以文殊學之以爲智普賢操之

窮由是概之無論衆生心具不具只在當下眼明不

位之各證五十三人之至提月滿三觀星羅十門行 以爲行善財狹之以發心彌勒帶之而越果四十二

至異類潛行分身散影無非遊刃微塵之利具也由 **詮重重法象火聚刀山之解脫臥棘牛狗之堅持乃** 布圓融事理無礙以極壓毛涉入依正互嚴種種言

學別膚爲紙刺血爲墨點染太虚揮灑金屑豈不重 地春起是則書與不書全經自在見與不見明昧一 如悲夫夜壑藏舟力者員之而不覺覺則透出毗盧 如悲夫夜壑藏舟力者員之而不覺覺則透出毗盧 全彰法界昭昭然毫端眉捷之間物物頭頭而與普 全彰法界昭昭然毫端眉捷之間物物頭頭而與普 全彰法界昭昭然毫端眉捷之間物物頭頭而與普 全彰法界昭昭然電端眉捷之間物物頭頭而與普

題書華嚴法華二經後

Charles way

A see and the A see and and a see a

應得之日矣。

應得之日矣。

應得之日矣。

應得之日矣。

應得之日矣。

應得之日矣。

應得之日矣。

應得之日矣。

一經是非能知本有料理如來家業者耶由是必有此二種法門方爲克家之子也善男子吳大靜手書

刺血書金剛般若經跋

返本而報本者也世之言大孝者能有過於此者手 整點所流源源無盡如海水潛流四天下地諸佛衆 生觀體無二是知衆生四大根本身內骨血皆般若 生觀體無二是知衆生四大根本身內骨血皆般若 生觀體無二是知衆生四大根本身內骨血皆般若 生觀體無二是知衆生四大根本身內骨血皆般若

又

用為成佛根本而此經以金剛名者以智乃佛之所,對之為無明流其實體一而明昧異耳故我世尊出世特為開示此智以法大機小不能領荷故二十年世特為開示此智以法大機小不能領荷故二十年世為為開示此智以法大機小不能領荷故二十年

乃能刺血書此經則予心淡然決釋矣何也以經云 十年終崇梵字漸次可觀而麗僧作孽內自破壞人 狐冠即出家兒為樵兒牧豎矣子來力救其弊辛苦 予題記因感而言日六祖入滅千年曹溪道場化為 溪沙彌方覺刺血書此卷冀終身受持焚香作禮請 諸善极由此觀之即信受書寫亦非淺淺因綠也 且謂佛祖無靈即予亦無以自解也今見沙彌方覺 今愈見其難也經云若有讀誦受持書寫者不於一 者槩以文字目之故知之者希情哉末法正眼難逢 此經得入之第一榜樣也是則此經爲禪宗的訣學 佛二佛三四五佛而種善根已於無量萬億佛所種 破壓劫疑根及見黃梅即能道本來無一物是乃從 印心我六祖大師一聞應無所住而生其心便能順 義深奧文字重複爲不易入殊不知以空爲宗以顧 切象生迷此本智流浪生死其來久矣觀者但以經 斷疑視直心正念爲本原無文字可立故黃梅以此 入大乘初門是知特以金剛名經非假喻也陸手一 證金剛心耳方將以果地覺爲我因心故以般若為

若人以七寶莊嚴恒沙佛土不如受持此經一四句名以彼有為功德終成敗變不若無為之勝益也以此般若為成佛眞種子故佛言若使一人發菩提心此般若為成佛眞種子故佛言若使一人發菩提心人能以般若為心愿予十年辛苦所致又何以修崇人能以般若為心愿予十年辛苦所致又何以修崇有為功德為重而以成變為念乎因有感於此級一四句若人以七寶莊嚴恒沙佛土不如受持此經一四句

題三峰禪人血書法華経

歌三峰比丘刺血書寫此經是特見家書而思歸者 為三峰比丘刺血書寫此經是特見家書而思歸者 那良以幻化空身即法身此經使人速達故鄉耳昔有老 整其委付家業故說此經使人速達故鄉耳昔有老 那良以幻化空身即法身此經使人速達故鄉耳昔有老 雅西書如世之眞子辨嫡父血滴枯骨必見滲入是則 楷乃法身之枯骨乎因贅以偈輕拋故國不知年一 楷乃法身之枯骨乎因贅以偈輕拋故國不知年一

題公全禪人血書法華絕後

竟一大事因緣哉禪人親持所書之經具陳本願請 華嚴大經以爲究竟莊嚴是循窮子既得家業之屬 盡妙好莊嚴皆禪人本有受用之大業如此豈非究 書則披閱庫藏之典記按圖求索是則華藏世界無 海中等同一味莊嚴毗盧法身之果而又發願更書 簽無上心刺血書寫此經則使幻妄身血高入法性 益老人故爲具述本末因緣如此 所作皆真實行殆非妄想獨持者比也今公全職人 皆爲成佛之眞種以其一悟此心從真所流則凡有 不成佛是以天台獨重五種法師受持讀誦書寫者 大似長者委付家業之醫書故云凡有聞法者無 久逝他方今始歸來見父心相體信堪荷家業此經 記將來成佛是爲一代時教究竟之極談譬如窮子 來流展生死直至今日靈山會上方乃悟入各爲受 設此經已下一乘成佛之種而諸聞者迷淪塵點劫 惟我本師和尙遠自大通智勝佛時爲十六王子講

血書梵網經嵌

梵網經者乃我法王應運首創之露布也即其所制

佛精進不退以不可說不可說身命而爲布施剝皮

之整一切衆生所以久沉生死而不能自出者良由 非此我不足以證之然此戒非金剛心又不足以持 緬惟吾人遭此末法去聖時遠苟願出生死證真常 剛心而建立之此我即所謂金剛心實成佛之大本 皆性戒耳故三藏之設從凡至聖所歷諸位皆依金 之創而初學菩薩即上根利智不得不秉此為最初 揭而社之此戒乃裂見網之利器不得不施於最初 持犯之有第迷之而爲幻妄蘊葢情歷所藏不得不 破我爲本我空而業無所繁然破我之具非金剛心 響形聲理不可逭故修行要門無論大小三乘貸以 兄雪浪聽習有年關余於那羅延窟余政悲末法為 地也學人真照以夙習般若緣深自顧出家依吾法 斷斷手難矣諦審佛意既日戒乃自性清淨心又何 著我以我見重故諸菜交作業作故苦即隨之如影 授戒且然深重大願刺舌根血書此經志學命受持 本者希乃爲諸弟子誦於網戒照聞而有感遊哀調 余深概焉因謂吾本師盧舍那佛從初發心以至成

為抵析骨為筆刺血為墨書寫經典積如須彌為重 為抵析骨為筆刺血為墨書寫經典積如須彌為重 為獨之高廣即見聞隨喜發心修學者當如菽栗遍 對破佛所行如佛所願又何患不成佛從此以往生 對依佛所行如佛所願又何患不成佛從此以往生 對成佛所行如佛所願又何患不成佛從此以往生 對於佛所行如佛所願又何患不成佛從此以往生 對於佛所行如佛所願又何患不成佛從此以往生 對於佛所行如佛所願又何患不成佛從此以往生 對於佛所行如佛所願以何患不成佛從此以往生

重刻華嚴壓題辭

地来生無一人而不沉埋此一塵也只須大智慧人一切衆生日用妄想網中種稱光明時時顧現各各日用而不自知所以不知者但夢未破耳今於路傍草莾間猛地一人時跳讓臂大呼順使十方世界六草舞調面時各各相謂歎曰奇哉奇哉不知此中果種震動。同時各各相謂歎曰奇哉奇哉不知此中果自主無礙無所希求竟亦不知誰之力也知恩者富自主無礙無所希求竟亦不知誰之力也知恩者富自宣之

菩提心願文版

不同耳華嚴經云菩薩有十種習氣見佛習氣於 是不同耳華嚴經云菩薩有十種習氣見佛習氣於 是不同耳華嚴經云菩薩有十種習氣見佛習氣於 是不同耳華嚴經云菩薩有十種習氣見佛習氣於 性平等法習氣種種境界差別習氣若諸菩薩安住 性平等法習氣種種境界差別習氣若諸菩薩安住 性平等法習氣種種境界差別習氣若諸菩薩安住

明不淨不休終竟透皮而出此所以毗盧世尊重顧 之則從上三賢十聖皆能轉之而未盡者故從般若 日如是如是惟此而巳豈此外更有別法耶由是魏 淨盡徹底窮源與十方佛祖轉處無別則但印可之 燎之如紅爐片雪如此則日用頭頭遇境遙緣皆大 自熏發日增月盛一旦如大火聚則向之煩惱業習 智炬照之而已竟未一啓講向上事心待其自信自 遠爲法懇誠之心末甞一念稍間老人唯以不思議 於清涼以至海上將二十餘年矣所歷辛苦不可殫 行迅德宗始發跡於滿從法親妙峰師因得事老人 所發十種智氣爲金剛種子以之劫劫生生熏變無 智用是所謂轉染汚業習而爲般若智習矣若轉之 染成淨使其自知本有耳荷能自知其本有智光內 稱施設無非以大般若光明熏蒸無明業習令其轉 年耳提面命朝夕参承乃王困辱萬端逆順千狀種 習氣之厚薄因其病而調伏之惟執勞辛苦三二十 與人亦無法可傳可授但凡有親近者獨觀其染淨 是無因而得是知從上佛祖善知識教人原無實法

大於章海間相值五羊乃出此卷老人展之則見其等方不自貧已靈耳渠以本願請老人於京之大慈壽寺雪夜請益哀泣自叙其志願云云老人爲信筆書此明年春二月老人即以弘法因緣致 聖天子怒此明年春二月老人即以弘法因緣致 聖天子怒此明年春二月老人即以弘法因緣致 聖天子怒

普賢行願品選群

光明奪目也遂鰲之以此

受用手

題安樂行品後

子少讀四教儀見天台大師判五種法師為觀行位 獨有疑焉既見法門之有以持經為行者動則誦法 經有供養者其福過於供佛有毀謗者其罪重於務 德有供養者其福過於供佛有毀謗者其罪重於務 佛此我世尊金口誠言及見持經之法師現在父母 所生肉身即得六根淸淨按六根淸淨當在七信菩 確不退者以永不退墮生死也何持經之法師現在父母 那是知持者不在紙墨文字而在離言妙契佛心佛 之慧命由是相續而不斷者宜其功德殊勝然矣某 人受持此經於安樂行中有所契入故專持之此乃 人受持此經於安樂行中有所契入故專持之此乃 世尊教諸末法持經弟子第一妙行即如來之家法

也從是而入法華三昧恪佛知見固無難矣

題刻藥師經後

豈自外至耶衆生處此夢宅種種希求佛以如夢幻 法門而關治之痴愛重則信佛愈極信至極則自心 之愛可潛消而默化矣衆生始以不信自心之惑如 壽求安樂得安樂皆衆生之痴愛也佛意本欲衆生 痴愛化而為佛知見矣又如置酵於乳而成酥酪必 貪財者而夢金寶生大歡喜致大欲樂且金寶欲樂 楔以毒攻毒故云充以欲對牵後令入佛智則世間 設方便以引攝之即其所愛而誘進之所謂以換出 途溺於愛河佛以廣大慈悲而拔濟之不能順出特 益之實欲離之耳以衆生不信自心是佛故顕倒透 離之分有求而必遂者豈非增益痴愛耶答日非婚 爲根病根不除而欲出生死渡苦海者。那可得乎問 名然佛爲三界醫王善治一切衆生心病故稱醫師 日經云求官位得官位求男女得男女求長壽得長 是則一大藏教乃對症之妙藥而衆生之病以痴愛 經以藥師名者葢依本佛而稱也主聖無名以德彰

广

服之者則心病頓廖而随求必應其藥師之號豈虚人正若長者於四達通衢以妙藥施人但能信受而者豈不頓祛百病獲長壽哉居士劉嶠刻經以施多轉醍醐此經是佛以醍醐甘露之藥施衆生能服之轉醍醐此經是佛以醍醐甘露之藥施衆生能服之

白衣陀羅尼經後跋

稱成旣信自心則觀此經不屬紙墨文字矣

白衣陀羅尼經乃我圓通大士從大悲心中實際流 自衣陀羅尼經乃我圓通大士從大悲心中實際流 有持而不應者亦非一此何以故以我大士依本師 有持而不應者亦非一此何以故以我大士依本師 朝音如來授如幻聞黑聞修金剛三昧現三十二應 數音如來授如幻聞黑聞修金剛三昧現三十二應 數十四無畏功德與十方三界六道衆生同悲仰故 身十四無畏功德與十方三界六道衆生同悲仰故 太東衆生欲求男者誕生福德智慧之男生者皆白 法界衆生欲求男者誕生福德智慧之男生者皆白 太界衆生。此理與別一大士、政事之 一如慈悲現身之士、若非大士現身又何以 求大士而得生此理難窺故信之者希不知大士既 東一切衆生共一悲仰是則大士悲仰之心即衆生

即求者之心也其求者果如大士之心而大士之心亦應未有自心而不應自心者故曰自心取自心非幻成幻法是則所求之男實是求者自心所變現不如成幻法是則所求之男實是求者自心所變現不如是求故不應耳所以求而得智慧福德何也葢尋常是求故不應耳所以求而得智慧福德何也葢尋常是求故不應耳所以求而得智慧福德何也葢尋常是求故不應耳所以求而求之於大士則是原出智生也今不以經慾心求而求之於大士則是原出智善的。

「一日入山焚香作禮乞害此經然我亦從大士耳門一日入山焚香作禮乞害此經然我亦從大士則是原出智一日入山焚香作禮乞害此經然我亦從大士耳門而入三味者第改子寅不能作如是觀故書寫已又而入三味者第改子寅不能作如是觀故書寫已又

跋姜大隱百城煙水卷

從而解說之

身或現率官居士黃門長者比丘僧尼隨類皆入化而歸也又問世何不知殊曰或現帝后妃女國太母殊曰此吾窟中一萬眷屬各於十方世界利生緣畢諸大士自雲中冉冉而下因問此衆龍象何自而來。余嘗讀淸凉傳至無著入金剛窟與文殊茶話間見

不減等珠之賞公富持此以為利生之券他日扁來來輔弼聖化建立三賓者功最居多故能獲此密印殊也姜公別號大隱為慈寧宮侍中其所以荷擔如殊也姜公別號大隱為慈寧宮侍中其所以荷擔如

第中想文殊見之必合符驗也

院則命提順新生死永離又何況彼區區貪瞋癡慢 院者出自毗盧灌頂為法身所演又尊勝中之尊勝 整因之而轉邪此則凡所謂密咒者皆稱尊勝而此 整因之而轉邪此則凡所謂密咒者皆稱尊勝而此 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除促當一心誦我佛 放首楞嚴曰若有衆生欲習難除促當一心誦我佛 放首楞嚴曰若有衆生欲習難除促當一心誦我佛 放首楞嚴曰若有衆生欲習難除促當一心誦我佛 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除促當一心誦我佛 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除促當一心誦我佛 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除促當一心誦我佛 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除促當一心誦我佛 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除促當一心誦我佛 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除過之而為心即者耶 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除過之而為心即者耶 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除過之而為心即者耶 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除過之而為心即者耶 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除過之而為心即者耶 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除過之而為心即者耶 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除過之而為心即者耶 於首楞嚴曰若有衆生欲習難除過之而為心即者耶 於首楞嚴曰。如衆生者以稱然而正性命今一持此

八大人覺經跋

衆生同稟此覺無非大人第無大人以開覺之耳吾 大覺不足以破大夢非破大夢不足以稱大人不唯 乎一切衆生皆證圓覺所以迷悶而不入者,非覺違 之破額少林之面壁以至六傳五派千七百人皆所 佛世尊獨稱大人其靈山一會英傑之士與夫拈花 是則能大覺而後為大人唯大人而後能有大覺以 能覺人者為大人而能奮力勇猛自覺者亦大人也 此大光明藏而沉瞑於長夜之夢從來不覺久矣非 扣而響是知此段因緣非特爾也良以一切衆生寢 說法唯待機而動迫不得已而後應如洪鍾續受隨 豈非千金之子流落窮途,一旦而發思歸之念者耶 作賤人不能得稱爲大人耳上人能傑然屬發此機 頭不能掉臂由此甘受沉淪驅馳苦趣伶跰辛苦答 拒諸能入者要之於此八法不能覺悟故於生死關 稱自覺覺他而爲有力大人者也是皆與人同耳嗟 不發今又因上人而發之其事蓋亦奇矣何也以佛 今吾所書此八大人覺經寶鷹足家音展之即得故 一念之覺而破永夜之夢豈細事哉嗟乎予觀大地

寂之鄉而倚般若之門也鄉消息試時時展之。勿暫忘歸計致慈尊的的於常

ラサ

釋迦觀音志鼓

題普念佛术生淨土圖

海慧單勸十方真實為生死人一心念佛更無別緣引蟲衆生出離苦趣是為最妙法門一生取辦楚僧煩惱造種禪業故無出頭之時佛說西方淨土一門煩惱造種禪業故無出頭之時佛說西方淨土一門

極樂無疑矣 極樂無疑矣

題化城寡緣疏

> 一人一力可措也今觀馮吳二公疏意甚至頭目髓 同心夙願業已久在如來光明藏中所謂綠熟即現 同心夙願業已久在如來光明藏中所謂綠熟即現 今行乞乙層大似執審券以訪同願固知一見而奧 起者皆往昔同盟且謂當來同會也其所施又何計 起者皆往昔同盟且謂當來同會也其所施又何計 起者皆神言與此法量等虚空而福亦量等虚空 學矣

題雲棲大師小像

主人無身以顯力爲身主人無事以利生爲事政身主人無身以顯力爲身主人無事以利生爲事政身 主世八十餘年建立度生事業者過中知其未出世 住世八十餘年建立度生事業者過中知其未出世 出生死者不知其幾何人是則師雖隨綠去來幻化 出生死者不知其幾何人是則師雖隨綠去來幻化 化生死者不知其幾何人是則師雖隨綠去來幻化 不生而法身常住與山川相為悠久又豈可以此色 不生而法身常住與山川相為悠久又豈可以此色 不完散花而奧讚歡也

放生文跃

聖人之教以五常治世仁爲首不殺日仁佛設五戒以不殺第一是知聖人之心以慈爲本經云孝名爲以不殺第一是知聖人之心以慈爲本經云孝名爲以不殺第一是知數於佛性又不止於冤債相尋而已是性若殺生則斷絕佛性又不止於冤債相尋而已是,他之也是為其命而食其內是此之之。其所以之為其命而食其內是非骨內自相吞食。即其所殺之生皆過去多生之父母兄弟妻子六受即其所殺之生皆過去多生之父母兄弟妻子六是,他之因矣豈細事哉刻此書以廣化多人此不獨廣佛之因矣豈細事哉刻此書以廣化多人此不獨廣佛之因矣豈細事哉刻此書以廣化多人此不獨廣情之。實廣佛之心實廣佛之慈悲非世之尋常口語也宜篤大師之心實廣佛之慈悲非世之尋常口語也宜篤

題殺生現報錄

量劫輪週生死無一類而不受生身是則現見諸有佛言一切衆生蠢動含靈皆有佛性又云衆生從無

時而奉行之即奉三世佛法矣 持而奉行之即奉三世佛法矣 持而奉行之即奉三世佛法此是花報果在地獄能來可不懼哉觀此錄即明目前現報人人共所見聞斯則非斷 他慧命殺已親因實殺已身而自速其死也何待未 他慧命殺已親因實殺已身而自速其死也何待未 然可不懼哉觀此錄即佛說此是花報果在地獄能 來可不懼哉觀此錄即佛說此是不知也衆生痴

5#

刻五大師傳題辭

明幢哉子幸從諸師之後獨愧薄劣不能拈一莖草傳法門之盛何其偉繁恭惟我 聖祖開基創業建立三寶崇重法門超越百代而一時名德光揚佛祖之道不減在昔葢千載一時自此而降漸漸寂寥而之道不減在昔葢千載一時自此而降漸漸寂寥而之道不減在昔葢千載一時自此而降漸漸寂寥而之道不減在昔葢千載一時自此而降漸漸寂寥而有也若法門龍象五大師際會一時雖體用不同理事各別其所以扶樹宗教開入天之眼目作長夜之事各別其所以扶樹宗教開入天之眼目作長夜之事各別其所以扶樹宗教開入天之眼目作長夜之事各別其所以扶樹宗教開入天之眼目作長夜之事各別其所以扶樹宗教開入天之眼目作長夜之事各別其所以扶樹宗教開入天之眼目作長夜之間。

俟後之執信史者有所釆焉 第申讚歎願流光不味照耀末世故作三銘二傳以

題法雷遠農卷贈五臺空印法師開化雲中

三途現身異類或師子類伸或象王迴顧將無作有 矣即應緣施設嚴唱齊行節拍成令無非將機就機 木引蔓抽條上中下根花果敷實者不可得而勝數 真執無說而說然而舌亦爲之乾焦心亦爲之適血 以輕出與豈有實法與人哉後之親場者認不真爲 大法雷因之而振頓使寒谷生春萌芽漸發三草二 弄假成真幻化人天顛倒豪傑此甘露門以之而開 萬死一生甘苦同受忉忉三藏廣長舌爲之乾焦咄 壑慈眼視之有不堪其憂者躍然而起影落此中則 悲夫誨者諄諄聽者莫莫且而特爲眞宰將伐全功 明一拳老婆心爲之滴血此我大師不得已而臨蒞 悶悶靈明昭昭業識若昏夜而覆碪嚴亦身而臨毒 身之體虚空演無字之經見之者盲聞之者孽靡不 佛末出世祖未西來一塵未剖大地凝然萬家露去

此何以故良由師吾師心行吾師行知將無而作有

不驚執金剛劍樣涅槃城使諸魔衆盡稽首而歸

命

者聰昏者惶死者生花者實枯者榮不恃不伐不攝

劫外吐青蓮於舌根觀聽於心地直使盲者明塵

春回大地欣看草木皆榮法雷振於雲中甘盛運於

空谷垂靉靆於清凉今也一管灰飛不萌花發將見

解弄假以成真故亦能顕倒豪傑幻化天人望受繁

珠之賞將解長劫之嬰可謂慈父之孝子法王之忠

濁世挺挺青蓮寂寂空山崚崚氷雪滿腔肝胆生鐵 平扼腕而求之者難見其人惟法師澄公者宜其人 慈父孝子能行者謂之法王忠臣親親尊尊此余生 耳醍醐毒藥生死由誰惟此未嘗不涕下也嗟乎吾 竟無尺寸之賞方嬰長劫之獨者此何以故葢亦將 殊之場以師子爲見乃戲遊於師子之窟釀慈雲於 鑄成三藏微言一串穿却與文殊爲友故棲運於文 也公早禮空王不就人為長超諸有嚴淨毗尼翻翻 無作有弄假成真以不知幻化人天以致豪傑顛倒 師之心誰能師之吾師之行孰能行之後師者謂之

人公其不然請聽空中十方諸佛醫欬之音不生不然則但聞其聲不見其形又何稱爲有力大臣苟如是始可報吾師之恩與公把臂同遊於不死

題國朝高盾行即卷層慧菴鑒上人

> 宋歌喜贊歎何幸二百餘年生此末運獲觀先覺廣 大三昧於一毫端頭良夙綠也此卷業已進之秘府 大三昧於一毫端頭良夙綠也此卷業已進之秘府 大三昧於一毫端頭良夙綠也此卷業已進之秘府 表白三太史公過訪談及將欲修國朝高僧傳正博 要白三太史公過訪談及將欲修國朝高僧傳正博 要治三太史公過訪談及將欲修國朝高僧傳正博 要治三太史公過訪談及將欲修國朝高僧傳正博 不社奠較鐵釘飯耳公將歸故山余亦東還窟中不 木札羹較鐵釘飯耳公將歸故山余亦東還窟中不 木札羹較鐵釘飯耳公將歸故山余亦東還窟中不 木札羹較鐵釘飯耳公將歸故山余亦東還窟中不 木札羹較鐵釘飯耳公將歸故山余亦東還窟中不 本札羹較鐵釘飯耳公將歸故山余亦東還窟中不 大人方始不 世披勞為書一過公能於此一言洞見古人方始不 世披勞為書一過公能於此一言洞見古人方始不 世披勞為書一過公能於此一言洞見古人方始不 世披勞為書一過公能於此一言洞見古人方始不

題竹林大師示門人振宗法語後

只是無師以禪宗者乏多聞宗教無正眼此大道所無他乃乏正眼師承為之剖破藩籬所謂不是無禪為隔羅見月上下千百年來學者無能一其趣向此古之師匠竟不能一其指歸即圭山和會宗教猶以宗禪者多毀教習教者多味禪是以禪教話爲兩橛

常憲藤視之不唯當面錯過抑且辜負法恩多矣物、有宗門作略苟無正眼安能出詞吐氣如是之如大有宗門作略苟無正眼安能出詞吐氣如是之雄雄乎可以文字師概目之耶嗟乎學者久墮知見雄雄乎可以文字師概目之耶嗟乎學者久墮知見姓雄乎可以文字師概目之耶嗟乎學者久墮知見以難明也淸涼竹林大師踞華座萬指圍遷善說法以難明也淸涼竹林大師踞華座萬指圍遷善說法

題三山真侍者行脚卷後

歌師有萬里之行。龍意今忽得此故物郎古人云欲離時至之耶不然何以始終見此如出方網三昧彈指髓受之耶不然何以始終見此如出方網三昧彈指體受之耶不然何以始終見此如出方網三昧彈指體予老朽固不堪與諸老把臂共行善當不減三山廈時者行脚事也古人閒垂一言半語如天普蓋似地普擎老人信手拈來於一毫端作大佛事則諸大老似掩耳偷鈴老漢赤免禮蛇添足善侍者網作一定與商東洋大海尤較三山百步否則未免祖顧不了殃及兒孫也

題達觀禪師送三禪人遊方卷後

没行脚事自負其志可嘉既見達觀禪師爪牙已露 一年來行脚僧不少犯此令者幾何其人今某三禪者 至敢弄佛法禪道乎此中利害知之者希嗚呼二百 至敢弄佛法禪道乎此中利害知之者希嗚呼二百 至來行脚僧不少犯此令者幾何其人今某三禪者 是來行脚僧不少犯此令者,以問斷凡垂一言半句 是來行脚僧不少犯此令者,以所以辦草鞋登山

待此卷行脚如請上方劒討賊不知他時後日何以 命提不斷又欲別求知識。余見此卷而笑曰三禪者

題達觀大師祭屬融大和尚文後

李人人如達師者則大通之因地又不必取於墨劫 一滴入海當與之同枯矣豈值生前身後以爲義高于古世諦如此況出世乎古人爲生 更施者如天曹蓋受者如地普擎投機於石火電光 之間而生死情塵迸然雷裂豈偶然哉故其恩深似 一滴入海當與之同枯矣豈值生前身後而已耶子 一滴入海當與之同枯矣豈值生前身後而已耶子 觀達師祭徧老文深有感焉噫且一飯千金莫報以 爲奇事一語窮劫不泯又豈等閒嗚呼徧老度生六 十餘年法施將滿大地至若知恩報恩人間幾幾藉 一前也然其偏老之不朽者賴一語一語之不朽者 是 之前也然其偏老之不朽者賴一語一語之不朽者 是 之前也然其偏老之不朽者賴一語一語之不朽者 是 之前也然其偏老之不朽者賴一語一語之不朽者 是 之前也然其偏老之不朽者賴一語一語之不朽者

佛奴歌跋

墨點存焉觀者知此可謂不辜本有矣

吳年少比丘大川發大心願以一鉢供十萬八千衆

其行最苦是故諸長者居士聞而數喜咸皆讚歎唯 真實甫歌有蕭梁求爲佛家奴之旬葢標其能忘身 見而異之乃盡力奴狀聲爲歌以發之余長歌三疊 見而異之乃盡力奴狀聲爲歌以發之余長歌三疊 見而異之乃盡力奴狀聲爲歌以發之余長歌三疊 自居猶是奴兒婢子呼爲頂墮況種種意想攀緣流 自居猶是奴兒婢子呼爲頂墮況種種意想攀緣流 信其夜主夢爲奴奴夢爲主亦極欲以使奴奴亦無 當其夜主夢爲奴奴夢爲主亦極欲以使奴奴亦無 也不易事唯一奴當心其畫主極欲以使奴奴亦無 當其夜主夢爲奴奴夢爲主亦極欲以使奴奴亦無 當其夜主夢爲奴奴夢爲主亦極欲以使奴奴亦無 立主將爲夢中之主其所供十萬多衆豈亦白晝 之主將爲夢中之如耶噫生死涅槃猶如昨夢此丘 之主將爲夢中之如耶噫生死涅槃猶如昨夢此丘 以此可以滴水供養十方恒沙世界諸佛衆生受用

壽昌語錄題辭

來無量境界也

壽昌老人生平行履惟放身捨命於空山寂寞之濱

讀此語者若作言語話會則有受壽昌若不作言語 者能幾何人至其感悟流涕如空生者又不知能得 話會則有負自己若兩不相負當於未舉以前把鑁 幾何人也認語有云相識滿天下知心能幾人後之 減靈山葛藤當知此話大行如毒皷聲不知中其毒 稱數而不容口至此黃面老子照閱少舒始不資從 吸目動定遂為盡力胡亂一上直使空生繼舜盡淨 於一日被空生觀破遂發數日希有世尊世尊見其 三十餘年而人天大衆曹然畢竟不知所爲何事偶 前一片姿心今觀壽昌鑁頭大以黃面衣鉢此語不 命根動絕而後已故空生感悟切心涕淚悲泣痛哭 衣趺座而坐閒打葛藤如此以爲家常過活若是者 持鉢沿街過巷乞得一搏冷飯歸來飽為後洗鉢收 昔黃面老千在靈山會上領一隊懵懂漢逐日著衣 **莊鼓使聞聲者璽中毒者死而中毒者幾何人哉憶** 墾土地博得滿腔氣息尋常潑撒向人天衆前如攝

> 雲棲得念佛三昧今欲往求文**殊**印證則可倘問南 昔法照察次見萬佛菩薩現形於鉢中不知何以故 文殊乃至果見文殊授以念佛法門照可禪人先從 方法衆不可被前後三三富面瞞却也 乃問當云此五臺文殊化境也遂發足履五臺顧見

之上意須長者揷一莖草老人直謂之不然以無礙 法界遇緣即宗殖處具足但禀明於心又何段外耶 照可禪人初住黃山以華嚴爲業所謂於一塵中入 正定也今從他万起處欲破塵出經將跌茅於西湖

憨山老人夢遊集卷第三十一

頭處薦取始得

鼓可禪人行脚卷

懿山老人夢遊集卷第三十二

福 善

上丰

話柄流落江湖傳者又爲實事悲哉余亦爲此法故

辰怒實出九死幸**爾紐處再甦**蒙恩貶雷陽

日鋒

F

嶺南弟子 劉起相 重較

題跋

題壇經首示智境禪人

盡艱難自萬死一生中來觀吾本師和尚釋迦老子 從上佛祖爲生死大事出現世間靡不大捨身命歷

廣大劫來爲此法故捨頭目體腦不啻恒沙即此翻

出頭猶向雪山凍餓六年以至馬麥金鎗何所不受 處且又末後惹得一場笑具至今流布寰區乃教碧 剛剛博得四十九年粥飯氣息而已猶未見有奇特

盧俗漢子被他一語謂弄刺向黑漆桶中悶絕至死 眼特特西來把作實事賺他神光誤隨一臂及至老

者又不止萬萬也自黃梅夜牛放下腰間石頭拾得

萬萬矣且幸自獵叢跳出滿目羞慚每每向人申說 些子破落索當作奇質豈料被他累主於死者又

平生員墮處即以太虛爲口循吐露一點不出直令

通 tin 編輯

無完人余與從者俱冒毒傷病而廣竟不起境則再 死而復生苟非仗器佛神力加持及自願持之葢萬

子智境如廣作形影及至雷陽瘴癘大作飲者萬萬

以萬曆乙未多日出 帝都胃雪南行至白下攜弟

萬無遺類矣境病稍蹇余即遺歸廬山省乃師且以

為屬案頭蓋抬此卷遂以付之將見古人大死後如 借萬頃湖光千尺瀑布以洗未盡習氣也臨行無以

此消息但非真死者莫可得境當持之於孤峰頂上

囑時萬曆丙申長至月十九夜燈前記於五羊東郭 萬劫千生種來最勝金剛種子也爾其勉旃無忘所 如古人則不但不負老人今日之事抑且不負自己 萬丈嚴前試在措手處定當看荷能眞個大給身命

之
壁壁間

觀楞伽記略科題辭

識其離析經義及親光論至呆以三分斷其全經時 科以分經從古製也肯道安法師以三分科經時人 乃數其雅合蓋經經各有綱宗科乃提綱挈要使觀 若得其要頑庶離言得意而悟入之令捨筌蹄始非 支分節解逞臆斷也後之義學昧於離言之旨各恃 已見駢枝其親以取謗法之愆使學者莫之適從正 已見駢枝其親以取謗法之愆使學者莫之適從正 所謂以多歧亡羊耳楞加以離言說第一義爲宗文 博義幽舊解但科其文而未盡挈其義於通途一貫 之旨未暢使觀者徇文而失義以致修心三觀不得 其門而入雖古今請演流通盡大地而依之造修者 其門而入雖古今請演流通盡大地而依之造修者 其門而入雖古今請演流通盡大地而依之造修者 了然心目冀可忘言得義不以文句為障礙耳然即 了然心目冀可忘言得義不以文句為障礙耳然即 了然心目冀可忘言得義不以文句為障礙耳然即

題金剛經註解後

日沙門德清題於五羊之青門壁里間

其說自取謗法之罪不選矣萬曆戊戌孟夏佛或道

不知不整不得也是則善友知識乃指珠之人無量佛性之在纏如珠之在腹水之在地然雖固有不指

得已而施設因五性而立三乘循利鈍而開頓漸此 未著求其乘順流而歸智海蓋亦難矣是以聖人不 深此其法無順漸悟有易雖由根有利鈍障有厚薄 解渴愛爽然意消離釋處是飲者自知殆非可以向 註特穿鑿之法耳若夫吸滴水而獲清凉除熱腦而 來不味第指示須人悟之在已是則經乃指知之方 固不壞順斷無明離一切相如如不動正若衣珠從 部之一所稱金剛取其能斷耳蓋直指當人佛性堅 八部般若之談循爲創入大乘初步而此經者特八 嗟乎人者無明之地堅固法性之**木益深疏鑿之功** 自信如披襟見珠原自本有不假外求此豈易見哉 爲顧如六祖大師聞應無所住而生其心一語順悟 耳上根利智障薄德厚者一獨便了此悟之易故稱 無增減正循云底之珠本無明昧即中之水源有淺 佛性即般若之真智也且此真智吾人本自具足會 因緣所謂開示悟入佛之知見佛知見者乃衆生之 法門特穿鑿之方耳豈實法哉如來出世爲一大事 本有便悟無生是多劫般若緣熟當機一獨即了然

人吐露也蘇君叔達夙县般若種性生平酷嗜此經與焦太史諸大知識遊自信彌篤得此註本如養至與焦太史諸大知識遊自信彌篤得此註本如養至,實即壽諸梓以廣法施余見數喜合掌而讚曰婆揭東上能以滴水遲滿閻浮潤焦枯而成百物斯特業 拉施之功大矣

書金剛經頌後

在金剛碩十七首蓋余己酉季秋在曹溪竇林爲諸一語即見自心如觀掌果直到不疑之地故從黃梅一語即見自心如觀掌果直到不疑之地故從黃梅巴來單以此經爲心印予向隨波流未達彼岸以不知話頭洛處槩以文字目之故反爲作障礙耳頃於空生嘆希有處猛然劇透始信古人不欺之地故從黃梅是順百月生坐臥中未觀一毛至於種種開示皆墮眉瞬目行住坐臥中未觀一毛至於種種開示皆墮起網若非空生今日看破則終當面錯過矣何况末途柳若非空生今日看破則終當面錯過矣何况末

物不遷論跋

師引擎公不遷偈證之葢推其所見妙契佛義也子問致疑後有省處則信知肇公深悟實相者及閱華子少讀肇論於不遷之旨茫無歸宿每以旋嵐等四

禪之士不入此法則正眼不明探教之徒不避此經

字之師可望崖者是可以肇公爲外道見手書此以 之示衆發揚不遷之旨如白日靈天殊非守教義文 勢其僧有省又僧問法眼不取於相如如不動如 老皆力爭之竟未迥其說予閱正法眼藏佛鑑和尚 示學者則於物不遷義當自信於言外矣 趙州法眼皆禪門老宿將傳佛心印之大老佛鑑推 滄溟晝夜流遂高擊云諸禪德還見如如不動麼然 出海門又落靑山後江河波渺渺淮濟頂悠悠直入 左旋地右轉古往今來經幾偏金鳥飛玉兎走纔方 靜江河鏡注原自不流其或未然不免更爲魗舌天 僧亦有省若也於此見得方知道旋嵐偃嶽本來常 示衆畢僧問趙州如何是不遷義州以兩手作流 道廣引教義以駁之即法門老盾如雲棲遠大師諸 **嘗與友人言之其友殊不許可反以肇公爲一見外** 不取於相見於不動去法眼云日出東方夜落西其 何 水

刻起信直解題辭

唱

刻行時爲初機指點層以爲艱故復用疏義隨文直 以知宗要参禪者非此無以開正眼實性相二宗之 指無遺故法門學者捨此而求悟入是却步而求前 也質首舊疏精詳委悉而長水記亦浩瀚無涯邊識 也質首舊疏精詳委悉而長水記亦浩瀚無涯邊識 也質首舊疏精詳委悉而長水記亦浩瀚無涯邊識

悟之提源死聖凡之要路真修妙門無問於此故多

解實在一貫不假旁引枝蔓而一心風妄迷悟之義

首楞嚴經者乃無上頂法文該三藏教攝五時徹迷

重刻佛頂首楞嚴經版

隨文易會不煩鈎索而直達本源以爲新學之一助 了然畢見如胝白黑其實祖述前意不敢妄越但取

云

刻百法論八識規矩跋

迷一心而為識無明障蔽現前日用而不知自心之 心唯識道理遍該一大藏經而彌勒約爲六百六十 法無不該盡若教若禪無不揭示正修行路學者有 剛五百言而頌止四十八句統收一大時教世出世 說皆自心本有之佛性參禪者抱持妄想盲修賭煉 善惡樞機若親教者展卷則見文字遮障而不知所 百法八藏乃相宗指南爲入大乘之門也以佛說惟 於此而甘爲愚蒙可不悲哉此論古今解者多引識 志不費期月之功而涌徹無遺嗟無志者不能潛心 而竟不達生滅根源是皆不知此論之過也然論約 八句可謂至簡至要乃法界之綱維也以一切衆生 而天親豹爲百法識論百卷三藏法師約爲頌四十 論本文初心難入且不便於俗諦故予取其義而變

其文以便初機使其易入文似關而義實具是亦隨

順說法非敢妄損古德成言以取謗法之愆也

以一心爲宗故日識心達本號爲沙門以斷慾出塵 支斷以酪爲教相以醍醐出於乳酪而無上佛果皆 爲用故曰維懲寂靜最爲第一又日愛慾斷者如四 此經乃吾佛世尊初成正覺所轉根本法輪也其旨 書四十二章經題辭

源今將離苦得樂故以斷然爲先世出世間修行之 門循望洋也是以吾佛出世最初說此難欲法門是 苦得至樂手孔子曰人有欲焉得剛不剛則於此法 而正性命頭嗅於此其來久矣然性與欲若微塵泥 要無外乎此故為根本法輪也有子日孝弟也者其 本於真妄一心也良由心為法界之本欲為衆苦之 團耳苟非雄猛丈夫以金剛心而割斷之可以出大 順覺性而爲復性之本耶嗟乎一切衆生皆以經慾 爲戒孝順三寶父母師僧孝順至道之法豈非以隨 爲仁之本數且順親爲孝敬長爲弟吾佛亦日孝名 佛道有志於宪明此心者捨此而言行是猶却步而 **稻痛處劑錐耳故經中以此再三叮嚀致意焉凡學**

求前出

題十六妙觀後

豈中下根人所能哉嗟乎末法人多妄誕但縱口耳 之徑路古今造修而取證驗者不可勝數或者桑以 土令夫人自擇隨願往生夫人獨愛西方極樂世界 方愈病者良況法王親垂證驗之法門韋提已效之 以資談所雖上上根人何益耶語日葵不必扁鵲之 爲中下根設非也佛以一光觀照十方佛土了然目 求佛哀救故佛親詣幽宮放眉間一光遍照十方佛 十六妙觀始因韋提希夫人為逆子阿闍世王所苦 前豈中下根人之境界且一生顧脫無量劫之生死 是以世尊特為說此十六妙觀以為往生之資但得 耶門人某謂益老人特書此頌以爲淨業之資將期 又妄談般若輕欺法門甘心泥犁而不省者豈不悲 夜聽想於五欲場中曾無一念回光返照於自心且 妙行修行捨此而別求玄妙非愚即在實是自作確 觀成就必得如願是故淨土一門最爲超脫生死

門別求向上則佛豈誤人而永明大師又豈欺人耶實行實證庶不負此生出家之行脚事耳若捨此法

題諸祖道影後

諸祖乃傳佛心印之宗師也意皆世尊說法靈山常 等遂傳心印為教外別傳之旨是為禪宗二十八代 等遂傳心印為教外別傳之旨是為禪宗二十八代 等遂傳心印為教外別傳之旨是為禪宗二十八代 等遂傳心印為教外別傳之旨是為禪宗二十八代 等遂傳心印為教外別傳之旨是為禪宗二十八代 等遂傳心印為教外別傳之旨是為禪宗二十八代 原以分五宗由梁唐主宋元得一千八百餘人皆世 原以分五宗由梁唐主宋元得一千八百餘人皆世 原以分五宗由梁唐主宋元得一千八百餘人皆世 歷代諸祖道影新安高士丁雲鵬者一冊之妙不誠 整代諸祖道影新安高士丁雲鵬者一青之妙不誠 重文元光重南撤雪儀部金簡居士請歸湖東觀祭備 兵吳公生白一日過訪隨喜見而歎日此眞光明幢 兵吳公生白一日過訪隨喜見而歎日此眞光明幢

為案諮離略傳各為贊以致公將為家傳心印也大悟予想公夙種般若深根悟心不在裴丞相後故後可觀高僧何在檗呼曰裴休休應諾不覺諤然遂後可觀高僧何在檗呼曰裴休休應諾不覺諤然遂後可觀高僧何在檗呼曰裴休休應諾不覺諤然遂

等可多人及多丁去惟女以文下云木或笔号! 題所書佛心才禪師坐禪儀後

深度 一般數十年來空受了許多起早睡晚不會博得一 一般數十年來空受了許多起早睡晚不會博得一 一般數十年來空受了許多起早睡晚不會博得一 一般數十年來空受了許多起早睡晚不會博得一 一般數十年來空受了許多起早睡晚不會博得一 一般數十年來空受了許多起早睡晚不會博得一 一般數十年來空受了許多起早睡晚不會博得一 一般數十年來空受了許多起早睡晚不會博得一 一般數十年來空受了許多起早睡晚不會博得一 一般數十年來空受了許多起早睡晚不會博得一

破魔軍出生死一道符驗耶快参快参 港惠依舊還是一老骨董也具出世志正好放下心 老惠依舊還是一老骨董也具出世志正好放下心

題實責禪人語書七佛偈後

者覺來極恍憶遂乘興書此乃學夢中人也会在夢中觀其用筆之妙運動之勢非凡情可想象日書法致不爾字始於蟲文鳥跡原非有意求好也

又

不獨入書法亦可入佛法夫實實裝演卷成見有餘字以此印心則諸法皆然即此而推水月鏡像空華學以此印心則諸法皆然即此而推水月鏡像空華學以有思惟心不清淨見求入諸法妙門難矣自無受以有思惟心不清淨見求入諸法妙門難矣自無受以有思惟心不清淨見求入諸法妙門難矣自無受以有思惟心不清淨見求入諸法妙門難矣自無受以有思惟心不清淨見求入諸法妙門難矣自無受以有思惟心不清淨見求入諸法妙門難矣自無受以有思惟心不清淨見求入諸法妙門難矣自無受

叉

地復作書尾

不親教旨之輩爲秦鏡云不親教旨之輩爲秦鏡云不親教旨之輩爲秦鏡云以曉近日参禪者懷增上慢不知鑑譯來源今於護法錄中見宋公此跋足爲禪不親教旨之輩爲秦鏡云

丁右武大多浮海四詩版

間之古人有言曰兕虎不能撓其神獵士之勇也蛟龍不能動其色漁災之勇也死生無變於已產入之龍不能動其色漁災之勇也死生無變於已達入之東也死生無變於已濟人之間以在武剛腸直烈雄才大略稱知已余觀右武富百以在武尉諸豎子游起而課日舟覆矣公曰且住且住整語詩諸豎子游提而課日舟覆矣公曰且住且住整語詩諸豎子游提乃公詩噫此豈剛腸直烈雄才大大笑日豎子幾惧乃公詩噫此豈剛腸直烈雄才大大笑日豎子幾惧乃公詩噫此豈剛腸直烈雄才大大。一人表詩成頃四詩剛成而舟膠於沙遂得無覆公乃大笑日豎子幾惧乃公詩噫此豈剛腸直烈雄才大大。一人表詩成頃四詩剛成而舟膠於沙遂得無覆公乃大笑日豎子幾惧乃公詩噫此豈剛腸直烈雄才大大。

爲右武書七佛偈題後

丈夫乘般若鋒執金剛燄者也右武居士賦性如此火聚一切死生禍患情塵燎然不可撄觸是稱雄猛七條偈乃從上佛祖授受心印也古人悟此者如大

以法爲娛偶索書遂以此狀其本色。是非多生習此法門乎余同難行間相與旦夕遊戲

得包公視書心經跋

李詢之父老云昔包公治端草貴硯之獎偶得一美
學詢之父老云昔包公治端草貴硯之獎偶得一美
各攜之歸過羚羊峽口風波大作公云吾生平無愧
心之事無虐民之政何以有此因視其硯云豈山靈
心之事無虐民之政何以有此因視其硯云豈山靈
於水上為漁人網得之自爾光怪不復見羅生持此
於水上為漁人網得之自爾光怪不復見羅生持此
於水上為漁人網得之自爾光怪不復見羅生持此
於水上為漁人網得之自爾光怪不復見羅生持此
於水上為漁人網得之自爾光怪不復見羅生持此
於水上為漁人網得之自爾光怪不復見羅生持此
不朽者宜矣因試驗遂善心經一卷以付羅生

題東坡觀音贊

苦樂現故衆生之苦樂以不受者受之則知苦樂者常然苦樂乃佛性之變也聖凡泯矣斯則佛性隨常然苦樂乃佛性之變也聖凡又苦樂之聚也以佛曹溪云佛性無常紫栢跋東坡觀音贊亦云苦樂無

3000

題鬼子母卷

愛力極處擬心順歇變湯爐炭當下消滅不捨一絲如何於他絕無慈悲一切母子本同一體若能等觀凝心早止若非如來拔其凝根直至窮劫若能等觀凝心早止若非如來拔其凝根直至窮劫

書元旦大雪歌跋

之下也自予放嶺外二十年中每一思之順破炎蒸 而來救除隧道而入入門相見其樂融融如在黃泉 開門則雪堵矣急撥火取燈相視而嘻將謂活埋適 開門則雪堵矣急撥火取燈相視而嘻將謂活埋適 不來救除隧道而入入門相見其樂融融如在黃泉 開門則雪堵矣急撥火取燈相視而嘻將謂活埋適 在公指五乳以棲之公乃徹師之的骨孫公視予如若爾子每一見公即如對徹師於雪窖時也天啓改若爾子每一見公即如對徹師於雪窖時也天啓改充,其一十餘年未見此境故感而爲之歌即以書似五公主十餘年未見此境故感而爲之歌即以書似五公主,於是大雪三尺萬山連凍不減窖中予自別五臺藍不忘徹師相與死生之際心今珏世黃龍之家聲。 能體現前事事皆從乃獨忍凍餓中來則何熟惱之不清。何道業之不成辦哉諺語有之創業非難守能體現前事事皆從乃獨忍凍餓中來則何熟惱之不清。何道業之不成辦哉諺語有之創業非難守。 古我本師之通身毛孔滴血也審此又能甘心虚度 此生乎然因寫雪詩而及此者大似因漁父而得見 此生乎然因寫雪詩而及此者大似因漁父而得見 大海波濤也公其志之天啓元年立春日

題從軍詩後

於此氣使然也寇公居之未久至今父老侈談昔東處也形家稱爲盡龍改古之忠臣義士被謫者多在雷陽正當南極東坡題日萬山第一所謂水窮山盡

厦境實耳紫垣君侯出册,命書之聊書之以供**覆結** 融有不自知其然者由是亦知古人之詩妙在於情 此詩傳之海內智者皆以禪目之是足以食心境混 不見通賜之妙故於文章詞賦不能盡其造化之微 萬物皆相見鬱爲炎熱鬯爲文明人但見景物之變 氣亦不與天地準如乾之純陽變而爲難離火方也 年矣頃亦爲 弁發一笑 祖之奧恭實有資於是也向不求工於詩自從軍來 余初至時遭歲厲遂於此中註楞伽經自謂深窺佛 訪覺範故事則皆然矣天南風物迥異中渊四時之 主於城西古寺坡公亭中士子爭談坡公如昨日及 赦之以其弟子德錄戍於此尋即放還及某二百餘 有亭山川之勝景物依然然僧來戌者昔宋之大慧 獨我始祖南洲沿禪師爲護 徙機陽覺範戍珠厓噫二老去余五百年矣今余蒙 坡謫儋耳子由亦遷至而西湖遺事寇公有祠蘇公 恩遣至此葢亦上下干載奇事惟我聖朝僧戍者 國脫釐養罪而至此豈無謂哉余至 建文駕獲罪 成組

題十二首臥病詩後

沙門從戎告亦有之如大慧禪師戍梅陽冠巾說法 寂音尊者戍崖州笺註楞嚴二大老以如幻三昧處 寂音尊者戍崖州笺註楞嚴二大老以如幻三昧處 思難如遊戲予少年驅鳥鳥時即知其事想見其人不意子年五十時亦遭此難蒙 恩賜謫當陽其地 茶在二老之間自慚非其人也然恒思其風致初至 及所即註楞伽葢有感焉所寓之時與境未審較昔何如而以僧體慧命爲懷一念保持兢兢弗忘自謂 整着子之想二老乎嗟子老矣書貽侍者廣益持此 化若子之想二老乎嗟子老矣書貽侍者廣益持此 化岩子之根二老乎嗟子老矣書貽侍者廣益持此 化岩子之根二老乎嗟子老矣書貽侍者廣益持此 化岩子之根二老乎嗟子老矣書貽侍者廣益持此 化岩子之根二老乎嗟子老矣書貽侍者廣益持此 化岩子之根二老乎嗟子老矣書貽侍者廣益持此 化岩子之根二老乎嗟子老矣書貽侍者廣益持此 化岩子之根二老乎嗟子老矣書貽侍者廣益持此 化岩子

六詠詩跋

之不離一心若迷此心則有生死無常之苦若悟此 死者此一大藏經佛祖所傳心印蓋不出此六法總 苦本無常則性自空空則我本無我無我則誰當生 苦本無常則性自空空則我本無我無我則誰當生

書懷李公詩後

今解脫之終一期周圓平等無二所謂東方入定西齊家喜重修祖庭翻然一新禪堂乃六祖大師說法曹溪喜重修祖庭翻然一新禪堂乃六祖大師說法曹溪喜重修祖庭翻然一新禪堂乃六祖大師說法曹溪喜重修祖庭翻然一新禪堂乃六祖大師說法曹溪喜重修祖庭翻然一新禪堂乃六祖大師說法曹溪喜重修祖庭翻然一新禪堂乃六祖大師說法曹溪喜重修祖庭翻然一新禪堂乃六祖大師說法

非文字所能述居士其能得此乎 非文字所能述居士其能得此乎

豊非婆心哉若以詩字觀之則辜恩多矣時癸亥冬 以書來省因督攝未完時老人以足疾舉痛且苦於 以書來省因督攝未完時老人以足疾舉痛且苦於 以書來省因督攝未完時老人以足疾舉痛且苦於 以書來省因督攝未完時老人以足疾舉痛且苦於 以書來省因督攝未完時老人以足疾舉痛且苦於 以書來省因督攝未完時老人以足疾學痛見苦於 以書來省因督攝未完時老人以足疾學痛見苦於

紫栢老人觀病偈飯

十月朔日

紫稻老人居常以無性義示人如弄丸之手觀者莫

某偶於篋中檢出此素卷余乘與捉筆其論適在案

之圍者兩旬當己酉寒露降霜之候清夜興發侍者

數行下手澤依然實之當作光明種子也格字峨嵋海默禪人持觀病傷予見之不覺潸然泣格字峨嵋海默禪人持觀病傷予見之不覺潸然泣格子嵯與時違未遂振起之願此老人生平之所苦情乎道與時違未遂振起之願此老人生平之所苦

書范蠡論後

溪之十年葢嘗一龍一蛇矣唯不免一災時有匡人 雞問為蛇麟一出必見災於廣人又何怪哉余居曹 解以為蛇麟一出必見災於廣人又何怪哉余居曹 解以為蛇麟一出必見災於廣人又何怪哉余居曹 解以為蛇麟一出必見災於廣人又何怪哉余居曹 解以為蛇麟一出必見災於廣人又何怪哉余居曹 解以為蛇麟一出必見災於廣人又何怪哉余居曹 解以為蛇麟一出必見災於廣人又何怪哉余居曹 子孫世世享之可謂不虐此會良緣矣故併記之

叉

知乃公能與憨山老人眉毛斯結即以此善根福及

誦習以結法喜之緣且以此紙傳之子孫使後世亦

坡將行予乃爲書認誦法華經歌一首以貽之令其

木舌公庭之事了然如揭日月此緣豈淺淺哉今事

頭逐書之併藏其意如此

時也

事者自愧福昭業重至老暌携惜兄耳順之年竟成一八百餘年經法迴邁前修而辭翰拉場亦稱二妙我明及登座說法迴邁前修而辭翰拉場亦稱二妙我明及發座說法迴邁前修而辭翰拉場亦稱二妙我明上百餘年經太之畯指不再屈此子生平心服而敬

歎嗚呼其人往矣手澤如生視此端若寂光覿面也嶽非石禪人携此卷來予一見之不覺興悲三復長千古嗟余荷延七十無補法門偷生何益予隱居南

題筆乘顧寳幢居士事後

打木魚念佛爾聞殺性自不悟乃責我耶少年即折 **新出家雲谷先師當代法眼也住棲霞與居士往來** 終夜打驚回多少夢中人子年十九依長干四林 岩才情敏捷中年一旦盡東所習遂長齊繡佛前構 乘所載也余翻年問實幢居士初爲諸生時氣甚豪 霜風男兒有志投踪跡瓦鉢依稀在手中此焦氏筆 特密即乘中所云名僧者師爲予談此事因問居士 刀杖改心為善一時屠兒同心者衆士日我抱木魚 少年每聞魚聲即起宰殺一日遲責其妻妻日道人 更擊大木魚高發念佛居士家近市多屠者有一惡 不見面親知杜絕往來居然一深山頭陀也每夜五 破香火同翻野寺春雲裏青山古槍養枝柯如屋蔽 被變會爲授記人草衣隨處屬閒身十年朋舊塵勞 花新酒滿瓢香時人若訪麗居士萬樹雲羅護草堂 竹帛功難朽也是空添眼上花藤葉青莎稻體長茶 門學種瓜雪屋寒苗有歲華黃金過斗永須誇若言 何如人師云今時靡公也一日偶與同僚閉行松園 一小樓獨坐其上唯小董奉香花淨水家人女子絕 祖

筆乘所載皆余目擊其事也居士有子皆諸生素不 出於東而沒於西是果沒乎果不沒乎吾之生死亦 士笑曰汝輩將謂我生耶死耶而獨不觀於日乎日 淨土豈不念及兒孫輩作度脫乎何無一言相屬居 信佛至是乃涕泣牀前叩首而請曰父即超生死居 報云滿宅聞蓮花香衆皆驚喜居士恬然無異心此 室馬及臨終時與先師同數名僧相對念佛數畫夜 **阎是也拈筆書此鄉筆端然而與此余所觀記乘不** 懸西方境於室中余隨眾中正作佛事時居士內人 作西方淨土境將以資觀行耳自後因先師而得入 未知所以然既而余問雲谷先師師云此居士觀此 鮮返照同光赭如蜜錯忽悟此境始非人世也而個 體劑動懇倒不可名言及觀塔殿麵義入雲五色相 其入寺殿廊之掖門禮如來舍利塔也余竊觀之五 幢居士也余欲作禮而懼焉乃隨而視其所之則見 世也余驚喜日此何人斯若是之都也識者日此實 空超然塵裘及近而觀之其目不瞬若無意於人間 望見一道者入山門貌荷古而雅甚閒閒如孤鶴翔

及此一日偶展乘簡見此因緣遂感而更筆之且以

告知言者

題南阜居士書萬法歸

從上佛祖原無憲法與人就向衆生妄想夢中一椎 授界了不可得若於不可得處措心亦是夢事由走 競之豈有一法可當情耶所以道不見一法即如來 此則名爲觀自在故云離相離名不墮諸數若喚作 一則鹽之又墮矣南皐居士酒符此道受用自在基 已有年切念知音者希特拈古人此則公案往往零 以示人欲人自知落處觀者若向居士未舉以前快 便薦取猶在半途若更向萬法一法上團圖大似褒 使薦取猶在半途若更向萬法一法上團圖大似褒 是門蓋已習熟且道此則公案與維摩默然處是同 法門蓋已習熟且道此則公案與維摩默然處是同 是別多

題圓覺頭

班春調予於五羊之青門問西來大意予令無屏胸鄉太史公世講陽明之學其子子胤得家傳衣蘇癸

a state and and he was a se a se a

中宿習知見默坐七日乃爲愛藥子胤一聞順契忘中宿習知見默坐七日乃爲愛藥子胤一聞順契忘中宿習知見默坐七日乃爲愛藥子胤一聞順契忘中宿習知見默坐七日乃爲愛藥子胤一聞順契忘中宿習知見默坐七日乃爲愛藥子胤一聞順契忘中宿習知見默坐七日乃爲愛藥子胤一聞順契忘中宿習知見默坐七日乃爲愛藥子胤一聞順契忘

題幻予本公塔銘後

> 命必見老朽於除夜篝燈書此語也 寒嚴凍餓有誰知絕後重甦賴阿師今日五蜂窺塔 寒嚴凍餓有誰知絕後重甦賴阿師今日五蜂窺塔

廬山金竹坪千佛寺接待題辭

我三昧者是放親近隨喜者無不觀感而心化心每歲食指數千計公擔然無懷不以四事為已憂不專心以募十方風聲感召歲計亦未嘗少欽此又深得否佛隨緣之至教當此末法諸方建立其人或指難再風也老人適來隨喜讚莫能窮且見諸行者行乞再風也老人適來隨喜讚莫能窮且見諸行者行乞壽來絲毫不味因果不負擅越信心諦觀諸方幹盡歸來絲毫不味因果不負擅越信心諦觀諸方幹盡歸來終毫不味因果不負擅越信心諦觀諸方幹盡事此以告諸檀越至若四事供養七寶布施如須彌書此以告諸檀越至若四事供養七寶布施如須彌書此以告諸檀越至若四事供養七寶布施如須彌

題臺山竹林師卷後

殊不知方網三昧東方入定西方起臺山入定匡山港八島入息未嘗與這老漢絲毫相隔今忽見此卷竹林島入息未嘗與這老漢絲毫相隔今忽見此卷竹林島入息未嘗與這老漢絲毫相隔今忽見此卷竹林餘年及老人業遷炎荒巳二十餘年雖萬里相懸出

人依前婦養學人持此日用一切處不許汚却掃柄起正是這老漢家常茶飯且道竹林來也好著爲諸

<u> 題壁光童子沈大裕傳後</u> 始是知恩報恩

衆生本有佛性名般若具大光明常然不昧良由無 始無明故味而不覺無明深厚故常寢生死而不自 知所以菩薩修行但以智慧光照破無明即爲出生 知所以菩薩修行但以智慧光照破無明即爲出生 知所以菩薩修行但以智慧光照破無明即爲出生 是返轉般若中來發而爲忠爲孝性使然也以至死 生不見去來之相者常光然也觀沈童子大番出世 是返轉般若爲生死根豈不爲童子所笑乎本以見 是返轉般若爲生死根豈不爲童子所笑乎本以見 是返轉般若爲生死根豈不爲童子所笑乎本以見 是返轉般若爲生死根豈不爲童子所笑乎本以見 是返轉般若爲生死根豈不爲童子所笑乎本以見 是返轉般若爲生死根豈不爲童子所笑乎本以見 學出裡也童子有閱定發一噱 。根 也故曰若有能信此經者已於無量億佛所深種善 生迷之爲生死根本發爲妄想歷勞性同而相異若 斯葢心光流溢也夫般若名智慧乃一切聖凡均賦 欽轉塵勞妄想而爲神通妙用非仗般若勝力不能 無軟暖氣此亦丈夫所難者撫卷三復喟然而數日 屬題予觀其手澤端嚴精楷筆意師古纖毫不苟絕 聲念佛連日夜安然而逝余被放嶺外康君弟季終 如蓮花中人晚年剌血書此經一卷臨終命學家高 如己于所分家資以萬計皆悉捨爲福田歸心淨土 澹泊不事鉛飾康母老年素佛益謹禮選觀大師安 而同稟者諸佛證之爲金剛心地現爲聊通妙用衆 與余爲方外交頃入粤季修走書以安人所書此經 人從事驚素喜捨王太夫人命司馬公兄弟親安人 媚居廿年敬順如一日天生篤孝雖產富賣之室性 王太夫人自育之幼延女師智詩書工翰墨事康母 王司馬公元美之甥也公之姊適張氏生安人早逝 此經乃華亭康孟修妻張氏安人刺血所書者安人 由是而知安人生平住世絕如蓮華處派泥而不

題朱太史修南潯報國寺疏後

細白過而不問無唱導者寺沙彌某發願重修奮脈一臂以堅衆志朱太史爲文以鬯之寺僧持過徑山一臂以堅衆志朱太史爲文以鬯之寺僧持過徑山一所以有龍神守之弟子世之推原其始皆衆施斯則所成以有龍神守之弟子世之推原其始皆衆施如沙彌之捨身世惡而重輕者乎經云佛利堅固金如沙彌之捨身世惡而重輕者乎經云佛利堅固金如沙彌之捨身世惡而重輕者乎經云佛利堅固金如沙彌之捨身世惡而重輕者乎經云佛利堅固金如沙彌之捨身世惡而重輕者乎經云佛利堅固金如沙彌之捨身世惡而重輕者乎經云佛利堅固金如沙彌之捨身世惡而重輕者乎經云佛利堅固金如沙彌之論身世惡而重輕者乎經云佛利堅固金

然蓋願力所持當與法界等矣

題盂蘭盆真慈達孝卷

利立成當若天帝之站一莖草即是沙彌現千手眼存誠為法眼子知達人先唱則衆起而響應觀此金子孫伯什也況福量如空手公云流塚賴佛寺以久地則後千百年功德不朽賴沙彌一臂以守之尤勝世守不朽之業也明哲君子能捨不堅之財置堅固

題華山隆昌寺銅殿二碑文後

业

是一毛端頭現實王利語不信數三災彌論行業港 所有其莊嚴妙麗殿堂廣博予以業力遷訛未獲 所為為阻遂置於金陵之華山蓋賴 聖母 聖上洪慈為布金複越得與三山並緣 感。聖母 聖上洪慈為布金複越得與三山並緣 於為於無太史黃祠部二宰官碑文毫端三昧具 亦希有其莊嚴妙麗殿堂廣博予以業力遷訛未獲 亦希有其莊嚴妙麗殿堂廣博予以業力遷訛未獲 亦希有其莊嚴妙麗殿堂廣博予以業力遷訛未獲 於無太史黃祠部二宰官碑文毫端三昧具

甲遼陽將士文題辭

神相感於形態之外**固非世諦恒情也故日志士仁 屬為引幻人三復而數日此古今豪傑忠義之土精** 如過訪語及時事及出和張太史串遼陽將士文且

戲竭忠効死以捍社稷端有望於今日也豊直為文 之上也將見豪傑之士由此一鼓而興起者竦動義 草木同腐朽雌生不生何益哉苟能守志忘形形忘 人無求主以害仁有殺身以成仁仁者何也即此心 之文心血迸遲慷慨悲歌激烈之氣蕭蕭如在易水 晦者心所謂求仁得仁雖死可無遺憾矣予讀太史 死得其所則能與一時仁人君子之感不奪者志不 則國爲身以身殉天下則天下爲身所以忠義之氣 而心存當與日月爭光矣此古忠臣義士以身殉國 之性真也光明廣大終古常然若認假而失真則與

贊

然燈古佛贊有引

髮拖泥持青蓮花而作供養得蒙授記遂證菩提 然燈古佛釋迦之師也往昔有緣無心而遇因布

今略光像欽渴翹仰焚香作禮以偈贊日

而已裁

十方鎮靜其心如空靡所不容有扣之者響若洪鐘 惟此智憶光明朗耀秉法王令佩實相印磐石晏安 萬象斯鑒滿月寒空衆星齊現明所不明照其不照 稽首然燈吾師之師妙用無極故我歸依白日麗天

界之封疆也吳門之華山封疆之一隅也時公爲居

士遂毅然棄妻子薙髮爲弟子以身殉佛土竟保全

亦以之予讀傳公傳深有感焉若夫伽藍所在乃法

於世以丈夫稱者古今不多見豈獨方內然哉方外

歷觀古豪傑之士以一身殉國家之急卒以忠義表

題龍樹庵主濟川傳公傳後

所難也語曰夫惟不居是以不去公實有焉 以棄去豈非丈夫之事哉若夫功成而不居又古之

路山老人夢遊集卷第三十二

憨山老人夢遊集卷第三十三

FF

通

畑

嶺南弟子

劉起相

重較

侍

者

鬸

善

日錄

- 480 -

體如空無處不容牆壁瓦礫達之者通秋水澄澄

即此苦穢驅便成極樂國始知日月中無不極樂者

持花作供賣手清淨無上菩提當蒙授記開家立珠 其容遙寂恬然凝謐瞻之仰之諸障頓息綠會而 不容思議心心相印光光互融慧命無量功德無窮 無心而得紺燮滿頭青蓮一葉布髮拖泥志誠 歸 遇 m.

貝葉佛母贊有引

嶺海觀察海門周公以視鹺至公富代播紳中具 **粤東爲法道源流達摩航海而來六租應議而出** 古人獨負而今人絕分耶固在導之者何如耳故 **益**喇刺臂而裹海眼跃陀忘形而挾楞伽皆首出 以佛爲事仲子請越之高士蔣不任寫此像余數 仙城初開法運自爾以來寥寥千載豈出彼沒此 萬諸子畢集大爲發揚此事諸子各發無上道心 正法眼人也與余以法相親每談必以第一義示 日不是無禪只是無師斯言有味哉余蒙 喜稽首爲贊日 李子乃日向不知佛今也知心旣心即是佛吾當 人爲事仲春十之三日同查汝定過朱氏草堂劉 恩靈

> 作獅子吼碧眼鬍腮維摩病骨漏逗形骸分明眉目 朝霞燦燦景落波心光浮素練識之不見見之不識 咦百花深處鷓鴣唬一 醫目空華太虚鳥跡貝葉無文法身非有萬壑松聲 聲叫破春山綠

西方三聖贊

偏入有情身而作生死字,辟如日月光無心而成照 稽首寂光主無量壽大師能以寂滅心現形十方界 苦樂不自釋適然念我師以師慈力光先入衆生心 飢飽各適時不以乳爲病我觀世閒人病痛必呼母 蒙光照燭者無不遂其生又如慈乳母能達嬰兒心 獲湯及爐炭偶成八德水皆以自心爲轉變一念中· 相比而化物物無不化者刀山幷劍樹忽變作實林 故能一照閒必出生死苦況復有大勢而復得大悲 以母爲自心不呼不自解是故三有中凡在有情者 是故念我師必若子憶母子母相憶時無不相見者 如酵入乳酪醍醐不外求何況荊棘林不爲清淨土 念極諸想滅身心頓脫空寂光忽現前照用一時發

化佛贊

行一味行方便。
一味行方便
一味行方便
一味行方便
一味行方便
一味行方便

雪山苦行佛贊

深度更深淡不知那個是知音但得相逢心願足一朝餓得眼睛華錯把明珠換魚月渾身惹得是非一朝餓得眼睛華錯把明珠換魚月渾身惹得是非上朝餓得眼睛華錯把明珠換魚月運身惹得是非

7

周折肝腸瀝盡空館舌無限春光百鳥啼杜鶴叫徹一朝灩地睹明星從前妄想都休歇便欲挨身入鬧些滿目風塵徒整蹙返惹時人話短長誰知弄巧翻藍滿目風塵徒整蹙返惹時人話短長誰知弄巧翻一朝灩地略明星從前妄想都休歇便欲挨身入鬧

叉

但莫思量自然法爾類之難比夢想不到誰能議擬若欲求之是非鋒起,身墮雪濤心寒體水內外洞然又何彼此思之不及

又

肯拋家輕失業幸賴明星換出頭免教笑折傍人舌骨如柴心似雪念如冰面似鐵不是剛腸疾惡人怎

Z.

放下時從前妄想都休歇都休歇但看幾點疎星一世念已枯諸綠藍撇千尺寒寫萬年冰雪一片身心

叉

輪明月

叉

孫臥荒草

端坐苦思惟不知竟爲誰只待明星上當頭下一椎 拋擲金輪王如弃捨殘涕埋身雲山中絕無一毫事

空山血

何似當初未醒時皎皎月挂珊 瑚 枝

5

舍那如來法身贊有引

焚香稽首以偈聲曰 出一一塵中一切佛則知其經爲雜華無疑矣余 加被者決不能至此然豈麗浮想像而可得耶因 見之歡喜踊躍而致日此非蒙如來甚微細智而 字幾百行其後密細緻又過於身眞有不可得而 思議者焉以色古而不可讀侍者諦視於左臂辨 則計字二百二十行有奇其圓光邊約二寸圍則 分明行如遊絲飄如散變其身當胸闊一尺二寸 上圓光通書華嚴經一部字如鍼鋒芥孔而點畫 持舍那如來畫像一幅高三尺許偏身衣紋并頂 余寓旅泊菴中爲諸白衣談楞嚴適門人王安舜

> 生普入佛子信心住 是故我贊佛子德廣大如空不可量我顧法界請求 轉攝化廣無邊見聞隨喜禮念閒彈指即能成正覺 圓滿大法界全遇佛子信力持以此信力作佛事 出此經令我順入華藏海佛心既即衆生心我入即 是衆生心與如來無二無別互相入如是微妙淨功 見佛以法爲身法身本不離衆生故從微細想中現 同衆生入我身與佛及衆生互相攝入如珠網如此 能見善哉佛子智力雄一見即生眞實信剖破後塵 德久墮沉昏諸暗冥譬如微塵合大經荷非智眼不 婁眼極最明窮盡目力不能辨始觀法身本無相今

思惟佛贊

但行平等黨遇知音自然猛省 稽首吾師何爲獨步三七思惟如何可度不用思惟

思議佛賀

中而能造作難思業今見衆生微細智偏入如來法

我聞諸佛微細智以此證得妙法身偏在衆生心想

本性如具含無盡功德藏循如清淨璃琉餅內盛微

細多芥子炳然顯現無障礙無壞無雜各安立假離

身內於一歐細毛孔中莊嚴難思法性海一毛一塵

默然思惟所思為離思之之地人孰知之十方一念 衆生一心但有知者即是知音明月在天影現衆水 不出不入無彼無此如雲浮空無心而偏於一毫端

十方齊現一切回成萬緣具是但不思惟即如如佛

紙量壽佛贊有引

焉與懷贊日

又以大悲勢左提而右罕直使恐畏途翻成極樂土 我師冷眠看自心不耐細現此比丘身急過塗毒鼓 我師冷眠看自心不耐細現此比丘身急過塗毒鼓 我師冷眠看自心不耐細現此比丘身急過塗毒鼓 我師冷眠看自心不耐細現此比丘身急過塗毒鼓 我師冷眠看自心不耐細現此比丘身急過塗毒鼓

具此難思力是故我歸依願此盡未來來來作大依怙異常妙樂地本不假外來即此幻化身便登安養國心水垢濁澄光影一時現熱惱即淸涼諸想顧寂滅。假若大顧時翹勁共悲仰皎如淨滿月遊於畢竟空假若大顧時翹勁共悲仰皎如淨滿月遊於畢竟空

叉

生滅無去來法性本不動見此法性身無量壽常樂衆生無明暗即是常寂光妄想一念歌常光當下現惑性迷本有逐諸生滅轉輪迴六趣中如亡子背母衆生迷本有逐諸生滅轉輪迴六趣中如亡子背母。

接引佛贊

常住在世常住在世界等法界身不可思議諸苦衆生為大悲眼界淨無塵圓明赴感入衆生心如月墮水。

十

暫迴光蓮華順現非良久

叉

叉

惟以清淨空寂然了無相以此見自心即見如如者惟以心印心如以水入水是故見聞者一念即歸依惟以心印心如以水入水是故見聞者一念即歸依惟以心印心如以水入水是故見聞者一念即歸依惟以心印心如以水入水是故見聞者一念即歸依

叉

作賓中主

叉

七本無淨歲淨樣從心變心垢若消除淨境應念現

自佛自度生原無彼此相若能平等觀即是寂光土佛在衆生心以垢蔽不現垢除佛現前不用他接引

臥佛贊

無事打眠快活欲死十方界中誰能如此

熾然常說六道四生無機不攝但有稱名即得解脫心似寒空面如滿月坐寶蓮華出廣長舌水流風動

只為當初願力深十方盡是無生國

义

心包沙界。衆生即心本來無外是故稱名即求自己, 稽首大師光明無量具足二嚴號尊中上以慈攝心

願見我師如是而已

長齋繡佛圖贊

解脱諸塵應如是住降伏其心是則名爲無事道人神存理觀妙契法身想澄淨土即俗而眞不住於相

释迦佛贊

其心若水空水速天月光如洗月不離天水不離地層首本師面如滿月清淨法身湛然常家是身若空

廣長舌相不信但聽海湖音翻出龍官秘密藏以空合作上下無際雲起長空風行水上彌滿波瀾

3

聽者心碎不是王宮割酱來誰作利益人天事唯我世尊妙功德泰如空中華隨綠應世法音若雷

N

深知苦心故拌身命常際此經 完定懷懷協末後掀翻和盤托出得遇知音方纔雪屈 空懷懷協末後掀翻和盤托出得遇知音方纔雪屈 空懷懷協末後掀翻和盤托出得遇知音方纔雪屈 空懷懷協末後掀翻和盤托出得遇知音方纔雪屈 空懷懷協末後掀翻和盤托出得遇知音方纔雪屈

A

聖凡一覺不透頂顯是為法縛一法身之光如日之影照破世閒令人夢醒明暗一空

刺繡釋迦佛贊

妙相三十二功德悉莊嚴是故見者脫如觀慈父母稽首大能仁教護聚生者現身濁惡世如蓮花出水

我願諸衆生從妄想鍼緣念念見法身無不成佛者於此和合緣頓見不思議是知法界空佛種從緣起手則妄想絲鍼刺光綾素鍼鍼見法身念念成正覺

夏與衆生心平等無差別故從巧思惟優隨指端現

毗盧佛贊

賴收便放是知我師光明無量於一毫端現微妙相如空中花似鏡中像欲隱彌彰

觀佛贊

稽首浔法身無量光明聚最勝蓮花王故號聖中聖 湛然寂滅海應現微妙相端居極樂國攝化諸衆生 心佛與衆生三本無差別見心即見佛念佛即念心 心佛與衆生三本無差別見心即見佛念佛即念心 心佛與衆生三本無差別見心即見佛念佛即念心 心體與衆生三本無差別見心即見佛念佛即念心

經行如來贊

如風行空雷音長夜喚醒羣蒙來無所從去無所至惟我大師湖爲現身爲衆生故作主中賓廣長舌相

大功德聚無量光明偏一切處如剖微塵以善方便

時涌出大千經卷佛本無相隨心而成法本無住

要見我師如是如是

又有二弟子隨之

捕風捉影衆生度盡熱夢未醒 如來宴坐何爲經行瞥然念起爲度衆生尊者隨之

旃檀毗盧佛贊有引

長者喜其功德難思乃略述其事以贊之日一技徑可尺餘長八尺許世爲希有喜而購之意一技徑可尺餘長八尺許世爲希有喜而購之意一技徑可尺餘長八尺許世爲希有喜而購之意一技徑或以上與大學。

三十二相手出一人如從兜率示現威神圓滿毗盧一、並養廣福時有比丘具大信力發荷擔心衆妙嚴節、欲效優關作妙相具傾心易之願即成佛撰地而施工震旦國但有聞熏無不欣悅爰有長者無心而遇主震旦國但有聞熏無不欣悅爰有長者無心而遇

故我如來現尊中上國土豐樂蘇甲羽毛俱蒙解脫草芥微塵同歸華藏以法界蒙熏觸者離垢凡有歸依頓空諸有法身常住。

熾盛光如來贊

精首熾盛光明正普照十方塵刹中所有日月四天下一切衆生皆蒙益有情無情共一體同入如來光順倒心盡是如來光明敵是故七曜及四餘二十八宿各分布共作衆生有相身生死去來皆寂滅衆生之苦即佛心佛即衆生煩惱海以斯二者無分別是之苦即佛心佛即衆生煩惱海以斯二者無分別是念念常放大光明能破無始煩惱。一切妙用悉現念念常放大光明能破無始煩惱。一切妙用悉現念念常放大光明能破無始煩惱。一切妙用悉現念念常放大光明能破無始煩惱。一切妙用悉現念念常放大光明能破無始煩惱。一切妙用悉現念。

睡起彌勒贊

被誰喚醒來夢語尚未徹通身疲倦骨頭酸左右欠終日沿街走兩脚不休歇困來樹下眠肚裏黑如墨

伸消不得者等或層觸斷筋如何吸他作彌勒

行脚彌勒贊

逢人就乞一文錢不知都是來生價指著龍華樹下一樣擔拄杖挑簡皮袋一包破碎絡索當作奇貨買賣

坦腹彌勒贊

莊折合將來還欠在

為甚開口大笑不歐坦腹亦肚想是怕熱

布袋和尙贊

笑人糊塗肩頭橫擔拄杖脚跟自在無拘若不被小諦觀胸中不有看來手中不無生成如此離藏翻却

見搬弄則可稱雄猛丈夫

辟支佛贊

整陀之上長松之下歸悟無生水流花謝

三大士贊

慈能與樂如如意旨大願無盡真經非字大士之心影落衆水水有清濁月無彼此智度爲母故多其子惟三大士隨類現身在天而天在人而人如月處空

如虚空是

文殊大士贊

誰職飲牛涿原是甘露滅宴坐金剛窟似踞猛虎穴。金色界裏月五臺山上雪雲端獅子兒空中霹靂舌

玻瓈一蓋茶聊清煩惱熱借問窟中多少人前後三

三非浪說

叉

衆生之父如獅子玉大方閥步

居寂滅地建大法幢擊塗毒鼓聞者心降七佛之師

普賢大士贊

萬壑吼松風盡是廣長舌法界任掀翻空花從起滅蓮華半卷經峨嵋一輪月世界燦如銀頭顯白似雪

驢與跛鼈

佛利入毫端十方置眉睫香象奔騰跨步行蹴蹋盲

稽首普賢法界爲身慶毛國土坐臥經行於法性空

是真淨潔一切聖凡不離毛孔通身偏身如海潮涌若有見者須是普眼乘大象王其體純白以本無染大雲彌布以普偏故了無去住故微妙相會無隱觀

大士觀我我觀大士以空合空本來無二故我敬禮

大法界空願一切時處處相逢

又

十方無礙稽首如空廣大自在

普賢洗象圖贅

轉見不通以我觀之現成最好人象兩忘聖凡齊掃上者求之了無分別何勞奴兒枉費其功有不到處本來無染無故洗之更增塵點水不洗水白不染白法界爲身何所不往乖此象王番成鞅掌象體純白

¥

而生障礙存之非染去之非淨此幻法門是名無淨兩不相到本來若此大士三昧圓融法界何於此塵兩不相到本來若此大士三昧圓融法界何於此塵

普賢乘象贊

何等輕快要假他力便成狼狼脚下蓮華鼻孔繚繞大行闊步十方踏偏毛孔後塵何處不現獨行獨坐

即開我足 不是者些被他累倒身命相依往來**已熟**雖是累他

却閒我足

普賢大士加持家贊

亦非好逞要使衆生當下猛省惟我大士法界爲身有持經者即現其形不是神通

大悲觀音像贊

我聞大士本無住但在衆生心想中衆生旣即大士我聞大士本無住但在衆生心想中衆生旣即大士強調、如何與倒若不見若言大士心與例如何能化與倒人衆生若是不與例何勞大士強說法院裁入無學不能脫驅雖逃遯不可得又如渴應奔陽燄愈奔上。於此之苦不覺不但不覺苦生與又復夢見追逐者力叱之苦不覺不但不覺苦生與又復夢見追逐者中始信自心生類倒如是大士能救苦大都亦似惺思測光循膀大士千手眼善哉佛子何顛倒若不自取心能能消滅。

又

轉大法輪火聚刀山鐵床銅柱絕卧一聲忽成淨土 不擇淨穢何分男女若欲求之在我而已 如草頭露顆顆皆圓於一毫端現象妙身坐後塵裏 至人無名名之在人耳中見色眼裏聞聲六用唯一 一亦不立偏界偏空無處不入皓月在天光印百川

六极門頭觸者如火火不燒火屬不染邊無彼此故 料即不受不見去來不知誰救我今思惟大士無我 我問大士化身萬億眼見耳聞不知誰是有苦便时 名觀世音

叉

惟大士身在衆生心多而不雜雕而不分故我有求 於何不可 即知苦處是爲返流我流野返大士即我以我求我 随聲而應匪大士來實我自證我不知苦何以能求

又

我觀大士身本難一切相以本難相故故能現案身

能令煩惱暗一切當下除故我依大士頓出生死苦 若見大士身平等無二相了知法性空光明如滿月 乃至異類形一切無不入如何男女身而作分別見

譬如摩尼珠隨緣明衆色是故佛菩薩及六道衆生

水月觀音費

覚之不得凡有苦求皆得解說 身若浮雲心如水月不動而應無言而說呼之有聲

即現形往來六道無香鴨一片身心只為人若蓋阿 水月之姿空花之表谷響之聲庫尼之實到處相論

師何處計

鏡像水月太虚閃電圖而動之替然影現

一塵不染十万露布温身手跟不須回瓦 叉

又

心本無事為誰苦思有來問者自亦不知

大士無心如響應聲凡有求者隨時隨應

又

|以無相身應有求心無處不現名觀世音

又

Z

水流在海月不離天不思而應為自在禪

3

| 獨是瑣瑣百千萬億有何不可

無相之相相不在我隨應而現如薪遇火三十二應

Ī

大士身心衆生即是所以願求遊感而至

叉

至人無形真悲無聲感應道交沙白水清

叉

以慧爲命以物爲心尋聲救苦名觀世音

叉

身心洞徹極如琉璃表裏得淨如月臨池不感而應

4

觀世音所修三昧名眞淨

叉

以無去來兩皆寂滅我心旣寂大士即我故我所求如澄濁水水清月現不須議擬月不離水水不離月以寂滅心現微妙相滿月寒空光明無量我以精心

應念而果

又

出廣長舌此我大士說法之則如鏡中像如水中月視之似有取之不得以海潮音

V

故心無礙所以應物得大自在三十二應人謂是實法身如雲充滿十方從空中生如水月光以身無外

在我大士如海一滴衆生煩惱如火之狂甘露見運

應念淸涼

普雷濡能解衆生三毒熱 一枝稱甘露滅十方世界

叉

卫

眼間耳見遠而愈親淡而不歌丈夫若下苦心腸相 無慮而應不思而偏春到花開水清月現手捉足奔

又

逢即遂平生願

大士之身本來無相隨心應現不狀之狀電影空花 鏡像水月作如是觀忽然超越

又

與物無二隨所見聞無處不是 畢竟空中縣清涼月影沉衆水不容分別故大士身

又

晉明在清濁非月有揀擇是故現大士應以淨心觀 觀者心既淨衆苦悉皆空若知救苦心應即是觀者 大士本無身身隨衆生現如月映衆水不分垢淨故

又

膠漆附離兩者相合俱不可知故能救苦影響同時 大士無思其思以慈為衆生故死兀如魔癡與衆生 是故大士悲深願重衆生界空其凝無用

又

原無彼此以水性空故無墜滓衆生心水亦復如是 故有求者應念即至以有衆水如月普照以有衆生 我觀大士如月在空凡有水處皆現其中不揮爭樣

見大士妙 親音大士化比丘像贊

以心如空似響出谷以空無形盲者能視其響無聲 塵者得意視聽不住聲色兩忘以三昧力醒彼癡狂 非法誰傳若無傳者聖瞽皆眠是故此丘即法即佛 墨中作主火裏生蓮稱名禮敬應念現前我師方名 有為而然無方而應何故捨他現此眞淨以佛非法

得自在禪

苦海無涯雜爲彼岸一葉紅蓮隨流汎汎以此舟航 蓮葉觀音贊

無處不偏萬類有求隨感應念是故稱名普門示現

叉

苦海無涯欲流不竭至人所憑青蓮一葉彼岸非遙 途程不涉身若雲空心如水月能如是觀何法可說

整點聖母刻瑞蓮觀音費

關産此華以此徵德又何以加問彼曇華千年一現有聖人出以爲瑞驗惟皇聖母

蓮華觀音贊

根從淤泥見之者衆不以爲奇是故我說法身周寫至人應物如優曇華見之者稀故以爲誇靑蓮出水

建大法職尚非眞淨無以致此故大士身聊復爾爾十方皆稱普門示現如此周而人何不識只在目前

3

循如糞壤蓮華挺生枝葉自長摩尼實珠體淨圓潔 三界無安確如火宅至人處之如清涼國五欲淤泥

墮溷迹中光明不缺佛性在纏染而不污泥中之蓮

厠中之珠日用行藏昭昭不昧火裏蓮花故稱爲瑞

禪定觀音贊

雖而不兩雪裏鷺鷥珠中象罔以如是觀名尊中上以思惟心入衆生想打水成痕藏空作響多而不雜

又

以如幻觀無作妙力從聞思修入三摩地

叉

如空合空似響答響本無去來亦無起滅大士神通原非有心諸苦無住如空谷音是故大士其悲最廣大士無心何有寂亂衆生無情了無干絆應緣而度

放不可說

衣白心赤已無他有使一切人**念**不下口

白衣觀音贊

叉

本來無染今亦無垢能如是觀十方通透

又

無形之形隨感而現只在一毫光明普偏

叉

折竹之枝當吉祥草坐斷十方海枯山倒

叉

如水低洗塵水不自洗水大士與衆生其實無彼此我觀大士心欲潔衆生染故自白其衣遮護衆生短知如水低洗塵消覺證全憑楊技灑掃清淨

- 493-

若見自己心便識大士面擘破一微塵大士光明現

Z

一句明耳見眼聞不可說

於潔日用如觀大士容色相求之即不得只在聲前前麵如週水涵明月衆生心垢不易除大士以身爲前麵如週水涵明月衆生心生不屬聲科聲應即現

叉

即大士心身心無外彼此不二應念現前名不思議不邀而至不應而偏故衆生苦爲大士身凡有所求投之濁水珠不留影水清見底明月在空水清即現大士潔白以本不染故入衆生其心不淺如水清珠

湛湛寒空澄澄秋水大士法身實同於此月不離空

以不白者瞻之即了大士無心衆生有想相從想生。空不離水似有兩般實無彼此心本無染衣非愛白

如月在掌是故有求隨念即應原無去來自心現證

惟我衆生苦即是大士悲由苦與悲合故我顯無違

我親大士身如空谷見響大士觀我心事如視諸掌如水銀墮地顆顆思皆圓我所求一事事事亦復然假使百千億隨求一時應何況智慧男於我而獨恪

魚篮觀音費

籃兒在手脚不住走十字街頭要人知有

又

真慈悲者

又

手提魚兒街上賣眼裏尋人只圖快中心不愛牛文

錢多因要了慈悲情

紫竹林七寶地兽陀嵒。金剛際十方坐斷鎮常閒有紫竹觀音贊

术之者隨發至不是吾師觀世音誰能箇箇皆如意

葉竹無林大士非身今所見者皆出自心

南海觀音大士贊

碧海蒼崖黃花翠竹魚鼈蛟龍夜叉鬼窟隨類現形

沿流出沒如空在地無處不足此是觀音自在身不

悉令清海我觀大士了語無相於幻化身號尊中上

出廣長舌山高水深日夜常說名觀世音

觀音大士應變相贊

杜稱爲過去佛

叉

直經無文惟我大士現身如雲有求必應無類不往 踞磐陀石觀寂滅心即彼羣動出微妙音法離諸相

以大悲心全同妄想

巖龕大士贊

蒼嚴片石苔封雲護大士法身於中顯露屬目分明

又

略無回互而人別求此何以故

片石孤峰清池白月自在法身原無起滅形不自形

實由幻者妄想思算欲見大士真本來面但莫思量本來如幻響目空花睛虚閃電非關大士有心要為

全體自現

嚴樹觀音大士贊

枝葉扶疏維我大士慈蔭開敷晏坐其中無說無求贈彼蒼崖巍巍不動實我大士法身孤迥盼彼崖岗

示三十二妙應普周羣豪奮之不出大定拔盡諸苦

在人而人既稱隨水何不現形若有求男便應男子大士之身如摩尼寶五色互現隨緣即了在天而天

不思議變

自在觀音赞

微細法界塵一塵一切利利利如塵衆無處不現形稽首大悲主圓滿自在身鏡像水中月而作難思事

衆生一念閒一時平等應如圓通所說猶是分量數

性我心自知大士全不覺

月影鐘聲妙音色相耳視心聞功德無量

御刻觀音大士贊

是故求者隨心自足惟我聖慈宿秉悲願如大士心十方齊問於法界空現形如雲天上天下無類不入惟我大士法身普應從耳根門圓通妙證十方擊鼓

廣行方便以此妙相普施基生令有所願如響應聲

普陀觀音大士贊

叉

水澄月現不前不後十万周偏故有求者應念即現衆生具足何勞往救出預能戲觀寂滅海普震潮音名觀自在出廣長舌

憨山老人夢遊集卷第三十三

憨山老人夢遊集卷第三十四

入 通 煽 善

日鋒

門

嶺南弟子 劉起相 重較

營

天衣觀音大士贊

欲現微妙身故借畫工手畫工與大士同入不思議 普應衆生心如月臨聚水衆生日用中不知大士力 稽首大悲主圓滿具足尊晏坐法界空皎若星中月

以此願所生同證金剛體常住照世閒解脫一切縛宛在白毫中觀此希有相故我一瞻恢順入寂滅海。宛在白毫中觀此希有相故我一瞻恢順入寂滅海。

草衣觀音大士贊

如空中花響之過也能除我見大士即我既隨類應不是不剪故意留之剌俗人眼大士非俗俗在觀者大士無相胡爲示俗草衣蒲團隨意具足鬚髮抓搔

影現一毫端如春在百花於最微妙中全體一齊現

有何不可又如痛處痛者自知若知大士真俗皆非

海潮観音大士贊

秦海頭空大士救苦匪從外來自心顯現不假安排 端然常住於波浪中光明彌露是故衆生藏浪作惡 端然常住於波浪中光明彌露是故衆生藏浪作惡

既唯自心何用外尋但聞聞性名觀世音

海月觀音灣 海中一月大士坐於滿月之中惟我大士圓通妙應入生死海如月兽印清淨光中故於衆生隨順不遠如水酒月月不離水光光相照故於衆生隨順不遠如水酒月月不離水光光相照為無法身益順不遠如水酒月月不離水光光相照

空海大士贊

生死若海世界如空一片身心放活此中空水混融

波濤不惡此唯我師是真解脫

現天大將軍身贊

一諸佛所證圓通門實從衆生六根入六根一際有淺

即具一切身如海水具百川味智者能離色相觀一答答衆響是知天大將軍身求者有心即應手一身無不融十法界身一齊現俱隨所願即得見簡如空無不融十法界身一齊現俱隨所願即得見簡如空源獨有耳根最圓滿大士故從耳門入根塵兩忘觀

降伏六魔大士贊

切根塵俱寂滅

零竹等法身如如不動眞解脫 零竹等法身如如不動眞解脫 零竹等法身如如不動眞解脫 零竹等法身如如不動眞解脫 零竹等法身如如不動眞解脫

降十二歲大士贊

法界空佛魔一時俱不現我今項禮不思議願以無隊滅是故觀音妙智力降魔但只淨根塵六門洞達別但從衆生顯倒見根塵對待處壘封心境兩忘處

随念建法幢始萬大士威神力 畏施衆生令我順入圓通門常使諸魔爲法侶魔能

圓通大士贊

原非分外色裏膠青水中土塊紙無彼此難分疆界 所以應求如此便快 惟大士身無處不在故大士心圓通無礙十方衆生

刺繡大士贊有引

愈步履勝常婦竟病且死母思婦言笑如生其子 乃刺繡觀音大士三年無懈成二十餘幅母疾果 金剛經偶應懷疾苦劇婦馮氏性至孝願以身代 嘉禾夏母范氏年五十二持濟三十五年日夜誦

錫書乞爲之賛費日

刺大士身隨手而應若影與形姑病既愈其處亦死 出廣長舌 足見體同原無彼此媳託大士死亦不滅絲絲鏤縷 以無緣慈其身普編入衆生心如鍼引線處代姑夷

叉

法身本無形形隨衆生有衆生妄想與法身即出現

此贊貽之若了明暗不二之旨則聖凡路絕生死

辦平居士來參匡山請益老人無法可說乃爲作

圓滿清淨心成就圓通根是故我贈依顧人不思議 精誠入發細毫髮無渗漏嚴於一員地幻出無相身。 乃以概念針牽引妄想絲念念透法身絲絲成妙相 故此有心人不憶念別事專注妙法身被潔如光素

講渡海大士贊

無處不漏從妄想絲法身出現念念不空心心要透 三毒海中波濤正惡頂類上行全不濕脚入衆生心

普門示現自然成就 大士同體大悲加持之力及神呪力豈不一生取 苟龍的信自心堅强不退未有不出生死者況恃 物依憑必登彼岸又如雪山衆草無不是藥是知 諸佛菩薩救護衆生原無定法如溺大海隨得何 薩心持神咒精動有年冀仗威神一生取辦因思 衆生有能顏出生死者不論多層念佛持咒誦經 古婁居士正法以夙瞀緣一心頂禮千手大悲菩 千手大悲菩薩贊有引

奕時也居士應如是觀一心具足不假外也贊曰情枯則日用頭頭通身毛孔皆大士手眼光明赫

變成手眼毛孔光明隨黑暗轉是故衆生有苦必呼衆生煩惱八萬四千以黑暗故六道周旋在大士身

隨呼而應其暗順無衆生大士原非兩般明來暗去

應念現前諸有智者但求諸已凡聖二途本無彼此

大士即已禮拜持名如水入水但從衆苦極遠一提如燈破暗兩不相到以無二故乃見其妙能如是觀

光明照耀日夜無虧

四臂觀音大士贊

通身手眼何只有四於無盡中聊爾如是實杵空魔

眞經無字總是神通不思議事

禮空中如來大士贊

何必禮心將他顯已畢竟如何示現不一禮念不二。空中如來從何出現恰與大士當頭觀面自蚤成佛

普現色身眞不思議

火光三昧大士贊

般若光明如大火聚大士此中入清凉地衆生質情

乃般若光是故大士妙應無方

實掌菩薩贊

手摩何獨倘遇毒龍一時難縮問師是誰自稱寶掌伸手摩空忽然作響空響何聞

準提菩薩贊

念悉具足但能日用常現前如子得母不捨難佛心 古光若破衆生煩慘雲現仗如來密呪力持呪即持 日光若破衆生煩慘雲現仗如來密呪力持呪即持 日光若破衆生煩慘雲現仗如來密呪力持呪即持 我聞諸佛出生處本從微妙祕密印密印即是諸佛

氏入持呪心·不用求佛自解脱 一种,

善薩所建心菩薩初示逆行比丘不撿戒律時人 菩薩所建心菩薩初示逆行比丘不撿戒律時人 對之且實以建立道場乃處處現身一時事化尋 其跡者循然未出山門也四方感而異之遂戚實 坊臨終自露其名至今號爲日光菩薩寺廢住持 頭漆新之立相安奉請余贊日

作日在天光明明耀山川幽谷無處不照垢不能獨 與佛無二況比丘價蓮出淤泥香絮不染壓尼處歲 與佛無二況比丘價蓮出淤泥香絮不染壓尼處歲 與佛無二況比丘價蓮出淤泥香絮不染壓尼處歲 與佛無二況比丘價蓮出淤泥香絮不染壓尼處歲 身偏十方。本無去來如日之光即生盲人賴以成事 自相莊嚴猶是睡涕其跡如空其應如風隨處示問 是 一心萬劫是故天九段 是 一心萬劫是故天北其神不鵝

維摩大士遊戲園林贊

平言被騙見者圖度不是世尊大難摸索三十二人 可笑殺人文殊未至安排等待及至到來一場敗壞 不會說法以默遮聽身不是病以病病身苟非借用 是實是虛男女雜選是有是無口大如空舌大如口 是實是虛男女雜選是有是無口大如空舌大如口

陳如尊者贊

且待彌勒下生勸破方纔散夥

都被掉弄幸有文殊別撕打與我不識渠渠不識我

蒙王遊行象子隨至聲氣相求綠會而聚以冤最重

爲道至親如車合概是必有因

三十三祖道影贊

初祖摩訶迦莱尊者

並第一笑至今令人思議不到 金色之形。金剛爲心奉持慧命常轉法輪世專**拈奉**

二祖阿難尊者

節拍成令是故我師爲偏中正多聞如海飲輸法流諸佛出沒不難舌頭鼓竇法化

三祖府那和修尊者

如火投火來路相逢定沒處聚

四組優波氌多尊者

五祖那提多迦尊者

巳悟本心如日照夜示生死夢光明超越師法本無

我心不有如空合空舌不出口

六租彌迦尊者

都因此來不爲別事間市相逢自示其器緊見未然

遙知今日當行買賣不論價值

七祖婆須蜜尊者

示虚空法若謂有得落七落八 從熟路來忽逢親友一言論義順知未有乞甘露味

八祖佛陀難提尊者

乃可開口從此便行不墮窠臼 不是不言言之不及不是不行本無踪跡今遇其人

九祖伏瞅蜜多尊者

原是本有一刮便透如獅子吼 住母胎中經六十年只待師來方遂前練頂上光明

十離脇尊者

指地變金隨手而現聖人即至何等快便似乎空谷

應聲答響是知我心本無來往

十一直富那夜奢尊者

蚤被解破猛省將來方知話墮 佛不識佛眼不見眼更向他覓故這檢點將謂彈全

十二祖馬鳴大士

將銀引幾假他因綠爲已方便 十六組羅睺多尊者

分坐供食大衆同飲甘露如蜜 尋流得源水窮山盡忽見其人知其爲聖香飯學來

十七組信伽難提尊者

聖者所依果得童子會諸佛機 不樂王宮天開一路直抵窮源不知其故業雲之下

十八龍伽耶舍多尊者

佛亦非佛正眼看來竟是何物 馬之悲鳴故自有因地涌女子原非其人魔本非魔

十三祖迦毗摩羅尊者

從異中來得正知見路逢毒蛇慈悲心現更問毒龍 都要調服眼見心知如響出谷

十四祖龍樹尊者

龍中化龍以毒攻毒尊者妙手一 言調伏佛性三昧

以鍼投外妙契亡言示佛性義滿月現前至長者家 體若虛空百千法門盡入其中 十五瓶迦那提婆尊者

七日而生不墮諸陰其體香潔本來清淨扣門一語

答無者離猛然喚醒當下知歸

十九祖鳩摩羅多尊者

既生天上不應起愛一念未忘便不自在以般若力

(2) 二十 直閣夜多尊者
(2) 工十 直閣夜多尊者

去道轉遠當下知歸就路而返 去道轉遠當下知歸就路而返 本真不用求真遇緣而發如花逢春求之太急

明暗同體惡凡一路來處幽微莫知其故熟處難忘二十一祖婆修盤頭尊者

更求件侶忽爾相逢肯心自許

二十二組雕拏羅尊者

蜚鳴既久一言之言順知本有 從受記來不爲別事同類相從綠會必遇嗟彼鶴衆

二十三祖鶴勒那尊者

從須彌頂持金環來遊彼鶴衆其情可哀得獅子兒

二十四祖師子比丘

作大房吼有氣貫天試驗其後

特來奉酬將頭臨刃白乳橫流相見索珠開手便有以先所付別來不久知有夙久

二十五祖婺舍斯多尊者

恰得好件因那打正兩得其便 乘般若劒握如意珠雞云暫到此行不處**偶遇惡人**

二十六祖不如蜜多尊者

從利利種續傳燈燄眞圖不明幾乎失陷從關市中

忽逢故人圅蓋相合乃得其眞

二十七祖般若多羅尊者

乃得其人開池得月買石饒雲 莫謂無因相逢便見來處自然不**假方便今因其來**

二十八祖菩提達摩大師

幸得神光一臂墮落其道永昌

二十九祖慧可大師

如水任器以此傳家是爲第二,航海特來多少苦心大唐國裏祇得一人覓不可得

三十離僧燦大師

通身是病不知來處忽逢醫王猛省其故心空骨剛

且便行脚遇有力者一續付託

三十一祖道信大師

何待小兒以有夙約觀者不知 少年出家利根捷疾六十餘年脇不至常學侶雲萊

三十二組弘忍大師

黃海路上往來自由具大人相 來歷不明出身恰好一件未完兩家都了破頭山中

三十三祖慧能大師

橫流大地直至如今無處不是

機斧楊抛以石墜腰靈根久植從此抽條源出曹溪

十八尊者贊有引

超松雪做之逼眞近代數人丁南羽畫諸祖道影 昔李龍眠白描十八尊者精妙入神觀者目达獨

不讓古人而白描亦稱擅美余嘗請作厲揭圖覓

未能得頃在五羊南海侯約我王君出此卷索贊

展之光明奪目神情超越如坐蓮華藏中聽如來 說自性法門時也詰其作者乃黃梅伯羽汪生敵

焚香稽首總為之贊日

普現三昧何獨應眞爲希有事諸阿羅漢皆幻化身· 清淨吳中出生衆妙大地山河總歸圓照鱗介羽毛

皆成佛事師子願即凝神壁觀林下水邊生涯無算 獨拳手酸降龍費力但歌妄心自然圓寂抱膝硬眸 見之不識豈得其真遊戲神通咳唾掉臂俛仰屈信

揮塵默談鼓空作響聽之如塵說者似啞不比尋常 看他作怪不若持珠念佛自在坦腹熙恰貝葉在掌

之手者也倦倚長松瞌睡打盹伸手從空忽然提醒

心別不過偶爾看經便成話墮鉢盂具蓮華七輪 骨瘦眉長腰曲脚直動步全憑荷負之力晏坐林閒

即此是實何須別物自受用處唯此而已天龍恭敬 不以爲喜由人愛憎任他束縛一味隨緣自性解脫 只在毫端現此神力水底魚蹤空中鳥跡鏡像空花

乾城水月作如是觀妙不可說

樂識不枯飄流毒海魚鼈蛟龍夜叉鬼怪可笑衝電 味駕空不敢類墮謂是神通苦被佛呵怕見摩詰

冬日人市与庄と見るニーロ

龍華會中將甚鼻孔見我本師和尚雖云遊戲終成虛誑喚不回頭倍增惆悵看爾關到是何模樣自己占乾教他下水縱是便宜能得幾幾幸爾此閒報過黃檗渺渺長波滔滔互浪不肯放身

又次依第合贊

只解口持不知心悟為他有塵故持白拂彼淨此污 恐天落雨先戴籍笠义添辛苦貝葉無文眞經無字 先已見諦頑種遊戲皆成虚誑試看虚空是何模樣 幸過我師馴伏而走一卷真經有無量義未展開時 白羽扇頭絞緊如雪巴斷煩惱如何又熱爲問鉢盂 前者已去後者未來趁步不上未免軍懷急走不動 還要看經以我觀來都成漏逗雖會騰雲未難窠白 想是玻黎內盛甘露少不努力老不歇心擾起眉毛 爲何顧他待伴同行便非大步軍持之中不見傾注 手執如意非無意手觀未執時本來何有猛地廻頭 有無察愈若過肚饑施主便辦猛虎爪牙大開血口 兩皆不足擊寧合掌同行獨住看他如意好借於後 不若無為擎拳合掌遞相恭敬臨鏡見頭空響谷應 舍已從人轉見忽突持一**發香供養者雖有爲功德** 賴此一就不是者些縮手縮脚手指數珠假此念佛 吾師神通自己有限全仗大家團頭聚面龍不可撓

义渡海圖贊

苦海無邊惡浪拍天橫身直過離敢當先惟諸尊者

又園林遊戲圖合贊

是知至人處生死中不與物件物無不容由是觀之 內外無物故無可捨視淵如陵履險若平隨心而至 寓目不驚縱有蛟龍夜叉鬼怪皆為我用以絕對待 神通自在拌命不顧往而不害以我空放無害我者

又各隨其狀而費之

法本寂滅但不生心稱爲妙絕

右手擎金剛塔左手豎掌如作觀想

一老病嫌梧童子擣藥

以金剛塔聊表此心豎掌諦觀想念甚深

此身不有病從何生對證之藥不知何名

三手執如意安然晏坐

四整鉢伸空若有所乘

手執如意如意累手默然自觀畢竟何有

本來無物何空妄求求無所得豈不含羞 五六老清癯岩不勝衣倚賴少年扶曳而

老瘦難行自宜休息何苦累他拖曳費力

七手持貝葉迅疾而行回顧老者若有所

待

獨行快便替人著急手中貝葉幾乎打失

旁有鬼若歸依狀

八九老前行扶仗童子少持香相隨作供

步履艱難所賴童子此一炷香非爲山鬼 十飛錫陵空驚起山神尊者徐行回頭屬

盼

飛錫陵空山神驚起吾師且住法幢在此

十一降龍

因龍性猛師乃現廳但調其性不爲其珠

十二老邁無力手撫孤松

生行脚於今老矣身若枯松心如止水

十三伏虎

猛虎在山威振林木吾師道高自然馴伏

十四看經

眞經無文牛皮遮眼若鑽不透終難放膽

十五自在安禪獨猴獻果

寂然澹泊胸中無物獨猴最在亦知歸服

- 505 -

朝陽補 衲十 七坦腹相對笑視而尸

鹹綫工夫固是綿密大眼看來終是費力 十八端然禪定

叉

大休歇處安閒自在冷眼看他都是捏怪

枯坐壁觀是渠本分如此欠伸想是心悶 雄猛到此弓折箭盡循張空拳徒勞發憤 佛戒威儀端嚴瀟瀝張拳舞脚甚是不雅 可笑此僧奈閒不住兩手捉摩不知何故

乞食街頭失却一物尋覓不見搥胸順足 袈裟著身本來自在又假按摩似爲捏怪 伸手縮脚左撈右摸原有一物竟捉不著

反手链背想是脊痛少年不覺老來沉重 不愛打眠去弄石頭驚磕破手惹一場愁

雙手抱頭老大龍鍾不是偏風便是耳事 挺挺孤松是僧榜樣如此兒戲是何相狀

瞌睡起來夢境未撇兩眼睜睜望空著複 尊者容儀甚爲雅蕭但露脚跟者些不足

> 請問尊者者年幾何但看兩眉世上不多 本來安穩自討事做如浪中船是誰之過 四肢如拳百骸似綿想遇天寒凍餓使然 是能! 不善經行平地喫跌縱跳起來已成敗闕 趕渠惡氣滿肚忙忙急走恐怕捉住

兀爾忘緣無思無慮經卷爐香是閒家具 對經卷爐香兀然端坐

一看經

持 卷經責圖邁眼牛皮若透將長補短

三横擔拄杖而行

社杖橫蟾獨行獨步但慕直去何須回顧

四倚仗觀瀑布

倚杖閒看千丈瀑布問從何來不知其故

五撫麋鹿坐觀峽睫

麋鹿忘機閒來伴坐峽睫邁邁熱夢未破 六手 執如意坦腹 而坐

坦腹頹然百無所有可惜未忘執如意手

七手執經卷而行

既登解脫無礙無罣手中者些翻成話欄

八坐桃花下回首看經

花下諦觀想不爲別要使人知空即是色

九伸手鉢中撈月

林中有水水中有月伸手捉拳畢竟不得

十遙空作體

平地作體目前無物莫認虚空是法身佛

十一降龍

雲中之龍變化自在何故降他翻成捏怪

十二撫樹觀泉

獨撫枯棒 靜觀流水盡世 閉人閉不過爾

十三仰觀高山流水

流水高山知音者少吾師得之出入意表

十四策杖閒行

策杖閒行信步騰騰世閒少有此無事信

十五騎虎而行

猛虎難馴見之者避吾師跨之視如兒戲

十六坐觀水月

皓月寒潭光明徹底此中著脚翻成塵滓

十七以指點空

以手指空空中何有雖爲點破似揚家聽

十八持杖坐磐石上

已到忘懷快活無那手中拄杖何不放下

又金畫騎獸十八尊者遊戲贊

各各馴伏信意聚之任其雕逐以已忘機物亦忘我 三毒已除生死不繁故得神通自在遊戲猛獸輝龍 於虚空中妄生分別縱是金塵亦眼中屑 見之驚怪但瞞愚人難逃智眼若遇維摩定遭檢點 兩得其忘如火入火十方遊行往來無礙不相識者

十六尊者應眞圖贊

欲行不行若有所思所思為誰吾師自知 拄杖橫擔腰包肩荷猛地回頭恰是者箇

爱然而立望之若遺遙空學手對面是誰

骨瘦如樂衣寬若袋不是忘形誰堪機 **外**中之水空中之龍拏雲之手別顯神通

衲被蒙頭冷眼偷視香煙起處只者便是 快寒掃神抱膝若思掉頭不顧思之何為 版本無物何來光怪自放自收無人管帶 **篘笠如空拄杖如龍逍遙物外順脫樊籠** 鞠躬低首合掌向空見法身故作禮真容 物之在空與爾無競無故索之豈稱爲聖 骨瘦神疲眉長累極終日撥之手酸無力 猛虎易馴迷心難解不是**告師幾成敗墜** 飄然若在愕然若怒縱是無心也落顧 雙手徒搏兩脚急走雖爲他忙却揚自聽 **乙然而坐牛恨半思鉢水湛然投鍼者雖** 十四尊者贊

無舌而說無耳而聽法音如電無人背信

五默然端坐

歷劫妄想忙中不見正默坐時一齊出現

衲被如空脊梁似鐵坐斯十方翻成點額 六禪定

七擎鉢

雙手擎外滿盤托出汝試諦與此中何物

八大肚坦腹

肚大雞邁脚長雞縮爾自生嫌非關我看 九月下看經

月明如晝老眼不困起來誦經聊當解閱

一坐具敷坐

展開坐具略放一線不為坐禪和身打欠

十一布袋行脚

肩上郎當手中推藏如此行脚可惜可怪

獅子奮迅大威猛力奪獅子兒豈不返擲

三卓錫擎拳獨行獨步

錫撐空兩拳搦骨法力無邊稱南無佛

衲蒙頭諸緣坐透合掌稽首如是信受

衲被蒙頭合掌低頭

二降伏獅子抱獅子兒引之奮迅

手執如意如意累手身著袈裟聊邁其醜 十二手持如意

四三人共坐如說法狀

508 -

十三持珠念佛

佛自念佛向何處躱以我求我於何不可

十四折蘆波江

苦海無涯脚跟難站憑此一葉便到彼岸

又

整海無際蓮葉為舟倚他當命老不知蓋 整空愛身心空有質如此頭倒莫道不識 整空愛身心空有質如此頭倒莫道不識 等中如意脚跟蘆葉忙忙碌碌幾時休歇 作海中怪豬金剛杵張拳努目如見老虎 空中放光脚下踏經笑人長短豈稱為骨 空中放光脚下踏經笑人長短豈稱為骨 空中放光脚下踏經笑人長短豈稱為骨 質」有過一個一大。穩穩當電不见何名應眞 動龍之性原不可屬先奪其珠故不敢忤 方海之中即得淺處念彼觀音時來救護

攬衣渡水

行脚遇水路頭差錯沒處迴避直須要過

二能涉資不能涉者

十分過九一步不及賴他拄杖甚是得力

このおはな道子班と日刊彼岸復顧其件極處一提何等方便

五既涉濕衣童子扭之

不知淺深信步奔行濕透衣裳返累別人

六巳到樹下卸衣結束

七跳坐樹下作嚏解盹衣衫絡索泥水汨沒雖是拖過翻勞結束

費盡力氣閉坐打盹鼻孔按天一噴頭壓

八神疲力倦仰視盹者

神思雖疲兩眼尙開看他昏者甚是癡獃

九緊裙

快活不受被人拖帶老老大大不會自在

衲被蒙頭快活欲死任他神通總不如爾

十二尊者属揭圖贊

工涉水時怕他纏身旣脫又著<u>枉費精神</u>

— 509 **—**

箕踞石上神精軒豁忘却疲勞十分快活

十一閒坐以如意爬蹇

自己癢處他人不知如意在手任我爬之

十二倚杖危坐回看行者包裹衣鉢

到休歇處何不放下累他包裹好沒傷懂

補衲尊者贊

被落偏身從新要補鍼線工夫不辭辛苦

不透不休縱然補得只好蒙頭

領破衲百級千補一銀一劄甚是辛苦鐵鐵要透

看經尊者

自己不明却鑽故紙清淨界中翻成渣滓

叉

蛀蟲鑽透字脚不真都是漏逗 生不識字强要看經耳璽眼花說與誰聽梵筴多年

降龍尊者贊

多與之物捉拿不住一味慈悲觀想凝注

叉

聽龍正睡珠被師偷若值醒時怎肯甘休

伏虎尊者贊

惡性難調威猛無敵放捨全身費盡神力

叉

爪牙巳露猛氣未逞不是吾師幾驚市井

調獅尊者贊

法窟爪牙誰敢摩觸吾師神通視爲玩物

浮海尊者贊

誰能一喝截斷兩頭踏破太虚點翻倉海線新興跟 荷擔錫杖空水連天無相之相空非有外水外無流 業海無邊滔滔不竭直登彼岸青蓮一葉此身非身

心無罣礙

渡江尊者贊

越無明流猶在半途妄想未斷水上胡藍

芭蕉虚質雖是速朽不是借他幾乎出聽 截流而過自可超越何故又憑貝多一葉

獨往便休何爲迴頭若等箇件就不唧唱

脚跟未穩瓦器不堅搖搖蕩蕩幸爾兩全

貝葉在掌碧眼撐空高跨獨步吾師婚龍

燒香草肴贊

自尋忙如何到得無生國 老不歇心少不努力撥火燒香不放一息本來沒事

憨山老人夢遊集卷第三十四

憨山老人夢遊集卷第三十五

者

侍

温 善

通 烟 編輯 日錄

門

嶺南弟子 劉起相 重較

贊

十萬里西來端的爲何事老蕭乍見時胸中向疑似 九年面壁坐寥寥沒意趣博得神光臂一支通身化 語不投機掉臂且休去折得一莖蘆欲將橫大地

作光明聚相逢不必問前程丈夫自有冲霄志

叉

達摩大師渡江贊

呵屈不屈惹得兒孫望空哭 恰又有皮沒骨看爾回見尊堂將甚言句報覆阿呵

返見疑猜歸去凄涼無限思到家始恨手空回 此事人人有分何勞特特西來只道將本求利誰知

聊以代步豈是神通前程未定不知何往誰料少室 絕無顧心滔滔長江截流而渡折蘆一枝五葉浮空 不是徒來胸中有事不遇其人吞聲忍氣撩起便行 殿前又落九年妄想

叉

折蘆渡長江脚跟不點地不是少室嚴幾乎大失利 特來覓知音相逢不相遇一語不投機抽身便休去

又半影贊

幸得亦心兒聊以遮羞愧賺殺後來人喚作西來意

狀似蒼鷹心如攫兎不是無身不欲全國

又西歸贊

來太忙歸太速憔悴精神惭惶面目落得一隻破餐

又繡像贊

人道是鼻頭西來我說是婆心出現只得一半梁王殿上少室嚴晔決無如此許多思算本無面目枉費對線質穿將來一毫不欠縱是全身

又達摩大師贊

只為當初自著忙今日始知來太早九年面壁坐冰枯雪巳老不得斷臂漢此心終不了一一片苦心腸遠來當大事不遇箇中人好生沒意應

3

其澤愈溥懸絲命在一莖蘆博得兒孫不可數普天其來甚遠其心甚苦不遇作家多遭輕侮其道既光

又

匝地盡皈依此是吾師眞鼻祖

擬之即墮蹈之即喪五葉浮空一花不改是知我師九年面壁不是神光幾乎狼籍苦海無涯掀天波浪。 有事在心忍俊不禁十萬西來誰是知音一語不投

叉

至今如在

一氣蓋乾坤心包六合十萬里西來特特爲者著不是

道是閉家過活生物、大地血橫流無限家私都拋却人道是直指單傳我有不溼脚九年面壁冷飲饭謊得神光一臂落至今不肯承當止因不愛摸索一語不投便渡江過水何

又

叉

得兒孫嫌破碎何似當初未到時長空明月無藏翳全無滋味賴有神光少吐其氣剛留一隻臭皮養惹物特特而來尋人不遇忙折一蘆抽身便去少室嚴前

叉

見孫至今播揚狼籍家私不少咦東風飲破樹頭春殿前幾乎此心不了雖云直指單傳畢竟門前之遠其往太速其來太早知之者希空增懊惱不是少室

尋常勤勞事耳竊慕而行之因是寓目無遺法以

落花滿地無人埽

又石室達摩大師贊

大地春至今滿眼生荊棘 端的直待神光雪沒腰平空一語成復籍五葉花開 **蒼嚴石室九年面壁非是無心祇爲不識太無聊沒**

既赤手來包裹何物把作職私便成塗毒分疏不下

六祖大師肉身贊

流火內凝三陰始交草木順零有力造化的使枯榮 何況無生念念熏蒸以有入空四大俱融以空入有 是故我師爲法中王 有則不朽空有兩忘適同金剛山河大地盡常寂光 一陽來復煙氣漸臨三陽滿足萬物皆春一陰初至

丞明大師贊有序

雲谷先師聞說大師日行一百八件方便行將謂 **清幼讀心賦唯心訣即知師為光明幢也旣而從**

心普賢願不能持其萬一也況揭心宗而鎔教在 默然自失歎日此廣大無邊微妙法行誠非金剛 爲善用其心矣及垂老至西湖淨慈入宗鏡堂禮 示法性而攝辜情非稱法界三輪何能臻其闡閱 大師塔影訪其行事弟子大壑出自行錄清展卷

哉清感歎難思稽首爲之贊日

動植攝無遺即以已身代受苦若非寂滅平等觀何 師能護法是故華夷悉歸仰盡人慈悲心念中飛潛 稽首大師光明幢普照法界清淨藏乘大願輪示三 顯唯心萬善同歸一眞諦思惟自有三寶來此土唯 業特爲羣生開正眼親傳佛祖祕密印融通教海歸 一心胸鎔聖凡非比量順入實相三昧海百千妙行

淨土我以湖山為筆研不能寫師一毛孔普願隨喜 德便入毗盧法界門自心先入衆生心衆生何能逃 懸此宗鏡照萬法目前何法非佛事即此放生一種 能了無彼此相悲哉末法諸愚蒙不知盡被願力攝 見聞者同證吾師大心力

諸祖道影略傳贊

康租價會贊

尋光而來懇求出現**梵**刹初開 法身舍利普徧大地光明照耀無處不是**发有至人**

天竺佛圖澄和尙贊

如狎鶥鳥脫然歸去由來時道至人隱顯其行莫測透證光明其用自別出入帝庭

廬山東林遠公贊

流韻至今凡有聞者。嚴不歸心 慶志高懷遊心淨土創開東林以爲初步蓮漏清學

實誌公贊

至人看行跡不可知從何處來為魔之兒遊行世間

人莫能測學破面皮又何必說

傅大士贊

道不在冠儒不在履釋不袈裟無有彼此但能不生

章安法師贊

分別心三教宗師即是你

至師大昌入多問海源遠流長

法智法師費

其維不張實生吾師大振其綱。台之一家遠宗龍樹教觀分明觸者多悟五百年來

不空三藏法師贊

潛消百怪。是故智者得大自在毗盧灌頂是為心印正令全提佛魔聽命幹走龍神

大法界網聖凡羅列獨有一綱惟師能掣引萬派流質首法師贊

清涼國師贊

同歸性海五教齊收終古不敗

百年住世七帝門師事不思議

圭峰禪師贊

属子之印入法界門是稱亞聖

萬里封侯投筆而取吾師一投直出生死性海同遊

法照國師贊

如從ഭ遊直指極樂是所歸投

立奘三藏法師贊

大教東流其法未普爱有應真委命往取般若流光

相宗大啓苦海舟航利濟無巳

窺基法師贊

惟識幽宗義深且玄惟師揚之如日麗天定從兜率

預稟彌勒不從中來安知其訣

道宣律師贊

如來設教三學為師定慧所發以戒為基大法東流

此教未光南山傑出一振其綱

一行禪師贊

题密之宗 越緯之故大行一成陰陽合度世出世法

靡不該練五地之行於師乃見

南獄懷護禪師贊

一朝打起蹴踏橫行觸者皆死氣概冲天心虚沒量攬曹溪水與波作浪睡者馬駒

青原行思禪師贅

天然尊貴不落階級一語投機如蜂得室曹溪一脈

枝分脈行從此兒孫雷驅電捲

永嘉無相大師贊

金錫孤標生龍活虎不是老盧幾遭輕傷言前薦得

西江道一禪師贊

馬駒如龍牛行虎視百三十人一脚蹋地西江道一种食糧

石頭希遷禪師贊

百川東倒一滴瀰漫潤茲枯槁

其路甚滑縱能行者也喫一蹋 獨撩佛性原自有因一尋思去即得其眞熙坐石頭

越州大珠慧海禪師贊

自持寶藍更向他求一言指出應用自由越有大家

天皇道悟禪師贊

只貴知有顯倒拈來如弄丸手 那漫不住從何處來一見石頭八字打開以此示人

潭州潙山靈祐禪師贊

異類中行仰山勘破父子家聲 百丈壁立來者望崖惟師直入**撥火心開作水牯牛**

脚踢地法流西江

— 515 **—**

杭州鳥窠道林禪 師 些

乘日光來依自性住故總出頭天然妙悟巢居長松

、道是險但看他人不自檢點

洪州黃檗希運禪師贊

大雄 山下有一大蟲降吼一聲聞者耳翼疾雷之機

學電之眼西來門風從此太險

鎮州臨濟義立禪師贊

黃檗師子爪牙纔露大愚之機如鷹拏兎脇下三拳

一掌適犯其鋒非為臟莽

端州洞山良价悟本禪師贊

掀翻窠臼過水觀影方始通透

本來面目一摸便見無情說法似乎還欠既見雲嚴

撫州曹山本寂禪師贅

越格之資不存名跡超方之眼一見便識五位虚文

宗旨綿密是故主今猶黑似漆

友嘴如鐵故此出身自然超越 熟處難忘疏筍習氣鐘梵經聲聞之心 福州雪峰義存禪師贊 醉師棒如龍

> 雲門禪 部 瞀

緩見睦州閉門推出挨身一拶順折一足從此轉身

薏天蓋地雪峰未見早巳心契

一切現成了無顧行萬象之中堂堂獨露一味平像 法眼禪師贊

目前即是織涉思惟便落第二

汝州首山省念禪師贊

七軸蓮經持之已久一言放下即知本有不說之說 舉著就見拂袖而行何等快便

越州天衣義懷禪師贊

本性慈悲來願夙帳見了魚兒隨手便放一出塵網

便登覺地擔折桶脫虛空粉碎

西河遊機見者不識親遭掩口鼻孔打失其機迅發

潭州石霜楚圓慈明禪師贊

脫不可羈明眼稱之眞獅子兒 隆興府黃龍慧南禪師贊

聖凡情盡室中三關全提正令 西河獅子父子門風倒握太阿誰 敢當鋒師 擾之

袁州楊岐方會禪師贊

荷擔大法綱維叢林狹路相逢一語見心異時兒孫

偏滿天下源遠流長根深枝大

舒州白雲寺守端禪師贊

久把明珠祕爲奇貨及遇作家一笑便墮看破笑處

靳州五祖法演禪師贊 自亦絕倒信手拈來無非是實

出門不利即撞增板逢人便問祇好遮眼幸遇作家

椎打破掉轉頭來方知話墮

杭州慧日永明延壽智覺禪師贊

朗照**萬物**佛日中天無幽不燭 乘大願力出爲法瑞總持門開衆行畢備懸

心鏡

天目高峰禪師贊

叉踰於巖故望之者猶如登天 雪巖之險壁立萬仞惟師登之得其捷徑死關之險

天日中峰禪師贊

天目 龍中 真獅子兒爪牙線露百獸奔 馳孤峰 凛凛

又

5 11

生死窠綵是相逢無處覚塵之知識示如幻之身心展那伽之定力打碎衆生踞天目之高峰透空中之鐵壁破佛祖之重關小利

千巖禪師贊

應聲若響不是者番幾沉妄想問佛何在尋之不見風翻猫器忽然出現躍身如空

佛印禪師贊

不知何為軒渠而化只者便是文字習氣生來漏這橫口說禪不落窠白預畫笑容

徑山無準禪師贊

提挈萬乘不假他力全憑正令一語投機十方通透舌根雷奔帶僧雲湊兩入內庭

寂照圓明禪師贊

古鏡生光精明既發照用無方世道変興眞人應運雲龍風虎莫之能禁眞金出礦

白雲覺禪師贊

坐白雲峰轟霹靂舌性海波翻義天星列奔走龍神

若不是者滿嘴鬍鬚人定認作靈山迦葉。習消魔麼一點清涼破除瘴熱好箇阿師十分標格

金剛塔質

若一念瞻依一切皆具足念念不難心功德皆圓滿普入微塵中能作利益事善哉妙智人從微細心想。
建此最勝幢猶若蓮華藏幢依微塵立一塵書一字
建此最勝幢猶若蓮華藏幢依微塵立一塵書一字
建此最勝幢猶若蓮華藏幢依微塵立一塵書一字
建此最勝幢猶若蓮華藏幢依微塵立一塵書一字
建此最勝幢猶若蓮華藏幢依微塵立一塵書一字

三教圖贊

能識破眞消息一腔心事總難言杜鶴血染春山溼孔笛說謊面不慙購入心似漆莫道肝腸有兩般誰即一而三亦子身穿花布衫即三而一沒額曲吹無

文昌帝君贊

帝出手隱此之謂至神 寂然爾寧有叩之者如篁斯聲淵淵不竭若谷似盈。 造化之精 燉而為文炳手長夜日月代明莫匪爾極

老子騎牛贊

紫照原來青牛西逝不是轉入端爲何事

老子出關贊

心存太古道遠薄俗光而不耀虚而不屈致虚守都少思寡欲恬惔怡神蕩然無物羣雄競爭方事聽逐員人將至拜命瞻依請發幽秘垂五千言道全德備。不居物先不爲嗣始謙道無我知足知止混俗和光不居物先不爲嗣始謙道無我知足知止混俗和光不居物先不爲嗣始謙道無我知足知止混俗和光

孔子贊

全無餘利不是吾師沒量人誰能永使人倫正百王之師千聖之命萬古綱常羣生正性一力擔當

彭祖贊

歲看記為董尚折花

色若嬰兒氣若哇吸風吹露但餐霞蟠桃一熟三千

呂純陽贊

負青蛇而遊戲無礙見黃龍而妙悟乃真朝遊蓬島宇宙在手萬化生事稟三才之至粹得二氣之精純

ナ

幕宿崑崙於同天地德比陽春夫是之謂人中之聖

抑仙中之神者也

漢壽亭侯贊

胸中磊塊處處逢人愛現身多應未了英雄債源源若生明明若在耿耿孤忠堂堂氣樂面上精神

清涼山玉峰和尚半影贊

相逢直待龍華初會見 個所不俗阿郎却做出真不真皮面咦今朝一笑再 國成一念不知那世舊冤家來此人閒慣夙欠晚得 國成一念不知那世舊冤家來此人閒慣夙欠晚得 祖兒孫我說是文殊侶伴八十年苦行無窮百千劫

資峰和份贊

露全機只道有無俱是謗借問何處者沒巴鼻阿師竹杖塞北山寒雪正飛天南地燠花初放相逢不肯沒行踪十方壁落無遮障為打陝府鐵牛觸折邛州是真非真無相不相如珠中色似鏡中像大千遊偏

紫柏大師贊

人道是天子門前實峰和尚

5#

叉

雙眼空十方世界無遮蓋莫道春風處處同休枯雪獨坐孤峰披襟藏海咄醒魚龍潛消鬼怪拄撑如意

叉

老寒巖在

自不能剖 無舌解語語不在口鬚眉略露其形似有若扣其中 無舌解語語不在口鬚眉略露其形似有若扣其中

又

空脊梁總豎諸綠歌槌碎金剛圈圓成甘露滅十方面如月心似鐵短髮長髯丰神自別拳頭一捏雙驟

世界沒遊欄一道神光閉不徹臺地相逢扇孔酸心

中有痛順分說

又

內無崖岸兩眼睁睁只見者裏題身血汗如獅搜斜迸渐情畏卸却重擔外雖城府

雲棲大師贊

稟金剛戒八十年餘半利生臨行落得空無礙若識乘竊力來居堪忍界開淨土門了慈悲資建光明幢

叉

吾師住世心是則名為觀自在

捕風捉影不得其**從**聞空中風見水中影多少凝入如何描摸縱饒畫得畢竟不著晏坐如空說法如風我觀大師渾身活潑諸毛孔中光明透脱不見面目

叉

開眼打盹

羽毛同入平等法性一味慈悲十分清淨若問吾師以空爲居以慧爲命入衆生心行普賢行不論鱗甲

甚法門此中三昧明無諍

又

心若空中月形如鏡裏像此是吾師四十年隨順衆

生真榜樣

一切行門空中鳥跡不信分身萬象中疑人却向毫其容寂其心密無內外不出入百千三昧眼裏空花

端覓咦

久營無明名,未識無明面突出大好山千里遙相見無明和尚圓相贊

許言前薦若問當陽向上機雲山滿目難分辨以田鐵渾淪見者絕思算此是吾師老面皮相看只只要射箇人應弦早奔窗忽撞頭石頭鏃羽一齊陷,生涯在鑁頭說法如奔電提張沒弦弓慣用石罩箭

無邊和尚贊

師答其響於一毫端現實王利八十八代都沒合投龍象奔騰全無回互雙徑雲生軍傳月朗誰人大呼家常茶飯來者充足任意幹辦一蹋吳江刹竿纔豎家常茶飯來者充足任意幹辦一蹋吳江刹竿纔豎

道運全機賴師一撥鼻孔牛邊誰會摸著

清涼山空印法師贊

法幢既傾教網不密師振其綱如天絲織哲人往矣 如海吸水形不象心真不混俗但見其皮誰得其骨 如師子戲顧欠頻伸名聞九重風清寰宇十方歸依 如師子戲顧欠頻伸名聞九重風清寰宇十方歸依

浮雲散盡碧天高一輪明月當空夜試問金剛窟裏此中不移劫火洞然冰枯雪老幻臀既除空花亦了我居其前師躡其後我以業驅師以願持炎涼雖異寂寥千戰天實生師儀形未改千尺寒巖萬年冰寶

人前後三三是多少

問者老漢從何處來不知爲甚滿面塵埃千尺冰雪

凍不死萬得一半令人猜可怪獅子頂下鈴自繁自

解眞奇哉

紹覺法師贊

以法爲身以慧爲命以三界爲家以衆生爲性其形

靈徹法師贊 智海橫流自不能禁無怪乎阿師口門不正 市爲山林從語言入正定故熾然常說而不休者以

骸也槁木其二昧也無諍火宅寒灰塵勞冰彈以城

5 111

挺若長松孤鶴舌根不動語如雷時人莫道無言說骨峻峭心寥廓鼻孔昻藏眉毛卓索湛若碧沼青蓮

自光長老寶

遇緣即宗平等無二若求其真真不在此但看現前十方粥飯來者同餐不分主件以無我心作衆佛事

即眞佛子

大馱耆年贊

一 杂 遠華 此 便 是 慢 婆 塞 衆 中 第 一 作 家 事 為 生 涯 五 濁 世 中 了 無 半 點 罜 礙 清 淨 界 裏 只 有 虽 年 即 知 離 俗 老 年 方 能 出 家 以 温 和 爲 妙 行 以 佛

定宗老宿贊

雖過八十年猶是最初步步入雜華林始是歸家路少八千佛殿即依千佛住起坐常不雖人不知其故

- 521 -

害轎山主贊

下翠微相逢誰是眞相識 坐斷雙髻峰捏出种推计打破金剛圈咬碎鐵栗棘 整不順聲裏雨如煙東風歐落花很籍赤脚臺頭 養房縱饒雪上加霜須知炎天赫日試看端的橫眉 整層柱鶴聲裏雨如煙東風歐落花很籍赤脚臺頭 下翠微相逢誰是眞相識

靈脣峄然懷慧山主贊

乃見其大不向外求不從人覓本有現前一切眞實雖無干絆終是總邊一物不將只須放下小處不存足未離地若欲超然必須粉碎雲山滿目葛藤不少從空中來求實處住故向凌霄別行一路身已在空

衲雲師贊

知見消亡。立妙不立一念直透銀山鐵壁

人之一安得振知此之高蹤是以思之而不見寫之之室晚荷清涼之宗老而愈壯淡而不窮非窟中萬其脊如鐵其心如空一衲如雲萬事如風早入方山

而難形容依稀彷彿似池上放牛之看

虚谷公贊

孫孫咦珊瑚樹上撑明月海底波斯夜嚼冰 若夢百千億劫如生 留得一片清淨田地傳之子子外若浮雲中如谷神心為常住故以為身七十九年

月岸公贊

月運舟行岸驚咦一聲長嘯海空秋金鳥夜半號天其出也不來其沒也不去生平覿面人無覓處雲歐

曙

雪嶺公贊

崛崛咦白雲橫斷曉峰靑杜鶴號徹春山血面如滿月骨似冰雪望之稜稜層層其中必定崎崎

澹居鎧公贊

自贊

剛腸似鐵且喜早入寒嚴滿拌放身休歇忽遇一陣看教不徹參禪未瞥一味癡憨十方蠢拙沒量如空

向人難說只待龍華會中那時方纔明白縱饒描寫不為行脚操方多是藍價夙業就中一片苦心開口仰仗佛力加持者條性命拾得滿面風塵一腔冰雪,無風飄墮羅剎鬼國拋入大冶紅爐擲向炎方火宅

叉

將來不是孃生骨血

坐愣伽山踞磐陀石聽海潮音入無生國早從金色 上海路頭畫夜打眠無閒歇衆魔 大聚刀山且喜干戈寧息感荷 君恩復放還一條 大聚刀山且喜干戈寧息感荷 君恩復放還一條

マ

高峰笑曹溪之露柱任他苦海波翻自信肝腸鐵鑄。形似片雲太虚不住來去無心隨風一度坐鼎湖之

叉

回看火宅炎蒸何似白雲深處

天子大治紅爐鑄成一箇生鐵羅漢拋向火宅炎荒為僧久慣還俗了次習氣難忘修行不辦幸入 聖

深知恩大莫能酬要報須憑真實願大似鑊湯爐炭煉得通身骨內鎔劑得慈悲心

叉

是非非見面後嚷嚷咄咄任他描寫百千般只有一心非在家形還混俗眼裏有珠胸中無物聞名時是

點畫不出

叉

萬般瀟灑若不是 聖天子破格鉗鎚如何得隨件非俗非僧不眞不假肝膽氷霜形骸土苴一味疑惑

叉

著將軍戰馬看他別有一種精神恰不屬之乎者也

空華此外於吾何有,注杖長戈體孟刁斗一等生涯何分妍醜但看水月

叉

抓攝形骸喜沒拘束一轉楞伽一炷香到處生涯隨胸中有物聊向光影門頭路露本來面目實變苦費

一分足

叉

一味可憎忍辱法門唯此獨能

叉

宜貶向雷陽隊裏著他驢前馬後者一著最能武不談兵實無可取虛有其名此箇沒用頭阿師只愛山不高愛水不深僧不去髮沿不冠巾文不識字

叉

一擲便過若有相逢問是誰兜率殿中第一座獨行獨坐快活無那凡事無心佛也不做萬里雷陽

7

如響答谷一味癡憨千般埋沒幸籍菩提樹一技此心不在道形不入俗脚無干絆口無拘束如風行空

叉

生千足與萬足

· 聚爛到曹溪學墜石頭春米穀 全無拘束一朝特地觸龍頭貶向雷陽作馬足而今 全無拘束一朝特地觸龍頭貶向雷陽作馬足而今

-

作祖有障只好發付無事甲裏做箇老軍隊長勝之不枉工坐不會參禪一味胡思亂想作佛無分此老無狀是何模樣打之不痛抓之不癢罵之不羞

又

都道是沒伎倆的阿師誰知是不識字的大措 白手操戈赤身露布怕死入地無門要活上天無路 俗不知名僧不在數佛祖隊裏不容衆生界中不住

叉

相看瘴海濱莫道斯人無侶伴北之人受百千萬億之難號是憨僧呼爲鐵漢形影北之人受百千萬億之難號是憨僧呼爲鐵漢形影

又

身戈载場中作戲到如今不肯回頭圖者子豈不生為了最多最喜是一片凝心把佛祖門庭當自已家事煩為循不解修行涉俗又無拘忌是何等業緣作者般為質量之一,以此一十年當軍三千日住山二十秋畢竟沒巴鼻出世六十年當軍三千日住山二十秋畢竟沒巴鼻

氣想待彌勒下生那時方纔理會咄春山夜雨子規

赈 起聲 叶人 旦 弱 去

又

其狀龍鍾其中空空佛祖界中不住衆生隊裏難容 枉費疑心沒底落得煩惱無窮不若貶向無生國土 諸綠不會一法不通只將尋常茶飯當作豎立門風 披白雲以高臥抱明月而長終一切不顧依稀成就

箇眞正惑者

多發竹箆落得滿面風塵當作西來祖意到底一片 無住祇為撑支父子門庭不是妄生閒氣歷盡艱難

又

眼目原來粥飯阿師只有一種奇特處皎皎月上珊 兀兀無知百無所思全沒伎倆一味憨凝豈是人天

又

瑚技

又

爲六祖而來因護師而去來去雖似奔忙法門本來

金剛心尚留再布曹溪地

又

泥牛花開碓嘴從他相藏滿乾坤脫體承當能幾幾

有耳如顰旣無可以贊歎又何可以形容喚作一物 如鏡現像似雲浮空底谷聲響止水魚蹤有眼不見

即不中此其所以爲憨爾

前身今日重來打開 親承奉重聞說淨土法門恰似開眼作夢想是此老 **曾向鉢中見有萬衆問是文殊被他掉弄直到五臺**

叉

七十年來夢遊人世隨身叢林空花佛事不顧危亡

月挂長松影沉秋水有相可窺無物堪比不可得而

親豈可得而取引萬里之長風縱洪波之一葦大似

少室巖前不是毗盧城裏清絕塵埃了無渣滓聲吼

全無避忌一朝觸犯龍額拶得虛空粉碎擲向萬里 炎荒俠舊逢場作戲只至弓折箭盡那時方繼歇氣 而今正限看來落得一覺熟睡 又

又

不入大治紅爐誰知他是鐵漢只待彌勒下生方了爲層肩頭不離扁擔若非佛祖奴郭定是覺場小取目撑雲漢流落今事門頭不出或音那畔無論爲俗

又

者重公案

來兩眼空落落坐倚長松獨自看白雲一片生幽壑只待心疲力倦赤身走歸南嶽七十峰頭睡正濃醒五臺冰雪枯東海波濤惡炎荒瘴癘深曹溪綠分薄

Ž

面雲開山露骨要知淵默雷聲大似響傳空谷有人不屬聖凡本來面目從何處來向毫端出水澄月照

又

若問西來的意但向伊道即心即佛

時那箇知端的不向人天路上來問君何處會相議面閱口窄眉橫鼻直任爾描模全無氣息文彩未露

叉

此老其中空無一物不聖不凡非心非沸鬼角杖勞

種惺惺畢竟描模不出咄咄咄月落不難天鳥歸樹 山則觸仔細檢點將來恰以枯椿榾柮只是則有一 水月踪鑑毛綱縛虗空骨與作熟山則背不喚作器

又

上宿

又

藏破夢幻身便是第一步若問末後句看燈籠露柱 如空雲去來竟莫知其故相逢舊時人請問歸家路 四十七年前晉向江心住今過七十二重來第二度

又觀海圖贊

神情軒豁時聽潮音說普門親證耳根眞解脫巨石長松洪波冥壑仰之彌高望之彌屬中有一人

又行脚贊

兩不相似水月道場空花佛事若問生涯如是如是 錫杖無環草軽沒稀十方往來隨足所至世出世閒

胡中丞像贊

僧不僧俗不俗一樣心腸兩般 丰骨 若問 宰官比丘 恰似生米作粥今朝狹路相逢依舊二三如六不拘 南北東西屬著如釘入木往來生死路頭不知何處 歸宿但願同生兜率天此心干足與萬足

王宗伯像贊

當初不合杜口毗耶今日却來酬償夙債塵勞中轉 水月禁懷空花眼界鐵石肝腸風雲氣緊記得未入 胞胎不是者箇權藏就中沒處描模看來有些古怪 無盡法輪毛端上現百千三昧捨已爲人將金博塊

時人盡道宰官身我說是名觀自在

整山老人夢遊集卷第三十五

参巳下古本 二十一

佛祖機緣三十則

釋迦牟尼世尊初生一手指天一手指地周行七

步目顧四方云天上天下唯吾獨尊後雲門云我 當時若見一棒打殺與狗子喫賣圖天下太平鄉 那覺云可謂將此身心奉塵利是則名為報佛恩

類日

事番夢人說短長 緣出頭來便著忙虚開大口說行藏祇知要吐心中

世尊因調達謗佛生身陷地獻佛刺阿難傳問云 又令阿難傳問你還求出否云我待世尊來便出 汝在地獄中安否云我雖在地獄如三禪天樂佛

阿難云佛是三界大師豈有入地獄分云佛既無 入地獄分我豈有出地獄分頌日

頌

怒山老人夢遊集卷第三十六

者

侍

褔 善 日錄

通 炯 編輯

門

嶺南弟子 劉起相 重較

- 527 -

樂何用閒情檢點他地獄天堂有甚差受恩深處便爲家人生適意即爲

世尊因黑齒梵志運神力以左右手擎來合數悟 桐樹兩株至靈山獻佛佛云梵志志應諾佛云放 下著志放下左手一株佛又云放下著志放下右 手一株佛又云放下著志云我兩手盡空未審更 放下個甚麼佛云吾非教汝放下其華汝當放下 內六根外六廛中六識無一可捨是汝免生死處 志忽然大悟頌日

整來平地起干戈放下教伊沒奈何直到水窮山盡

伽黎圍之遂告云吾有正法眼藏密付與汝汝當世尊昔至多子塔前命壓訶迦葉分座令坐以僧

護持傳授將來勿令斷絕頭日

分明大地露堂堂一片袈裟豈蓋藏纔說密時原不

文朱币引生展山**李**上香弗·

座入於三昧文殊白佛云何此女得近佛坐佛云文殊師利在靈山會上諸佛集處見一女子近佛

契遂折蘆渡江至少室面壁九年項日 華摩云廓然無聖帝云對朕者離摩云不識帝不達摩初王金陵見武帝帝問如何是聖諦第一義

一遠來一片熱心腸只道他鄉是故鄉豈料相逢不相

可得聞子摩日將心來與汝安祖云覓心了不安乞師安心摩日將心來與汝安祖云覓心了不可得聞乎摩日諸佛法印不從人得祖日我心未可得聞乎摩日諸佛法印不從人得祖日我心未

齊腰大雪臂摧殘特地將心强要安借爾拳頭築爾

即此不染污諸佛之所護念汝旣如是吾亦如是

嘴何膏添上一毫端

呼入室密示心宗法眼傳付衣鉢令渡江南歸曹趙索偈欲付衣法師書偈於壁曰菩提本無樹明 和索偈欲付衣法師書偈於壁曰菩提本無樹明

物如何又拾破袈裟

貨引得兒孫箇箇癡 未到黃梅早巳知三更入室又何爲祇將衣鉢爲奇

諾師日將謂吾辜頁汝却是汝辜頁吾項日 南陽忠國師一日喚侍者者應諾如是三召皆應

一破長風日夜吼松聲

三呼三應太分明辜負何曾有重輕試向未呼前勘

還可修證否師日修證即不無染汚即不得祖日祖日什麼物恁麼來師日說似一物即不中祖日南嶽讓禪師初参六祖祖問甚處來師日嵩山來

類日

立何須撥火更澆湯。

許方見王師大戰功大將登壇八面風捲旗息皷四壘空太平氣象清如大將登壇八面風捲旗息皷四壘空太平氣象清如馬師一日壁堂百丈收却面前席祖便下座頌日

佛月面佛頌日 馬師不安院主問和尚近日尊候如何祖日**日**面

處纔問如何已失時病在膏肓不可竇閉門暗地自尋思傍人不解雖禁

也後有僧學似師師曰待我去勘過明日師便去去婆云驀直去僧便去婆曰好箇阿師又恁麼去趙州因僧遊五臺問一婆子日臺山路向甚麼處

爲汝勸破了也項日

好箇阿師又恁麼去也師歸院謂僧日臺山婆子

問臺山路向甚麼處去婆曰養直去師便去婆日

客五更夢破一聲鶏 常见天子 路迷多少迷中留宿

主主應諾師日製茶去項日 整會到也云製茶去不會到也云製茶去師召院 整會到也云製茶去不會到也云製茶去師召院

也一枝墻外過降家

· 東只須一碗熟湯澆 東只須一碗熟湯澆 東只須一碗熟湯澆

大千經卷剖養塵臘盡陽回大地春拈出庭前佰樹何是齟師西來意師回庭前佰樹子頌回

子西來祖意又重新

趙州自外歸師擧前語示之州乃脫草鞋安頭上即教取備兒道不得即斬却也衆無對師即斬之南泉因東西兩堂各爭備兒師遇之白衆日道得

太阿出匣絕無情觸著須教斷死生偶遇白枯誇好而出師日汝適來若在即救得猫兒也項日

手印将驅糞換受請

考妣項日 **亳州**示衆云大事未明如喪考妣大事巳明如喪

這老漢蓮永鳴鼓未學托為向基麼處去師便歸 一三手果三年而沒項目 三手果三年而沒項目 三十果三年而沒項目 三十果三年而沒項目 三十果三年而沒項目

企業

師浴出郭過茶與師師撫廓背日昨日公案作麼作麼郭日勒點飛龍馬跛鱉出頭來師休去明日德山因鄭侍者問從上諸聖向甚麼去師日作麼

生廓日這老漢今日方始瞥師又休去頌日

去折盡旗鎗已喪威 憤戰深藏陷虎機窮追焉敢犯重圍縱然保得全身

日經入藏禪歸海唯有善願獨超物外項日 何丈日正好修行堂日正好供養泉拂袖便行祖 馬祖與百丈西堂南泉玩月次祖日。正與麼時如

月到中秋分外明幾家歌管不停聲漁勳歸去蘆花

宿睡熟江天夢不成

崔顥題後秀才還會題也未日未會師日得閒題 見其名未審居何國土還化物也無師日黃鶴樓 長沙因吸掘秀才看干佛名經問日百千諸佛但

取一篇項田

黃鶴樓前江水深風波日夜吼雷音百千諸佛同搖

舌覿面何勞別處尋

夾山参船子纔見便問大德住甚麼寺山日寺即 不住住即不似子曰不似似個甚麼山曰不是目

前法師日甚麼處得來山日非耳目之所到師日 句合頭語萬劫繁驢橛師又日垂絲千尺意在

> 頭談而不談師日釣盡江波錦鱗始遇山乃拖耳 絲懸珠水浮定有無之意山日語帶玄而無路舌 落水中山總上船師又日道道山擬開口師便打 深潭離鈎三寸子何不道山擬開口被師 不犯清波意自殊山遂問拋綸罷釣時如何師日 山豁然大悟乃點頭三下師日竿頭絲線從君弄 橈打

師日如是如是頌日

蘭橈獨倚把關津鈎線閒垂釣錦鱗偶遇嬣龍纔

撞滔天浪裏解翻身 趙州因僧問狗子還有佛性也無州云無頌曰

長江一望渺寒煙極目中流思惘然可惜夜柔明月

下更無人問渡頭船

趙州因僧問萬法歸一一歸何處師曰老僧在青

州做領布衫重七斤項日

路到懸崖沒處行轉身一步脚頭輕要尋挂角羚羊

跡有眼饒君亦似盲

雪峰因三聖問透網金鱗未審以何爲食師日待 汝出網來向汝道聖曰一千五百人善知識話頭

心不識師日老個住持事繁頌日

扁舟使盡一帆風到岸何勞又轉進若問漁者何處

宿放歌歸去月明中

僧問雲門不起一念還有過也無門云須彌山頭

E

天寒霜落月沉西清夜迢迢鶴夢迷海底日輪紅似

火行人猶聽五更雜

似亦是光不透脱又法身亦有兩般病得到法身 有物是一叉透得一切法空隱隱地似有箇物相 **雲門上堂光不透脱有兩般病一切處不明面前**

得法身去放過即不可仔細檢點將來有甚麼氣 爲法執不忘已見猶存坐在法身遷是一直饒透

息亦是病項日

天街華月影珊珊沉醉東風獨倚欄朝罷九重人舒

後六官猶整尚衣冠

僧道佛末出世時會取尙不得一箇年箇他恁麼 魯祖尋常見僧來便面壁南泉聞云我尋常向師

驢年去項日

寒殿雪壓一枝梅無限春光不放開却被東風輕氣

泄暗香吹入夢中來

信又是水牯牛與作水牯牛又是潙山盾喚作甚 潙山示衆云老僧百年後向山下作一頭水牯牛 左脇下書五字曰潙山僧某甲此時若喚作潙山

馬腹驢胎佛祖家大人行處路途賒枯牛若較爲山 麼即得項日

老頭角輝樂更讓他

雲門因僧問如何是佛門云乾屎橛頌日

山河國土露堂堂瓦礫叢林總放光若使一塵當面

立恒沙諸佛莊遮蔽

金剛經頭十八首

世尊著衣持鉢空生歎希有

著衣持鉢只如斯愈食經行有甚奇何故空生歎希

應如是住

百令人特地更生疑

地何須忉怛費商量

窮途白眼正悽惶忽漫相逢大馱場放下便爲安樂

如是降伏其心

壁閒燈影弄孩兒黑夜翻疑有鬼隨試到天明親看

破許多驚喜向誰提

實無衆生得滅度者

夜來夢到鬼門關無數羅叉擁鐵山唱罷寒雞天大

曉回頭一笑破愁顕

不住於相

乾闥婆城落鏡中樓臺殿閣滿虚空但看無數登臨

客倚艦披襟送去鴻

應無所住而生其心

鳥跡無蹤莫浪尋電光石火豈容心時人但聽春食

噪誰信頻伽殼裏音

無我人衆生壽者

傀儡登壇待鼓鑼大家相聚聽高歌不知線索經誰

手線斷蓋慚最懷懼

四果不作是念

長途客店暫招商一宿休閒豈久長夜夢忽登兜率

界回頭空費好思量

少攜書劍走他鄉主意將來赴選場假向街頭遇占

燃燈佛所於法實無所得

卜報言當作狀元郎

年年鬼景請神巫送退還來作穢汚太上老君如律 持四句偈其福甚多

令諸邪從此一齊驅

心頭痛處有誰知國喪家亡說向誰回首故鄉消息 須菩提感激流涕

断不堪重聽雁聲悲 歌利王割截身體

移王心愛偃師人歌笑歡娛當是眞一怒順教支解

後始知膠漆合成身

帳奪得將軍肘後符 莫道夷門薦狗屠一言然諾許金驅提鎚直入中軍 一念信心即得菩提

三心不可得

斷動君不必計途程

寒空落落雁孤征望眼昏迷里數生自是本來既迹

無法可說

幻戲場中伎倆多歌聲不斷舞婆娑可憐觀者增悲

喜看見其中一線逐

如來說非衆生是名衆生

畫工隨意寫形容狀貌衣冠各不同好聽任他分別

盡到頭不是主人公

凡夫者如來說則非凡夫

實賤原無定準程從來白屋出公卿一蒙天子親宣

詔便是當場第一名

如來者無所從來亦無所去

夢向華胥國裏遊到時歉喜轉時愁一聲雞唱霜天

曉枕上空華落兩眸

净土十六妙觀頌

第一日觀觀落日如懸皷

白日西沉寄所思夕陽盡處有心知一從別後無消

息自此常如見面時

第二水觀觀大水澄清凝氷映徹作琉璃

想

清涼心地碧澄澄瑩徹極如水結永一片琉璃光潔

地休教埋役老胡僧

遊心何處可經行實地琉璃一掌平未動胸段前一 第三地觀觀氷琉璃成就地想

步看來原不涉途程

行樹重重七寶林目前羅列氣陰森花含無量摩尼 第四樹觀觀琉璃地上作實樹想

聚風動常宣妙法音

第五池觀觀七寶池中有八功隱水觀

布念念心開七寶蓮 如意珠王出涌泉水含八德注花聞金雞池底金沙

第六總觀作實樓閣想

實嚴樓閣影重重無量諸天集此中不鼓自鳴天樂

動法音盈耳樂無窮

七寶華含七贊臺摩尼華蕊結胞胎隨心一片光明 第七座觀觀七資蓮華中含金剛臺想

藏自身金容出現來

第八像觀觀一佛二菩薩想

相好光明水月身恰如亡子見慈親從今一識娘生

面不作悠悠行路人

第九佛觀觀佛相好想

毫若須彌目若蓮重重相好總無邊通身毛孔光明

聚照徹三千及大千

第十觀音觀作大士形像佛立頂冠想

長大無邊大士身頂光化佛等後廛細看毛孔含生

土觸目分明是故人

第十一勢至觀作端坐手執蓮花想

光明色相總非差頂上天冠百寶華華裏淨含諸佛

土不知誰是主人家

第十二普觀作自身往生蓮華開合想

心想蓮華量若空託身深處密難通光明照破華開

後醒眼依然似夢中

第十三雜觀作佛大小不定身想

百川月落影參差來去隨人任所之只道兩頭分二

路離知動處不會移

第十四上三品觀

心想遙登兜率宮莊嚴妙麗境重重親聞彌勒談真

諦只恐相逢是夢中

第十五中三品觀

天子求才選孝廉鄉評大小共稱賢一朝特地登金

殿白屋公卿豈偶然

第十六下三品觀

事合言為言下是後 劍樹刀山在目前回光一照變金蓮椎埋拜將英雄

本住法頌書黃檗山無念禪師八十有引事始信爲官不是錢

振其家聲不慧雖未承爾而心光相照不隔一毫 誠末法之津梁長夜之慧炬也宗門寥落賴師獨 歸重納子趨風莫不指歸第一義令入自信之地 歸重納子趨風莫不指歸第一義令入自信之地 上早悟自心開頂門之正眼豎無畏之高幢法門 上與字之三年癸亥仲春二月十有七日廼黃樂

一接鑒尾以結法喜之緣耳今幸值師示生之辰以法忘情無彼我相爲日久矣嗟今老矣愧不能

十方宰官居士緇白衆等各持供養而興慶識不

養之意耳而說項日

茅露地披襟坦然坐是名無畏解脫人從此常依本 大關草芥塵毛體自全白牯黧奴亦知有何況衆生 大關草芥塵毛體自全白牯黧奴亦知有何況衆生 居此體如如一超頓治凡聖見正眼開時生死空迷 悟兩關當下關已過關者掉臂行獨蹈大方無滯礙 悟兩關當下關已過關者掉臂行獨蹈大方無滯礙 層如師子自在遊非是野干可隨逐揭開五蘊封蔀 於是故名為本住法若人

常化生證入衆生無量察院入法界空自性體與虚空等與微塵等無二身塵既入法界空自性體與虚空等與微塵等無二身塵既入法界空自性體與虚空等

篇

座右箴示黄生

好而內喪恬憺自居百骸無恙不爲物誘其神自王好而內喪恬憺自居百骸無恙不爲物誘其神自王好而內喪恬憺自居百骸無恙不爲物誘其神自王

若須彌萬象森羅齊額手日月遊行若電光世界山

法住唯師了此本住法獨踞黃檗最高峰巍巍不動

河鏡中影良以心空身亦空混融萬法無起滅是故

塵與空合即與虎空共一體一切微塵亦復然身

用不臧此之謂善長

我篇

名不思議

名不思議

名不思議

名不思議

名不思議

名不思議

名不思議

名不思議

一切愛情皆由我障我障若空光明無量逐境心に

身箴

一息不來贅疣土苴 學埃野馬衆苦稠林生死曠野味之者多識之者寡 敬咨爾身爾何爲者四大合成內外虛假聚沫芭蕉

心臟

恬憺寂寞其神自寧耿耿常惶善惡之府賢聖之庭無爲欲蔽勿使妄縈耿耿常惶善惡之府賢聖之庭無爲欲蔽勿使妄縈

性箴

阿體圓明爾形精奧不動不遷無相無貌如水之溼

安以俟之無容外慕

母子銘弁序

時間之心驚絶矣.乃蒙恩宥不死遣戍雷陽道經 清因弘法致難上干聖天子怒聲若雷霆私念老

憂乎乃曰死生分定耳我尙不憂何憂於汝但人中略無緘毫滯念因問老母聞兒死生之際豈不故鄉迎老母於江上一見歡喜談笑音聲淸亮胸

之爲母有如此者豈不順盡死生之情乎乃爲之亦與汝長別矣欣然就道了不相顧余因感天下即作承談老母矚日汝善以道自愛無爲我憂今言參差於事無決定見爲疑念耳相與侍坐達旦

銘日

如木出火木已被焚火原無我生而不戀死若不知母子之情酸石引針天然妙性本自圓成我見我母

命譲

無怨無惡蕩居數食龍雲豹霧信乎爾神浮沉有數

咨爾何從實唯天顧壽天窮通聽其所遇不忮不求

始見我身是石女兒

澄心銘示丁右武

這性進淵如澄止水情愛鑿之煩惱頂起起之不休 自性渾濁煩惱無明愈增不覺以我取彼如泥入水 自性渾濁煩惱無明愈增不覺以我取彼如泥入水 以彼動我如膏益火彼凱我真亂實我生我若不生 以彼動我如膏益火彼凱我真亂實我生我若不生 心式之功在乎堅忍暫氣纔發忽然猛省省處即覺 忘我之功在乎堅忍暫氣纔發忽然猛省省處即覺 后便光掃蹤絕跡當下淸涼淸涼寂靜挺然獨立 恬澹恰神物無奧敵

觀心銘

> **腾**處不迷是名心要 心本是佛熟處若生生處自熟二六時中頭頭盡妙 廣大神通自心全具淨土天宮逍遙任意不用求異

師心銘

覺非銘

以迷為寬大地皆錯煩母效獨恬然自樂霎時臨鏡 愈念不住味者冒然, 我分新故善惡选, 脚跟罔措 莫知其極誰使之然使者不知愈新愈迷, 脚跟罔措 莫知其極誰使之然使者不知愈新愈迷, 脚跟罔措 萬里之行步步皆非維人不覺寸步不移人生百歲

自然還僕覺不覺是不知知非是非俱唾萬物齊歸本來面皮毫變無爽無論美惡不須雕琢只任現成忽然猛省俱歇狂心不勞施粉天然秀娟眉目清朗

夢覺銘

歷眼看來無糊自縛念念週光心心返照但不隨情 歷眼看來無糊自縛念念週光心心返照但不隨情 是即電旗腦不結業即不生愛憎堅固實生死根 因果報應捷如影響根若不生枝從何長業有多種 以殺爲先好生惡死彼此皆然驅殼雖異佛性是同 以殺爲先好生惡死彼此皆然驅殼雖異佛性是同 以殺爲先好生惡死彼此皆然驅殼雖異佛性是同 是想馳逐究竟無益諦審思維死生迟疾生死來往 妄想馳逐究竟無益諦審思維死生必變空廓 光明自透漸磨漸落念起即覺覺至無生心境空廓 光明自透漸磨漸落念起即覺覺至無生心境空廓 光明自透漸磨漸落念起即覺覺至無生心境空廓 光明自透漸磨漸落念起即覺覺至無生心境空廓

忘緣銘

情有智愚性無明昧凡聖之分實存向背如臣事君

不出不入無去無來空華世相水月襟懷 妙用常住應緣若響處世如空逍遙物化頓脫獎籠 逃之既久其神日疲不移即悟悟則不顧獨立湛然

觀世銘

四大幻身本無一物愚者執之愛情桎梏妙圓覺心爾滿清淨妄想積迷顯倒增病渴鹿逐缺愈逐愈渴看破即休始知是錯遊戲神通不離日用貴賤好說代生搬弄達人大觀洞然明白離合悲歡了不可得一大塵境界如夢聚實無量貪求一覺便了音聲色相大塵境界如夢聚實無量貪求一覺便了音聲色相大塵境界如夢聚實無量貪求一覺便了音聲色相大塵境界如夢聚實無量貪求一覺便了音聲色相大塵境界如夢聚實無量貪求一覺便了音聲色相

六根銘

如雷擊英忽生毒菌愚者食之誤傷其命維鼻合身患者震驚出口入耳愛情斯起聲已消亡漏方實始恣意縱情識風內數習發竅鳴如簧有聲不知所自於其眞明耳流於聲遺其本聞舌非爽味實多妄語,

不被形拘不為心礙,逈出情塵超然自在 為彼所漂泊其真率是故世人雖生不生若能返觀 為彼所漂泊其真率是故世人雖生不生若能返觀 可為一覺總是浮鹽身多過惡意乃樞機波流毒海

念佛三昧銘

念佛念心念心念佛佛不外心心不是物自性光明 常觀兩足何必待身後方生即現前不出不入此正 常觀兩足何必待身後方生即現前不出不入此正 常觀不足何必待身後方生即現前不出不入此正

正心銘

社**您制情一真既復諸**妄不生 心本光明欲蔽故暗天然之體隨情耗散,今欲正之

誠意銘

妄息即真至誠無息其善乃敦

修身銘

身心不固徒有此生誠爲虚度

齊家銘

澹博寧志是乃聖賢處世之秘· 齊家之要惟儉與勤義體若豐澹薄自醇動儉傳家

六妙銘并引

雪崎山主結廬雙徑之朝陽峰下千峰如指放顧田千指前峰緊抱彎環如角子名之曰麟角且除田千指前峰緊抱彎環如角子名之曰麟角且除阳龍手子易曰來月古人除道曰池成月自來他所許乎予易曰來月古人除道曰池成月自來他別以從金剛際來今峰頂之水。其源必深可喻道於一方處為寂滅場乃大休歇地也此景天然故題稱行處為寂滅場乃大休歇地也此景天然故題稱行處為寂滅場乃大休歇地也此景天然故題稱行處為寂滅場乃大休歇地也此景天然故題稱行處為寂滅場乃大休歇地也此景天然故題稱行處為家滅場乃大休歇地也此景天然故題稱行處為家滅場乃大休歇地也此景天然故題稱行處為家滅場乃大休歇地也此景天然故題稱行處為家滅場乃大休歇地也此景天然故題稱行處為家滅場乃大休歇地也過速耳手而各為之不為於和本也養養有石子名大歇謂阿蘭若眞修

千指菴

千峰卓立直指此卷此卷如空了沒邁屬問卷中主

不出不入有來参者空中一咄 麟角峰

萬木若毛可笑騎者不動一毫 墓走奔騰一麟自足惟麟所重在乎角獨片石如麟

來月池

池中之月去來之相了不可說 月原不來水亦不去騫爾相逢不知其故水底之天

洗月齊

水酒月影可惜觀者熟夢未醒 月本無塵水自清潔從何處洗求之不得月鹽水中

過乳泉

水中學乳須是寫正此不須擇在乎善嘗不許入口 要先知味惟知味者飲之心醉

大歇石

石不善走爲何要歇歇之大者爲本寂滅趺坐此中

般若軒銘并序

不動不搖吐廣長舌松風夜號

冤棄妻子結隱於天目無何復過雙徑居此軒閱 棲息所隱故奇士在公舉鄉進士為那司馬唾軒 般若經大有省發子目南嶽來以達大師末後因 軒因閱此經以得名也為吳門居士朱鷺王在公

終得至此山居士見而歡喜·執弟子業子歎日非 因名朱日大力,王日大鐵額其軒日般若乃爲銘 大力量欣寂滅之樂者何能頓脫塵累而至此耶

以紀之銘日

軒中主人身心快樂一切情塵火聚太末問此法門 圓通点豁世出世閒一齊拋却此軒之味恬憺寂漠 咄哉此軒光明透脫內外洞然了無轉著六根門頭

名不可說

毗耶室銘有序

但以香飯而作佛事老人過其室因請銘之銘日 生產唯結一室顏日毗耶以延十方以無法可說 居士管照應生長吳門早歸三寶不畜妻千不治

毗耶離城堅固綿密雖居市廛而無廛跡中有居士 獨寢 一室門不通風六窗虚寂唯有十方不時雲集

参巴下古本

偈一七十二首

唯心偈

憨山老人夢遊集卷第三十六 記此金剛用垂不朽 我法非有兩者既離一亦不守唯法身香與爾作親 維此如意代我心口我不能談借爾善吼爾言不無 萬累俱捐諸緣頓息在塵出塵斯爲第一 露地爲席諸有屏空一廛不立身心兩忘世界齊鄭 有問法者止是一默香飯不請隨綠捕食座不用借 鐵如意銘并引

予別雙徑雪轎山主以鐵如意并香產為供感而

深入塵勞泥不染世閒垢懷此如意珠隨求無所乏 動靜平等如境界風不動寂滅妙常樂清淨若蓮華 起處即無生當念自空寂了無前後際一念若須彌 神光照暗冥音覺諸合識 善蓮業性空不爲幻技惑不著亦不厭如理論實觀 衆業若空華本來無所有以無所有故故說即真常 其體難諸垢不捨染淨緣世與出世閒成就衆善業 淨妙不思議圓滿眞實心廣大具威神變現無量事

居山偈

凡聖一齊拋方脫壞生累一物不將來猶是第二義 磐石作禪床雲霞爲葢波微風歐幽松發明西來意 借問山中人居山有何**越**日飽三頭粥長伸兩脚睡 覺來雙眼空回視夢中事榜樣水底月却翻成鈍滯 撥落雲裏華刮除眼中醫一念絕中邊了無前後際

憨山老人夢遊集卷第三十七

門

Å

通

畑

編輯

嶺南弟子

劉起相

重較

侍

者

福

善

日錄

大澤禪人三度衛海參禮因示

逐出無事關始遂居山計

若向外邊尋走盡天涯路來來去復來此法原無住 萬里為誰來來復爲底事靴裏摸指頭原不在別處

試問曹谿僧菩提可有敬若不得一校枉費賣單布

示道脈源禪人

打破黑漆桶方是大休歇安想頓潛踪身心富下撤娶見本來人如空中釘橛是起金剛圈脊梁勁似銕努力望前追直使命根絕是起金剛圈脊梁勁似銕努力望前追直使命根絕

題恒河圖示恒一林禪人

是名金剛地佛子善安住 佛住恒河岸常對河說法至法難思處即以河沙喻 精性恒河岸常對河說法至法難思處即以河沙喻 是名金剛地佛子善安住

觀緣偈

如海若能一念暫迴光當下即令登彼岸妄葉積聚中性返人天無量劫妄念不止苦無涯妄境不空業中性返人天無量劫妄念不止苦無涯妄境不空業

生不能出錢湯爐炭本來無只從一念瞋心起若於生不能出錢湯爐炭本來無只從一念瞋心起若於

示念佛

念佛本為超生死先須要識生死心癡愛便是生死外別尋覚

圓明偈示畢一素失明

耀原無窮若能自見心光滿了了常明不用眼此是如茅屋心在身中鳥在龍誰能撒去茅屋封光明照生盲暗中人亦有兩眼如何不與日光通我此四大生盲暗中人亦有兩眼如何不與日光通我此四大小光圓明本無量苦彼浮塵眼邁障隔紙不能觀外

不早順抛四大光明全此是吾家如意實不早順抛四大光明全此是吾家如意實不光全不須白晝怨不見只如有眼黑夜眠拔遞障天光全不須白晝怨不見只如有眼黑夜眠拔遞障天光全不須白晝怨不見只如有眼黑夜眠

登崐山示同遊諸子

驚起忙來試問空中人依然指出舊時底之頓入蟭螟眼孔裏時人一望忽不見紛紛四衆皆員山城中一拳石大似須彌納芥子我來策杖一登

梁壓譚生示之以偈

障看逼狗跳牆 所以目前境界不此梁譚生何苦先惶障若要不惶 所以目前境界不此梁譚生何苦先惶障若要不惶 所以目前境界不此梁譚生何苦先惶障若要不惶 所以目前境界不此梁譚生何若先惶障若要不惶

示輻智字本明修淨土

缺欠佛土全收一念中便是往生真方便只在了了明即與彌陀親見面只想淨土在目前日用頭頭無

分明時不可更起差別見

見争

· 記復於此中多貪為罪數唯在智眼觀畢竟何所有是身如水泡乍現亦不久擬兒以為珠取之不盈手

觀心

妄想逐塵勞渴應奔陽酸堪嗟今古人都壓良爲腹此心本無形視之不可見起滅了無端迅若空中電

示衆

運修目前總是菩提路念念常登般若舟 電須信人生水上漚唯攝一心歸淨土全憑萬行作

示無相老納

刀鋤百千萬劫俱空度莫使今生又涉虚覺妄想無邊念念除淨土蓮華禪水灌心田愛草慧見爾初年六十餘別來十載近何如光陰有限頻頻

示沈生成德二首

物本無可欲而人自欲之甘苦味不同嗜者以爲奇濕寢人必ങ無得方不死物性各有宜苦樂何憂喜

示六一居士二首

迹近寧違俗心空豈在家但看汚濁水湛湛出蓮華 世事忽如夢人情空若雲誰知塵市裏心靜即雕羣

示普聞禪人

不辭行脚苦萬里涉山川今到曹谿路離酬不借錢

示金山貴禪人三首

苦海深無底浮生事有涯不知三界內何處是歸家日日廛勞裏朝朝愛惡場不知因甚事專一爲他忙一白髮愁難解紅塵路不通身居人境內心在萬山中一

曆本淨禪人結葵白雲

獨坐千峰裏慵披百衲衣靜聽流水響閒看白雲畫

示本昻字俛無

有我必自高驕矜還恃氣俛而至於無便入淸涼地

示慧珊字海月

大海聚衆實撑拄唯珊瑚明月時來往清涼並夜珠

示淨堂禪人

一鉢隨孤杖三山結衆綠曹谿涓滴水關盡草輕錢

示劉生四休

一味常知足多求總是差飯蔬食飲水只此了生涯

菩提葊八景有引

莽在嘉禾之石門, 爾生生居士所建為智河行公

菩提山

安居予之徑山過此因而有題

不到菩提山安藏菩提境獨有山中人忘言心自省

翠城

蒼翠繞法城宛似金剛圈佛魔俱不入其中空空然

古觀音像

觀音有後先法身無今古以絕去來心故能常教苦

羅漢松

挺挺孤松樹堂堂應眞相若問涅槃心枝頭明月上

蓮花灣

蓮生淤泥灣其性本香潔瞻彼花中人端坐無言說

放生池

一片無生心全彰放生處令彼鱗甲類盡聞無生路

漚生塔

温生本不生溫滅原不滅獨留無縫塔寒空照明月

以患能除患槐樹愛生長見此槐子珠頓發離患想 山居示衆二十五首

枯木巖前路行人到此迷應登別峰項更上一層梯 微塵含世界不信盡包容真道微塵小應知世界空 傀儡夜登場觀者生欣歎祗合醉中心雖禁醒眼看 湛湛青蓮花居泥而不染明明出世心雪在玻璃瓷 四大衆緣合妄自分妍聽試看幻化人情識從何有 紅塵路更長青山閒不了試問往來人誰識山中好 世事一局棋著著爭勝資黑白未分前幾箇能惺悟 清淨光明藏俄然一念與無邊生死海盡向此中生 寂寂離知覺昭昭泯見聞三更天外月一片嶺頭雲 獨坐一爐香翛然萬慮忘靜看階下蟻畢竟爲誰忙

> 人道百年長我道百年短枕上夢三更醒人未轉眼 大海一滴水具足百川味法性本自同味者見各異 寂寂忘綠處心心放下時西來無別意只在自知之 萬法唯心造千途一念差不知未起處苦海正無涯 自性天真佛都為妄想纏但能一看破立地證金仙 我相真難破他非甚易求一生閒檢點到底沒來由 山林多寄興寂寞幾龍甘不到眞休處於成落口談 世路多經經虚名最困人脚跟絲稜斷方許出紅塵 逐逐奔陽燄行行入火坑黨能開隻眼當下了 片閒田地多為無草侵但能時刻却便是出塵心

示衆十首六言

死盡偷心活計做成沒用生涯收拾無窮妄想換將 杂 蓮 花

四大支持骨立寸心寂寞寒空獨有縣縣一息龜毛

綾繋長風

淨土唯心現蓮花性地香目前常不味即此是西方

妄想沈淪趣清心解脫場迴光時返照覿面禮空王

舉世要多求求多轉生惱唯有知足心便是如意實

炎炎火宅中熱惙無迴避一念放下時頓得清涼地

岸樹懸崖坼枯藤古井深那堪二鼠嚙況被急流侵

却說百年如夢誰會兩眼聆開縱是機關使盡到頭 總是凝騃 可惜清涼心地無端迸出貧瞋霹靂心中火起燒發

自性天眞

身是衆緣假合四大團一虚空動作呼爲真率不知

誰在其中

陷阱機關自造刀林火護誰當只道目前慶快安知

身後苦長

妄想輕遮

貌是超塵儀表衣爲出水蓮華試看胸中何物莫教

業力相牽

蠶繭自生溫縛燈蛾誰使焦然將謂投明用巧豈知

漫罵虚空

名是假名非實毀譽入耳如風試聽呼為賊草猶人

荊棘林中掉臂是非場裏抽身落得無窮冷澹者般

全不饒人

偈一三百八首

園中讀圓覺經四相章

我相

鐘鼓鈴羅不斷聲聲聲日夜說無生可憐醉夢傷生

者鏡裏相看涕淚傾

人相

突兀巑岏聳銕城刀林劍樹冷如冰誰知火向冰 Ш

發燒盡冰山火不生

衆生相

客不知因甚此中來

銕門緊閉查難開關鎖重重亦苦哉可怪呻吟長夜

一條血棒太無情觸著須教斷死生痛到徹心酸鼻 壽者相

處方知王法甚分明

出園中過長安市四首

选一聲雞唱五更鐘 長安風月古今同紫陌紅塵路不窮最是喚人親切

體若虚空自等別纖塵不隔萬重山可憐白日青天

客兩眼即即歎路艱

飄風聚雨一時來無限行人眼不聞忽觸雨收雲散 盡太虚原自絕塵埃

空裏乾城塋馬人目前彷彿似煙邨直須走入城中 看聲色原來不是真

過吳山經堂寺遇明通禪人禮華嚴因示

到處山河即本真大千經卷一微塵閒來剖破輕拈

出莫道文殊是智人

過鍼佛葊脂鄒爾瞻給諫

江上青山不斷春門前流水淨無塵開門忽見葊中

主拾是金剛不壞身

示沙爾照理

出家本意緣何事割愛辭親豈等閒不向袈裟求解

脫松門翻作鏡圍開

題東山寺壁

和獨目分明向上機

咫尺東山入翠微深林晴日雨霏霏市鄽流水聲相

中盤旅邸壁閒見達師偈併題

君到曹谿我不來我到曹谿君已去來來去去本無

心誰知狹路相逢處

處石頭滿眼盡無生

避難石

無端一念惹膻腥從此形骸累不輕十載隨叢張網

命小師大義讀楞伽

玉綾金銀不易穿休從明月問青天玄關路斷無消

息爾去逢人莫浪傳

問丁右武大参病

學世誰知病裏身維摩獨坐見偏真從教大智懸河

辯一默昭回萬象春

示果弘福堂二侍者歸故山

去縱出頭來已失真 萬水千山枉問人脚跟一步最爲親莫教錯落懸崖

瀰茫煙水望何孤底事逢人問有無回首萬山淸徹

骨尚餘春色滿平蕪

自南能度嶺時曹谿御墨尚淋漓於今重載琅函 贈蔭亭上人請藏經歸南雄延祥寺

至位看炎、死雨露垂

送計禪人歸慈化

杯浮一葉淼無垠煙水茫茫苦問津歸去家山生意

滿百花深處鳥號春

示査汝定

- 548 -

涉水登山亦壯哉芒輕遙自敬亭來入門一笑忘賓

主莫道維摩口不開

題雪山苦行佛

萬山冰雪連根凍一片身心徹骨寒不是死中重發

活如何能得識情乾

無端東却金輪位特爾令生大地疑自是九重深密

事從來不許外人知

輕拋兜率入王宮一顧迴頭思不窮走向萬山千丈

雪埋身八面不通風

心似冰霜骨似柴六年凍餓口難開誰知忽睹明星

上落得盈盈笑滿腮

答定際賀明府

函蓋乾坤一句新晴空霹靂淨煙塵箭鋒柱處難回

互狹路相逢是故人

青獅白象駕雲中。金色銀光出處同若問無生端的

意空山風雨吼長松

示歐生羽仲傳經訶林

斯道幽徽若一絲全憑信力以維持苟非一片金剛

地難使菩提葉葉斯

医樂天法師還匡廬

舌心震當年舊講臺

贈西來梵僧

十萬西來碧眼胡渡江晉折一莖蘆只今石室獨留

影試問前生是有無 輓本來和尙

五年三度叩禪關此日尋師去不還不是白椎兜率

院多應聽法五臺山

送如證禪人造旃檀像還五臺

火雲赤日滿炎荒金色光含古道場不是曼珠親出

現離知隨處是淸涼

看觀面當機一句新

海岸旃檀淨法身無邊相好隱微塵分明剖出諸人

寄大千法師

三十年前同法席別來消息斷他鄉忽聞近住千峰 裏想已心空聞妙香

山色湖光一鏡開曼珠誤落此中來莫教獅子輕彈

示曹谿塔主

香火千種似一朝兒孫終夜守寥寥茶湯宛若生前

供不資當年石墜腰

勉曹谿諮弟子十首

付如何得入祖師關 千僧和合以靈山大衆依歸豈等閒不是曾蒙親囑

去不須害口再叮嚀一肉身現在即如生朝暮茶湯出志誠鐘鼓分明常說

福田種子要深栽因果如臨明鏡臺親到賣山千萬法不須苦口再叮嚀

一次者囘不可又空囘

辛動作務莫辭勞可想當年石墜腰一息不來千萬

劫善根不種苦難消

後幾時再到寶山行

去免使盲人又夜行功德園林不可輕脚跟步步要分明莫教錯落隨他

懒等閒換却一雙睛 寸椽片瓦衆綠成信施脂膏不可輕切莫貪他驢糞

角酬償夙債苦泥犂

信心膏血重須彌粒米莖薪不可欺但看披毛弁戴

幸生中國遙雕慶身著袈裟遠六親受用空門清淨

福如何能報祖師恩

· 始得成材出鄧林 少小能存向上心。毫芒終長到千零只須歷盡冰霜

示曹谿沙彌能新智融達一淨洗通文方覺

書華嚴經七首

說只在當人著意聽部破微塵出大經無邊刹海遞相形松風鳥語分明

佛境重重不可量毫端三昧豈尋常須知學手通身

現觸處全彰海印光

行行雁影落寒空直豎横斜但信風莫問普賢求妙

毗盧樓閣幾時開彈指感須待善財順見閣中無盡行先須識取主人公

福城東畔禮文殊知識遙多到海隅五十三人同一藏重重佛境甚奇哉

調不勞遠涉費程途

— 550 —

海波為墨亦須乾筆若須彌舉不難描寫毗屬華藏

界最初一字許誰看

紙墨文言總不真真經至在剖微塵但能字字光明

現莫道文殊是智人

較萬固寺一山和尚

二十年前問起居相逢猶是在生初只今遙望中條

月獨有清光照竹廬 寄高常侍

憶昔長安話別時雪中把臂立臨歧而今萬里炎流

外一念清涼君獨知

贈訶林裔公

·自會經親手一封泥

菩提樹下久棲遲時復經行繞樹思遙想當初栽樹

贈頭杏園醫士

雪山衆草鬱菁葱信手拈來用得工不是等閒醫國

手肯教狼藉怨春風

贈太和老人

金剛堀裏舊相逢雪鬢鬔鬆氣更雄一盞玻璃茶尙

醉依稀酒記放牛翁

5 1

送邏侍者遊五臺彙訊空印法師

遙從火宅入清凉萬里休言道路長**黨見**又殊問消

息堀中今空幾禪牀

菩提樹下舊相逢千載重來氣尚同鐘鼓擊沈香不 過法性寺菩提樹下禮六祖大師

斷兒孫何故覓玄蹤

送離際禪人参方

汝持一鉢曹溪水偏瀝諸方五味禪莫道老憨無法

說而今不直半文錢 送若惺炯公禮普陀

波流不動白華山滿月寒空大士頭若向嚴前相見

處瞻依須聽普門還 喜法侄行廣至

處一笑還追夙世緣

憶昔離家別組年爾應猶是未生前今從萬里相看

問游石陽病

借問毗耶病裏身就中檢點熟爲眞只須剝盡重陰

後始見陽和大連春

送惺來裔公行脚

瀰漫煙水淼無窮回首山城歷百重抵爲尋師多底

事德雲不在妙高峰 憶昔千花七寶臺一花一葉一如來不知近日花閒 **懷大都千佛寺**

佛可似當年慶法雷

示能哲禪人

望芳草漫漫何處家

爾到曹谿路不差眼前行脚未爲黔武看初出門前

清涼雪夜共談禪一別於今二十年常憶毗耶員面 寄王居士

再過法性寺喜炯公禮普陀歸

自寒空明月幾回圓 三年不坐菩提樹一念常懸般若燈莫謂頭陀備說

詠楞伽室寄天與孔居士

滔滔毒海渺無涯夜刹羅叉此是家獨有楞伽無價

法道緣不似獵叢僧

殿照破三千及大千 寶光明日夜照恒沙 八面光明體最圓金剛維利不能穿時時安置心王

摘得先春葉一枝寄將鶴骨病阿師試烹一盞親嘗 曹谿雪茶寄金山珍公

過可似初麥趙老時

甲辰春奉傲還戍舟泊支江邁炯二公啓南

羽仲仲遷諸子過訊因示

暫緊孤舟傍柳陰端居恰以逝多林菩提樹下常隨

录怪道能來問法音 示堪輿梁生

處肯教埋沒世閒人

山河大地一微塵法眼圓明始見真自是要求歸著

示羅浮山主印宗

羅浮山下繞恒河河畔祇林似普陀若問華中觀自

在試看明月墮清波

贈周相士

落魄江湖一馴綠相心神術自壺丘逢人若問榮枯

٢

。事 段眞光在兩眸

示性如濟禪人

底事南遊學善財爲尋知識久徘徊妙高峰頂無**蹤**

跡莫道文殊錯指來

示普陀勝林禪人

普陀山下白華邨日夜潮音說普門試問葊居何所

有但聞鸚鵡報黃香

聞惺來裔公於雲棲受具歸以偈訊之

條拄杖活如龍相伴曾登天竺峰自向雲棲聞法

後諸緣可順一時空

山中夏日

竹狀瓦枕足松風午睡沈酣夢想空四體百駭俱作

客不知誰是主人公

靜夜鐘聲

鐘聲清夜響寒空一擊如吹萬竅風不是閒催龍聽

法多應喚醒主人公

示泰和周生

大道從來在目前却於死處覓枯禪誰知日用頭頭

事盡是無生最上緣

道力何如業力强就中生熟好思量臨機遇境能回

互順息迷途演若狂

示圓通總持長老

藥死猫頭話最堪思

西江一派自曹谿馬祖頭逐孰可醫若向圓通覓生

示龔生伯起

數千里外訪知音只為從人覓此心及至相逢親見

面始知昔日費追尋

示慈明賢禪人

錫遊從多實來南詢煙水獨浮杯歸途若過曹谿

路路滑休行雨後苔

戊申夏日重過羊城偶成

仙城巳度十三載人世今過六十年回首塵寰如夢

事不知究竟屬何緣

當年一鉢歷諸方到處名山是道場喫盡檀那無米

飯至今酬價費商量

五臺千尺雪蒙頭只道寒灰死便休誰想一 星星火

種焚燒大地更橫流

東海晉衝萬里濟奔雷破石浪頭高輕乘一

去直踏三山釣六鰲

示正位侍者

極盡懸崖百尺竿動移一步最為難只教撒手翻身

去不作貍奴白牯看

示悅禪人誦華嚴經

百城煙水望如天何處相逢問普賢想向妙峰山頂

過不知會說此因緣 示飯頭

德山托鉢幾時來去米長沙莫浪猜休向上方香積

借火爐邊事亦奇哉

寄五臺妙峰師

玻璃世界水晶宮金色銀光處處同獨跨金毛獅子

步遊行八面不通風

冰霜鶴骨髮如銀誰識曼殊最後身一自堀中相別

後至今不隔一微塵

拄杖橫挑刹海遊無邊刹土一塵收閒來擘破微塵

看洛盡空花剩兩眸

千丈寒嚴百尺永當年相對坐崚帽即今火宅清涼

界一个維摩一个價

寄五毫空印師

法萬人時聽海潮音

遙思遊戲葉花林獨坐旃檀寶樹陰不動舌根常說

一自抛身瘴海瀾蠻煙毒霧儘加餐歸來渴飲曹谿

水不減清涼徹骨寒

示曹谿紫筍莊莊主

一夕東風紫筍肥無邊春色到柴扉林花滿眼無人

問誰薦當陽向上機

寄枝隱

白門深隱一枝安山水娛情世念殘晉入維摩方丈

內百千三昧一毫端 示杲禪人閉關

處直教拶破太虎空

六窗緊閉不通風何事藏身入此中試向文殊彈指

贈融禪人住持泰和大司局郭公忠孝寺

脫體原從瘴癘天三生又結宰官緣維摩丈室渾無

語莫道無言不是禪

示懷愚終堂主

向上三玄動步疑言前一句許誰知若非撒手懸崖

去辜負機生兩道眉

寄靈山桂峰師

墨山一會儼然存松柏雲棲滿鹿園自是法身常說

法分明鐘鼓報黃昏 寄東海劫外法師

衆幾度聞經到講臺

親受靈山付囑來法筵今向海濱開楞伽山頂魔羅

示南禪人

爲問毗耶病裏身不知誰是病中人二時粥飯三餐

樂學得分明意最親

寄賴古軒居士

長齋一室事空王心地時焚般若香遙想日長趺坐

·競靜聽鳥語出山光

寄謝靑蓮居士

意自信居塵不染塵 鼎湖山居

裏坐看閒雲白畫飛

寄明宗法師

布只教平地淨塵埃

曾從兜率白椎來一受金箆法眼開會向今時傳露

江頭促膝別君時回首青山入夢思爲問花臺千百 寄蘊法師

衆言前一句幾人知

寄巢法師

細知君無物可思量 披雲帶月飽風霜清夜迢迢鶴夢長讀罷楞伽香家

寄雨法師

奠堀中君作衆歸依

久從鷲嶺現當機誰問雲奧花雨飛莫道法筵今寂

示中孚表禪人

常憶靑蓮居士身夢魂時對鏡中人知君深得無生

歷盡風波總是非此心久巳習忘機翻身直入千峰

世緣看破解歸來火裏蓮花不易開直把根塵都洗

盡莫教再入者胞胎

示無知鑑禪人

明明佛性本無遮自是從前一念差失脚久沈生死

海者同切莫至蓮花

示微密禪人

鈦靈遙自伏牛來度嶺寒梅花正開若問曹谿親切

句菩提無樹鏡非臺

示凝知瀚禪人

沒再出頭來已失真

圓頂方孢八寶身出家本意要超塵若爲煩惱輕埋

寄湛禪人住伏牛

暫持一鉢到曹谿跋涉寧辭獨杖黎聞道萬山深隱

處夕陽斜照鳥爭號

寄題郭次公如是院

舍衛曾開祇樹林君今重擬布金心法王如是至提

處獨許文殊是賞音

答郭允叔

路雲滿青山月滿天

寄衲雲法師

當陽剖破一微塵拄杖閒提用處親明月夜深崖下 虎歸依猶以昔時人

南海旃檀香一枝法身隨處現雙眉迎歸寂寂松陰

送僧造旃檀像歸茶菱

下猶似拈花不語時

贈郭生凌舄

受齋繡佛禮空王火宅翻為選佛場夜剔明燈心寂

寂進花不必想西方 將之南岳留別嶺南法社諸子十首

會向曹谿問上乘西來密意屬南能吳言杜口維摩

語不是當年有變價

寄題郭叔子太乙囊泉亭

清池明月影沈沈雲水江湖濟度心試問遊魚眞樂

處豪梁未必是知音

禮謝千華寶座前却從臨濟第三立今來更問曹齡 示弘範禪人

落風塵二十年相逢須信是前綠自從衣鉢南來 水灌溉西來五葉花 爲法寧辭道路賒豈云瘴海是天涯頻將 滴曹谿

後今日重拈直指禪

底事分明在已躬不須向外問窮通但能觸處回光

照莫被塵勞困主公

大道從來絕本真多因分別强疎親直須看破娘生

面方是塵中特達人

瘴煙飲盡齒猶寒不記從前道路難此去萬山深密

處雲霞五色座中看

廿載驅馳走瘴鄉年來不覺鬢如霜今乘一葉扁舟

塵勞混迹久和光只爲拈提此事忙千尺釣竿幾斫 去蹤迹應從萬壑藏

盡海天回首更茫茫

自歸依繞法壇時時爲乞此心安莫言別去三千

里明月中天覿面看

時把綸竿見素心竹枝唱罷幾知音扁舟歸去霜天

夜明月蘆花何處尋

寒空歷歷雁聲孤蹤迹從今落五湖無限烟波寄愁

思片肌天際是歸途

憨山老人夢遊集卷第三十七

憨山老人夢遊集卷第三十八

侍 福

善 日錄

嶺南弟子 劉起相 通 畑 重較

門

偈

示鄒生子胤十首

此事明明絕覆藏普天而地露堂堂男兒不突金剛

眼觀體相看若面墻

見聞知覺總空花臀未除時見轉差只待晴空清淨

眼方知別有好生涯

聲色場中豈偶然自將荊棘苦多天何人一擲翻身

出始信隨緣自在禪

妙性圓明自本真從來皎潔絕纖塵不教妄染輕邁

障便是超凡大力人

道心原不離尋常待客迎賓底事忙試看个中關淚

子何曾移動一毫芒

五蘊山中寂滅場六窓虚敵夜生光只須喚醒葊中

主莫使昏沈自盜藏

息一任猿路日夜號 湛湛心光本不迷祇因情想自暌攜但看起處無消

性天雲淨月輪孤身世何須問有無但得塵緣從迹 斷不勞名字挂江湖

世緣逐逐幾時休弃却家山向外求衣底明珠任埋

沒長途空自抱窮愁

太農閃電不留情憎愛何容逐隊行擘破壞生真面

目肯教埋沒過平生

寄袁生

會將書札寄南能問法遙參最上乘三昧知從文字

入不知可記音時僧

示水天禪人

知識相逢豈易哉个中消息口難開妙高峰頂經行

處不是平空賺善財

示譚復之

事頭陀不是易開頭 會從授記向靈山今日重來一扣關為問拈華當日

示鍾生衡題

會過曹谿巳十年相逢知識總前緣阮生何必窮途

哭自有西來最上禪

示方生覺之

熟故來重理舊因緣 心光獨露形骸外祖意能參機語前想聽匡山蓮漏

示常達禪人

南岳曹谿一脈來相傳明鏡亦非臺金剛正眼人人

共須向磨頓一句開

示宗立禪人

幻成五蘊本來空必欲求之似捕風試向渾身消散

後應須識取主人公

示南岳庸質山主

萬山深處一茅菴朝暮雲霞當小參最是谿聲關不

住廣長日夜語喃喃

南岳山居

七十年來夢裏過江湖蹤迹總蹉跎而今喜得閒田

地莫問從前事若何

脚跟踏偏水雲鄉未難清涼古道場筋力漸衰心已

倦安眠飽食是行藏

樂誰知當下是西方 大休歇處不尋常妄想消時世已忘都向別求真極

影佛祖何須向外尋

但見無生寂滅心了無妄想敢來侵根횷總是空花

觀心生處了無生閃電光中眼倍明爲問西來成底

事今人都只解貪程

示廬陵僧密潔公

廬陵米價近如何問著休全學似他一粒伹能輕嚼

破始知佛法總無多

西江一派馬師禪聞道而今久失傳莫謂磨甎堪作 示杜言禪人

鏡自然不墮路途邊

示定水禪人

久依華座覓眞詮鐘鼓分明句句立若問西來端的

意從前佛祖未會傳

示量空禪人接待武昌

者離鈎三寸幾人知

聞開梵刹向江湄來往風肌正渡時爲問華亭垂釣

題方覺之離垢菴

地顧見如來妙法身

芥菴中絕點塵從來無物可相親靜觀寂滅清涼

題羼提菴

跡苦樂從教當下休

物我如空不可求無邊大海一浮溫但看起處無蹤

示天淵禪人

取是誰兒色與聞聲

示六義禪人

過者回豈忍貧空王

死生大事莫商量說起愁心可斷腸無量劫來都錯

已躬下事甚分明不用尋師費遠行只向目前親薦

-559-

寄若珠法師

屑恍如賓主對談論 蓮華峰下住菴人日與雲中五老親瀑布從空霏玉

示雲居常元禪人

出世原為宪此心非圖名字挂叢林頭話多到無心

處不向他家外面尋 寄海會養主

十万海會此爲家來往經過路不差香飯飽餐回首

答雨法師寄法華新疏

去出門煙水更無涯

靈山一會費而量四十餘年久覆藏今日通身全吐

閥門緊閉不通風多少躊躇歎路窮不是輕勞彈指 露分明只在一毫芒

力安知裏許量如空

窮子歸來見父時此心相委信無疑縱將實藏全分

付若不掀翻總不知

破自今常御白牛車 無邊刹海總蓮華可歎從前盡數沙君向毛頭親點

示素璞禪人有引

子與若師雪浪爲法門兄弟命禪人持書遠走南 禪人向參子於曹谿尋歸吳門頭巢兩二法師以

偈用以志懷

岳迎子終老子感二公高誼念禪人遠勞因成二

曾禮曹谿走瘴鄉歸依三而繞禪牀分明一句無生

話莫道當時有覆藏

託餘生不必問何如 遙持一紙故人書特向空山問卜居一片身心全付

答巢雨二法師

法門義氣信非常自是青山骨肉香擬向通玄峰頂

吳門山水最幽清二朝高峰久著聲黛得煙霞期共

上忘言相對一繩牀

老安眠飽食遂餘生

示浮刹禪人

熟把似君前不易餐

遙向千峰問賴發口邊寒涕未會乾火中黃獨初煨

示大智禪人

竹杖芒鞵過萬山遠從南岳扣松關石頭路滑難移

步莫道多方是等閉

題別峰相見卷

百城南望盡煙波峰頂相逢事若何不是善財無面

日紙緣知識信請譌

訊專愚衡公病

四大久觀如泡影病魔何處可潛蹤古人自有安閒

法只在無生一念中 示若批禪人

路須信漫漫草更深

行偏天涯覓此心從來都向外邊尋縱然未出門前

寄徐藩莪

時問維摩病裏身門開不二露天真飽餐香飯忘言

後方信離情道始親

示心聞禪人

本來自性量如空見色聞聲樹過風但使浮雲消散

盡幾會一物著其中

示三昧真禪人遊峩帽

雪雲白山青何處葬

示徑山靜主

斷大千隨處現全身

電光石火豈爲異瞥地相逢未可親若是本來消息

若埜音禪人從黃梅走南岳復多雙徑示之

以偈

遠行南岳覓行蹤喜得黃梅一稜通別向五峰相見

處萬山雪擁白頭分

策杖遙來雙徑深別峰相見是知音故人若問餘生

示無瑕禪人

事萬量雲山一片心

示念西居士

南詢煙水百城過知識相逢事若何更向五峰深處

覓須知佛法本無多

示勤如禪人禮峨嵋

遊從雙徑禮峨嵋涉水登山爲阿誰儻見普賢眞面

日莫教辜負一雙眉

歷偏諸方好歇心不虛名字挂叢林歸來滿面峩嵋

示徑山堂主

雙徑單傳佛祖心蒼崖翠竹古叢林應知正令常新

處鐘鼓時宣妙法音

輓幻予師

寒嚴凍餓有誰知絕後重甦賴阿師今日五峰鬩塔

影恍然猶對坐談時 示仁安法師

身心一片似冰壺試看其中是有無妄想不來消息

断何須此外覓工夫

過苦提菴喜逢智河彈友

原是菩提樹下人到來恍忽見前身谿聲常說無生

法可惜時人聽不眞

樹下相逢舊有緣別來不記幾生前入門一笑心相

契始信無言是祕傳

示詢南禪人看病

出世何爲最勝因目前看破病中身知他痛癢相關

處萬行無如此念眞

示德門禪人校經

看纔著纖塵便失眞 海眼從來絕點塵大光明藏可安身只須仔細從頭

示非玄曉禪人

晉向慈恩理教綱釣竿抛却歷諸方於今若識孃生

面不必將心問法王 過甘露接待寺

登山涉水總迷途宋審前郎是有無驚直忽逢甘露

遭續沾一滴 破焦枯

示承批禪人持明密行

孔始是持明祕密修 烈火炎炎妄想流醍醐須灌頂門頭會教一滴周毛

澹泊齊示雲山居士

壓中一室冷如冰跌坐長明午夜燈來往應真時滿

座人人知是在家僧

·示蓮西居士

養極樂何須向外求

妄想生時當下休了無一念挂心頭忘機便是真安

題達大師書經墨光亭

聞道蓮華筆底生墨光猶自照虚明閒來為問華中

主滿耳秋濤說法聲

示曹生錫卿

丈夫立志豈尋常刺股懸梁苦備嘗但使六根無垢

濁管教心地自生光

遊浮山於妙高峰下聞智燈禪人誦法華經

因題於壁

水上蓮華舌上經一卷深鎖萬峰青松風日夜常宣

說可惜時人不解聽

示真屬沙爾

生死無常一息防好將心志在青山。但能不作紅塵

業贏得終身物外閒

医山喜陳赤石大参過訳

萬疊青山一片心目前處處是雲林不須更問西來

意水鳥時宣妙法音

示修六选公拖關金輪峰

萬仞峰頭獨坐時身心放下是全提銀山鎮壁須鑽

透徹底分明不許知

日休教惡水驀頭澆 示寂知慧林二禪人

學人不必苦馳求妄想消時得自由但自披衣閒處 看心心不斷是誰流

送悟心融首座還京口

空山擬伴老餘年何意東歸上法船好待海門孤月

上話頭一爲老僧圓

勘破塵凡萬劫心歸來遙向白雲深金輪峰下松濤 示達本禪人

急日聽無生妙法音

身心久在白雲中何事隨綠任轉蓬收拾歸來全放 示本懷禪人

下萬山高臥日頭紅

抛却身心禮法王前程不必問行藏但能識得集生 示行素侍者

空山寂寂絕諸緣不學諸方五味禪益者不須求向

上但能放下自天然

示恒一禪人

此事從來不外求見聞知覺有來由但知日用頭頭

現奠落隨緣第二籌

示克文禪人

空華起滅本無端爭奈人人響眼看須信騎空無處

竟丈夫切莫被他瞞

示互壑禪人

坐斷千峰不問禪爐香經卷是生緣但能此外無餘

事自是塵中極樂天

若惺炯首座遠來相訊因示

苦海相從二十年重從廬岳禮枯禪相看莫問餘生

事五老雲霞在目前

度偈以壽之 念雲禪人遵乃祖命接待吳江今逢六十初

廛中覺路敞雲堂偏布身心滿十方一片祖豫常住

示眉子

火宅炎炎不易清六根銷機可憐生但聽一念如冰

冷便是超凡第一程

送昧法師應講維揚

夢歸來毫相不會收

偶乘一葦截江流法鼓雷鳴彼岸頭無數羣生開大

示鄭白生居士

處日用頭頭只自知

一片身心放下時直教內外似琉璃其中無著繼

示曹谿堂主院無昻公

常想新州戴髮盾不知一字有何能肩頭柴擔腰閒

石博得西來無盡燈

現何愁法海不橫流 道場不必向他求只在當人一念頭自性但能全體

示見空禪人

斯萬峰深處更宜深

出塵本意在山林四十無聞愧此心今喜脚跟絲翻

示罪人體皒帽

無邊法界以爲身觸處相逢意最親若向峨嵋峰頂

上雲霞滿目更迷人

西望峨州雪似銀普賢端坐一簽廛無邊利海都合

攝應現隨緣喜見身

示治師鑄鐘成

天地爲爐萬家銅鎔成衆竅吼長風一聲響徹三千

界喚醒人閒大夢中

示李生

浮世光陰苦不多已躬下事竟如何今生若不求歸

宿依舊從綠墮愛河

示朴行者乞食

市遠山深乞食逝單持一蛛路迢迢莫因曲折生疲

歌應想黃梅石墜腰

示無隱法師

昔依華座繞空王文字時生<u>般若香</u>今向一毛觀刹

海逢人不必細商量

示幻宗老清印造華嚴經

剖破後塵出大經法門珠網遞相形分明託出塞塞

藏獨處令人夢眼醒

題堪與 雲山老衲

大地山河入眼空一條柱杖活如龍分明指出無生

路直與西來一派通

示體具禪人

趙州無字死生關鎮壁銀山冷眼看但向未生前觀

破自然不被舌頭護 示悅禪人清凉卷拾茶

意相逢但問喫茶無 楊枝甘露瀝焦枯一滴纔沾熟憺蘇直指西來蟬的

寄博山無異來公

襟期不隔一毫端千里雲山親面看最是思君親切

處夜深明月照人寒

示審昌長老

瓦礫翻成大道場組看田地莫教荒鄉思胃兩衝寒

句粒米茎薪可斯陽

示書昌寅然體禪人

堀中師子久瀾兒轉鄉翻身未易知真使楚萬

近叉牙切記在當時

示頭石禪人

埋身八面不通風死盡偷心始見功但向未生前著

力方知海底日頭紅

示碧霞老衲

他方行偏久歸來梵剎家山坐地開辦子入門無別

事喫茶洗鉢亦奇哉 示玄樞禪人

已躬下事要分明一念單提莫記程但使妄情消盡

處管教心水自澄清

示斬陽歸宗老衲

觸目明明般若光六門常放未遮藏若能富念根塵

新日用端居大道場

心見光明不在根從來諸暗不能昏三千世界如觀 示慧鏡禪人

果那律親登此法門

收攝身心緊閉關塵中不異在深山好將妄想都拋 示六如坤公掩關

却從此動求出世別

示戒深灣侍者

億昔攜餅逐杖黎幾回爲法到曹谿今來直入千峰

裏更向堂前乞指迷

示有明了重體五乳

昔年多龍禮清涼一見文殊返故鄉不議三三多少

柔故來重請為敷揚

鄭白生重多五乳因示

昨來問法過匡廬一句全提會也無但只不忘歸去

路自然超出聖凡途

聞沈朗倩掩騆城中寄示

壓居一室豁如空凡聖交参落此中獨有主人常寂

寂十方坐斷不通風

示丹陽観音山慧空禪人

祇園門外即迷津來往風波過客頻高揭慧燈常不

味直須照破一微塵

示岸度禪人

幻海無涯浪未收全憑智楫駕慈舟中流高桂輕駅

- 566-

去直到菩提彼岸頭

寄金貞度

同坐祇園飯食時別來每憶善思維法綠應以維摩

話不二相談近是誰

寄普陀昱光禪人

白花山下久跏趺水月光中一念孤正使十方俱坐

斷海枯石爛恰如無 例心光法師

空山一室白雲封島道立徽入萬重不是直通霄外

路安知步步絕行蹤

示深光侍者省親

爾別點親已廿年要明父母未生前而今復作思歸

夢此去應須斷愛緣

示姚星陽居士

心在廛中願出廛直須不昧本來人時時常想歸依

處八實花閒有後身

示了此老衲增臘

濁世浮生莫問年法身三際不能遷但須一念常光

現華藏莊嚴在目前

示護關侍者

擎茶率水要真知動靜週旋看是誰須**向目前三**喚

犀牛扇子骨皮全急喚將來不解拈一語痛如三順 處莫教辜負一雙眉

棒幾能脇下會還拳

示新安仰山本源禪人

割愛應知出世因肯教心地著纖塵直須念念回光

照莫昧當人淨法身

界更於何處覓的方

圓明一念沒遮藏觸處逢綠盡寂光拈起一塵含法

寄雞鳴寺冲虚上人

湖光山色照牀前樓閣渾如出水蓮遙憶故人行樂

處花中白日坐安禪

寄黃檗山了心上人

掌至今山水語喃喃

禪從黃檗最難多機著言詮落二三唯有風光當一

寄樊山主

隨線示現小王身心似蓮花不樂畫宴坐深宮常設

法直教不昧本來入

寄袁居士

向此身都是客而今掉臂始歸家回看奔走紅事

道何似棲心白藕花 示明海禪人

袈裟之下豈尋常不自求心最可傷療劫漂流至今

日者回真是好商量

示心悟禪人閉關九年

閉關枯坐九年期好似嵩山面壁時縱有齊腰三尺

雪安心一語幾人知

示性通行人

物方知明鏡亦非臺

資春腰石似黃梅夜半何看正眼開但信本來無

送克文禪人少林禮祖

斷臂驗前雪尚紅西來一脈許誰通此行但得安心

法便振當年鼻組風 **乾**巢
松
法
師

月夜深影落在君前

西江不斷往來船別後音書竟杳然唯有牀前松上

寄孫圖南居士

久落江湖不定蹤川來今已臥千峰離知破職人關

夢唯有空山靜夜鐘

示深愚字以訥

大道西來本絕言好從愚訥遊真源直須多到忘錄

處方信毗耶不二門 寄三白禪人

何時杖錫過東林入室重論出世心莫負千峰秋夜

月荷光獨照影沈沈

示廣鎧侍者持法華經

句字字心開舌上蓮

自親聞墨劫前是時已結大因緣從今重理多生

示海藏行人禮法華經

原從兇率白椎來此去還應坐購臺若待路事下生

日知君重理舊胚胎

寄融首座

多寶如來舊法身從空涌出示諸人若能當處無生

滅法法原來總是真

示江州孝子左福念

佛本多生孝道人常持一念牽慈親若將孝道求成

佛萬行無如此念眞

示鳴明禪人

遙來爲法到匡山幾度晨昏一叩關若問西來竭的

意白雲飛去又飛還 示明華禪人字道果

章西來五葉花從茲道種自生芽但將智水動澆

瀧果證菩提定不差

示歸宗堅音長若

荷擔正法古叢林須用金剛護法心但得光明全體

現頭頭物物盡知音

示王居士

父子家傳淨業禪量從藏海問員詮而今重入匡山

祉見面還如未別前

武夷默初禪人遠來禮請病不赴因示

法白雲不放出松關 遙來爲法到匡山瞻戀殷勤重往還莫道老僧慵說

莊嚴華座擁諸天只待光臨啓法筵莫謂法身晉不

動舌根蚤已偏三千

寄示觀智雲禪人

遠持一稣走他方到處隨緣是道場莫謂鹽勞非佛

事原從苦海泛慈航

當體圓明般若光六根門首沒邁藏若龍念念無生 示鏡玄禪人

現獨處無心解影場 示禪人八首

當人一念要精持歷歷孤明不昧時獨有未生前一

著從來不許老胡知

死生大事最堪悲急下功夫孟是遇但向自心求解

脱不須此外更尋思

往來生死久始嫁未悟無生不暫停暫向此身應度

脱莫教回首再沈冥

圓明一性絕藏塵只為從前錯點真但使斷除氣

障自然得見本來人

飲海波騰無盡流誰將彼岸一回頭直須高挂輕訊

去不到窮源未肯休

世緣無盡苦無涯一念回頭便到家藏得本來眞面

見方知不負此袈裟

此心不必外邊求只在當人一念休身世但從空處 看恰如湛海一浮温

破自然日用不隨他

六根門首六塵多舉世人人沒奈何但肯心心常照

示修淨土六首

衆緣消盡絕疎親老眼何容著點塵莫使六時蓮漏

斯華中已有未來身

初因愛念感娑婆淨土應須出愛河要得蓮華爲父

母全憑念念見彌陀

見聞知覺盡常光心地蓮華暗吐香若使六根無染

著自然獨目是西方

眉閒一道白毫光諮佛衆生總覆藏但得現前常不 味蓮華心地暗生香

五濁塵勞可厭離西方淨土是歸期直須念念光明

現便見華開七實池

處便是西方第一籌 淨土原來不外求當人一念要知休回觀妄想消驗

大雪

萬山冰雪連根凍一片身心徹骨寒回想六年飢餓

處令人不覺鼻頭酸

約白社幽期尚可尋

千里雲山見此心聊將

語寄東林黨君不負蓋華

答劉三畏大參

華宇居士持華嚴經令甥覺之來請因寄

華藏莊嚴妙絕倫無邊佛利一微塵若能念念光明

現便是隨綠解脫人

示在珍行童

生死途中苦最長好從知識覓良方若能掉臂安然

去須向空門禮法王

金剛堀裏舊行蹤別後雲山隔萬重今夜長空千里 蘊眞禪人時從從五臺來多雙徑

*日下古本

說

雜說

詩酒忘憂琴書雖雅柏護一籌金谷蘭亭於今荒矣 **滚滚紅廳漫漫世路多少英雄盡被擔誤賞心樂事**

徒爲借口是知出世最上一著可惜時人昧而不覺 縱有處名與人俱已竹下逢億目中何有豈但偷閒

心如火中生蓮甚雖得心苟不深生厭懼求出難道 五欲場中種種惡緣如沸湯裂火能發一念爲生死

世之聰明之士生來但知世閒功名富貴妻子愛戀

難免燒養

雪當年會把洞門封

憨山老人夢遊集卷第三十八

憨山老人夢遊集卷第三十九 侍 者 褔

通 善 畑 日錄

門

嶺南弟子 劉起相

出頭處刹那刹那生滅之稱也悟無生者方見刹那 此語疑殺天下人

前聖所知轉相傳授妄想無性若妄有性則佛祖無

傳之祕佛祖皆然

是仰山夢升兜率天白槌與文殊貶入鐵圍山公案 如幻三摩提金剛王寶覺彈指超無學此法神速若

是同是別世尊偏向魔王宮中說心地法門可笑別

無淨土耶

切法不生我說刹那義當生即有滅不爲愚者說 切諸病從癡愛生癡愛不生顛倒想滅名爲涅槃

爲入道基本知之者希

夢幻泡影露電陽瞭鏡像水月乾城芭蕉此十種喻

是可與愚者說耶

佛言我於然燈佛所實無授記若有授記即爲著我 古之豪傑乙士直出生死者無他特看破此耳 之樂以爲人生在世止此而已不知大有過於此者

作佛循恐著我況生死事業手 但顯空諸所有切勿實諸所無此語不獨爲老龐家

-571-

妄想奧而涅槃現煩惱起而勝道成此法唯五眼圖

明方許知見

三寸氣消離是主百年身後漫虚名此語如來二十

軍歌了禪師臥病詩云病後始知身是苦健時多為年被執之談無以過之

也今寄居海外故病忽作宛若·舊戀蓋病不因地異性本非水火寒熟自然生此予昔居海上時病中詩別人忙誠哉是言也

至海外就奮節訪其遺事有老嫗答日蘇相公無奈東坡云凡有所好必有所蔽余讀居儋耳集覺範後情不爲境遷而趣味自則難以語人

類不妨常作嶺南入余始誦之將謂其矯余居此幾東坡初被放至嶺外食荔枝美因云日啖荔枝三百好作詩何老嫗尚知其好豈非蔽耶

不覺書法近之默之云外人那得知此語殊有味也。余平生愛書晉唐諸帖或雅事之宋之四家猶未經

世閒之物無可喻者始知古人言非荷發因回思非

特龍也佛之利生威儀具足故稱大人行履如龍象

六年矣每遇時新一度不覺誦此什伯過

審法之妙實未易言古來臨書者多皆非究竟語獨 書法之妙實未易言古來臨書者多皆非究竟語獨 書法之妙實未易言古來臨書者多皆非究竟語獨 書為論詩皆以禪此之殊不知詩乃眞禪心陶靖節 言治至妙在不知禪而能道耳若王維多佛語後人 自造立妙在不知禪而能道耳若王維多佛語後人 自造立妙在不知禪而能道耳若王維多佛語後人 自造立妙在不知禪而能道耳若王維多佛語後人

甲分明如掌中物自空落海其婉蜒之態妙不可言 走九天之狀大以爲奇頃見一龍婉蜒雲中頭角鱗 一色忽見太虚片雲乍爽海水倒流上天如銀河 空一色忽見太虚片雲乍爽海水倒流上天如銀河 空一色忽見太虚片雲乍爽海水倒流上天如銀河 空一色忽見太虚片雲乍爽海水倒流上天如銀河 平文字之外

知止

澄圓圓澄覺元妙意顯衆生同此法性之原妄有動 海常住境界風所動悟之而爲覺爲智故日覺海性 海法門原夫智海無性迷之而爲業爲藏故日藏識 之中使之徹骨嚴寒以之凍餓大死而復蘇者又何 門居名海印炳乎三昧語日於止知其所止吾人止 予有意於那羅延那羅延堅固也處臨大海儼乎法 極堅固之地又何以摧邪外建大業哉故吾師據此 爲魔外之惑所傾不爲境界之風所動非夫據乎最 静迷悟之別欲令吾人即動以觀靜即迷以照悟不 而說法由是觀之吾師之所據欲吾人之共嫌心故 且日其地金剛所成乃極堅固處也其所說法乃性 以止烈跌免銷鑠哉哉吾師止此而修行菩提覺場 欲由離非夫置於盡絕之地埋此身心於萬個冰雪 五欲都爲煩惱之火晝夜燒羨熾然不息而吾人獨 據菩提場中說法葢雪山淸涼處也意其衆生同處 吾師佛聖人出家學道乃止雪山修行及成正覺即

而不如鳥乎吾將三復斯言知又日綿蠻黃鳥止於丘隅於止知其所止可以人

此可謂止其所止矣又日里仁爲美擇不處仁焉得

安貧

新日愛而無蹈富而無顧顧則失富詔則獻愛是故 宗憲之環堵子路之糧袍榮公之帶素豈無所樂而 原憲之環堵子路之糧袍榮公之帶素豈無所樂而 祭哉苟得其樂則雖天下不易已也應宜乎許由務 光囓缺披衣而荷決絕之行焉孔子亦曰飯蔬食飲 光唱缺披衣而荷決絕之行焉孔子亦曰飯蔬食飲 小曲肱而枕之樂亦在其中矣不義而富且貴於我 如浮雲

學要

日粉學而無要則渙散寫成是故學者斷不可以不許一個學備突缺則一偏缺二則隘三者無一而稱人者則學備突缺則一偏缺二則隘三者無一而稱人者則學備突缺則一偏缺二則隘三者無一而稱人者則是事有君言而無宗則曼衍無統事而無君則支離

務要矣然是三者之要在一心務心之要在多灣多 獨之要在忘世忘世之要在適時適時之要在建變 之要在見理見理之要在定志定志之要在安 達變之要在見理見理之要在定志定志之要在安 主生重生之要在務內務內之要在自知自知之要在 下之理得矣稱理而涉世則無不忘也無不有也不 下之理得矣稱理而涉世則無不忘也無不有也不 忘不有則物無不忘物無不有物無不忘物無不有 心而不自得矣故曰天地與我並生萬物與我 則無入而不自得矣故曰天地與我並生萬物與我 屬一會萬物而爲已者其唯聖人乎噫至矣盡矣妙 極於一心而無遺事矣是故學者固不可以不知要

者平里則無不中故持心在乎平。心體本明無所不 也是不虚則不明不明則不安故安心在乎虚心本如 是不虚則不明不明則不安故安心在乎虚心本如 也不是則不明不明則不安故安心在乎虚心本如 也不是則不明不明則不安故安心在乎虚心本如 如內外平等其不平者由乎重輕是以愚者重其外 如內外平等其不平者由乎重輕是以愚者重其外 如內外平等其不平者由乎重輕是以愚者重其外

故迷迷祛則照泯矣故悟心在乎忘用卒無以自鑒耳故用心在乎照心本不逃由失照照由其汨昏故有所不照觀夫世人日益其汨昏難

觀心

類倒何起有起則非正觀也正觀則無不正 無生則雖生而無生生而無生則念亦無念無念則 無生則雖生而無生生而無生則念亦無念無念則 養之妄想顛倒所生若頭倒不生則生無生矣 動物。第一微妙法門也夫心為一身之主萬行之本

讀莊子

傷哇今古人誰肯自驚駭惟有漆園生此味少知解相粉摸臭皮恰似精鬼怪箇箇都爲他惹下來生債如被裹猿猴左右不自在起坐要奉承飢渴案管待如被裹猿猴左右不自在起坐要奉承飢渴案管待

圓扇說

索書者因信口爲說以記之 予已丑夏日偶爲狂士所黷寓墨之東郭有出屬

寂寞說

誠心說示墨支

心不誠不明性不靜不定精不聚不完神不凝不逸

所乘得其人所無故道大德弘身裕名貴超然而無是故君子之學在重其人所輕益其人所損取其人學不講不博問不辯不通節不立不堅操不持不勁

澤山說

對者也

周之莊生有言曰藏舟於壑藏山於澤謂之固矣然 有力者頁之而趨昧者不覺蓋言有所藏則有所頁 有力者頁之而趨昧者不覺蓋言有所藏則有所 無戴則無頁矣雖然以無藏爲至愚意有所藏則較 枯豈非內有所藏而外有所光者耶是故君子實藏 枯豈非內有所藏而外有所光者耶是故君子實藏 器於身待時而後用也且夫山之積也厚故高而柔 器於身待時而後用也且夫山之積也厚故高而柔 器於身待時而後用也且夫山之積也厚故高而柔

覺夢說

子之雜窮也望其形也飄若雲目其容也凄若氷叩漢以休焉適有浮遊先生者觸而問日鸣異哉吾觀以人方乘一葉而泊幻海之願將與窈淼之衆居廣

若依稀彷彿然求之而不得語之而不及也是必將 脫之而無術教之而無人呼之而誰與爲親是何惶 毒龍在前**猛**兜在後進之而履危却之而迫險入之 與覺者一笑而釋之矣噫豈獨夢人哉世盡然也先 惟其猛然叱吒躍然而起一覺而大惡之回視夢事 惶業業現諸形色而發乎呻吟即有覺者竟何以寧 **邁攢眸蛇蝎繁**足當是時也窮心困智出之而無方 而無緯升之而若墜且將攀枯技而挹朽藤加以蜂 冥冥漠漠傍徨四顧或登無極之顯或臨不測之淵 居不移席而百怪生焉時不加頃而千載邈焉至其 是何說也子獨不見夢人乎万其長夜之寢也必沈 臥飲食起居寤寐無閒者旬日先生心樂意消而將 離翼旗精神指音魂慮變層形若尸解而心若魍魎 願假舟楫即浮遊而之彼岸者以憑師無意乎日居 與之俱化先生且行有請於幻人日予風波之民也 無以應唯唯默默無知無誠無示無說與之寢息坐 手若乘撥之而似人非人何居何事而至此手幻人 其中也空空即之也温釋之而淵且深緘乎若悶汎

生試將持此自覺以覺諸夢者

智說贈李高士

以命爲任以仁爲心以義爲質以物爲已以去邪爲 老死而不悟者衆矣奚其遠若夫醫則反是其職也 智持特立之操不惑於業口不避其羣邪多方級急 務以正氣爲理以經爲度以權爲用故其治也必致 美而道未必光日夜營營勞神焦思以至 既生傷性 手以濟其事況就就於得失是非榮辱之場於身本 先已後物因利輸忠且必外假人主之權資衆多之 然蒸達爲醫而不違爲相耳何者夫相之任養陰陽 然知爲隱者也扣其業則曰岐黃余是知爲達士也 進退合宜以大中爲準以至靜爲先及其奏效也不 心君於晏然措四肢於調適凡遇危履困運獨斷之 於乂安此其職也而未必盡即盡而功未必忘以其 而葆元氣劑衆物而仁羣生致人君於秦定措天下 或曰昔人有言選則為良相不達則為良醫余謂不 水西適有丈人麗眉皓髯訪余於旅泊觀其狀貌像 余被放之八年癸卯冬偶自曹溪隨綠乞食於凌江 天下之至達者又何以與於此由是觀之忘已之功 大忘利之名高不忘者顯報而幽罰彙忘者先微而 大忘利之名高不忘者顯報而幽罰彙忘者先微而 交著足知忘功者後必大也嗟手人者苟能操良醫 之心以治國則何國不治持忘已之心以御物則何 之心以治國則何國不治持忘已之心以御物則何 之心以治國則何國不治持忘已之心以御物則何 夫之能事也斯則術異而功一名異而實同又何以 失之能事也斯則術異而功一名異而實同又何以 表之能事也期則術異而功一名異而實同又何以 大下國家共觀軒黃之秘以養丈人之行李冀觀者 不獨知丈人之醫且因醫以進君子之業將施之於 天下國家共觀軒黃之化也丈人達者也知丈人高其行 不獨知丈人之醫且因醫以進君子之業將施之於 不獨知丈人之醫且因醫以進君子之業將施之於 不獨知丈人之醫且因醫以進君子之業將施之於

此光樓說

道震上諸長者居士見老人如冕師恭喜交集齊款一八減巳一紀老人自續外走雙徑會大師入塔期取三尊越丙申大師過而眉之日此光又二十年大師三尊越丙申大師過而眉之日此光又二十年大師上等越上諸長者居士見老人如冕師恭喜交集齊款

連日有長者子懋謙得承此光未達本有作禮乞說志不忘也老人欣然謂曰此大師以斯樓作廣長舌也且盡十方是常致光一切衆生用此光於六根門理照天照地是故山河大地日月星辰草芥人畜鱗理包含萬象無不融攝居此樓者敬事三寶禮念歸樓包含萬象無不融攝居此樓者敬事三寶禮念歸樓包含萬象無不融攝居此樓者敬事三寶禮念歸樓包含萬象無不融攝居此樓者敬事三寶禮念歸樓包含萬象無不融黃居此樓者敬事三寶禮念歸樓的此光之所發揮荷能一念知歸則此光則此卷聲聲佛號乃至妻子團團食息起居十二時中折於聲擊佛號乃至妻子團團食息起居十二時中折於齊擊佛號乃至妻子團團食息起居十二時中折於齊擊時號內至妻子團團食息起居十二時中折於齊擊佛號乃至妻子團團食息起居十二時中折於齊擊佛號內至妻子團團食息起居十二時中折於齊擊佛號內至妻子團團食息起居十二時中折於齊擊佛號內至妻子團團食息起居十二時中折於齊擊神。

工工其識之 無情佛性**表**說

食人閒閒士君子談佛性義有不信無销說法者有子養疴匡山閉關謝絲空一子扣關而請日某甲乞

談非究竟一乘極則語也即如華嚴經云我今普見 性各各分具此亦教中有說但爲三乘劣機獨相之 花而悟道又從何善知識口門而入耶又云衆生佛 藏未悟唯心之旨者則鮮有不作如是解也無情說 之實證也又若宗門香嚴聞擊竹以明心靈雲觀挑 各各辦事且光中之音豈從口出耶是皆無情說法 舌相耶即光音天人全無覺觀語言但以光中出音 告言汝等當知一切欲樂皆悉無常虚妄顛倒須臾 法教有明言華嚴經如來出現品云辟如諸天有大 資網各出妙音說偈讚佛乃主塵說利說此又誰爲 **鼓音豈有情耶而能說法覺悟諸天至若光明雲臺 變壞但誑愚夫令其戀著汝莫放逸若放逸者移諸** 非夙具上根種子者未易信也即其所見亦佛所說 惡趣後悔無及諸天聞已生大憂怖慚愧改悔且天 法數名爲覺悟若諸天子行放逸時於虚空中出聲 但非了義之談耳苟不證信了義大乘多請明眼知 願請大師爲決所疑予日固哉此義甚深難解難入 謂衆生佛性各各分具如大海漚不信圓滿具足者

> 又執定血內之驅封爲我相其實未開隻眼故生種 驗即有所見但認昭昭靈靈識神影子把作實事且 乎曲見驚怖其言而不信也惜乎俗諦學佛法者多 变映如此圓滿廣大法門昔二乘在座如盲如**學宜** 各各圓滿所謂諸佛法身入我性我性還共如來合 種分別以權說為了義以已見為死竟耳今不必論 智口耳知見未有真参實死工夫未悟廣大圓明之 皆證圓覺非特具也故阿難云我與如來實覺明心 衆生具有党分具耶三祖云圓同太虚無欠無餘此 衆生具有如來智慧德相然如來德相法身全體也 生非一人也若衆生佛性各各分具則一切衆生各 一月曹現一切水一切水月一月攝一室干燈光光 言人人與佛同體非但言佛也圓覺經云一切衆生 何言一切衆生身中成正覺耶又云奇哉奇哉一切 成一佛是則齊成有多佛矣若止一佛且是各具又 於一切身中成等正覺且毗盧遮那一佛也一 切衆

無情說法不說法佛性各具不各具豈不聞法界觀

頌云若人欲識真空理心內眞如還偏外情與無情

四願齊說

也煩惱者衆生之本也法門者治煩惱之藥也以衆也煩惱者衆生無邊誓願度煩惱無盡誓願勵法門無
也煩惱者衆生之本也法門者治煩惱之藥也以衆
也煩惱者衆生之本也法門者治煩惱之藥也以衆
也煩惱者衆生無邊誓願度煩惱無盡誓願勵法門無
也煩惱者衆生之本也法門者治煩惱之藥也以衆
也煩惱者衆生無邊誓願度煩惱無盡誓願勵法門無
也煩惱者衆生無邊誓願度煩惱無盡誓願勵法門無

能則佛道雖無上亦可成矣是所謂四弘誓願有大 求乃求諸已而已矣何以明之以吾人自心本來是 成大名是皆以大行資願非虛願耳是四者非假外 量也難度者願度難斷者願斷難學者願學三者旣 生無邊者因煩惱無盡也以煩惱無盡故法門亦 花而結空果彼此求之了不可得矣所謂煩惱盡而 則返觀人我如空花耳我若空花則覓衆生若邀空 要則人不立人不立則煩惱空是則我心煩惱若盡 乎煩惱煩惱堅執則我相益固我相固則人不亡我 心者方能發此大願具大願者方能建大業立大功 之人莫不有我有我者皆以煩惱煩惱用事非真心 衆生空斯則不度而自度矣是相與而無也然學世 者皆人人又一我衆我聚而衆生成矣衆生所本本 佛與衆生原無二體也因一念有我我一立則敵我 也然煩惱者情也若斷煩惱而以煩惱之心斷之是 多求欲斷之不可得也故不得不學法門耳法門者 借賊兵而齎盜糧也以情入情如以火投火名日益 乃出情之法爲消煩惱之具所謂空法也空法者佛

佛之心以日用之事佛之行业學佛者以吾人之心體 問之心以日用之事,如此是 自心之佛行動自心之煩惱度自心之衆生則如湯 自心之佛行動自心之煩惱度自心之衆生則如湯 自心之佛行動自心之煩惱度自心之衆生則如湯 治天下平乎荷即此一念現前以空法而用事則念 治天下平乎荷即此一念現前以空法而用事則念 念煩惱轉爲智光照了來生同歸自性則與佛同體 心面於五人自今已往凡所作爲無論致君澤民 即世而成吾人自今已往凡所作爲無論致君澤民 即世而成吾人自今已往凡所作爲無論致君澤民 即世而成吾人自今已往凡所作爲無論致君澤民 為操虐尚事耳目寄與而已哉某以此見志其有得

佛說一切世閒善惡因果報應如影隨形毫不可爽感應說

於此手

生修定今生所受用者不從外來盡是自作自受耳 之甚也殊不知死生晝夜三世輪週如昨日今朝之 **社每推算但求福利勝事則喜而惡聞其災患此恐** 吾佛之因果若知安命則登富得失一切委之前定 功名而爲人之所破壞者則疾怨其人深恨其事殊 智會合而然故得之而喜者感也又吾固有之富貴 者是世人自恃智能才技可以致功名富貴殊不知 故曰若知前世因今生受者是若知末來果今生作 有欠關必不全美此一定之事也人生一世正報身 事耳請以近事喻之譬夫請客凡設席之物無論精 而世人不信者謂爲虚談孔聖安命之說世有信者 皆我自造則窮邃壽夭皆吾命之固然若明信因果 尤人以致結冤而不解者過也是知孔聖之安命即 所宜有亦或少欠彼人而失之以爲憂者則反怨天 不知我之福量所包者止此其破壞者皆非我分之 功名富貴非才智可致以吾前世緣定今世偶因才 命延促依報家產資財功名貧富賣賤秋毫皆是前 靈豐儉色色預備現成則臨時煉列一一具足若少

想以慈悲而轉貪瞋以軟和而化强暴以謙光而折 之農者擇良田而深耕易虧播種及時則秋成所養 費節身口侈靡之財種之於三田之中不惟增長末 巳往之得失但種未來之福田苟能省無益過度之 母為敬田濟貧拔苦爲心田吾願世之智士不必計 瘠之不同耳佛說供養佛法僧三寶為勝田孝事父 之得失但稱今生現前所有以種未來之騙田如世 於其閒哉若明智之士的信因果報應不必計其前 我慢如此則是大心菩薩之行也居士果能信此當 若能種屬於三田再能留心於佛法以念佛而消妄 來福德莊嚴則將現世亦身安心樂爲第一福人也 固有也如此又何計較得失而勞苦心慮妄頹恩怨 亦非智力之可能即有才智而致之者亦是我分之 則今生受用一切皆我前世修成原非他人之可與 稱最勝勇猛丈夫 一以什伯計此又明白皎然者但在所種之田有肥

張孝子甘露說

余嘗讀方外志謂混沌初分而人始生體有光明蜚

紀春秋不藏至西漢武帝降始以爲年嗣是代有之 聽失聖帝明王出天德合而醇氣守者故甘露降體 能自學故地肥薄而五穀生五穀生而地肥絕矣人 散其故何哉嘗試論之孝者天之經也地之義也民 張子鳴球以篤孝感甘露降庭槐香美異常**經**旬不 甘露之瑞皆見於王者之德而未聞降於野今龍山 採而啖之命為詩歌制論以紀之 行自在吸風飲露不產五穀泉涌露降凝結如脂名 丘之松杪凝枝垂懸其狀如珠其甘若飴乃敕羣臣 我明洪武八年 是觀之今之瑞古之常也堯舜之世數致焉三代無 泉涌時則爲禛爲祥爲靈爲瑞感於人而應於天由 始穀食而情竇整欲火生故醇氣澆而露不甘泉不 日地肥味若醍醐人食之甘嗜而無厭其體漸重不 也夫孝一心自天子以至庶人本無二致第心圓而 之行也孝德至而中和之氣育中和育而醇氣守醇 氣足者應之速久近亦然余故謂張子之孝自有所 氣守而天德台天德台而禎祥應故甘露降體泉補 聖祖詣齊宮祀上帝廿露降於園 世廟亦然是知

太上混芫均享華胥之樂吾將心謂露皆甘泉皆體於天下則人不減聖事不減古而天下國家可登於者一孝與於家百孝與於鄉干萬億兆與於國以及者,一孝與於家百孝與於鄉干萬億兆與於國以及不知故禛祥應之如此久而設之者猶有所未至也

小遷字說

而飲啖隨宜不俟謳歌鼓腹又何以瑞應爲哉

萬物靡不爲此四相所遷而不遷之物非常情所可取肇丕論旨也余少讀肇論至旋嵐偃岳而常靜江取肇丕論旨也余少讀肇論至旋嵐偃岳而常靜江取肇丕論旨也余少讀肇論至於太有所悟入及揭結冬於山陰道院因校刻此論恍然有所悟入及揭結冬於山陰道院因校刻此論恍然有所悟入及揭樣和風吹樹薬飄颺滿空乃自證之曰肇公眞不吾樣和風吹樹薬鶏颺滿空乃自證之曰肇公眞不吾樣則爲理不遷非肇公所謂物不遷也然既曰即物不遷豈拾物以求理釋動以求靜哉梁生諱四相然不遷豈拾物以求理釋動以求靜哉梁生諱四相然不遷豈拾物以求理釋動以求靜哉梁生諱四相然不遷豈拾物以求理釋動以求靜哉梁生諱四相然不遷豈拾物以求理釋動以求靜哉梁生諱四相然不遷豈拾物以求理釋動以求靜哉梁生諱四相然

此手苟得不遷之妙則日用現前種種動節閒忙遊此手苟得不遷之妙則日用現前種種動節閒忙遊順苦樂得失勞逸利衰毀譽以至富貴貧賤大而禍順苦樂得失勞逸利衰毀譽以至富貴貧賤大而禍間苦樂得失勞逸利衰毀譽以至當貴資賤大而禍間苦樂內之至此伊呂以之救民顏子以之簞瓢孔子所以無入而不自得也子在川上戶遊者如斯夫不捨以無入而不自得也子在川上戶遊者如斯夫不捨時之老人以此字梁生能無負此語可稱聖門的骨伸之老人以此字梁生能無負此語可稱聖門的骨伸之老人以此字梁生能無負此語可稱聖門的骨件之老人以此字梁生能無負此語可稱聖門的骨件之老人以此字梁生能無負此語可稱聖門的骨件之老人以此字梁生能無負此語可稱聖門的骨件之老人以此字梁生能無負此語可稱聖門的骨件之老人以此字梁生能無負此語可稱聖門的骨件之老人以此字梁生能無負此語可稱聖門的骨件之老人以此字梁生能無負此語可稱聖門的骨件之老人以此字梁生能無負此語可稱聖門的骨

遺用中字說

稱大用黃生志之

5 1

歐嘉可字說

士修字說

愚不肯者所不及即有志者又或賢者行之過智者物欲葑蔽而失其固有以致六鑿相攘六官失職此不足以盡道然道在吾人本來其足無欠無餘良由鄭生尚志問字於予予字之曰士修蓋志於道非修

徐子厚字說

致中和天地位焉萬物育焉蓋中乃性之體和乃性乃吾性之本然者而言載者義取性能載物心傳日徐生天載作禮請字余字之日子厚因爲之說日天

容我字說

惟有礙是亦有不能見容者非天地不能容我由我見容哉雖然必有說矣昔人有云誰云天地寬出門天地至大萬物無所不容而且日容我豈我獨不能

忘機者似之故以此字李丈人 於萬物矣以其混同故能容我此聖人之能事也唯 於萬物矣以其混同故能容我此聖人之能事也唯 物與敵則物我忘物我忘則物皆我物皆我則我强 物與敵則物我忘物我忘則物皆我物問無物與敵無

謝汝忠字說

秦心子觀孺子和進而目聽則天君失守五官失職求 中心故君之求臣如心之於目臣之事君若目之於 中心故君之求臣如心之於目臣之事君若目之於 中心故君之求臣如心之於目臣之事君若目之於 中心故君之求臣如心之於目臣之事君若目之於 中心故君之求臣如心之於目臣之事君若目之於 中心故君之求臣如心之於目臣之事君若目之於 中心故君之求臣如心之於目臣之事君若目之於 中心故君之求臣如心之於目臣之事君若目之於 以為心為目心精而溢於目目視而主於心內外 一心故君之求臣如心之於目臣之事君若目之 於心者忠之至也故予因其嘉而益嘉之以忠固可 於心者忠之至也故予因其嘉而益嘉之以忠固可 於心者忠之至也故予因其嘉而益嘉之以忠固可 於心者忠之至也故予因其嘉而益嘉之以忠固可 於心者忠之至也故予因其嘉而益嘉之以忠固可

也語日大人者不失亦子之心也其實則預秉大人 以是月送孺子進小學即說此名子字之曰以忠先 以是月送孺子進小學即說此名子字之曰以忠先 生欲予書此藏之珍襲將爲孺子之左叛之耶先生

覺之字說

方遺民氏從父室遊衡禮予問出世法因請法名都之日福心以心爲福田之本來善之所歸如膏壞而之 學也百穀也復請字字之日覺之以佛香覺也古德云即心即條以此心本來是佛因迷之而爲來生是迷即心即條以此心本來是佛因迷之而爲來生是迷即為常住佛不覺則永墮迷途失其故有如人有目而居暗室一無所見所謂顯瞑而不自覺者也以心是福田以覺爲種子日用不覺如有田不耕安可心是福田以覺爲種子日用不覺如有田不耕安可以望有秋乎吾故日覺之覺之者種福之本也方子能覺則不辜本有乃福之大者也

讀述師洞聞字說

河間之語則遵文殊擇圓通以觀音耳根爲勝又以

皆聞則三大士一場懷耀而紫柏此語亦無地可寄在老憨分上看他虛空與眉毛斯結此此說法萬象普賢心聞洞十方為準則一以耳圓一以心洞也若

矣此處透得方稱洞聞

國本經華香慶公日閩堂日吾無隱乎湖公釋然即 學名與其字及問字何乃忘之矣老人復大笑日生 皆俗耳因而罷去一日偶龍丈室白日弟子夜來夢 皆俗耳因而罷去一日偶龍丈室白日弟子夜來夢 皆紹耳因而罷去一日偶龍丈室白日弟子夜來夢 地灣與古四路之日無隱意取分明目前六根相 對無非佛事且如靈雲見桃花而悟道香嚴閱變竹 對無非佛事且如靈雲見桃花而悟道香嚴閱變竹 對無非佛事且如靈雲見桃花而悟道香嚴閱變竹 對無非佛事且如靈雲見桃花而悟道香嚴閱變竹 對無非佛事且如靈雲見桃花而悟道香嚴閱變竹 對無非佛事。且如靈雲見桃花而悟道香嚴閱變竹 對無非佛事。且如靈雲見桃花而悟道香嚴閱變竹 對無非佛事。因為之日無際意取分明目前六根相 對無非佛事。因為之日無際。 一日不是不是一日侍堂山行女時嚴桂盛放堂問日 日不是不是一日侍堂山行女時嚴桂盛放堂問日 日不是不是一日侍堂山行女時嚴柱盛放堂問日 日本是不是一日侍堂山行女時嚴柱盛放堂問日 日本是不是一日传堂山行本時嚴柱盛放堂問日 日本是不是一日侍堂山行本時嚴柱盛放堂問日 日本是不是一日侍堂山行本時嚴柱盛放堂問日 日本是不是一日侍堂山行本時嚴柱盛放堂問日 日本是不是一日侍堂山行本時嚴柱盛放堂問日 日本是不是一日侍堂山行本時嚴柱盛放堂問日 日本是不是一日侍堂山行本時嚴柱盛放堂問日 日本是不是一日侍堂山行本時嚴柱盛放堂問日 日本是不是一日侍堂山行本時嚴柱盛放堂問日 日本是本是一日侍堂山行本時嚴柱盛放堂問日 日本是本是一日侍堂山行本時嚴柱盛放堂問日

有隱耶,仲尼又曰,吾無行而不與二三子者是丘也悟入者,堂主莫道從香塵而入者可字無隱其他又拜曰和尚恁麼老婆心切此乃者俗漢從香塵而得

虚懷字說

减定而現諸威儀此至人涉世之能事又豈止勞謙物我兼忘我忘則無能執之心物忘則絕所執之境期心境求之了不可得虚之至也其懷若此則超然獨立而與道同遊又何一物之可拘纖塵之爲累斯則心境求之了不可得虚之至也其懷若此則超其所執既捨則心自空心空則境自寂心空境寂則

黃應如字說

而已哉葢光而不耀者也

爾生遊於達觀禪師之門師字日應如予觀其字因知師所以授生者最上法門也乃為之說夫如非相知師所以授生者最上法門也乃為之說夫如非相允雲行島飛風動塵起四時循環日夜無隙種種地之異稱也然真則不妄如則不變故名真如以其心之異稱也然真則不妄如則不變故名真如以其心之異稱也然真則不妄如則不變故名真如以其心之異稱也然真則不要,但是是然而為是是是一個人。 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如者乃一心之異稱也然真則不妄如則不變故名真如以其心之異稱也然真則不妄如則不變故名真如以其心之異稱也雲行島飛風動塵起四時循環日夜無隙種種 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如者乃一心 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如者乃一心 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如者乃一心 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如者乃一心 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如者乃一心 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如者乃一心 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如者乃一心 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如為其中 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如為其中 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如為其中 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如為其中 一個之說葢直指吾人本體而言所謂真如為其中 一個之說一一。 何希有字說

希有余甚疑之及尋其未歎以前並無甚奇特亦無見道則更爲希有余嘗讀金剛經至空生歎世尊日何生字希有篤志向道人能向道誠希有也若眞能

立妙語惟言世尊著衣持鉢飯食經行洗足敷座而立妙語惟言世尊著衣持鉢飯食經行洗足敷座而 整上下佛祖註解不破忽被空生看破世尊行魔處 一里無別奇特也空生何所見而驚歎若是此語千 空生看破世尊處看破自家屋裏此葢家常日用過 一型無別奇特也空生何所見而驚歎若是此語千 空生看破世尊處看破自家屋裏此葢家常日用過 可見又不希有笑何生名有法何事爲希有事心驚末 因其說而說之以此

香林字說

 不能持之伏觀經開戒品以孝爲本故經云孝名爲不能持之伏觀經開戒品以孝爲本故經云孝名爲一切衆生且律載戒品靈列五百細則三千威儀八萬細行佛獨指孝字爲本意謂佛子能盡此孝則一郎消煩惱煩惱逼而戒光圓豈非若旃檀孤生三毒熟惱燒災身心無可解救至依於戒乃得清涼豈非若旃檀、少地自體清涼而因熱毒以成其香耶一孝全而衆之地自體清涼而因熱毒以成其香耶一孝全而衆之地自體清涼而因熱毒以成其香耶一孝全而衆之地自體清涼而因熱毒以成其香耶一孝全而衆之地自體清涼而因熱毒以成其香耶一孝全而衆之地自體清涼而因熱毒以成其香耶一孝全而衆之地自體清涼而因熱毒以成其香耶一孝全而衆之地自體清涼而因熱毒以成其香耶一孝全而衆之地自體清涼而因熱毒以成其香耶一孝全而衆之地自體清涼而因熱毒以成其香耶也之爲名

堅白字說

然本然清淨光明皎潔若此也而人者見穢獨而不為煩惱穢濁所昏不爲五欲淤泥所汚葢其自性天之說曰佛性之在纏如摩尼之墮溷蓮花之處泥不之說曰佛性之在纏如摩尼之墮溷蓮花之處泥不之說曰佛性之在纏如摩尼之墮溷蓮花之處泥不之說曰佛性之在纏如摩尼之墮溷蓮花之處泥不之說曰佛性之在纏如摩尼之墮溷蓮花之處泥不之。

知摩尼之光明見於泥而不知蓮花之香潔是以汨知摩尼之光明見於泥而不知蓮花之香潔是以汨田塵志心期極樂厭難生死是果一念孤明應緣常由同異目之哉雖然志不磨不壓心不洗不白吾人由同異目之哉雖然志不磨不壓心不洗不白吾人性自性清淨即所謂曆之不磷者是心若濟之不廣常。一個是亦不稱矣堅則不壞白則不渝不壞不渝實相則是亦不稱矣堅則不壞白則不渝不壞不渝實相常住爭士無量壽義在是乎公果以吾言觀自心則常住爭士無量壽義在是乎公果以吾言觀自心則是亦不稱矣堅則不壞白則不渝不壞不渝實相以不過一人,如且自負公其勉勵是為說

自性說

方者以有生知學知困知之不同由夫智之厚薄故 及有難易生知之聖故不世見學困之知正在智之 成有難易生知之聖故不世見學困之知正在智之 成有難易生知之聖故不世見學困之知正在智之 成有難易生知之聖故不世見學困之知正在智之 以有生知學知困知之不同由夫智之厚薄故 **冬暮予舟次芙蓉江上章含黎子見訪觀其光儀瑩**

之異始是盡性工夫此性一盡則以之事君爲眞忠 以之事親爲眞孝以之交友爲眞信以之於夫婦爲 是別有一佛可成佛者覺也即自己本有光明覺性 貨利物欲場中單刀出入足稱雄猛丈夫以此言學 與萬人敵大似李廣單騎出入房庭吾人果於聲色 特被困之一端凡厥有生所困非一不爲諸障困便 非窮困之困蓋為惡習所困耳孔子日不為酒困此 能見此性立地便是聖人到此則不見有生學困知 功心所以禪家言立地成佛者乃順見自性而已非 但於不困處便見自性非是難困之外別求學知之 稱大力量人故學道人第一先具勇猛根骨如一人 夫最簡最切無過於此故曰學道之要但治智智盡 處著力譬如꼞鏡塵垢若除光明自現吾人日用工 而性自盡耳以其自性本明更無增益唯在人欲障

参三下古本

非分外事也君其志之 **真以治身其緒餘以爲天下國家是皆自性之眞光** 事業如響應聲似影隨形艦紮唾之餘耳故日道之 主私欲淨盡之地聖賢不期至而自至耳若夫功名 發現於形儀之表者如此即從此增進用力不已直 然冰玉温厚和雅是其多生遊心性地響氣消磨故

5#

整山老人夢遊集卷第三十九

黟山老人夢遊集卷第四十

褔

日鉄

美

通

琉

嶺南弟子

劉起相

五臺山造沉香文殊菩薩像疏

師表迹垂震旦道化娑婆作衆生之福田開人天之 伏以清涼勝境爲萬聖之道場大智文殊乃七佛之

真和施之於天下國家凡有所作一事一法皆爲不

朽之功業所謂功大名顯者無他術由夫眞耳己酉

眼目歸依者屬等恒沙禮讚者德超塵劫況復變

範像布施莊嚴者哉山曆某濫叨形服幸託靈山居中臺之極嶺開十方之梵剎感大士之威光裂多生之業網由是發心顯造沈香菩薩一驅請置本山供養前來南粤時歷三秋 形影南遊途經萬里鬼福輕而緣薄且事重而人微荏苒因循向無寸効今日幸達南華之勝會仗六祖之慈光攝四衆之高人結十方之善果伏願責官長者達士名流碩開智眼剖破慳囊捨心香一寸而價重三千嚴法身一毛而遍延慳囊捨心香一寸而價重三千嚴法身一毛而遍延慳戴捨心香一寸而價重三千嚴法身一毛而遍延慘難思福綠無量謹疏

廣城西小福園募齋糧蔬

日獨看五釜生塵兀坐經旬誰問香厨絕粒既難分以杜緣日久時值歲凶貴賤同災賢愚一劫閉門連時讀誦刻白肚之蓮華三業精勤竭靑林之貝葉惟時禮誦刻白肚之蓮華三業精勤竭靑林之貝葉惟世表但以五行現在四事應須無能感動天人必欲世表但以出塵離俗不妨迹繫人閒借假修眞自信心超

職家心諒無虛棄謹疏 監察心諒無虛棄謹疏 監察心諒無虛棄謹疏 所以一人而引百千萬人徑歸實所即搏食而為法食 以一人而引百千萬人徑歸實所即搏食而為法食 功德雖量變熱體而作淸凉福田無盡金剛種子善 市人天沒若舟航齊登彼岸逆來順受虛往實回若 市人天沒若舟航齊登彼岸逆來順受虛往實回若 市人天沒若舟航齊登破岸逆來順受虛往實回若 能滿載而歸不預望風而至勝綠儻遇嘉會不常願 監發心諒無虛棄謹疏

造旃檀香佛疏

人萬四千門作福第一南朝四百八十寺靈隱居先 人萬四千門作福第一南朝四百八十寺靈隱居先 人萬四千門作福第一南朝四百八十寺靈隱居先 人萬四千門作福第一南朝四百八十寺靈隱居先 人萬四千門作福第一南朝四百八十寺靈隱居先 人萬四千門作福第一南朝四百八十寺靈隱居先 人萬四千門作福第一南朝四百八十寺靈隱居先 人萬四千門作福第一南朝四百八十寺靈隱居先

山從西竺飛來猿向洞門呼出境同兜率勝出人寰

各發誠心直須打破慳囊勿使當面錯過給身外之 浮雲作自心之眞佛但能一念肯迥光返照便見四 多人各成一佛代願貴官長者達士高流共生權喜 丈夫全身擔荷由一人而勸十人百人衆擊易學從 非虚設福不唐捐惟決信不疑徑登實所 八妙相端嚴優曇華再現三千菩提果順起曠劫功 德計所費不多豈無英靈豪傑脫體承當定遇勇猛 **商買之稠林山水鬱盤實文章之淵數況此殊勝功** 涉艱難辛勤勞頓顧茲南學嶺表名區奇珍畢集乃 個有緣必遇緣而成就山僧不辭萬里遠至五羊跋 三祇之佛種然雖人人即佛須見佛而發心縱使個 修依為淨業像高尺六表丈六之法身普化十方植 優填之故事敬刻旃檀香像安供菩提道場借以熏 之苦行但以根機下劣未副上乘仰蓮社之高風效 山層某蚤離塵俗託迹名山樂蘭若之浩修志頭陀 分而至百分千分聚少成多雖因一佛以化多人

修南華寺祖塔疏

佛土莊嚴雖是人天善果淨土布施即爲般若根基

天南東粤宗風再闡揚於嶺表優曇華現於三千金 以無疆鎮 亦任一肩擔荷將小就大接短補長同成一 轉凡成聖切念功非一力假衆力以合成事屬多人 若不乘時急救誠恐異日難支荷能革故鼎新便見 塞漢顯自性之光明實塔凌空現唯心之淨土但以 心冀功果速完當下敬持短疏普告十方儻遇有緣 剛種培於百億功勛莫算福利何窮願智者早發誠 全身入禪定於座上人天歡喜鬼神欽崇祝 種各人之福果一點片五皆爲最上良因粒米文錢 煙雲幻化誰保精色窮年風雨摧發順見柱根破敗 真身直至而今未壞十方常住應知歷劫不磨香煙 **督言八百主人三寸氣消姶恨一生空過何如六祖** 我作他收何勞分外聽求定是自修已得千年田地 圓滿十方海會便見七層妙塔涌現在於空中多實 盡是菩提種子只願隨心原無定法燻有勇猛 若非推果尋因須要求田下種但看目前世事豈有 請題芳姓 皇圖於億載頓使西來和意重拈出於 味麗酬 響 丈夫。

重修曹溪祖庭殿堂疏

之文翰垂竹帛華夷瞻觀史之天龍象蹴經行之路 真天下之奇觀實寰中之膀概也自爾慧燈高照破 偉哉勝事駕曠劫之津梁壯矣雄模立萬年之香火 大振由是天王降紫泥之詔光昱林泉名儒施彩筆 布金之遺事梵剎聿樂陳亞仙崙坐具之屬田叢林 樹植於宋朝智藥尋流資林山開於梁代曹叔良效 恭惟禪師德秉生知道光前聖遠自跋陀懸藏菩提 寰區化霜海寓者皆我曹溪六祖大鑑禪師之力也 之宗始著自嵩少以濬源至嶺南而行派從此道被 因茲備矣西天四七般若之道大通東土二三達慶 心播揚向上之家風發明本性禪道由此獎焉佛法 之鼓蓋爾抬華發揮要道直指當人之觀體順見自 之所黃金布地開檀度之門白馬歐經闢昏衢之路 既手跋提示滅化綠將終乃偃建立之旗翻繫塗毒 開三實之良謨設一乘之軌範雖云極則猶在半途 代以如來出世從免率而降王宮法運開基百竺乾 而來華夏菩提樹下爲成道之場祇陀林中乃說法

公修殿堂一十二座祝萬年之 勝會選戒僧五十三人坐千日之長期次化當代名 航於苦海是以蓮學二十六年十月望日先啓華嚴 大心特重開賽端新佛日於中天冀再轉法輪駕惠 苟能草故鼎新便見轉凡成聖是以弘爱響顧邁廣 是莊嚴佛土蒼園園古瓦難云極樂道場境雖屬事 堂顏毀使大士飲煙嵐之瘴凋如來披霧露之衣裳 道場願人人盡成佛果竊念非常之事須待非常之 而真人乃即真而俗若不亟其乘屋將恐使爾傾歌 於院蔵真親生龍白柔風氣宛然悲此破瓦敗棒殿 之大厦殊非一木所能支赔未合之良緣必假多人 山色蠶清淨之身鳥語說無窮之偈青藝偏長感覺 殿宇被風雨而際肚竈柱根腐敗梁棟摧斜甑將傾 嚴由人法化養鐵道綠漸墜信徒遭魔障以壞清整 承示商朝參夕體牽具像於當年暮鼓晨鐘繼香火 而可就寺價某等生叨盛世早入空門託迹名山忝 市崇祀若神歷代相沿千秋一日奈何熙衰有數典 **承夜之重昏法鼓長鳴醒臺生之大夢從來歸依如** 聖壽使處處盡是

十

修曹溪五代面師影堂疏

若不乘時亟救誠恐吳日難支荷能革故鼎新便見中歲既久苦被風雨摧殘月化日遷頓見柱根腐敗中歲既久苦被風雨摧殘月化日遷頓見柱根腐敗由二祖以至黃梅五代之傳至此自唐以至於今日由二祖以至黃梅五代之傳至此自唐以至於今日

皇圖於承固功勛莫算顧利何窮顧智者承發誠定於座上人天懼喜鬼神欽崇祝。聖壽以無鹽鎮燃然奪且莊嚴樓關涌現在於目前五祖全身入禪

5

心冀功果速完富下

書華嚴經接待十方疏

不動一步而心傷十方謂之坐參不起滅定而現諸宗之正脈法界是衆聖之立都叢林作十方之歸寫宗之正脈法界是衆聖之立都叢林作十方之歸寫自古及今雲水高流禮祖而至者無時不有終年竟自古及今雲水高流禮祖而至者無時不有終年竟於愈安居因人而施者一向全無顧我老朽自對接納四來。其飲食所需皆出禪堂常住奈何一向執接納四來。其飲食所需皆出禪堂常住奈何一向執接納四來。其飲食所需皆出禪堂常住奈何一向執持不可其人混集庸流翻成穢土不唯有資初心抑且虚消信施茲者弟子明中發慶大心修普賢行題以本堂安居。書寫華嚴尊經一部借此法恩收攝身即以接待十方賢聖老朽聞之讚歎數書而謂之心即以接待十方賢聖老朽聞之讚歎數書而謂之心。即以接待十方賢聖老朽聞之讚歎數書而謂之心。

高州電白縣苦藤嶺建施茶菴蔬

進止無豺狼之戒第以炎方赤像瘴癘煙嵐加之以 常一嘗聞侯門似海獨愛富而不敬愛雖道如天但 周急而不繼寫所以飢者易食故一飯而感千金之 屬渴者易飲故壺漿而致扶輪之報此但有情人事 為乃感報如斯何況無爲福田功德豈可思議者乎 今日經商足迹焉能獨往誠名利之畏途實盜賊之 今日經商足迹焉能獨往誠名利之畏途實盜賊之

旁乃持香茗一盂盡恭馬首某也欣然飲泣搶爾奧

原因思甘露之漿低回險道偶見苾蒭二衆築室道

萬里之遐荒乃荷戈於電白爱登苦藤之嶺渴乏高

於祇園作難思之佛事可謂不世之舟航迷津之實

大宰官博愛施仁濟人利物以斯道而覺斯民繼往

資者愈資迷轉積迷而化更難化比者幸產當道諸

聖而開來學物浮屠於郡邑樹最勝之法幢建亦幟

篾者也山僧某因弘法而罹難蒙

恩遣於雷陽投

毒氮蒸蒸叉值温泉滾滾以致天涯行客如蹈火而 走氮蒸蒸叉值温泉滾滾以致天涯行客如蹈火而 走過遠戍征人若錯焚而履鑊摩肩接踵聊乘袂以 此雲陟巘攀林誠揮开而若雨唇乾舌燥思勺水如 成雲陟巘攀林誠揮开而若雨唇乾舌燥思勺水如 成雲陟巘攀林誠揮开而若雨唇乾舌燥思勺水如 成雲陟巘攀林誠揮开而若雨唇乾舌燥思勺水如 京野目無親此苦莫告斯皆貪名逐利見得忘形祇 事俗好鬼而尙淫祠民輕生而喜殺盗雖尺布斗栗 事俗好鬼而尙淫祠民輕生而喜殺盗雖尺布斗栗 事俗好鬼而尙淫祠民輕生而喜殺盗雖尺布斗栗 事必好鬼而尙淫祠民輕生而喜殺盗雖尺布斗栗 事。

- 594 **-**

茅縱不勞金碧交輝亦要使法食棄濟但念功非一 羊之城對談靈鷲之緒言及至此大歎奇哉遂乞爲 以添流輕塵而能足嶽雖權設門外三車假名引導 力必須緣結多人是以敬修短疏普告十方託善男 衆歸於寶所且欲就穢邦而變淨土將瓦石以易草 護法之津梁敢請作慈悲之檀越期重建其化城引 **後經二載乃於戊戌之夏遇高州司理萬公選這仙** 勒銘於石上此時有茶莓 由是發願願於此地大建 悲誰知瘴癘之鄉偶值天台之件即稍憩於林閒遂 使直透向上一路實是慈悲但能打破怪囊順見莊 法皆真何物而非布施不拘多寡無論精臟墜露可 發廣大心作難遭想且人人是佛只要自肯承當法 某某稽首贵官問訊長者經商客族士宦高人伏顯 以法水而溉菩提之種增長靈苗將善根而栽般若 輝之白雪獨者飲而飢者冷强吞七碗盧仝腋下起 **酸佛**土往者過而來者息聊進一 盂趙老盞中汎輝 精藍將即事以明心欲藉茶而演法自爾歲月云徂 習習之清風除熱情而得清涼解疲勞而消困順且

> 旦書於仙城之旅泊齋 旦書於仙城之旅泊齋 一里書於仙城之旅泊齋 一里書於仙城之旅泊齊 一里書於仙城之旅泊齊 一里書於仙城之旅泊齊 一里書於仙城之旅泊齊 一里書於仙城之旅泊齊 一里書於仙城之旅泊齊 一里書於仙城之旅泊齊 一里書於仙城之旅泊齊

重建祇 園寺疏

後墮荊秦仗護法之有知忽開茅塞向遭五逆之子 夢種禮無非佛事達心者自知況有布金之規範遵 夢種禮無非佛事達心者自知況有布金之規範遵 夢種禮無非佛事達心者自知況有布金之規範遵 例以十方世界處處盡是道場具眼者能見八萬塵 代以十方世界處處盡是道場具眼者能見八萬塵

> 與主義及無效今額三尺之天神人幸而有託但以 學面幾以無效今額三尺之天神人幸而有託但以 學面影響指寸草而作梵利自是天帝之爐鍾割微 力而易擊拈寸草而作梵利自是天帝之爐鍾割微 力而易擊拈寸草而作梵利自是天帝之爐鍾割微 对而易擊拈寸草而作梵利自是天帝之爐鍾割微 學面出經卷除非普賢之作略伏望共出手眼各階 學面影少成多由小至大直使鬼神輸運不讓須彌 神通聚少成多由小至大直使鬼神輸運不讓須彌 神通聚少成多由小至大直使鬼神輸運不讓須彌 與見金碧交輝宛成淨土轉變隨心受用在已感報 以此為數的意味垂下巧

以此爲徵功德共垂不朽

湖心寺重建放生普顯成佛塔疏

佛大慈悲普度十方盡法界衆生悉皆成佛故曰如佛大慈悲普度十方盡法界衆生悉皆成佛故曰如佛大慈悲普度十方盡法界衆生悉皆成佛故曰如佛大慈悲普度,

生一門在昔天台大師次則永明大師嘗爲吏時將

也予隨喜池上讚歎玄津法師之慈悲慨其功未底 所放衆生充滿其中是從業海中變出極樂佛國也 以衆生視之手何不願目前易度之衆生先作成佛 之遂發普度之想謂彼所放之生願彼脫苦成佛也 沙為佛塔則施者與所施共登極樂淨士矣覺而思 佛無下足處此正是汝修行時也因論衆日若聚此 皆有佛字比隨行者不敢指足予日爾等知大地是 績大有憾焉歸夜臥夢行隄上其沙觀足粒粒方面 中心一心淨機苦樂以之如唯與阿相去幾何哉其 以來爲歌舞地實酒池內林之所今湖中有此三池。 之想以衆多之願度彼多多之衆生如是不唯所度 池有湖心寺寺有三塔寺已建塔末造隄末能防水 今但灣三潭築隄作池取多分之一耳且西湖從昔 今唯雲棲大師能效二師之行其西湖古爲放生池 更廣以合衆心守此池則所守益堅如此行願豈非 且彼蠢蠢以佛視之況現在人人最靈最明者豈可 而樓船歌舞過其池者會不返省一觀是絕然醉夢 官錢買生放以致不死此目前衆人皆知者自後至

心佛衆生等無差別之觀乎故設普化之方人施十心佛衆生等無差別之觀乎故認之海此則以沙數施者小所成者大是爲福聚功德之海此則以沙數一錢念佛百聲合衆心於一佛集多人成三塔所錢一錢念佛百聲合衆心於一佛集多人成三塔所達一錢念佛百聲合衆心於一佛集多人成三塔所

重修龍華寺疏

歷史學商水霑唇如灌麈腳而飲甘露結此功德最 辦羅乃最勝因並但寺功大而費鉅日月長而衆多 若非廣大檀那作難思佛事未易滿禪者之本願也 考感而讚仰爲之開導凡宰官長者居士善男女等 子感而讚仰爲之開導凡宰官長者居士善男女等 子感而讚仰爲之開導凡宰官長者居士善男女等 果能發希有心生難遭想割破慳囊莊嚴佛土是以 果能發希有心生難遭想割破慳囊莊嚴佛土是以 果能發希有心生難遭想割破慳囊莊嚴佛土是以 不堅之財作不朽之業即捐身捨宅而龍神守之萬 世不絕較之慶世之業千年田地八百主人者何雷 世不絕較之慶世之業千年田地八百主人者何雷 本題並一為一為一為一。 可德哉以入人有佛性各各具夙因定見今日之緣 不等當而錯過豈忍寶山赤手歸乎是在諸有智者 不肯當而錯過豈忍寶山赤手歸乎是在諸有智者

聞名及見形心生大喜悦手如大實聚恒出世資財

顯此度幻身恒得金剛體身似紫金山端嚴最無比

良哉大善友與我如天授以此大因緣得出雖熟檢 慘以無緣慈照我真實顯念我無始來流頂諸生死 以是因緣故見行諮事行稽首蓮華藏圓妙最上乘 心想如猿猴轉見攀緣相般若力微弱難戴生死軍 外得法兩潤忽生清淨茅塵習熾盛故時復見乾枯 絕入俗獨林如避溺投火內假善力熏心心願遠離 六根賴完具心識多體冥以宿徹善根早出恩愛海 所作諸惡業唯佛自知見今承三實力儻來人數中 展轉處苦趣猶大旋火輪捨身與受身不可思議數 以此殊勝因苦海爲舟機願我此身血滴滴稱法性 積累如是經量等大干界我聞如是願難可與等台 六種受持中書寫為第一骨筆血爲墨經於後塵劫 誓發弱敬心盡形頂戴受冒聞普賢行廣大不思議 同歸清凉界觀禮曼室尊樂住阿楝若最深寂靜 融入華藏海普潤衆生界我以手書持點畫心自在 但取血爲墨與金共和合書寫大經卷一字法門本

天人百萬衆咸稱希有事我時在會中為演真實義 普照十方界六種大震動彌勒下生已初坐龍華樹 我身雖幻妄從父母所生依此虚妄根作成真實事 佛佛出世閒最初三七日咸演大華嚴我當機第 此經從地出頭在虚空中字字出妙音說我本所願 常生淨佛土不離三實前早悟自性空順超諸有漏 善根未成熟黛落輪迴中仗此殊勝因不墮諸惡趣 我生末法中信心力微少恒與凝葢俱難逃生死業 願父如淨梵母如耶夫人諸佛下生時依我父母出 願我此經卷三災不能壞彌勒將下生光從此經出 凡所作所為永離三毒障我以願力持直至未來際 純一上乘人無諸惡道苦恒演此法輪極盡塵界劫 我友最誠諦提挈行正道願友如文殊作第一知識 師長度脱我法恩最上尊願諸佛會下我師爲導師 諮佛出與世最初請說法不情身命財廣修衆善業 檀那大信力廣施大資財願此諸智人永難悭愛苦

極盡未來時究竟心圓滿鏡在何佛國共與揚佛法凡諸見聞者讚歎及稱揚鏡在何佛國共與揚佛法凡諸見聞者讚歎及稱揚

登窮及病苦所求皆如意願我成佛時國中極清淨

七實及四事種種皆充滿十方法界中所有諸衆生

放生文

是自生矣何以放爲又何以放生爲佛事耶裴休有 言曰血氣之屬必有知凡有知者必同體故曰蠢動 為佛然殺生者無慈悲心即爲斷佛種性矣然被蠢 之生將謂可殺殊不知自已本有明明佛性是所 题之心仁之竭也故見生不忍見死聞罄不忍食內 忍之心仁之竭也故見生不忍見死聞罄不忍食內 學賣之首唱奚獨师氏哉儒以素位故但遠庖厨佛 以平等行慈故普及一切第放生者有執相忘相之 以平等行慈故普及一切第放生者有執相忘相之 以平等行慈故普及一切第放生者有執相忘相之 以平等行慈故普及一切第放生者有執相忘相之 以平等行慈故普及一切第放生者有執相忘相之 以平等行慈故普及一切第放生者有執相忘相之 以平等行慈故普及一切第放生者有執相忘相之 以平等行慈故普及一切第放生者, 以本述是一种, 以本述是一种, 以本述是一种, 以来也故但速庖厨佛

日寬持之十年當有無量童子而作供養復何疑哉哉明禪人久含此願願以此行之則慈悲日溥化境

祭陸太宰五臺居士文

不露本來之面目即其去也不去唯留生鐵之心腸 八十餘年逢場作戲恆沙妙德遇佛即宗以佛心而 八十餘年逢場作戲恆沙妙德遇佛即宗以佛心而 八十餘年逢場作戲恆沙妙德遇佛即宗以佛心而 上事不離幞頭角邊臨行末後句委付兒女子輩惟 公現宰官非宰官之身愧我作比丘非比丘之相然 公現宰官非宰官之身愧我作比丘非比丘之相然 全紙嶺南之書。今我於空不空之中。引一滴曹溪之 水作甘露之供獻灌頂之尊嗚呼平湖滿月觀淸淨 之法身天樂盈空吐廣長之妙舌納斯法味用鑒蓬 心尙饗

祭大中丞願菴胡公文

告人而人不知唯我明明知公不死言之而恐人之 忽聞公計適言公死及讀公易實詩則公明以不死嗚呼痛哉公其生耶死耶反復求之而不得其故也

門如處空谷連牀共被三月不遠日夜發以緒官時 之想矣第未知其祕也未幾余因訪公於雁門坐轅 千尺寒巖之下談笑於萬年積雪之中嚼堅冰而食 三十餘年如一日蓋亦奇矣始而遇公於首陽之野 則公已了然默契於心由是而知視軒冕如廳指身 莫我信也嗚呼悲哉顧我與公偶爾值於大化之中 以輕緊混沌散樸澆湻乃罰我於九死放我於瘴鄉 天地外物之在此身其樂殊未央也俄爾天帝怒我 居已而公果以我脫塵鞅我則以公忘去就當是時 **瓶糧浩劫一息時公巳有登天撓霧之思超然遐畢** 已怡然有當於心旣而再索我於清凉之山跏趺於 爾十年如一息時時知公思我結想於寒雲哭我發 時與公永訣矣公以我爲必死將託處些以招之忽 臨實鏡而履琉璃坐蓮華而居淨土不知此身之在 也與公遊戲於海印光中萬里長被皎然一碧嚴若 世如蜩雾也遂相期我於東海之上食朝霞而結樣 淚如長河而珠不知我之與公遨遊如宿昔居然眉 見而心莫逆驟爾語公以一禍驅齊生死時則公

康嘉寐無間於臺髮也嗚呼悲哉是歲五月公走尺素配我於萬里我遣侍者訊公於七月我樂懷公詩書面我詩時公在口期月而逝是我慰公以生平公志。 書誦我詩時公在口期月而逝是我慰公以生平公志。 一時我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生也不偶然貧高明之見抱不世之才忠在社稷心在也不偶然看高明之見抱不世之才忠在社稷心在也不偶然貧高明之見抱不世之才忠在社稷心在心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生心。 一時似維摩病裏身書至而公已示疾矣公把我 一時我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生 心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生 心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生 心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生 心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生 心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生 心使我思公哭公豈不若公之思我哭我那公之生 心使我思公哭不是不言。

祭達観大師文

不生乘願力而來師之死也不死順解脫而去去來,然於紫栢尊者達觀大師之靈曰嗚呼惟師之生也,九日丙戌前海印沙門唇教德清謹陳香積之供致,推萬曆四十四年歲次丙辰十一月庚子朔越十有

矢心知師之不我忘兮每丁寧其無以師以顧力所 路牙師執手含悲而不語維時關山一別牙日月若 鬼師囑予以寧志受冀幽爲之再啓予揮涕以臨長 **号如九原之復起子與師作永訣号甘爲炎方之屬** 子被放於嶺麦牙師位候於江沚一見悲歡而交集 持分誓不負其本始乃飲太阿之光缺分不願放於 鮑陳雷之比子荷 皇仁之溥罰号在師心猶未已 法門也實抱程嬰杵臼之心師之爲知已也殆非管 而進止乃設法以多方冀出予於九死嗚呼師之為 約於曹溪將扣閣於帝里胃炎蒸於道路兮望影響 告以隱微及子難之既發也將爲我以雪洗且蘭宿 該既再晤於西山也搜窮骨髓當予嗣之未形也備 水月光中獨步空華影裏初訪予於東海也顧脫形 大事如喪考妣不與世情和合便是真實行履晏坐 爲人極盡慈悲臨機絕無忌諒誓護法若惜眼睛求 陳爾葛藤鼻孔殘涕推倒彌勒釋迦不護德山臨濟 器堅固地三十餘年家常茶飯脊骨純鋼千七百則 不落常情生死豈同世諦以師之住世也秉金剛心

之暫安兮第因緣之不我與項幸遂其本懷兮始得 之羈縻擬生還以慰師靈兮忽星霜之踰紀匪此心 之體有子弟子奉師以旋兮就雙徑以歸止予聞計 事撒手便行全無議擬惟師以金剛爲心故留不變 往矣嗚呼痛哉師旣不以觸患擾寧又何以去來為 不堪直一行之可恃乃語激以跌坐号遂寂然而長 生遊戲何夙負之相尋号信前綠之固爾悲五獨之 **積分應甘露師臨機分與來赴光明分照電麵勤分** 陳辭而致誅嗚呼痛哉師何死兮我何生我不來兮 以摧心兮望長安而殞涕欲親禮於寵室兮奈業緊 皇天實鑒其衷腸兮唯見逞於庸鄙幸此心之一白 焚法幢傾比師登八道之康衢号忽遇長蛇與封承 **兮踐深盟寂光期兮師安住我頂禮兮展哀慕陣香** 師不寧形骸異号共此心幽冥隔号終合并誓同歸 **分聊以發其蘊底師實曠然何憂何喜逆順隨宜死** 鹽澤冀和璧之必信兮不惜隋珠之輕抵將扣君門

祭雲棲大師文

遠持辦香展布五體敬禮寂光師器同體以我知音 長夜持大智燈佛本無心心付在師薩埵無行行記 師以綠現綠滅即去悲此羣盲失所依怙我數千里 師持故師派世一味無我即住百劫於何不可鳴呼 王樹凡有親者必察沈痼嗟我末法慧日久沈師於 吾師如獅子王高臥堀中羣走障惶我又觀師如藥 諸樹纏君一滴枝葉並茂但有得者畢竟成就我觀 來者癡狂頭歌四十餘年法幢高豎一兩普遊樂草 細行於二六時悉令清淨身爲衆目心爲大宅十方 法眼翳彼戒根以金剛箆刮垢剔昏三千威儀八萬 無別開甘露門指歸淨土鱗甲羽毛一齊頓赴悲正 **聚者孰不瞿然法界為家含靈是宅物我等觀無** 慈父一登覺路如白牛步視愛如睡觀親若寬彼鄉 波騰火宅蘇熾師展願輪特來救濟出示塵勞早歸 願鑒我誠來格來歆嗚呼尚饗 傷.呼師本不生亦無所去以力持身**順因緣故欲海**

祭金竹穰芳聯公文

延位哀哉尚響

性推倒人我之高山感實地一平如掌打破塵勞之

幻夢生蓮華廣大如輪我心清淨彼土現成休教過

嗚呼公秉願輪生堪忍界蚤遇明師頓離恩愛發堅 鳴呼公秉願輪生堪忍界蚤遇明師頓離恩愛發堅 一場梵明衲子雲臻天龍拱衞飯積如山來者飽食 如量如空居者無外具精進力至老不懈一身如寄 一個等慶快遺金剛幢常住不壞法身湛然寂光自在 「一等慶快遺金剛幢常住不壞法身湛然寂光自在 「個等慶快遺金剛幢常住不壞法身湛然寂光自在 「他靈不味鑒此感慨嗚呼哀哉尚饗

結社念佛修四十八願同生淨土文

人人知心是佛豈向外求使個個了願即真盡聞自人人知心是佛豈向外求使個個了願即真盡聞自己,就惡无滿使本事業識茫茫逐日境風浩浩但知受用目前離解修明業識茫茫逐日境風浩浩但知受用目前離解修明業識茫茫逐日境風浩浩但知受用目前離解修不清淨之體味却當人圓滿智慧光明一毫不現終來清淨之體味却當人圓滿智慧光明一毫不現終來清淨之體味知當人圓滿智慧光明一毫不現終來清淨之體味知當人圓滿智慧光明一毫不現終來清淨之體味知當人圓滿智慧光明一毫不現終來清淨之體味知當人圓滿智慧光明一毫不現終來清淨之體,以惟心淨土處處道場自性彌陀人人具足只為

後追思只在現前結果不分男女總證菩提但是有 綠皆登實地但以天生彌勒猶須授記靈山自然釋 樂多端苦難逃於長劫雖父慈子孝只顧各人兄愛 業多端苦難逃於長劫雖父慈子孝只顧各人兄愛 弟恭豈能相代縱有富貴榮華到底總成一夢深思 一題而四生九有同出苦輪施一適而入難三途 發一顧而四生九有同出苦輪施一適而入難三途 種之皎潔一心清淨萬德交歸大地山河總成極樂 看之皎潔一心清淨萬德交歸大地山河總成極樂 看名

祭匡廬徹空師文

之珠擬待師而暗度何其一旦長行哀音忽訃嗚呼心雲瀰溪山復歸師之舊鹽也月圓遷戸尚把九曲丘身坐斷乾坤作師子吼驚走孤兎當案我於清涼丘身坐斷乾坤作師子吼驚走孤兎當案我於清涼惟師之來也何事何爲惟師之去也何心何慮現比

對會九龍居士靈輸小多文

樂時此則悲居士者皆生滅見也

為達師茶毗學火文

雙徑雲通身涌出光明藏珍重諸人著眼看者回始 雙徑雲通身涌出光明藏珍重諸人著眼看者回始 整徑雲通身涌出光明藏珍重諸人著眼看者回始 整徑雲通身涌出光明藏珍重諸人著眼看者回始 整徑雲通身涌出光明藏珍重諸人著眼看者回始

憨山老人夢遊集卷第四十

- 604 -

憨山老人夢遊集卷第四十一. 首楞嚴經懸鏡

明東海那羅延冠海印沙門釋德清述

ガ て 引 冬登 乙 月 從 初 啓 諸 將 通 大 義總 啓 二 章 三 婦 大 義 別 具

初中略有四意

一示三觀之體 二示三觀之相

三示三觀之用 四結三觀之名

不迷之迷故立無修之修斯有無證之證矣蓋迷眞端法界幽玄泯聖凡之跡本無修證豈屬悟迷今依初開修證門中有四意者良以眞源湛寂絕生滅之

此一心建立三舰依此三舰還證一心故曰無不從一而此經者蓋以一味淸淨法界如來殿眞心爲體依逐妄遂沈生死之流今欲返妄歸眞須建依眞之行

達此心故一向多間未得無漏不能頓拔生死之根 此法界流無不還歸此法界是以阿難示同未悟不

世尊先示一心照明萬法而首告之曰一切衆生生遂溺摩登姪舍之難由是殷勤啓請三觀妙門故我

故以經名而緊之終焉此實通途之大旨也

依此體啓大智用故然此藏心具有三意一空如來即一眞法界如來藏心也先示此體爲所觀之境要一都示三觀之體而此體者所謂常住眞心性淨明體

以即珠故真心本淨了絕妄緣雖有隨緣之妄妄不足珠其體空淨了無色相雖有隨方之色色不離珠一空如來藏者謂此藏性其體本空一法叵得如摩藏二不空如來藏三空不空如來藏

性三·種相續深窮生起之由委明循業發現之義總 觀體能假此體名員空觀經名奢靡地 題不完之體的從有半卷經文計一千五百餘言 **舰此體名不空觀經名三摩亦名此從宮那** 性起故名不真空故為觀者示此藏性以為閱證能 性雖空而能隨緣顯現十界依正之相相即是性以 德包合融攝織悉不遺如摩尼珠其體雖淨具有圓 二不空如來藏者謂此藏體雖空具有恒沙稱 從淺泊深大段總顯空如來藏理從初悉唇前 三科七大會歸藏性然後真妄和融方顯妄即是真 徵八辯始則決擇真妄且云妄不是真以明五蘊身 具足萬行十方如來一門超出妙莊嚴路起一往七 難啓請世尊許說日有三摩提名大佛頂首楞嚴王 照之用而能隨方現一切色色即是珠以珠現故藏 心不有世界本空破我法二執以題本覺真如以至 三空不空如來藏謂此藏性其體淸淨能應能現如 真以即真故名曰真空故爲觀者先示真心以爲 此從經首阿 執相 性功 批

> 文有二章费三百言 文有二章费三百言 文有二章费三百言

生雖具妙心非妙觀不能顯且如我今證此眞心安 學派雙是則雙存存則三諦靈然泯則一心無寄寂 變派雙是則雙存存則三諦靈然泯則一心無寄寂 與心通可謂妙契寰中泯同法界矣圓融圓融深思 照同時存泯無礙唯在忘言者可以神會絕處者可 以心通可謂妙契寰中泯同法界矣圓融圓融深思 疑職性之理如此深妙如何汝等以所知心而能測 以心通可謂妙契寰中泯同法界矣圓融圓融深思 以心通可謂妙與天敬。

摩尼珠其體淨圓淨故非色以即珠故圓故能應非

住大定圓照法界凡有動作皆是大用現前汝等迷

令先悟一心依之建立三槻妙行然後行成解絕頓之舉措云為皆是塵勞業用故曰如我按指海印發之學活云為皆是與當人之。 一念回光方悟神珠本有故隨結實戲論切勸 一念回光方悟神珠本有故隨結實戲論切勸 但能一念回光方悟神珠本有故隨結實戲論切勸 但能一念回光方悟神珠本有故隨結實戲論切勸 一個的自欺尙留觀聽而不修之是以阿難聞說疑惑 如何自欺尙留觀聽而不修之是以阿難聞說疑惑 如何自欺尙留觀聽而不修之是以阿難聞說疑惑 如何自欺尙留觀聽而不修之是以阿難聞說疑惑 如何自欺尙留觀聽而不修之是以阿難聞說疑惑 如何自欺尙留觀聽而不修之是以阿難聞說疑惑 如何自欺尙留觀聽而不修之是以阿難聞說疑惑

初示三概之體屬見追介竟

證一心者手

路方便施設亦有三重以智照理战單以概名約妄源了無說示今約眞妄生滅之門會取返妄歸眞之體之智還照寂滅之體理智一如雕念雕相名一心體具有廣大智慧光明義故說名爲智今以即二示三舰之相考由前開示一遺法界如來藏心而

相以明故日觀相

且先略示觀門

一奢摩他空觀

他空觀

二三摩鉢提不空觀

不異色故名不空作是觀者名不空觀全珠即色以即色故故日空即是色以空非空故空

此則諸法當體虐假如幻不實如珠中色分明顯現

然不動雕即雕非是即非即言語道斷心行處滅心色非珠名空不空非寂非照如如平等唯一心源湛法法爾當體寂滅寂故名空照故不空如珠與色非法法爾當體寂滅寂故名空照故不空如珠與色非

次正示概相文中大科爲四心無間任運流入薩婆若海作是楓者名中道楓

初總示迷悟之根 二正示一心三觑之相

證眞常旋席妄而復妙覺要先以此不生滅心爲本 水此則本不分而分元不濁而濁矣今欲即生滅以 器参手太虎湛淵之心渾濁而失照似塵沙投於清 引起五濁業用煩惱使妙圓之體隔越而不通若墓 若生滅入照則當下眞常若煩惱知根則迎刃而解 修因照破生滅之原次審所結之根誰是煩惱之本 寂之真心結爲四大妄分六根根塵和合虎妄生滅 妄歸真造端不出二決定義意者蓋原迷此圓明湛 無其方先令決擇真妄分明然後隨宜調治故欲返 之方故有請入華屋之問冀得直捷之門即可乘便 而入因相而修故此科名三舰之相然世尊所示別 藏性妙覺明心圓滿周偏備在於已不假外求良以 初總示迷悟之根者由前阿難聞佛開示已悟如來 向徒事攀緣不能攝伏今將思而修之不知造進 三略示解結之方 四廣示最初方便

此後重徵一六意顯粘湛而妄發深窮生滅之根元則則能照之一心心心寂滅所照之萬法法法圓通期則能照之一心意處盡堪合驗良以初心昧劣不解圓想。如須直指當陽要在一門深入由是備顯六根優劣心須直指當陽要在一門深入由是備顯六根優劣。一個是則否家之故物可歸請佛之涅槃可證矣如是則否家之故物可歸請佛之涅槃可證矣如是則否家之故物可歸請佛之涅槃可證矣如是則否家之故物可歸請佛之涅槃可證矣如是則否家之故物可歸請佛之涅槃可證矣如是則否家之故物可歸請佛之涅槃可證矣如是則否家之故物可歸請佛之涅槃可證矣如是則否家之故物可歸請佛之涅槃可證矣

二正示一心三觀之相

心應時消落此實圓觀之祕訣破妄之神符還元之

應念圓成得一旦常光顯現而生滅圓離則根塵藏

再起斷見之疑驗出眞常之妙性斯巳密揀耳根以

爲初心方便若一心守真常而棄生滅則無上知覺

旨始在茲乎是所謂返妄歸眞無出二決定義也

之疑意謂生滅不常可說爲結今既常矣將何物而阿難聞前第二義門生滅即常之說遂起何名結解

うりけ

見六盛然而根塵之間元無實體虎有其相故若交 邓嚴 空有何名蓋由明味因依眞妄互立迷之而 蘆是以結解同根聖凡無二汝試但觀交中藏生節 實若眼底之空華沉非眞與非眞何有能見所見能 於如來藏中本無去來迷悟至若有為起而無為滅 六根知見立知即名生死了六根而本同一體知見 俱是綠生如目前之幻化無爲起而有爲波盡爲不 雖明空有未極一心何則蓋一眞之性不屬生死混 無見斯即涅槃此實結解之元豈可更容他物然此 此明言當機猶自未悟世尊因而解之曰根塵識性 六妄同生悟之而一眞何寄良由此體甚深微細熏 同一眞源鄉脫兩途元無二致蓋因迷一眞而妄見 又更容他物哉直由迷悟之分故有結解之異耳如 而同告之日使汝生死是聚若皆汝六根所致也是 有之見娶顯中道之旨方契一心之源故爾諸佛因 問此實初心所混故須甄明令其親相分明不墜空 則執妄爲眞皆由不了迷悟同根真妄一體故致斯 名結結既尚無從何物而名解耶蓋前以常爲斷此

> 徑登彼岸直造妙嚴唯此大定法門故應修而證入 而非幻尙無不執而幻法何立如是則六根圓湛空 而非幻尙無不執而幻法何立如是則六根圓湛空 則是名金剛三昧如幻摩提修之而一念頓超擬之 則是名金剛三昧如幻摩提修之而一念頓超擬之 數是非齊泯妙圓之旨盡在茲孚此

世

三略示解結之方

而修之爭奈初心不知直捷之方故有六解一亡之而修之爭奈初心不知直捷之方故有六解一亡之而修之爭奈初心不知直捷之方故有六解一亡之前遠啓選擇之談故我世尊精宣妙旨巧示玄機聊度, 一亦不存要顯依一眞而分六妄妄若滑而眞亦不立何則良以眞淨界中本無此事生死涅槃皆即狂心之源耳故隨請解結之方。審明下手之處除結當心之源耳故隨請解結之方。審明下手之處除結當學與對華相故須眞妄兩忘方可會歸中道直造一心以顯二邊無力當陽直入必須中道收功斯實入心以顯二邊無力當陽直入必須中道收功斯實入心以顯二邊無力當陽直入必須中道收功斯實入心以顯二邊無力當陽直入必須中道收功斯實入 等因而失之日我此說者乃出世微妙之因緣非世俗和合之雖相況我世出世法一一皆了元因別此俗和合之雖相況我世出世法一一皆了元因別此修行豈不知其節要加茲功用不勞彈指而順證無生不涉途程而徑登佛地是故阿難隨汝心中選擇生不涉途程而徑登佛地是故阿難隨汝心中選擇性不涉途程而經避佛地是故阿難隨汝心中選擇性不涉途程此根初解五粘隨脫而先得人空從此觀智亦泯斯實藥病俱遭真俗兩融三諦顯然一心無智亦泯斯實藥病俱遭真俗兩融三諦顯然一心無智亦泯斯實藥病俱遭真俗兩融三諦顯然一心無智亦泯斯實藥病俱遭真俗兩融三部顯然一心無智亦泯斯實藥病俱遭真俗兩融三部顯然一心無智亦泯斯實藥病俱遭真俗兩融三部顯然一心無智亦泯斯實藥病俱遭真俗兩融三部顯然一心無智亦泯斯實藥病俱遭真俗兩融三部顯然一心無智亦泯斯實藥病俱遭其俗兩之。

衆生直以一念纔興空溫頓起諸緣不息三有齊生

方便何則原夫覺海澄圓圓澄元妙本無世界及與

文殊揀選誰合此方之機唯獨觀音耳根可作最初

非大智無以潛眸鬧裏奪尊非大悲不能下手故敕

 六根成解脫也其如六根幻翳三界空華今開復而 以名若旋妄遺塵則性何名狀此所以一根旣返源 是金剛三昧如幻妙門如斯秘密絕要員修何不將 聲故此流轉生死果龍旋流無妄豈不願契無生此 界衆生此根最利投機之指莫尙於茲良由迷本循 垣英隔音聲生滅開性恆常寤寐一如身心不及此 以契眞今若剋合此方教體的示機宜速取三摩實 聞以自聞聞豈肯畜聞而成過誤況開非有體因於 則可由開性以證眞常從耳根而入妙覺矣況復此 從聞入何者真以聞根圓妙十處周聞聞處虛融牆 之性不二奈何恨機不一是以方便之路多門在手 所未能忘題若觀識性雖則包含萬法館存分別雖 五大無知昏鈍若採見性雖則都攝六根然尚在能 **匪涉圓融若恐六誠而六識生滅宛然若假五大而** 而入六學之體不非常住若依五根而入五根之性 聖性順逆皆通屬之初心不無遲速今者若就六塵 常住真心莫得而常住矣若約妄法全員斯則歸元 是以六處安分諸塵妄隔使圓通妙體不得而圓 。通

循如夢事安有夢中之境而能留汝形骸耶大檗世 翳除川塵消而覺淨淨極光達寂照含虎根境皆空 可超諸漏然前見道明心巳閒慧性修道方便定相 耶中三決定義所謂攝心以飛定慧是生三者圓明 途猶屬行門之事然世尊所答別無其方直以毗奈 場遠諸處事故發度人之請遠益未來之機通會長 有依教信行之造如何攝心軌則得正熏修安立道 矣於是當機開說自心了然明見還家歸真道路斯 說之法但依此修超乘餘根眞實心要莫斯爲妙者 就菩提無過耳根爲最斯乃大小共由之門淺深同 亦從中遊入是若將救末劫求出生死之人欲速成 師一路抄門三世聖賢修行捷徑非但閱音獨擅我 開機返自開於真性以成無上之道哉此是微塵諸 生應時平等矣如斯妙利真質閱通何不旋倒妄之 而幻消則情忘而就謝圓明妙證當下現前諸佛衆 間男女皆如幻以幻成雖見搖勁全一機抽由機息 川觀相分明現前無感奈何未來末法邪道亂真其 四五其戒為基本尚未明言今若得正無修須憑

之行誠在斯矣歸眞之要妙在茲乎是故宣揚神咒 使衆殿聞廣顯功能策令諦信方盡修道之門統收 沿事理齊修庶指日以取菩提刻期而成聖果妙圓 除而三界可超三身可證矣況此神咒功力速疾冥 呪此則顯密雙修三慧並運庶幾三障可破三黙可 依清淨之師若要詳悉壇場必使衆緣具足身心俱 資但能依教加持破惑如霜遇日是以略陳軌則令 人然而現行易制宿習難除是須誦我無上佛頂心 清果能四事不遗自然遠諸魔事正行可成正定可 故例量重尤是須併斷若欲圓成修學必先持此冰 懲生死以冤負相率故次殺盜隨舉妄言矜俗貪愛 不生皮流自絕然而具修以離欲爲本故先短欲首 潛滋委論酬償殺盜相若爲其永殞善根不成三昧 絕求停流端在塞源拔木戒雖多品四重為根根本 始於濫觴之念煩惱之林翳日生於萌蘗之根今若

妙閩之行耳

二示三觀之相屬修行分竟

十

顛倒相因悟六想而本一真則二種轉依是號是故 要之不過五十五程實由迷一眞而爲六想則二種 順息然且生死界寬總之不出一十二類涅槃道遠 生滅名妄迷之則生死無端滅妄名真悟之則輪廻 之空華亂起寸心方歇則一員之幻影至消是所謂 明遷無生而作衆生是稱顛倒此則本不生而生斯 圓成眞三摩地何則良由迷眞覺而成不覺故號無 汝今欲修三味直詣涅槃先當識此順倒之因斯可 十五位真家之路所以然者何也良以妙性圓明真 此能斷能證之力用轉凡成聖之功能故名三觀之 至是故請問五十五位眞菩提路要與圓妙觀行有 到涅槃始從凡夫終至佛地中間漸次名目以何而 源湛寂本無迷悟安有聖凡蓋由一念纔奧則三有 用也然世尊所示先明二種顛倒妄類之因後示五 可乘便直提而入依之造修任運一心法爾不無斷 正黑修身心快然獲大饒益然猶不知如是修證末 感淺深證眞高下之用是故阿難聞前顯密開示得 三示三觀之用者上來所說觀相分明得倚圓根即 入者矣三側之用無尚此耳一生取辦其在茲手修 以三分員永斷無明而踏妙覺然重重觀察位位研 泯合心境俱空身土俠然自他圓證此則始從觀行 窮莫不皆以首楞大定三觀妙門單複頁修漸次證 **刳而不發制止現行令根境偶而不行如是則根塵** 為本今將長揖三界永越四生必痛絕助因使正性 也蓋六根相續端由姪殺爲因諸苦長淪直以盜妄 頗倒具於妙聞真心全真即妄修證本於元所亂想 故三種漸次因之而建立五十五位由是而進壓何 見斯即涅槃者乎細尋大旨詎不信哉然全妄即眞 根更非他物意此豈非知見立知即無明本知見無 以明真妄是所謂使汝流轉生死速證妙常皆汝六 端指色蘊之質此則全憑正報以顯悟迷總屬衆生 於五十五位由是觀之則衆生實約四蘊之心世界 十二類生則可以一念之悟無生而三觀齊修證取 何巳且旣能以一念之迷妄動而六想橫發輪迴於 迷船不息則生死之業何窮妄念不休則遷流之世 有無生之衆生本無住而住故有無住之世界是以

1

The base of the state of

舍那清淨修證漸次深入者也。金剛觀察如幻十種深喻奢靡他中用諸如來毗婆斷已極故結歸觀心以終其請故曰是種種地皆以

三示三觀之用屬證果分竟

護親因度脫阿難性比丘尾得菩提心入佛知見若 則凡在有緣皆堪受度惑無不斷真無不窮改名教 鉢怛囉無上賽印十方如來清淨海眼若就用而言 皆歸究竟由其理趣深玄故一言難盡偏圓互煥五 若理行因果俱屬圓融然則能詮之文若教相名言 的指因果皆真則佛佛資成之始無非究竟指歸故 如來藏心一實相印海眼真經故名大佛頂薩怛多 目方周意者前來開示要妙法門若剋體而名乃是 理有當名之實斯即有實有名良以上來所詮之義 則名無得物之功是即有名無實若就勝義而 文殊請問經目意在結指觀名何者蓋約世諦而 體此則背塵合覺之行旣終返妄歸眞之路明矣故 體依之建立與妙行門藉此妙行風修還證妙圓之 四結三觀之名者由前一往開示令其先悟妙頤心 論則 談

多如來密因修證了義若合論體用廣大因果同時 是故名大方廣妙蓮華王十方佛母陀羅尼況若據 量故名大方廣妙蓮華王十方佛母陀羅尼況若據 是故名大方廣妙蓮華王十方佛母陀羅尼況若據 法身所演中道名言契之而頓紹佛家修之而不出 大定故名灌頂章句諸菩薩萬行首楞嚴斯皆稱實 大定故名灌頂章句諸菩薩萬行首楞嚴斯皆稱實 此所謂言雖請問經目意在結指觀名是則教理行 此所謂言雖請問經目意在結指觀名是則教理行 果皆歸大定之源眞妄悟迷總入如來藏心者矣大 果皆歸大定之源眞妄悟迷總入如來藏心者矣大

四結三觀之名竟

現使根塵識消別佛法身心皆爲餘事別此妄識依拠法覧斯文而通會忘言象以冥符願一旦常光顯要冀潜修之士同志高人先請熟讀經文然後安心良有所以顧初心草創誠昧細詳若論宏綱略題大上來七軸半文通科判爲大開修證之門開此四章

次曲示迷悟差別巳上大開修證之門竟

通量非剩語者哉

首楞嚴經懸鏡

痛哉

5

憨山老人夢遊集卷第四十二: 妙法蓮華經整節

明海印沙門釋 德清 述

妄想之見以祛小乘名言之執直示究竟一乘實相 之旨故佛於般若自上多方淘汰根機漸熟故前此 於楞伽會上說離心意識自覺聖智境界以破外道 言說皆爲一乘奈彼劣解之機如言取執不得離言 為說法如此皆爲得一佛乘一切種智故是則凡所 心所者隨其本性以種種因綠譬喻言詞方便力而 滅場地如標月指故云我今知諸衆生有種種欲深 入佛智慧之門耳然言雖方便而意實指歸一乘寂 特三乘理行由嚴理未圓故行距真行而果非真果 皆非究竟佛慧但爲資發前導皆爲方便權設以爲 名一乘既如來出世唯爲此一大事故所說之法唯 行因果而且由前四十年中根機未熟故所開示者 有一乘更無餘乘而一代時教其所顯者唯一乘理 前買證唯此一事更無餘事悟此知見即登佛地故 原夫世尊唯以此一大事因緣故出現於世所謂開 示一切衆生各各本有佛之知見令其悟入即得現

界故光照萬八千土然生死涅槃本來平等故光中 矣然此智境非中道妙智不能入故放眉間白毫相 光要顯示衆生日用根塵識界即諸佛自覺聖智境 雜言之道直欲衆生現前頓證諸佛自覺聖智之地 信以依識分別故彌勒腦疑所以必問文殊者意題 心境乃諸佛所證衆生所迷即今欲令衆生現證故 智直示衆生令其默識而悟入之可謂先以定動者 三昧於無量義者殊非多多之謂心葢顯示此一栗 上依前智境直示妙行以為真因將欲依此真因順 聖智則諸聞者易信易入根機已熟故於此法華會 今則已蒙直指人人本有佛之知見即是諸佛自覺 此實相妙境非智莫證故也及啓問文殊廼引燈明 由吾人未離心誠依然眼鈍頭迷難免分別不能諦 通身吐露徹底掀翻意要人人不言而悟當下聽取 直指現前繼毫不昧至若天雨四華地搖六震可謂 **圓現法界事相生佛始終昭然在目意在顯此實相** 自覺聖智境界離心意識限量故此則順以雖言之 契員果故最初建言即云說無量義經入無量義處

言說以家啓之獨理明告之曰語佛智慧甚深無量 於不言之道終難傾愈仍須復以言說而開導之是 容可不悟今特直示尚爾曹然信乎此智慧門真難 門也惟此雖言之道唯佛與佛乃能死盡殊非心識 智慧之門即今日入定放光現瑞之事皆入智慧之 其智慧門難解難入不獨一往四十年中所說皆爲 則凡涉語言皆方便也故世尊出定不得已而又假 明說破可謂後以智拔者矣奈何吾人知見未忘故 解入也何者以前無量無邊方便譬喻因綠種種言 思量分別可到既曰無量豈心量可知耶昔時曲說 之本始證今日之端相此則曲唱傍通巳爲指點分 者隨語生解畢竟不能悟入今日之事以化綠將畢 詞皆爲顯示一乘欲令死竟皆得佛智慧故奈何聞 德由是概之則全經二十八品通為發揮開示悟入 光東照顯法界之真機終於四法成就證普賢之常 盡捨如言之執究竟自覺聖智雜言之處故始於一 直欲衆生明見自心了悟實相見本法身各各現證 涅槃時王勢不容已故如來極盡神力而大發揚之

> 真因後六品皆顯示一乘妙行意將依圓理而起妙 所之恕克能證及然此真理非智莫照故先依文殊 本有而不知關目而不見今欲返妄歸真必須先悟 本妙明心故先示理境然後依理起行淨治塵沙無 本妙明心故先示理境然後依理起行淨治塵沙無 本妙明心故先示理境然後依理起行淨治塵沙無 本妙明心故先示理境然後依理起行淨治塵沙無 本妙明心故先示理境然後依理起行。 與之愈方能證及然此真理非智莫照故先依文殊 本有而不知關目而不見今欲返妄歸真必須先悟 本有而不知關目而不見。 與之愈方能證不是, 以為為故 其因後六品皆顯示一乘妙行意將依圓理而起妙

以開示悟入爲成佛之本由方便言說開示而發信證歸此法界故華嚴以信解行證爲成佛之基此經故以普賢四行以收功所謂無不從此法界流無不故以普賢四行以收功所謂無不從此法界流無不

從信而發解依解而起行行成解絕方能證入二經

始終一貫意實相符由是觀之其顯理之文皆信解

之旨也

雖曰三周說法授三根記其實別爲大開一切衆生一令其開悟而證入者也其從方便至法師九品經文人然顯理有二十二品其序品者乃總示法界之眞機

未能碩淨故須經歷多劫方能究竟苟能當下 即名見性成佛尚有無始以來歷劫塵沙煩惱無明 皆一一授記成佛唯是但因方便開曉令生信耳非 盡所謂頓悟漸修者也以一念頓悟自心與佛無二 多劫者蓋顯理則頓悟乘悟併消事非頓除因次第 由解行而證入也故唯授記而已然雖授記而又經 至持一個一句一念隨喜者我亦與授菩提之記故 此常住佛性第一義論一心之妙皆光中之境吾人 隨順是師學得見恒沙佛是則緣緣之中慧命不斷 日用之事耳故但有能信此法者即入法位所以乃 則可終期實證至若譬喻因緣種種之說者皆欲顯 來座意顯能信解受持此等法者即是法師也故日 心契佛心行契佛行所謂入如來室著如來衣坐如 足故如高原凡有鑿者無不得水此但正因佛性耳 是須必藉緣因方能顯了而法師者即緣因也但能 此 此法而教人者即爲大法師意顯此事雖則人人具 平等佛慧也以此佛慧各各具足無欠無餘但能. 《無不頓證故曰凡有聞法者無一不成佛若有以 一。念 知

齊平故法師已前十品經文總為大開衆生佛之知今日以此法中一念不生三際願斷古今一際凡聖顧斷無始無明即名歷多劫矣所謂觀彼久遠猶若

見也

然但以言開曉聞者唯信其言而已未能明見自心之妙即有所悟乃應化之跡本非見法身境界也所謂豬處門外止宿草菴終滯權跡故須宣示法身實體處門外止宿草菴終滯權跡故須宣示法身實體別便令頓見自心之妙方為實證是則現寶塔品乃顧示自心以顯法身之象也所謂開方便門示品乃顧示自心以顯法身之象也所謂開方便門示場的於著中此。此實相談令衆生知此見此實相真境耳吾人苟破無明頓開心地即此五蘊身心便見法身眞佛故見去身所演以設無所說故於塔中出大音聲以妙契法身所演以設無所說故於塔中出大音聲以妙契法身所演以證無不無住故塔處虐空聞無所聞於之乃之寶妙塔,可以此佛性常住不滅故塔中有如來全身以體即無生故凡有說此經處即皆現證以淨智學的方面,以此傳達一一家光照燭以心心寂滅故徹照無故分身諸佛一一家光照燭以心心寂滅故徹照無故分身諸佛一一家光照燭以心心寂滅故徹照

生非情識可到故佛座高遠以住本無住故接大衆 皆在原空此乃衆生之性德故直示如此令其共知 人人本具各各不無故大衆願見多寶第以生本無 滅情亡員應不二故釋迦多寶共同一座惟此因緣 如入禪定以感應道交故爲聽是經而來至此以生 如此則本有法身一念頓現故多寶如來全身不散 共見現證不疑斯則諸佛之本懷巳露利生之能事 念頓破団地一聲虎空粉粹故如却關鑰開大城門 是須以無依智隨順覺性而開發之此所以釋迦住 散循是生死岸頭事何以故由生死幽關末能进裂 是猶在半途以生滅之見赤忘取捨之心未泯此所 度空中以右手指開七寶塔戸心直使無始無明 如寒潭皎月靜夜鍾聲隨扣擊以無虧逐波瀾而不 以願見多寶而未及見也此正古德所謂直饒做到 互融自他無礙故十方分身諸佛齊集其中然雖如 泯故三途順空天人不見恒沙性德本自圓成依正 十方世界盡是寂 萬億多國通爲一佛淨土到此則根境雙亡善惡齊 滅道場以法法皆員故三變八百

示一切衆生日用現前佛之知見也此妙法付囑有在由是觀之則現寶塔一品正乃直即瘦唱言如來不久當入涅槃欲令此法常住終古即便唱言如來不久當入涅槃欲令此法常住終古即便唱言如來不久當入涅槃欲令此法常住終古

念轉變之力耳唯在法愛情忘分別念息自然了

之賞也是須自信自心自参自悟方堪紹佛家風故 涉俗無難煩惱方能易破故如戰勝有功而得髻珠 依佛住安住法空故欲坐如來座方能頓悟此法故 契佛心以大悲爲首故要入如來室行合佛行以忍 辱為先故要著如來衣然佛智如空無所依是必住 方意令悟此法者先以三業清淨性戒爲尊必須心 以煩惱根深最難調伏故說四安樂行以示悟之之 其人矣雖有堪荷之人若求而不得其方亦不能悟 日佛自知我心所謂師資雅合水乳相投是則已得 願往返十方世界如法修行種種苦行皆當能忍且 涉俗故如來默視八十萬億那由佗菩薩此正激發 小機昭廓大見耳而此菩薩頓契佛心便師子吼而 心難行能行難忍能忍妙契無生不言而喻者方堪 堪受持此法難於涉俗利生意須上根利智廣大悲 **曼此其為子智慧難免懷疑故說持品以顯上乘不** 心未泯斯皆法執未盡我見末消是故不能悟淨圓 坐寶蓮華成等正覺也若夫憎愛之念未忘取捨之 悟便登不退故龍女獻珠之頃即往南方無垢世界

行偏融一切行一法偏含一切法故一一皆有多多 自在神通之力諸佛師子奮迅之力故說壽量一品 常住心地故云如來今欲顯發宣說諸佛智慧諸佛 大士皆起疑心而如來至此方大開秘密直示本元 也斯乃法身邊事非心誠可到故彌勒與八千恒沙 種安慰而世尊印許如此方能得聞是經入於佛慧 釋迦二佛頭面體足以此妙契佛心故問訊世尊種 眷屬凡有所作皆同向法身故各詣虚空奉覲多寶 事事皆眞頭頭盡妙故云大衆皆是唱導之首以一 中住以現前煩惱皆從法性所流故云先所教化以 在人人六根門頭放光動地應用不缺故有六萬恒 經我自有六萬恒河沙衆是時大千國土應聲震發 方來者雖是菩薩猶尚不堪故云不須汝等護持此 盡在此世界之下以中間無質故若交蘆故云虎空 河沙眾身有無量光明以根塵同源縛脫無二故先 不是家珍向自己胸中流出方始葢天葢地所以他 從地湧出品乃顯自心開發之象也所謂從門 而無數菩薩同時湧出惟此恒沙性德本自劇成只 入者。者

功德勝利寶施福者此激勵小乘起慕大之心也多 之怖也若能精持流通此經之法師則得六根清淨 不可量者意在專令凡夫一生取辦不生佛道長遠 闡提外道令發大乘正信也若有修行之功其福又 之罪窮劫不盡者所謂不信之罪衆罪之上此勸發 福報難思者正顯此法以信得入心共有一念毀謗 進權教菩薩令其捨權證實也其有一念隨喜功德 劫修行五波羅密不如聞如來壽量之功德者此策 功德以極顯妙悟自心無爲功德之勝益也然持經 量五品經文皆分衆生悟佛知見也明矣若夫分別 **霓聖智境界所以大地三乘以思量心不能測度也** 佛之知見又何能知此見此哉此佛之眞知見力自 宜矣是則提婆運多持品安樂行從地湧出如來壽 常在不滅大火所燒此土安隱以顯實相眞境此非 生以明其智慧門難解難入之意也且云我處靈山 無礙以明如來智慧甚深無量以種種方便示現利 以示法身壽量揭盡本懷以顯妙明常住眞心不動 周圓偏十万界隨綠普應妙化無万修短隨綠隱顯

天人皆盗見佛說此妙法華經也有能了悟自心則 衆生皆證圓覺有情無情齊成佛道故彼十方八部 際故醫欬彈指之聲偏至十方世界也到此則一切 轉頻惙之具皆作成佛之眞因故所脫嚴身之具旨 滿百千歲也如我按指海印發光咳唾掉臂皆冥具 光祖十世古今始終不離於當念故諸佛亦現神力 海自他不隔於毫端故十方諸佛亦復如是放無量 也至此境界則依正互融自他不二矣所謂無邊利 佛身故遍身毛孔放無數色光遍照十方諸佛之身 梁前現大神力出廣長舌上至梵天也無一色而非 揚之以顯悟心功德廣大不可思議也吾人苟能到 故地湧之衆至此方哲持經如來極盡神力而大發 堪荷大事故說神力品以照悟心功德難思之象也 到此揀擇情忘是非執謝可謂妙悟之極如此方能 深造而自得者故以佛性種子普閱四衆而授記也。 此微悟唯心境界則無一事而非佛法故如來於大 過於一念隨喜者也若常不輕可謂了悟平等真如 之功德者此廼揭示現證之一班以明精持利益又 智慧一向迷而不知今如來於此經中盡與開示無 菩薩頂屬當受持廣宣此法。令一切衆生普得聞知 等汝等應當」心流布此法廣令增益如是三摩諸 此以後即說屬累品以終如來出世說法之本意焉 方堪荷負大法耳。故云是人於佛道決定無有疑故 者以一切衆生各各本具佛之智慧如來智慧自然 修習是難得阿耨多羅三藐三菩提法今以付囑汝 薩頂安慰而屬之日我於無量百千萬億阿僧祇劫 然世尊從法座起即以右手摩從地湧出無量諸菩 妙其實發起二乘樂大之心也直欲人人極證心源 也然所心廣讚持經功德之勝如此者言雖顯法勝 以極言一切有爲莊嚴功德總不若受持此經之勝 秘要之藏一切甚深之事皆於此經宣示顯說此所 境界也以如來一切所有之法一切自在軸力一切 經無量劫衛不能盡者以類自覺聖智殊非心識之 之神力盡聚生之界門若欲以此顯示妙悟之功德 成寶帳偏覆此問諸佛之上也心境廓徹限量消忘 故十万國土通遠無礙如一佛土也然吾佛極廣大

> 所秘咨所謂如來是一切衆生之大施主也且云未來世中若有一人能信如來智慧者即當演說此經使得開知者為令其人即得佛慧故也苟能如此方便度生可謂報佛深恩矣由如來打嚀之意也殷菩薩奉持之心也切故菩薩各各歡喜益加恭敬乃至三反俱發聲言如世尊物當具奉行願不有慮也是三反俱發聲言如世尊物當具奉行願不有慮也是夫起行造修是在各人自写真故令十方諸佛各還不出學文。 一定人實」與一個人。 一定人員, 一定人員, 一定人員, 一定人員, 一定人員, 一定人員, 一定人員, 一定人員, 一定人。 一定人員, 一定人。 一定人。

王發揮者以觀智之藥治煩惱之病智起惑亡應念行成德以顯入佛知見之象也然發行之初必以藥藥王菩薩本事已下至普賢勸發六品經文皆明以

世尊猶故在世以法身不許彼此选相見故雲門云 喜見菩薩即捨兩臂此分破俱生法執之象也所謂 光不透脫此亦須混故本佛於夜後分入於涅槃而 直饒透過得到法身避若法執未忘巳見猶存亦是 故復生於日月淨明德佛國中以常光照明故云彼 我執倘有俱生法執未忘而法身之見未泯故自言 佛今故現在此入入地之象也然而至此雌破俱生 泯故其身火然千百二歲此則入正法位不職佛家 精進是名員法供養也然前七轉識既消則根塵俱 億恒河沙世界其中諸佛同時讚歎如此方名是眞 員如內熏故服諮香油以頭捨藏識故光照八十萬 現一切色身三昧此從初地以至七地之象也以此 佛名日月淨明德了悟本有法身證平等真如故得 臂被法執之象也欲被二障非淨智不能故所師之 在者以有我法二執為礙故也二執有二一分別二 化成無上知覺得大自在故稱藥王衆生所以不自 俱生今既悟妙心以即心止觀之力淨破分別我法 一障即登初地故藥王然身破我執之象也喜見然

故如寒得火如裸得衣如病得醫也力放廣讚此經功德眞實妙利凡有修者無不獲益政其法故兩臂還復如故此皆資法華實相三昧之酸其法故兩臂還復如故此皆資法華實相三昧之

緣覺能除一切過習覺法無我是時乃離三昧所齊 學三昧之實證此示妙行出眞入俗之象也問日說 中電相光偏照東方百八萬億那由陀恒河沙等 時世界過是數已有世界名淨光莊嚴其國有佛號 佛世界過是數已有世界名淨光莊嚴其國有佛號 佛世界過是數已有世界名淨光莊嚴其國有佛號 佛世界過是數已有世界名淨光莊嚴其國有佛號 一家也按楞伽說如來最上一乘禪已乃云若聲聞 之象也按楞伽說如來最上一乘禪已乃云若聲聞 之象也按楞伽說如來最上一乘禪已乃云若聲聞

51世

漏界滿足衆具當得如來不思議自在法身此法身

意生身也又云有三種意生身一三昧樂正受意

刨

生身謂初地乃至八地盡員如際已捨藏藏斷俱生

於無漏界而得覺悟旣覺悟已復入出世間上上

無

員因心契會果覺故內髻白毫二光齊放以入出世 如用得如幻三味現身說法居法師位故名妙音以 覺之象也以八地菩薩證一心真如進至九地發真 間上上無漏界故光偏照東方百八萬億那由陀恒 妙智乃因心之象也頂上肉響乃無見頂相無上果 生身所謂覺一切佛法緣自得樂相是名種類俱生 覺法自性性意生身之象也然眉間白毫者表中道 無行作意生身由是觀之而妙音菩薩品乃示第二 是名覺法自性性意生身三謂種類俱生無行作意 三味門無量相力自在明如妙華莊嚴迅疾如意循 支分具足莊嚴隨入一切佛剎大衆通達自性法故 如幻夢水月鏡像非造所造如造所造一切色種種 察覺了如幻等法悉無所有身心得如幻三昧及餘 之象證三昧樂之意生身也此但能受三昧中樂故 身之象也而彼現一切色身三昧者乃了唯心境界 我執安住心海起識浪不生自心寂靜住三昧樂知 不能現一切身二覺法自性性意生身謂從八地觀 自心現境界無性是則前喜見者乃住三昧樂意生

名雲雷音王以根根塵塵周遍法界具足法樂普於 薩十万諸佛所有法雲法雨悉能合受故所師之佛 明照耀諸相具足如那羅延堅固之身也以此地菩 正復過於此身真金色無量功德莊嚴威德熾盛光 造所造如造所造一切色種種支分足具足莊嚴故 寶蓮華也此菩薩非身現身循如幻夢水月鏡像非 座身不動搖以三昧力先於座前化作八萬四千衆 現無量自在神通如妙華莊嚴迅疾如意故不起于 故願往娑婆見釋迦佛及諸菩薩也以此地菩薩能 菩薩能憶念本願隨入一切佛刹大衆化通自性德 薩名妙音也此位得如幻三昧及餘三昧門故得妙 冥會則能以一音演無量法得十無盡句故此國菩 河沙等諸佛世界以法報齊證故名淨光莊嚴以清 塵勞隨根示現故萬二千歲以十萬技樂幷奉八萬 目如廣大青蓮華菜正使和合百千萬月其面貌端 地覺為本因心故釋迦牟尼佛光照其身也以此位 幢相三昧等百千萬億恒河沙等諸大三昧也以果 淨眞因妙契果體故其國有佛號淨華宿王智因果

題現故名普門示現神通之力也由觀音大士以如 俱生無作行意生身此乃入妙覺後大閱鏡習平等 幻聞熏聞修金剛三昧力故生滅旣滅寂滅現前忽 行意生身之象也然此意生身乃從等覺入於妙覺 果海已得諸佛自覺聖智善樂深入妙莊嚴海逆流 而出現十界身無思而應所謂妙相莊嚴昭延類身 法忍此正覺法自性性意生身之象也以出入三味 彼此去來之跡是則觀音妙應乃示種類俱生無作 故有往來之相若夫觀音普門示現齊觀並照則無 塵之間身心轉變之力故四萬二十天子皆得無生 還歸本土圍繞白佛也然此神通妙用只在四大根 無量菩薩亦得是三昧及陀羅尼也以用不離體故 覺之家也以此示衆生日用現證之象故與俱來者 八萬四千人皆得現一切色身三昧而此娑婆世界 處處爲諸衆生說此經典此正當九地十地以極等 供養多佛也不動本際而作度生事業故現種種身 時俱現循如意生身土自他無障無礙故云種類 一十七寶蘇而能承事十方諸佛海佛國土故 親近

行文一本 第二 第二 第二 第二 第二

即如世之大將兵符耳然大將而能風行八表坐靜

妖氣掃除蕩淨而能致太平氣象者兵符之力也且

知准陰之智勇非握高帝之符又何以破秦楚而成

心之異稱而云神咒者乃一切諸佛秘密實相心即

然語陀羅尼此云總持謂總一切法持無量義乃

然超越世出世間即得上與十方諸佛同一慈力下 無不感應此妙行圓滿法華三昧之成功妙極於此 無不感應此妙行圓滿法華三昧之成功妙極於此 寒冥心聖宣可謂理極忘情謂如何有喻齊到頭霜 夜月任運落前溪信乎是法甚深與少有能信者惟 及其傳心故感三種加持者謂神力加持法力加持。 與內習無餘方能得二轉依克全妙果故說後三品 與內習無餘方能得二轉依克全妙果故說後三品 與內習無餘方能得二轉依克全妙果故說後三品 經神力加持之象也楞伽唯二種加持開现棄尼品。 經神力加持之象也楞伽唯二種加持問題 然超越世出世間即得上與十方諸佛同一慈力下 然超越世出世間即得上與十方諸佛同一慈力下

十万如來含此咒心於徼廛國轉大法輪十万如來 定漢大業之功哉是故上根利智修行之士能 持此咒心能於十方摩頂授記十方如來依此咒心 圓世尊憂愍末法復說此陀羅尼品以深防邪誤是 **赔之葢有深固幽遠殊非智力可到者荷非仰仗諸** 能於十方拔濟群苦十方如來隨此咒心能於十方 制諸外道十方如來乘此咒心坐寶蓮華應微塵國 得成無上正偏知覺十方如來執此咒心降伏諸 所謂以神力加持也首楞嚴云十万如來因此咒心 悉怛哆鉢怛囉秘密神咒此所以法華三昧妙行功 葢行有顯密前正觀之力所謂顯行此陀羅尼乃密 哉是故修行者無有一人不仗秘密神咒败功故也。 魔易侵如此又何能出生死證真常而入寂光淨土 佛如來秘密心印咒輪而攻擊之倘內潛一發則外 直入奈何無始習氣微細幽潜雖以止觀之力而 事善知識四威儀中供養如意恒沙如來會中爲法 王子十方如來行此咒心能於十方攝受親因令諸 行耳首楞嚴云若修行人習氣未除應當一心誦我 一超 魔

上覺坐菩提樹入大涅槃十方如來傳此咒心於佛 小乘於秘密藏不生驚怖十方如來誦 之中以示生死險難之象故行人於生死險難之中 汝等衆生未盡輪迴發心至誠取阿羅漢不持此咒 滅後付佛法事究竟住持嚴淨戒律悉得清淨又云 初者以此密印為妙行之首故次即毗沙門說者以 皆云六十二億恒河沙等諸佛所說而說呪藥王爲 然況此末法業垢衆生乎以此神咒廼佛佛心印故 而坐道場令其身心遠諸魔事無有是處應諸佛尚 乎次即持國天王者持國乃東方之天王東方之卦 天王也北方之卦爲坎坎者陷也以一陽陷於二陰 天王為護世四王乃生死界之主毗沙門乃北方之 爲免免者說也若夫虐明悅豫之境則無庸加持故 至若南方之卦爲疏雖者麗也虎明之象西方之卦 作至靜之行苟非神力加持又何以臻寂滅之境哉 動也論云動必有苦是則行人於生死動亂之中而 日慶慶者動也東爲群動之首易曰吉凶悔吝生乎 而欲願證菩提非神力加持又何以濟衆難出險道 此呪 成 無

之象也故但言遠諸魔事今此品者廼九地巳上入 能入妙由是觀之則前神咒加持廼從初地至七地 不加者則墮聲聞二乘之地九地十地等覺不加不 若不加者則墮外道惡見其八地巳上無相觀多若 莊嚴王本事品以示法力加持之象也楞伽經云若 妙之象故言二子轉及邪心而同出家乃本覺出纏 不以神力建立者則墮外道惡見妄想及諸聲聞衆 非法力內熏又何能淨除內障證二轉依哉故說妙 法忍此皆神力加持之益也神力加持外魔既消荷 此則六根清淨八識圓明故六萬八千人皆得無生 **怡應念化成無上知覺故種種諸燈供養而爲第一** 莊藥也以妙契法身潛通法界故香供爲尊一切煩 作妙明心光故羅刹女亦以身自擁護受持讀誦修 行是經者順令無明三毒淨盡無餘所謂令得消衆 無明羅利業智戕害法身今以止閱研窮化無明而 州 彼二天王不須說其而此繼之以羅刹女者羅刹乃 昧之鬼且飛行而食人肉者女則陰邪之至此示

經也然如來藏所以下出生死苦趣者皆由六識所 空現諸神變轉及邪心也以六七因中轉故二子先 請出家而藏試中種子習氣蒙止觀熏習之力皆轉 染令潛政王後宮八萬四千眷屬皆堪任持妙法華 名淨光莊嚴也以無依智淨自心體故二子涌身窟 如減無明故故所師之佛名雲雷音宿王華智其國 別心與諸佛智用相應唯依法力自然修行熏習員 王之邪心耳葢以此止视之力乃法身菩薩得無分 隨順覺性淨治無明名日淨德故所生二子能轉及 柔順之至多內助之力又始覺之象也以止觀內資 觀之力故淨德夫人者止觀之象也以夫人坤德也 明故名浮眼此轉染令淨之家也轉此二減全仗止 平等性智則分別之見即消見分亦派即得法眼清 察智則藏證無染汚可受故名淨藏若轉七識而爲 六七轉識造種種業受種種苦若轉六識而爲妙觀 故今迷之而爲阿賴耶識名八誠心王由此而有前 之象也何以明之妙莊嚴王者乃如來藏在纏之象 也今顯愛本真改日本事以如來藏本是妙殿果體

造業力牽纏故也今六藏旣轉則八識之生死因絕 知諸佛祕密之藏以六七旣轉而五八一時俱轉則 故以始覺有功本覺乃顯故其王得諸佛集三昧能 達離諸惡三昧也所謂無作無造無受者以本無性 以本來無染故淨藏菩薩巳於無量百千萬億劫通 四大根塵無不轉者故與王及群臣并四萬二千人 於虎空中化成四種寶臺臺中有大寶狀敷百千萬 珞以散佛上也以妙契法身常樂我淨涅槃妙德故 天衣適體真樂德也有佛趺坐真我德也放大光明 天衣其上有佛結跏趺坐也葢虚空恒一員常德也 一時共詣佛所也由轉染令淨解脫纏縛故解頸瓔 出總故王與夫人二子眷屬一齊出家此葢借法力 真淨德也四德之象居然可見至此止觀功與同時 善知識爲欲發起宿世善根饒益我故來生我家此 我邪心令得安住於佛法中得見如來此二子是我 熏習員如乃緣因佛性耳故云二子以神通變化轉 其善知識是大因緣所以化導令得見佛此皆顯示 資緣因熏習之力也圓覺經云譬如銷金礦金非銷

故有雖復本來金終以銷成就一成眞金體不復了 **瞋恚諸惡之心也一切塵勞應念清淨故爾時八萬** 爲礦故云我從今日不復自隨心行不生邪見憍慢 四千人遠廛雖垢於諳法中得法眼淨然非法力內 今行人旣仗神力加持令外魔無撓資法力加持令 普賢勸發品乃現身面言說加持以顯入佛知見之 圓果德亦滿故說普賢勸發品以終其會焉 如與法界等是皆借杲德以爲因心之力也因心旣 內障不生內外清淨身心解脫妙行功圓則所證真 熏又何以臻此哉故此品爲法力加持之象也明矣 象也以稱法界心修普賢行初發心時即仗此爲眞 等覺位謂行彌法界曰普隣極亞聖日賢此因位也 因故終得妙契常果然普賢有二一謂道前普賢乃 二道後普賢謂稱眞法界曰普彌綸萬化曰賢此入 起解絕故曰勸發然此普賢以法界爲身遍在一切 廼今之普賢也以初發心時即悟此體依此起行行 妙覺果海不住涅槃逆流而出雖居果位不捨因門 衆生動亂妄想塵勞之中與一切人天神鬼諸魔眷

易之辭也然此四法者果何意哉而成就之速如此 必得是押且既日當得而交日必得是員實決定不 四茂換一切衆生之心如是成就四法於如來滅後 耶芭信論云孫朋發越道相者謂一切諸佛所證之 劫修行唯在成就四法於如來滅後當得是經如此 入佛之知見明矣然世尊所答得處不多亦不在多 而已四法者一諸佛護念二祖衆德本三人正定聚 云得是經者足知由前解符於此證天所謂此品題 但問讀誦受持一旦然未聞有言得之者今普賢即 問於如來滅後云何能得是經向來一往諸大菩薩 言之道不容聲突此正忘言絕證之象也故普賢即 語道亦復不著無言說故云唯願世尊當爲說之也。 然而普賢如此請問世尊更無一言加答者正顯離 界說法華經與諸大衆而來聽受所謂雖復不依言 今以法力熏習而由言說通達故日遙聞此娑婆世 乃離心識處故云在寶威德上王佛國此職言之道 之力到此娑婆世界釋迦牟尼佛所也以法身真際 屬而爲勞侶故從東方而來與無量大衆各現神通

宜矣是則前開解行不出信心信極道圓入手妙覺 諦信唯心無外境界以此研窮是謂妙行以此妙行 許以信得入是則以文殊大智止觀之力照自心源 退名住如來種中正因相應此所謂入正定聚也旣 也又云如是信心成就得發心者入正定聚畢竟不 契手妙智智行妙圓所謂正因相應其必得是經也 心欲拔一切衆生苦故此所謂發救一切衆生之心 樂集一切諸善行故此所謂植衆德本也三者大悲 心正念真如法故此所謂爲諸佛護念也二者深心 論口信成就發心者發何等心略說有三種一者直 成就慧身不由他悟即得菩提此信心成就之謂也 乃信心成就發心者也華嚴云知一切法即心自性 秘藏非心所測唯許以信得入由是觀之此四法者 利弗尚於此經以信得入然而此經諸佛知見甚深 汝等若能信受是語一切皆當得成佛道又云汝舍 信心成就發心二者解行發心三者證發心由前云 道一切菩薩發心趣向義故略云發心有三種一者

正所謂啓明東廟智滿不異於初心此妙符華嚴始

道而如來示之以此四法而已又云是菩薩功德成 終無二故此普賢所勸發者唯此信心故言得經之 菩薩地盡滿足方便一念相應覺心初起心無初相。 當宁護與大菩薩衆而自現身供養安慰其心其人 能現十方利益衆生故如來滅後有能持是經者我 相應慧無明頓盡名一切種智自然而有不思議業 滿於色究竟處示現一切世間最高大身謂以一念 以遠雖微細念故得見心性故云得見我身又云菩 若有忘失一句一偈我當教之還令通利心論云如 薩從初發意乃至菩薩究竟地心所見者名為報身 者則爲向佛智矣故云以見我故即得三昧及陀羅 斯正現身面言說加持也又云若有衆生能觀無念 此所謂以一切衆生所喜見身現其人前而爲說法 羅尼此究竟之實證也梵語陀羅尼此云總持謂總 尼名為旋陀羅尼百千萬億旋陀羅尼法音方便陀 如者即是一法界大總相法門體所謂心性不生不 滅一切諸法唯依妄念而有差別若職心念則無 切法持無量義乃一心眞如之異稱也論云心眞

切境界之相是故一切法從本巳來離言說相離名 字相離心緣相畢竟平等無有變異不可破壞唯是 陀羅尼也又云言眞如者亦無有相謂言說之極因 淵源也謂念念生滅急流中而能念念隨順眞如不 假名無實但隨妄念不可得故此所謂百千萬億旋 根圓通云旋倒即機返聞自性旋旋也水之急流最 員如此所謂法音方便陀羅尼也旋者楞嚴觀音耳 言遣言此眞如體無有可遣以一切法皆同眞故以 說無有能說可說雖念亦無能念可念是名隨順若 隨妄念流轉故如水之漩澓也論云若知一切法雖 深而有 洞旋謂之漩渡以當急流而力能迴流漩渡 一心故名真如此所謂旋陀羅尼也又云一切言說 離於念名爲得入然無念者正念也故終誠以應當 一切法皆同如故當知一切法不可說不可念故名 如說修行當知是人行普賢行也以一乘實相佛之 本信心之至也故若有受持讀誦正憶念解其義趣 知見備殫乎此法身慧命不外乎是故普賢願以神 心受持讀誦正憶念如說修行正憶念者萬行之

通力守護是經於如來滅後閻浮提內廣令流布使不斷絕而如來即許之曰若有持受讀誦正憶念修不斷絕而如來即許之曰若有持受讀誦正憶念修理其効之速旣如此若有不信輕毀之者。其所得惡提,以極種種讚歎廼至不久當得菩提,其効之速旣如此若有不信輕毀之者。其所得惡稅,可應母長養一切諸善法惟此甚深秘藏無上法元功德母長養一切諸善法惟此甚深秘藏無上法元功德母長養一切諸善法惟此甚深秘藏無上法元功德母長養一切諸善法惟此甚深秘藏無上法元功德母長養一切諸善法惟此甚深秘藏無上法元功德母長養一切諸善法惟此甚深秘藏無上法元功德母長養一切諸善法惟此甚深秘藏無上法元功德母長養一切諸善法惟此甚深秘藏無上法元功德母長養一切諸善法惟此甚深秘藏無上法元功德母長養一切諸善法惟此甚深秘藏無上法元功德母長養一切諸善法惟此甚深秘藏無上法元功德母長養一貫之極致也

法華經點節系

萬曆乙未春予以弘法罹難被逮圍中達觀禪師

在匡盧聞報驚歎乃願誦

妙法蓮華經百部以求

恩宥遣之雷陽是歲冬道經白下達師遲予於江上一諸佛神力攝受之也頃予蒙

饉劫居不遑處且即從事 公之舌可乎予笑而唯唯及丙申春抵戍所正值 相晤于旅泊卷中夜談及此且日願以我之心用

此經幾二百部予時爲舉揚此事以開示之休夏白毫光中不職無量義處三昧也戊戌夏日菩提樹

妙法華經如是而已老盧云心迷法華轉心悟轉法佛言外之旨以示之。且將以報達師知予所轉自恣日弟子性澄請益其綱宗予因提繁吾

聽者各各歡喜信受奉行梓之以廣法施普顧見華然不涉唇膽一句正不在紙墨文字間心時會

萬曆戊戌除日愍山道人德清書於楞伽室

聞隨喜者同得現一切色身三昧云

所修三觀有能斷能證之力用也故愚所謂始終

不出三舰者此也

憨山老人夢遊集卷第四十三:楞嚴通議補還

明南嶽沙門憨山釋德清述

法二執以執五蘊根身為我執貪外五塵為我所 為五蘊根身及外世界五塵為分別俱生灩細我 定端在直破八識但此識體久迷由相見二分結 身爲有執受五蘊之色受二蘊見即七識意根及 四大在外為世界山河大地及五塵境在內為根 證分即迷中本覺見分即前七轉藏相分即虐空 按論眞如生滅二門此證自證分即是眞如其自 識名自證分由本性不染名白淨識爲證自證分 六意識及前五識與同時分別意識今修楞嚴大 三種義謂空如來藏不空如來藏空不空如來藏。 爲妙圓眞心據此大定列爲三觀者以如來藏有 最上一乘圓頓法門直顯一員法界如來藏性稱 由此藏性迷爲阿賴耶識變起見相二分藏性在 八識三分故設三種妙觀攝歸首楞嚴大定是為 生死根本發業潤生二種無明名結生相續順破 首楞嚴一經統收一代時教迷悟修證因果徑斷

> 修故修道文中單指五蘊六根次即三科七大一 為識結成五蘊根身器界有相之法要在即相 毗盧法界也次示觀相者意謂無相眞心今全迷 令先悟藏性三諦理體依之建立觀相所謂先悟 以體相用標顯者意在先悟後修故首標觀體欲 三即一雕即雕非迥出思議之表也今議此經 皆云妙者意顋圓融三概妙契一心舉一 奢摩他即當空側三摩即假想禪那即中道觀也 之文皎然明白第流通者未之究耳三觀者經妙 受用及計有所作為法執由此二執網縣生死故 竟不離一心耳其經文雖未明言指歸其於破類 心圓融大定而說也是知此經始終不出三觀究 摩提名大佛頂首楞嚴王此乃歷別而請佛據一 請妙奢摩他三摩禪那爲成佛之要佛特許以三 今願出生死先破二執為最初方便也故阿難特 一皆是悟入之門也證果分中以惻用標者正願 即三言 通

> > - 631 --

論勘經明文昭著妙契佛心故予判列無疑以見 三觀有能斷感證眞之大用故爲三觀之用也以 如來說法之本意且與行人易入也 修道之要也其五十五位皆依觀心建立要顯此 是妙明真心故修但依妄相而修故云视相正當 皆依一心建立今將所悟之體一一照破妄相本 首明觀體也旣悟此體了知根身器界一切妄相 謂令先悟此心之體佛謂開示此體以便造修故 此心而成四聖皆一心轉變之妙用也故用亦大 皆是有相之法故相亦大以迷此心而成六凡悟 觀爲約如來藏三諦之理須以三觀證之其實總 體大以此本來無相今現十法界依正因果事相 心之義所謂三大是也以此眞心其體廣大故言 法者謂衆生心是心總攝一切世間出世間法故 不名心而名法然有法必有義以體相用三爲一 是一心故佛以首楞嚴大定許之意謂三觀不離 問日三觀以體相用分之者何也 一心也按起信論云有法能起摩訶衍信根所言 答曰名雖三

別我執外世界五塵為我所受用名分別法執此 分別二執皆六識所計以七識乃六識之根依內 真心但認五蘊幻妄身爲巳身心妄執爲我名分 大為世界內之根身即五蘊衆生以衆生既迷此 識四相分即外器界經中地水火風虎空乃外五 即迷中本覺當論中覺不覺義三見分即前七轉 具有四分謂一證自證分即一心眞如二自證 槃涅槃者即如來藏寂滅一心也以衆生迷此如 來藏心不生不滅與生滅和合成阿賴耶識此識 員經文止有卷牛其義已收四十年前所說教義 備該五教空理衛一代之談文簡義幽殊難領會 除會單為破衆生我法二執耳二執若破即證涅 非淺淺也以吾佛出世說法四十九年談經三百 主何意耶 初以徵心辨見發揮以至二種妄見種種徵辨者 故予通議備列破顯題綱使知節要至於破妄題 問曰三觏體中《經三卷半文且空觀一科即該 三卷經文至若三一七大本如來藏似顯空理其 答曰此經純收五教即此一空閱憶 分

教順證一心故不證先後耳 教順證一心故不證先後耳

万入妙覺證一心源此義全合起信勘定甚明故得能所未忘觀智未泯尚為微細法執此執若斷菩提心生生滅心滅猶屬生滅以執眞如有所證執此眞如謂我所證得是為微細法執即後經云執此眞如謂我所證得是為微細法執即後經云

云頓斯頓證

之關鍵也細心深思乃見其妙 生法執即此經後云菩提心生生滅心滅猶屬生生法執即此經後云菩提心生生滅心滅猶屬生生法執即此經後云菩提心生生滅心滅猶屬生生法執即此經後云菩提心生生滅心滅猶屬生生法執即此經後云菩提心生生滅心滅猶屬生

問曰破執經文科雖分截但通途次第尚未了然 語詳言之 答曰分別二執即一切衆生所執五 輔乃八識自證分向被七識內執為我者經中 見精即自證體乃述中本覺佛性故經中二妄旣 見精即自證體乃述中本覺佛性故經中二妄旣 是職障眞如也以淨分末那獨執此覺為我所 能入地菩薩迷於眞如理中必待三加七勸方能 能者以異熟未空顯最難斷也即從八地進入等 捨者以異熟未空顯最難斷也即從八地進入等 捨者以異熟未空顯最難斷也即從八地進入等 於為此經文二妄之後佛言汝雖先悟本覺明心 於衛未明如是覺元非和合生及不和合意在破 於衛未明如是覺元非和合生及不和合意在破 於衛未明如是覺元非和合生及不和合意在破 於衛未明如是覺元非和合生及不和合意在破 於衛未明如是覺元非和合生及不和合意在破 於衛未明如是覺元非和合生及不和合意在破 於衛未明如是覺元非和合生及不和合意在破 於衛未明如是覺元非和合生及不和合意在破 於衛未明如是覺元非和合生及不和合意在破

> 心無依故後進破六識爲想蘊耳 心故先破色受二蘊色身既破則無所執受則妄 顯此根身本空非可依處欲修大定先須內脫身 也以色受二蘊正是執受所依之處名雖徵心意 衆生故經云一迷爲心決定惑爲色身之內者此 色受二蘊意循末明請直示之 少分為我根身論中所指乃受執處遂成五蘊之 二分相乃四大見乃轉識以最初見分搏取四大 問日初破五蘊而如來乃首約徵心而科云乃破 所破二妄之文單破分別法執其旨甚明 直至破見精後通破五蘊身心而俱生我執亦在 矣是知八地以上乃破俱生法執耳論說佛有淨 待故此和合一破即顯如來藏性順證一心之源 分末那義在此**也其破**分別二執之文從初請定 和合覺謂始覺合乎本覺名究竟覺循屬和合對 答日八識相見

爲破色受二蘊正破小乘身見意顯欲修大定必詰其心科爲破六識想蘊者何也。答曰初徵心問日。徵心之後阿難重請奢摩他路如來放光復

心開我道眼意在破妄見耳 想蘊也下文隨破顛倒之見故阿難重請發明妙 非心結云皆由執此生死妄想等此正破六識當 心目所在阿難但執能推妄想爲心故佛咄斥其 正顛倒之心耳以顛倒心起颠倒見故舉拳雙殿 來真三摩地故下所破者二顛倒耳仍詰其心者 良由衆生昧此光明但用妄想種種顛倒故先標 此光爲定體也了此光明則妄想頓破不待言矣 請開示奢摩他路也未破之先佛放光明者意以 之本故失破之意顕此想非空觀不破故阿難重 四大本空則色受二蘊巳空矣唯此妄想乃生死 內被佛徵詰故有七處展轉之執今皆被破日顯 二種顛倒以爲所破之本意謂顛倒不生即是如 妄想一向執此根身為所依處舉此執心在此身 實雖云修行不成聖果故修大定心首破之以此 最初即云一切衆生皆由執此生死妄想誤為員 妄計小乘但斷六識上二界天人但滅六識故佛 須內脫根身也以凡夫但認妄想爲心外道依此

者正能取境界者也謂分別見論為疏所綠綠其心二識皆有見也前凡夫二乘外道之見在六職公司七二識皆有見也前凡夫二乘外道之見在六職七二識皆有見也前凡夫二乘外道之見在六職問日破見之文科連六七二識似乎經続學者難問日破見之文科連六七二識似乎經続學者難

問日破見文中先約八還以辨科云揀綠後顯見 見精耳佛意甚深微細非微密觀照不了此以在 相分而言者也其破見量乃約能現蓋能現相分 七識約八還以辨者正指能見謂推度見的指對 泯相見二分獨指識體爲見精耳,此意幽深非**羅** 景景鏡不分故揀去親相分之緣而見分自泯識 精而揀綠者乃單揀相分乃八識所現之綠影不 但且分能所尚未的指見性爲見精也其次顯見 於緣塵之中一向能所不分故揀七緣乃所緣塵 其科揀緣雖同而義亦攸別前揀緣者乃見分雜 精亦科云揀綠經義不同而科同者何耶 破妄門頭故應委曲搜揚耳殊非纏繞之說也 而起見者故猶屬七誠此量一破方泯二分而歸 體看存故爲見之精者即識精圓明者也此在通 言見分意謂植種物像皆八識體中所現如鏡中 意指諸可還者皆非是見其不還者乃見性耳此 境基分別緣故特分能所各有所還而見性不無 答日

心可質須細觀之

精圓明十方國土皎然清淨毛含十方更復何疑 體本是眞如但爲見相二分障礙今二分旣泯識 見漸漸廣大豈非一毛含受十方國土耶且此識 而藏識全在即能見百佛世界此後地地增進所 此非淺智可知也只如初地菩薩纔破分別二執 則顯理已徹何以八識未破而能如此耶 轉物即同如來於一毛端即能含受十方國土斯 第二月何以見精方顯八識未破而經即云若能 問曰佛指見精爲第二月且云雖非妙淨明心如 疏甚明宜細詳之 量故無障礙此乃分見眞理其實未是極則也議 執取身心故云圓明一毛含受十方國土正顯雕 耳其顯眞之文身心圓明正約破染汙無知則不 爲親所緣緣若見相未泯對待未忘故應在七識 見量雖似八識現量以能現見相二分者識論說 至極則何以又有後文約八識破我等耶 圓明不動道揚於一毛端則能含受十方國土已 問日其見量似屬八藏現量故此**一破即云身心** 答品 答品。

自證則約自然因緣以破之其破識精又約明暗 則令即物以推之又令文殊約是非以揀之其破 問日巳知破見之意矣其破八識之文初云破我 如故即同如來也所謂不取無非幻非幻尚不生 幻法云何立此意幽潜微密视照乃能知之 求真唯須息見見分一泯則相分自轉為一心眞 相分旣立則見分取相分而爲衆生所謂自心取 泯見分一展前七識一**齊**願轉原無先後次第也 本眞一一本如來藏不待轉而自轉矣所謂不用 自心非幻成幻法今見分旣泯則離執取故法法 以迷一心眞如而爲阿賴耶識故有見相二分由 以見乃八識了別之行相前七輪識依此見而立 轉物之轉不說轉識但約轉物以物轉則見分亦 問日若能轉物之轉與轉識成智之轉爲同爲異 此經會相歸性特現唯心境界以一心真源爲本 放見泯而七識齊轉也所以然者相宗以識爲本 之轉乃八識各有所轉次第先後單約識說此經 答日轉雖同而所以轉則大不同也轉識成智

答曰非重複也以如來說教特爲破衆生之妄執 諸法因緣和合而生謂之共生他生皆不知八識 識乃妄計踏法自然而生謂之自生無因生又計 其破自證乃以因緣自然破之者以外道不知此 推其是非者以此識體全變為根身器界之妄想 道計為神我其未通計為生死我故今欲破此識 有種種妄計故須一一說破耳其破我者以此八 比禪宗一悟便了教中必欲**委**曲搜揚其妄中自 前云種種顛倒則衆生之妄計非一端也其教不 色空以揀之且皆科云以顯一眞豈非重複耶 妄至此乃破又約明暗色空者正顯此識精能生 顛倒中識精元明能生諸緣緣所遺者故追破諸 此計一破則精覺自顯其破見精正是前所立二 故令文殊發揚以絕是非之見以悟一眞之理耳 本無二法故今即物以推其是非要顯本爲一眞 故先破其我見也此正俱生我執耳然即物以令 識二乘執為涅槃我其未悟時又計纏即離我外 之自體本是妙覺明心也故約自然因緣以破之

那識甚微細故非靈心可易會也宜深想之彼妄計則顯其真乃分顯耳非全體也佛言阿陀實破識之極則也且節節皆科云顯眞者皆就破蓄綠綠所還者故揀綠以破要雕綠以顯眞心斯

豈二乘可知也且如明來暗去智起感亡真妄不見非見謂眞見見此見精乃眞智照此無明也此尊一向不輕談者故二乘一向迷於此也今云見

細藏習氣成凝流眞非眞恋迷我常不開演此世

者以見精乃八識自體為根本無明故云陀那後

然和合之疑心循末開至於見見非見重增迷悶

梁境界安得不懷疑漠漠乎向下世尊答辭不循 以當其智哉阿難意謂實有齒見精與眞見可見 容兩立經云此無明者非實有體豈有實實無明 眼此正法執示亡巳見猶存耳若單就無明則只 故五蘊實法未消五蘊旣存則世界山河大地礙 所疑直說二種見妄者以知阿難未了根本無明 今覓見精而不可得故迷悶耳況此極則殊非二 假乃因無明妄見而有若了無明本空則身心自 假蓋由眼中有情所見今不必責毛輪是有是無 破身心世界之法執故設燈上毛輸以喻五蘊是 見之疑哉此所以有進退合明之說也所以二妄 亦似身心同是妄葉之感耳又何有因緣自然見 的破見見之疑矣若了身心本空則可例想世界 泯所以喻中但言知是**告**耆則無見答即此一語 但只知是眼貨則無見病意喻但觀五蘊身心是 用世尊說此無明者非實有體一語可了今意在 合緣及不和合則復滅除諸生死因清淨本心本 破則本覺眞心頓顯故經結云若能遠離諸和

是用有现当明音不易了耳覺常住科云本覺雕綠眞如出線豈漫然哉佛意

覺乃顯論云始覺合乎本覺名究竟覺今尊顯 甚明第舰者智暗不易了耳 云拂迹入立況經中循舉見精言之此前大有徑 問日後章經文從來說者都云重破和合而此科 特借見精以例破耳旣破和合而阿難又作不和 謂以生滅心而辨圓覺而圓覺性亦同流轉故須 巳悟矣次云汝猶未明如是覺元非和合等義極 明論云此無明者唯佛能了非他境界故佛無問 此乃破和合之覺此正微細俱生法執名生相 心真源絕諸對待直須觀智俱泯能所兩忘故至 庭請示其要 答曰議中甚明此正始覺有功本 合見故復疑曰如我思惟此妙覺元與諸緣塵及 泯此知見乃入一心相源以眞心眞智難以揩口 乃的破名言習氣故云以世間妄想而疑菩提所 題了下云循以世間妄想而自疑惑證菩提心此 而自說也但觀經云汝雖先悟本覺妙明則許 心念慮非和合耶觀此直須心境兩忘言思路絕 前 無

乃入一心之妙耳

爲限入意旨何如 因勞而妄見空華今說六入復拈前練目與勞共 問日前會五蘊中首舉色蘊依妄見而有故說目 依覺故迷故云菩提發勞二分依藏而顯爲識之 比也以此中乃說最初六根之元因見分取相吸 成淨色故雙舉之以明六根初結之始故難領會 入今始有也無目即今眼根為相分勞即見今以 習中歸和合結成五淨色根爲浮廛所依本來無 根自體爲喻蓋言本無六根因最初見相和合而 行相不雕自證原無二體故云同是故約以成六 此二分本無所有同是菩提瞪發勞相意顯識體 答日此最極微細非前喻可

耳

來藏矣

問日起信三細謂業轉現如是次第今經三細以

對待俱有所依今言二皆無體唯一真如故本如 問日處者何義 色爲見分所盧託處不拘親疏爲所緣緣以皆有 答曰處者唯識說有體實相分

楞嚴通議補造

起謂眞境界中始因一念妄動即轉圓明眞心而 四大自此而形是爲有所有相因有所相即轉本 即證一心今經重在衆生生起之元故因最初一 轉物即同如來放員修端在不取即衛生死根本 念妄動即轉無相眞心頓成有相之妄相故愿空 爲無明由此無明乃現分別相續等相若能雖念 見爲轉相列於第三是則先現後轉豈失論意耶 故破妄直專揀緣經重所取故先相論重能取故 論獨轉心故眞修端在雕念此經轉境故云若能 死病根所謂數取趣也故云自心取自心非幻成 合而爲五蘊之衆生其意重在妄見執取而爲生 元明覺體今涵雜而不分遂成有情所謂色心和 有智光而成妄見爲取相之妄知由是見相同 先見故爲門不同而修斷亦別也宜深機之 幻法不取無非幻故祖師云不用求真唯須息見 答日不失論意各有所主也論意單說心法生

憨山老人夢遊集卷第四十四 楞伽 補遺

德清 補遺

楞伽阿跋多羅寶經者楞伽寶名具云釋迦毗楞伽 明

光明瑩徹最極堅固不可鑽穿世間之寶無過勝者 乃無上寶也聞之梵師云此寶八楞視之彈圓其體此云能勝義云堅固阿跋多羅此云無上謂此楞伽 居大海濱目山純此寶所成故山以寶名山高五百 目能勝一切故云無上寶也西域南海有楞伽寶山

謂衆曰過去諸佛皆于此山說自證境界我亦當說 所據山形下細上太因名不可往有神通者乃能入 此經發起因佛于大海龍宮說法七日週過山下顧 由甸山頂有城亦名楞伽寶城無門可入爲夜叉王

題也然單約喻明經者第一義如來藏心亦名寶明 此輕是則山目寶名經目處名通取爲喻乃單喻爲 時夜叉王目神力故知佛言念故往請佛入城演說

空海下經云藏藏海謂衆生本具如來藏清淨法身 覺聖智寂滅一心名大寂滅海亦云智海覺海寶明 妙性又云寶覺明心是爲堅固法身不動智體名自

成佛爲法華開顯之前茅故判爲法華先導也

想煩惱寶明空海成生死之業海夜叉乃惡鬼飛行 迷之而爲藏識變成五蘊之衆生自覺聖智變爲妄 而食人肉者故山高五百由旬居大海中而爲煩惱

生死夜叉所據也佛在此山說自證境界者謂目自 覺聖智而觀識藏即如來藏生死即涅槃煩惱即菩

無別法此乃最上乘非心識思量境界唯許上上根 提現前五蘊身心即是如來常住法身順證一心更

有神通者乃能入故寶乃無上之寶處乃不可往之 人一悟頓悟不悟則不許意識湊泊故山名不可往

處通喻此經顯示第一義心乃離心意意識境界為

我俱遣直顯雕心意意識境界故達磨指此爲心印 無上法門也此經發明五法三自性皆空八識二無

大乘為教相以此經顯示五性三乘無性闡提皆許 破二乘外道邪執故目摧邪顯正爲用目無上順教 喻為名寂滅一心如來藏性為體自覺聖智為宗專 因緣已盡甚深妙義矣約天台五種釋題此極目單 是則全經旨趣在此一題目喻發明及夜叉王發起

生故云而與大悲心故今所說正示。山一心耳之無生無二離自性相故初傷云世間離生滅猶如空無生無二離自性相故初傷云世間離生滅猶如之事此讚佛能證一心空義目明了偏計本無也間通該十法界依正因果目此三種世間有情世間器世間通該十法界依正因果目此三種世間有情世間器世常如空華即此一傷已超迷悟因果直示一心之源故如空華即此一傷已超迷悟因果直示一心之源於如空華即此一傷已超迷悟因果直示一心之源的學唯佛目自覺聖智證窮此心故云智不得有無之來唯佛目自覺聖智證窮此心故云智和得知迷知。

見有生滅若遠離心識分別不生則當體無生了無依他有故如幻耳幻喻生本無生若目妄心分別則間現有生滅何以言空故云以一切法本自無生但義也併後一偈以明了依他無性從綠而有意謂世太偈云一切法如幻遠離于心識此示一心本無生

一法當情豈非空耶

了唯心則遠離斷常了無二見矣。
了唯心依他而起故妄分有無起斷常有無二見若也意謂世出世間一切諸法唯心所現外道二乘不也意謂世出世間一切諸法唯心所現外道二乘不

三性釋者乃淸涼意故引義目證之
三性釋者乃淸涼意故引義目證之一心則人法雙忘二障順淨唯一圓成則生死之相不可得矣此上四偈讚佛超世間生死有法也然空無可得矣此上四偈讚佛超世間生死有法也然空無可得矣此上四偈讚佛起世間生死有法也然空無

來寂滅不假更滅故云一切無涅槃然諸法既目本五偈讚佛超涅槃法意謂一切諸法既唯一心則本

涅槃爲非法是二應捨故大慧讚云有無俱職是則 佛云何捨法云何捨非法佛答以外道見生死爲法 有若無有是二悉皆雕也故二譯載夜叉王首即問 此絕待一心本無能所對待故也唯佛證此所目若 又豈有佛更入涅槃耶何耶以遠離覺所覺故謂 涅槃爲佛所證耶故云亦無涅槃佛斯則法身常住 全經之旨不出夜叉發起一問幷大慧偈讚而已故 自涅槃則法法皆眞盡是法身眞體如此又何則有 向下所破者乃有無二見耳

唯

悉檀雜言說梵語悉檀此云偏施謂佛以四法偏施

◆羅字羅洞

衆生之機本來離言說相意責大慧不達雜言之旨 悉檀令得入理益謂佛雖以四法偏施衆生然但應 衆生四者一世界悉擅令衆生得數喜益二爲人悉 故有此問我令特爲顯示建立數句雖言之旨故向 **檀令得生善益三對治悉檀令得破惡益四第一義**

相皆唯心所現唯識所變乃生滅門事故即問諸識 大慧聞一心眞如離一切相了無說示是知十法界

下一一皆曰非

ル大字疑夫

妙士大自在時微塵等乃外道所計之法爲生因者 性講者疑以正教道理釋之昧之甚矣殊不知此經 有幾種生住滅也七種自性魏譯云外道有七種自 自性已立正義又何下文重出七種第一義豈不養 上下血脈佛語昭然而昧者妄擬謬之甚矣若七種 因目迷真妄不一不異唯識真因故立異因佛前文 專破外道不知唯心唯識道理故別立異法目爲生 旣出那宗故後示正教云我有七種第一義也經文 故隨後即出所立妄計各有確定自性爲宗有七耳 責外道墮斷見論故特出所計生法異因有五言勝

那

日權實二智窮盡眞妄聖凡也見境界唐本云二見 到境界證窮法界自覺聖智究竟果海也意謂我所 也超十地境界者謂等覺後心極盡因門也如來自 境界謂雙炤眞俗二邊也超二見謂窮盡一心中道 慧境界者慧光無量炤徹微塵利土也智境界者謂 七種第一義心境界者謂佛目法界一心為自境也 建立乃稱一心眞如平等佛慧以二智見二空證眞

種識相也 心為究竟極果故隨便成立唯心一番因果目結三 立此真因將破外道無因邪因故即辨明邪正目示 而起乃真妄和合故特指阿賴耶識爲生死涅槃因 唯心如幻觀門顯直觀藏識碩破根本無明頓證 最初顯識生之由以無明熏真如為現識生起因取 種種塵等爲分別事識生起因佛意顯此藏藏依真 問日說三種識即結果者何耶 乃單示佛境界不說因心若說因心則失旨矣 **義心而建立故不與外道惡見共也此七第一義心** 如以至等覺入佛果海目為法門蓋依性自性第一 答旦前三種識中。

日此通涂問意血脈幽潛最難理會請試言之此經 語心然後方請說藏識海浪法身境界者何耶 見等所緣境界不和合顯示一說成眞實相一切佛 意意識五法自性相且云一切諸佛菩薩所行自心 問日生滅章中大慧初問諸識有幾種生住滅佛答。 已竟而大慧復問廣說八種相中先紋世尊所說心 目略說有三種識廣說有八種相今前略有三種識 答

> 故大慧重請有八種相故問藏識海浪乃問前七識 有八種相今前答略說三識單照第八識自體已竟 無我後三門義佛答謂諧藏識略說有三種識廣說 變而立也故先問諸藏一門未及問五法三自性二 生住滅是約心生滅門容有言說突然生滅門中先 問諸識者以五法三自性二無我三門皆依八藏轉 顯一心眞如離一切相也故大慧隨問諸識有幾種 切皆非是則直指一心一法不立則不容有說矣此 性八識二無我日問故佛指寂滅一心目答故云一 識二無我俱遣故大慧初問百八句蓋約五法三自 單示寂滅一心離一切相故云五法三自性皆空八

51

即業識生霸生相無明起信云以依阿賴耶識說有問人意意識五法自性皆空乃是一切諸佛菩薩自說心意意識五法自性皆空乃是一切諸佛菩薩自己,是不不異之旨矣。但不知前七識生起之由,所以量所緣境界一法不立絕諸對待故云不和合心現量所緣境界一法不立絕諸對待故云不和合。以我是已顯真實佛語心此已領前識藏如來藏與生不無生之義故請說藏識海頂即是法身境界也故下答文中示四因緣故眼識生目緣生性空目地故下答文中示四因緣故眼識生目緣生性空目。

不隨機施設非我不說實也下文更顯深義謂不但

說權法爲不實即說眞實法亦無實法與人目眞實

離名字種種皆如幻故末後云聲聞亦非分者足微

大慧意疑佛不與二乘說八藏眞實之法也哀愍者

立也彩色無文二句除法本雜言但為兄衆生不得

解耳又設画師喻目明說法應當隨機先後次第建

說六識漸時未甞不棄帶八識而說但衆生聞者不

披下十句喻顯其法元有頓漸之不同故說亦因之

建立然說雖有頓漸其實無有一定之次第意謂我

爲修行之要成立唯心第二番因果也自悟乃可相應非是說了便休故後文示聖智三相長行結示欲知自心現量自覺境界須要眞實修行指哪謂今日乃說自覺之境界也

顯外道不了唯心故於名相上橫計而生妄想乃正則是為故特示之佛答中即舉外道有無二見者正血脈學者縱能通達文字而不知血脈亦無歸宿此如上之果是舉眞果目證眞因也此問意乃經中之如上之果是舉眞果目證眞因也此問意乃經中之

破名相妄想也

離異不異者謂妄想與名相元別故異今妄想乃依名相而起故不異目有心境對待心境皆空則五法自性皆空矣此正空名相妄想之要旨也顯正智章中目三佛設法頓漸以明正智者蓋因前八識頌中中目三佛設法頓漸以明正智者蓋因前八識頌中中目三佛設法頓漸以明正智者蓋因前八識頌中中間三佛設法頓漸以明正智者蓋因前八識頌中中間三佛設法頓漸以明正智者蓋因前八識頌中中間三佛設法頓漸以明正智者蓋因前八識頌中東。 因衆生心不眞實難與說實恐其不信則說之無益因衆生心不眞實難與說實恐其不此則以不等大慧教化以問機不同不得不施漸法耳此此顯說頓漸之所以問題機不同不得不施漸法耳故此顯說頓漸之所以是四漸喻機以四頓喻佛在佛以平等大慧教化以自四漸喻機以四頓喻佛在佛以平等大慧教化以自四漸喻機以四頓喻佛在佛以平等大慧教化。

衆生根本實智迷之而爲自心現流故淨現流以成

正智然迷雖順而淨則漸也

瞪日月喻頓破衆生無明業藏顯示本有不思議業頓喻四中明鏡喻頓示衆生一眞法界淸淨圓明心

用藏識喻順令自心衆生一時成熟究竟佛果自心聞日月临时極明白黑田美記書之之不之是語美

所現根身器界喻自心之衆生法依佛喻順目普光

見本有平等法身三身佛說法乃以法證佛也法依明智炤一切衆生心地頓令五性三乘破滅無明頓

生無性無性緣生乃頓漸漸順之法也即華嚴經所佛者乃依法身所垂之報身佛也說緣生者以顯緣

乃直示頓法也化身佛所說乃六度權行單漸法也說四十二位行布圓融之旨法身佛說離心自性法

破邪因以顯正因此又漸中之漸意謂有機如此不結歸法身佛者乃示此經爲順順宗也後聲聞外道

得不施漸之漸也然在經文其義甚隱諦觀佛意經

旨理實昭著

目聲聞乃證聖智差別相但示究竟故即彼所證以破二種邪因科在二乘云即二乘邪因以示正因者

知真常是是按这个效式可外道所計常不思議乃別立異因以無常爲常故佛外道所計常不思議乃別立異因以無常爲常故佛示究竟眞因故云即在外道云目聖智破邪因者目

目眞常聖智破妄計故云目

不生特以無常爲常故今墮斷滅之見耳五無間種究竟相心謂外道今取斷滅爲果者蓋昔以生法爲聲聞所證涅槃以非眞滅爲滅足驗昔因未得聖智

即一乘法分別說三者也今五無間性乃因聞前三黨習故種性有五前順漸章明法一機異故有三乘性一章重明爲機稟佛性是一因聞三乘之法名言

三實教四即圓教四位菩薩釋者諦觀經大明標如如來無間種性有四種一權教事六度二乘乘空慧所稟佛性是一故云無間因熏各別故有五種性耳乘法不得離言之義執文言熏習成種此又顯機之

之失本指矣蓋目直指一心真如若悟唯心即頓登人來種性意指如來果法非說因位中故若以菩薩釋人

前三位菩薩法釋之則聞熏但成前三菩薩種性非佛地即圓教之三賢此亦不立況權教空慧乎若目

如來種性矣

裁通示三番因果也 我通示三番因果也 我通示三番因果也 我通示三番因果也 我通示三番因果也 我通示三番因果也 我通示三番因果也 我通示三番因果也 我通示三番因果也 我通示三番因果也 我是是一些二無我已辜乃 我是一些二無我已辜乃 我是一些二無我已事乃 我是一些二無我已事乃 我是一些二無我已事乃 我是一些二無我已事乃

樂平等更無煩惱可斷故但雜二見即順證法身故煩惱目識藏即如來藏故但了妄想無性則生死捏法門此經順宗但破外衟二乘偏邪之見不說別斷唯心法目破外衟有無二見爲化儀此所目爲頓教唯心法目破外衟有無二見爲化儀此所目爲頓教

下第二卷

-648 -

都結成四番因果也

問口顯理中示寂滅一心已歸究竟然目如來藏幷一心之旨不同何以總為一科 答曰此有深旨目徑初夜叉王問佛云何應捨有無佛既答已隨即示云寂滅者名為一心一心者名如來藏此則總標一定永減者名為一心一心者名如來藏此則總標一有聖凡生起者皆如來藏隨染淨緣轉變為生因耳然亦大慧隨問諸識有幾種生住滅雖問識之生滅然次大慧隨問諸識有幾種生住滅雖問識之生滅然次大慧隨問諸識有幾種生住滅雖問識之生滅然亦未不不不不不不可以表示。

問日當轉二性教中一向說轉生死爲涅槃轉煩惱

商主次第建立百八句無所有足證前百八句乃依 三界作四句妄計而立然無所有則皆非也 竟得解脫未後結云爲淨煩惱爾燄二種障故譬如 總示正行章被本無四句可雕頌中如是觀三有究 竟義旨深潛誠非麗浮可見也細尋佛意微妙難知 真我破之目盡破彼計圓滿一心故總科爲顯理究 目寂滅一心破之矣向執我見未亡故特目如來藏 如來藏真我目被彼計是則外衛計有無二見則前 彼分別執為我日外衙向執藏識為神我故今將日 那識甚微細智氣種子成瀑流我于凡愚不開演恐 大慧疑世尊說如來藏同外道我者正是佛說阿陀 藏識要顯妄即是員實斯經之宗本也不同語教然 識也目此經不說無明爲因生八識直指如來藏即 如來藏爲善不善因目如來藏即前三種識中之眞 随緣爲染淨生法之因要明識藏即如來藏故後文 明一心之旨尚未明如來藏之義方今將顯如來藏 **墮于畢竟斷滅耶故此大慧隨問如來藏者目前雖**

成菩提此中但說轉二自性者何耶 答日此經不同三乘別教直指一心不屬迷悟目生死涅槃本來 有實自性起種種編計二乘不了請法緣生無性妄執諸法有實自性以此二種障正知見意謂若了言 就性空則編計情心若了緣生無性則依他泯性二 計旣心則圓成自顯所目但轉二自性計著也後廣計旣心則圓成自顯所目但轉二自性計著也後廣計旣心則圓成自顯所目但轉二自性計

若觀四大本空五陰無我即此五陰本自如如矣,然如禪則直觀五陰本自如如絕語對待故為顧悟,然如禪則直觀五陰本自如如絕語對待故為顧悟,然如禪則直觀五陰本自如如絕語對待故為顧悟,然如禪則直觀五陰本自如如絕語對待故為顧悟,以妄想分別作四句見其其擊此頓漸之分也然觀察義禪能觀者正智所觀者妄此頓漸之分也然觀察義禪能觀者正智所觀者妄

即日示正果中說妄想識滅名為涅槃不說轉藏識單說滅六藏者何也 答曰此經宗旨說識驗即如來藏不必更轉其藏性寂滅之體所目不得顯現者但因妄想攀名相之過心目藏體本是湛淵之心瘤,也因妄想攀名相之過心目藏體本是湛淵之心瘤。是八識精明故本不生是故三性之中依他元自無是八識精明故本不生是故三性之中依他元自無是八識精明故本不生是故三性之中依他元自無是八識精明故本不生是故三性之中依他元自無是八識精明故本不生是故三性之中依他元自無是八識特別本不生是故三性之中依他元自無是八識精明故本不生是故三性之中依他元自無是八識精明故本不生是故三性之中依他元自無是八識精明故本不生是故三性之中依他元自無是八識特別不直,其實以表述。

一乘禪也。一乘禪也。

之理末後如來最上一乘禪即釋前離過絕非細觀 門計舊覺即釋前所破之惑攀緣如禪即顯前圓成 略示那正因果及廣辨那正因果總是廣釋卷初四 略示那正因果及廣辨那正因果總是廣釋卷初四 略示那正因果及廣辨那正因果總是廣釋卷初四 略示那正因果及廣辨那正因果總是廣釋卷初四 經 宣 來 意 從 二 卷 初示正行科中四方便為能觀之 經 宣 來 意 從 二 卷 初示正行科中四方便為能觀之

下第三卷

經旨前後名應其理昭然

就者何也 答曰目外衞妄想專目執我見爲本而問日斷證科初明妄想不實破我執言說性空破法示果滿目果海離言故 示果滿目果海離言故

不能離言得義但執言說為實法故今教以雜言觀

故云煩惱障然依言說爲法執者目內教學佛法者

二乘雖離五蘊假我猶執涅槃爲我故亦云心感亂

說第一義諦寂滅一心也然不了二字即無明也了

此經專破外道神我故經論意異耳佛法者居多若起信所說我見亦依所聞佛法而起心為破法執斷所知障也然我執外衢居多法執學

至七地斷我執盡法執至佛地乃盡今經說廢細二一云分別二執從三覽至初地斷盡俱生二執從二地問日大乘教中皆說二執有分別俱生廢細不同且我諸陰陰施設其旨的然明矣更復何疑

計五蘊為我者經文長行未顯至頌中云施設世諦

經云不了第一義故號為無明第一義者即此經所大乘意在頓破無明頓證一心故二障亦順斷耳大執一時斷盡未明其旨請問其詳答曰此經頓教

斯次先後耳所謂知幻即職不作方便雕幻即覺亦問體有大智慧光明義故說名爲智此即自覺聖智自體有大智慧光明義故說名爲智此即自覺聖智自體有大智慧光明義故說名爲智此即自覺聖智也若目即心正智獨炤一心寂滅之體則一切皆離也若目即心正智獨炤一心寂滅之體則一切皆離也若目即心正智獨炤一心寂滅之體則一切皆離地若目即心正智獨炤一心寂滅之體則一切皆離地若目即心正智獨炤一心寂滅之體則一切皆離地若目即心正智獨紹一心寂滅之體則一切皆離地若目即心理是對所謂知幻即職不作方便雕幻即覺亦

無漸次故為頓教大乘

巴生言自妄想修習生此云邪師邪教乃分別我執受身之情狀也而獨指外獨者何耶 答曰佛說衆生生死往來受報好醜乃隨善惡業緣故說如乳酪生生死往來受報好醜乃隨善惡業緣故說如乳酪生生死往來受報好醜乃隨善惡業緣故說如乳酪自妄想修習生實無有法爲生滅主宰者但如幻夢自妄想修習生實無有法爲生滅主宰者但如幻夢自妄想修習生實無有法爲生滅主宰者但如幻夢自妄想修習生實無有法爲生滅主宰者但如幻夢自妄想修習生實無有法爲生滅主宰者但如幻夢自妄想修習生實無有法爲生滅主宰者但如幻夢自妄想修習生此云邪師邪教乃分別我執問日轉變章言轉變者乃一切衆生生死往來捨身問日轉變章言轉變者乃一切衆生生死往來捨身

問曰相續章乃大慧因聞前佛說轉變相故即問生以一往所說乃分別法執也

此塵境惟心所現本自如如若無六識攀緣執取則 吹則自性爲常住涅槃矣然境界乃五塵境界也且 性本來涅槃但因境界風吹故有生死若無境界風 問日前世尊說妄想識滅名爲涅槃且云七識不生 今者何目俱生二執歸過于七識豈不自語相違耶 相續生死之本也佛意甚明第淺識者未易見耳 十一相續皆執言說目爲所知障日取變易生死者 因境界風吹故起前七識浪爲生滅耳今顯藏識自 愚夫三相續乃煩惱障招俱生我執是乃總結二障 二死皆七藏執取所招故歸過于三和合計著識為 乃俱生法執也以障有二故生死亦二故末後總以 障單約執言說為法執故大慧以言說為問而所答 此斷證科中約被二執斷二障日顯真因也然所知。我了知二障斷二煩腦雖二種死是名佛之知覺故 強藏所易窺也此由前辨果地覺中佛敦覺人法無 死相續義狀生死乃煩惱障招而但約言說而問且 舉極果之益目請者何耶 答曰此經旨幽潜殊非 答曰觀佛立言各有所主非相違也以初云藏識

問日經中一往節節大慧問中多舉果惠以請然世 尊結顯果惠已非一矣然與正顯果惠有何別耶 等是與 明真因乃舉果日證驗真因皆在因門非正說果 明真因乃舉果日證驗真因皆在因門非正說果惠 也今因行已圓二障已破五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已破五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已破五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已破五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已破五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已被五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已被五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已被五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已被五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已被五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已被五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已被五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已被五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二障已被五住已立永離二死歸極 也今因行已圓二時之後與正顯果惠 一心因窮果滿日顯宪竟一心之極果此是正說果 也。

下第四卷

巳究竟一心眞原矣大慧乃問刹那者何耶 問日當明法身常住生死涅槃平等處返妄歸真業 答曰

佛目寂滅一心而答曰一切皆非故大慧即問諸識 此正原始要終結歸一心之極則也以初問百八義

大慧初問百八義總該十界依正迷悟因果不出五 有幾種生住滅是則迷悟修證皆生滅門中事也然

悟一心目顯五法三自性皆空八識二無我俱遣究 法三自性八識二無我四門攝盡故今徵詰踏妄了

竟歸趣一心眞原以顯法身極則目示生死涅槃平

等此是從迷返悟總屬生滅邊收皆不出大慧初問 二種生滅也意謂目有相生住滅故有凡夫外道二

乘偏邪之執以有流注生住滅故有七地已前菩薩

生被心滅猶屬生滅今顯生滅本不生滅義若了 之見意顯縱悟法身亦未雖生滅妄見所謂菩提心

幻法門万顯法身向上極則也以此足見吾佛說始 有修斷耳故前夢中渡河之喻以顯有所修證皆夢 本不生滅則則前一往所說皆夢中事乃妄功用中

楞伽補遺於

終不說一字乃頓宗之極則也

文川大市夢在全美を四十四

之如鼓刀然兩半劑而卒業讀之不成句非文也諦

思自幼讀孔子書求直指心法獨授類子以真傳的

章按綱目設問答以自決且引顏子問仁章以參會

果然舟中睡足聞侍者讀大學聒我疑焉因取經

而求悦可衆心者談不易也以諸子之食難消腹猶

仁章請者余咿嗚而巳即有言不能偏偏亦不能盡

憨山老人夢遊集客第四十 py

侍 各 驅 善

日鋒

缺餘則引而不發向不知聖人心印盡揭露於一

通 烟

PF

嶺南弟子 劉起相

大學綱目決疑題辭

果我也食訖請益余但吐粥飯氣耳含羞而別舟還 愧矣間有以禪視者余則若啞人喫黃檗耳已酉秋 曹溪思諸子鲍我非一日矣竟莫麟嘗有以顴子問 日偶乞食來諸子具香齋於法社余得捧腹是諸子 放衛外於今十四年矣往來持蘇五羊諸子謬推爲 知言時時過從問道余卒無以應若虚來實往愧矣 余十九乗筆研三十入山絕文字五十被譴蒙

图、

輸天下之餓者非敢言博施也己酉中秋前二日方

如良馬見鞭影一息千里有若鵝王擇乳豈不以此

諸子諸子年或過余半末半者幸而聞此可謂蚤矣

而今乃知可謂既矣恐其死也終於限限故急以告

五言之間微矣微矣豈無目耶嗟嗟余年六十四矣

爲粥飯氣耶是特有感於一飯而發願諸子持此以

外惠清書於須陽峽之舟中 大學之道在明明惠在親民在止於至善

之見縱學得成只成得個小人若肯反求自己本有 大學者謂此乃沒量大人之學也道字館方法也以 使天下人個個都悟得與我一般大家都不是舊時 便了第一要悟得自己心體故日在明明惠其次要 學大學方法不多些子不用多知多見只是三件事 心性一旦悟了當下便是大人以所學者大故日大 的都是小方法即如諸子百家奇謀異數不過一曲 天下人見的小都是小人不得稱爲大人者以所學 知見斬新作一番事業無人無我共享太平故日在

- 655 -

知見有何奇特殊不知善惡兩頭乃是外來的對待 在善惡兩條路上走只管教人敗惡遷善此是舊來 徹 之義如揭日月於中天即是大明之明二意都要透 便是聖人此就工夫爲已分上說若就親民分上說 明了自己本有之明惠故曰明明惠悟得明惠立地 旦悟了自己本性光光明明一些不欠缺此便是悟 裏討分曉件件去學他說話將謂學得的有用若一 廣大自在不少絲毫但自已迷了都向外面他家屋 當下知得本頭自在原不會失人人自性本來光明 明謂明惠是我本有之性但一向述而不知恰是一 明字有兩意若就明惠上說自己工夫便是悟明之 個迷人只說自家沒了頭聽求不得一日忽然省了 且第二個明字乃光明之明是指自己心體第一個 者三件事便是大人 兩個明字要理會得有分曉 做到徹底處方機罷手故日在止於至善果能學得 親民其次爲已爲民不可草草牛途而止大家都要 一個明字乃是昭明之明乃曉諭之意又是揭示 問如何是至善答自古以來人人知見只曉得

> 之法與我自性本體了不干涉所以世人作惡的可 改為善則善人可變而為惡足見善不足恃也以善 去處非可止之地以此看來皆是舊日知見習氣耳 今言至善乃是悟明自性本來無善無惡之眞體只 是一段光明無內無外無古無今無人無我無是無 非所謂獨立而不改此中一點著不得嘉無機 事務不是本主故不是至極可止之地只須善惡兩 忘物我迹絕無依倚無明昧無去來不動不搖方為 可新之民渾然一體乃是大人境界無善可名乃名 至善知此始謂知止

求定如猢孫入布袋水上按葫蘆似此求定窮年也去定具管將生平所習知見在善惡兩頭生滅心上后定者但學人不達本體本來常定乃去修習强要定字乃指自性本體寂然不動湛然常定不待習面定字乃指自性本體寂然不動湛然常定不待習面

翻與守門人作鬧鬧到卒底若真主人不見面畢竟 只如六祖大師開示學人用心云不思善不思惡如 亦疾走無影而求入者眞見主人則求見之心亦敬 打鬧不得休息若得主人從中洞開重門則守門者 遠如何得一念休息耶以從外求入如人叫門不開 亂想益熾必不能靜何以故蓋爲將心覓心轉覓轉 管在知見上强勉遏捺將心主靜不知求靜愈切而 是自性定體此靜乃是對外面擾擾不靜說與定體 都莫思量自然得見心體此便是知止的樣子所以 **骨動此便是知止而后有定的樣子又云汝但善惡** 何是上座本來面目學人當下一刀兩段立地便見 了達本體當下寂然此是自性定不是强求得的定 不得定何以故病在用生滅心存善惡見不達本體 滅無有矣此謂狂心歇處為靜耳若不眞見本體到 遠甚何也以學人一向妄想紛飛心中不得暫息只 學人貴要知止知止自然定 自性狂心頓歇此後再不別求始悟自家一向原不 專與妄想打交滾所謂認賊爲子大不知止耳苟能 靜字與定字不同定

12 mg . A 200 . . .

貼點快活自在此等安閒快活乃是狂心歇處而得 而今既悟本體雕求心歇自性具足無欠無餘安安 求靜不得雜念紛紛馳求不息此心再無一念之安 貼之義又如安命之安謂自足而不求餘也因一向 底決不能靜故日定而后能靜 寂然不動感而遂通天下之故又曰百慮而一致又 是憂慮之慮乃是不慮之慮故日易無思也無慮也 故日靜而後能安 未明明惠時專用妄想思慮計較籌度縱是也不得 然具足的故日安而後能慮 是聰明知見算計得的乃是自心本體光明炤耀自 心動念圓滿剛達天下事物了然目前此等境界不 思多慮於心轉見不安今既悟明此心安然自在學 慮上來即一件事千思萬慮到底沒用也慮不到多 日不慮而屬正是者個慮字謂未悟時專在妄想思 **遷徹見底原一一中節故謂之得非是有所得也初** 乃是不滲漏之義聖人泛應曲當羣情畢炤一毫不 何以故非真實故今以自性光明齊觀竝炤羣情異 慮字不是妄想思慮之慮亦不 得字不是得失之得 安字乃是安穩平

特由慮而合故處之處無得之得故曰慮而后能得言非偶頗合節應通歸一理故能曲成而不遺此非有所得蓋以不

效且天下至廣豈可一蹴而編故姑且先從一國做 根本說到技末上去今就成物上說故從枝末倒說 就成已工夫上說則以明明惠爲本新民爲末蓋從 此釋上本末先后之序以驗明明德親民之實效也 力也 共稟者豈忍自知而棄人哉故我願揭示與天下之 明惠以揭示天下之人願使人人共悟蓋欲字即是 此則天下事物皆歸我方寸矣今欲要以我既悟之 到根本處來以前從一心知止上做到慮而能得到 明明惠於天下之君也孰不從願力來余故曰欲顧 **堯都平陽舜宅百揆湯七十里文王百里皆古之欲** 將去所謂知遠之近若一國見效則天下易化矣昔 人使其同悟同證但恐負此願者近於迂濶難取速 願力謂我今既悟此明惠之性此性乃天下人均賦 古之欲明明德於天下者 身爲天下國家之本經文向後總歸結在修 一節

涯始得不是夾帶著醬口宿習之見可得而入以舊

日的見聞知覺都是非禮雜亂頭倒一毫用不著故

剜心摘膽拈出箇勿字勿是禁令驅逐之詞謂只將

是把舊日的知見一切盡要劉去重新別做一番生

謂視聽言動皆古今天下人人舊有之知見爲仁須

此心意之辨也今要心正須先將意根下一切思慮 般如此置不是新人耶自己既新就推此新以化民 舊時的人乃是從新自己別修造出一箇人身來一 到無可忘處翻身跳將起來一切見聞知覺全不似 被妄想障蔽不得透露故真知暗昧受屈而妄想專 辨也意乃妄想知屬真知真知即本體之明惠一向 妄故謂之誠證心邪由意不誠今意地無妄則心自 妄想一齊斬斷如斬亂絲一念不生則心體純一無 天下之本耶 下歸仁正修身之效也不如此何以修身爲治國平 聰明源了將肢體黜了一切屛去軍軍坐坐而忘忘 致其知知乃真主一向昏迷不覺今言致者看達也 上方之劒非眞命不足以破僭竊故曰欲誠其意先 正矣故曰欲正其心先誠其意 而民無不感化而新之者此所謂一日克已復禮天 舊日的視聽言動盡行屏絕全不許再犯再犯即爲 權譬如權奸挾天子以令諸侯如今要斬奸邪必請 賊矣此最嚴禁之令也類子一聞當下便預會遂將 心乃本體爲主意乃妄想思慮屬客 知與意又真妄之

之原以迷則內變眞知爲妄想故意不誠不誠故不 境知即真知乃自體本明之智光此一知字是迷悟 於其主使其醒悟故謂之致若真主一悟則好邪自 譬如忠臣志欲除奸不敢自用必先致奸邪之狀達 謂王誠貫金石感豚魚格也且知有真妄不同故用 真知之力以吸妄想外用真知之炤以融妄境格即 明外取真境為可欲故物不化不化故為礙是則此 物一向與我作對者乃見聞知覺視聽言動所取之 不容其作崇矣故曰欲誠其意先致其知 境與我作對為扞格而宋儒有聞驢嗚蛙噪見實前 真知用至誠故物與我相感通此格乃感格之格如 此格為關格之格如云與接爲構日與心關是也以 亦異而格亦有二以妄知用妄想故物與我相抒格 禹格三苗之格謂我以至誠處通彼即化而歸我所 草而悟者聲色一电向之與我杆格者今則化爲我 云格其非心是也且如驢嗚蛙噪窗前草皆聲色之 字衆妙之門梁編之門是也今擾亂反正必內仗 知字爲內外心境真妄迷悟之根宗古人云知之 物即外

問始綱領說明惠親民止至善分明是三件事今條 目上只說明明惠於天下終歸到致知格物上若一 學工夫所以言明言知而修齊治平皆是物也 實在眞知眞知一立則明惠自明元無一毫造作大 動之真知達本來無物之幻物斯則知不待感而自 以真知獨炤則解處洞然無物可當情民以寂然不 境不容兩立外物如黑暗真知如白日若白日一昇· **炤物不待通而自融兩不相解微矣微矣故學人獨** 相到而重在明也物體本虚以妄取著故作障礙今 暗今以明臨暗則暗自謝而明獨立故雖感而本不 **^{整暗頓}滅殆約消化處說感通耳以暗感**明則明成 下之故外物也感而送通格物也感通云者不是真 知鑽到物裏去以真知嘗然無物當前故也真妄心 寂然不動感而遂通天下之故寂然不動知體也天 實內外洞然無物可對而感物之理最難指口易日 何疑 心之勢境矣物化爲知與我爲一其爲感格之格復 問真知無物可對如何感格於物答真知其

件事是何意答聖人此意最妙干古無人會得此中

中萬物既蒙我真知一炤則如紅爐點雪烈日消霜 嚴新民的工夫就將我已悟之真知致達於萬物之 非已達耶其所以立所以達皆仗真知之力也放今 明明惠於天下一句且從家國而後及天下者知遠 是一事三綱領者一而三三而一也故此八事只了 格彼物既格則我之明惠自然炤明於天下民不期 不期化而自化矣故云致知在格物物目化故謂之 新而自新矣所謂立人遠人也如此則明惠新民只 事物通達而不遺目前无一毫障礙則法法皆眞豈 已脚跟已立定矣慮而后能得是已達謂已於一切 新民上盟且知止而后有定是已立謂知所止則自 天下乃用第二揭示昭明之意則致知格物亦可就 畢矣如此則明惠與新民分明兩事今欲明明惠於 已知致王極處知體既極則誠意正心修身之能事 動之知體知止知字即第一箇明字乃工夫此一段 乃用前悟明一意工夫已在知止中止字即寂然不 體型前云第一箇明字有二意吾向所解致知格物 八件事單單只重在一箇知字此知字即明惠乃本

克是致知復禮則已化化已豈非格物耶天下歸仁 克已復體天下歸仁如何消會答克已即致知復禮 何孔子說一日克已復禮天下歸仁且道天下又是 地萬物外別尋箇物來格耶若格物平不得天下如 听格之物是何物即天地萬物盡在裏許豈除了天 事都是知字的效驗耳學人要在此知字上著眼前 格說至平天下著後字亦是提起知字要顯向後七 著先字總歸重在末後致知上此是說工夫今從物 不能化物若致知專在格物則達人其功最大所以 心乃四勿先將視聽言動絕其非禮但可修身正已 即格物天下歸仁即物格 何物歸仁畢竟歸向何處去參參 之近也明甚 大學重在致知 何等太平氣象是謂物格 物但有一毫不消化處便是知不到至極處必欲物 格今言物格而後知至者是藉物以驗知體意謂彼 云致知格物者是感物以遂其知此格字乃感格之 問如何格物就能平得天下答且道 問格物物格先後之旨答前八事 同正心致知何辨答正 問學人不會答已是物 問致知格物與

乙格所謂神之格思的格字正是天下歸仁之意物 消化盡了纔極得此真知如此則物格之格乃來格 罷手聖人意旨了然明白只是要真實工夫做出乃 都來格万是知之效驗所以格物物格學人須要討 做起不道向虚空裏做所以聖人分明示汝克已復 本既云只一知字如何歸到修身上答不從修身上 分曉若物都來格了則一路格去直到天下平方機 見下落 哭之初哭則里人惡其聲厭其人故聞其哭則掩耳 物不同克已乃是我致知先致在已身一物上若將 禮天下歸仁以已即已身乃是我最親之一物此外 終身為本 問格有三義謂扞格國格來格答三義 自己此物格了然後格天地萬物何難之有故通以 見其人則閉目以其哭異乎人之哭也其妻亦不以 通由一人而發也請以喻明書把梁之妻善哭夫死 哭哭則忘其厭惡也厭惡忘則心轉而憐之矣其妻 里人厭惡而不哭哭之旣久里人不覺而哀痛之亦 亦不以其人憐已而不哭終哭之不休久則通里人 問自天子以至於庶人壹是皆以修身為

哭之痛切於人心故人人皆自痛非痛把也感格也 哭之痛特異於人也扞格也哭久而人人皆痛者以 詢而能止之即自刃在前鼎變在後威而止之不能 蓋久而通里善哭以成俗則不知哭痛自祀出抑視 也何耶以此天外無可哭者矣初哭而人惡之者以 人日日而詢之哭更哀也始非有意欲人憐已也豈 梁妻直類已焉耳斯則來格也此言雖小可以喻大 已故哭亦不已奚以人厭惡而可已耶藉使題里之 者失則不容不哭也慟則終天之恨也以知天不容 之妻之哭非哭其夫也哭其天也天乃終身所依賴 人皆謂自能哭矣人人自能哭則視把梁之妻猶夫 之爲哭者人人善哭哭久則通里以成俗俗成則人 人也不異已而與之周旋密運則無不忘也且把梁 人皆善哭矣人人皆善哭則忘其哀痛而不見若人 重心要非衲衣下事也子其謂何益聞張子韶少 法今年過吳門舉似謙益曰老人遊戲筆墨猶有 溪章逢之士多資筆問道大師現舉子身而爲說 憨山大師所著大學綱質決疑也大師居曹

專於多山關見未發之中及造徑山以格物物格宗旨言下扣擊順領徵旨院宋稱氣節者皆首子部蘇今觀之子韶抗辨經筵院謫橫浦執書倚文部於為小兒醫今世尙舉子故大師現學子身而為設以世諦而宣正法則一也扁鵲聞秦人愛小鬼即以世諦而宣正法則一也扁鵲聞秦人愛小鬼即以世諦而宣正法則一也扁鵲聞秦人愛小鬼即以世諦而宣正法則一也扁鵲聞秦人愛小鬼即以世諦而宣正法則一也扁鵲聞秦人愛小鬼即以世諦而宣正法則一也扁鵲聞秦人愛小鬼即以世諦而宣正法則一也扁鵲聞秦人愛小鬼即以世論亦言正法則一也扁鵲聞秦人愛小鬼即以世論亦言正法則一也扁鵲聞秦人愛小鬼即以世論亦不同其以世論亦不同其以世論亦不可以則以此為其為其為其為其為其為其為其為其為其為其為其為其為其為其為其為其為其。

山老人夢遊集卷第四十四

态

發藥居多而啓暫肓之疾者少非不妙投第未於

衛道潛離者在此則曰彼外道耳在彼則曰此異端

参已下古本

憨山老人夢遊集卷第四十 侍 IE

者 福 善

通 日鋒

門

嶺南弟子 劉起相 重較

親老莊影響論

叙意

於孤陋昧於同體視為與物不能融通教觀難於 利俗其有初信之士不能深窮教典苦於名相支 從占經論諸師未有不善自他宗者吾宗末學安 西域諸祖造論以破外道之執須善自他宗此方

雌難於理會至於酷嗜老莊爲文章淵藪及其言 當且謂一大藏經皆從此出而惑者以爲必當深 見難以折衷及見口義副墨深引佛經每一言有 論指歸莫不望洋而歎也迨觀諸家註釋各狗所 請益老莊之旨者遂雙衎及此以自決非敢求知 於眞人以爲必言之論也且既從古原教破敵者 有概焉余后海上枯坐之餘因閱楞嚴法華次有

> 觀諸法則彼自不出影響閒也故以名論 圓照五色相鮮空谷傳聲衆響斯應苟唯心識而 其病源耳是故余以唯心識觀而印決之如摩尼

論教源

效之者亦不可以言得況大道之妙可以口耳授受 嘗觀世之百工技藝之精而造手妙者不可以言傳

語言文字而致哉葢在心悟之妙耳是則不獨多禪 之學王於陰陽術數圖書印鑑醫方辭賦靡不該練 生業等皆順正法而華嚴五地聖人善能通達世間 是而已至若悟妙法者但云善說法者治世語言資 說法華則純譚實相乃至妙法則未指一詞但云如 實在妙悟即世智辯聰治世語言資生之業無有 法不悟而得其妙者妙則非言可及也故吾佛聖人 法豈絕無世諦而世諦豈盡非佛法哉由人不悟大 身何法得度即現何身何法而度脫之由是觀之佛 然後可以涉俗利生故等覺大士現十界形應以何 道之妙而自畫於內外之差耳道豈然乎竊觀古今

也大而觀之其獨實幾偶人經界太原是非日月之光也是皆不悟自心之妙者一切言教皆從妙悟心中聖人無他特悟心之妙者一切言教皆從妙悟心中聖人無他特悟心之妙者一切言教皆從妙悟心中不遠歸此法界是故吾人不悟自心不知聖人之心不遠歸此法界是故吾人不悟自心不知聖人之心。不知聖人之心而撥聖人之言者譬夫場人之欣戚不知聖人之心而撥聖人之心而將明心不知聖人之心。

論心法

不取其意主峰則謂二氏不能原入宗鏡闢之尤著

然上諸師皆應身大士建大法幢者何去取相左如

此嘗試論之抑各有所主也蓋西域之語質直無文

且多重覆而譯師之學不善兩方者則文多鄙野大

此何哉至觀華嚴疏每月老莊語甚夥則日取其文

論去取

吾佛經盡出自西域皆從翻譯然經之來始於漢至

整融初四公僧之麟鳳也而什得執役然什於肇亦 學融初四公僧之麟鳳也而什得執役然什於肇亦 學融初四公僧之麟鳳也而什得執役然什於肇亦 理者有之以致淺識之疑殊不知理實不差文在羅 人之巧拙耳故藏經凡出什之手者文皆雅致以有 在老孟浪之談宜矣清涼觀國師華嚴菩薩也至疏 華嚴每引擎論必日肇公尊之也嘗竊論之籍使肇 是不正則什何容在座什眼不明則譯何以稱尊若 見不正則什何容在座什眼不明則譯何以稱尊若 是不正則什何容在座什眼不明則譯何以稱尊若 是不正則什何容在座什眼不明則譯何以稱尊若 是不正則什何容在座什眼不明則譯何以稱尊若

义者蓝鉴宗法華所謂善說法者世諦語言資生業 其文不取其意斯言有由矣設或此方有過老莊之 譯者險辭以濟之理必沈隱如楞伽是已是故什之 自在除佛經即諸子百氏究天人之學者唯莊一書 **負超世之見者去老唯莊一人而巳載道之言廣大** 陷孔之有孟斯言信之然孔稱老氏陷龍假孟而見 **堰老氏之道者唯莊一人而已焦氏有言老之有莊** 道之言者唯老一書而已然老言古簡深隱難明發 言者肇心捨此而不顧矣由是觀之肇之經論用其 所譯稱最者以有四哲爲之輔佐故耳觀師有言取 無此書萬世之下不知有妙論蓋吾佛法廣大微妙 等皆順正法乃深造實相者之所爲也主峰少而宗 爲理累葢中國聖人之言除五經束於世教此外載 其操法王之權而行褒貶敕清涼則渾融法界無可 而且藉令中國無此人萬世之下不知有真人中國 無不可者故取而不取是各有所主也故余以法華 鏡遠之者孔子作春秋假天王之令而行賞罰二師

身而為說法至於妙莊嚴二子則日汝父信受外道,身而為說法至於妙莊嚴二子則日汝父信受外道,不為外道邪見何也蓋在著與不著耳由觀音圓通系為外道邪見何也蓋在著與不著耳由觀音圓通無礙則不妨現身說法由妙莊深生執著故為外道無礙則不妨現身說法由妙莊深生執著故為外道無礙則不妨現身說法由妙莊深生執著故為外道無礙則不妨現身說法由妙莊深生執著故為外道無礙則不妨現身說法由妙莊深生執著故為外道

論學問

条每見學者披閱經疏忽強引及子史之言者如擺路虎心驚怖不前及教之親習則日彼外家言耳掉頭弗顧抑嘗見士君子為莊子語者必引佛語為鑒或一言有當且日佛一大藏盡出於此嗟乎是豈通或一言有當且日佛一大藏盡出於此嗟乎是豈通或一言有當且日佛一大藏盡出於此嗟乎是豈通不盡自細視大者不明余嘗以三事自勗日不知佛意不盡自細視大者不明余嘗以三事自勗日不知佛意不盡自細視大者不明余嘗以三事自勗日不知佛意不盡自細視大者不明余嘗以三事自勗日不知春不盡自細視大者不明余嘗以三事自勗日不知春

知 此可與言學矣

論教薬

昧威神所現故日不壞相而緣起染淨恒殊不捨緣 聖本來一體無有一人一物不是毗盧遮那海印三 法不從此心之所建立若以平等法界而觀不獨三 或問三教聖人本來一理是果然平日若以三界唯

大第定為本此二乃界內之因果也所言聲聞所修 者即益載兩閉四海之內君長所統者是巳原其所 界諸天空定所持原其所修上品十善以有漏禪九 其所修以上品十善為本色界諸天然王所統無色 修以五戒爲本所言天者即欲界諸天帝釋所統原 矣然此五乘各有修進因果階差條然不紊所言人 所言五乘謂人天聲聞緣覺菩薩也佛則最上一乘 言十界謂四聖六凡也所言五教謂小始終順圓也 之異耳圓融者一切諸法但是一心染淨融通無障 無礙行布者十界五乘五教理事因果後深不同所 而即真聖凡平等但所施設有圓融行布人法權實 心萬法唯識而觀不獨三教本來一理無有一事一

> **党超人天之聖也故高超三界遠越四生栗人天而** 老子天乘之聖也故清淨無欲離人而入天聲聞緣 之意也由是證知孔子人乘之聖也故奉天以治人 聖人設教淺深不一無非應機施設所謂教不躐等 法五乘之行皆是佛行良由衆生根器大小不同故 然此理趣諸經備載由是觀之則五乘之法皆是佛 不入菩薩超二乘之聖也出人天而入人天故往來 妙契三德奸而爲一故日圓融散而爲五故日行布 以六度為本此三乃界外之因果也佛則圓悟 以四諦爲本緣覺所修以十二因緣爲本菩薩所修 11.

十界森然行布不礙圓融一際平等又何彼此之分 能聖能凡在天而天在人而人乃至異類分形無往 三界救度四生出真而入俗佛則超聖凡之聖也故 是非之辯哉故曰或邊地語說四論或隨俗語說四 心若事若理無障無礙是名爲佛故圓融不礙行布 而不入且夫能聖能凡者豈聖凡所能哉據實而觀 諦葢人天隨俗而說四諦者也原彼二聖豈非吾佛 一切無非佛法三教無非聖人若人若法統屬

则

甚矣貪欲之害也故曰不見可欲使心不亂故其爲 也若絕唱東智則民利百倍剖斗折衡則民不爭矣 其道如此而已矣故執先王之迹以桂功名堅固我 耶經稱儒童良有以也而學者不見聖人之心將謂 教心離欲清淨以靜定持心不事於物澹泊無爲此 關之圖者有之矣故老氏愍之日斯尊聖用智之過 執肆貪欲而爲生累至操仁義而爲盜賊之資啓攻 我觀其清世之心豈非據菩薩乘而說治世之法者 耳其心豈盡然耶況彼明言之曰毋意毋必毋固毋 而人不爲夷狄禽獸者幾希矣雖然孔氏之迹固然 欲横流之際故在彼汲汲圍難之吾意中國非孔氏 定人倫之節其法嚴其教切近人情而易行但富人 善由物而入人修先王之教明賞罰之權作春秋以 明治亂之迹正人心定上下以立君臣父子之分以 復禽獸之行也故以仁義禮智援之姑使捨惡以從 心緣獨以及深由近以王遠是以孔子欲人不爲虎 密遣二人而為佛法前導者耶斯則人法皆權耳良 由建化門頭不壞因果之相三教之學皆防學者之

士将亦不知軒冕為桎梏矣均之濟世之功又何如 **搴雄吞噬之劇擧世顯瞑亡生於物欲火馳而不返** 婆羅門身而說法者耶何其遊戲廣大之若此也批 耳至若精研世故曲盡人情破我執之牢關去生人 訶教物離際形泯智意使離人入天去貪欲之累故 耶然其工夫由靜定而入其文字從三昧而出後人 者衆矣若非此老腦起攘臂其閒後世紀有高潔之 途若非孟氏起而大關之吾意天下後世左在矣當 何如哉嘗謂五伯僭竊之餘處士橫議充塞仁義之 糠塵世幻化死生解脫物累逍逝自在其超世之重 不可識此其說人天法而具無礙之辯者也非夫現 之大界寓言曼衍比事類辭精切著明微妙玄通深 且非實言乃破執之言也故日寓言十九重言十七 爲之害也話皆孔子非話孔子話學孔子之迹者也 棄智之謂也治推上古道越養皇非漫談也甚言有 故其言之也切至於誹堯舜薄湯武非大言也絕聖 者難明故得莊子起而大發揚之因人之固執也深 天之行也使人學此離人而入於天由其言深沈學

不入安能入於佛法乎不知所歸越荷不見其心而觀其言宜乎驚怖而不不知所歸越荷不見其心而觀其言宜乎驚怖而不及也且彼亦曰萬世之後而一遇大聖知其解者是旦春遇之也然彼所求之大聖非佛而又其誰耶若意彼爲吾佛破執之前矛斯言信之矣世人於彼母

論工夫

吾教五乘進修工夫雖各事行不同然其修心皆以上觀為本故吾教止觀有大乘有小乘有人天乘四川,是九通明禪孔氏亦曰知止而後有定又曰自誠明此人乘止觀心老子曰常無欲以觀其後至子亦曰談以觀其後又曰萬物並作吾以觀其後至子亦曰於流水而鑑於止水惟止能止衆止也又曰人莫鑑於流水而鑑於止水惟止能止衆止也又曰人莫鑑之至若百骸九竅賅而存焉吾誰與爲親又曰咸其之至若百骸九竅賅而存焉吾誰與爲親又曰咸其之至若百骸九竅賅而存焉吾誰與爲親又曰咸其之至若百骸九竅賅而存焉吾誰與爲親又曰咸其之至若百骸九竅賅而存焉吾誰與爲親又曰咸其之至若百骸九竅肢而存焉者此其靜定工夫舉皆釋

有智故釋智以淪虚此則有似二乘且出無佛世觀

若謂大患莫若於有身故滅身以歸無勞形莫先於

無邊際名色究竟天此其證也由是觀之老氏之學

禪精見現前陶鑄無礙以至究竟學幾窮色性性人

化知無有似獨覺原其所宗虚無自然即屬外道觀

生據華嚴地上菩薩爲大梵王至其梵衆皆實行天

以大梵天王爲娑婆主統領世界說十善法教度案

人天乘精修梵行而入空定者是也所以能濟世者

以權論正所謂現婆羅門身而說法者據實判之乃

其慈悲救世之心人天交歸有無雙照又似菩薩蓋

語純究天人之際非孟浪之談也人由人乘而修天行者此其類也無疑矣吾故日莊

論行本

原夫即一心而現十界之像是則四聖六凡皆一心之影響也豈獨人天爲然哉宪論修進階差實自人之影響也豈獨人天爲然哉宪論修進階差實自人之影響也豈獨人天爲然哉宪論修進階差實自人可以整心慮趣菩提唯人道爲能耳由是觀之捨人可以整心慮趣菩提唯人道爲能耳由是觀之捨人道爲雖其立傳法非佛法無以哉一心是則佛法以入意爲雖其之子子。不融不知無貪無說如幻化人是爲諸臣父父子子不融不知無貪無說如幻化人是爲諸臣至父父子子不融不知無貪無說如幻化人是爲諸臣至父父子子不融印此世界爲極樂之國矣又何庸夫聖人哉奈何人者因愛欲而生愛欲而死其生死愛欲者財色名食睡耳由此五者起貪愛之心構攻愛欲者財色名食睡耳由此五者起貪愛之心構攻之資罰不足以禁其心適一已無厭之欲以結未來之實罰不足以禁其心適一已無厭之欲以結未來之實罰不足以禁其心適一已無厭之欲以結未來之實罰不足以禁其心適一已無厭之欲以結未來之實罰不足以禁其心適一已無厭之欲以結未來

展量之苦是以吾佛愍之日諸苦所因貪欲為本若 大原政學道耳且不居天上而乃生於人閒者正示 大原因果之相皆從人道建立也然既處人道不可 不知人道也故吾佛聖人不從空生而以淨梵為父 不知人道也也不可 以羅睺為子而遠之示貪欲之害也入來山而苦修示 惟欲之行心先習外道四偏處定示離人而入天心 婚此而證正偏正覺之道者示人天之行不足責心 於此而證正偏正覺之道者示人天之行不足責心

面盛幾如檮昧與之論教乘則日枝葉耳不足尚也論佛法則體侗眞如瞞預佛性與之論世法則觸事弟子不知吾佛之心處人閒世不知人倫之事與之弟子不知吾佛之心處人閒世不知人倫之事與之為佛法則體侗眞如瞞預佛性與之論世法也此吾大師示地假王臣爲外護示處世不越世法也此吾大師示佛道不捨孝道也依人間而說法示人道易趣菩提

論宗趣

養禮智教化為隄防使思無邪姑捨惡而從善主若 議禮智教化為隄防使思無邪姑捨惡而從善主若 養禮智教化為隄防使思無邪姑捨惡而從善主若 養禮智教化為隄防使思無邪姑捨惡而從善主若

老乃中國之人也未見佛法而深觀至此可謂捷疾

利根矣借使一見吾佛而印決之豈不願證眞無生

耶吾意西涉流沙豈無謂哉大段此識深隱難測當

佛末出世時西域九十六種以六師爲宗其所立論

之根衆妙之門不知其所以然而然故莊稱自然且

此識乃全體無明觀之不透故日杳杳冥冥其中有

精以此識體不思議熏不思議變故日玄之又玄而

無之日妙道以天地萬物皆從此中變現故日天地

體即楞嚴所謂罔象虛無微細精想者以爲妙道之

源耳故曰您母恍其中有象恍母惚其中有物其以

耳古德嘗言孔助於戒以其嚴於治身老助於定以

其精於忘我二聖之學與佛相須而爲用豈徒然哉

據實而論執孔者涉因緣執老者墮自然要皆未難

昔之工夫有在但邪執之心未忘故今見佛只在點 化之閒以破其執耳故佛說法原無贅語但就衆生 徒且其見佛不一言而悟如良馬見鞭影而行豈非 法與人心至於楞嚴會上微細披剝次第資辯以破 所執之情隨宜而擊破之所謂以複出複者本無實 也洎手吾佛出世靈山一會英傑之士皆彼六師之 之精者豈只彼方衆生有執而此方衆生無之耶是 父豈其說法止為彼方之人而此十萬里外則絕無 彼此而佛性豈有二耶且吾佛爲三界之師四生之 百什至於得神通者甚多其書又不止此方之老莊 不審乎此但云彼西域之人耳此東土之人也人有 因緣自然之執以斷凡夫外道二乘之疑而看教者 則此第八藏彼外道者或執之爲冥諦或執之爲自 分耶然而一切衆生皆依八藏而有生死堅固我執 天伏前七識生機不動進觀識性至空無邊處無所 然或執之爲因緣或執之爲神我即以定修心生於 梵天而執之爲五現涅槃或窮空不歸而入無色界 有處以極非非想處此乃界內修心而未離 藏性者

> 生死本癡人認作本來人者是也至於界外聲聞已 故日學道之人不識眞只爲從前認識神無量劫來 寧歸之地且又親從佛教得度猶費吾佛四十年彈 異熟未空由是觀之八識爲生死根本豈淺淺哉故 乘而見濟度雖地上菩薩登七地巳方捨此識而 訶淘汰之功至於法華會上猶懷疑佛之意謂以小 滅之樂八識名字尚不知而亦認爲涅槃將謂究竟 滅三界見思之惑已斷三界生死之苦已證無爲寂 日一切世閒諸修行人不能得成無上菩提乃至別 知二種根本一者無始生死根本則汝今者與諸衆 成聲聞緣覺及成外道諸天魔王及魔眷屬皆由不 至此即其精進工夫誠不易易但未打破生死窠堀 噫老氏生人閒世出無佛世而能窮造化之原深觀 汝今者識精元明能生諸緣緣所遺者正此之謂也 生用攀緣心爲自性者二者無始涅槃元清淨體則 酒

及條非自然性方徹一心之原耳。此其世出世法之 及條非自然性方徹一心之原耳。此其世出世法之 及條非自然性方徹一心之原耳。此其世出世法之 及條非自然性方徹一心之原耳。此其世出世法之 及條非自然性方徹一心之原耳。此其世出世法之 及條非自然性方徹一心之原耳。此其世出世法之 及條非自然性方徹一心之原耳。此其世出世法之 異若聞世尊訶斥二乘以爲焦芽敗種悲重菩薩以 異若聞世尊訶斥二乘以爲焦芽敗種悲重菩薩以 異若聞世尊訶斥二乘以爲焦芽敗種悲重菩薩以 實情破執之謂也若果情忘執謝其將把臂而遊妙 遺之鄉矣方且軟忻至樂之不暇又何庸夫憒憒哉 武故彼六師之執幟非佛不足以拔之吾意老莊之 大言非佛法不足以證嚮之信乎遊戲之談雖老師 大言非佛法不足以證嚮之信乎遊戲之談雖老師

嘗與洞觀居士夜談所及居士大為撫掌庚寅夏此論叛意葢予居海上時萬曆戊子冬乞食王城

矣

宿學不能自解免耳今以唯心識觀皆不出乎影響

莊而作也故以名論萬曆戊戌除日熟山道人清 書於楞伽室 偶會而然耶道與時也庸可强手然此葢因觀老 後作之於東海之東而行之於南海之南豈機緣 旨門人實實見而歎喜願竭力成之以卒業焉噫 寓五羊時與諸弟子結制壘壁閒爲衆演楞嚴宗 命弟子如奇刻之以廣法施予固止之戊戌夏予 菴夜坐出此師一讀三歎日是足以祛長迷也即 策候予於江上冬十一月予方渡江晤師於旅泊 法罹難其草業已遺之海上矣仍遺侍者往殘簡 城擬請益於弱侯焦太史不果明年乙未春以弘 爲法門重輕觀意於十年之前而克成於十年之 **飲識佛性義當觀時節因緣此區區片語誠不足** 中搜得之秋蒙 日始命筆焉藏之既久向未拈出甲午冬隨綠王 恩遣雷陽達觀禪師由匡廬杖

知老莊不能忘世不多禪不能出世及孔子人乘響論等書深爲歎服所謂不知春秋不能涉世不病後俗冗近始讀 大製曹谿通志及觀老莊影

如此之類百世不易之論也起原再稽額之聖老子天乘之聖佛能聖能凡能人能天之聖

道德經解發題

發明宗旨

老氏所宗以虚無自然爲妙道此即楞嚴所謂分別老氏所宗以虚無自然爲妙道此即楞嚴所謂分別之,就是不足以盡之轉此則爲大圓鏡智矣菩薩知此。此一觀而破之尚有分證至若聲聞不知則取之爲之數四域外道梵志不知則執之爲冥諦此則以爲些由不知二種根本錯亂修習猶如美沙欲成佳饌皆由不知二種根本錯亂修習猶如美沙欲成佳饌皆由不知二種根本錯亂修習猶如美沙欲成佳饌皆由不知二種根本錯亂修習猶如美沙欲成佳饌皆由不知二種根本錯亂修習猶如美沙欲成佳饌皆由不知二種根本錯亂修習猶如美沙欲成佳饌皆由不知二種根本錯亂修習猶如美沙欲成佳饌」

以能生諸緣故非空不知更出

發明趣向

所謂知我者希矣冀親二子者當作如是觀語言文字之乎者也而擬之故大不相及要且學疎能行而世之談二子者全不在自已工夫體會只以非大言也故曰吾言甚易知甚易行天下莫能知莫非大言也故曰吾言甚易知甚易行天下莫能知莫非

發明工夫

老子一書向來解者例以虛無爲宗及至求其入道工夫茫然不知下手處故予於首篇將觀無觀有一致聖人皆以此示人孔子則日知止而後有定又日觀子爲入道之要使學者易入然觀照之功最大三期明德然知明即了悟之意佛言止觀則有三乘止觀人天止觀邊深之不同若孔子乃人乘止觀也老子亦方之。如佛言諸苦所因貪欲爲本皆爲我心老別,因我之一字爲病根即智愚賢不肖汲汲功名利祿之場圖爲百世子孫之計用盡機智總之皆爲一身之場圖爲百世子孫之計用盡機智總之皆爲一身之場圖爲百世子孫之計用盡機智總之皆爲一身之場圖爲百世子孫之計用盡機智總之皆爲一身之場圖爲百世子孫之計用盡機智總之皆爲一身之場圖爲百世子孫之計用盡機智總之皆爲一身之場圖爲百世子孫之計用盡機智總之皆爲一身之場圖爲百世子孫之計用盡機智總之皆爲一身之場如佛言諸苦所因貪欲爲本皆爲我故老子亦之謀如佛言諸苦所因貪欲爲本皆爲我故老子亦之謀如佛言諸苦所因貪欲爲本皆爲我故老子亦之以其世人盡

輕易舉似於八唯引而不發所謂若聖於仁則吾豈設也至若絕聖棄智無我之旨乃自受用地亦不敢於君臣父子之間各盡其誠即此是道所謂爲名教於君臣父子之間各盡其誠即此是道所謂爲名教

者待心固者執心我者我心克者盡絕好者禁絕之好我此四言者肝膽畢露然已者我私意者生心必必至若極力爲人處則日克已則日毋意毋必毋固敢又日吾有知乎哉無知也有鄙夫問於我空空如

不迎來無所點去無蹤迹身心兩忘與物無競此聖遊世寂然不動物來順應感而遂通用心如鏡不將辭教人盡絕此意必固我四者之病也以聖人虚懷

之言毋得者使其絕不可有犯一犯便罪不容赦只也且毋字便是斬截工夫下手最毒即如法家禁令在此故使痛絕之即此之教便是佛老以無我爲宗在此故使痛絕之即此之教便是佛老以無我爲宗囚者之病故不自在動即是苦孔子觀見世人病根

是學者不知耳至若吾佛說法雖浩瀚廣大要之不

發明體用

故用也明則誠體也誠則形用也心正意誠體也身大其實一也若孔子曰寂然不動感而遂通天下之是但爲一已之私何以經世佛老果絕世是爲自度用皆同但有淺深小大之不同耳假若孔子果有我用皆同也有淺深小大之不同耳假若孔子果有我可以利生是知由無我方能經世由利生方見無可矣。

方有大聖人不言而信無為而化是登有心要為耶

是知三聖無我之體利生之用皆同但用處大小不

舜與人同耳以人皆同體所不同者但有我私爲障 馬又曰無爲而治者其舜也數且經世以堯舜爲郡 用也孔子曰唯天唯大唯堯則之齋寫乎民無能 修家齊國治天下平用也老子無名體也無爲而 企以經濟之此所以由無我而經世也老子則口常 一般耳由人心同此心心同則無形發 故汲汲為之教 此豈有名有爲者耶由無我方視天下皆我故日堯 善教人故無棄人無棄人則人皆可以爲堯舜是由 日若能使一衆生發菩提心寧使我身受地獄苦亦 若佛則體包虛空用周沙界隨類現身乃日我於一 居等語皆以無爲爲經世之大用又何嘗忘世哉至 無我方能利生也若夫一書所言為而不字功成不 不疲厭然所化衆生豈不在世間耶旣涉世度生非 切衆生身中成等正覺又日度盡衆生方成佛道又 若無一類而不現身豈有一定之名耶列子嘗云西 經世而何且爲一人而不厭地獻之苦豈非汲汲耶

發明歸越

障礙事事不得解脫若不知孔子單單將佛法去涉和佛決不能以慈悲爲實佛若不經世決不在世別知佛決不能以慈悲爲實佛若不經世決不在世別知佛決不能以慈悲爲實佛若不經世決不在世別知佛決不能以慈悲爲實佛若不經世決不在世別

電沒用處故離師亦云說法不投機終是閒言語所以華嚴經云或邊地語說四諦此佛說法未嘗單誇立妙也然隨俗以度生豈非孔子經世之心乎又經云五地聖人涉世度生世閒一切經書技藝醫方雜云五地聖人涉世度生世閒一切經書技藝醫方雜品 過書印壓種種諸法靡不該隸方能隨機故日世 以此觀之佛豈絕無經世之法手由孔子廢夷秋故以此觀之佛豈絕無經世之法手由孔子廢夷秋故以此觀之佛豈絕無經世之法手由孔子廢夷秋故以此觀之佛豈絕無經世之法手由孔子廢夷秋故以此所以用有大小不同耳是知三教劉海以心融迹則 化此所以用有大小不同耳是知三教劉海以心融迹則 化此所以用有大小不同耳是知三教劉海以心融迹則 人所異者迹也以迹求心則如鑫測海以心融迹則 人所同者 心所異者迹也以迹求心則如鑫測海以心融迹則 人所國者

参已下古本

5

假忘而忘矣而云我忘物已我忘物已有所可忘非

真忘故云不足以致道

無如斯則又何滯哉而必以虚爲虚取虚爲極是淪 自虚矣心虚物虚則心無而有物虚心虚則物有而 倫虚者未足以盡道夫心不虚者因物有物虚而心

虚心何盡道

忘與不忘俱忘忘忘矣而必拘俱忘忘矣而不拘俱 難應至矣哉安得無忘而無不忘無俱而無不俱者 而與之言忘俱耶

流似停易此者是不達動靜之原生滅之本也 今夫致道者在慶必日動易體出慶必日靜易造以 動易者如實石火以靜易者如可急流石火似有急

於天地木折而竅號於太虚何有焉故至人無我虚 被物動者我之招也不有我執能動哉觀夫是風鼓

之至也以其虚故不動

心體原眞智染成妄故造道之要但治智治暫之要 純以智嘗試觀夫融冰者焉火勝則冰易消智深則

> 不信不足信也故我信信心人信信言言果會心則 我信人不信非人不信信不及也人信我不信非我

無不信矣

明之皆生死之帶也是以得不在小失不在大聖人 鉄兩移干鈞之至重一私奪本有之大公私也者圓

戒慎恐懼不睹不聞之地

異也是以有利不有名有名不有功有功不有道有 **勞於利勞於名勞於功勞於道其勞雖同所以勞則**

道者道成無不備

陸魚不忘濡沫籠鳥不忘理輸以其失常思返也人

而失常不思返是不如魚鳥也悲夫

趣利者急趣道者緩利有情道無味味無味者緩斯

急也無味人熟味之味之者謂之眞人 心本澄淵由吸前境種獨其性起諸昏擾悶亂生體

推

原其根其過在著

一瞥在眼空華亂起纖塵著體雜念粉飛了臀無華

廛絕念

至細者大至後者著細易輕微易忽來人不識

競兢由平競兢故道大功善萬世無過

色於麋鹿也也於麋鹿也也於寒鹿也也於火欲之故可欲欲生於愛愛必取取必及物無可欲人欲之故可欲欲生於愛愛必取取必及物無可欲人欲之故可欲欲生於愛愛必取取必及

恬不知畏過矣乎虎狼食身色欲食性色欲之於人何啻虎狼哉人狎而且玩食盡而心甘吾觀夫狎虎狼者雖狎而常畏恐其食已也故常畏

視味如嚼蠟何欲哉之人無能為道者吾意善敵欲者最以智助智以厭之人無能為道者吾意善敵欲者最以智助智以厭色欲之於人無敵也故日賴有一矣若使二同兽天

是以道無不大德無不弘功無不成名無不立難而易易而難衆人畏難而忽易聖人畏易而敬難

聖人孰能固哉不固則朽何固哉吾謂不朽者異夫形致故勞形且夫盡勞而未必虧樹而未必固听去此之皆以功名爲不朽謂可以心致故勞心謂可以

是知吾之不朽不朽矣

者不立不立者無本無本而名位之**就競手得失心**

何榮哉

高故實莫至焉有高則有下故不至是知達人無事故富奠大焉無有高則有下故不至是知達人無事故富奠大焉無

清萬境斯寂用顯則森然頓現一道齊觀如斯則逆 音所謂隱顯者隱於體而顯於用也體隱則那獨太 道未必著故隱非正顯非大吾所謂隱顯者異乎是

激託言而要乎世應過矣夫達士觀之顧人酣酒夜達大命者居常爲失意當分爲棄時故踔踶之心憤君父之命不可逃況大命乎嘗試觀夫員小技而不用隨宜窮蓮一致矣應處此者博大眞人哉

焉知命者不取

行而射類於柱抱布鼓而號救於天也雖然布鼓存

者 沒 凌 然 百 發 而 數 養 此 善 者 也 而 況 不 善 者 乎 善 以 機 為 密 非 密 矣 以 道 為 密 密 也 夫 吾 嘗 觀 夫 弄 弩

天地循環千變萬化死生有常人莫之測不測其常

狗物而忘郢人返物故乃昌

人東我取故人之所有我不有我之所有人不有人

非不有以其不知有故不有設知有我何異哉 **塞垢汚指必濯而後快貧曭害德而不知祛是視德**

不若一指也指汚有生德害失性

頁重者累多知者勞累久則形傷勞極則心殆殆已 所以殆者事外也是以重生者。事內不事外循已不

循人志存不志亡

變通難言也人莫不以趣利避害爲然而吾實不然 亦有夫利害置前而不可却者變心何通耶衆人隨

之君子審之聖人適之適之則不有以其不自有故

不有

已夫夫盗盗物未必盡有禦必不入設入必穫穫則 人謂之盜物者爲盜非盜也吾謂之盜心者爲盜確 死無容既死矣奚盗哉夫盗盗心必盡失禦急而 愈

> 道盛柔德盛識物盛折是以柔愈强訴愈光折愈亡 入設獲且生而多又縱之尤有誨之者慎之哉

古之不事物者故乃長

愈密事愈遠心不洗者無由密是以聖人實洗心退 密於事者心疏密於心者事達故事愈密心愈疏心

藏於密

刺在周側掉而不安衆刺在心何可安耶刺層層

潰剌心心亡

然就能當之故夫人有威者承天也天威至公人致 大威可畏觀大天地肅殺者大威也萬物雖衆靡靡

効公天威愛物人威主生

化人無功化已有功已果化而人不化自化矣養夫 觀德人之容使人之意也消信夫

治逆易治順難逆有對順無知故有知者遇逆如甘

露畏順如鴆毒愼之至也以其愼故守不失惧也者 成德之人歟

心體本明情塵日厚塵厚而心日昏矣是以聖人用 智不用情故致道者以智去情情忘則智泯矣忘情

On wine a passes tank total bur bert elle treet of grand

者近道哉

也故自勝者執能禦之 不利嘗試觀夫片雪點紅爐清霜消烈日以其勝之 不利嘗試觀夫片雪點紅爐清霜消烈日以其勝之

者棄巧取扭無不獲 人以大巧我用至批人巧以失我扭以得故善事道

入存戒

推原其由本乎不覺不覺即忘返也

至焉是以樂苦者苦日深苦樂者樂日化故渤道之焉隳形骸泯心智不與物伍人謂之苦何苦哉樂莫恣口體極耳目與物鑁鑠人謂之樂何樂哉苦莫大

多財者羅高位者慢多功者伐大志者狂游才者傲,事事遂者逸功成者退故日功成事遂身退天之道,天地不勞而成化聖人以勞而成功衆人因勞而遂

人去彼取此

因風起浪風若不起波浪何生藏若不生萬緣何有不了假緣橫生取捨藏風鼓扇浩蕩不停如海波澄

厚德者下實道者隨

放致道者不了即生了即無生也善識

是知一念者生死之根漏患之本也故知幾知數學自容天地數塵能失其明心包太虛一念能鑒其廣功流萬世以其道大心有大道者熟能破之

智照識感感起于差照存獨立故致道者以照照為信之矣故自信敦誠人信易歎誠者日潸歎者日淪自信者人雖信亦不

實智不實識

是自短於市人而士苴其道德也悲夫為嫌其污魔也今夫人者處下德而晏然不惕不智。

生紜紜並作而無將無迎者是處其不變而變之也無變何嘗不變哉請試觀夫聖人身循萬有潛壓四焉荷知其不變則變不能變之矣苟不知其不變雖

何變哉若夫人者形若槁木而心若颺塵物絕迹而

眼骨了骨花不無空體常寂

酒呻吟是無變心何嘗不變哉

者志墮心逸者志精故養道者忘形師心道乃貞寢息坐臥所以逸身也止絕攀緣所以逸心也身逸

尊以納汚含垢成其尊是以聖人愈容愈大愈下愈天地大以能含成其大江海深以善納成其深聖人

尊故道通百劫福隆終古而莫之爭

見色者盲見見者明聞整者靈聞聞者聽是以全色惡無不真故日天地同根萬物一體此之謂同仁親民為吾民善善惡惡或不均親民爲吾心慈善悲

全見盡聲盡聞無不融聲色俱非見聞無住此之謂

調一念者無念也能觀無念不妨念念而竟何念哉愈不止矣若以一念止衆念則不止而自止矣吾所衆念紛紛不止無以會眞若以衆念止衆念則愈止

了妄不有雖不有猶有之也故妄想如空花其根在心體元虚妄想不有若了妄不有雖有而不有也不

雖然實無念者贅也夫督不知其爲橛也

廛未了而爲留礙也故造道者不了前廛縱心想俱患未了而爲留礙也故造道者不了前廛縱心想俱

停猶為趣寂故於至道不取

是以體寂若太虛用照如白日故萬變無虧無幽不體寂用照用不失體即照而寂體不離用即寂而照

臣全

| 同狀畫夜不變死生不遷此之謂常然體此者似人| 前無始後無終萬劫一念六合一虚人物齊軌大小

而天誰爲之愆

不可以無心得不可以有心水有心執有無心著無顯存亡莫之二是以至人愈動愈靜無不寓事小理大事有千差理唯一味善理者即事無外隱

當情也是二俱非則超然獨立所以大人無對者以其無可

道果喻道何不忘耶故曰魚相忘於水人相忘於道大忘不忘無不忘用意忘者愈忘愈蓍孰著者未喻人意不去常閒善此者不出尋常竭居妙域矣

爲凡民哉吾意善體道者身若魚鳥心若海空近之游魚不知海飛鳥不知空凡民不知道藉若知道豈

矣

無時不察察文念裂劃然自得自得者自知人莫之一動一節一語一點揚眉瞬目或飲與啄左之右之

ā

不難一念是知一念之要重矣夫

若寄焉
片雲浮於太清任往任來脩然無寄由無寄故處世人雲浮於太清任往任來脩然無寄由無寄故處世人雲沙正大此身至微是以明真心者返觀此身猶若

若寒灰枯水而斷然不爲也不爲也是以聖人無爲而無爲有爲無能爲爲無爲能有爲是以聖人無爲而無

物之在天地乎此身之在萬物乎外物之在此身乎物之在天地乎此身之在萬物乎外物之在此身乎

天地寂萬物一守寂知一萬事畢處此道者常不忒嘻眇小哉以其小故大

而為已者其唯聖人乎 而為已者其唯聖人乎

迹物物徒云身寄寶中心超象表矣 外觸目無可當情中返觀了無一物如斯則空空絕 山河大地一味純真心若圓明天地虚寂故遠此者

香悶悶人望之而似凝若亡人而不知偶誰吾謂以 其形似拘拘其中深而虚虚眼若不見耳若不聞昏

世在即世而維世也即世而雖世者謂之至人世種所有香若夢存夢中不無覺後何有故不覺何

得矣何言哉

今夫不本而誇善變者是由自縛而解人人見而必有也涉有處變古有萬變而不失其正者根本存焉知有爲始極盡爲終策知以智運極以權權心者涉

唾雖孺于大笑之

詣僞不除僞不除眞不極由是觀夫僞也者眞之蔽直達謂之顧密造謂之漸直達詣眞密造除僞眞不

數道之害數德之累數

曾無欠關常在其中不勞途涉此之謂至極 常泯常照常起常寂心不可思言不可議日用尋常 多一互入舉一通收不妨羅列小大不殊,凡聖不隔 多一互入學一通收不妨羅列小大不殊,凡聖不隔

忘言者通是故近則易親遠則易毀通則莫測以其大言載道小言載名至言忘言載名者近載道者遠

孤掌不鳴不虛無響絕待無言由是觀之言者有待至故莫測居莫測者謂之神化

不及也吾意善得無言者在遺言言既遺而無言者一而然也雖然言言於無言言即無言矣無言者言之

本言簡而意立莊語奇而思遠後之談道者歸焉 老言簡而意立莊語奇而思遠後之談道者歸焉 為文俊偉明潔而其意旨難以名言或老莊猶有 所未及耶疑者曰子是過矣老莊何可及也余曰 所未及耶疑者曰子是過矣老莊何可及也余曰 於未及耶疑者曰子是過矣老莊何可及也余曰 之類則似有言而未盡又似欲言而難於言者道 之類則似有言而未盡又似欲言而難於言者道 之類則似有言而未盡又似欲言而難於言者道 之類則似有言而未盡又似欲言而難於言者道 之類則似有言而未盡又似欲言而難於言者道 之類則似有言而未盡又似欲言而難於言者道 之類則似有言而未盡以緒言之即其言而求其所 不言是存乎人矣不然謂惑山今人也緒言何奇 不言是存乎人矣不然謂惑山今人也緒言何奇 或豈唯不及老莊亦復不及諸子

憨山老人夢遊集卷第四十五

山老人夢遊集卷第四十六

侍 温 善

日錄

通 畑

門

嶺南弟子

劉起相

者一一級入爲徑山法話以便刻施普及不枉大 能憶全語始次標目記其大略前話并續別開示 誦師言波浪深屬而某又十日後方起此念不復 利生最親切者不宜散落某生平能領旨不能記 師在徑山與諸弟子接見散口而談日出皆證後

弟子朱鷺記

師唾沫之慈澹居師及大衆同此一心

此一大事須平實商量方得受用第一不得好玄妙 唇舌波浪謂之弄精魂

臨逆順八風境界便被搖奪將去都透不過以宗入 正知見不從境緣上打鍊者亦只是光影門頭事及 此事不從参究入者不得力不向教上印證者不得 以教印以日用境綠爲驗但於境上輕脫無滯著心

即是用心得力處能以境緣自勘亦不必全算善知

識說話爲實法耳

被者點光覆住不復能出過後發出都被所使矣入 好進步不得歡喜若認此為是則得少為足貼體都 不通時物逼極處进出些子光影謂之電光三味正 夠三寸子何不道前人志之矣疑至情識不到語言 其參究須離話頭處參究下得疑方得力古德云雕 **咬定話頭不是要明話頭只借話頭發疑斬截妄想** 藏中含藏尚有多生習氣微細種子忽現前用力不

得處須借呪力以消之

-684 -

帶情來底是智較住話頭正是把住情識來路不起 問智識不同處但最初一念現量即是智纔轉第二 頭便是比量落情想矣又日結帶情來底是識不點

第二念

得先存待悟心纔待悟即爲等待他悟即此便是攔 参悟亦非甚難事三個月一住氣定見下落第一不 頭板則工夫再不得入矣又日者事須是勇猛漢子

入者但要保任去透脱去如六祖便是其人鈍根人 利根人多生得夙慧今生遇緣當下便了有不從參

如何只要自肯鈍根不巧就從鈍處得力

咬定話頭一切時中都用得著便刀山火聚上去也 用得著者便是得定力處若有絲毫迴避便至身墮

落矣

参禪人不得坐在潔白地上此是千生萬劫陷坑我

欲爲聚說破故作擔板歌

註金剛法華楞伽楞嚴等經書從情識不到處沒義 人一向無義路邊錯下脚若不得教眼便落邪見我 教眼宗眼原無二眼末明師提宗全抵教語印入恐

在東海時一夕坐入身世俱空海印發光河山震動 路邊进出者拈取却欲以教印宗學者當自得之

點燭書之手腕不及停盡五鼓漏而楞嚴懸鏡已竟 境界得相應慧有項悟入楞嚴著緊處恍然在目急

矣侍者出候見殘燭在案訝之

菩薩全以利生爲事若不透過世閒種種法則不能 投機利生

學佛先發大悲心破我執為主

舊公案在今時人以妄想量度則鍼鋒不對矣縱會

動中會易入靜中入無力

得說得亦於已分上無力

從外知見入者無力自性內會入者得力

問從綠薦得者如何綠有二見聞綠有退失境界綠

無退失虚實不同故

見外道知見諸皆淆鷸所以世尊種種方便只要了 只一佛知見是正却有菩薩知見二乘知見衆生知 衆生欲忍二乘生忍菩薩無生忍佛寂滅忍

心入正知見名佛知見

了得生滅心寂滅即了得生死

如何是向上祇有箇放下

祖師語句句活學人富實法則句句死

日用工夫只消看破妄念不被他使無別用心處 切空不下時如何,只了知是假一切能空一切能

輕

菩薩住在極樂做甚事我要扯他出來

念阿彌陀佛句原同一話頭今人却便會到西方去

也

命取庫中二百錢與之若先無主張便惶遠了也會在海口時偶想六祖夜半人來研頭公案便欲學其定力每夜開門習觀想假若有人來要借頭便數其定力每夜開門習觀想假若有人來要借頭便數其定力每夜開門習觀想假若有人來要借頭便數學

事力乃知臨財不可苟也

自倒身配狎之與之果藏日狎一日遂不我畏自此有小孩兒欲近之輒畏我去一日學獅子灍兒法勉在嶺南時人情未熟崖岸在不能使人狎無可親者

邀請過舟作禮揖上坐曰非我不能假借公知公有後約同謁撫院日總府備一舟裝齋飯果品如賓席裝不少假借旁謂武人何知破常格待善知識也最時奮自稱名某禀見乃得起去明日參謁復然竟一時奮自稱名某禀見乃得起去明日參謁復然竟一時不會直稱名某禀見乃得起去明日參謁復然竟一時不會超過,作禮揖上坐曰非我不能假借公知公有

命中天道全以勁爲用主施而不主受適合之也重別字說弓驰時附高哪下損弣補矟上下均停可以一門字說弓驰時附高而有餘殆下而不足則無用也別字說弓驰時附高而有餘殆下而不足則無用也別字說弓擊數戶思其合處不可得乃從他借一弓猶裝弓爭更數戶思其合處不可得乃從他借一弓

傲肯聊以相成也聽談促膝以別乃歎宰官中大有

深心人在何問武耶

佛出世之本懷及度生漸次方便之軌則也故今略

参巴下古本

孤坐舟中情景無聊輕重靜躁之解恍然目前始悟 本上語旨葢身試之而後見未可謂紙上陳言無真 太上語旨葢身試之而後見未可謂紙上陳言無真 大上語旨葢身試之而後見未可謂紙上陳言無真 方副之紙若涉思議即不中用

爲輕根一

二句亦稽數年不敢草草解正當南行之日

化生儀軌

本師釋迦文佛示現王宮出家雪山六年苦行悟道本師釋迦文佛示現王宮出家雪山六年苦行悟道本師釋迦文佛示現王宮出家雪山六年苦行悟道本師釋迦文佛示現王宮出家雪山六年苦行悟道。 漢果故今靈山一會一千二百五十餘人皆是外道 文德心當是時也有信佛者則歸依佛法依教奉行 之德心當是時也有信佛者則歸依佛法依教奉行 之德心當是時也有信佛者則歸依佛法依教奉行 其不信者則生驚疑乃至種種魔害毀謗避惡道者 其不信者則生驚疑乃至種種魔害毀謗避惡道者 之時智愚賢不肖雖有疑信之不一是皆不知我

謂要衆生知生死爲一大事也佛知見者乃衆生各 僧化生之法門非是一事一行一門而可入也故曰 述化生方便之次第使未聞未信佛法者知我等為 之設所謂小乘中乘大乘也至有不堪小乘之法者 知見使其悟入惟此一事更無餘事所云一大事者 方便有多門歸源性無二要之四十九年皆隨機大 之大法故將一乘法分別說三以此故有三乘漸次 以來貪瞋癡愛煩惱惡見迷之已深不堪頓示悟心 達摩西來然佛特爲此事而出世也爭奈來生歷劫 人心見性成佛而出世閒是則禪道悟心一路不待 死苦必以悟佛知見爲第一義如此豈非佛爲直指 各本有之佛性电由迷此佛性而成生死今要出生 小淺深之序所謂教不躐等也幸宜委悉勿謂常談 畜生之苦故日五戒不持人天路絕今爲佛弟子遵 則設五戒十善爲人天善果且免墮三途地獄餓鬼 一佛以一大事因緣出現世閒所謂開示衆生佛之

7

佛教以度生爲事業若不漸次方便誘引入道一旦

示之以大法則反使橫生疑謗自取三途之苦是以

醍醐爲毒藥矣乃不善導之過也故今遵

佛所制在家善男子名優婆塞善女人名優婆夷當

持五戒以修入天善果在家五戒者

一不殺生

二不偷盜 香淫 意致 蜀此 之来 六戒 報世 製取

者語 皆此 信戒 広威

此酒 戏能 政手 未述

右上五戒乃我 五不飲酒 來 智慧 歌班達藏 見超越越 之之

壽大富子孫家道豐盛文明特達之報凡今高官尊 因則不負此生免監惡道能感來世不失人身得長 佛出世初為世間在家之人特設此教令人依戒

當富厚豐盈聰明利達之人皆從修持五戒中來然

此五戒即儒門五常不殺仁也不盜義也不邪淫禮

王道者以五戒化人則無詞訟省刑罰家治而

風追

矣此吾

佛法全無好善之心而返生謗佛謗法謗僧之見是 佛最先所設化生之儀也今世俗之人不知

自甘愚迷自取苦趣耳又有一等之人雖能喫蔬

不知

佛法正修行路聽從無爲外道那人不敬 邪說盲盲相引相聚妄談以爲傳法全不知有正修 佛祖天地不孝父母不燒香禮拜三寶專一味邪

憐者即今奉 行路而返務佛法僧堅執不化此乃最愚好人是可

是非凡遇此輩即當開示令其捨邪歸正不但護佛 韶旨所當禁者是也唯願當世高明君子辯白邪正

法是亦有助於

王化也然學邪學正總是一念善心可惜不知是邪 而誤堕今若知非又何不捨彼邪徒而爲真正善人

篙

聖世之良民手

也不飲酒智也不妄語信也故佛法有裨

右上五戒乃佛教修人道之因果又設十善業道爲

人天之因果所言十善者

二口四惡樂謂妄言綺語兩舌惡口若斷此四名一身三惡樂謂殺盗淫若斷此三惡則名三善道

心善道

三意三惡業謂貪瞋凝若斷此三名三善道

實之行世人何故愚迷不知而專向邪道爲得豈不聖爲賢則定感來世生在天宮受勝妙樂此萬萬眞儒門正心誠意修身之道也若果能修此則現世爲則名十善爲生天之因是爲純善之人此十善法即則名十無爲生天之因是爲純善之人此十善法即則

辜負此心哉

如上五戒十善乃吾

失人天之福此金口所宣不妄之談若不遵此終總佛特為世別在家之人所設之教要人依此終因不

果是謂以苦捨苦吾

佛已深痛之矣今世閒五部六册之説乃外道邪人

愚民所謂邪道亂眞者即今妄稱師長偷竊佛祖言句雜集世俗鄙俚之言以惑

聖旨所禁皆此輩也在家之人既有好善之心何不

歸依

三寶而必墮此邪法豈智人哉

又觀今世好善男子已能歸依

起種種邪見全不信有因果罪驅甚至慢佛慢法慢師現成公案看了幾則記在胸中便逞利口動使機師現成公案看了幾則記在胸中便逞利口動使機師現成公案看了幾則記在胸中便逞利口動使機

三根不同故淨土九品亦因根有別也
明中峰諸大祖師非一人也但修行念佛有上中下
明中峰諸大祖師悟道之後回心向淨土者不少如永
知此門三根普賢無機不收最爲廣大县又簡而易
知此門三根普賢無機不收最爲廣大县又簡而易

所感各別試略言之便有餘土此即凡聖問居土且此三土修因不同故然淨土有三種者一常寂光土二實報莊嚴土三方

一常寂光土即圓覺經所云大光明藏此中聖凡平

者以十万佛土獨有娑婆爲穢惡土石諸山雜穢充

西花葉邊際故云過十萬億佛土之外與娑婆並列

下入設也

也 上 宣報莊殿士此即二十重華殿世界乃我 所居單為十地菩薩轉大法輪之淨士即二乘聲聞 所居單為十地菩薩轉大法輪之淨士即二乘聲聞 不見不聞此即法華會上諸授記之人待多劫修因 不見不聞此即法華會上諸授記之人待多劫修因 不見不聞此即法華會上諸授記之人,待多劫修因 不見不聞此即法華會上諸授記之人,待多劫修因 所不所感此中一分之淨土此殊非尋常易易可到

化故我

門名橫超三界以仗糧頭悟故設念佛求生淨土一糧迦文佛縱以十善化導入天亦在生死之中未出

耶然参禪了生死難念佛了生死易只要當人一念真實肯切苦心耳從古生淨土者無量無數皆世人真實肯切苦心耳從古生淨土者無量無數皆世人同自心不可謬信邪說也即在法門中有禪淨秉修信自心不可謬信邪說也即在法門中有禪淨秉修之士甚多如來明所說念佛參禪參禪念佛所謂有之士甚多如來明所說念佛參禪參禪念佛所謂有之士甚多如來明所說念佛參禪參禪念佛所謂有之士甚多如來明所說念佛參禪參禪念佛所謂有之士甚多如來生自迷本有之佛性麼落三界生死輪之一。

馬麥之難種種堪忍拌捨身命受盡無量魔怨之難。 一、年東與苦行修持乃至悟道成佛此乃是第一箇一、年東與苦行修持乃至悟道成佛此乃是第一箇一次年東與苦行修持乃至悟道成佛此乃是第一箇一次年東與著一條於常寂光土奧起大悲救苦之心論

市已惟此一事更無餘事故靈山會上弟子一千二 而已惟此一事更無餘事故靈山會上弟子一千二 在五十人皆一時英麗豪傑之士學佛所行各各捨 在五十人皆一時英麗豪傑之士學佛所行各各捨 不證阿羅漢果如阿難爲佛之弟亦隨出家隨衆受 死證阿羅漢果如阿難爲佛之弟亦隨出家隨衆受 不證阿羅漢果如阿難爲佛之弟亦隨出家 一千二

佛所度弟子出家之榜樣心佛在世時投佛出家之佛所度弟子出家之榜樣心佛在世時投佛出家之中正則設有二百五十戒女人出家名比丘尼則設此丘則設有二百五十戒女人出家名比丘尼則設此丘則設有二百五十戒女人出家名比丘尼則設成了主國王大臣宰官后士與在家出家人等進修菩薩大戒則有楚病於過過,

二十年未燕之福與後世兒孫故今之弟子供養四佛當壽百年以念末法弟子無福止住世八十年留佛當壽百年以念末法弟子無福止住世八十年留佛當壽百年以念末法弟子無福止住世八十年留

元。 心攀綠俗親出入不思不避職嫌乃至違法犯禁全 分者獨自可也況又全不知僧體不受戒行權放身 知者若是如此受用有能贏守戒行持經念佛守本 **拽耙銜鏡員鞍騰償之苦此其大家一齊迷悶而不** 得施主供養更不知施主信心膏血難消將來拖犁 備者竟不知 身始爲苦也總之不知僧爲何物耳故四十二竟經 憐愍者矣佛言三途地獄未是苦向袈裟下失却人 知有出家正修行路即有見者返以爲非此爲最可 敬奉三實之心絕然忘之混混一生醉生夢死全不 不知非者又非一種矣竟不知為何出家爲何捨俗 不知不耕不機衣食從何而來只道是自己有能化 何搖父母棄妻子蒯除須髮不在俗家而住寺中亦 菜分毫之施利皆 爲何剃除獨變也不但不知修行之事即燒香禮佛 事皆受用吾佛白毫光中一分功德即施主粒米墜 佛是何人亦不知已爲何事不知爲 佛所留之疆田今人在法門爲

佛言汝等此丘每於晨朝當自摩頭若肯自摩頭則

牛月牛月對佛誦念戒品有毀犯者對衆懺悔敗過

自新則身心清淨業障消除乃爲出苦之要也既能

檢閱不必細列既能受戒之後不論獨居隨衆定要

返省自己為甚無鬚髮也以不知佛法出家規矩故師不成師而弟子亦不成為弟子上下絕分鳥獸同師不成師而弟子亦不成為弟子上下絕分鳥獸同師不成師而弟子亦不成為弟子上下絕分鳥獸同三途之苦世閒以此習俗成風以為常事至有離鄉三途之苦世閒以此習俗成風以為常事至有離鄉有志之士各宜思省回頭當念生死大事痛敗前非有志之士各宜思省回頭當念生死大事痛敗前非受沙彌十戒若持十戒無犯則進此丘二百五十戒受沙彌十戒若持十戒無犯則進此丘二百五十戒受沙彌十戒若持十戒無犯則進此丘二百五十戒

持戒為修行之本則當親近佛法維不能出門他方持戒為修行之本則當親近佛法維不能出門他方理,所以是於此之。 一方淨土一門則以念佛為正行誦大乘經典或華嚴法 一方淨土一門則以念佛為正行誦大乘經典或華嚴法 一方淨土一門則以念佛為正行誦大乘經典或華嚴法 一方淨土一門則以念佛為正行誦大乘經為助行 一方時發願回向求出生死苦趣如此方不負出家之 於大因緣亦不虛度此生矣若有上上根人發心脫 一類單提一念更不外求此又最上一乘之根器志向何 發肯心定有發明了悟之時是在各人根器志向何 發情心定有發明了悟之時是在各人根器志向何 如耳如上所說持戒修行誦經念佛雖不能頓悟自 心亦不空過時光亦不負出家之緣耳若夫悠悠報 情至死無成可不大哀也哉空過今生墮落三途則 情至死無成可不大哀也哉空過今生墮落三途則

將來又不知何時出頭也

佛設教以戒定慧三學爲成佛之本所謂因戒生定

因定生慧是爲三無漏學其諸戒相具載戒經請自

有善道人天因果有惡業三途之因果一切諸法皆為小乘謂有三界生死之苦可出有二乘涅槃可求為小乘謂有三乘謂小中大初二十年但說有數名所說之法有三乘謂小中大初二十年但說有數名所說之法也然佛說法四十九年

木來二支果謂生老死憂悲苦惱緣者引也謂三世 明行現在五支果乃識至受現在三支因謂愛取有 輪週因果相緣引而有也以中根人觀此十二因緣 無明滅則十二有支齊滅爲還滅門逆順觀之則悟 有流轉還滅二門謂從無明至老死等爲流轉門若 藏藏綠名色名色綠六入六入綠獨獨綠受受緣愛 苦之法也名小乘教又有一等根器少利者名爲中 二有支此十二支該三世因果謂過去二支因乃無 愛綠取取綠有有綠生生綠老死憂悲苦慘是名十 乘即廣前四諦說十二因緣之法謂無明緣行行緣 法無我又有總相念別相念等觀此名小根所修出 背捨五停心觀調觀身不淨觀受是苦觀心無常觀 行之方法乃二乘人所修厭苦斷集墓滅修道謂八 死證此涅槃樂故謂實實有涅槃可證也道者乃修 之集可斷也滅者出三界外二乘偏空涅槃以出生 言此煩惱爲諸苦之因能招苦果故謂實實有煩惱 道四法也謂實實有苦可受集者貪瞋癡愛煩惱也 是實有故云四諦之法諦者實也四諦者乃苦集滅

要只在心經一十四行業已該盡心經一卷又單在 方便解然此空觀一門雖載八部般若乙中其實捷 **藝故菩薩利生以智慧為首所謂無慧方便轉有慧** 大乘之初門爲菩薩修行之妙法梵語般若此云智 成佛之妙門惟此般若經一部軍說一空觀故爲入 之空今此般若乃質相真空以佛說空假中三觀乃 若之宗極也以前二乘所執之空乃偏空所謂斷滅 **真空為極則淘汰前執有之見即如金剛心經皆般** 有見廣說六度乃至四諦十二因緣等法皆以般若 二十二年其經最多來此方者有八部般若共六百 果此六度法以般若爲主故佛第二時說般若經有 卷此經純談般若真空智慧破前二乘生死是樂乙 所修名為大乘若修此六度單為下度衆生上求佛 調布施持戒忍辱精進禪定智慧此六乃大乘菩薩 十年後機漸通泰方說大乘菩薩所修六度之法所 說二十年以根機鈍劣不堪受大故為權耳從此二 無生證辟支佛獨覺之果爲中乘之法也此二乘法

照見五蘊皆空一句巳盡其義此一句之中若下手

是薄常凡夫易說易行哉此一字法門是謂教菩薩門在吾佛直待三十年方說以此看來修心之法豈然禪門修行最初用心工夫只一照字即此一字法做工夫又只在照之一字而已此最簡最要之法門

乃大乘之法也惟

佛出世本懷直是要令一切衆生成佛更無別事即 一代教中總只說箇三觀若乃空假中道三觀 意只是三觀為成佛之本三觀者乃空假中道三觀 意只是三觀為成佛之本三觀者乃空假中道三觀 心一代教中總只說箇三觀若從前來說到般若方 也一代教中總只說箇三觀若從前來說到般若方 也一代教中總只說箇三觀若從前來說到般若方 是一人教中總只說箇三觀若從前來說到般若方 如今惡業凡夫口口談空妄說空法無佛無祖無色 如今惡業凡夫口口談空妄說空法無佛無祖無色 如今惡業凡夫口口談空妄說空法無佛無祖無色 如今惡業凡夫口口談空妄說空法無佛無祖無色 如今惡業凡夫口口談空妄說空法無佛無祖無色 如今惡業凡夫口口談空妄說空法無佛無祖無色 如今惡業凡夫口口談空妄說空法無佛無祖無色 如今惡業凡夫口口談空妄說空法無佛無祖無色 如今惡業凡夫口口談空妄說空法無佛無祖無色

> 大地衆生世界之假法乃唯藏所變之影如鏡中像 偏空故佛說般若真空以破執有之見故令觀般若 偏空故佛說般若真空以破執有之見故令觀般若 實相真空又有一類樂空增勝菩薩執但空而不能 實相真空又有一類樂空增勝菩薩執但空而不能 要現全是假法以此唯識法門和會空有要顯即空 之有即有之空直觀唯識以證真如此乃教前菩薩 出空入假度生之法門心故此一觀門在經有樂密 出空入假度生之法門心故此一觀門在經有樂密 然等經常說此經時在菩薩大根已能信受其小 根二乘畢竟不敢入俗利生故佛說維摩一經以淨 名居士示現處俗有妻子眷屬假託問疾因緣與文 名居士示現處俗有妻子眷屬假託問疾因緣與文 來對談不二法門以呵斥二乘激發入俗度生之心 殊對談不二法門以呵斥二乘激發入俗度生之心 殊對談不二法門以呵斥二乘激發入俗度生之心

祛二乘狹劣之見此乃吾

能堪已經四十餘年教化之功尚費如此方便離力意心是知菩薩涉俗利生之事誠非小根劣檞之所愧深慈大悲爲小根人種種方便權巧引入大乘之

說道動以向上一著爲已任蔑視正法不懼因果不如今現在五獨煩惱生死苦海之人口口談空談禪

人成佛一字令人動說超佛越祖非妄而何可不懼佛利生之方便權巧費了多少苦心不敢輕易說教

知繼已妄自狂誕之如此耶以觀吾

唯吾

。哉

經四十年才說破萬法唯識一句之義然猶未敢顕說了八箇字所謂三界唯心萬法唯識從初至此已佛出世說法四十九年所集諸經有一大藏始終只

前二空假泯絕二諦總歸一心然後圓滿一心融歸三界唯心法門直欲令人悟此一心以爲極則若攝大弟子已聞唯識法門故此以後乃說楞伽經顯示

示唯心之旨以唯心乃萬法之極則也從上以來諸

離名絕相張絕聖凡不屬修證階差顧觀藏性名為者名如來藏謂識藏即如來藏非空非有直指一心中道爲理究竟故楞伽經云寂滅者名爲一心一心

自覺聖智境界直離一

切攀綠妄心但了妄想無性

即悟無生是為領教法門達摩祖師傳二祖可大師以此經為心印故此經獨被上上根人其二乘絶分以此經為心印故此經獨被上上根人其二乘絶分成出凡聖路學是乃純以此經為宗極也此教乃設一心之極則已經四十餘年多方開示歷過多少法門今方說此經小根尚爾絕分而今之僧俗教眼末明修行無路盲然無知自己心中妄想攀緣全然不知起滅頭數日夜末嘗一念清凉即以向上擊心意識一著以為已任話頭亦未夢見便開大口說禪其自欺之心何如哉可謂大無慚愧人也可不懼哉且今不但俗人無知妄談即吾法門後學僧徒全末聞今不但俗人無知妄談即吾法門後學僧徒全末聞今不但俗人無知妄談即吾法門後學僧徒全末聞今不但俗人無知妄談即吾法門後學僧徒全末聞今不但俗人無知妄談即吾法門後學僧徒全末聞今不但俗人無知妄談即吾法門後學僧徒全末聞今不但俗人無知妄談即吾法門後學僧徒全末聞今不但俗人無知妄談即吾法門後學僧徒全末聞成之後之成之與之人也可不惟哉且以為足此又誰之欺誰之誤耶人也可不惟哉且

唯吾

易修不易悟也

佛過此四十年後方示一心法門足見法不易說不

佛世尊特爲一大事因緣故出現世閒一大事者所

以觀衆生根鈍不堪受此法故久默斯要不務速說 失譬如窮子久逃他國今始歸來見父亦信父家業 以理事究竟方盡一心之極則故諸二乘人到此始 華經示語法實相以顯事究竟此佛說法之次第也 說楞伽經示一心法門以為顯理究竟此後即說法 直至四十年後多方淘汰根機已熟且化綠將畢故 是楞伽所說一心名自覺聖智是也一向不敢順說 窮子衣裏之珠令其自知得受用耳然佛知見者即 子持珠作丐枉受辛勤故佛與同體大悲特特出世 之本懷故佛謂諸弟子一一授記將來必定成佛且 法華一經如長者委付家業之屬書乃佛利生究竟 原是已有心相體信堪紹家業故長者委付嘗謂此 信佛心決定不疑亦悟各各自已本有佛性一向不 而爲開示衆生本有佛之知見使其悟入猶如指示 云凡有聞法者無一不成佛此一大事因緣巳舉故 而爲妄想生死之知見歷劫以來迷而不知譬如窮 謂衆生佛之知見也以衆生本具佛之知見今迷之 爲終教過此不久即入涅槃然在法華一時已盡吾

> 利衆生之能事至此已畢故此即入涅槃也如上所 人不許成佛於此生疑故此經說闡提亦有佛性故 法華未盡之機以破前來弟子未盡之疑以佛說凡 佛出世利生之本懷至於涅槃一經顯佛性義以收 假廣額屠兒放下屠刀便作佛事此則的信凡有知 者畢竟成佛決定無疑如此方盡如來出世 有聞法者無一不成佛此恐弟子前聞闡提無信之 番化

說乃吾

佛出世一代始終化生之儀軌漸次修因之法門雖 **播障厚罪業根深不堪顧示大法故將一乘法分別** 想衆生本有佛性各各具足無不願成佛者但以 權顯實之教是知四十年前所說皆為權設故爲根 乘之權教楞伽法華乃一乘之實教故天台判爲開 說三此乃一乘三乘之所由設也故楞伽以前乃三 煩

機不等故也

此上所說順漸不一通為教義然楞伽順示一心為 如來清淨禪而教豈非禪宗也至若

世尊自云我四十九年未說一字末後拈花示案人

天百萬罔然不知獨迦葉一人破頭微笑
世尊乃云吾有正法眼藏涅槃妙心用付於汝是為世尊乃云吾有正法眼藏涅槃妙心用付於汝是為成佛謂之單傳法門故自曹溪以下二派五宗傳燈成佛謂之單傳法門故自曹溪以下二派五宗傳燈成佛謂之單傳法門故自曹溪以下二派五宗傳燈成佛謂之單傳法門故自曹溪以下二派五宗傳燈成佛謂之單傳法門故自曹溪以下二派五宗傳燈成佛謂之單傳法門故自曹溪以下二派五宗傳燈成佛謂之單傳法門故自曹溪以下二派五宗傳燈成佛謂之單傳法門故自曹溪以下二派五宗傳燈成佛謂之單傳法門故自曹溪以下二派五宗傳燈

那是見以為自誤非毀大乘了義為文字以致究竟 地以拈花為心要者以一心之旨難言說相離名字 故假末後拈花為遺執言說之習氣乃治執名言之 故假末後拈花為遺執言說之習氣乃治執名言之 故假末後拈花為遺執言說之習氣乃治執名言之 機化度衆生之方便各人妄執一端以為必當放執 佛化度衆生之方便各人妄執一端以為必當放執 佛化度衆生之方便各人妄執一端以為必當放執 大寶神神者非教然執教非禪者固已自誤而 教者非禪執禪者非教然執教非禪者固已自誤而 教者非禪執禪者非數於執教非禪者固已自誤而 教者非禪執禪者非數於執教非禪者固已自誤而 大寶神神教者又誤之更甚也以執禪者執愚自是妄 也以為所不具而

> 無成更可憐者觀今末法之世講席已微無大師匠、大遠之志以無明吸知識但只循情欺狂以致誤墮者多此可大為流涕者也且又有僧徒妄自以為悟。 道者誑惑世俗愚夫貪求供養有歸依者即開示參 運為向上一著有信之者話頭未熟妄想縱橫熱沸 便以印正以為有悟八處以致誤墮邪見如此為害 便以印正以為有悟八處以致誤墮邪見如此為害 便以印正以為有悟八處以致誤墮邪見如此為害 人甚多愚怠假若看教不能多禪與參禪之無決定 人甚多愚怠假若看教不能多禪與參禪之無決定 之請各自思幸無自欺自誤為望

便作用不同其行門亦非一種有專向上者有專功掩放發爲文章功名事業以爲外護法門者種種方塵勞之中而宿習一念般若種子光明透露不能自

行者有建立

室,不必定要简简多禪方爲正行耳然多禪雖妙其 下不必定要简简多禪方爲正行耳然多禪雖妙其 下不必定要简简多禪方爲正行耳然多禪雖妙其 亦不必定要简简多禪方爲正行耳然多禪雖妙其 亦不必定要简简多禪方爲正行耳然多禪雖妙其 亦不必定要简简多禪方爲正行耳然多禪雖妙其 亦不必定要简简多禪方爲正行耳然多禪雖妙其

得也如上葛藤乃至

化儀之餘

示宜華衆道人

而作供養求調開示略說法要一宿而行既而老人男子鄭紹楨等二十餘輩迎老人於經堂殷勤項禮老人於癸丑冬日自粵東杖策來南嶽道經宜章善

隱寓靈湖蘭若建諷誦

在家修行捷要老人因示之日宜章當深山僻地無為衆講說金剛般若隨喜聽聞大生數喜拈香請示華嚴道場乙卯夏六月紹慎等遠來瞻禮正值老人

善男子說此五戒即儒家五常仁義禮智信也故曰 六時中無論閒忙動靜將一聲阿彌陀佛持在心中 生咒定要念佛回向西方發願往生以此為定規二 生念念定要往生彼國親見 境緣不被打斷開眼合眼一聲阿彌陀佛明明現前 打成一片無有閒斷名爲一行三昧此念純熟一切 念念不忘心心不斷乃至睡夢之中亦不忘失如此 早晚要刻定功課或持金剛經或持彌陀經或持住 心深厭娑婆是苦志求捨難存想西方淨土蓮花化 月一兩會念佛幾千聲如此便作正行也第一要發 廣古今念佛得往生者甚多但以專精爲主不是一 佛種造地獄業只當專依 五戒不可聽信邪師邪教妄說法空撥無因果斷滅 五戒不持人天路絕是故在家善士應當奉持既持 精持五戒以爲正行此五戒者乃吾 善知識經過在家善信雖多未聞正法今衆等各宜 味以心佛爲正行然淨土一門接引衆生利益最 切世閒父母妻子種種恩愛妄想業念都被 佛教修西方淨土法門 彌陀以爲本願每日 佛專爲在家

> 豈有效職之時耶善男子等既發信心當行實行萬 稱土淨如此念佛如此用心念到臨命終時單單只 佛之效驗也如此精專若不往生則諸佛墮妄語矣 佛之效驗也如此精專若不往生則諸佛墮妄語矣 佛之效驗也如此精專若不往生則諸佛墮妄語矣 學不脫生死之苦高登極樂蓮華化生便是一生念 學不脫生死之苦高登極樂蓮華化生便是一生念 學不說生死之苦高登極樂蓮華化生便是一生念

勿自欺

涌泉寺湖心寺十二時念佛規制

佛說衆生生死長時以積日夜以至幼數輪轉不休佛說衆生生死長時以積日夜以至幼數輪轉不休佛說衆生生死長時以廣入故唯念佛一門最為捷要所。時說種種制心之法皆止輪之豐耳法門雖多以衆生垢重識昏難以攝入故唯念佛一門最為捷要所謂憶佛念佛現前當來必定見佛以衆生一切妄見。當念而至妄念日夜無閒斷時特以念佛斷之此遠

海而餘皆靜坐隨聞默念或習觀門願者隨之此則 呼相喚不昏不散入則動靜一如自他不二寤寐恒 靜多動少不繁不亂而佛聲不斷則妄想不生如相 大則堂多力發則堂一人亦如之但人不論多少均 得宜此又古今之良規也請益老人因爲籾立規制 法固綿密而動靜飲食似難歸一若調理有度設法 斷歲止三冬而入非一律亦難於長久頃雲棲力主 派六班畫夜班各二時照香輪流出班體誦行道鐵 條牒如左凡念佛會建立隨人隨願廣狹不一若力 庶事不繁而人心一致此乃後密妙行也乃爲之制 欠徽密今法師佛石玄津各簽心以十二時為請此 念佛雖日以四時然於夜有睡眠又費呼唤警醒法 佛爲行且以煉魔爲名則苦於鉗錘太緊雖日夜不 今之视念佛為末品豈真知也哉近代唯牛山以念 常此則不起於座頓見彌陀是爲第一如意妙行至 十人稱高賢十八而已斯則眞實念佛者又不多得 公之匡山蓮社六時刻羅所由作也是時社中百二 若飲食亦宜如法調之務使內外一如則人我兩忘

前驅他日觀聽者衆必處處建立而淨土將偏震日人深思此法愧脚跟未措尚未遂心故特示之代爲是非俱泯而道場之安恬寂漠亦無如此之妙者老

矣是有望焉

障復還自心之本體故名為證非離修外別有證心版一心以建立萬行以萬行還證一心故云無不從此法界流無不還歸此法界原夫法界不屬迷悟聖此法界流無不還歸此法界原夫法界不屬迷悟聖此法界流無不還歸此法界原夫法界不屬迷悟聖此法界流無不還歸此法界原夫法界不屬迷悟聖此法界流無不還歸此法界原夫法界不屬迷悟聖此法界流無不還歸此法界原夫法界不屬迷悟聖此法界流無不還歸此法界原夫法界不屬迷悟聖此法界流無不還歸此法界原夫法界不屬迷悟聖

聖逾遠衆生垢重積迷逾深既無了悟多究之功又淨土中人尙謹遵而力行之況其他手嗟哉末法去華三昧猶尊懺法爲妙行設有儀軌即死明大師乃繼悔業障爲前列也是以從昔以來若天台親悟法

華嚴法界圓宗尊普賢爲毗盧長子而十種願王以

以心難悟故設觀以通之障難除放設懺以淨之即

是以佛祖教人修行之訣必先了悟一心淨除三障

. . .

A Banen full tell bis rists until meets

徽法遵法華鐵儀餘則日披宗鏡錄了悟唯心疑則 覺之軌則誓爲長期歲分四時每時發二十一日爲 木之閒者非無因也今諸緣小集公顧賜明宗鏡之 **地公能力起而恢復之大師之眉光復放於山川草** 禮其塔是豈往曾親近爲侍者乎大師塔巳湮堂巳 於其寺薙變之日即問大師之名何如人遂發心願 證其以入期之衆爲表率將引本山弟子爲禪難調 爲衆發明的旨不假枝葉但取直捷爲本參冀其實 目精懺悔修證之業將結眞實法侶一十二人效圓 過而問焉者乎茲玄津壑法師乃其的嗣自幼出家 實證唯心者乃其人也今也其書現行堂具存熟能 世時則冥府帝君圖其像以瞻禮之以其行超生死 萬部秉天台法華鐵儀依法修持率以爲常故現住 之幽邃學者苟能親習則徹見自心不族更悟證入 師鎔一大藏歸唯心之旨著書百卷名日宗鏡至今 之要無出此矣大師生平自行日課誦念法華經一 堂存淨慈其書廣明一心如揭日月於中天朗萬法 乏鐵摩梅罪之行將何法可望出生死乎唯永明大

> 果交其結制規約因事施設務簡而易行真而無偽 以發實地然四事所需力不自持以安居不能效如 來逐日行乞之軌又不敢觀天人爰供之儀而聚名 取實發心供給則有望於發心之植越今有居士譚 武怕力任先登則一切有緣雕不數呼響應矣以諸 法從緣生佛種從緣起是則今日之緣雖近而威佛 之遠蹈實借此爲最初之方便也諸人聞而數喜遂 之遠蹈實借此爲最初之方便也諸人聞而數喜遂 改選罪之財而養定慧之命諸有智者何慮而不爲 以滋罪之財而養定慧之命諸有智者何慮而不爲 以滋罪之財而養定慧之命諸有智者何慮而不爲

憨山老人夢遊集卷第四十六

討論無停暑故證動一時予以就枯禪遙謝筆硯

納城爲潮音以參謁爲禮誦以諸魔爲眷屬居然

大道場也故其所說若法語偈讚多出世法而詩則

孟以長戈爲錫杖以三軍爲法侶以行伍爲清規以

佛事乃以金皷爲鐘磬以旗幟爲幡幢以刀斗爲鈢

遂成楞伽筆記執戟大將軍轅門居堡壁間思效大

慧冠巾說法構文室於穹廬時與諸來弟子作夢幻

林雲遊及守寂空山盡睡舊習胸中不留一字自五

與雪頂創起雪浪刻意酷嗜過歷三吳諸名家切磋

参巴下古本

窓山老人夢遊集卷第四十七

通

加

編輯

福

善

日鋒

夢遊詩集自序

劉起相

重較

> 至之東海二十年中時或習氣猛發而稿亦隨東年 五十矣偶因弘法權難 詔下獻濱九死既而蒙 思放嶺海予以是為夢墮險道也故其說始存因見 古詩之佳者多出於征戍覊族以其情眞而境實也 古詩之佳者多出於征戍覊族以其情眞而境實也 大禁覺範二人在明則唯予一人而已谷泉卒於軍 中所傳者唯臨終一偈曰今朝六月六谷泉受罪足 中所傳者唯臨終一偈曰今朝六月六谷泉受罪足 大於禪語有宗門武庫覺範貶珠厓則有楞嚴頂論 發於禪語有宗門武庫覺範貶珠厓則有楞嚴頂論 發於禪語有宗門武庫覺範貶珠厓則有楞嚴頂論 一人所見谷泉卒於軍 其詩集載亦不多顯予道塊先德所遭過之而時且 其時集載亦不多顯予道塊先德所遭過之而時且

專為隨俗說也雖未陞法堂踞華座拈趙堅拂而處專為隨俗說也雖未陞法堂踞華座拈趙堅拂而處塵勞混俗諦順入不二法門固不減毗耶特少一散化天耳其說不純以對機不一乃應病之藥固無當於佛祖向上關其實為上下千載法門一段奇特夢幻因綠及蒙賜還初服之南嶽匡廬又若夢遊天姥幻因綠及蒙賜還初服之南嶽匡廬又若夢遊天姥幻因綠及蒙賜還初服之南嶽匡廬又若夢遊天姥幻四綠及蒙賜還初服之南嶽匡廬又若夢遊天姥幻四寒空鳥跡秋水魚蹤若以英字語言求之則暫之如寒空鳥跡秋水魚蹤若以文字語言求之則暫之如寒空鳥跡秋水魚蹤若以文字語言求之則暫之如寒空鳥跡秋水魚蹤若以文字語言求之則暫之如寒空鳥跡秋水魚蹤若以文字語言求之則暫之如寒空鳥跡秋水魚蹤若以文字語言求之則暫之如寒空鳥跡秋水魚蹤若以文字語言求之則暫之如寒空鳥跡秋水魚蹤若以文字語言求之則暫

征途述懷十章章四句

我心如織五日亦可冷風亦可繁憂從中來不知所矣懷人夜以達旦四誰云滴水可以穿石執云忘憂充飢我豈無心彼何人斯三紫芝英英白石燦燦邈流白日如矢遐征不歸誰其念只二濯杲洗耳采薇矯矯冥鴻載飛且鳴哀哀求侶悲此遠征一火雲若

感時詩十五章章四句有序

脈百僚仰德各捐俸一年以助 背所未有感之以夕有司請告 皇慈愍之內外公府齊發金穀出與聞四方連年水旱加以蝗災民生惶惶朝不待

Ħ

市場時若以哀其民所施逾博九報功之資上天所上天好生胡爲其您斯民建安易爲不然一滔滔洪小里就爲崇甚矣四蝗飛蔽天胡爲而然喽膏食脂此旱魃爲崇甚矣四蝗飛蔽天胡爲而然喽膏食脂性民睊睊五民之所親食逾父母易子而食斯言良性民睊睊五民之所親食逾父母易子而食斯言良性、土天好生胡爲其您斯民建安易爲不然一滔滔洪上天好生胡爲其您斯民建安易爲不然一滔滔洪

司匪口同胞執能界之十邀矣上古嘉禾自生哀哉

往矣不可挽也民生苦矣不可錢也去 主靈循植不登十蠢蠢之生子是同之皇皇上天子 共靈之十 安得地肥不勞民力。安在軒皇任其食息共靈之十 安得地肥不勞民力。安在軒皇任其食息

対化紙如斯榮辱何憂喜顛倒任空華喜視此而已 美惡不足稱是非安可擬仲尼重知命老聃貴忘已 美惡不足稱是非安可擬仲尼重知命老聃貴忘已 美惡不足稱是非安可擬仲尼重知命老聃貴忘已 大塊總微塵滄溟一滴水茫茫宇宙間代謝無停止

君

一人坐一華左右相追随光明暎日月彈指超僧祇如食金剛屑終竟選出皮此士多蓮華衆妙香芬披化為香積飯轉作淨土資拈來信口後一飽忘百飢塵陵一粒米價重過須彌須彌尙可碎此粒無壞時

華中少一人悠悠勞我思

艦陵喜再逢王塘南獨有引

又過半矣宛然在昔以爾精心白業色若嬰兒感余二十五歲會遊青原晤爾時年五十今復晤之

故念今喜而賊贖

與君雖別雖恰是相逢處不離五蘊身便是清淨土打破類伽叛即見華中主心想入蓮華音聲出天皷端坐七實臺經行衆香樹也想入蓮華音聲出天皷端坐七實臺經行衆香樹之也不能五蘊身便是清淨土打破類伽叛即見華中主人五人生一百歲四分二十五初逢半之半再會十之五

六詠詩

心

龍王取爲珠照破諸黑暗轉輪得如意能教一切難金翅鳥命終骨內盡消散唯有心不化圓明光燦爛

無無

如何在人中日用而不見

智眼明見人此外何所慕聖凡皆過客去來無二路是生不是生非新亦非故法性本無常亦不墮諸數譬彼空中雲當體即常住

艺

水盡火復然念幕何慨慷及至醒眼觀向者誰悲傷夢入大火聚怕师多障惶正當苦惱時滴水便淸涼

空

劫火洞然時此箇壞不壞何必待燒盡然後無障碍須彌橫太虛大地浮香海六廛蔽性天四大遍法界

生死

若實不隨者安肯隨他去唯有不隨者誰能識此趣

一水作衆味酸酯苦辣具以本淡然故而能成衆事

諦視流轉性流轉當下止不見流轉心是員出生死生死不流轉流轉非生死若實不流轉生死無窮已

苦熱行

譬若火浣布得之愈增光視彼區區者。錯然誰敢當 人世苦炎熱余心何淸凉直以無可屬故能安如常

月夜過三峽

懷淨土詩四首

來苦集微驅臭廣搏青蠅憤情不自知營營竟朝昏 東漢田以虧汨沒疲精神安能滌情垢一旦返而真 長揖大火宅從此謝囂塵逍遙淸淨土其樂方無填 長揖大火宅從此謝囂塵逍遙淸淨土其樂方無填 長揖大火宅從此謝囂塵逍遙淸淨土其樂方無填 天人曾集會光明相暎奪園林敷雜華空中散天樂 來鳥相和鳴法音恣宣說凡情一經耳來若當下脫 聚鳥相和鳴法音恣宣說凡情一經耳來若當下脫 聚鳥相和鳴法音恣宣說凡情一經耳來若當下脫 一經樂本非遙駕言十萬億但能一念淨獨目現前是 一經樂本非遙駕言十萬億但能一念淨獨目現前是

釆珠行

愚者執爲眞逐境勞欣感達人實期照了問淨陳習

悟承不迷靈淵常湛寂願乘白毫光端居極樂國

情想本無端苦樂非預設婚彼時空雲倏忽多變滅

苦因惛愛生樂從清淨得醫若夢中人實賤匪外兒

誰知微密中淨穢苦樂具試觀空中華起滅了無際

灼灼明月珠產向深淵底從空掛號之魚龍盡驚起

顧祝吾皇壽量同東海水 罷此批爲役聊以釋附評滄海不揚波溝濱淸廛滓 展轉濟孤貧利樂無窮已用實戰勝功傳為灌頂礼 神光發中夜龍觀大欣喜七實隨所求四時盡豐美 盡剖蚌蛤腹不補蒼赤髓安得如意珠持歸報天子 密網垂天雲輕帆展鵬翼一 **鮫人相抱泣洒淚忽成雨腥風撲遠岸鯨波奔萬里** 擊川后愁再擊海若徙

變化無端倪驢吸作雲兩膏澤潤蒼生滂沱霑下七 條忽逼九垓頃刻被寰宇豈若沙中蟲與物同臭腐

腥膻徒自矜皮毛甘可服何如偃虱安飲河期滿腹 長嘯發山空悲風振林木颯颯秋雨寒凄凄夜鬼哭

贈曹溪行脚僧有 引

順且自號爲曹溪行脚僧感而賦贈 南韶觀察祝公下車之初痛念粗庭荒廢極 总整

曹溪行脚來元自曹溪去久假而不歸忽憶曹溪路 摩宇官身依然無所住任運大化中權藏安能護

> 誰知先後身主賓自相顧願執溫和鞭長驅白牛步 穿破澗底雲踏乾草頭露瓦礫盡生輝靈源永不渦 **魍魎順潛蹤龍蛇喜交錯經行寂滅場往來憑杖履** 三車隨所施諾子忽驚怖一喝泣鬼神片言逐狐鬼 椎碎墜腰石打開寶藏庫擬出如意珠獨誇長者富 況見昔時人凄然瀝情素提起屈眴衣宛若初分付 隨綠到故鄉萬山滿烟霧未入曹溪門此心巳如故 酒記別時言·菩提本無協以是不迷人獨目多感悟

豫董國博崇相過訪曹溪

君向曹溪來直入曹溪路溪上忽逢君乍見巳如於 高懷皎氷雪清言振金玉俯視六合空長驅千里步 藏事事遠遊理冥無去住把手送君行溪橋獨延位 一笑心眼開主賓忘禮數促膝坐更深歷歷披情素

以此

綠槐社諸子過訊予時掩關未而而去示之

賜法侶喜相過高懷發幽秘洞見未語心直達 意何必問毗耶此中莫不二 炎炎火宅中一片清凉地雖從長者施實係 君王

董太史左宰寫山圖贈子乙雷陽賦答

寒熱本無腦,南北任去住隨地足清涼此中何所慕 五臺三伏天江南臘月樹孤蹤空裏雲餘生草頭露

デ月五十八月目1十七尺で、丁見母ラブデラー、癸卯初度自五羊之曹溪舟中作

天際望長安寒空一回首回首問時人離是儂家友世紀空裏花毀譽鏡中醜不推羊鹿車喜隨牛馬走世紀空裏花毀譽鏡中醜不推羊鹿車喜隨牛馬走世紀空裏花毀譽鏡中醜不推羊鹿車喜隨牛馬走一時鬼座不容中流非所守來往任風波去住絕偕親

遊方廣寺

休息芭蕉身涕唾空華事從此謝塵氣永絕生人累假絕世間心莫問西來意安能結枝棲以滿居山志願坐青蓮華順入清涼地流泉和松聲如對談不二朝披南嶽雲暮宿方廣寺岩嶤一徑深千峰鎖幽秘

遊南嶽登祝融峰

自愧無羽輸況爲形纏牽頃踐故人約始得恣遊盤我懷南嶽山夢想四十年天際七十峰居常在目前

順成七寶土遍地敷金蓮一觀空中雲普集諸聖賢身已入空虚足底浮雲烟若御冷風去從此程塵寶身已入空虚足底浮雲烟若御冷風去從此程塵寶身已入空虚足底浮雲烟若御冷風去從此程塵寶点枯發靈茅法皷醒瞑頭如何獅子窟今令狐兎潜焦枯發靈茅法皷醒瞑頭如何獅子窟今令狐兎潜焦枯發靈茅法皷醒瞑頭如何獅子窟今令狐兎潜無枯發靈茅法皷醒與頭如何獅子窟今令狐兎潜

別南嶽山人鄭慕

我從曹溪來擬向山中老山靈不我欺滿目雲霞好趣也高尚心虞能謝紛擾蓮華社未開又取東歸道幸遇後靈人相期出世表欲與坐深嚴立言窮要眇幸遇後靈人相期出世表欲與坐深嚴立言窮要眇幸遇後靈人相期出世表欲與坐深嚴立言窮要眇幸遇後靈人相期出世表欲與坐深嚴立言窮要眇幸遇後靈人相期出世表欲與坐深嚴立言窮要眇。

從南嶽東遊江上留別方覺之

別衡山解嘲

試問山中人靜縛何時了打破琉璃瓶始識隨綠好大人一條人欲恣幽討適來即便去返遺山靈說解來既已遲言別亦何早我本山中人丘壑宿已飽歸來既已遲言別亦何早我本山中人丘壑宿已飽歸來既已遲言別亦何早我本山中人丘壑宿已飽

奉旨不奉甘問冷不問熱劈破娘生面乃見不生滅 因思母子情念念不相隔今歸承歡顧恰似未會別 匡鷹一片雲峨嵋千尺雪箇是行脚心去來水中月

武昌逢石浪岷嶽二禪人還蜀省親因示

方是行脚人到家之時節

示聞子與病中

一念了無生四大各歸一求我不可得病從何處愈求出苦万便養劍急揮斥斬斷妄想絲根境當下寂求出苦万便養劍急揮斥斬斷妄想絲根境當下寂壞出苦万便養劍急揮斥斬斷妄想絲根境當下寂病從有我生我因煩惙集煩惱癡愛滋生死輪不息

歸匡山有引

垂老方遂志拂袖歸匡廬一超濁世綠來念悉已枯一章隨天風飄飄任所如歷覧周八流險阻非一途一章隨天風飄飄任所如歷覧周八流險阻非一途

眉目時相對嘯傲多歡娛明月有時來一鏡懸空虚 千峰抱幽壑邀與人世殊七賢列雲中五老頻招呼

了知幻化綠胡爲有生拘從此脫紛糺高登常樂都 顏然踞石牀日夜雙跏趺返觀未生前本來一物無 顏然踞石牀日夜雙跏趺返觀未生前本來一物無

医鹰列雲霄江湖巡天際地湧青蓮華枝葉相鮮麗 医鹰列雲霄江湖巡天際地湧青蓮華枝葉相鮮麗 医女中雲隨風至吳會東南美山水醒藉多佳士 一見素心人精神恍如醉未語肝膽傾淸言入微細 相對形骸忘了然脫拘忌精白出世心太虚信可誓 苦海方洪波願言駕津濟把別向河梁遂我歸山志 長揖返匡鷹藏蹤杳深邃五老與七賢日夜常贈對 談茅臥空山烟霞爲衣被視此芭蕉身一鄭如葉涕 都想未歸人馳情勞夢寐安得駕長虹凌風倏然至 暫謝塵世緣入我眞三昧

歸宗登金輪峰禮舍利塔

身一入空虛諸想頓消歇遙念救世尊法身遍一切萬壑吼長風吹落天邊月夜靜俯下方燈火自明滅我登金輪峰一覧乾坤窄衆山如蟻奔彭湖小如標

楚字如雲興四衆增歡稅始知淨穢土轉變隨心別 是感大丈夫建利捨居宅遂爲光明幢法緣從此結 是感大丈夫建利捨居宅遂爲光明幢法緣從此結 是感大丈夫建利捨居宅遂爲光明幢法緣從此結 是成五礫叢林遺斧斤孤松獨挺特 根株中剝斷枝柯將夭折何期至人來呪願施膏澤 以此下重與法雷懷前哲皮骨日夜長密茂返生色 以此下重與法雷懷前哲皮骨日夜長密茂返生色 以此下重與法雷懷前哲皮骨日夜長密茂返生色

東林懷古

世界刻蓮漏清修體六時淨念絕應想極樂為歸期 高風振千載翹首結遐思光容如在眼夢寐相追燈 垂老始攀陟撫景增餘悲荒林翳頹垣草莾重紛披 ず何三笑處莓苔露華滋影堂別羣彦彷彿見芳規 可陵有遷變至道無敗移師有未了願重來亦何遲 開林儻如初高蹤尙可追山靈久呵護神運常在茲 我已畢命待濁世從此辭

感遇詩奉酬南康袁使君有引

凡在指顧閱鮮不爲生計千里坐春風光村無犬吠 斯民若嬰兒憨母相盼睇吐哺不吸甘調劑剔所忌 法雨潤焦枯甘霖澤羣产一片金剛心廣布如大地 天假至人來黑山親授記示現率官身隨緣作佛事 憶書龍象傷法幢列如市晚彼棲賢老舌根如鼎沸 往多冷霞人概形養幽秘一自遠公來開林結真契 况復野干鳴難同獅子戲鐘磬寂無聲山空神鬼泣 **寶增鹽荒樣諸天委荊刺長者一莖草雖拈未見諦** 抬**起空拂間直**指西來意誰知千載下造化潜更替 高賢集如雲清修期出世山色暎湖光人境兩相媚 **匡廬高入雲乾坤鍾秀氣千峰列重霄靑蓮擁天際** 頓置含菌氓嚴在葛天氏政暇多幽況尋山探靈異 心承惠寺記一言足垂千載勒石告成俚言致謝 賢古利久堕荒榛一旦舉而新之又架爾雲橋以 濟險道此名山不朽勝事法雲開創實感護法精 斯民戴德即嚴穴之士嚴若竭居白毫相中也棲 九漈袁使君治郡南康匡南湖山盡歸化育不 唯

> 不日梵宮成恍忽如天至神力尚有餘莊嚴若未備 不日梵宮成恍忽如天至神力尚有餘莊嚴若未備 和懷利濟恩豈特居方內每接欬唾餘玉屑運肝肺 琉發勒佳章片石鍾鼎寄功德載名山匡君應列配 或交勒佳章片石鍾鼎寄功德載名山匡君應列配 或交勒佳章片石鍾鼎寄功德載名山匡君應列配 。 應此希世緣短吟寫胸臆願言保遐齡永錫天人類

有所思

君容如滿月使我一見開心顏。我们如環之無端舉首望長空長空杳無涯揮手與君一別數千里思君不斷如流水流水東馳去不與君一別數千里思君不斷如流水流水東馳去不

想侯生畵山水謌

門却掃梁內不足烟霞飽含清墨汁當醍醐時人却一九生空中麋鹿時時走暗裏山靈夜夜驚遭長閉戸神風流足可稱癡絕一室懸磬冰雪清烟雲時向毛候生資壓夷門客執轡何人過其宅獨有丹靑思入

怪形容好類年甲子六六支居間一年常苦飢尺布 斗栗博美酒清泉白石令人區有時獨向街頭立見 人术語先羞澁都言窮骨軟如泥誰信剛腸勁似鐵 三江五湖波浩蕩千巖萬壑爭奇狀閒披絹素淡揮 三江五湖波浩蕩千巖萬壑爭奇狀閒披絹素淡揮 香一齊撮在眉尖上入山尋討橛木株松下一員物 我爲奚蠹留君且向山中臥白雲片片青天幕渴飲 我爲奚蠹留君且向山中臥白雲片片青天幕渴飲

墨花精舍歌雕祇園逸史杜將軍韜英 學容儀光照黃金色此花不是等閒開千年一度方身容儀光照黃金色此花不是等閒開千年一度方身容儀光照黃金色此花不是等閒開千年一度方身容儀光照黃金色此花不是等閒開千年一度方界隨心至或現天大將軍身威風八面如天神萬里界隨心至或現天大將軍身威風八面如天神萬里界隨心至或現天大將軍身威風八面如天神萬里

心花作園林功德事將軍用武不難禪精舍小築祗院置。但香州國際四來意見色聞香法界空當場戰人三摩地氣溫造化花中主文彩經橫遇今古陽春號令發雷霆風雲變態驅龍虎園林廣大花無恙精動眼聽何如耳見真我亦祇園花下史時時灌溉禪那水五蘊蔓草久芟除四大幻身沒依止拋向炎流動眼聽何如耳見真我亦祇園花下史時時灌溉禪師歌布變湯爐炭無囘互忽見花間舊主人寄聲莫忘來時路

木菴歌有引

海東國同坐枯木卷南東居士有贈因戲書之海東東東國同坐枯木卷南東居士有贈因戲書之海東東東東河遊新望之若杌不足取就之枯槁如真海乾與爾同坐枯木卷。

鳥夜啼

恨遺終天啼鳥啼鳥真可憐虞人忽死鴟梟歌明明兩不全況復母死歸黃泉啼聲不絕如杜龍令子抱足食何事綢繆日夜求返哺不遂情何極母子分飛棲飢不得食情慘悽虞人網羅亦何密飢鳥之肉不寒林積雪白日西慈鳥啞啞枝上啼鴟梟在巢未敢

遊浮山歌

天道何昭然

不得潜身順入一級塵何人於此知消息 不得潜身順入一級塵何人於此知消息 不得潜身順入一級塵何人於此知消息 不得潜身順子 一葉浮空都是寄不若快便早歸如何捨此從他去一葉浮空都是寄不若快便早歸如何捨此從他去一葉浮空都是寄不若快便早歸不得潜身順入一級塵何人於此知消息

婚板漢歌有引

徑山法窟自大慧中**奧臨濟之道相積**慧命代不 之人近來禪門寥落絕響久矣頃一時參究之士 之人近來禪門寥落絕響久矣頃一時參究之士 坐滿山中至有一念瞥地當體現前得大自在者 坐滿山中至有一念瞥地當體現前得大自在者 必寒運皎月靜夜鐘擊隨叩擊以無虧觸波瀾而 如寒運皎月靜夜鐘擊隨叩擊以無虧觸波瀾而 不散猶是生死岸頭事所謂荊棘林中下脚易夜 作況有未到瞥地偶得電光三昧便以爲奇特不知返 住況有未到瞥地偶得電光三昧便以爲奇特不知返 華影子者乎此參禪得少爲足古今之通病也恐 落世諦流布疑誤多人因有請益者乃笑爲糟板

漢歌以示之歌日

身散影百千億從今不入死生關

為者耳根寂滅心不生看來盡是空中假妻子對面高道人一念如冰井市聲喧闌奔萬馬日夜不休何火宅炎炎夢未醒塵中一片清涼境但見燎空烈焰

如化人返觀亦似鏡中身終朝相見不相識兩眼何 處容纖塵有時神遊華藏界揮毫一瀝胸中塊 两善 處容纖塵有時神遊華藏界揮毫一瀝胸中塊 两善 處容纖塵有時神遊華藏界揮毫一瀝胸中塊 两善 原語方丈一室無壁落量含法界同寥廓十方海會 開語方丈一室無壁落量含法界同寥廓十方海會 別面室居不出不入不來往問君此際心何如

從軍詩有引

題屬秋濤怒人斬厲鬼靈從來皆頂跡今日更飄萍 楚澤非炎豫行吟愧獨醒瘴烟千瓣黑宿草四時青

火宅離堪避清凉自可求天低幅近日樹老不知歌

末路隨蓬累殘生信馬蹄那堪深樹裏處處鸛鴣啼 皇天無不覆豈獨外遐流曲折吾生短驅馳世路長 沆瀣餘三島炎蒸厲百蠻天南囘首處落日是長安 出世還行役誰悲道路難長戈聊高錫短蹇不勝冠 毒霧熏心醉炎風透骨蒸翻思舊遊處嚴若履層冰 遠道經行地孤雲獨可憑有家俱是客無累即爲僧 舊說雷陽道今過電白西萬山嵐氣合一錫瘴烟迷 海月心何寂空雲思欲浮却憐無住客今復寄炎洲 **客年從白業垂老脫緇衣豈是君恩薄多應世道遠** 萬里同明月千山隔厚烟塞鴻書縱寄不過雁峰前 昔住清凉界今登熱惱天燠寒風氣別南北地形偏 吃食愁蠻語安禪喜俗僧降既空說劍今日始先登 行脚原吾事擔签固所能心懸萬里月肩荷一枝藤 震泊還臨侶棲遲憶鹿羣誰知逃世客臨老學從軍 烟霞行李少冰雪眼中稀莫問前途事家山到處歸 但知心似雪忽覺養如霜隨地堪埋骨君恩語可忘 陳起占天候星河曙色分潮吞丹鳳日山吐毒龍雲 此日天涯道艱虞祗自憐海風腥釀雨山氣毒含烟

> 是路從人後衝泥向馬前始知行役苦多在成兒邊 整門養育 大學世甘為客勞生恨此身舌存終是苦道在豈稱 大學世甘為客勞生恨此身舌存終是苦道在豈稱 不是 表熱三秋日心寒六月霜所經如蹈變安敢任陳在 表熱三秋日心寒六月霜所經如蹈變安敢任陳在 是熟三秋日心寒六月霜所經如蹈變安敢任陳在 表熱三秋日心寒六月霜所經如蹈變安敢任陳在 表熱三秋日心寒六月霜所經如蹈變安敢任陳在 表熱三秋日心寒六月霜所經如蹈變安敢任陳在 表熱三秋日心寒六月霜所經如蹈變安敢任陳在 表熱三秋日心寒六月霜所經如蹈變安敢任陳在 表熱三秋日心寒六月霜所經如蹈變安敢任陳在 表熱三秋日心寒六月霜所經如蹈變安敢任陳在 表熱三秋日心寒六月霜所經如蹈變安敢任陳在 表述, 是路後人後衝泥向馬前始知行役苦多在成兒邊

獨坐

碧海飛涼月青林散曉風胡牀箕踞坐瀟洒意無窮浮世吾身外勞生逆族中誰能一隻眼豁盡十万空

碗歸魯門

混俗希忘象臨戎想收羝前驅到忍草左裡投俸黎

落日江容弊歸雲樹色迷行殿同倭鳥漸漸向人低

庚子說即事四首

生事人甘訊于戈鼎沸騰金珠欣積累菅草畏追徵 滿目黃塵暗披肩短髮垂江湖歸路杳鷃驚傍人疑 國是誰堪定天心未可憑南熏何日奏一爲洗炎蒸 康濟思今日安危望此時從來貂珥重寧不愧恩私 帝聽懷柔遠王師耻戰爭蠻夷應繁長不見請長櫻 清海初政捷珠星始罷征劍門飛赤羽閣道走差兵 遠探機龍窟深批弱木枝乾坤聊俯仰愁絕一雙眉 豹虎中原遍星軺日夜雕韶無哀痛字人有向隅悲

客路浮雲外歸心落日前吾生猶未已江漢是餘年 萬聖奔流下千山紫翠遊帆飛三峽兩人入九秋天 宿清溪驛夢得草蟲鳴斷岸沙鳥宿寒汀之

草蟲鳴斷岸沙鳥宿寒汀最惜飄零者浮生夢未醒 遡流遵遠渚旅泊傍孤亭月隠山容淡魚潜水氣腥 關朱权祥惠斑竹禪几 句因續成詩

細拭含湘淚糟裁泣楚文最宜調病骨從此絕廛氛 牛杨供禪寂支願臥白雲虚心偏愛我高節獨贊君

林参軍從余人山

我馬身經老風烟費已班骨披仇鐵甲心冷愛青山 木札禪離味茶香事儘閒白雲欣共住肯放出松開

重修曹溪採木入山

竹樹連雲長田疇逐地開誰知五嶺曲亦自有天台 一水紫紆入墓峰夾岸迴人疑秦代住僧似竺乾來

百尺由萌蘗孤根出草茶歷窮烟瘴苦聽盡鶴聲哀 用大應非折裁成豈是災祇憐今夜月空自照每苔

小金山坐月

世界平如掌江流淨似空應憐驅逐者俱墮法身中 藏海浮香刹華幢河梵宮青螺呈實籌備月現窓容

荒途無遠近曲折似兼程地逐河流轉人依鳥道行

腰沽道中

雲間孤鶩沒木末片帆輕回首長安路難聞塞雁聲

太平驛

面熱擯椰醉神昏海霧腥孤城笳數動悲壯不堪聽,策馬望郵亭長途舊所經終朝嵐氣白十月燒痕靑

現 行

野燒運奮臺邊烽暗戍樓孤雲聊淡位瀟洒竟如浮殘月掛城頭征笳慘客愁北風吹短鬢凉露溼重裘

化州道中

林深減虎豹天遠擊鸇鷹何事風塵道驅馳一老僧崗巒盤廣漠曲折不知層夾路疑函谷居人似武陵

化外

邁鷹今日事冰雪一生心縱有多天木難同戲樹林孤征過萬里道遠憶逾深山色蚺蛇氣人言鴂舌音

石城

飢驅忘力倦欲速較途黔薄暮投山館安眠似到家行穿窮谷口樹杪見天涯野曠留殘照城荒帶落霞

横山堡

民生空歲月時序失寒温莫謂天涯遠扶桑近日職

至數官

遠山低並樹大海立齊天望若垂雲翼帆開擺實船修途煩足力廣衍入平川地勢南浪盡珠光北斗連

癸卯春日大廉即事

荳花開舊英榕葉落新校因憶燕山雪陽和似有私炎方風物異歲事總難期臘蟲蟲無蟄春來鳥不知

春日偶成

莫問勞生計單看近死心自嫌變變累日日愛抽行瓊海積春陰炎蒸宿霧深賽蘭香作瘴勒竹苦成林

放船

珠雨炎蒸退清風敷頂生往來隨所邁不信**點**鴣鳴秋水芙蓉滿扁舟一葉輕安流猶故宅飄泊是歸君

中流望飛來寺

細落天花雨長鳴地賽風急流將繁舫小可不相容兩岸山垂影千峰倒入空雲間飛駕嶺水底現龍宮

憨山老人夢遊集卷第四十七

怒山老人夢遊集卷第四十八

侍 者 温

善 日鋒

通

門

嶺南弟子 劉起相 重較

夜江喜雪有引

之 資南自古無雪癸卯臘月偶過凌江一見喜而志

重壓芭蕉葉輕欺薜荔衣八年勞夢想今喜見光輝 **凍雨運樂扉寒聲漸覺微乍疑梅影瘦**不信雪花飛 示寂空鑑禪人

有身堪荷及無物可思量断臂崖前樹重問桂子香 腰包從萬里七載遲炎方居卜恒河畔心率一水長.

自曹溪搬還戍所

委形隨大化去住豈容心縱使驅炎海還同坐實林 偷生根帶淺絕跡道源深極目寒空色浮雲自古今

登瓊州明昌塔

大地浮香海孤標湧梵幢水天靈驚現火窟毒龍降

詩五首

揮塵慵調鹿臨池學愛鵝不知幽谷裏似此更如何 白日炎如火高眠夜氣寒夢醒囘月窟心想入冰盤 冷落將軍署棲遲放客過懶輸塵事少閒勝白雲多

牛馬齒將缺猿猴心未純六根如割據不藏與誰親 易謝諸縣累難消大患身行藏容混俗老病豈饒人 新月沉釣細垂楊引線長夜來風雨發鱗甲幾飛揚 池水江湖思遊魚樂末忘永懷臨大壑幽思寄豪梁 數角轅門曉星河曙色闡覺來方散變愁見轉皮冠

山行

藥石元非命心齊豈是愚祗愁人世苦願作佛家奴

老被閒心使生爲業力驅虚將三寸氣連絡百年驅

仄徑山腰細清流水帶長迎風松子落浥露稻花香 村舍青蓮蕊人家白板房挑源如未到不必問漁郎

51

日月懸空鏡乾坤照夜缸望雲彈五指花雨墮虛應

病寓陳文績將軍池亭時觀魚戲新水清猿

丙午夏日自曹溪乞食度嶺王虔州因熱致

嘯月鶴鹿依入宛若深山相與夜坐感懷默

晚下高峰遇雨宿蓮花寺

薄暮下高峰山深暑尙濃氣蒸三伏日涼遞一林松 風急催寒雨雲腥起臥龍促歸華藏宿夢醒上方鐘

蓮花寺

世遠諸綠息心閒五濁輕微塵如可破即此證無生 一片通香海干峰擁化城青蓮開細葉慧月朗高明

凌江雨過放舟還山二首

聚沫勞生事浮雲過客情臨流觀泡影轉見此身輕 身與空雲合心將水月閒萬峰歸臥穩寂寂掩松關 際雨驅炎熱新秋爽氣生岸沙隨水沒江月傍人行 **秦乘風去扁舟越水遷山盤旋若蟻江宛曲如環 烏運果探寺**

飯待檀那供蓮須社主栽可中清淨地堪結講經臺 山市依雲集花宮傍水開調生閒不住策杖偶行來

世路終無盡勞生信有期回看萬峰裏誰職業莖芝

機成進日

投老依幽勝真期有道林百年今夜話歷劫此時心

乞食脱翻

落日晴偏好雖途寒更遲閉心雲不厭倦肅鳥應知

遙想就飢瘦因思獻乳糜六年寒徹骨心苦有誰知 今夜明星上當初夢醒時雪山仍在眼覺樹正垂枝

5 111

夜發凌江

浮雲身外事白髮鏡中觀莫謂漂零久前途即故山 虚舟競所適一水絕間關月色看逾好江整聽轉開

舟過湞陽峽

掠石如飛燕乘流以履空迷津終古意都在去來中 不住元爲客虛舟信轉蓬灰江千尺岸帶兩半帆風

宿英州

大地皆遷答勞生總聚塵請看江上月會照幾多人 自笑何爲者棲棲苦問津試摩三寸氣可繫百年身

春日苦雨二首

易破關山夢難禁羈旅人桃花三月水自古會迷津 已失千村樹遠吹萬竅風愁添新積水漆液急流中 滴滴心無緒絲絲意轉工一舟迷遠浦雙眼暗長空 炎激多寒熱清和賴此辰可憐運夜雨斷澄十分香 擬投老南嶽初至湖東與藏六支公夜話

- i19-

雪覆衡山白雪埋湘水深歸休今巳戻不復費招尋

病中示諸子

藥石充香積呻吟當羯磨文殊如有問一默竟如何厭世心成癖那堪病作魔已知餘日少更見此身多

湘江即事

渝色看來近湖天望去長誰知塵海裏遊處是津梁

浮世止一宿餘生能幾年如何衰暮日極滯楚江邊落照浸湖天沙明月在船鳥棲臨水樹人語隔林烟

湖淺不難渡風帆未易施羊腸沙曲近鳥羽岸参差

地折雙輪轉天空一鏡垂還看棲泊處新月照娥眉

過天心湖

帆飛隨獨鳥野望入平林黛逐扁舟去烟波何處尋

龍陽縣

粉塊隱朝霞孤城傍水涯沿堤多柳色邁郭是桃花

混世多生厭歸山念自休幾會千載計特爲一人留

引力

獨坐唯聽鳥開門但見山幻緣消歇盡何必更求閒

天遠飛黃醬江清走白沙武陵知不遠渡口見漁家

德山禮和四首

高語言前句山光格外禪手中生鐵棒刮盡野狐延鳥語言前句山光格外禪手中生鐵棒刮盡野狐延 於相舍秋月靈龕隱暮霞室中方文地曾辨幾龍蛇 光相含秋月靈龕隱暮霞室中方文地曾辨幾龍蛇 光相含秋月靈龕隱暮霞室中方文地曾辨幾龍蛇 東明末後句翻使至今疑為問三年事因何得早知 承明末後句翻使至今疑為問三年事因何得早知 東國民國歌中華

山居十首

岛餐含虚寂諸綠露本真從來聲色裏迷誤許多人身巳難憑藉支離各有因暫時連四大終是聚微塵浩浩成空劫涓涓積巨流但觀淸淨理身世總如浮

飽食無餘事高眠畫不分晦明殊未覺鐘皷幾雪閒念息心愈寂塵消境自如南熏時入座颯颯六窓屋外大一菴居其中任卷舒雲霞生戸牖星月挂庭除

四面韓青崎和身臥白雲龍言茶力建能遣睡魇軍

獨羨搏風翼堪多出水蓮回觀塵土客誰不爲纏眠無意人間世遊神極樂天唯餘可漏子耻放拍盲禪

不識空花影堪憐大海漚但開清淨眼明見一毛頭此性元無著何爲不自由祇因生管帶故被世遷流

寂寂吹**天籁悠悠逝水波從來無一字應不怪維摩**揮臺元吾事閒心奈懶何聊將精進力調伏睡眠**魔**

別南嶽

猿鶴休怨別松風不住聲唯留廣長舌日夜說無生面帶烟霞去中懷愧色行止綠酬舊約豈是逐浮名

湘水通巴漢孤帆入楚天片雲低遠樹睛日照斜川

處世常如寄浮生莫問年縱遵歸去路亦似渡頭

曉發湘潭

樹遠疑天盡江空見地浮洞庭看咫尺漸近岳陽樓曉發清潭曲揚船信水流帆飛隨去鳥岸轉逐行舟

借風亭

帝業三分定雄心一火飘東風干古恨江漢水悠悠天運移炎祚爭馳逐鹿秋誰知雲臥客借節爲前籌

過嘉魚

天垂疑近日水遠若憑虎一葦乘風去飄飄任所如舟停補水宿侵曉過嘉魚山露城頭小江含樹影疎

舟發武昌

遠跡飛黃鶴輕帆挂夕陽生涯隨逝水不必問行藏 覽勝歷瀟湘乘流過武昌江山雄漢口雲兩誤襄王

過黄州

作賦推漁父行歌憶楚狂向來思濯足今已在清浪七澤控荊襄連天一水長江流迴赤壁山色擁黃岡

喜爾国山六首

山是前生住林從此日開誤嬰塵緊去喜仗夙緣來

禪爛難開口雲深易掩騙圓通入流水日夜響潺潺 白髮照衰顏潛形賴有山餘生唯待化一息總歸閒 熟睡忘香曉擬禪閱載華可中投足地不用一袈裟 盟主奮烟霞歸來便到家雲生如足練山擁似蓮花 **夙負聽應盡良緣信未返潛胂一环土當處預齊蓮** 乳鹿眠豐草歸鴻集暮林峰頭墮明月照被一生心 **垂老殿牽纏刳心易入禪偷生至今日怡逸感餘年** 遷世元無過居山不厭深密雲晴帶兩幽壑蓋曹陰 骨立墓峰瘦心崩百念灰烟霞今日足何必問天台

夜坐納涼三首

日月從朝春榮枯任歲時所存唯一念寂爾入無思

老與懶相宜形銷氣不支見聞渾似夢起坐忽如癡

炎熱不須辭滿凉信有時雲飛山色鹽雷動雨聲隨 **棲草蟲偏聽眠雲鶴不驚坐深諸想滅忽聽曉鐘鳴** 萬藏寂無聲心源似水清爐烟蓮夜細山月入窻明 靜慮觀無我藏修厭有名坐看空界月歷歷對孤明 短葛休嫌重商驢莫怨運但依松下坐自待好風吹 夜色喜新晴迎秋爽氣生雨餘林葉重風度嶺雲輕

楚親

寂寂皷空響講網出設音廳知難念相總不屬浮沉 **兀坐譜觀心來源末易轉動時分联兆起處絕幽深**

病二首

了法雜諸相觀空見此心欲超生死路不向外邊轉 久厭形爲果那堪老病侵自慚禪定淺轉覺病源深 哲集是生因難消大患身支持唯賴骨動轉不由 一息微如纏殘驅眇若塵從來皆假情究竟與誰親 人。

浆粥罷經行因示

紫龍慢經行沿流不問程脚如絲線斷身似片雲輕 踏去山光透歸來月色明無勞重入室聽取夜鐘鳴

秋深

参三十六 黃花生意淡白髮世情雕獨坐忘緣後寥寥脈自知 秋深寒氣重擁納正相宜人老骨偏勁松枯枝更奇 丙申二月抵廣州寓海珠寺

地行到岸舟航今已乘上方鐘號爲誰鳴

うりか

瀾道窮轉見死生輕暫依木月光明住偶向琉璃饗

天涯歷盡尚退征百零風烟不計程涉險始知塵海

翼萬壑爭趨一葉舟祠裏丹砂誰可覓雲中芝朮幾 覧勝採奇讓謖邱況逢簫史是同遊千山緊附雙龍 丁右武王惟吾同遊星駿諸勝未還賦懷

時收莫看松下彈棋者半局令人易白頭

將之雷陽暫憩小金山

各衣千古迷津懸實後急流肯止便歸依住無家應與鶴爭歸慈雲暗覆空生室香霧閒侵過人間瓠落事多非聊向江心擬息機有寺不容價暫

記公自廬山遠問曹溪

甲辰曹溪牽臺檄還戍

木生殘形似再陽春乾坤不許逃禪輩禮法難忘出烟霞元自邈風塵渴愛林泉敢認真老去心如無火

舊同妙峰師遊河東萬固寺今聞重新賦此世人獨有空山猿鶴侶頻隨淸夢伴閒身

寄懷

娑婆何時重荷降龍錫,麻谷牀前再羯磨暨華岳雲騰碧海波城郭千家還舍衛法身三展變四十年曾乞食過祇陀精舍傍恒河中條山勇青蓮

登鳥逕水樓

在天可似桃源避秦地往來但不是漁船海四圍山色擁青蓮樓當水月清涼土人入空居自穿雲過峽度平田行盡溪源見市鄽一線河流通大

端州壽馮元成使君

廊廟江湖向各大相逢豈是此生緣居官善用慈悲

隨眠變花一現三千歲今喜重開北斗邊一行應世安心自在禪止有禄金堪布地更無塵跡可

舟中苦雨謝鍾二子見過

寒灰坐聽日暮城頭笛陣陣輕風送落梅鐵蓮社甯辭作賦才世事只看如指馬此心不說此意可陰雲蓋不開蓬窻深喜故人來松花獨許橫眉

江上感懷

題閒看沙頭戲水驅書札不須勞北雁世情早巳付風雨蕭蕭江上舟飄零纔見養空遊夢囘松頂棲雲

- 723 -

東流百年巳過三之二縱有餘生總是浮

南征道中遇雨

隊畏途心折點協整十年瘴海孤蓬轉一夕霜華兩 北風吹雨暗山城蒙暮天涯尚遠征避世想從麋鹿 **鳘生
策馬
衝泥
投野
宿不
堪
囘
首
暮
烟
横**

寄燕都慈壽寺別山長老

界經行常憶妙高峰蒼滑瘴熱心合雪暗記流年手 當年一鉢久過從長夜披衣聽曉鐘飯食每懷香積 種松爲掃蓮花師子座待余重舉絕言宗

結夏法性若惺炯公蕉園

筆重陰猶覆譯經軒有第公罪護生不許朝持鉢習 定還應查閉門聞道本來無一物故今終日對忘言 **蕉園何似坐祗園爲借清風暫解煩綠葉幾供懷素**

鄒子胤過訪因示

竹春山雨過長青黎開來始覺諸綠靜悟後方知萬 爲参向上訪曹溪底事分明本不迷曉院風生吹翠

物齊最是喚人親切處五更夢破一 德山禮祖後過定王陵

> 題君杖倚春風選行立夕陽紫翠正氤氲 當年一棒聖凡分的的真機泯見聞香火千秋占王 **氣河山終古覆慈雲空林廉鹿仍隨塵淨土蓮華已** 衡陽湖東結菴初成劉存亦鍾衡頴遠來相

里淨土蓮花種一枝巳老形骸俱長物從頭日月是 新知匡山莫謂當年社此地重開定可期 載神交費所思相逢喜見歲窮時扁舟雪夜來千

慰遂同度歲

將東遊赴花樂寺齋二首

土說法還登善法堂香飯能令多衆飽醍醐獨許利 根營當人未即輕拈出儻可重來再變揚 舍衛城西古道場偶過三匝禮空王觀心已入唯心

杖黎可惜過從歸去日不裝囘首重隻隻

外法身高與四天齊暫來即請登華座久住應頻信

祇園開向大江西地湧蓮花最可棲佛國遠超諸相

過花藥寺梅雪堂遜菴宗師苡居

放影入冰壺月倍明斯臂殿前留舊跡懷人笛裏憶 梅雪堂開骨更清齋餘閒步一經行香浮石室花初

新堅只今若問西來意隻履誰能識去程

過九峰禮無念祖師

宿九峰方丈胎聞側長老

誰傳應知天帝歸依日獅子音聲話未殘白萬壑松風入骨寒。已滅慧燈重發焰獨留衣鉢許遙向名山禮法壇此心須乞祖師安九峰夜月侵人

率諸弟子赴漢陽王章甫齊

露枝風雨夜深心境寂淸涼疑坐藕花池供立言喜見郢中辟平田舊是裁衣式高柳新垂灑郊園遙訪漢江湄一似毗耶集衆時香飯飽飡天上

信宿天光上座接待寺

· 毫光瞻依巳入唯心土向上何須再舉揚。 * 然唄三時禮法王城內圓成華藏界眉閒常故白瀬棘叢中古道場廿年辛苦為誰忙堂開四海來龍

過曲阿喜逢王東里明府

知音相逢一句無生話覿面分明不用尋家孤月寒江意更深驚嶺想從親受記毗耶應是舊出水靑蓮住世心軒車亦似在山林空花鏡像塵何

登徑山凌霄峰

王棲只今欲說無生法臺尾纔揮萬象低翼東去千山似馬蹄絕壑久稱獅子窟空林終許象獨上高峯倚杖黎侵人空翠轉凄迷西來二目如鵬

寄五嶽蔡使君

真詮雪峰枯木堂前月此夕因君缺又圓 詰每話無生憶大年自信毕官為示現誰知**案**臘是

喜歸匡山

影世事都從逝水流寂寂閒身雲作件瀟瀟白髮雪屋遍江湖久倦遊青山直到老方投形骸巳謝空花

林觀海明府陳赤石大參入山見訪 蒙頭餘年不必論多少一念無生**曠**劫休

慮到來全不用費眉身披萬壑雲容溼坐待千峰月匡山白社憶當時此日高軒最可追入處即能忘世

色運一夕清言成勝跡。乾坤自古重心知

潛人至

朝霞唯餘此景年年在不必從前問歲華面枯木難開舊日花河畔柳枝垂曉露門前山色帶

送脩六逸公歸家山

能忘餘年**黨**未填溝壑遲附同棲寂滅場 項入室還依大法堂歸去家山雖有意老來泉石豈 世載殷勤件瘴郷又隨瓶錫走諸方參玄直上金輪

心光法姪持雪浪恩兄手澤讀之有感

君來忽憶故人情究竟難忘出世盟乍見遺言猶對

面細思談笑似多生知從兜率居高座直入菩提豈

中秋喜陳祠部無異入山見訪計程儻再相逢如昔日肯教同伴不同行

放多佛祖直教蹤跡斷何須前後列三三

回看五獨氣氤氲羣鬧啾啾器裏蛟瞥念未與迷悟

如雲當機若問西來意一物全無把似君曲養茗焚香坐夜分喜對月明心似鏡深觀世事快適問空山應豕羣巾車入谷到斜曛披襟細語論衷

示衆

減年囘首家山歸去後萬峰高枕石頭眠見無端白髮暗中遷自知來日皆除日離信添年是平生蹤跡任前緣慚愧形駭未脫然一片閒心隨處

壽覺休繆居士

爲親清神巳入蓮華藏劫念何須問大椿忍住世還同出世人摩詰法門非是默麗公妻子不忍住世還同出世人摩詰法門非是默麗公妻子不

山居十首

寂任從世事付經憨三竿日上還高臥丈室雲封不依嚴結構草為養乍可容身止一處但得心源歸湛鳥屬不必更拈言外句現前聲色是全提 鳥屬不必更拈言外句現前聲色是全提

堪嗟往事夢中游暨眼空花不可求心路信如雲散球焚翹首長空雙碧眼不堪大地總浮雲 一微纔立聖凡分青山自許容藏拙火宅誰能爲

十籌從此人間蹤跡斷更無憂喜上眉頭 月形骸任似水浮漚生存一息餘三寸老入千峰勝

古琴入室何勞重豎拂當機顫取在知音列目中登受一廛侵松風時說無生法流水長鴨太藏修今巳遂初心自普居山不厭深空外任從千嶂

地勝傾甘露灌枯腸心心直入蓮華藏念念常明般幽殿蘭蔥有餘芳習習松風送暗香暫借聞熏開性

若光知足便登兜率界何勞此外覓西方

色霞為問長安歌舞客殺骨派夢到山家供衆信專等試新茶空無神力諸天飯富有莊嚴五供衆信專等試新茶空無神力諸天飯富有莊嚴五

及肩幸作太平雲臥客焚香朝暮祝堯年一供地爐松火漸無烟青山玃雪重開面白髮防寒已三冬辣衲坐枯禪喜見春光最可憐瓦鼎野蔬將獻

夢今時白社舊時盟酬機但用無尾种娛老唯留折舊遊恍忽是前生每億行藏暗著驚此日靑山當日

何事當年愛離家難忘舊著破袈裟祇因未了多生

脚鐺若問西來端的意曹溪一派水盈盈

空花歸來剩有青山在豈忍將金去博沙次不是從前一念差半世業緣同夢幻百年妄想等

臥病

念真究竟要知歸宿處蓮華巳結未來親耳到牀月色冷侵人關心不與諸緣合白業唯存一漸團香案日生塵老病難容世外身入夢泉聲清徹

關陸使君景事

更閒遙億轅門蝸坐處匡廬時在兩眉間諦忘楼正可對衰顏飛來白雪寒相照望入青雲思高車幾度過空山歷盡千峰直破關有舌不能翻密

寄仰山靜光禪人

· 茅肥何時再振牀前錫拈示西來風眴衣忍知爾常參向上機雨過雲開山骨瘦春來日暖於一自匡廬間法歸別經歲月信音稀顧予已入無生

憶山居六首有引

余圜中宛居深山因而有述

白雪在層前飛來日如放不是爾無心如何常共住人情心千年火支撑獨木橋往來人境絕卷主擔無聊

身在千巖裏門前路不通寂寥誰是伴唯有數株松風從何處來衆響動嚴穴靜聽本無聲如何有起滅,加水不是聲明月元非色聲色不相關此览誰會得明月挂寒空光徹寒潭底上下本自同看來無彼此

舟泊珠江

月色澹如水潮平寒似空孤舟横野渡人在有無中

軍中道場吟四首

曾坐東海上驚濤怒破山今聞震天雷入耳心逾閒法皷聽龍宮喊聲動天地何似衆竅風噫出大塊氣旌旗蔽浮雲幢幡影朝日試看生殺機兵不似禪密,朝聞鼙皷聲暮聽金磬響動靜雖不同唯在知音賞

寄王金吾

偶會忽言別再晤應更難思君心似雪飛夢薊門寒

喜友人至

人生會合期。香如風雨夕與子未見時宛似雲中日

偶成四首

野雉在樊中梁食亦不少何似處山林飲啄隨時了風吹楊柳花東西南北走豈是愛隨他自身元不有

膏火照夜行人益已受損豈不自愛惜生質固所稟豹隱南山霧常恐羅網侵只以皮毛放是爲身累心

憶家山竹池

萬竹飛晴雨雙池引石泉別來三十載日日憶栽蓮

瓊山

奇甸香爲國珠崖玉作山人從塵海渡儼若出天關

五指山

一葉浮天外干山落鏡中誰人揮五指劃破太虚空

金粟泉

粟泛黃金屑泉流白玉漿我來持一鉢足可獻空王

明昌塔

瓊海開龍藏香幢出梵天即看火宅內從地湧青蓮

劉將軍邀觀玉龍泉二首

混沌何年鑿淵泉此地開人依空界立山入鏡中來清泉寒似玉嘉樹密如雲人有養皇樂心同應豕羣

題墨香深處四首

竹色侵簷綠荷花照水紅夜深涼露下人在暗香中碧草橫書帶幽蘭結佩香處亭人獨坐心已到養皇

雾逼梅舒尊春催草發芽目前生意事誰識在山家芙蓉開似錦黃菊疊如錢醉眼惡心處端然自在禪

寄膠泉李生

萬里路不遠寸心空更閒不知思我者如隔幾重關

懷丁右武大参

落葉千山雨寒空一片雲舉頭聊縱目何處不思君 咏松二首

詠梅二首

精幹龍絲光風枝馬尾長海陰清響發瑟瑟滿虚堂樹老心逾赤楓凋葉更紅可憐霜雪裏獨有一枝松

叢林秋**巳晚萬**木盡凋傷獨有寒梅樹飛來雪裏香 雪色春先到寒香夜更清一聲幽鳥語忽使夢魂驚

詠竹五首

業落根偏固心虎節更高一林寒吹發清夜伴松濤霜幹寒如玉風枝鬱似琴滿湘一夜雨滴碎客中心 寒飛千尺玉清瀝一林霜縱是塵心重相看亦順忘 其澳吞黑碧瀟湘夜雨寒虚篾人靜聽颯颯響哪环 潘獨沒雲姿風生龍夜**吼**霜雪不知年真吾歲寒友

...

*** \$ 10 and 10 and a man

喜雨三首

山空泉更寒暑氣無來往嫗嫗風雨生毛骨更清爽 元陽如烈火藝有若陶鑄忽然風雨來炎燕在何處 涼雨擺炎天飄風振林木輕雷響詹端**隱**隱似空谷

山中吟六首

萬山寒色破地氣暖生春花落曹溪水何人肯問津 時折資林松旋汲曹溪水來奏雪中茶此味無可此 枝頓春已動草木氣相鮮靜裏觀時化心忘有漏年 無事畫打眠松風吹不徹何處木魚聲夢中響更別 日月不知去此心應合空山樓時獨坐彷彿在鴻濛 塵隔三千界心超十八禪鐘聲清夜發聽徹不成眠

偶占

滴曹溪水干林逼漢松人依空界立宛在畵圖中

示知事僧二首

積雪苦凝寒、叢林鼎凋冱一陽纔動時枝頭春巳露 斷臂巖前雲而今血尙濃黃梅腰下石能得幾人春

董國博過訪曹溪因附

曹溪 滴水流浪滿江湖隨君化霖雨到處運焦枯

夏日王癡過訪

炎熱毒如火茶香冷似冰誰知天壞內除賴盡輸僧

送悟心融首座二首

七尺廉過頂三食飯滿瓢何時萬峰裏修飽臥雲霄 **片江南雪來清瘴海炎君今度嶺去寒色帶眉尖**

對月

雪嶺孤松老曹溪滴水寒誰知今夜月猶是昔時看

坍過小金山四首

階下魚龍穩沙頭鷗鷲閒盈盈剛一水隔獅萬重山 青山常不败流水去還來獨有松間月清光照條苔 漁火夜深白沙雞清畫喧江空人境絕長日掩柴門 度一回新重來不厭頻祗因貪佛日時禮法王身

喜黃生公亮歸自薊門五首

人生無百歲逢君時過半忽別又三年離台安可算 **寨路千行柳江湖萬里波往來空歲月誰不為蹉跎** 寒上草頭白燕山楓葉丹唯餘寒雪色君尚在眉端 昨日乘虚舟夜來忽風雨今朝喜逢君杳然如夢許 羅浮半輪月曹溪一滴水與爾共後之意味無彼此

喜曇欣慶公至

君從白下來慰我從方熱火宅喜相看如對燕山雪

招慶公嘗荔枝

長夏火雲紅五月荔枝熟與君坐珠江日日敵寒玉

對慶公懷舊

卷居與君隣水竹清同好一別三十年相看今日老

寄蒲坂襄垣震崧二宗侯三首

一派黃河水遊從天上來滔滔東入海借問幾時回

華嶽雙峰出高空碧玉寒遙聞天樂響應是禮仙壇 中條山色青朝霞散睛綸知有忘世人獨坐觀無始

夢遊天台二首

飛上華頂峰忽聽天雞四遊望蓬萊山掀舞發長哪 忽到天台山相遇雲中老想是避秦人顏色如此好

夢坐龍華樹聽發長樂鐘醒來空谷裏萬堅吼松風

懶殘老衲住山

卷小山藏寺心虚芥衲空臟眠松下石坐斷最高峰 將之雷陽別曇公于江上

送別芙蓉江江水秋逾碧歸舟遡寒流來往心如織

詠月

湛海光如有寒空色若無誰知俯仰內干古照迷塗

點如鐵緊瀰漫塞太虚但知已起後不見未生初

試端硯三首

君子愛佩玉温潤象其德此石尤過之所寶在翰墨 浩浩清江水磊磊繁石山離知千古意元在混**范**間 詞海萬里流筆峰千丈雪盡向此中生時時飛玉屑

化城巷二首

鑿井在高原土深水難得施工極盡時淵泉流不息 山色自朝香格陰閒古道多少往來人紅塵空浩浩

斗室懷幽壑窮交見古人雖餘方寸地無處著囂塵

明禪人施茶

此心元不住白足本無塵時汲源頭水清涼熱個人

寄慶堂首座

憶爾栽茶處滿園春雨滋何時掃松棄相對一京之

寄宗遠西堂

曹溪春水漲衛嶽鴈歸時憶爾跏趺夜松門月上運

寄題龍興寺禪堂

王氣鍾山嶽經聲徹帝宮法筵龍象衆萬世祝堯風

寄皇陵供奉

乾坤開帝業日月轉河山香火勤供奉晨昏仰聖顔

題畵小景二十一首

芳樹夏初長輕舟湖水碧携琴訪故人雲深何處見 流雲覆春山輕寒凍欲坼。何處踏青來歸時月華白

風雨孤舟夜微茫草樹春茅簷驚犬吠定是渡江人 烟樹春雲綠江天落日紅不知何處醉歸向月明中 断橋人影橫扁舟霜月白囘首望雲山悠然塵市隔

高樹咽新蟬深林掩茅屋斷橋人影橫白雲滿山谷 江閣流雲細孤村白日閑小橋橫野水隔斷萬重 晏坐桃花塢幽居遠市鏖祗綠春色好不是爲逃秦 山山

秋水碧如玉遠山凝似脂夜深魚不食釣餌為誰施 瀑布寒空外孤亭水石間日長無個事結伴看春山

浙歷寒林瘦霧沒水石清白雲千萬里相對總忘情

秋山新雨濛遠水澹無垠湖上幽人宅悠然隔市廛 形雲四野迷層冰萬木折衝寒訪故人踏破連山雪 萬山凝積雪高樹折輕冰何處寒梅發香勾一個僧 山似天台路花無秦代春漁郎坐溪口不見問津人 秋山雲氣薄紅樹曉霜清一帶湖天凋空留待月明 雲白天垂練江清水合空相携尋酒件同過石橋東 江閣坐忘機凭欄望夕暉沙頭人好立擬待月明節 古木蒼松老清泉白石奇携琴問知已遙望酒家旗 遠樹睛烟合江空草閣寒行吟同澤畔始信獨醒難 萬木流雲密千山落照寒衡門長日掩酒伴暮相看

憨山老人夢遊集卷第四十八

憨山老人夢遊集卷第四十九

侍

者 褔

X

通

門

嶺南弟子 劉起相

南嶽逢何玄圃

相逢 南嶽前坐對中秋月清光徹夜看疑是燕山雪

玉山

開登玉山頭城中見烟火萬井密如雲蓮花青杂杂

山城枕江流梵刹雲中起鐘鳴萬戸開人在蓮花裏 獨上望江樓四面山如織中有後霞人相對不相識 高山寺

愚溪何似我我愚溪不愚流泉日夜響說法聲鳴鳴

港近恒河水僧衣舍衛城經聲和人語總是說無生

白鶴飛冲霄翛然任去住可惜無礙身不知生死路

-732-

螻蟻臺羶腛逐氣呼伴侶忙忙不暫停所得能幾許

偶成二首

法侶千峰影生涯數畝田信知人世裏難結此中緣 青山待人歸本欲求深契誰知來者心動節多相戾

山居十三首

片雲浮太虎倏忽遍大地試看未生前清淨無纖翳 長夜無燈燭脩途總暗冥可憐酣睡省大夢幾時醒 雪老蒼松古僧閒水石淸坐來忘百慮眼見一身輕 青山容易入白業不難修獨有降心法英雄讓 萬境本寂然因心有起滅一念若不生動靜何處覚 枕黃粱夢干秋汗血功私知常不朽誰信轉頭空 一籌

雲深便野寺僧老愛扶笻乞食歸來晚愁穿十里松 風靜蟬聲急龍歸雨氣腥乘涼高樹下閒寫換幾經 酷暑不可人清風來竹下颼躞涼氣生毛骨順瀟灑

爽氣入疎林萬山秋色好貪看溪暗雲忘却來時道 獨坐長松下悠然太古心高山流水意誰復是知音

長明一 日月如飛鳥乾坤似轉丸浮生忙裏度誰向部中看 碗燈夜對心更寂多少醉眠人夢中狂未

山居二十首六言

松下數樣芽屋眼前四面青山日月升沉不住白雲

來去常閒

鼻孔衝開 雪裏梅花初放暗香深夜飛來正對寒鐘獨坐忽將

世上塵埃 幾片白雲不去一輪明月飛來件我山中寂寞笑他

月上孤蜂 一片寒心雪夜數聲破夢霜鐘爐內香銷宿火寫前

幻器全消 浙浙泉聲入耳明明祖意西來不動舌根常說何須

滿面清霜冽冽盈頭白髮蕭蕭世上空花影落目中

再歎奇哉

打破枯禪

幽谷蘭香馥馥中宵月色娟娟一段清塵勃勃無端

雲散長空雨過雪消寒谷春生但覺身如水洗不知 目下飛螢 一念忘緣寂寂孤明獨照惺惺看破空中閃電非同

心以冰清

衰朽縣據骨弱看來轉覺心阻午夜春梁似鐵常時

一念如霜

麋鹿成星

空谷諸醫盡謝止留一片閒喜件我松根揮臺堪多

世界全身 文字眼中幻翳禪那心上浮塵內外一齊拈却大千

滿耳公風 靜夜鐘聲不住石牀夢想俱空開眼不知何處但聽

額上明珠 荷淨酒空寶鏡春來水滿彭湖照徹廬山面且月如

蓮漏六時循短長香百刻安排日夜眞常流注藏神

早托華胎

一片雲封谷口干蜂劃破虚空中有數樣芬星深藏

白髮山分

可惜青山常在堪嗟白髮時新盡是團中逆旋雜爲

物外閒人

山色愁合宿雨松擊冷咽清霜乞食循同卷鳥娥眉

月上新姓

世界光如水月身心皎若琉璃但見冰消澗底不知

春上花枝

門外青山來來應前黃葉蕭蕭獨坐了無言說囘看

妄想全消

舟中即事

夢明月蘆花古渡頭 空水連天一葉升即看身世等浮邁屬聲的破緣生

大姑山

靈帶雲宴月偃眉江湖滿目少相知寒流徹底心如

洗莫問夫君是阿雅

姑山塔

空裏浮圖水月身太虛中點一微塵行人兩眼重添

層幾個男兒認得真

鄱湖實陀寺

玻璃宮殿水晶盤面面青山碧玉欄中有一人常說

法西江吸盡夜潮寒

過桐江號會建築光禄

龍華樹下舊相逢每夜談心聽曉鐘今日覓君桐水

上空含血淚灑春風

清江漁父詞二首

水清沙白月如鉤影落波心鉤未收無限遊魚吞不

得空教漁父抱深愁

薬輕升逐浪翻五湖風月任加食夢魂常在深深

舟次橫浦

處最苦難鈎水更寒

五雲一水入南安萬疊山迴六六難行到水窮山盡

處梅花無數嶺頭看

登南安城

城頭瓣瓣湧青蓮花蕊香含萬戸烟身在鏡中人不

識更於此外寬諸天

度大庾嶺二首

徑雲霞閣道深梅花松雨氣陰森翻思昔日宵行

客何似今朝度嶺心

領上寒梅正發花枝頭雲擁舊袈裟試將拄杖重拈

出香逐天風遍海涯

曹溪謁六祖大師二首

曹溪滴水自靈淵流入滄溟頂拍天多夕魚龍從變

化源頭一豚的冷然

機斧織抛石墜腰黃梅夜牛寂無聊自持一休南歸

後從此兒孫氣日職 廣州道中二首

住又指前途向別行

烟水南遊歷百城相逢知識總無情挨身纔欲須臾

兩岸中流總不容扁舟逐浪任天風直須高挂孤帆

去自信恩波到處同

抵雷陽戍所

瘴海嵐烟日夜浮龍蛇氣吐混清流到來盡是無生

國愈見 君恩未易酬

寄少林無言宗師二首

五乳峰頭草木深春來花發滿空林峰頭積雪仍千

尺誰似當年斷臂心 北炎風朔雪兩相看 **満涼會罷復長安一度相逢一度數別後天南望天**

放舟波羅江

片帆東去海波平簫皷如從天上鳴遙望三山天外

落不知人在鏡中行

寄小金山珍公

天風吹上妙高臺午夜乘潮載月囘禮掃楞伽山上

石待余重為為經來

小金山三首

萬里長波萬里流誰將拳石砥中辦不因馬鑿開三

級自是無龍會點頭

權夜深堵下臥魚龍

山浮水面寺依空樓閣虛無杳靄中不是幻成人世

水晶宮殿絕塵蹤香霧氤氣露氣濃明月空中浮客

界多應天湧梵王宮

寄河東妙峰師三首

首陽山色枕河流師住中條最上頭麻谷牀前章敬

錫至今風韻鬼神愁

黃河一線自天來流入中原洗却灰把斷要關看砥 柱慈航不數濟川才

天涯行盡路途難毒霧炎風任飽飡忽憶龍門千丈

雪猛然提起徹心寒

答高常侍寄香

辦名香出上方封書遙寄到炎荒夢聽刀斗疑鐘

磐夜起親焚禮法王

懷五臺龍門舊居

萬年冰雪擁芽廬一別於今廿載歐叶斗峰頭明月

夜不知誰在此安居

水瀑布整飛幾度鐘 億国山

遙憶匡山五老峰白雲深鎖萬株松寒空月照彭湖

懷匡山天池憑虚閣主人

空中樓閣閣中人宛似花間自在身午夜天池浸明

月不知此際與誰親

五羊喜譚子文至自薊門二首

西山雪擁薊門寒雪隱圍爐坐夜發一別杳然如隔

世相逢延是夢中看

炎風朔雪兩無憑人宅何如大地冰相對莫驚養養

改此心元是五臺僧

憶家山並諸舊遊有引

余別家山三十餘年矣。今被放嶺外適法兄珂公·

同廣姪遠慰因成三絕書還懸之舊壁以見入生

幻跡如此

改空留明月照庭除 萬竿竹趨舊庵居樓上仍懸讀遍書夢見四舊青不

載不知幾許出度空

長安陌上舊行蹤吹盡徼塵曉夜風別後消磨三十

憶昔兒童共聚沙百千嬉戲笑如花風霜縱使形容

變此念軍同未難家

本寺回顧余亦遠遊久抱修復之念今聞恩 兄己新寶塔而殿宇尚在荊綠感念嬰心遙

寄以詩

洞然切火憶當年實塔如生火襄蓮今見優靈花再

獨坐

現何時重觀率陀天

七輔蓮華一生香薑是趺坐衙匡狀市聲門外深千

尺唯任輪蹄日夜忙

送劉貽哲還鄉兼東諸故人三首

瘴海三年共此心形骸總不屬浮沉君歸獨載秋江

月徹底寒波思更深 身自驅馳心自閒窮鷹獵隊等青山故人鑑問余消

息只道婆娑養巳班

世路崎嶇不易行幾能眞見是浮生君歸黛過西湖

上試看蓮花出水情 軍中寄懷虚谷師

下恰似松陰對坐時 禪板輕抛事皷鼙跏趺鞍馬不相宜夜深月照轅門

懷天台山二首

杖打醒癡僧寂诚魔 華頂峰頭月倍明石梁橋下水偏流能持一滴來炎

天姥雲霞陪海多半生夢想竟空過何時一曳接天

海酯勝曇花盞內生

曹溪四時詠

亚意则明百草頭春林花發鳥整幽朝來雨過山如

-737-

洗紅白枝枝菱赤牧

四山密密綠陰潔留下風來水面松午睡正軒纔欲

夢長廓忽聽一聲蓮

刀斜火種是良方秋到家家晚稻香放不下時擔取

去何如老優在韶陽

夜深旋養雪中茶此味天然最可誇更有一般奇特

軍中吟二首

處滿林寒月浸梅花

鐵甲天教當數養從軍原不爲封侯身經蘇日如爐

治傲骨而今鍊日柔

緇衣脫却換戎裝始信隨緣是道場縱使炎天如烈

火難消冰雪冷心腸

陳生讀書天霄寺

跡寄祇園口出塵夜眠歷與佛相親夢魂忽被鐘蔽

被始信原為聽法人

月波光霞氣滿襟裾 海天空處一樓居方丈中涵無盡虛夜起開窗放明 海月樓

劉生讀書石湖

心似寒泉色若冰幽居不讓石殿僧夜京一滴源頭

水乞火類分照佛燈

長眉鶏髮久棲雲塵尾時揮繞鹿草遙寄旃檀香一 寄雲棲大師

游想師拈對法王焚

寄屠亦水居士

去不知香飯對誰食

維壓家近白花山烟水微芒海印寒聞道文殊又東

寄馮開之太史索楞伽經序

憶昔干華一對談珍衣脫却久氈參楞伽山上摩尼

聚何日重開百寶函 讀達觀大師末後偈

出始信阿師熱肚腸 一念從來絕覆藏通身不落是非傷試看撒手輕拍

懷五臺舊居

處曳杖閒過獨木橋

叶斗峰頭雪末消別來音信久寥寥炎方慶夢經行

-738 -

軍中寄懷黃羽李侍御六首

十年戎馬走炎荒常憶同遊海印光大火聚中求著

脚與君別處最清涼

聚散浮雲不可期此心未離別君時兩輪日月如飛

鳥來往無停促夢思

隔恰似空花落鏡中

大海長江一脈通烟波浩渺總如空萬山縱使能相

內近來諸有置何方

君先待漏紫宸朝遙把楞伽問寂寥侍者飽飡香飯

虚空大地可消亡此念如何屬斷常試問維壓方丈

後至今一粒未會消

世事虚空最是閒乾坤何地沒青山知君正眼相看

處不在音聲色相間

寄水田南皋鄒給諫

門前一片福田衣時折松枝當塵揮山色溪聲常說

法不知若個是高機

香爐峰下紫雪深松竹屬崖白蓋陰門帶長江接溪 題香爐峰紫雲港

水清流洗盡世間心

如焚夏日畫偏長渴想菩提樹下京一陣風從空裏

山中夏日

過送來何處藕花香

懷九華山

九江江上秀芙蓉一帶雲霞六六峰迴首瘴鄉明月

夜無端清夢挂寒松

遙向曹溪獨問津溪頭秋水淨無塵持來一片衡山 釋公自衡陽來参

月猶照富年獵隊人

寄茶陵劉存亦居士

見面何如未見真朅來消息嶺頭春衡山月色曹溪

水徹底相看是放人 舟次螺江訪僧鍾公不遇

曾坐江樓待雪消螺江春水急於潮今看白鷺洲前

月⑩似當年件寂寥 蒙恩肯還山

少小爲僧五十年老來特地混塵綠從今走斷天涯

路此去千峰白蓋眠

夜坐

露邏幽蘭獎鼻香風吹毛骨夜生涼坐來口器心如

雪月色還疑地上霜

夏日過法性寺二首

普提樹下風祛暑般若臺前雨送涼一蓋清茶諸想

滅更於何處竟西方

在說法誰登舊講臺在說法誰受舊講臺

慶雲維枯木堂

枯木堂前冷似冰當年曾坐半千僧遙思一片寒灰

地何日重挑午夜燈

題畫二首

飛來山色掩湖光烟樹新清帶夕陽遙聽上方兜率

界半天鐘皷落微茫

一片烟波十五橋雲山落木晚瀟瀟孤城半壓吳江

水水上人家夜聽潮

將之雷陽江上別臺公

海別君不似見君時相逢庾嶺日初遲欲折梅花第幾枝忽逐秋風度炎

懷舊居

下不知袁鶴向誰帰安居舊住竹林西明月溪頭幾杖秦常想夜深松露

寄浮山澹居鎧公

處白雲明月是誰多浮山九帶事如何回首當年已爛柯爲問夜深趺坐

舟女小金山志感

坐德雲原不是生前 常思半月經三度**候爾暌携**又五年此日重來峰頂

億山中梅二首

曹溪梅花每至盛開如坐香積世界今冬以魔作

崇華次芙蓉江上望山中咫尺不得坐享香供詩

以憶之

寒梅帶雪嶺頭開冉冉天花落講臺好遺上方香積

國爲子一外盡擊來

梅花香樹積成林香氣熏人悅可心樹下現敷獅子

座風聲誰解海潮音

得東海門人江吾奧書二首

從空一紙故人書萬里遙來問起居爲報親知零落

盡滿頭霜雪更愁予

十五年來坐瘴鄉海萬相對未能忘時看萬里中霄

月一似同遊海印表 古佛松林

舌不知聽徹是何人 松陰幕幕淨無塵山色雲光自法身日夜風濤廣長

開元曉鍾

夢不知誰最獨稱聲 明河清淺澹疎星古寺虚簷宿百靈一黎曉鐘驚大

平原古塔

浮屠何代據諸天傳是隋朝大業年蒼蘚剝封發碣

盡平原荒草布金田

寄悬灌法師

遙想華臺坐講時四天彌覆法堂垂座中龍象清如

許可記炎荒老赤髭

寄草堂法師

瘴海還從坐實林常懷法窟舊知音遙看一片燕山

月盡是隨綠度世心

山居偶成四首

百年世事空華裏一片身心水月間獨許萬山深密

處畫長跌坐掩松關

茂滾紅塵世路長不知何事走他鄉回頭日望家山

鬧藍誰肯急抽身自古青山隔市 塵莫謂桃源無路 遠滿日空雲帶夕陽

入落花流水是知津

日夜烟霞護翠微相將猿鶴待忘機青山莫道閒無

主自是關人不肯歸

送隱知禪人還蜀

錫冷冷過瘴鄉巫山西去思茫茫峨眉峰頂新秋

月知爾看時到上方

皷吹轅門獨晏然曇花樹下晝安禪誰知可汗歸王 日正是將軍破有年 寄題杜將軍臺花精舍二首

鐘數胡笳總道場旌旗影裏坐焚香思君力破擊魔

皇自許心空見法王

送怒公還五臺

一則臺山三十年眼前冰雪尚依然君來細說還甲

寄空四法師

事又結多生未了緣

憶普臺山百尺冰與君對坐骨崚觸翻思三十餘年

事夢裏相看似不看

別曹溪二首

爲決曹溪萬里流歸心常擴大刀頭因思皿浸齊腰

雪千古令人痛未休

自為曹溪杖策來。坐看山色笑顏開從今一別千峰

去鳥語溪聲不盡哀

初至衡陽喜雪二首

七十峰頭雪正寒到來深見此心安回思火宅驅馳

地盡入冰壺影裏看

一五熟傷中幻化身廿年來往任風塵今歸一片瀟湘

雪原是淸涼徹骨人

山居二十八首

中省へ給及民東南一十二成石や乙手り攻撃。余生平抱烟霞之蔣早年行脚二十住五臺冰雪

已七十歲浮光幻影豈能長久頃蒙 聖恩鵬還 風吹墮瘴鄕將二十年嗟乎人生幾何忽忽往來中者入稔及居東海一十二載知命之年乃被業

道場地仗諸檀越助營安后創始於甲寅九月既初服特來南嶽作投老計因綠未偶乃就湖東古

得休息之地如久客還家以釋重負其逍遙應落望落成於臘月逼除草草荷完從此一片身心始

詩也與來即筆略無次第云耳何快如之隨有口占命侍者錄之以志幽懷非言

祇園借得一枝安從此無論道路難日上三半高臥

穏相看不必動加食

雪壓衡門夜擁爐此身雖寄恰如無不知日月從何

一去囘首人間歲已徂

一詰莫問前三與後三

形如枯木念如灰雪滿頭顱霜滿腮不是老來偏厭

世眼中無處著塵埃

身心放下有餘閒垂老生涯在萬山不許白雲輕出

谷好隨明月護柴關

寒燈獨照影微像疎屋風吹雪滿衣忽憶五臺趺坐

處萬年冰裏一柴扉

寒威入骨千峰雪怒氣衝人萬竅風帶披蒙頭初睡

醒不知身在寂寥中

百千世界空華影一片身心水月光伎倆窮時消息

斷可中無處者思量

地爐無火石狀寒瓦鼎香消坐夜發萬蠶聲沉心更

寂却疑身在鏡中看

四圍嘉樹影扶辣樹下深藏一小鷹車馬不聞人跡

断閉門長日獨跏趺

寒雨瀟瀟風滿林蓮花漏天夜沉沉誰知學世難醒

夢盡是光明般若心

夜深獨坐事枯禪撥盡寒灰火不然忽聽樓頭鐘磬

發一聲清韻滿霜天

雪滿乾坤萬条新白銀世界襄藏身坐來願入光明

藏此處從來絕點塵

平湖冷浸芰荷衣湖上青山池是非塵跡盡消人世

遠白雲館島總心機

雪獺柴扉獨坐時寒林寸寸折瓊枝曉來碩失青山

色開盡梅花總不知

春過人日雪初晴新月疎林影更清夜起推窗望寥

廓滿天屋斗挂灣楹

雲開四野動春光何處梅花送暗香曳杖欲尋幽谷

去一枝斜倚在東墻 一片雲封萬壑松門前流水日淙淙不分蓋夜供鼾

睡好夢驚回隔嶺鍾

春深雨過落花飛冉冉天香上潜衣一片閒心無處

著蜂頭倚杖看雲歸

立又逐閉雲過別峰 信步騰騰任所從形骸一似雪中松偶來纏向溪頭

夢絕世何曾到萬峰 麋鹿空山熟可從輸他豐草與長松紅塵縱有難醒

垂垂白髮對青山身在千巖萬壑間寂寂松門無過

客往來唯有白雲蘭

青山不動自如如朝暮雲霞任容舒縱有紅塵深萬

大會無一遇回茅園

月唯餘清影落江湖

萬峰深處獨跏趺歷歷證明一念孤身以寒空挂明

退始信護林有作家 睡起呼童院養茶竹爐湯沸雪如花蔭鎗未堅處先

卷椅虚窗坐看山千峰紫翠出松間無心從許雲不

在何似如如體更閒

處此意如何把似君 月色松聲總見聞禪心妄想聖凡分消歸一念無生

平湖秋水浸寒空古木霜飛落葉紅石徑小橋八跡 新一卷深鎖白雲中

寄舜菴老湖

三十餘年學賴慵生涯坐斷祝融峰身輕邁骨休言

老千尺還看手種松

寄魏考叔

幽居宛是在家僧一宝清如六月泳綻使善空諸有

盡向餘山水挂眉稜

留別湖東社中路子二首

地語來莫使草萋萋 盤花舍就竹林西市遠應點最可棲動結婚前雲臥

偶來松下掩柴關招隱相求出世間豈意又隨流水

去別君心似戀雲山

岳陽阻風二首

庄獨餘山色尚依然 岳陽樓外浸湖案樓下沙汀夜泊船來往風帆留不

月径來偏向客邊明 北風吹浪打山城一葉輕帆阻去程想為留看洞庭

過金沙于間南雲林

出多少塵心亦易稍 咫尺雲林望不遇到來寒爽氣蕭蕭閉門不放烟霞

西湖偶成

影可笑沈酣夢未發

四面湖山鏡裏看樓船深浸碧皮寒不知身在冰壺

喜麗匡山

垂老青山荷主恩匡廬南向臥朝殿七賢五老遙相

對泉響深談不二門

桃匡山黃龍徹空師二首

昔與師住五臺冰雪中者三載別來三十餘年所

矣子今投老匡山一禮師塔輓之以詩

憶音清**涼對坐時垂垂冰雪綴雙**眉別來夢到傷心

法鳥語溪聲和曉鍾

塔影團團擁萬松法身不動聳千峰知師常說無生

處一段難禁祇自知

山中雪夜

雪擁千峰獨閉關寒燈深夜照衰寶心灰已絕紅塵

夢誰信人間有此閒

閱華嚴經十地品夢中偶成

薬輕舟一釣竿鈎頭香餌未會殘頂須入海深撈

提莫潘蘆花浸水灘

思鄉曲二首

余十二歲離鄉今六十年矣適鄉人遠問於山中。

因赋此

門前高鄉映清池常記兒童戲浴時六十餘年如夢

5

事幾回船動故園思

青山一帶邁河流家住河邊古渡頭自小雕鄉今日

老此心不斷水悠悠 懷大都龍華主人

月縱然相見總非員 龍華樹下有緣人一別難求似昔親幾度夢魂飛夜

入山

直入千峰不厭深最幽絕處可安心松門任使青苔

厚從此時人役處尋

曹溪堂主俛無昂公來訳二首

下只恐今生是後身

自別曹溪已十春常思香水一點唇夢魂時坐松陰

溪上梅花不断香幾回香霧湮衣裳年來每到看花

。處 一似當時坐法堂

送青林熙公遊南歇二首

憶昔曾登七十峰倚天傍日撫長松幽巖絕壑探奇

遍君去尋余策杖蹤

萬峰深處碧雲寒會結茅鹽學懶殘牛糞尚埋煨芋

火君應一撥地爐看

偶成

湛海波澄一物無寒空深夜月輸孤但看萬里纖雲

断自覺冰心在玉壺

集外詩五首 喜老母遣弟至

天屬憐同帶君恩賜一身生還如有日尚可奉慈親

憶故郷居

家住龜山陰宛似恒河曲却憶兒童時熱在河中浴

門前一小橋幼見水衝斷欲架獨木枝路遠猶未納 夾岸柳陰濃當戸南山翠手種碧桃花不知在也未

却憶聚沙時相戲常生腦只記童子類不信今衰老 幼小同讀書連牀還共被誰知一別來看看六十該

憶家山菴居

樓居水竹總相連長夏清風白晝眠此日炎荒萬里

卷四十九

外囘思恰似幾生前

菩薩戒弟子

馮昌歷

日錄

盾本昂

宰官弟子

王安舜

僧知融

劉起相 暴難

全較

長春社弟子

梁四相

曹溪中奥錄上

中奥因緣

來攜菩提樹於五羊之法性寺藏云百六十年有內 以名焉其道場自梁神僧智樂三藏從西天汎海而 師口曹溪者乃昔曹权良為魏武之裔避地於此因

水鉱之而甘且香乃日此我西天水也原上必有聖 身菩薩於此出家度人無量將入嶺過曹溪水口掬

地因海流而上至觀其山似象形日此山宛似我西 六十年後當有內身菩薩於此說法叔良即白州牧 天實林山也乃謂居人曹叔良日此山宜建梵刹百

5

之未幾有害祖者祖遂避難於懷會隱獵隊中一十 說法多年雲集者衆以其山如生象齒鼻完具先寺 髮即回曹溪開法於實林時山已易主為陳氏矣祖 涅槃經義知是異人乃白其父兄重修實林延顧居 某具奏梁武帝遂命建寺額日實林乃開山之始也 許之祖以坐具一展盡單四山之衞時四天王出現 於左領大牙之內其鼻在右業為陳氏祖墓故其寺 **五年後至五羊法性寺露穎而出遂於菩提樹下剃** 囘至曹溪時實林已廢有尼僧名無盡者見六祖問 至唐龍朔間有新州盧道者得黃梅衣盗號爲六祖 但先祖墓在寺右他日修建望乞存留又日此山 四隅亞仙即許之日也知和尚法力廣大富盡捨之 址甚迫隘祖一日謂居人陳亞仙乞一坐具地亞仙 山形風氣完密即少林已下諸祖道場未有如此之 已來四天王內周環數十里爲一蘭若並無民居其 乃生龍白象來脈他日與造只可平天不可平地於 勝者向僧皆以爲藏修地至我 是亞仙遂攜家隱去不知所之故此山自六祖開創 國初開阡陌而環 形

思果作僧至流離於是一時當道汲汲拯救之初制 放嶺外初入山禮祖見其凋弊不堪之甚未幾而既 道則開張市肆宣特鳩居鵲巢將使狼據師盈僧 僧不察以山門通湯源入府孔道而漸成窟穴羅於 流棍漸集於山中始以傭賃久則經營借資於個 藝學畜不異俗人然從來未有民居及弘正間四方 府大司馬陳公欲予這数正之未既而觀魯海門周 **僧徒竟為此累以至幾不可保矣丙申春予蒙** 山之內皆爲田疇敢入版籍則僧以務農爲本業樹 業而 公乃極力致予因是寺僧某等相率來歸請授具戒 **捨寺而住莊菴則山門日空流棍日集旤害日作而** 道護法神力冥加八年之中略有頭緒雖未究竟卒 概皆大型極弊不容一日安者幸仗 爲心遂拚捨身命一一綜理次第建立如下所列其 堅意懇請予應之於庚子秋九月入山即以 公甚留心祖道方從事於此頃即入賀去醫巡道祝 此 謹守勿失亦可保此道場世世無處矣時師命昌 心層俱竭其所建者皆可爲恒規僧徒苟能自 佛祖之靈當 組庭 恩 亦

例列爲十則其示衆法語清規手礼雜著,並次第於即日錄之久而成帙題曰中與實錄彷遙忠十品之歷等在寺訓諸沙彌凡所作事皆目擊之及所發言

培租龍以完風氣

がけ

山如固有於是改中路於曹溪邊為迴廊右繞祖庭

而行入後山由是風氣始完其於山門之內凡有凶

煞者盡除之而衆僧遂安其雕殿後一澗爲蜚錫橋

沙彌百餘人每日各擔土十囘以培之三月而成

擅土列師知其信然乃令所選三學教授價率肄業

之菴乃重興實林之主故師中奧必首新之此最初一小嶺如舌狀右一窩鉗即右額古爲無盡尼所居過橋爲卓錫泉即象咽喉師引其泉入香積廚泉右

新租庭以尊瞻仰

入山開創之始也

關之難爲力也

徒出入皆避影潛蹤可恨也師初至首以作養人才一個及住持方文數輩而已以是山門任流棍縱橫個百房皆腐其戶入門絕無人迹唯粗殿侍奉香火數本寺僧徒向以便安莊居頹藝畜養與俗無異寺中本寺僧徒向以便安莊居頹藝畜養與俗無異寺中

驅流棍以洗腥穢

今禪堂諸僧皆吾師作養之人才也又謂佛法所實

熏聞成種嶺南久無佛法熏習以乏種子故信心難

備之如是三年有成者乃為披削為僧總人禪堂以

璋梁生四相教習四書講貫義理其束脩供懿師自

習出家規矩令知修行讀誦書寫經典各有執業即

收風水將山門大路東西填塞移置溪邊直出水口 医心腹之疾也不瘳則六祖慧命終難救突於是薬 得概申來僧之情狀乃寢其令幸得免即欲以師往 法之實也但出一令實守土者嚴督之此一尉吏之 者不便於食宿矣然終無術以去之也居三月歲春 爲通途如是則向之市店皆團於山門之內而往來 寺僧懇請師應命於是九月入山見此輩縱橫乃祖 師以整顧之庚子歲公亦以入賀去瀬行面囑且令 南韶道配公蒞事自號曹溪行脚僧痛惜其弊力致 整之師以方在席稾未敢奉命明年戊戌屯鹽道周 勘每至一莊居備估其值輸牛乃免由是寺僧盡入 度嶺乙二年爲丁酉歲初謁 網羅業已失其半而禍方滋蔓不遑一息安堵當師 存片瓦於是山門百餘年來所集腥穢一旦洗之而 任耳歲旦行該縣坐守驅逐不留一人舖店盡拆不 公署南韶事欲拯之屬師修通誌 未幾入質去己亥 衆偕之禍害永絕矣鋪店旣拆市街一空師即於西 制府大司馬戴公備陳爲害之狀公日此寶 制府大司馬陳公因

大親矣為害之源不能盡述而根深難拔一旦盡絕在上今則移置溪邊開闢壅塞相望如引繩遂成一初則一錢而左則列肆直抵當心因盡拆之石坊无修公館以爲潏源官長入郡之停驂處其山門道路街向之屠肆修旦過堂以接待十方之禮租者東街

復産業以安僧衆

概錄於此以示來者爲龜鑒云

你凡人雖不善必有本心之良荷開曉分明人各自 然凡人雖不善必有本心之良荷開曉分明人各自 是重累者及口腹虚花者罷之於是盡焚其券而以 息重累者及口腹虚花者罷之於是盡焚其券而以 是重累者及口腹虚花者罷之於是盡焚其券而以 是重累者及口腹虚花者罷之於是盡焚其券而以 是重累者及口腹虚花者配之於是盡焚其券而以 之情得以安居無護矣時人或慮師任怨者師曰不 之情得以安居無護矣時人或慮師任怨者師曰不 之情得以安居無護矣時人或慮師任怨者師曰不

他虞

知其非無有不心服者於是諸楓漸引去然亦竟無

殿齊戒以勵清修

清租課以神常住

祖師貸約中載七八分之利息者師扣之主信應云師初入山於祖殿閱常住歲計記籍見券帖數紙皆

收支於是總計各莊每歲衛足若干兩計其所入將 尚有剩餘從此不唯常住豐騰而 本寺各項應用派有定規著為章程纖細不遺除支 限約赴寺交納仍設庫司立管常住監寺四人執掌 敕賜曹溪南華禪寺設立常住**重聚**長生庫註配出 雨普語且不爲泥犂種子矣其清規條例別列如左 血書盟不私一毫晚集各莊佃戸立定規則歲期以 師即選案學公正廉能者一個管事令對祖簽書刺 不完徒有虚名而無實惠所以常住日見其匱乏耳 銷繳及察其故乃管事與佃戶通同作弊故致拖欠 衆日各莊逐年但聽十房管事僧輪流徵收即聽彼 田每藏總計約租有四百餘金何所支銷而言不足 詢常住舊有香燈莊田租稅何所歸耶即聚來備查 此常住供應缺乏力借貸以支給者師爲之痛心及 **祖師香燈有黃巢濱源補鉢及本山鐵監各項莊** 祖師法利如一

納錢糧清規定格題辭

法本無畜積何有常住次因老病比丘不能行乞命 夫惟吾 佛世尊住世之時初但獨衆持執行乞食

5

越凡有支取所需必真明住持准驗照帖明註庫記 就衆中擇其公正廉能寬厚仁恕者充之其經手支 施利及莊田錢穀俱有典守故寺有主者稱為住持 以備稽查放常住之物毫髮無差是則叢林如一身 給者則又有執歲執月料理山門事務以應官長檀 以佐之其莊田則有莊主及徵收租稅又有監收此 持其歲計錢穀各有庫藏出內所司謂之庫司就監 設有兩序執事若都監寺監寺以掌管常住副二住 以說法爲主總領大綱其輔弼叢林助揚法化者則 域之法與 住持如頭首執事如手足耳目相須爲用而不可缺 寺內取其公廉出衆者司之恐力所不及又設副 百丈禪師始創清規立爲常住凡在伽藍之內所有 偕不思因果者多至我 僧以爲福田往往寺主濫爲已有貪婆壞法侵漁衆 至唐代累朝帝王名臣宰官長者各捨資財建寺贈 謂分其所食衛護道業律部載之詳矣及佛滅後西 同住此丘就所乞食以其一半持歸供給名日分衛 佛在時無異及教法東流自漢派平以 六祖大師之孫馬祖弟子 #

力如目視耳聽手捉足奔無不從其令者所以叢林 常住破壞至極僧徒謸迷癡蠢不知其爲何物也余 替叢林凋弊先聖無訓蔑然無知如我 牽急如星火日夜追遍傾家賣產者過半以致 不堪看為之徘徊泣下者久之且僧徒被害官司勾 六祖大師睹其道骨儼然如生而山門寥落之甚殆 爲禪宗之源叢林爲天下冠香火供養不滅在昔 之楷模自古叢林之典刑也夫何近代以來祖道衰 興盛法化昌隆外侮不侵內障不起此 庭廢墜幾如埽地矣幸荷 因弘法罹難蒙 以 已亥冬公面力囑余明年庚子春正月復命寺僧真 **次蒙南韶祝公痛懲僧徒之非戒殺孳牲力救之乃** 恤之次蒙屯鹽道周公署南韶略革應官酒內之弊 命合山衆僧再三請余入山料理於萬歷二十七年 者故凡山門事務一有所作則上下同心小大一 行裕淨泰慧珊願藏等持書走五羊促余入山余 方在行間未邊應命四月公以入質北上余送別 恩遣嶺外於萬歷丙申春二月調 制府大司馬陳公稍寬 六祖曹溪 佛祖度世 龃 IIII

鼻以厚 於是年十二月復走端州謁 內翕然改觀而山門內向爲流棍潛住霸占寺基開 概有冲傷刑剋者去之破壞者補之塞靈源門培蒙 學擇其衆中學行稍優者爲教師次觀山門風水大 法華經次選行童可教者若干名智讀經書分爲二 立十方旦過寮以延四來被子為挂錫之所額日一 令以驅逐之尋即令下曲江勒限三日內盡逐出境 如豺虎習久成風年不可破甚爲大蠱竊爲隱憂余 **設舗店酒肆屠活巧設經賭勾結土完騙害寺僧橫** 入山至則先選僧若干爲授具戒同集殿堂二時轉 宿覺將通衢改於溪畔往來行止各得其宜無復混 公館以爲滃源及諸過客停聽之所額曰三生來右 街市盡歸常住余乃因而塞其東西穿心大路左立 不許容留一人一店於是墓兒屏跡將前所占寺基 逐 靈洲唇公再三面叮嚀之余於是歲秋九月方杖策 春正月朔之三日奉 叢林自此潔清梁僧自此安枕矣余於明年辛丑 **祖庭關山門路移石坊以受元氣不三月** 制臺徽以爲地方之務走青 制量大司馬戴公請

常法照數支領完納不致拖欠胃破其上司官長入需庶省煩擾其各莊收入在庫租課查照田糧差徭頭派定每僧量攢少許預取入庫以待上司不時之

練曉事信十名充之其一應所須該用之物俱照人

而向之常住祖課盡爲此輩乾沒極可痛恨今擇精

差役迎接官長供應府縣取辦俶茶楼櫚果省之物

徒妄起希圖生心象法擅改成規如有此等則上稟 執事者宜各勉力務要奉行不許日久因循無賴信 外其一切事宜自今萬歷三十年更始永為定式諸 大關法運所係非輕除前壞法弊端一切置之不論 浮佛士矣曹溪祖庭中與叢林紀綱再振在此一學 爲衣食之資斯則衣食足而禮義與即穢邦可轉清 盡行受戒以免玷辱 優之科常住可為長久之計矣仍將合寺大小僧徒 錢糧無浪費之條典守執事無自盜之罅衆僧無煩 **鉢訓育沙彌以增後生慚愧亦有定則如此則常住** 儒師乃予自備其僧師則出於塔下減損 巴上四則俱在庫內支銷獨教授行重束修之資除 均平不致嗟怨仍勘收租全缺量爲為縮以彰動情 殿堂香燈之用各有定例庶不失焚修供奉報本之 意其執事將價終歲奔走辛苦亦有關勞務使勞逸 彰報應即使姦盗壞法之徒生遭王法死墮阿鼻因 山應接所費設有定規亦不致偏累執事其 齟師 靈通 護法伽藍神目鑒察必罪不有明 **租庭之阿且省酒肉之費以** 祖師衣 佛 祖

本待後租課節年補還今將應行條例開列於後承銀三百二十五兩在庫抵墊陸續支銷以爲常住眼租課俱係下年徵收致庫而現年預支無出余先備租課俱係下年徵收致庫而現年預支無出余先備

爲定規以便遵守

計開

一設職事

人監政租課事刻弊資不使監觸為衆紀綱管鎖縮經理收貯一應錢糧什物庶有責成內以一人軍山門大事以副住持凡事務同心議處內以一人軍監寺四名軍事庫司收支常住錢穀置辦什物主張

一不致疎漏

一設庫司書記一名專管收支登記帳簿以備稽查

一戸長一名此乃舊規專管里甲差徭糧稅仍照常

一規此即古副寺

寺**建**差以副戸長亦名直蒙 中都管一名此職即古規都知事乃知事首領今即 製之愼之 戶通同被蒙常住拖欠租課或貧圖小利擔起佃民 公廉老成者代之如有不守满規抗法循私或與佃 治之以養其餘住持亦不許姑息循情以養成大害 草黜別遷能者代之不待歲終重則呈首到官以法 白住持鳴鐘集案對 制削來信有傷大體者都管監寺不許容隱即時舉 出衆者照舊留用不堪者或有他緣不能應者即選 乘者充之如遇年終更代之期住持監寺仍祭賢勞 已往皆無賴者多不能料理大事今特選擇才力出 照本寺十房畫規輸流各房挨當歲終一換故前此 直月以脈接官長幹辦山門大小事務此十執事今 都寺九品此即古知事以佐都營徵收置差輪流 祖師前明證其罪輕則量懲

明收支 收有五数

造及齊情鏡體 租課 及應入官房產業田地銀兩等物並就庫中回買物 祖殿每年施利及銀帽器物 一官長入山及施主隨喜布施一一募化修 一哥過犯僧人入常住錢穀香油 常住各莊每年

> 應收者當 查每飲各置收簿二扇住持與庫司各執一扇凡有 屋什物契書各有項下一一條陳登記籌籍以備稽 料價值及亡情應入常住之物及常住置買田地房 離殿對衆收之

治罪 無印票者即係通同侵欺住持頭首定學題官如律 方給田甲以為準的執事之人不許私給若董田和 住持魚封即於庫內取庫收印票一張合住持數算 將銀數上對合縫印仍各魚花押於執事名目之下 住持監寺交兄監收執平持衡勘兄明白書記登等 都寺同催各佃總責田甲收銀完足親到 凡各莊每歲租課各有上下限期預期都管督率 聖殿富

貯積 護查出定以侵尅官物罰治 集衆營舊眼同勘驗塔主不許應匿與執事通同黨 年終代期總類若干見數明白勘校應存留者照舊 帽花器及銀兩袈裟衣物等項塔主零收住持登等 一凡春秋二季十方施主主 祖殿應用者交割庫內照式收支臨期務要 祖師前港香供養銀

得隱漏但有應收之物而不登籌者即坐書記監寺但係常住之物俱照式立籌一一條欵如法收之不一凡官長布施及募化修造錢穀齋僧稻糧並一應

通同作弊之罪

一凡應用支銷銀穀物件等項直月都寺照式寫支 門一紙先到住持處請稟住持許支將票抄落支簿 門無圖書號票即係昌支少則對祖集衆量罰多則 如無圖書號票即係昌支少則對祖集衆量罰多則 如無圖書號票即係昌支少則對祖集衆量罰多則 如無圖書號票即係昌支少則對祖集衆量罰多則 如無圖書號票即係昌支少則對祖集衆量罰多則 以監收自盗論

持處對查明白批不差二字發送庫司以便年終類發穀物件月終結算明白具造月報小冊一本送住僧定要專住家一月照管常住內外大小事務支過僧定要專住家一月照管常住內外大小事務支過一設長生庫觀此儲積監寺掌理錢糧之所多人不

結庶不混錯

一凡年終於十月朔日更代之期預先住持會案結 第一年收支帳目是日監寺書記十房都管各執簿 第一年收支帳目是日監寺書記十房都管各執簿 類衆眼同摸算明白總付書記具造文册內開今將 其年分本寺常住共收租課錢穀若干布施若干某 被若干今某項及雜項支用過若干見存若干或有 租稅未完若干一一條別備造總册一樣四本其一 沒顧而殿收贮函中其一送中與常住其一落庫司 以爲永遠規格其椒茶楔果之類一一如之今將歲 支額定項下開列於後

計開 有十五数

若有新增田土及遇閏月差徭有增無減若遇免稅一辦納糧差隨田照例每歲大約銀一百兩有餘

一佛殿香燈每歲設銀十兩則有少無多

一副殿供養香燈每歲設銀五十兩

護法伽藍月月朔望齊供每歲共銀十二兩閏月

THE

一住持接待上司往來官長每歲舊例十一兩新增

一戸長接待官長毎歲舊例十兩新增二兩

監寺四人司庫書記一人每人每歲齋食銀三兩

六錢共銀一十八兩

同接待不許常住支銷

六兩

新設山長一人看守祖山樹木修理栽培每歲量

都管都寺十人每歲齋食銀三兩六錢共銀三十

一藏主維那六人逐日領衆各殿念誦每人給布二

給食米銀一兩五錢

疋折銀五錢共銀三兩

常住差使供役每人每歲工食銀一兩二錢共銀三 一老郎二人伴僕一人看守公館打鐘鼓報客以聽

兩六錢

施者此後之主者用者及執掌者勿得輕視自取重 兩此乃額外係 中與祖庭重建無盡養每歲設供贈香火銀三十 **祖師自受施利所置又非他人布**

> 等官及尋常上司差使 此銀入堂作十方常住供衆之用與養無干 司外其餘府縣多遊守府賞功中軍把總衛所巡捕 **您真之愼之此項銀兩自三十四年修起禪堂即將** 一凡遇嫉兩院入山除塔主住持戸長三處迎接上 人役仍照舊規分派十房公

以上四則管事迎接過後即具支票到住持處食印 儒學每飯一餐銀五分 正堂每飯一餐銀一錢 湯源縣出入往來,專在直月管事迎接**發食定例** 相公每飯一餐銀三分 佐貳每飯一餐銀七分

到庫支取若不係本縣仍照舊規

疋每疋折銀二錢五分此俱在 一教授行童經書教師三人每歲共銀十兩各布二

生庫照監寺例節年支給不必零星其供應飯食隨 二錢此在常住庫內支給此項儻融殿無出即在長 祖師衣鉢內取當年塔主備之外每人輕一雙折銀

用永爲一定規格後來住持頭首執事之人不許生

以上條例仍照租師香燈田配均據公

禪堂衆數

造就天官淨土不知因果者便是造就無量地歐鐵 畏哉凡我執事各宜痛省思之念之 狀銅柱焦熱鐵丸萬劫苦楚不止披毛戴角銜鐵頁 欺盗古德云常任之物幾如鴆毒纔君一粒則裂肝 萬歷三十年歲在壬寅春正月上元日立 鞍關償宿債而已也況王法森嚴 碎首通身潰爛故凡司執掌者能知因果即此便是 絲毫為重益是施主福田種子信心膏血豈可輕心 諸執事者務必遵之纖毫毋忽嗚呼念哉常住之物 不轉者余稟 餘經營得法而日增月盛叢林未有不興法輸未有 能擦節浮費則錢穀不可勝用矣自此歲歲儲積有 取地獄古德云常住之物住持人與司其出入者善 人當以厚實常住為念切不可起希圖小利之心目 費併係常住公用必不得已者方許動支但可省各 別立名色妄擅支取除當修補山門及執事出入盤 除上支銷尚有餘剩者執事之人亦不許巧設事端 心饕餮常住循私任情妄自增減即每年祖課 祖命整據傾危扶植顏綱非爲細亭 神明司祭可不 完足

初本寺翁源一莊乃鄉民謝氏所施免慮糧以蘇賠累

計得二十六兩末足續查深凍對面山鄉舊有盡毒 門陳白蒙行本縣查無礙抵補不得仍累寺僧本縣 即以廠稅入內監此告軍門戴蒙准仍照前行 抵補以免管累一向無異主萬歷庚子推稅使者出 意有所欲於寺僧不遂因豁於那丞謂此莊厚利皆 田一所向未起科遂將此田設租三十四兩取足具 再三挨查無出因議各山通江小河出穀小艇設稅 監自行差官徵收則無羨餘可扣師知之親詣 寺六十兩又因佃戸姦頑拖欠累及寺僧無已慶告 以抵曲江蛋戶處糧具申兩院司道立為章程其存 歸於僧丞誤聽值署府事遂將本莊祖銀分六十兩 申准議自此丞杜山門之害皆・制臺護法之力也 本府印詳將含洗廠稅課乃 六年間遊學林淡乃本府王郡丞之親友送寓本寺 上司甚至費千餘金竟不能免後遇 六祖爲供贍香燈者蒙入租課銀一百二十兩萬歷 軍門兵襲內扣美 軍門劉下議 嗣稅 軍 飲

既免此累而本莊佃民姦頑又以隔縣難制向以此 得價收贖寺內近田爲便具告軍門准批本道行府 得價收贖寺內近田爲便具告軍門准批本道行府 得價收贖寺內近田爲便具告軍門准批本道行府 別賣情願重支增温永守寺業無替曲江二尹徐公 別賣情願重支增温永守寺業無替曲江二尹徐公 之外量加新增租銀一十四兩有零具中上司群九 之外量加新增租銀一十四兩有零具中上司群九 之外量加新增租銀一十四兩有零具中上司群九 之外量加新增租銀一十四兩有零具中上司群九 文外量加新增租銀一十四兩有零具中上司群九 文外量加新增租銀一十四兩有零具中上司群九 文外量加新增租銀一十四兩有零具中上司群九 文外量加新增租銀一十四兩有零具中上司群九 文外量加新增租銀一十四兩有零具中上司群九 文外量加新增租銀一十四兩有零具中上司群九 文外量加新增租銀一十四兩有零具中上司群九

復配山以杜侵占

州始開阡陌定并田本山盡為豪右並吞時年價滿之一向有價七主名小南華其來久矣成化元年韶之一的有價七主名小南華其來久矣成化元年韶曹溪祖山宛若象形前後首尾分明今山後一帶乃

害然竟以堅固立碑為金剛幢矣 源師自行募銀二百兩將前田贖回連後山場樹木 詣山中踏勘定立界石斷將前田令價收贖以絕圖 批 家脊與祖山中分且砍伐漸侵內**地師心痛日從此 永永之業然師以此致怨而不法之僧交結外侮為** 祖山將盡為民業矣遂激勸衆僧赴告 害竟不能安各歸手住遂棄此業萬歷二十年間豪 滄縣公具疏赴 民江應東假買僧田盡占後山一帶圖爲風水以至 **省莊爲首懲也後因僧多不律致附近居民蠶食爲** 並盡爲禪堂永遠供贈不唯保全祖山且爲禪堂 本道行府親勘比蒙署篆肇慶府通判萬 關奏行撫按勘定復業則以占案 軍門蒙淮 親

開禪堂以固根本

諸祖出身之地故天下禪堂傳燈所載者一千七百万養育材器之地自古爲國者以儲材爲本而法門亦然自達必西來衣鉢止曹溪當時 六祖座下悟亦然自達必西來衣鉢止曹溪當時 六祖座下悟師一日示衆曰叢林之有禪堂如 國家之有學校師一日示衆曰叢林之有禪堂如 國家之有學校

之僧濟濟可觀儼然一道場矣師以禪堂既立而食 安本寺作養後學僧徒專心淨業幸有成規則在堂 能久因立十方堂於山門外以接待往來而內堂但 全舊制其規模已盡此矣又思若照諸方常套決不 易一方得均齊方正竭盡心力乃起禪堂一區雖不 各移僧房貼價另蓋換出禪堂空地寸寸計之以十 成人教而不育則如農知種而不知紅終難成實若 甚哀之因思叢林百年須樹之以人今選沙彌教習 指為難遂將前本寺供中奧菴租銀三十一兩又將 察地宜自以衣鉢滅口之資積金若干兩搜買空地 無禪堂後輩將何賴焉以此日夜以思苦心焦慮逼 則溷厠豕牢亦各有九以清淨實地變爲糞壤矣師 幾於湮沒其舊基地雜居僧房有七而香積廚有二 乃禪宗根本地也夫何歲月巳久僧徒失守而禪堂 餘人皆出曹溪一脈如孔門之洙泗是則本山禪堂 買旃檀林房一座換香積厨後僧房二主一併通歸 **爾源新增租銀十四兩告贖業筍莊田地山場原價** 二百餘兩並買黃山柴山一片用價若干兩又將自

> 而之則 佛祖慧命可賴此永固矣 安享者可不知其本耶督徒欲食已足又能以法食 今在堂督徒所受用者皆師當日苦心血汗也後之 今在堂督徒所受用者皆師當日苦心血汗也後之 不完皆出師一力自此僧徒衣食足而禮義與故 下一金皆出師一力自此僧徒衣食足而禮義與故

附錄未竟因緣

右上廬列乃遵大師所訂壇經通志十品之規故摭若上廬列乃遵大師所訂壇經通志十品之規故摭若居之功十之三其大殿一區未竟之功十之七修持据之勞精神疲竭其已成者開闢之功十之七修持据之勞精神疲竭其已成者開闢之功十之七修持据之勞精神疲竭其已成者開闢之功十之七修持据之为十之三其大殿一區未竟之功乃 六祖未竟之功也久欲經營力所不及於戊申春三月嶺西竟之功也久欲經營力所不及於戊申春三月嶺西東京之功也久欲經營力所不及於戊申春三月嶺西東京之功也久欲經營力所不及於戊申春三月嶺西東京之功也久欲經營力所不及於戊申春三月嶺西東京之功也久欲經營力所不及於戊申春三月嶺西東京之功也久欲經營力所不及於戊申春三月嶺西東京之功也久欲經營力所不及於戊申春三月嶺西東京之功也久欲經營之所不及於戊申春三月嶺西東京之功也久欲經營之所所訂壇經通志十品之規故摭其事之人。

勢師遂已如是者三日師默坐卷中閱金剛經乃日 此正予著相之過也仍著金剛決疑解三日而成衆 奠工以有礙之晉房須充移空地以堆拆謝之材料 殿堂若干座條牒具訟於道府師聞之日諸辱可安 已酉孟夏材木盡載運至濛褢師還山集衆議擇日 乃止倡者自憂不獲巳乃妄捏師侵寺若干金拆毀 時一二不軌價徒以爲不便因而倡求鼓躁如作亂 有千金師親往西寧求大材事事皆一肩荷續明年 通分通省司道府各助之不日軍門二司道府各施 便須衆心合成但仗法力倡導足矣於是議製疏十 以世法拘又不可期以速成在臺港一力恐有所不 此為緣起耳戴公即願力為之師曰法門之事非可 私計日若公所云猶未也師日佛事如空中雲第以 公請師面議之師問而喜乃具圖式往謁戴公按圖 況大厦將傾佛望之危乎此仁心者所不忍遂語馮 戴公告之故公曰孺子將入井仁者必匍匐而往救 公日固非一力所能姑徐圖之公歸見制府大司馬 曰請力任之師曰檀越果發大心在醫欬彈指間耳

盡矣力以病謝竟浩然長柱師乃著中與曹溪資林

四慰留還山以竟前業師日僧以因綠爲進退今綠

六祖如綫一脈賴以存而師心迹始大白矣當道再祖思自死以法科抵罪禪堂香燈屬門人間修主之

覆勘詳確重委陳郡丞到寺按狀歷聚事事皆虚願

復出亦難之也何幸徼 細事哉今千年矣其大壞極弊一至於此即 曹溪爲禪宗洙泗海內叢林傳燈諸祖皆出一 夫建功成事之難也奪獨學朝事業哉即法門亦然 也此師末後 輪由是益知 山木幾會中興護法 吳公大發歡喜願與 不已衆會因具白師之功德及山中衆等戀慕之心 得矣越四年庚申方伯吳公入山觀寺之規模三歎 赤石公爲檀越留師休老於巨山明年丁已夏師還 弟子輩如嬰兒之失慈母也日夜以思求師復歸難 匡山家結屬於五乳峰下自師之去曹溪其受化諸 柏雲楓二大師黃梅正靜峰司馬致書浮梁陳大参 病不能安遂史杖之南嶽越丙辰夏東遊吳越甲紫 月心諸弟子器留居五羊長春菴又明年癸丑師以 禪堂香燈記具述其事刻之貞石時萬歷辛亥秋九 力而更新之不八年而功過半無論其財法二施 一段因緣因記之以示來者王安舜日 六祖之靈有感簽而法化之機有在 祝公亦至一力堅請師轉法 聖天子之龍靈師以逆綠至 六單作護法遂具書請師還 。脈党 六祖

手生民皇皇不安於師默運慈力排雞解粉酒施密 其行事之概如此師在行間十有八年所著述有曹 昔 曾授記 也耶若師之心如虚空固不可涯量**略記** 南 子人人危之師恬然略無芥帶無論其妙悟立機 化斡旋其間未嘗一求人知或以耿介獨時即 求之亦未易見也然師之眞惡如物應化居常切言 罹難始及開示門人法語偈項計數百萬言然皆在 起信肇論莊子內篇解大學決疑其詩有夢遊集自 剛決疑道德經解觀老莊影響論唯識百法規矩解 溪通志楞伽筆記楞嚴通議法華擊節品節通議金 所謂現應化身隨類而說法者耶不然何以竊 而禮金仙未嘗一見其情容至於地方多故當道束 戟大將軍轅門鴈行卒伍叩首階下出入如坐蓮花 不爲世主之忠臣即爲怒父之孝子每見在行間執 即堅忍不拔之志處困苦污辱而甘心若飴在古人 才磊落印隨綠應物一味平懷威聚首而語日此 奔走間凡有所求信意揮應未嘗 六祖爲佛法源頭何幸千載之下而一再見豈 一安坐經思也又 調蘭 諸弟

憨山老人夢遊集卷第五十

之容耳欲知吾師請與如吾師者

餘耳師之不可見者又可得而思議耶或日詎所謂

和光同塵微妙立通深不可識者耶余日是亦强為

其染輸入得片紙爲世實大路觀師於可見者特緒

1. 414 A4 . . . 4 . . .

憨山老人夢遊集卷第五十一

僧 本昂

馮昌歷 僧知融 日稣

菩薩戒弟子

王安舜 纂輯

宰官弟子

劉起相

陳迪祥

梁四相

長春社弟子

為靈通侍者戒酒文有引熱山道者著

許飲酒衆以侍者便爲藉口來僧壞法侍者爲倡今

日不止展轉虚妄嗟此末法叢林凋弊我願侍者蚤

揚家臨我惟侍者決無此情愚僧不達認以爲眞大

家昏迷日夜酣醉是以祖師豈不爲累我戒衆僧不

甘露漿非以糟汁灌此枯腸我觀侍者不離祖師終

達本無五蘊何有豈有真空而好飲酒祖師教人飲

日聽法豈可不知知之既眞悟之巳久寧有復迷自

曹溪中奥錄下

余初至曹溪懷避香敬謁 六祖大師見主塔僧每

> 者乃西域波斯國人乘海舶至廣州聞 月朔望之次以酒供奉靈通侍者詰其所因 六祖

· 僧日 侍 大師 佛

不化乃爲侍者洗白一心以謝衆口敬拈辦香上稟 至公侍者當初聽 成道之辰特爲合山衆僧普授戒法誠恐愚僧執迷 溪已經期年今於萬歷辛丑年臘月八日乃吾 盲不達遂為常規相習至今幾千年矣未有能爲侍 性嗜酒不能戒飲六祖大師許其偷飲以此妄傳愚 者洗其汗者末法弟子某荷蒙 因随喜歸依願爲侍者不充護法衛安曹溪道場但 命告侍者日恭惟靈通勿問所從既充護法當合 **租說法本來無物如何不達旣** 祖師攝受來整曹

為之計若真護法請從此始侍者不飲誰敢啓齒我為之計若真護法請從此始侍者不飲誰敢啓齒我解消塵滓靈源迸溢枯木囘春山河大地共轉法輪願消塵滓靈源迸溢枯木囘春山河大地共轉法輪願消塵滓靈源迸溢枯木囘春山河大地共轉法輪

曹溪祖庭地脈形勢緣起說

医山逸叟憨山德清述 四字即不識義當問之尼曰字尚不識安知義乎祖 四字即不識義當問之尼曰字尚不識安知義乎祖 一百七十年後當有聖人於此說法度人無重宜建 大教同入實林時寺已毀唯一尼僧名無盡者郡人 也養居於後,六祖訪之尼看涅槃經乃問其字祖 也養居於後,六祖訪之尼看涅槃經乃問其字祖 一百七十年後當有聖人於此說法度人無重宜建 性別山之始也至唐元朔間,六祖起新州得黃梅 大教同入實林時寺已毀唯一尼僧名無盡者郡人 也養居於後,六祖訪之尼看涅槃經乃問其字祖 四字即不識義當問之尼曰字尚不識安知義乎祖

黃梅衣鉢所在遂請示大衆即剃髮於菩提樹下沒定租受黃梅之囑遂逃去隱於懷會之間獵人隊中之祖受黃梅之囑遂逃去隱於懷會之間獵人隊中,一十五年儀鳳間廣州法性寺因聞二僧風幡之辯。

於是道分兩派後出五宗是則傳燈所載禪宗一脈於是道分兩派後出五宗是則傳燈所載禪宗一脈三十餘年座下悟道者四十三人南嶽靑原爲上首,西子得一百七十年應智藥三藏云祖既說法於此

歸曹溪實林爰自梁天監丙午至唐高宗儀鳳元年

隘乃謁里人陳亞仙日老僧欲就檀越乞一坐具塊 發於曹溪若孔門洙泗也祖晚年歸者日衆堂宇湫

日營建冀塁存留餘願盡捨永爲實坊然此地乃生正仙日也知和尚法力廣大但吾高祖墳惡在此他以坐具一展盡罩曹溪四境四天王現身坐鎭四隅得否仙日和尚坐具幾許闆祖出示之亞仙唯然祖

法社焉此寺之大成心予居常念禪門法道寥落思

龍白象之來脈只可平天不可平地遂捨之竟成大

-- 765--

造雷陽初調 宜疏清之此久顯也萬歷丙申予以弘法罹難 恩 天下禪宗一脈出於曹溪今其道不彰必源頭壅塞

之最初一步也予見寺之舊制雜亂多差不齊殊不 在鼻必有數節見一雅殿後低窪空屬北風大吹歎 爲正中主剎先開闢迴廊門徑神路廓其胸次開買 之子初入山即塞來龍之路擔土培 住屠沽作難道場幾不可保矣於是種種方便而調 予細察之其當鼻中穿一後路截為兩斷又思象命 塞不通日夜詳察思之乃因其勢列爲三局以祖庭 可觀經畫為難且工程浩大力難順整殿宇僧房扼 制量令行本縣盡驅逐流棍由是道場一清此中與 座玩卓錫泉引入香積廚邁於殿前衆得飲之乃請 護之及庚子歲時本道配公心切憐憫連請一整理 日山脈已斷此法道所以凋零也時寺僧被流棍夥 然初實林寺包於左領之內而 入曹溪觀其山川形勢宛若踞地之象牙足嚴 祖殿正坐於象鼻 祖殿後山

> 象之兩牙交合處其中浮落一山之水故其最靈有 樓前即虎沙寨胸猶是荒山中出山門一徑如車廂 前坑窪填尚未平殿前正面爲羅漢樓乃深陷丈餘 修殿乃先降其龍鑿斷合處似成一渠以放水出方 沙今為祖殿之右臂也想 龍居焉號為龍潭當鼻之右額乃亞仙祖墓之前下 未竟之功也以正殿之基本是一潭詳其山形始為 之陝隘殊無大體深思所以乃悟知為 竭而願循未滿其 養本寺僧徒業已拮据八年於茲所費不費心力已 予買空地移僧房八主乃得其故址修堂宇以安作 下即當時諸祖悟道之禪堂及香積廚盡設爲僧居 大佛殿一區列位右局因見殿 六祖乞陳亞仙地 六租晚年 時欲

耶此予所以日夜腐心而不能忘情於此也故先將而曹溪未見出一人也由是觀之道脈豈不係地脈體此其山脈已鑿地又失形故千年以來細閱傳燈

遂建樓於上而下即塑天王像其苟且狹陋全失大

潭尚未及填乎放水之道不及料理後人因其缺陷。

填其潭以建大殿其殿方成而

祖即入滅故殿前

眉目其左局即古實林寺也以方丈為主前法堂之

道馮文所公入山見其正殿將傾遂發心重修隨白 朽敗非仗神運之力安能為之耶先是戊申歲 嶺西 於 兩局騷魔料理略有其次將重整右局其工力不減 達野四來衣鉢止於曹溪而道脈源流佛祖慧命乾 衰心願未滿將作來世公案耳但念 阻其功予即浩然長往矣今已十年於茲奈形骸已 先辦木料予紹自經營方運木到山而魔氣即發遂 制府戴公院然樂助一時司道府縣上下共施千金 坤正氣並如洙泗終古人心世道所關乃我震旦國 中第一最上功德之事雖法有隆替世有代謝而大 之靈也此外更有何法爲天地綱常哉此愚思報 佛恩君恩未敢一息忘之也予初心願代 道 未竟之功第一重修正殿欲培全龍脈將殿前鑿斷 之渠重築如故內留一池滀一山之水以聚其靈將 羅漢樓改爲大毗盧殿以爲主剎樓前虎沙取用大 開明堂修兩廊以安羅漢前立天王殿以完正局外 一脈亘窮劫而常然不朽者此在象教所係山川 六租 開創時也以從山門之後殿堂八座盡皆 佛法禪道自 六祖 T

> 所皆因其舊制而重新之法堂重修但正其向即此 鍾鼓於上以全一寺之規模其餘殿後大藏經閣諸 堂之前已不可動但於山門之外左右築兩高臺建 山門從舊其鐘鼓樓原係古實林寺者今在左局禪 平第以天地大運揆之近見黃河巳清 切念予今老矣餘日無多況此何時安敢復萌此 現應化身作大佛事者平底予老矣即填溝壑特特 明之覆育 堯舜利見 藥龍挺生三五之化將在今日,仰仗 一圖以收三局爲一寺其功不減於最初開創時也 規式乃不負區區初心以全山川之道脈是即 留此重見建規以待 祖在現於世也九原之下切有望焉 社稷之龍靈風雲際會豈無大心菩薩 命世之眞人即有作者照此 聖人復出 六

大師示曹溪僧衆法語

示曹溪塔主

華開善知識者暫時一見而不可得況日夜親近隨見甚言其希有耳故昔人每云見善知識如觀優曇佛言如來出世如優曇華蓋優曇華非巳見今見當

主執侍大師朝夕盥漱茶湯粥食與現生無異長昏 之儒朝夕日觀耳聞末嘗暫隱不審諸侍者還有如 剛種子不可勝数斯皆一見善知識之功也曹溪塔 **青原皆執侍十餘年所得種種三昧妙門不可思議** 師雖久滅度而至身不散如入彈定我則謂之與多 忽使人天百萬一時得見而見者各各皆獲無生法 則如優曇華一時出現無則如優曇華終不可見耳 **永嘉之證無生者乎有若南嶽青原之妙證者乎有** 鐘鼓音聲大師廣長舌相織然說法术嘗暫歇執侍 夏赫日蒙者無不抽條發幹數華秀實而復散為金 故愛揮佛祖光明如清暘昇天只今道滿寰區如盛 也如示嘉一見印證無生强留一宿而不可得南嶽 寶如來無異即大師未入滅時與今日無異彼是時 忍乃至簽無上菩提之心者不可計也今觀六祖大 會上願見多實而不可得乃憑如來神力開蜜塔戶 身不散如八禪定是時十方諸佛各各侍者並靈山 既日善知識如優曇華則諸執侍者六時禮拜親近 順者手音法華會上久滅度多寶如來在實塔中全

> 寶中書村曹溪塔主持之以為吳日華開之**敬** 功成因緣時至何慮臺華不一時出現老人在旅泊 供養皆灌漑之功也噫靈根既在智種深埋苟灌溉

示曹溪諸僧

曹溪為天下禪宗道脈之源而山川之勝冠嶺表故曹溪為不敢望真獨實證求其有志向上一路者蓋亦為大而批其本耶然其道雖曰無相而實寓有彩典生脫死者不可勝數自爾此山寂寥幾千年矣豈非性脫死者不可勝數自爾此山寂寥幾千年矣豈非性脫死者不可勝數自爾此山寂寥幾千年矣豈非性脫死者不可勝數自爾此山寂寥幾千年矣豈非性脫死者不可勝數自爾此山寂寥幾千年矣豈非性脫死離一門與過寶證求其有志向上一路者蓋亦為獨不離望真獨實證求其有志向上一路者蓋亦為獨不離望真獨實證求其有志向上一路者蓋亦與道達即山川之勝叢林之茂亦無復當時矣況為與道達即山川之勝叢林之茂亦無復當時矣況為與道達即山川之勝叢林之茂亦無復當時矣況為與道達即山川之勝叢林之茂亦無復當時矣況為與道達即山川之勝叢林之茂亦無復當時矣況為與道達即山川之勝叢林之茂亦無復當時矣況為與道達即山川之勝叢林之茂亦無復當時矣況為與道達即山川之勝叢林之茂亦無復當時矣況為與道達即以來其風

門百廢一時悉墨宛若大鑒重拈袈裟角耳向者不 曹溪行脚僧下車不日盜叫訟息民享泰和曹溪山 得作曹溪主人是其幻化門頭現宰官身而作佛事 賀去濱行令寺僧長老率諸大衆作禮公先以書抵 香洗鉢之勞以續破法之怎余慚愧者久之公以入 因地果還生耶公久欲得區區為大鑒侍者冀將焚 識不知之僧皆煥發佛性光明此豈非有情來下種 纂其志周公以入賀去觀察惺存祝公蒞政公自號 公攝治南部心與陳公合余堅護不已但命執筆重 消余為濟然者久之而去明年秋制臺大司馬陳公 鼓聊書此以付來僧且爲異日得度因緣作升堂入 者乎葢亦世道交與故能令此山色溪聲挺露法身 復面叮嚀懇懇至再余感公此行不以官為得而喜 慚愧為法門玷懼辱粗庭以謝又明年觀察海門周 念曹溪禪門洙泗欲還余於其間爲供邏掃余是時 口因得參謁六祖大師正直衆僧燒養之餘鼎沸未 而吐廣長舌相心區區罪垢之驅不敢蹈實華過毒 室之券時庚子三月旣望

1. 1 mars 117. 1 1. 2

元曹溪案林裕木卷案兩監寺 示曹溪案林裕木卷案兩監寺

想當時踞華座萬指圍繞無異今則堂字傾頹叢林 爲能與祖庭作一日依怙者志甚般也由是衆等投 見傳識與中奧爲住持者象漢權之數人者皆暫捨 外魔織起僧徒遭難余心怒之因求當道宰官作大 誠歸依授戒即請予入山 聖恩有在未敢輕諾然 身命力持祖業以保安衆僧日夜辛勤苦心周慮求 護法制府陳公屯鹽周公皆力振之魔風稍息而信 **凋弊蜜林福地翻爲狐兎之巢徘徊久之而去未幾** 丙申春子度凝過曹溪禮六祖大師瞻仰道骨如生 法一時翻然成化乃為重闢規模大開祖道不五年 山不三月而百廢具學祛宿強選僧徒設養學授戒 以荷曹溪爲已任力命大衆禮請庚子冬始應命入 身雖未人而心已如金剛矣萬歷己亥南韶祝觀察 力已疲極矣時則寺僧有若素林裕木菴泰海月珊 而功成過半斯實祖靈默啓天龍冥護而裕輩一念 血誠眞不減包胥秦庭之哭真心實行所感召者自 不可誣也余住茲已逾五年而奔走過半皆爲經營

人同此心即合山干人亦同此心也若以此心用之 苦因亦長劫不壞生死之苦果也故曰三界上下法 於佛祖故如金剛則將來受用亦同金剛若夫用之 之背之雖身著袈裟心存業道即此以往便爲苦趣 苦蟲心心作業轉眼之間一息不來便入三途苦果 於一身謀之爲一已視區區糞壤而爲樂地受用如 唯是一心作順之即聖背之即凡豈虚語哉裕等數 磨便爲金剛心地爲成佛作祖之正因種子若夫逆 爲佛祖之事心心常住念念不壞即此以往歷劫不 見孫凡有施爲莫不皆從此心流出但順佛祖之教 用而不知吾人以之而應緣即爾輩爲佛弟子爲祖 而誘法衆生迷之而造業三途味之而受苦凡夫日 度生菩薩修之而成道聲聞取之為涅槃外道執之 剛心地也且此一心諸佛證之而說法諸祖悟之而 日諸佛衆生心無差別所言無差別之心即所謂金 子等各各數喜焚香作禮執卷乞語乃拈筆以示之 之勞衆等事我如一日獨我視衆等如一子地耳頃 恩韶赦宥即身未被衣而心巳解晚一時諸弟

> 未然依舊流浪三途沒溺苦海去也,其念之哉 未然依舊流浪三途沒溺苦海去也,其念之哉 未然依舊流浪三途沒溺苦海去也,其念之哉 未然依舊流浪三途沒溺苦海去也,其念之哉 是佛受用常在於其中經行及坐臥也汝等明見今 日老人轉曹溪為淨土驅魔衆爲法侶苟信此心之 日老人轉曹溪為淨土驅魔衆爲法侶苟信此心之 日老人轉曹溪為淨土驅魔衆爲法侶苟信此心之 是佛受用常在於其中經行及坐臥也汝等明見今 日老人轉曹溪為淨土驅魔衆爲法侶苟信此心之 以到汝等諸人出生死證菩提不出一念之頃其或 未然依舊流浪三途沒溺苦海去也,其念之哉

示沙爾智融

鄧林之木雖多成材者寡滄海之產雖眾稱實者希

習情塵障智眼也勉之勉之

示曹溪倪無昂監寺

十九年與靑原共命終祖之世故自有叢林以來凡 善知識開堂說法務在得人單以二老之苦心爲家 青原二大老而已獻師侍祖精勤日夜不離左右逾 十大弟子各稱第一而得正法眼藏者人天百萬獨 孔子曰才難不其然乎即吾佛說法四十九年但以 賣則蠹釐於百務具舉選衆僧學禮誦法擇其中堪 五人焉其所願老人爲依怙者若嬰兒之望慈母其 存祖師一脈如錢之緒者於千僧中得裕權識泰珊 婦地一衆惶惶無所依怙所以願與叢林安大衆以 度霸之初過曹溪弱六祖大師視其山門破壞幾至 範此得人之難而求其師表百世者亦更難也老人 四十三人而見稱者唯五六人大闡其道者獨南嶽 祖大師說法曹溪坐下不少千層壇經載悟道者有 迦葉契心古今傳道稱的骨兒孫者亦不易也我六 所以存叢林之志不減包骨之存楚而乞於余者不 斌秦庭之哭也於是老人哀其誠而來力任中興之 爲重蒙表率而稱教授師者得三人焉既處之蒙月 察其心術之微操履之端言行相符以成後學權前

其一心如古豪傑之所爲者希以其自愛業身而造 苦具不惜橫身捨命而甘心焉來其一念知非能體 佛祖之所化也生死升沉亦佛祖之所頼以轉也求 者獨程嬰杵曰二人楚國號多材而捐驅復楚者獨 **粗師之家業者難得其人突是知家無贼子家不破** 臣孝子者不易也余嘗謂官孟稱得土而冒死立孤 蓝多多不足奇矣以其希故見其難以其難故爲忠 一申包胥嗟乎吾徒之爲沙門輝子者骨肉肝腸皆 板蕩識忠臣若人人皆可稱忠孝則世之忠臣孝子 貌外威儀而中蛇虎者不易知也語云疾風知勁草 法也以古人授受之際不妄許可憐一失言不唯失 於山川難於知天天猶有四時之序而人者深情厚 人抑且失法眼矣知人之難聖哲所病所謂人心險 履如孔子觀人之注,察之亦非一日故諸監寺之乞 在人耳目者非一日如販黑白喷如也余目擊其操 余言欣然即發獨此三卷藏之五年未敢輕諾非恪 中證不日比肩而趨操不一志行不齊衡石重輕乙 修念祖道保護護林者唯昂監寺一人而巳三人之

> 國無賊臣國不亡人無惡行身不獨士無苦行名不 想需者之自積富患已射下。忠貞道業之不積 多種惡發身積水成海積士成嶽昂子知此不必思 各種惡發身積水成海積士成嶽昂子知此不必思 各種惡發身積水成海積士成嶽昂子知此不必思 不日不患莫已知求為可知也藉六祖知子有此心 亦只如老人之所告子者勉之耳更有何法則為墮 齊至語章

示曹溪海月珊監寺

余當丙申春二月過曹溪謁 六祖大師見其香燈余當丙申春二月過曹溪謁 六祖大師見其香燈明年丁酉魔風鏡作此道場幾至破壞僧徒無依珊明年丁酉魔風鏡作此道場幾至破壞僧徒無依珊原年遭者為哪公也庚子冬予應請入山公率諸弟可作禮者為哪公也庚子冬予應請入山公率諸弟子侍祖師塔察其供養之精誠宛若祖師在生無依珊京家家義林凋敝徘徊久之有僧具威義向前作禮問家家義林凋敝徘徊久之有僧具威義向前作禮問家家義林凋敝徘徊久之有僧具威義向前作禮問

盛之時悟道弟子三十餘人公等爲灑埽執侍人耳 時爲諸弟子殼法華經畢竟至釋迦出世同出一會 等亦非無因而生斯世遇斯事也想昔日當祖道大 恩詔許爲會以此始末徵之足見余非無因而來公 彌前補處龍華會中堂少一人即堅持此心以光祖 不然何以有緣見我親近哉昔世尊於大通智勝佛 修建租庭工程荷完余於丙午八月二十日即蒙 以取究竟全始終總是一大事因緣實非偶然且幸 之孝敬無以緊余心而叢林中興之功德非純誠難 受不能至曹溪曹溪非余來不能有今日即非公等 感格也語曰荷非其人道不虚行嘗念余非祖師攝 **叢林再整法化重與固祖靈之默啓實珊等孝誠所** 余故余屬之常住與衆等心一力忘身殉道即今日 於慈父憂喜疾痛靡不關之是知事祖之心不異事 任怨珊公居多其憂動惕厲小心敬愼端若孝子之 及余住山中最初安居凡所經營固出衆心而任勞 一一受記成佛以昔日之夙緣今日之現證則將來 耳故世尊日孝名爲戒即儒之孝爲仁本此道根 。也

幼瞻依十方攸賴即同祖法身常住矣可不勉哉於叢林有補法道者即爲金剛種子成佛真因使汞道爲任護三寶爲懷即一莖一葉滴水莖薪凡有益

寄示曹溪耆舊

餘 聽堂主主之便是奉行老人之教命也其精進道業 主泯人我絕是非戒戲論一心念佛不通賓客專以 二時功課二時跪諷行願品一卷念佛千聲發願回 殷勤雖是精進恐老者不能令折中當以四時為進 以於施主功德也其修進之規古人六時念佛晝夜 能成辦道業禪堂但有後學諷誦事業似屬煩雜唯 滅度者同力資助往生豈不爲第一最上因緣即 寂靜爲主即是真阿練若正修行處也若大衆果能 向期不計限人不計數但要老成信心寫實者忘賓 為淨業堂成殊勝事不獨不枉老人苦心一場亦可 有老人所修無盡養最極寂靜色色現成不若就此 自肯乃方親所謂但辦肯心必不相嫌珍重努力 又在大衆各自努力古人云把手他人行不得為 死的時節便是與老人生生世世不相捨雕常生佛 **祠見老人之心諦信老人之言依法修持便是出生** 前同聽法音之時其會集結社之人及安居之處 年已勝自劫千生虚過也會所最要清淨無擾乃 此

寄示曹溪禪堂諸弟子

子不乘佛戒將何以爲修行之地賴何以出生死之 安居是知老人之苦心也若知老人之心則當知佛 老人行後凡山門利害及禪堂設立汝等皆樂入堂 苦海乎老人臨行特為汝等說梵網戒不知汝等一 云戒也佛常言汝等比丘能守吾戒雖千里外如在 時諸大弟子請問若佛滅後衆等以何為師佛 祖之心矣汝等今思得老人似前教誨不可得也然 老人初爲祖 左右若不奉我飛縱對面猶千里也此吾佛大師金 尊重波羅提木叉是汝等大師梵語波羅提木叉此 修行雖佛祖滅後亦同在世親近不異故佛臨入滅 聚散之緣雖佛祖不免在諸弟子能知恩報恩依教 察不許醫生罪過不得毀犯戒根即此便是真實修 親開作法羯磨毋令毀犯令三業六根念念檢點觀 口親囑之語可不遵乎況今末法去聖時遙若佛 來未能堅持則當從今依法牛月牛月對佛宣誦然 行坐進此道不必遠訪明師徒增辛苦也若汝等向 能堅持否佛制比丘半月半月誦此戒經如從佛 師建立之時大衆不知老人之心今日 言當 弟

解戒經十重四十八輕一一戒條熟記分明如犯一條則於誦戒之日請軌範師作證衆中遞相檢事犯 者對衆懺悔再不許犯如此則改過自新道業可就 者對衆懺悔再不許犯如此則改過自新道業可就 書所犯之皋除懺悔外衆等議定活規罰例以便遵 中如老人向日所遺改條可爲常法也衆等戒經習 完如老人向日所遺改條可爲常法也衆等戒經習 之之。除懺悔外衆等議定活規罰例以便遵 時時參究久之自有發明時節如此方是續佛祖慧 命之大事因緣也汝等能遵此語則如老人常住曹 命之大事因緣也汝等能遵此語則如老人常住曹 命之大事因緣也汝等能遵此語則如老人常住曹

示曹溪沙彌

衣養憑何知見向五百衆中獨自得之且人人一箇

臭皮袋死了三五日便臭爛不堪爲何

六配一具

此堅

內身千年以來如生一般此是何等修行得如

固不壞沙彌如此細細一一思想思想不透但將壇

物何處惹塵埃一句蘊在胸中行住坐趴喫茶喫飯

搬柴運水迎賓待客二六時中一切處頭頭提

經熟讀細多多之又多全部不能但只將本來

無

雙現前定要見本來無一物是箇甚麼如何是不惹 學埃的光景若能如此用心是名参禪若参到自信 學埃的光景若能如此用心是名参禪若参到自信 學埃的光景若能如此用心是名参禪若参到自信 學文之地則能眞見六祖面目方知老人鼻孔方是 若求本分事。空思老人有何利益一往諸沙彌但知 若水本分事。空思老人有何利益一往諸沙彌但知 若人真實訓誨老人老矣此乃最後開示也若錯過 令日始都與沙彌所請開示如此一力做工夫方是 今日始都與沙彌所請開示如此一力做工夫方是 令日將來縱向十方世界參訪知識總是他家活計 會日將來縱向十方世界參訪知識總是他家活計 會日將來縱向十方世界參訪知識總是他家活計

示法空選殿主

亦不必能步步相隨心心親近唯有侍奉三費晝夜 恐心行處謂步步不離道場近處謂念念不離三賽 会觀末法比丘能踐此行者唯知殿之役最為親切 会觀末法比丘能踐此行者唯知殿之役最為親切 会觀末法比丘能踐此行者唯知殿之役最為親切 会觀末法比丘能踐此行者。唯知殿之役最為親切 以沙門釋子不知修行之要縱浪身心不能檢束三 養動成過惡故罪業日深生死難出即能遠参知識

是豪强氣沮老人乃募資此贖其故有之田地山場

有知者亦畏縮不言獨基公以昔居此歷歷指掌以

令本府清其故土正其疆界衆皆曹然不知所止即

示曹溪基莊主

是以謂祖爾田地也安可失乎遂集衆鳴於制府準心向僧居寮舍當寺之半久之僧多忘本外傷漸侵不可僧居寮舍當寺之半久之僧多忘本外傷漸侵袭裟地盡曹溪四境而山背業筍莊者乃袈裟一角一次祖居曹溪寰林不容廣衆乃同居人陳亞仙乞一六祖居曹溪寰林不容廣衆乃向居人陳亞仙乞一

別事但為護念付囑二事而已所以護念者爲欲得 問訊寄此卷請益老人復何言哉惟吾佛出世並無 人以續慧命也付囑者以佛家業有所付託如長者 三人能爲之輔翼者則德不孤事易行而祖師道場 十年淘汰只得一禪堂主一莊主兩人而已更有一 心未忘初念視老人如在左右保護常住秋毫皆如 以家業委付其子也即歷代諸祖皆如佛意志在慧 亦可保其無虞矣堂主來省老人於匡山基公因以 國家皆以得人爲難而叢林亦然曹溪干僧老人居 用一體收為深慮如此而莊主之責豈細事哉自古 有不豫之色首座問之答曰監败未得人是知古人 護眼目也老人愧無緣不能盡奧祖道因思普黃龍 規盡廢唯禪堂得昂公守之如故而基莊主精白 人中與曹溪清理常住錢穀及一切事務并并有條 苟能守之即千載循一朝也老人去曹溪將十載諸 命不斷耳今佛祖之道寄在曹溪一脈而曹溪務在 將以贖六祖如綫之脈因以基公為莊主公佐助老 盡以供膳資林禪堂贈養寺後學信徒肯辨道菜者

> 得人得人要在膳養膳養賴其四事四事賴其主者 得人得人要在膳養膳養賴其四事四事賴其主者 與法道與利佛祖慧命相積不斷天禾未來端有賴 與法道與利佛祖慧命相積不斷天禾未來端有賴 與法道與利佛祖慧命相積不斷天禾未來端有賴 於今日也但能保護慧命即是深報佛恩如此即名 於今日也但能保護慧命即是深報佛恩如此即名 經合六祖於大康嶺頭教慧明公案。「在胸中、重下 經合六祖於大康嶺頭教慧明公案。「在胸中、重下 經合六祖於大康嶺頭教慧明公案。「在胸中、重下 經一步也此則不難之人, 一世間, 一人於此參透則六祖常住世間,未減度 一十載陳爛骨董老人重新拈出因公增價則此 也今千載陳爛骨董老人重新拈出因公增價則此 也今千載陳爛骨董老人重新拈出因公增價則此

憨山老人夢遊集卷第五十一

可一息懈怠也勉之

憨山老人夢遊集卷第五十二

醖

善

日錄

通

PH.

海幢法裔今熙今光 收藏

示曹溪竇林昂堂主

不遑其居而法窟皆棲孤兔矣丙申藏老人至屬外 至若傳燈所載者自六配後不多見其人故道法雖 極矣時有子超禪師既起而大振之由是重奏其道 宇天下禪宗皆以此爲資始何其盛哉六祖滅後內 六祖起新州得黃梅衣養傳西來直指之道是時始 嶺南自漢方通中國始知有文物六百餘年至唐初 子諸護法皆以法道爲心亟欲老人往據其弊至則 得體配庭親其不堪之狀大爲痛心而去又五年庚 我明萬歷中又將五百年道場之壞尤甚於宋僧徒 人而會徒習世俗之業頓忘其本固其所也由宋迄 播於十方而留心於根本地者寡矣道場無開化主 身雕存而道場漸衰至宋業三百餘年則叢林大慶 知有佛法開曹溪實林道場說法其中自爾道產賣

悲未當一息忘之也老人之南嶽而子隨至旣而老

茲子日夜苦思老人之復至望法道之更新念念含

突安望離道之再振乎是以老人別曹溪來十年於

場破壞後學無依即老人中與一片苦心竟付流水

堂無主幾為獅蟲所食非子挺身撑拄其間不唯道

涉鉅細無遺者亦唯子而已及獅蟲破法魔黨競作 之恩者亦唯子一人而已當是時犯苟非子砥柱 即前所稱爲道場者數人亦皆在網羅求出之不暇 復之志誓死之心亦唯子而已嗟乎是知法門之得 後學無眼法幢之不固者獨昂而已至若知老人恢 流委曲調護曹溪卒無今日矣及老人給之而去禪 間凡所經畫為山門久計者衆皆問然其所經心 者教之衆中物色亦唯子而已及老人住此八年之 人為難也如此於時老人初入曹溪選諸僧徒可教 東有懼僧徒之不安者數人而已求其憂祖道不振 審願給此身命志為六祖忠臣孝子也一時更新百 求其苦心保護叢林憂祖道之崩裂深知老人建立 嚴具畢此仗佛祖護念之靈非人力也於時情滿干

 匙 學 筋 恆明自心將慧明一則公案橫在胸中重下疑情盡

夜六時行住坐臥迎賓待客應事接物茶裏飯裏拈

一切不教放過疑來疑去定嬰見自已本來

登易見哉今老人示子最勝法門所謂求人不如求 道知老人者唯子而已是則法門之人以此為懷者 化一方不少求其爲祖庭而經理家法者獨宋子超 久其哀哀之心請益不一老人因而示之日子之志 婦誓死無二心者不是過也適來山中老人留之已 春米腰石邊來故有如此廣大光明普天而地禪宗 黃梅衣益豈不是今日寶林道場乃六祖肩頭柴擔。 靈根功夫醞藉已久一旦聞經一語順悟自心遂得 已也且當六祖末出世時只一賣柴漢耳因有夙植 者獨老人而已況在曹溪有衆干人之中求其憂祖 六祖入滅以來今千年矣其道偏天下在在叢林開 時運相為升降殆不可避即其人亦不易得也諦觀 難逃於時節因緣因緣聚會蓋不由人力也且道與 固嘉而子之思亦過矣子未聞大道之替雖佛祖亦 以言語形容者即古之忠臣孝子憂國憂冢烈女節 日深且冀老人之復至或望至人之將來其誠葢難 人逸老匡山子尋印遠來見其感恩之心益篤變道 一人而已子超之後又五百年志爲祖道力整顏綱

一派一言一向皆從荣攬腰石邊流出至今供養香一派一言一向皆從荣攬腰石邊來此豈有心要求人而後是福澤亦從柴擠腰石邊來此豈有心要求人而後是福澤亦從柴擠腰石邊來此豈有心要求人而後是福澤亦從柴擠腰石邊來此豈有心要求人而後是祖澤亦從柴擠腰石邊來此豈有心要求人而後是祖澤亦從柴擠腰石邊來此豈有心要求人而後是其又何苦思寢寢望他人來作我家活計耶古人是其又何苦思寢寢望他人來作我家活計耶古人是其又何苦思寢寢望他人來作我家活計耶古人是其又何苦思寢寢望他人來作我家活計耶古人人一則公案後來便是做工夫參禪的樣子也從今人一則公案後來便是做工夫參禪的樣子也從今人一則公案後來便是做工夫參禪的樣子也從今人一則公案後來便是做工夫參禪的樣子也從今人一則公案後來便是做工夫參禪的樣子也從今人一則公案後來便是做工夫參禪的樣子也從今人一則公案後來便是做工夫參禪的樣子也從今人一則公案後來便是做工夫參禪的樣子也從今人一則公案後來便是做工夫參禪的樣子也從今人一則公案後來便是做工夫參禪的樣子也從今人一則公案後來便是做工夫參禪的樣子也從今人一則公案後來便是做工夫參禪的樣子也從今人一次,

大题癡者哉老人此說如棒打石人頭如此做工夫 則是老人時時在汝眉目間放光動地也 家事有何難哉捨此不憂更憂別事都是枉費心思 妄想無益不唯無益且增無邊生死苦海是豈不爲 多生不昧本願者生死時長常寂光中了無去來之 生不悟愛願再出頭來又或有二生三生乃至十生 不過四五十年打箇筋斗如在目前那時整頭自家 功夫般若種子就是再出頭來循是現成活計縱遠 十年能悟今生尚遂我本願即今不悟賴有此参究 相且子年力尚强果能決志從前日做起即十年二 造道者千日之功亦有十年五年或二三十年或盡 團进破自已本來面目當下現前是時方知念佛的 如此疑到似銀山鐵壁與不得處忽然命根斷絕疑 人如十字街頭見親爺一般更不必問人古人三善 面 目或提念佛話頭要見者念佛的畢竟是什麼人

示曹溪旦過寮融堂主

跋涉登山衝風胃雨躡雪履冰飢寒困苦吊影長涂 天下叢林為十方衲子行脚者之傳舍以萬里雲遊

比也或有獅蟲集此以作魔撓力不能制者多未安 內堂必使周足聽其飢者食渴者飲勞者息病者調 土矣但求一主者不易得且有即此而造地獄者比 理汚者幹濯任其久近隨其去來是以業海而爲樂 接待十万禪堂別立齊廚以便其食所需皆取給於 就澗或得一食而行老人憂之乃逐屠沽之肆闢爲 僧房皆閉門而不納即得米升合又無炊變皆拾薪 息肩之所求其一飲一食而不可得率皆能行託查 符之設乎老人未到曹溪之日聞衲子王者無安居 煙瘴之鄉出九死一生之地璽足而至此中可無接 接待十万叢林之設深有見於此也諸方四路各有 禮覲者所至必數千里外單單度衛特為此事况冒 嶺南曹溪道場六祖內身現在海內孙子所必往而 退步或有鄰峰里市容可不得其所而更之他至若 加煎使飢者不得食渴者不得飲勞者不得息病者 望父母鷹舍也萬一到處主者不得其人漠然而不 不得安則其悽楚苦惱之懷又將何以控告耶從古 而莫知所止改望一叢林以求一夕之安如窮子之

选來乞者皆我善知職爲我不請之友能成就爲無 衆生頭目身肉手足有來乞者隨與而去且自慶日 手足而施和生等無有異求佛妙道又何加於此其 心以盡身命供養十方堅志不退即是菩薩以頭目 捨此而別有玄妙佛法哉融公能諦信老人從此深 滿金剛戒品為成佛種子即此一行全攝衆行又何 者皆我不請之友融公若能以孝順心恭敬供養以 量功德令我堅固菩提願力由是觀之則今十方來 是作佛之基不用別求佛法矣華嚴經云菩薩布施 是即以孝順爲戒之本戒爲成佛之本能行此行即 孝順師僧孝順至道之法若能受此戒即入諸佛立 乃佛之心地法門也首稱孝名為戒所謂孝順三寶 以孝順心而敬事之是則以佛心為心也梵網戒經 敬事之況在法門有同體之誼又非其他可比苟能 思一切衆生老者如父少者為兄弟一以孝順心而 人願力所至也常思菩薩修行以慰安衆生爲本當 副建立之心居三年如一日也老人聞而喜曰此老 也頃昂公來云近得融公為日過堂主事事如宜足

> **租作奴郎公能體此即是代老人常轉如是法輪也** 却乃見拈一莖草即是已建梵刹唯恐十万雲水之 却乃見拈一莖草即是已建梵刹唯恐十万雲水之 型識得自已本來面目是時則將六祖鼻孔一串穿 或未然更將六祖本來無物一語橫在胸中久之一

示曹溪沙彌達一

老人逸老匡山實林堂主昂公携沙彌運一遠來參
為六祖兒孫朝夕親近祖師內身如現身說法無異何其至愚如生盲人不知日光所照已也汝又何緣不知日光之照也汝等當思何修何福生在邊地得何幸得老人至以金箆刮潑開其盲展始見天日婚然不知日光之照也汝等當思一般,其盲展始見天日婚然不知日光之照也汝等當思六祖未至黃梅但新州一賣柴漢耳一聞誦金剛經應無所住一語順斷不人人具足未遇綠開發如種在地未得雨露之遊耳人人具足未遇綠開發如種在地未得雨露之遊耳人人具足未遇綠開發如種在地未得雨露之遊耳人人具足未遇綠開發如種在地未得雨露之遊耳人人具足未遇綠開發如種在地未得雨露之遊耳人人具足未遇綠開發如種在地未得雨露之遊耳人人具足未遇綠開發如種在地未得雨露之遊耳人人具足未遇綠開發如種在地未得雨露之遊耳人人具足未遇綠開發如種在地未得雨露之遊耳

取多求忽然心地發明是時不但了却歷劫生死即 大祖鼻孔盡在你諸人手裏把往放行只由自己如 於費婆心也老人雖不在曹溪汝只將當家一則公 一念放給如此即是老人常住此山時時為汝諸人 一念放給如此即是老人常住此山時時為汝諸人 一念放給如此即是老人常住此山時時為汝諸人 一念放給如此即是老人常住此山時時為汝諸人 根做將去若是朝三暮四一寒十暴不但智種不生 投做將去若是朝三暮四一寒十暴不但智種不生 也可不可空過時光恐大限到來一失人身萬劫難 是可不可空過時光恐大限到來一失人身萬劫難

示曹溪沙彌方覺

重也若難俗緣自以爲無拘束縱良身心徒事虚華 知其所難則不當以妄想在心當面錯過乃是知所 捨離俗纏脫然方外此為人道正因且又親近知識 時而入所謂欲識佛性義當觀時節因緣汝今既知 生遷地不聞三寶名盃一難也幸遇老人爲開導又 獻今候於匡山乃拈香請益老人哀而謂之日汝等 彌如失乳兒相繼而隨者不絕如覺侍者先候於南 若之緣耳汝等念我不忘則信根既具而佛法終有 何幸也雖受化有緣而卒不能深入佛法是未種般 苦心八年寺僧闡提作難老人竟謝去之南嶽諸沙 各從本葉如是者百餘人情乎般若之緣不深老人 即諸沙爾率皆樵兒牧豎別修禪堂設爲清規令其 至則始於祖庭及諸三門百廢齊舉其骨無論大小 切示以佛法大義領荷者希第在威儀之間耳老人 居五年庚子當事者以曹溪護法爲心力致予往予 所攝也師候子於江上謂子曰某先探曹溪矣即六 祖復生不能再振也予日顧顧力何如耳及予度資 余即以弘法罹難 恩遣衛外時則以爲佛祉 神力

題門人超遼書華嚴經後

其業噫唯此不獨發心之難即已發心而能有緣遂性補書華嚴經後述其發心始末因緣也余自蒙性補書華嚴經後述其發心始末因緣也余自蒙性補書華嚴經後述其發心始末因緣也余自蒙此蓋余壬寅孟冬在實陀山題門人超邈為弟子實此蓋余壬寅孟冬在實陀山題門人超邈為弟子實

難也遇自禮余余往雷陽走瘴鄉理曹溪往來奔走

無衛日邁乃謹謹奉教閉門却埽書華嚴大經以爲

凡有序草創法道之初時在法會親炙於余者獨超

邁通烔二人而巳此足見教化之難而得人誠難之

日課且以餘力求六祖戒壇故址收贖而重新之暇出本諸同志結放生會每月有常期漸遠海濱遵為法式實余唱之而選輩能行之也今余荷完祖庭翼法式實余唱之而選輩能行之也今余荷完祖庭翼法式實余唱之而選輩能行之也今余荷完祖庭翼法式實余唱之而選輩能行之也今余荷完祖庭翼法式實余唱之而選輩能行之也今余荷完祖庭翼性一息不來便成系劫即今求其見聞隨喜現前種性一息不來便成系劫即今求其見聞隨喜現前種性一息不來便成系劫即今求其見聞隨喜現前種性一息不來便成系劫即今求其見聞隨喜現前種性一息不來便成系劫即今求其見聞隨喜現前種性一息不來便成系劫即今求其見聞隨喜現前種性一息不來便成系劫即今求其見聞隨喜現前種性一島不來便成系劫即今求其見聞隨喜現前種性一島不來便成系劫即今求其見聞隨喜現於此足死殊途與性同時調益書此經其讚法之幹具於前部之首今於逸所書不得贅譚獨申發心畢真於前部之首今於逸所書不得贅譚獨申發心畢

題實性禪人書華嚴經後

一切智無師智自然現前又曰吾今於一切衆生身人相但以妄想顚倒執著而不證得若離妄想顚倒則性法門故曰奇哉奇哉一切衆生具有如來智慧德性法門故曰奇哉奇哉一切衆生具有如來智慧德」我世尊毗盧邁那如來利成正覺於菩提場该大華

書寫三千大千世界中事有一智人明見於中遂剖

破微塵出此經卷拈示梁生轉爲利益且一微塵者

荷免災患而已實望至付家業此本懷也故先最初 生死往來六道備受諸苦不知其幾百千億恒河沙 頓得無量法樂故曰醫若一微塵中具含大千經卷 入火宅如長者之據諸子也然父之於子其心不止 大悲捨自性法樂出現世間挺身三界而開導之深 三昧也何況修習正行而作白業者乎第吾人日用 普現色身是知吾人日用折旋俯仰欬唾掉臂乃至 等大智圓照法界為體以一切聖凡依正有情無情 印說此經順示平等法界直指眾生自性法身令其 數世界微塵劫矣會不自知返省故我大師以平等 而不知耳悲天人者迷此本有智慧無明業流沈淪 飲食起居皆即普賢妙行不出毗盧邁那如來海印 悉皆同等一切聚生所作業行不出諸佛自性法身 中成等正覺轉大法輪是以此經所詮純以 切妄想無明貪瞋癡愛皆即諸佛所證眞如實智 切山河大地鱗甲羽毛蓬動蜎飛皆即毗盧遷那 味平

竟得衣蓋南來然被惡人加害不一避難於獵 禪師起於樵斧之中一聞經語便走黃梅負春腰石 數四唯得二組一人即便抽身西去六傳至我大鑒 吾佛滅度之後從上諸祖傳佛心印直指衆生佛性 從我大師忍苦一念中來豈非法王忠臣如來慈父 中十有七年後際因緣時至聊借風旛一語震動人 此事航海而來此上少林面壁冷坐九年被人毒害 布寰區見聞不少求其能知諸佛恩德者幾何人哉 剖之方示諸佛所證廣大佛法寶藏欲令衆生一眼 頭千七百員知識從此一派流出惟此廣大功德皆 天始得剃髮披衣於法性菩提樹下說法於曹溪源 者皆我慈父克家之子也唯我菩提遠摩大師特為 德與衆生者豈淺斟哉嗟乎自有佛法以來此經流 便克一念顧得無量受用也由是觀之則吾佛之恩 也然法有順漸其餘諸經皆漸剖之此華嚴經乃順 人妄想顛倒也部微塵之方即諸佛所說一切經法 明眼智人乃諸佛菩薩大悲主也剖微塵者乃破 衆生妄想之心也大千經卷者乃衆生自生功德也

衣大師之衣求其知大師之恩思大師之苦者無一 聽者日益衆矣弟子超邁實性執香作禮而白余顏 成為其開示又往樹下為諸沙彌說四十二章經則 津濟道場延諸僧衆越明年戊戌荷戈之暇乃引樹 明年春饑瘕之死白骨敵野敗而極之者萬計乃爲 人矣悲夫是可謂日用而不知也余忝在大師末法 凡在覆蔭之下靡不安然於濫載之間食大師之食 **真子者乎至今授戒之壇基爾在埋髮之道樹館存** 辛丑實性奄忽而逝所書經止二十七卷其祖超珍 手書華嚴經一部以作苦海津樂子為歡喜讚嘆一 下弟子數輩為說無常苦空之法既而註楞伽養終 行下者久之乃之戍所是秋歸會城之青門豐壁間 大師道骨儼然如生懷其法道寥落風俗繁顏泣數 弟子列弘法罹難放遣雷陽丙申度續過曹溪瞻謁 衆生流浪苦趣往來六道者如塵沙劫波於中能遇 復命實性之師明治究竟卒業滿此勝緣嗚呼悲夫 弟子即閉戸焚香始於萬歷庚子執筆首事越明年 佛法能發信心者政若大海一 眼之多值浮木孔豆

易得哉今實性生此末法仗此勝因不動步而遊華屬之天一投筆即觀利塵海會顕毗盧於當下圓行海於多劫即已生非麼生死非很死矣何況乘此津之行超珍持性所書經至乞子一言以紀其事余冀之行超珍持性所書經至乞子一言以紀其事余冀之見聞者因之而發信心但能一念同光即出廣哉之見聞者因之而發信心但能一念同光即出廣哉之見聞者因之而發信心但能一念同光即出廣哉之見聞者因之而發信心但能一念同光即出廣哉之見聞者因之而發信心但能一念同光即出廣哉光生自性法門不減毗盧遮那坐菩提樹即此便是法身常住也

題曹溪諸沙彌書華嚴經後

是即舍那法身常住也鐘鼓音聲朝夕無間是即利國融無礙廣大威德自在法門七處九會不起而昇國融無礙廣大威德自在法門七處九會不起而昇國融無礙廣大威德自在法門七處九會不起而昇國融無礙廣大威德自在法門七處九會不起而昇國融無礙廣大威德自在法門七處九會不起而昇

欣耀何如敬書始起因緣以示來者爲發心地又爲 斯即舍那現在說法六祖常住此間即予死不朽矣 喜發心奧起綠綠無盡至未來際將令曹溪弟子人 老人廣長舌也 人入此法門即塵說利說衆生說熾然常轉此法也 在前矣子感激含涕惜子不能爲諸沙彌作究竟其 願刺血而書之者斯即吾佛所說無師智自然智現 經也觀其點畫皆從金剛心中流出況有最小沙彌 數年間發心書者可期十人堂主昂公乃昔所延教 華嚴尊經意將仗此大法因緣以作金剛種一果不 師耳雖然惟此即予心血所應若自茲以往見聞隨 師也持來匡山予見而歎曰此即剖一微塵所出之 此事無異變聲予因選請重蒙沙彌教以習字書寫 暫捨此身重整道場爲圖報地諸弟子輩全不知有 錯過久矣予往蒙 聖慈以萬里調伏恩大難爾因

題曹侯沙彌血書普賢行願品

業不十年間似有改觀衆中沙彌某發心刺血書寫予往住曹溪中與祖道作養豬沙彌冀不墜西來之

塵熾然說法也嗟乎其徒在座如盲如墮是爲覿面

東廊館十月十三日午時開

已資贖業省莊田山園地上以爲供贈名爲十方常

普賢行願品以爲終身誦持老人喟然而歎曰沙彌 識法者也乃能剌血書寫此經行此難行之大事蓋 法界緣起不分迷悟不屬聖凡但有弘爲皆歸眞際 法界緣起不分迷悟不屬聖凡但有弘爲皆歸眞際 所謂山河大地共轉根本法輪鱗甲羽毛普現色身 所謂山河大地共轉根本法輪鱗甲羽毛普現色身 一三昧況此身血從法界流滴入此經豈不稱眞法性 一三昧況此身血從法界流滴入此經豈不稱真法性 一三昧況此身血從法界流滴入此經豈不稱真法性 一三昧況此身血從法界流滴入此經豈不稱真法性 一三昧況此身血從法界流滴入此經豈不稱真法性 一三昧況此身血從法界流滴入此經豈不稱真法性 一三昧況此身血從法界流滴入此經豈不稱真法性 一三昧況此身血。

常住清規

表華經一部少則二人共之俱在一時完備不許違 近齊赴 佛殿攝設不許延遲仍要編衫整齊各帶 通齊赴 佛殿攝設不許延遲仍要編衫整齊各帶 通齊赴 佛殿攝設不許延遲仍要編衫整齊各帶

延壽館十月十三日巳時開西廊館十月十三日寅時開

以容廣衆此禪堂之設最初之始也至百丈大師立 **火居止不一而清規不行即十方衲子禮** 六祖之後今千年矣久而遂廢凡本寺僧徒分煙散 惟我六祖大師說法曹溪天下衲子歸之祖設安居 如一人之身頭目手足之相須耳惟曹溪禪堂自 律條以約多人此淸規劍初所由立也自此凡天下 **吳編氓豈禪源根本之地焉老人蒙** 者茫然無歸雖有祖庭之設無復淸修之業甚至不 叢林皆有禪堂以行清規名爲十方常住雖千萬指 整理之予至則苦心一志以中興 殿宇乃清資林舊址僧房填塞遂捐資別買空地移 衆立外堂一座接納十方往來除常住香燈外即捐 **僧房七所關成一區復立內禪堂一座以安常住僧** 曹溪寶林禪堂十方常住清規 聖恩度續承 祖而至

愼勿輕忽 光揚祖道庶使法門不墜道業可成老人仰續 祖如錢之脈亦稍據其本願矣凡我弟子務宜守之 日用事宜略設條例如左賓主各宜遵守以圖禾久 壞法門不唯有辜創立之心實預龍天護法之意凡 及堂中主者不諳古德清規事有差好言行乖遠有 住安居既就四事既周恐居是堂者不能律身進道

之分即今之諸方凡在堂之僧日用助道四事因緣 若主禪堂法食均等者則有師資之分稱日堂頭如 皆質賴之叢林一切大小事務皆仗荷之眾皆拱手 今之少林若但掌禪堂事務稱日堂主與眾有賓主 其清規禮法如住持例但住持與衆僧有上下之分 內外皆稱十方以發心終行志超方外非世俗比也 以主之稱日長老爲一寺領袖一十方常住即今之 而已非細事也是須遞相恭敬內外和合以道為懷 禪堂立堂主以主之爲十万領袖故居是堂者無論 勿妄生議論以求過端所處體法清規自有定例務 佛說常住有二種一常住常住即今之寺立住持

安分中成勿妄增減

首婉言方便處之不得遂出暴言邏語任情呵責不 係當用宜與板首預先商確可否查書記轉明開支 不得妄用匪人常住錢穀當據節浮費不得過用若 得苛刻佃民以招怨誘凡一應執事務要斟酌賢否 飲食與衆同甘苦不得私自偏聚滴水莖菜以寒為 如檔梁如大地方堪荷頁衆生乃稱妙行故凡日用 港心廣大心軟和心忍辱心謙下心以菩薩修行心 心不得專任已意以取識誘衆僧有過當白堂中板 人直須言行端潔以副衆望故居是任者務秉慈 禪堂之設不輕堂主之任甚重以十方眼目指聽

第不得專任已意

一堂中歲計即常住租課每年不足三分之一所欠

甚多並無實法但憑大衆修行以感 同甘淡薄不得過求豐美妄食實質以累常住 給單布以助道心但常住歲計不足實難定規是在 龍天外護俱在堂主一肩募化萬一不足大衆只宜 作務行人苦心勞力終歲率勤多夏二季必須量

以實常住不致空虚庶可持久儻有施主專意布施學量散堂中以助道綠難爲定例若更有餘者存於當即填還今照所有施利先除還所負餘則斟酌多難即填還今照所有施利先除還所負餘則斟酌多難的人,其堂中在單價堂主多方設處否則不能以安行人其堂中在單價

随所發心不屬常例

正不得遠發麗言以傷道體 正不得遠發麗言以傷道體 正不得遠發麗言以傷道體 可以一人而肩衆事誠難一一恰好倘有差失大衆亦以一人而肩衆事誠難一一恰好倘有差失大衆亦以一人而肩衆事誠難一一恰好倘有差失大衆亦以一人而肩衆事誠難一一恰好倘有差失大衆亦以一人而肩衆事誠難一一恰好倘有差失大衆亦以一人而肩衆事誠難一一恰好倘有差失大衆亦以一人而肩衆事誠難一一。

當延入內堂寢室安居或經冬夏務盡心恭敬供養變取舉十方若是知識法師及高賢祧子即白堂主堂問訊板首即當簡衆囘體敘謝知賓馱茶不得坐

.

.

.

有辦齊衣堂亦當普請一經心檢點勿使缺乏富立察主以司接納若內堂遇察借歇三五日者其際食皆出內庫堂主務要時常

一禪堂事務至簡租課只就板首催取或堂主親微一禪堂事務至簡租課只就板首催取或堂主親微一百賢愚勿輕去留

園中料理蔬菜而已如遇普請堂中止留直日一人送打柴則行人入山此外無多勞役唯有溪邊運柴之通規也今本山道糧則施主親齎莊租則佃民自一叢林公務有事不分內外一例普請此天下古今

道心堅固者不能久甘苦行大段非世俗役使者此以助道案行人施力用以資修行其實勞者居多非一天下叢林無論內外法屬同體而在堂者賴行人

看堂其餘齊起不得躲避違者罰跪香一炷

行人可否告堂主通選其情非一偏可據故其莊民用即有務下行人叢雜或致喧爭及過費食物或偏用即有務下行人叢雜或致喧爭及過費食物或偏用即有務下行人叢雜或致喧爭及過費食物或偏寒飲食犯種種過者先有典座聽其約束如不和合惡堂主處分照清規例去留任理堂中儻見有過者亦當白堂主治之不許徑自獨言辱署以致諍論以亦當白堂主治之不許徑自獨言辱署以致諍論以亦當白堂主治之不許徑自獨言解表情不得私自驅也风係常住公務而禪堂板首領衆指點作爲一一

連坐 區留親友恐有不法被壞常住以累學者事發有犯一 一安務下行人專在堂主檢查安留堂中不得私情一

非公事不得擅用

一在堂皆係作養本寺僧徒今見叢林有緒規模可一在堂皆係作養本寺僧徒今見叢林有緒規模可一在堂皆係作養本寺僧徒今見叢林有緒規模可一在堂皆係作養本寺僧徒今見叢林有緒規模可一在堂皆係作養本寺僧徒今見叢林有緒規模可

住持當以法治愼勿狗情養成後 一天下叢林自有百丈清規永爲成法但本山禪堂

備本願中道葉置而去則立十万堂主以代老人之 續道脈下接十方以光叢林今奈老人薄德不能以 衣資以置供贈種種苦心作養無非上爲 捐束修以教習沙彌及披剃則建禪堂以教修行捐 道衰微僧失本業老人志在中與以人材爲本故始 名雖十方非諸万比也以老人入山之初切念 六組以 赳

則不久而廢是故本山與堂主有賓主之義各當以 場無堂主不能接十万保多衆若屬本寺未免狗俗 耆舊大衆各宜體亮富念 無老人之道力恐有缺漏不能周至本寺頭首執事 **旁但一應所用欠缺尚多堂主縱體老人之心願亦** 祖庭無禪堂不足稱道

有壞叢林以負老人建立之意瘦罪

道爲懷賓主各盡其禮不得任意苛責以傷和合則

六祖取譴 龍天是當謹戒

乃切救時弊說此實林道場荷能一一遵而行之則 右上條件甚多不能備悉即此所列事宜雖非古規

> 建立之心也凡在堂者各宜勉之 祖道之夷在此舉矣幸勿視為尋常輕而忽之有負

萬歷四十一年十一月十二日中獎曹溪實林禪堂 憨山老人德清書於十方常住

憨大師曹溪中興錄字

緇素仰若龍象余將以入賀萬書行應諸僧徒業習 淨道場以無爲內身菩薩恩造累劫阿鼻惡寒諸僧 戒信徒永斯酒內即答至啜茗或飯蔬食既幾稱清 爲廛聞也悉逐諸屠酤亡賴及所畜離豚屬鶩之屬 歲庚子余備兵南韶念曹溪末法之運而佛界之幾 語具余粵遊草中是時點山大師方演法五羊遠近 徒始而慎慎既乃讚歎踊雕若出湯火而沃以清洽

海之命入學過實林在萬二十餘年眞屈伸臂項而 難洗末法且終就湮就請大師來主是山余從五羊 **僧徒皆循循披緇諷唄親普犢鼻荷鋤酣飽目不識** 師之去資林且八年所矣睹所更建條布犁然肅穆 肩任師唯唯送余及靈洲而別迄今辛酉余復以籌 面叩之謂蜜林一片地千古一大事因緣非師孰與

即佛祖本來之旨亦古德無盡之旨余且與師向夢 所譚夢幻與所感去來離合空有相攝而不相礙是 幻泡影中權住幾劫更作商量師其函爲一轉語報 諸僧徒由不敢侮法入不泥法斯於我師所纂實錄 不住有常住常不住而後可以無住無不住惟常住 余天啓壬戌孟秋南京光禄寺少卿西浙祝以圓撰 而諸夢幻空不礙有惟常不住而後諸法有不礙空 夫有常住而後可以不住有不住而後可以常住常 宇遺蛻衣益等當無不幻焉用此科條森列米鹽鐵 細以煩價徒且實錄中不以常住法爲僧徒律令乎 大既云入妄想中種種皆幻則實林曹溪亦幻即梵 去來雖合之無常也及繙閱實錄則種種皆有爲法 來發函而首以夢幻泡影語相質益深有感於塵世 未及曹溪者三舍寺僧以師尺一並所豪曹溪實錄 廬强要師無何余蒙 冀旦夕復來不啻亦子之慕慈母因索余數行走匡 之無字已恍若奪胎蛻骨在三生前者其跂慕師而 一切有爲皆常住法而所云夢幻泡影則不住法也 聖恩召還陪都歸舟薄清溪

卷三十九本

憨山老人夢遊集卷第五十三

者 福 美

日鉄

侍

門

噩

海幢法裔今照今光 收藏

憨山老人自序年譜實錄上

嘉靖二十五年丙午

夢大士橋童子入門母接而抱之遂有娠及誕白 衣重胞是年十月己亥十二日丙申己丑時生也 予姓蔡氏父彦高母洪氏生平愛奉親音大士初

一十六年丁未

予周歲風疾作幾死母購大士遂許捨出家寄名 於邑之長壽寺遂易乳名和尚

子三歲常獨坐不喜與兒戲祖父常謂日此兒如

二十七年戊申

二十八年己酉 一十九年庚戌

三十年辛亥

三十一年壬子

子年七歲叔父鍾愛之父母送予入社學一日叔 父死停於默予歸母給之日汝叔睡可呼起乃呼 父死停於默予歸母給之日汝叔睡可呼起乃呼 之問母日叔身在此又往何處耶母日汝叔死矣 之問母日叔身在此又往何處耶母日汝叔死矣 之問母日叔身在此又往何處耶母日汝叔死矣 之問母日叔身在此又往何處耶母日汝叔死矣 之問母日叔身在此又往何處耶母日汝叔死矣 之問母日叔身在此又往何處耶母日汝叔死矣 之問母日叔身在此又往何處耶母日,故死矣 之間母日叔身在此又往何處耶母日,故死矣

三十二年癸丑

三十三年甲寅

喜日汝何從得此耶誦經避亦以老和尚 一大喜因問晉求其本潛讀之即能誦母奉觀音 大士每燒香禮拜予必隨之一日謂母日觀音菩 大士每燒香禮拜予必隨之一日謂母日觀音菩 大士每燒香禮拜予必隨之一日謂母日觀音菩 大士每燒香禮拜予必隨之一日謂母日觀音菩

三十四年乙卯

子十歲母督課基嚴苦之因問母日讀書何為母日做官子日做何等官母日從小做起有能可至日做官子日做何等官母日從小做起有能可至生辛苦到頭罷了做他何用我想只該做箇不罷的母日似你不才子只可做箇挂搭價耳子日何的母日似你不才子只可做箇挂搭價耳子日何為挂搭價有甚好處母日僧是佛弟子行偏天下自由自在隨處有供予日做這箇恰好母日只恐有出家做佛祖贵常有此事我即能捨私識之情捨耳母日汝若有此事我即能捨私識之

恭敬食罷衆僧起即荷擔隻手一舉母急避之日 擔倚做乃問訊化源母日請坐急烹茶具寫飯甚 家之志苦無方便路耳 無福矣予私曰是僧之所以高也切念之遂發出 勿謝僧徑去予日僧何無禮飯齋不謝母日謝則 母此何人耶母日搭搭僧也予私喜視之僧至放 子十一歲偶見行脚價數人肩擔瓢笠而來予問

三十六年丁巳

月至寺太師獨一見喜曰此見骨氣不凡若爲一 母日養子從其志第聽其成就耳乃送之是歲十 和尚有大德子心即欲往從之白父父不聽白母 俗父為定親立止之一日間京僧言報恩西林大 予年十二讀書通文義鄉族咸愛重之居常不樂

問日汝愛做官要作佛予應聲日要作佛趙公日 俗僧可惜也我第延師教讀書看其成就何如時 此兒不可輕視當善教之及聽講雖不知言何事 趙大洲在一見喜曰此兒當爲人天師也乃撫之 無極大師初開講於寺之三藏殿祖獨攜往謁適

> 爲同胞云江南開講佛法自無極大師始少年入 然心憤憤若有知而不能達者時雪浪恩兄長予 一歲先一年依大師出家見予相視而嘻時人以

佛法者自雪浪始

三十七年戊午

予十三歲初太師祖擇諸孫有學行者俊公爲予 師先授法華經四月成誦

三十八年已未

子年十四流通諸經皆能誦太師爾日此兒可教

不可誤之也遂延師能文者教之

三十九年庚申

其可教乃令四書一齊讀是年多病 予年十五太師爾乃請先生教習器子業初即試

四十年辛酉

予年十六是歲四書完背之首尾不遺一字

四十一年壬戌

予年十七是歲講四書讀易幷時藝及古文辭詩 威即能詩述文一時童子推無過者

四十二年癸亥

之遂欲棄所業是歲以寂辭不入館動隨數十逐隊而謌亦有因之而倖進者予大恥動隨數十逐隊而謌亦有因之而倖進者予大恥

四十三年甲子

子年十九同會諸友皆取捷有數子往試者時雲谷大師正法眼也住極霞山中太師家久供養往來必效留旬月子執侍基勤適雲大師出山閩有來必效留旬月子執侍甚勤適雲大師出山閩有來必效留旬月子執侍甚勤適雲大師出山閩有來必效留旬月子執侍甚勤適雲大師出山閩有水必效留旬月子執侍甚勤適雲大師出山閩有水必之於歷數傳燈諸祖及高僧傳命子取看子於空中當日落處觀其面目光相了了分明子接於空中當日落處觀其面目光相了了分明子接於空中當日落處觀其面目光相了了分明子接於空中當日落處觀其面目光相了了分明子接於空中當日落處觀其面目光相了了分明子接於空中當日落處觀其面目光相了了分明子接於空中當日落處觀其面目光相了了分明子接於空中當日落處觀其面目光相了了分明子接於空中當日落處觀其面目光相了了分明子接於空中當日落處觀其面目光相了了分明子接於空中當日落處觀其面目光相了了分明子接於空中當日落處觀其面目然行可辦也是

忘之矣。。在於明年其中凡事無一可心者難世之念無刻,是故號淸凉之語自此行住米雪之境居然在目

門耶因見清涼山有冬積堅氷夏仍飛雪曾無炎

人因自命其字日澄印請正大師日汝志入此法

子即從受具戒隨聽講至十支門海印森羅常住

處恍然了悟法界圓融無盡之旨切墓淸凉之爲

四十四年乙丑

予年二十是歲正月十六日太師獨入寂師獨於 前年除日畢集諸眷屬日吾年八十有三旦暮行 矣我度弟子八十餘人無一持我業者乃撫予背 之見我死後房門大小事皆取決之勿以小而易 之也衆唏騙受命新歲七日師獨具衣僵巡寮各 之也衆唏騙受命新歲七日師獨具衣僵巡寮各 群別衆咸訝之又三日即屬後事示微疾學樂不 提念珠予擁於懷端然而逝以師獨生平持金剛 提念珠予擁於懷端然而逝以師獨生平持金剛 予盡棄所習衣服獨館一衲被之見者以爲怪 之習禪者獨予一人時寺僧服飾皆從俗多豔色 從來不知禪而開創禪道自雲谷大師始少年僧 禪座時即行市中如不見一人時皆以爲異江南 平復矣一衆驚歎是故得完一期及出亦如未難 之矣天明大師問恙何如子曰無恙也及視之日 後夜俸極上禪牀則熟睡開靜亦不知及起則忘 誦華嚴經十部告假三月以完禪期後當償之至 裟哀切怨禱於韋默前日此必冤業索命債耳願 心太急忽發背疽紅腫甚巨大師甚難之予搭袈 知有日用事一衆皆以予爲有志初不數日以用 拈香請益大師開示審實念佛公案從此多死一 師獨聽之乃得預會初不知用心之談甚苦之乃 德五十三人開坐禪法門大師極力扳予往從少 是年冬十月雲谷大師建禪期於天界集海內名 念不移三月之內如在夢中了不見有大衆亦不 万丈及入滅至三月十八日而方丈火衆皆歎異

四十五年丙寅

黃腫病僧每早起事已悉辦不知何時酒埽也

竟以存是年冬從無極大師聽法華經於天界寺因 故多欠負即析居知必不能保予思太師看遺命 乃設法盡償其負貸餘者分諸弟子各執業房門 持者先是太師獨入滅無儲畜喪事皆取貸不資 俱決與復之志且日此大事因緣非具大福德智 日見後架精潔思淨頭心非常人乃訪之及見特 志遠遊每察方價求可以爲侶者久之竟未得 即發遠遊志頃之少祖尋入滅太祖之房門無支 慧者未易也你我當拌命修行以待時可也是時 月且多方調護諸在事者竟免死時與雪浪恩公 中以供之寺至刑部相去二十里往來不倦者三 事僧無可與計事者予挺身力採躬預鹽菜瓷獻 予年二十一自禪期出是年二月十八日午時大 同事者十八人合寺僧恐株連各各逃避而寺執 爲煜燼時子少祖爲住持及奏聞旨下法司連建 大殿焚至申酉時則各殿畫廊一百四十餘間悉 雨如傾盆忽大雷自塔而下火發於塔殿不移時

日净頭病於客房也予往視其狀不堪問日師安收拾畢矣又數日見不潔乃不見其人問之執事予故不寐竊經行廊下偵之當衆方放参時即已

峰為蒲州人予即相期結件同遊後數日再視之是知其人眞因料理果餅袖往視之問其號日妙每見行齋食恨不俱放下予笑日此久病思食耳吞日業障身病已難支饞病更難當予問何故日

一隆慶改元丁卯

則不見予心知其人恐以予累故潛行耳

等人子因是復視左史諸子古文辭 此為回禄事常住負貸將千金皆經予手衆計無 所處予設法定限三年。盡償之是年奉部徼本寺 所處予設法定限三年。盡償之是年奉部徼本寺 所處予設法定限三年。盡償之是年奉部徼本寺

二年戊辰

予年二十三是年謝館事復館於高座以房門之

累然也

三年己巳

子年二十四是年金山聘館居一年

四年庚午

予年二十五是年仍應金山聘

五年辛未

于年二十六予以本寺回禄決與復之志將修行以養道待時是年遂欲遠遊始同雪浪恩兄遊廬山至南康聞山多虎亂不敢登遂乘風至吉安遊南原島寺廢僧皆蓄髮慨然有與復之志乃言於曹原歸料理本師案安願得宜冬十一月即一餘遠遊將北行時雪浪止予恐不能禁苦寒姑從吳遠遊將北行時雪浪止予恐不能禁苦寒姑從吳遠遊將北行時雪浪止予恐不能禁苦寒姑從吳遠遊將北行時雪浪止予恐不能禁苦寒姑從吳遠遊將北行時雪浪止予恐不能禁苦寒姑從吳遠遊將北行時雪浪止予恐不能禁苦寒姑從吳遠遊將北行時雪浪止予恐不能禁苦寒姑從吳遠遊將北行時雪浪止予恐不能禁苦寒姑從吳

六年壬申

有銀二錢可恃耳乃見雪中價道行乞不得者即食於市不能入門自忖何故急自省日以腰纏少予年二十七初至揚州大雪阻之且病作久之乞

所旬日即謁摩訶忠法師隨往西山聽妙宗鈔有 至師長鬚髮衣褐衣先報云有鹽客相訪及入門 予至乃邀之以與次公仲淹爲社友故耳因得寓 之地行乞竟日不能得日暮至西太平倉茶願僅 逍遙宇宙去住山林又奚街夫朱紫之遷唯取尚 雲之際其學也若鴻鵠之翼其逸也若潛龍之鱗 二門乃能呼遂得食因自喜曰吾力足輕萬鍾矣 日本來面目自在相與一笑不暇言其他第問所 天界病淨頭也乃日認得師日改頭換面了也予 安法師爲說因明三支比量十一月妙峰師訪予 西山懷恩兄詩期罷摩訶留過冬聽法華唯識請 **平霜雪之所不能侵是年秋七月至京師無投足** 銘其鉢曰輕萬鍾之具銘其納曰輕天下之具乃 師即問還認得麼予熟視之見師兩目忽記爲苦 之而足萬物實以之而輕方將曳長風之袖披白 為之銘日爾委我以形我託爾以心然一身固因 盡邀於飲店以銀投之一餐而畢明日上街入一 一餐投宿河漕遣教寺明日左司馬汪公伯玉知

> 惠日龍華明日過訊夜坐乃問其狀何以如此師 国以久住山故髮長未翦適以檀越山陰殿下修 日以久住山故髮長未翦適以檀越山陰殿下修 局下羅打狗耳竟夕之談運明一笑而別即往多 屬前羅打狗耳竟夕之談運明一笑而別即往多 屬前羅打狗耳竟夕之談運明一笑而別即往多 屬於點,即間何處來予日南方來師日記得 來時路否日一過便休師日子却來處分明予作 來時路否日一過便休師日子却來處分明予作

萬曆元年癸酉

恐公作東郊餓夫也及秋復入京以嶺南歐楨伯奇秀默取爲號詩以志之有遮莫從人去聊將此奇秀默取爲號詩以志之有遮莫從人去聊將此意行乞至盤山於千象峪石室見一層不語子亦不問即相與拾薪汲水行乞汪司馬以書訪之早不問即相與拾薪汲水行乞汪司馬以書訪之果

先數年未面寄書今爲國博急欲見予故歸耳

一年甲戌 予年二十九春遊京西山當代名土若二王二汪

對次公麟洲言之明日次公來訪一見即日夜來 洲相見以子少年易之子傲然賓主公即諄諄教 及南海歐镇伯一時俱集都下一日訪王長公鳳 相見了也相與大笑歸謂其兄曰阿哥輸却維壓 家兄失却一隻眼子曰公具隻眼否公拱曰小子 以作詩法子瞠目視之竟無一言而別公不懌乃

資特異大有文章氣概家伯子當代文宗也何不 句一日汪次公與予同居看左傳因謂予日公天 馬公公日信哉予觀印公道骨他日當入大慧中 執業以成一家之名手予笑而唾日留取老兄膝 頭他日拜老僧受西來意也次公大不悅歸告司

了也因以詩贈予有可知王逸少名理讓支公之

道又爲文以送予一日公速予至問日妙峰行矣 子願津之時妙師取驗經回司馬公因送勘合一 來相尋不意偶遇於此公日異哉二公若泉行小 友矣予曰昔巳物色於衆中曾結同多之盟故北 人物以了他日妄想耳非浪遊也且將行矣公日 切念之觀公器度將來成就不小何以浪遊為予 子與妙師同坐公謂予日禪門寥落大可憂小子 脚跟轉耳殊大不然古人不羞小節而恥功名不 公何不見別予日姑徐行公日予知公不欲隨人 信然子视方今無可爲公之師者若無妙峰則無 日貧道特爲大事因緣多訪知識今第遊目當代 顯於天下但願公他日做出法門一段光明事業

侯王綱直使同天地應共黃河不斷流過夷齊扣馬 處有詩用之日片石光碑倚岸頭當年會此會話 地弔日栗國遺榮意已深空餘古廟柏森森首陽

登車未別一人而去秋八月渡孟津見武王觀兵

視妙師已載乘矣見予至問日師行乎日行矣即

又何以區區較去就哉予感而拜謝遂決行即往

見予與次公扇頭詩有身世蜩雙翼乾坤馬一毛

之句乃示次公日此豈文字僧耶他日特設褒請

the course of Address and the both the state of the day

峰之室是肯以區區文字為故第恐浮遊爲誤耳

邊兩箇鐵牛相關入水去也至今絕消息師笑日 明日妙師相見喜曰師何所得耶予曰夜來見河 有傷日死生晝夜水流花謝今日乃知鼻孔向下 偃岳而長靜也至後出遺則了無流相曰此江河 至予久慕之相見喜得坐参也與語機相哭請益 鏡注而不流也於是去來生死之疑從此水釋乃 前忽風吹庭樹飛葉滿空則了無動相日此旋嵐 無去來也即下禪林禮佛則無起動相揭棄立階 且喜有住山本錢矣未幾山陰雨牛山法光禪師 開示以離心意識多出凡聖路學深得其旨每見 日吾似昔人非昔人也恍然了悟日信乎諸法本 自幼出家白首而歸鄰人見之曰昔人個在耶志 岳之旨不明竊懷疑久矣今及之循罔然至梵志 爲刻肇論中吳集解予校閱向於不遷論旋嵐偃 陰至遂留結冬時太守陳公延妙師及予意甚動 古城焚經臺白馬寺即追妙師九月至河東會山 時大千潤宗師初入院予訪之末遇出山觀洛陽 山色清如許個是當年扣馬心遂入少秣謁初 祖

師匠及見光師始知有宗門作略山陰國主問予 師曰要公不可捉死蛇耳予額之向來彈道久無 看洞裏潛龍放去休之句問日公知否予日不知 子新正即往五臺乃以詩送之有雲中獅子騎來 時則自然消滅矣我初恨其無毒手耳歲暮師知 自看不破須得大手眼人痛打一順令其熟睡覺 耳予日此病初發時何以治之師日此病一發若 顯態吟哦手口無停時謂何師日此我禪病也初 把住以手将其鬚日說是兔子恰是蝦臺師一笑 十年拿龍捉虎今日草中走出兔子來下一跳予 矣那一竅欠通在予日和尚那」 竅通否師日三 **愛悟時偈語如流日夜不絕自是不能止遂成病** 也予日觀師佛法機辯不滅大慧見居常似有風 休去師一日日公不必他往願同老伏牛是所望 日和尚不是拿龍捉虎手師拈拄杖才要打予即 詞吐氣果則也深服膺其人一日袋中搜得予詩 讀之歎日此等佳句何自而得耶復笑日佳則佳 師談論出聲如天鼓音是時予知悟明心地者出

脚自救不了

又安政累二親手因讓致光師

二親在乃贈二百金爲終養資子謝日貧道初行

三年乙亥

于年三十正月自河東同妙師上五臺過平陽師 产年三十正月自河東同妙師上五臺過平陽師 产本式之地鄉北師以少貧值歲饑父母死葬無險具至 之故鄉北師以少貧值歲饑父母死葬無險具至 作墓誌師俗姓續居平陽東郭葢春秋續鞠居之 作墓誌師俗姓續居平陽東郭葢春秋續鞠居之 作墓誌師俗姓續居平陽東郭葢春秋續鞠居之 作墓誌師俗姓續居平陽東郭葢春秋續鞠居之 中見不可得及予行公送郵符予日道人行脚有 學同東馬用此公益重及予行公後追之至靈石 以居之時見萬山米雪儼然夙慕之境身心洒然 少入極樂國未幾妙峰往遊夜臺予獨住此單提 中念人來不語目之而已久之視人如杌直至一 字不識之地初以大風時作萬竅怒號氷消澗水 字不識之地初以大風時作萬竅怒號氷消澗水 字不識之地初以大風時作萬竅怒號氷消澗水 字不識之地初以大風時作萬竅怒號氷消澗水 字不識之地初以大風時作萬竅怒號氷消澗水

四年丙子

日夜對談心甚契是年予發悟後無人請益乃展了年三十一春三月蓮池大師遊五臺過訪留數

捺胡公出堂回則已落筆二三十首矣予忽覺之 手力拒之胡公乃取古今詩集置几上發予詩思 日此文字習氣魔也即止之取一首以塞白然機 予偶揭之方搆思忽機一動則詩句迅速不可遏 胡公諾之對予言予日我胸中無一字焉能爲詩 中乃謂胡公云家有園亭多題詠欲求高人一詩 夕問道爲說緒言開府高公移鎮代郡聞予在署 誠所感也然竟解釋主人道場以全固留過冬朝 欣然日正思山中·大雪難禁巳作書遣迎師適來 之子日無傷也遂躬謁胡公胃大雪往及見胡公 發廢廬山徹空禪師來與予同居適見其事大苦 月塔院主人大方被誣訟本道擬配遞還俗叢林 別是一世界也吾到此世念如此永耳是年冬十 耳時下方正酷熱驂從到澗中敲氷嚼之公見日 平兵備入山相訪靜室中唯餐燕麥厩鼺野荣養 量照之少起心識即不容思量如是者八閱月則 全經旨趣了然無疑秋七月平陽太守胡公轉鴈 楞伽印證初末聞講此經全不解義故今但以現

其樂無喻乃日辭極光通達寂照含虛空却來觀 散雲收長空若洗皆寂然了無影像矣心空境寂 夢中事耳求之而不得則向之偏空擾慢者如雨 不知從何入來及回觀山中及一往行脚一一皆 也第一息耳言事默坐諦觀竟不知此是何所亦 處也公日我行師即閉門坐今五日矣予日不知 之坐忘如睡童子敬門不開推之不應胡公歸感 數十整子始後微醒覺開眼視之則不知身在何 即覺矣公忽憶之日師入定耶疾取擊子耳邊鳴 日此物何用子日西域僧入定不能覺以此鳴之 問之乃令破留入見予擁補端坐呼之不應撼之 者無已獨有熟睡可消遂閉門驱臥初甚不能久 法光禪師所謂禪病也今在此中誰能爲我治之 奈之何明日胡公送高公去予獨坐思之日此正 知何為我之身心也默之自视將欲飛擧之狀無 不動先是書室中設佛供案有擊子胡公拈之問 時現前逼塞虚空即通身是口亦不能盡吐更不 不可止不覺從前所智詩書辭賦凡曾入目者

國家修建諸刹皆仗所禁之林木否則無所取道場將董蓮不毛矣公爲具疏題請大禁之自後還山乃爲胡公言臺山林木苦被姦商砍伐菩薩世間循如夢中事佛語眞不吾欺也歲暮擬新正世間循如夢中事佛語眞不吾欺也歲暮擬新正

5#

五年丁丑

一六年戊寅

入故舊必延坐禪牀對談不失亦不妨書對本臨不輟書然不失應對凡問訊者必與談數語其高不輟書然不失應對凡問訊者必與談數語其高不輕書於不失應對此問俗至者必令行者通款予雖手

夢初一夕宿入金剛窟石門榜大般若寺及入則 瑩徹遠望唯一廣大樓閣閣量如空閣中盡世間 入禮拜立右聞大師開示初入法界圓融觀境調 吾友入此三昧純熟耳子自住山至書經屡有嘉 座其閣莊嚴妙嚴不可思議予歡喜欲近心中思 來無外閣中設一高座紫亦發色予心謂金剛實 所有人物事業乃至最小市并鄙事皆包其中往 無極落下則見十方迴無所有唯地平如鏡琉璃 境融徹無復疑礙又一夕夢自身履空上昇高高 此何境界大師笑曰無境界境界及覺後自見心 現觀於目前自知身心交参涉入示事妙師問日 佛利互入主件交参往來不動之相隨說其境即 座見清涼大師倚臥牀上妙師侍立於左子急趨 見廣大如空殿字樓閣莊嚴無比正殿中唯大牀 讀之良信因問妙師日即師何能如此耶妙師日 諸老宿竊以爲異率數衆來驗故意攬擾及書罷 之亦不錯落每日如常略無一毫動靜之相鄰近 惟如何清淨界中有此雜穢耶纔作此念其閣即

> 入五內如洗肉桶五廠——蕩滌無遺止存一皮 與琉璃籠洞然透徹時則池中人呼茶兒一梵僧 與琉璃籠洞然透徹時則池中人呼茶兒一梵僧 其僧乃以手指剜取示予日此不淨耶即入口噉 之如是隨取隨瞰其甘如飴腦已食蟲唯存血水 之如是隨取隨瞰其甘如飴腦已食蟲唯存血水 其池中人日可與之僧乃授予予接而飲之其味 如甘露心飲而下透身毛孔一橫流飲畢梵僧搓 如甘露心飲而下透身毛孔一橫流飲畢梵僧搓 然自此身心如洗輕快無喩矣如是者吉兆居多 然自此身心如洗輕快無喻矣如是者吉兆居多

七年已卯

男也乃入共浴其人以手犀水澆子從頭而下灌

子也予心惡不欲入其池中人故汎其形則知爲

三則入一廣大殿堂香氣充滿侍者皆梵僧即引

一夕夢看來報三北臺頂文殊菩薩設浴請赴隨

至浴室解去入浴見有一人先在池中視之爲女

八年庚辰

5 m

予年三十五是年特 旨天下清文田糧寸土不五百石於臺山壓行文查報地土合山叢林靜室 無一人可安者自此臺山為孤窟矣諸山耆舊集 無一人可安者自此臺山為孤窟矣諸山耆舊集 由予予安之日諸師第無憂緩圖之予於是宛轉 自予予安之日諸師第無憂緩圖之予於是宛轉 以法具白富道竟免清丈宗加升合臺山道場遂 以全

九年辛巳

> 附為心子大不然乃力爭忤之竟從予議頃之江 南妖人作難忌者即欲借此中傷以破道場然以 南妖人作難忌者即欲借此中傷以破道場然以 高。國求儲之題目竟保全始終無虞是年修塔 原子即以金書華嚴經安置塔藏有願文一卷予 自專造華藏世界轉輪藏成為建道場於內應用 自專造華藏世界轉輪藏成為建道場於內應用 與具器物藥糧果品一切所需妙師在京若問知 居供具茶飯甕食條然不失不亂亦不知所從出 題者莫不駭然初開啓水陸佛事七晝夜予七日 觀者莫不駭然初開啓水陸佛事七晝夜予七日 觀者莫不駭然初開啓水陸佛事七晝夜予七日 起為興運予亦自知佛力加被也

十年壬午

一人指揮餘無措目者智者不知所以然也生平食如坐一堂不雜不亂不聞傳呼剝啄之聲皆予住上牌一千衆十方雲集僧俗每日不下萬衆一住上牌一千衆十方雲集僧俗每日不下萬衆一

西中峰寺作重刻中峰廣錄序結冬水齋於石室 無路只飛梯之旬是年八月 皇子生予復之京 師一鉢飄然長往矣妙師往蘆芽予以疾往真定 師一鉢飄然長往矣妙師往蘆芽予以疾往真定 師一鉢飄然長往矣妙師往蘆芽予以疾往真定

> 深山面吞大海極為奇絕信非人間世也地名觀 於東方假世祖威福多占佛寺收為道院及世祖 於東方假世祖威福多占佛寺收為道院及世祖 於東方假世祖威福多占佛寺收為道院及世祖 於東方假世祖威福多占佛寺收為道院及世祖 於東方假世祖威福多占佛寺收為道院及世祖 之初掩片席於樹下七閱月後得士入張大心居 之初掩片席於樹下七閱月後得士入張大心居 之初掩片席於樹下七閱月後得士入張大心居 之初掩片席於樹下七閱月後得士入張大心居 之初掩片

うけけ

即赞三千金仍遣前使送至以修菴居及至予力止之日我茅屋數緣有餘樂矣何用多為使者强之不敢覆。命予曰古人有矯詔齊饑之事今山之不敢覆。命予曰古人有矯詔齊饑之事今山東蒙凶何不廣。聖慈於饑民乎乃令僧領來使驅散各府之僧道孤老獄囚各取所司印册敬報。 聖情大悅感歎不已及後予罹難下鎮撫輸予數用內帑金予對以請查內庫支籍 上查止此數用內帑金予對以請查內庫支籍 上查止此數用內帑金予對以請查內庫支籍

十三年乙酉

率衆來歸自此始知有佛法乃予開創之始也最大諸子漸漸親近方今所云外道羅淸者乃山最大諸子漸漸親近方今所云外道羅淸者乃山最大諸子漸漸親近方今所云外道羅淸者乃山最大諸子漸漸親近方今所云外道羅淸者乃山

皇上敕頒十五藏散施天下名山首以四部施撰述諸經未入藏者。今上聖母命補入之刻完予年四十一是年頒藏經先,國初刻藏有此方

技已就時禪堂方開靜即喚維那入室爲予讀之

十四年丙戌

安供請 詣京謝 時 光忽然身心世界當下平沉如空華影落洞然意 寧止故多被倦至今禪室初就始得安居身心放 何是年冬十一月予自辛巳以來率多勞動未得 予於海上即趨歸棄程追之值師出山尋即同回 可安頓撫按行所在有司供奉予見有 四邊境東海牢山南海普陀西蜀峨帽北邊蘆芽 下其樂無喻一夕靜坐夜起見海湛空澄雪月交 盤桓兩旬贈予詩有閑來居海上名誤落山東之 乃以藏經一部首送東海初未知也及至牢山無 此中凡聖絕行藏金剛眼突空華落大地都歸寂 大光明藏了無一物即說偈曰海湛空澄雪月光 觀境了然心目隨命筆述楞嚴懸鏡一卷燭才半 滅場即歸室中取楞嚴印正開卷即見汝身汝心 外及山河處空大地咸是妙明真心中物則全經 聖母以臺山因緣且數召子不知賜亦不受 命名日海印寺子在京聞達觀禪師訪 恩比蒙 至慈命合眷各出布施修寺 敕命乃

自亦如聞夢語也

十五年丁亥

胡中丞公請告歸田攜其親之子送出家爲侍者 是四方神子日益至為居士作心經直說是年秋 予年四十二是年修造殿宇始開堂為衆說戒自 命名福善

十六年戊子

十七年已丑 予年四十三時學人讀予楞嚴懸鏡請日此經心 觀具明第未至消文字恐後學不易入願字字消 大旨然猶未屬稿 歸觀心則莫大乙法施也予始創意述通議已立

予年四十四是年閱藏為衆講法華經起信論予 之一夕靜坐忽開眼有偈日煙波日日浸寒空魚 龍乃急呼侍者日吾今可歸故鄉見二老矣先是 鳥同遊一鏡中昨夜忽沈天外月孤明應自混聽 爲報恩寺乞請大藏經一部冬十月至京請藏 自別五臺時有省親之心且恐落世諦也姑自驗

子省他日又來也予把鑁所地老母奪之日老姿

親卜得葬穴時老父巳八十予數日今日活埋老

及夜坐族中長者問從船來陸來老母應輕日何 兩宿耶及予歸老母相見欣然絕倒予大以爲異 絕想矣今見爾乃化身來也予明日祭祖塋爲二 北斗稱菩薩名則不復想矣今謂你死則不拜亦 何處日在北斗之下即令郎住處也我自此夜聽 母日始而不知既知爾在五臺因問師家五臺在 日別後想我否母日安得不想予日母何以自遭 來予驚日怪得當時老婆子能捨我也因問老母 問從船來陸來問者日從何處來老母日從空中 之日再生相見數喜不了那更有悲一面即可況 數喜如未別時止可信宿否則我不歸矣老母聞 家予日我爲 以爲希有之瑞老母聞予至先遣人候問何日到 及安經建道場光相日日不絕瞻禮者日萬餘人 日及迎經之日塔光如橋向北迎經僧自光中行 上即命送費行十一月至龍江本寺實塔放光連 朝廷事非爲家也若老母能相見

解免予日勿懼亦勿辯第聽予言何如耳及至太

守問日在徒殺僧耶子日未也來捕時僧方與彼

爲首者问食瓜果耳守日何以作園子日市暄耳

太守聞之即遣多役並捕之彼衆惶懼皆叩首求

年事可學十年工可成 都具得本寺始末回獨命具奏 待時於海上至是機將熟乃借送大藏因緣回 居臺山事已有機但以動至數十萬計未易言故 知篾戻車地未嘗斷佛種也初予以重修本寺志 不聽乃日弟子打箇筋斗來師又何能止我乎是 衣宛然如畫即其母妻亦未知也恒求出家予絕 名號三月乃愈愈時見瘡痕結一大士像眉目身 保予早歸自後火瘡發痛日夜危坐持觀音大十 失依怙矣乃對觀音大士破臂然燈供養求大士 三寶名今幸遇大善知識爲不請友倘不回吾輩 不至席時予南歸光私念日吾生邊地長劫不聞 **誦從此齋素**雖父母賣之不異其心切志參究脇 海上時年十九歲即歸依請益授以楞嚴二月成 黃生納善字子光者乃今大司公之弟也初于至 然如故未曹蹙眉子始知老母非尋常也即墨有 **婆自埋又问煩人連斫數十下三日**告別老母**歡** 費鉅難輕擧願乞 唱母日減膳蓋百兩積之三 聖情大悅即 聖母且云工大 命於是

年十二月儲積始

太守欲加彼于日將欲散之枷則固拘之也太守

一十二年甲午

子年四十九是年春三月山東開府鄭崑崖公入

山見訪問法爲說方便語冬十月入賀

至如恶

此事遂寧是歲作觀老莊影響論 悟乃令地方盡驅之在衆不三日盡行解散由是

十九年辛卯

予年四十六歲是年 聖母造檀香毗盧佛 。您建

大殿是年秋門人黃子光坐脫

方議往討姑徐徐乃寢

知

聖母儲已厚乃請學事時

上以倭犯朝鮮

京田過歲請說戒於慈壽寺時子以修本寺因緣

一十年壬辰

予年四十七是年秋七月予至京訪遊觀禪師於 上方晉時有琬公慮三災壞劫無佛法乃刻石經

院記及重藏舍利記并前所作有海印稿時與達 藏石室其塔院爲僧所賣師贖之欲得予作記子

一十一年癸巳

師相對盤桓四十晝夜爲生平之奇

予年四十八是年山東大饑死者載道山中所儲

齊糧盡分賑近山之民不足又乘便舟至遼東糴

豆數百石以濟之由是透山四社之民無一饑死

者

憨山老人夢遊集卷第五十三

侍

者 福 美

Å 日錄

海幢法裔今照今光 通 炯 收藏

門

一十三年乙未

憨山老人自序年譜實錄下

欽頒藏經遣內使四送之其人先至東海先是 予年五十春正月子從京師回海上即罹難初為

上惜財素惡內使以佛事請用太煩時內庭偶以

-810-

聖恩矜察坐以私創寺院遣戍雷州予以

一十四年丙申

子中有然香煉臂水齋持咒以加護之者安肅鄭 大司馬範溪公子在金吾素末相識特設燕會在 是年三月下獻京城諸刹皆爲誦經禮懺保護济

法如此在獄八閱月供讀者唯侍者福善一人多 十月發遣南行朝士大夫多褻服策蹇相送以津 朝縉紳請救以王涕泣訴其無妄一時人心之爲

濟者出都日福善同衲子二三人隨行十一月至 南京江上別老母作母子銘攜孤姪可久往初與

達觀師於石經山因思禪門寥落謂曹溪禪源也

山子被難時師正居天池聞報大驚日熱公巳矣 必源頭壅闕乃志同往以濟之達師先往侯於匡

予將出遂囘金陵以待予至則相別於江中旅泊 則曹溪之願未了也師遂先至曹溪囘至聊城聞

名山施資不下數十萬計苦刑拷訊予日某愧爲

執事者先受

風旨欲盡招追向

驾母所出諸

見人心之感化也及至京奉

旨下鎭撫司打問

乃雖即墨城中士民老小傾城而出涕立追送足

足矣死復何憾第以重修本寺志末酬可痛心耳

子皆知念佛至若捨邪歸正者比郷比戸也予願

戾車地素不聞三鳖名今予教化十二年三歲赤

聞報乃謂衆曰佛爲一衆生不捨三途今東海茂

前方士流言令東廠番役扮道士擊登聞鼓以進

上寬之大怒下逮以有送經因緣故併及之予

權貴有忌送經使者欲死之因乘之以發難遂假

聖怒將及

聖母左右大臣危之適內

臣子所以愛君之心也其如青史何以死力抵之

東代賑之册籍

上意遂解由是母子如初乃凝

止招前案布施七百餘金

上查內支簿及前山

孝手即曲意妄招網利奉

上意以損綱常殊非

僧無以報

國恩今安惜一死以傷

皇上之大

卷中師意欲力爲白其枉予日君父之命臣子之 之心師之舌也予唯唯謝別師爲作逐客說 池聞師難即對佛許誦法華經百部以保無處我 事無異也況定業乎師幸勿言臨岐把臂日在天

女い 丁丁門的女士人二三十二十一

皆罔然再問周公日死生者晝夜之道也通晝夜 滴水自靈源流入滄溟浪拍天多少魚龍從變化 去抵五羊囚服見大將軍將軍為釋縛敦齊食寫 年爲坦途至韶陽人山禮祖飲曹溪水偈曰曹溪 閉做夢時亦是此知故日通手晝夜之道而知周 道長者答云人人知覺日閒應事時是如此知夜 周公學通手蓋從之道而知發問衆中有一稱老 海珠寺大参周海門公本門生數十人過訪坐開 源頭一脈尚冷然見租庭凋弊不堪言遂凄然而 者何似今朝度嶺心因見道路崎嶇行人汗血乃 解公連念幾句子日此聖人指示人要悟不屬生 日老禪師請見教予日此語出何典公日易之繁 屬一行者立治茶菴於嶺頭一道者勸修路不數 予事五十一春正月過文江訪鄭南皐給諫廬陵 死的一著周公鑿節曰直是老禪師指示親切衆 公云大衆也都是這等說我心中未必然乃問予 靈頭觀惠明季袈裟處詩用之有翻思昔日宵行 大行王性海禮子江上請往楞伽二月度庾嶽至

> 則不屬晝夜耳一座歎服先是諸護法者以書通制府大司馬陳公遣郵符津濟三月十日抵雷州 普伍寓城西之古寺夏四月一日即開手往楞伽 著伍寓城西之古寺夏四月一日即開手往楞伽 等於大鰻疫癘橫發輕年不雨死傷不可言予如 坐尸陀林中以法力加持晏然也時旱井水枯凋 坐尸陀林中以法力加持晏然也時旱井水枯凋 生善侍者相從每夜半候得水一罐以充一日體 大視之得一滴如天甘露也城之內外積骸暴露 大視之得一滴如天甘露也城之內外積骸暴露 大視之得一滴如天甘露也城之內外積骸暴露 大視之得一滴如天甘露也城之內外積骸暴露 大視之得一滴如天甘露也城之內外積骸暴露 一方作銘建捨茶菴豫章丁大多右武以誣謫廣海 五章素相嘉遂奠逆

二十五年丁酉

而夏四月楞伽筆記成因諸士子有歸依者未入 一方武身爲之佐先是專人不知佛自此翕然知 一方武身爲之佐先是專人不知佛自此翕然知 一方武身爲之佐先是專人不知佛自此翕然知 一方武身爲之佐先是專人不知佛自此翕然知

二十六年戊戌

爾依日益來自是始知有佛法僧矣此後法化大 開陽明之學乃集諸子問道於子有龍生璋者聞 別此來禪師說法甚奇二子俱來請益予開示以 對異即為疏募刻海門周公任粵桌時問道往來 對異即為疏募刻海門周公任粵桌時問道往來 對異即為疏募刻海門周公任粵桌時問道往來 對此來禪師說法甚奇二子俱來請益予開示以 可上事語信不疑切志參究二生素有德業相率 向上事語信不疑切志參究二生素有德業相率

> 與二生之力也每隱達師許經之願其夏始搆禪 對於學雙別將擬大慧冠巾說法乃集遠來法侶 對於學雙別將擬大慧冠巾說法乃集遠來法侶 對於對於一班耳古人以後六品率為流通亦未 是佛意耳遂著法華輕節者就也然須三變者特為 要指娑婆人人目前即華藏也然須三變者特為 要指娑婆人人目前即華藏也然須三變者特為 是佛意耳遂著法華整節右武性急烈資慷慨知 見佛意耳遂著法華整節右武性急烈資慷慨知 是佛意耳遂著法華整節右武性急烈資慷慨知 是佛意耳遂著法華整節右武性急烈資慷慨知 是佛意耳遂著法華整節右武性急烈資慷慨知

二十七年已亥

于年五十四春刻楞伽筆記成爲衆講一過乃印 百餘部區致海內法門知識弁護法宰官且令知 百餘部區致海內法門知識弁護法宰官且令知 正蘭盆會講孝衡鈔勸是日齊僧放生用蔬条從 盂蘭盆會講孝衡鈔勸是日齊僧放生用蔬条從 盂蘭盆會講孝衡鈔勸是日齊僧放生用蔬条從 會城初下車未拜一鄉宦乃先遣候予頃之命取食器。一百餘件俱最精者門下皆不知何用及設食器。一百餘件俱最精者門下皆不知何用及設金語,一百餘件俱最精者門下皆不知何用及設金語。是年秋灌使四出地方自此日多事惠州場告歸是年秋灌使四出地方自此日多事惠州場告歸是年秋灌使四出地方自此日多事惠州場上至城矣予即往親險爲求棺鄉鎮潮縣入山公靈已至城矣予即往親險爲求棺鄉鎮潮縣入山公靈已至城矣予即往親險爲求棺鄉鎮潮縣入山公靈已至城矣予即往親險爲求棺鄉鎮潮縣道觀察已至城矣予即往親險爲求棺鄉鎮潮縣道觀察已至城矣予即往親險爲求棺鄉鎮潮縣入山公靈歸歸即欲掩關却婦矣

二十八年庚子

于人投磚石打公子舟幾破團帥府持戈相向甚 方震蕩加以倭警人心惶惶予即散諸弟子閉騙 方震蕩加以倭警人心惶惶予即散諸弟子閉騙 告將行稅使正畜意侵之偶有白艚數隻即藉口 告將行稅使正畜意侵之偶有白艚數隻即藉口 告將行稅使正畜意侵之偶有白艚數隻即藉口 以大將軍為公子資行者、嗾市民大関頃刻聚數 以大將軍為公子資行者、嗾市民大関與刻聚數 以大將軍為公子資行者、數市民大関與刻聚數

> **郭新制府戴公知予安亂民深德之意欲一見諭** 往曹溪公遂顧爲護法予是得安心焉 大將軍將子往謁及見禮遇甚優留於齊飯因辭 韶道配公延子入曹溪子乘輿遂入山爲六粗奴 其如點師何子亦自知此後無寧日矣是年秋南 乃以書抵予日懿師不出其如地方何懿師旣出 及回業已安堵然皆知予之力也觀察任公閒之 之時三司正在軍門飯聞報民作亂皆投筋而起 令至帥府團即解會城遂以寧父老感予欲尸就 先往大言於衆曰諸君今所爲欲食暖米耳今犯 大法當取死即有賤米誰食之耶衆聞之愕然頃 意使者聞予言果悟乃令自行招安以散亂民予 聞之惕然遂破關往謁稅使者從容勒化開曉其 軍跪泣日師即不念賓主豈不念地方生靈子子 命中軍詣子關前求解予甚不可日無神狗也中 卒無解救者勢變在呼吸也大將軍危之無巳乃 急時三司府縣皆赴軍門行節禮會城無一正官

二十九年辛丑

門開設屠沽穢汚之甚積弊百餘年矣墳墓率占 視者予数日此心腹之疾也荷不去則六祖道場 祖山府産多侵之凡勾合外根挾驅寺僧無敢正 予年五十六春正月予見曹溪四方流棍集於山 垢一日如洗公因留予**齊飯坐談公日六祖腥蹇** 終將化爲孤窟卒莫可救矣于縱居此何爲哉熟 于爲公洗之矣目前地方生靈塗炭大菩薩有何 不留一人鋪居盡採不存片瓦自此曹溪山門積 慮之無巳乃往白制臺戴公公曰無難也予試為 海上巨盗今以欽採資之以勢罷採之日不歸橫 慈悲以救之手予日何為也公日殊船干艘率皆 公力行之即下令本縣坐守限三日內盡行驅逐 害甚於劫掠由是民無安枕矣爲之柰何予日此 探役暴橫漏人之墓破人之產在任百姓受其毒 行海上劫掠無已法不能禁此其一也地方開藏 秋至曹溪進香於六祖留山中數日聞法甚喜予 米易言也姑徐圖之採使者李公頗有信心是年 因勸爲重與阻庭布金檀越慨然力荷之徐密啓

> 探使唯唯力行之由是山海地方一旦遂以寧公 差役第令所司歲額助解進秋毫無擾於民可手 船急設約束期往來過限以罪礦罷開採盡撤其 之日開採爲害於地方甚矣非 年秋開闢租庭改風水道路選僧受戒立義學作 也以此護法之心益切予因是得以安心曹溪是 深感之以書謝予曰而今乃知佛祖慈悲之廣大 養沙彌設庫司清規查租課贖價產歸侵占一歲 聖天子意也採

之閒百廢具縣

三十年壬寅

予年五十七是年重修和殿培後龍改路徑以屠 學爲十方旦過寮關神道移僧居拓禪堂側立規

制

三十一年癸卯

予年五十八冬十一月蓮觀禪師在京師遺妖書 之厄逮下獄訊以爲予之故因此又及之予心知 不克安心以待荷 侍者深光出家 聖恩寬之京院有通行是年

三十二年甲辰

三十三年乙巳

> 者 賣 是 膏 養 高 門 寒 解 院 高 六 和 耕 供 之 所 多 十 月 侍

三十四年丙午

于年六十一春三月度嶺至南州候丁右武耕張相國洪陽公以予在難時公居亞相知予之難始相國洪陽公以予在難時公居亞相知予之難始然道故請予齋於江上之閒雲樓邀諸鄉友陪坐然道故請予齋於江上之閒雲樓邀諸鄉友陪坐於道故請予齋於江上之閒雲樓邀諸鄉友陪坐戶回過文江訪都給諫留數日至章貢陳二師將戶回過文江訪都給諫留數日至章貢陳二師將戶回過文江訪都給諫留數日至章貢陳二師將月。皇長孫生有一恩赦凡在戍老疾及註誤者俱聽辯明釋放予在例乃往告軍門進行勘復之雷州道勘明應赦按祭司類造候題遂開

三十五年丁未

經成予幼讀老子以文古意幽切宪其旨有所得曹溪予住山中時得爲諸弟子說法是年注道德予年六十二春三月予告囘籍軍門檄韶州安置

十五年攜於行閒至今方完 落筆荷一字有疑而不通者決不輕放因此用功 俗弟子請爲之注始於壬辰屬意每多究透徹方

三十六年戊申

此予曰工大費多力不及耳問費幾何予應以若 予年六十三議修曹溪大殿春二月馮元成公任 哉見儒子將入井必匍匐往救之況佛菩薩處此 **干公日無難也吾試爲之歸白制府戴公公日殆** 嶺西道因訪予入山宿夜夢大士現身有感詰朝 費忍不便苟依法門故事請以募衆爲之公屬嶺 猶未也即屬南韶道往勘估計且令請予而議予 危地不動心非人也乃詰所費即以予言告公日 往見之公慨然欲獨爲鼎建予告日若勞公家之 集公從之不期月而集將千金予射往西專釆大 總會於府解歸於一無庸歸僧如此則不勞而易 西道爲疏十二簿三司道府各置一扇隨意施拾 木至端州制府留修實月臺乃別委官采辦多實

> 多十一月初安南賊被欽州戴公請王師遠討**因** 月臺成予作記材木俱積於端江之滸次第運之

聚論罷

三十七年已酉

予年六十四春二月予自端江運木回阻風於羚 羊峽遊端溪有夢遊端溪記木運至漂江予回寺 方集衆經營眾中一二不肖者遂作孽抵牾因鼓 訟於按院准行司理予是時即飄然出山聽理船 若以前但誦文實不解義至是恍然有悟乃往全 相之過也來方鼓噪予獨坐堂上焚香誦金剛般 衆爲亂如叛民予見而歎曰此予重違佛教乃著 剛決疑稿成衆寂然不肖者不信予心益危懼遂 幾死公延醫力敦之及回郡乃臥病於旅邸將期 抱關於治洗邀予往江行遭風破舟及至復大病 居於芙蓉江上者二年資斧已竭別駕頂公楚東

三十八年庚戌

予年六十五是年臥病族邸秋七月直指按部至

那訊及予司理聞之方為理反坐予罪直指大不然較之云某有大功於六祖向所捨為常住計者今姦僧得利而反罪之是謂平等法門乎復行本立當嚴死之由是本府親詣山中按僧之所開狀逐立常住庫司淸規監有號票凡一應錢穀收支有立常住庫司淸規監有號票凡一應錢穀收支有監寺書記秋毫出入皆執號票為據不妄發也至是當官研覈查算以號票為準無分毫沒予者時是當官研覈查算以號票為準無分毫沒予者時是當官研覈查算以號票為準無分毫沒予者時是當官研覈查算以號票為準無分毫沒予者時是當官研覈查算以號票為準無分毫沒予者時是當官研覈查算以號票為準無分毫沒予者時是當官研覈查算以號票為準無分毫沒予者時是當官研覈查算以號票為準無分毫沒予者時是當官研覈查算以號票為準因坐予到建立方為

三十九年辛亥

教候 題向無按院覆 命故延至今復奉重勘予年六十六春三月居端州鼎湖山養疴初奉

明始注銷聽自便時諸士子相依請益述大學決

别

四十年壬子

予年六十七居長春菴爲弟子講起信論八識規

將行皆不捨願從之炯尚有獨少遲之濟登以從

落唯通炯超逸風波患難疾病相從未離左右今

粤初予至粤時法性弟子相從者數十久之漸零

者難會乃著品節。

四十一年癸丑

李年六十八居長春菴夏爲諸弟子講圓覺經方子年六十八居長春菴夏爲諸弟子講圓覺經方為子治後事專人梁杏山者酒人也素以醫瘍名爲子治後事專人梁杏山者酒人也素以醫瘍名爲至视之曰甚矣少遲則莫救矣幸安心無傷也乃純采草藥以敷之隨手奏效詹如弄丸刻期取效至冬乃痉子爲夜以謝之此疽蓋自初坐禪時成患在身四十八年矣初起時偶忘之且不知爲成患在身四十八年矣初起時偶忘之且不知爲成患在身四十八年矣初起時偶忘之且不知爲成患在身四十八年矣初起時偶忘之且不知爲成患在身四十八年矣初起時偶忘之且不知爲成患在身四十八年矣初起時偶忘之且不知爲成患在身四十八年矣初起時偶忘之且不知爲可遂成大疾其冤業酬償蓋以身試之不寒也十月疾愈初與衡陽營儀部金簡有南岳休老之盟,

北歸探親至是不數日亦追至

四十二年甲寅

子年六十九春正月遊德山禮祖有詩四首訪馮 東僧請受戒馮公與諸同道各捐資修臺華精舍 夏四月還湖東聞 聖母賓天隨建報恩道場有 夏四月還湖東聞 聖母賓天隨建報恩道場有 夏四月還湖東聞 聖母賓天隨建報恩道場有 自東海立意著通議久蘊於懷未暇述今夏五月 方落筆五十日稿遂成十一月精舍成有山居詩 度侍者慈力

四十三年乙卯

道吳公生白過訪湖東談及楞嚴吳公大喜即與秋九日馮公自武陵移守湖南陪遊方廣寺回巡稿成纂起信略疏秋八月遊南岳中秋日登祝融意以雖有二節全文尚未融貫故重述之五十日養以雖有二節全文尚未融貫故重述之五十日

即請予遊九疑冬十月至零陵留過冬於愚溪命畫士臨小像册請予各爲傳贊馮公赴任未幾諸屬捐資刻之禮八十八祖道影吳公大讚歎乃

四十四年丙辰

于年七十一春正月歸自零陵方遺民從宦遊歸 依於湖東命名福心更初達觀禪師入滅之次年 之寂照菴今一紀矣予難忘法門之義向欲親往 之寂照菴今一紀矣予難忘法門之義向欲親往 之寂照菴今一紀矣予難忘法門之義向欲親往 一甲故香亦未遣也適聞葬必欲一往將行華藥 寺衆僧請齋為續法系遊梅雪堂弔遜菴宗師夏 四月難湖東有去南岳解嘲詩鄭慕一方遺民何 於禮大佛遊九峰六月至潯陽遊東林有懷古詩 宗登金韓峰禮舍利塔有詩有僧以五乳相邊為 宗登金韓峰禮舍利塔有詩有僧以五乳相邊為 宗登金韓峰禮舍利塔有詩有僧以五乳相邊為 宗登金韓峰禮舍利塔有詩有僧以五乳相邊為 对于有意里山亦願為護法秋八月出山至黃梅 避四五祖訪汪司馬公入業雲山留旬日汪公願 作匡山建造檀越別去相城訪吳太史觀我吳中 作匡山建造檀越別去相城訪吳太史觀我吳中 八本如欲建如意菴以留遊浮山截江登九華十 月初抵金沙于王合族與東禪浪崖耀公迎之后 其家士備齋資以隨行長至月望主寂照十九日 為達大師作茶毗佛事先為文以祭之限定是日 為達大師作茶毗佛事先為文以祭之限定是日 美家士備齋資以隨行長至月望主寂照十九日 為達大師作茶毗佛事先為文以祭之限定是日 之義焉遂留度蒙時為禪堂衲子小参有参禪切 之義焉遂留度蒙時為禪堂衲子小参有参禪切 之義焉遂留度蒙時為禪堂衲子小参有参禪切 之義焉遂留度蒙時為禪堂衲子小参有参禪切 之義焉遂留度蒙時為禪堂衲子小参有参禪切 之義焉遂留度蒙時為禪堂衲子小参有参禪切 之義焉遂留度蒙時為禪堂衲子小参有参禪切

之義焉遂留度蒙庤爲禪堂衲子小参南法各度避公請益相宗爲述性相通說諸請益者各說有法語作擔板語粵弟子通岸先別獨超益同諸子福善法孫深光廣益廣躡慈伴行四十五年丁巳
四十五年丁巳
子千餘人久候於山中留二旬每夜小参聞法各

知忍父子姪侯於奔牛之三里養請留園中結夏 之親迎至常熟遂至虞山信宿太史送至曲河賀 宇官齋於家將行弟子祠聞漢月久候錢太史受 起徐清之諸居士設供於山中馮元成申玄渚二 吳門巢松一兩二法師請入華山遊天池玄墓鐵 請留雲樓乃有三年之約遂行凡一過所經諸作 問法各申詰難時謂東南法會之最勝背所未見 月一日過白下江上一宿見一二故人即揚帆而 力辭之送至京口受三山播白齊罷即返匡山五 立津壑公譚生孟為葉為東遊集四卷刻之囘至 行城中宰官居士具舟放生餞別於湖上且具狀 法師聖公同通郡宰官居士金中丞虞吏部為大 山諸勝寒山趙凡夫職天池徐仲容姚孟長文文 **业乃遊靈隱三竺西山諸名勝贊揚放生三池乃** 戒作宗鏡堂記諸山各路名德法師俱集於湖上 多諸公請留淨慈之宗鏡堂日繞數千指爲說大 游泣謂予發人所不知者乃謂作塔銘囘時玄津 谷數喜發揮蓮池大師生平密行弟子聞之至有 方撰述之祖苟棄之則失其宗矣志欲但明疏文

始成一室乃得安居爲衆諜楞嚴起弟子超逸閉 六月十五日弟子福善經營五乳開土於十月終 宗寓居未幾時汪司馬公業先具資爲予修靜室 更部鶴樓追晤江上五月十六日舟次星渚抵歸 西五日至蕪湖劉籍部玉受欵留作異夢記說崔

四十六年戊午

死關於金輪峰

冬十二月殿堂成 予年七十三是年修開殿禪堂三月浮梁陳亦石 公入山結中素鮑公我齋夏公爲十友助修造資

四十七年已未

論命順首衆秋七月以五乳爲十万養老常住八 心智不及故世多置之但宗合論因思清凉乃此 業每念華嚴一宗將失傳清凉疏鈔皆懼其繁廣 月望予閉關謝事效遠公六時刻香代漏專心淨 華嚴受期爲衆請法華楞嚴金剛起信唯識諸經 予年七十四春正月專弟子通炯至遂開堂啓諷

削始多於關中爲衆講楞伽起信

提擊大旨使觀者易了題日網要於關中批閱筆

四十八年庚申即秦昌元年

公欣然爲作護法即具書往請合山大衆及本省 歎久之衆僧因具白所以思予歸請不能之狀吳 管深思子歸堂主本昂等往來問訊十數欲請之 予年七十五春課餘侍者廣益請重述起信圓覺 而未能也吳公赴任便道入山見予重奏之功嗟 初予去曹溪之南岳住匡山業已八年而曹溪衆 贊子病中為纂傳七十一首各系以贊親為書之 公轉專泉入曹溪禮祖託山中弟子寄乞諸祖傳 直解莊子內七篇注夏病足痛前任分巡衡陽吳

子時以病謝

鄉縉紳居士同具狀昂同二三耆舊至匡山哀乞

天啓元年辛酉

予年七十六春弟子侍御王安舜入山問訊夏爲 衆請講楞伽時前任本道配公亦轉學海道同吳 公具書再至予又以病謝是年冬又爲衆講楞伽

肇論起信

天啓二年壬戌

天啓三年癸亥

心四月爲衆說戒講楞嚴起信等經論秋七月又

問訊三月省城法性諸弟子至師時專以法施爲

師年七十八居曹溪禪堂春正月郡守張公入山

了炯初不會其意連日侍立所聞所叮寧者皆佛 溪師見之喜動顏色且云來得好遲時恐汝懊悔 語□去期已先露於炯未歸之前矣 法大意倦倦以法門無人爲歎提撕者又極緊切 **書促歸中有云汝早來一日便是一日來老人餘** 離巨山留首座通炯於五乳調理大衆至是三遣 長唇紅鼻端微汗手足如綿蕭公聞計悲慟久之 燭天隔山之人成疑寺中火也三日面色如生髮 日無多力矣炯得書遂忙忙南還十月朔日抵曹 即移書南韶二郡公為師建塔及造影堂先是師 坐而逝於時百鳥悲鳴四衆哀號不巳星夜毫光 香示衆日大衆當念生死事大無常迅速一心端 藥劑不服十一日巳時別張公申時飲水沐浴焚 人超逸至云再兩日不得見汝了師知幻緣將盡 得恰好韶陽太守張公親入山延醫調治初入門 歡出山師即示疾初六日侍者廣益省城囘云來 爲衆說戒十月初四蕭宗伯玄圃公應韶北上入 山見師欣然留連且為師卜壽穴劇談一日夜甚

修殺香去你币

佛成道日海印第千錢藤益聚談謹書 法門增益之勝後有正眼幸鑒別焉戊戌孟夏 足徵事貴傳信不敢扳綠葛藤添河蛇足以於 師爲中興龍象一言一口關係人天眼目文取 人滅後上首弟子顧善等續記附刻於後以大 今遊依元藁付行天啓三年於玄實繇乃大師 海幢与華首和告從二個取得此菜籍寫封寄 座寄菴通伽所藏烔師歿後法孫今照今光仕 大師年譜自序實錄向有手筆草噪鳥大師首

श 大師託生辨

足安得有號子是故之事可理解居石門雕門達前 學使完初至屬前統手道故囑溪節證明末後事余 于也可埋登第校官廣州皆先知之病症不起召魏 俊彦少兒。藏不語。日呼且父名日汝我前身弟 生為陳而仙歿後隱境為蕭公子諸方随疑其誕天 湖南顧恩衡公一曹谿中與憨大師傳盛談靈異宿 讀而心所之學便全里人包大師東遊未嘗攝人體

約復其侵田虎子以信心入胎自來父母良非偶然 來若恋公所載呼名敘昔云云則未之前聞也司理 私語家人占乘便得往曹谿矣以此言證知大師再 實大師示寂後三年生四歲而殤司理之官日虎子 庭抑亦山中善年宿乘願力來住此道場耶塔記則 遊戲自在臣先大師遺蛻必匡山現此金雞還鐵祖 安曆靈骨建塔於先大師塔院之左至人出生入死 齒不壞舍利無數人者如彈丸小者如菽色如白瑪 際及塔記石本寄全僧牒日二公子示現童真於菩 可理爲善生人師壓頂記別此爲廣理申明大師規 逐迎賓頭處越翼日大師主止怒容法筵宛如昔夢 父子永業歸心仁根年固生生居士常夢護伽藍神 日顕氏子名加一一虎子生於天啓六年丙寅二月 瑙扣之經然有聲海衆共觀數異以是月二日酉時 薩家能令眷屬創世閒恩愛作茶毗佛事火浴後頂 其詳遂以崇禎二年七月南華僧智融本昂伸報文 也重直示現各有所表吳粵往來表法界一地故痘 如故靈骨不損表靈相具足故四

子四月望日海印弟子虞山錢謙益粲談謹述 其說論南華僧錢諸塔院昭示後人俾勿惑歲在庚 正信也既屬忞公門人告於其師請爲刊正而又書 丹青吾權後之修僧史撰佛錄者探獵吳聞而訛蓋 小儒眼如針孔景掠李源圓澤身前身後剩語縊白 生即事徵理無可疑者嗚呼我大師人天之師末法 郵傳除言夢斷海形牛並不已途乎俗語不實流為 中第一龍象也末後轉輪法門一大事因緣也信徒 衣以寄生宣老六年仗白雲而勘辨莫不付囑相應 無識縈心香火指法城爲首丘認實均爲華表章句 必入大師室著大師衣受大師戒遣來作使告報異 香烟猶指五乳之眞身有歸吾謂是子也多生此世 機感歷然而今無是也吸引緣熟啐啄時同雙峰之 佛粗應化入胎人天轉輪專非聊爾栽榕再世遘浣 以是因緣證成為大師再來則獨謂不然何也古來 故此則積劫熏修彈指幻化不可以思惟測度也若 歲夭折表已入鳩摩羅地故歸骨塔院表依止大人

憨山老人夢遊集卷第五十四

氏夢觀音抱送而孕誕於嘉靖丙午孟冬之旬有一

参巴下古本

憨山老人夢遊集卷第五十五

阶錄

虞山私淑弟子

毛晉

編較

大明廬山五乳峰法雲禪寺前中興曹溪區

法憨山大師塔銘有序

生之成之是謂聖善黑之變之是謂潔白世閒慈孝 其海之一温而已矣北講之涉天臺也自無極之說 心却十鎰之供於山陰溝邸獨拜 知非池中物也從與若爾以裂愛網而師之關問極 定望之似阿羅漢刻就外墊而母督之嚴徐而察焉 亥先於懸弧者一日而示寂焉師丰儀怒滿神情凝 復如曹溪當年之七十有八臘之六十是爲天啓癸 於廬山五乳峰下利日法雲以養十方之老居数歲 娑著身而師年六十有九矣又三年反自吳營菟裘 南而以出家優婆塞大振曹溪之鐸 蹟東海之那羅延窟久之得六種就踰五十放於衛 華嚴玄談昉也南禪之反故鼎也自雲谷之付念佛 閒於報恩藏輸三宿子舍有法喜而無情怛君子曰 泥金和血以塗葉華攝二老於香幢光蕊其省觀也 十六北游出入燕晉得自在三昧於臺山三十八遯 公案昉也兩大士口光交灌師頂不驚不過身宜晏 孫俊公爲之師十九禮棲霞雲谷大師薙髮受具二 日白衣重包十年辭家依報恩寺主西林和尚使法 孝定皇后之賜 覃恩済建袈

念息塵忘立而喪我者不知幾旦暮也其偈日瞥然 吹萬之龍雪窟頭陀酬對以目菜羹米汁旬啖一升 偈曰生死晝夜水流花謝今日乃知鼻孔向下得宗 前一一論了而七歲時生來死去之疑沒然水釋其 **背人義得未看有所謂旋嵐常靜江河不流證之目** 心如形斯鑑其養之專也乃至行於都市不見一人 坐華藏道場而清泰法王若二法王子入於淨 **黎森羅從起滅得宗通之相二牢山之會心也海天** 通之相一卓錫臺山略杓岸頭聞機數反久乃不聞 知其解者以爲密雲尚往他日更於肇公似昔人非 都歸寂滅場得宗通之相三又後三年静中機發不 澄雪月光此中凡聖絕行職金剛眼突空華落大地 入俗而有省覲之游妙喜大悟十八小悟無數箇中 游一鏡中夜半忽沉天外月孤明應自混驟龍所謂 因心念意在舌端其偈曰烟波日日浸寒空魚鳥同 月落後相見是耶非耶得宗通之相四蓋自是迴真 雪月瓦影交光三昧現前無入無出其偈日海湛空 一念狂心歇內外根塵俱洞徹翻身觸破太虚空萬 念猛

曰盍使一一文句消歸觀心師領之楞嚴之有通議 決而以現量萬目首楞嚴王八閱月無用心處其在 炭雲與瓶瀉營罕至席不睹其倦於動也嘗閒行海 其來處當事之最不交睫者九旬以水代瓊者七日 三變淨土者曲為範根漸示一班耳從是法華之有 品喟然嘆日佛意要指娑婆人人目前即華藏然須 自此助也嘗以四法界觀說法華于衛南至現實塔 那羅延隨則楞嚴懸鏡半燭而成亦無用心處門人 起後日辦事師其二之中手臺山之悟四顧無所咨 北渡而瓊州地震存毀具如師言永嘉詮定初日引 南訪子瞻寂音故蹟而望鄰城生氣獨據西隅趣行 其去以厄月息者也借曰肚節則耄期而徑余邑屋 證如時而給剝啄無聲所與首事妙峰登公了不知 **進之會日更供具席以半千坐滿萬人皆師陰爲壁** 亥豕妙法蓮華囘向 相得即一點無空過者而客主周旋語不短忘文無 恒與王所相應故華嚴之在筆端也六字佛名心手 冷緩惟師自知意者菩薩根力次第增上明妙安樂 慈聖亦若是則已矣臺山無

其將與合論並珍如是種種說通之相布在方策觀 門無住之住皆若有啓其鐍者以故楞伽筆記和人 蓋西林爾嘗範置師以世諦使侍皐比故於二酉多 更爲諸弟子暢其玄義而師以西伯爲東諸侯主矣 質師日是吾宗所謂不屬生死一著子也參知躍然 指大學決疑著春秋左氏心法道德南華內篇爲智 以爲前茅中以爲副乘卒以爲輔車於是作中庸直 作一信覺豈不眞勇邁終古大丈夫哉韋編珠笈初 大士最初結束撩起便行直向山眉海目繞錫三周 刻之以香課佛名日至數萬圓順交多禪土雙妙兩 烟悟火宗蓮壓然誰謂與不傳者俱往而法雲之漏 視而笑華嚴一宗往往迷淸涼之廣而耽方山之略 栽松代與金剛司契而師照以楞嚴之鏡則無門之 擊節有品節有通議自此防也折蘆孤唱楞伽 心法也東夷問參知舉大易涯乎晝夜之道而知以 度善巧而鬼神情狀表章丘明日夫夫冥多魯竺之 不知廣之可以略也五乳一關三周寒暑疏之綱要 目為流徵之音而金剛決疑則雖空生再來固當相

場也爲 得休念光師之處且至寢不成寐跏趺坐忘起問居 誕唱導之侶妙峰大方咸被龍錫而獨師逃之海濱 諸而數盈於把矣故終其身於無礙辯才而得自在 耳師心藏焉館於胡泉憲順在之署强可覓句遂不 據我舌本爾時恨不遭鉗錘毒手痛棒熟眠以至此 多之建實坊於西山以召而弗之敢在也 求華嚴菩薩住處所謂那羅**延窟而谷隱焉** 師之升聞於一慈聖也爲 哦不停以爲魔著閒而請焉報言驟發悟機而有物 師時已得肇公意旨北臺□影師言庶幾獨怪其吟 慶小穴小友畜師勉以離心意識参出聖凡路學而 之室惟得之矣伏牛法光和尚師目之宗門香象自 贖以晤言日可知王逸少名理讓支公而汪左司馬 南溟則悲五宗衰相聲輓力推岌岌乎爲徑山中峰 弇州屬以慧業建 冥得其所謂夷然不屑歐仲奉嘗 然良史而非滿字莊嚴一乘鼓吹無述也王大司徒 所漁獵法書韻語少作功力美秀夙成事辭之文居 皇儲禱心居一年 聖躬禱也其作無遮道 負皇應河淸之瑞而 賜金百 慈聖

A com 1-4

書以報 草昧故庋於他巳义 請 黨疑與師購將倒戈師更與人市啖以瓜果一 宋七真故字以爲訟端、萊守有聞於李中丞將致辟 有挾隆隆而耽視兹土者號無賴黃冠百餘電稱引 而觀音菴乙廢墟 矯制事果山以東緇黃鰥寡囚繫之腹而有司者策 夷遂不果而中貴人之與轉藏輪者嘗以眦睚得 藏還寺而舍利窣堵出光明橋以迎貝氎師因入謝 廊之燼也師與雪浪恩公矢以一期戮力及奉 第漸驅越境而已其以德報怨類此而往者報恩殿 讓謂方士殺僧矣師乃明其不然即渠魁無使滅耳 而首難者露刃偏師談笑道之立解偕行數百武其 五 對 稱黃冠摭巳事鳴登聞以訟有 十鎰以籍阿蘭而弗之敢拜也無巳請如漢汲黯 上左右衆鐮之謂其監綠飾佛事多壑帑金而許 慈聖日减膳鑑需隆棟久之事有端矣戒於島 詔獻師內空其心而外侃侃言事請竅內府 慈聖愈益多之藏函 賜額尙方稱海印禪寺矣於是 物宮妖之勝任者布金有差 實壓有隕自天以 旨逮師及中貴人 郡盡 過 勑

宇內法喜無兩其示寂園扉雖魍魎輩毒於含沙而 賓竊負法墨蝥呱漸騰而附青雲上矣師謂紫柏瀾 山朗目智公亦以旋陀羅尼與作點睛手則予小子 交揚屬雲棲證知吾師蓮祖爲法華地湧中人而浮 柏以舍利遷爰及闍維銘諸堅白其斯以爲方外素 雖微上首鎧公固當巳事遄往您期有待而適會案 本所懷來固未嘗不在雷陽樂戟之下也變徑之遊 駕於堅牢晉琬公塔院之會送難通理一坐四旬於 涅槃起矣紫柏大師於世罕所許可而獨輕千里之 飛雪之鑪運風之斤狎主之献亦不啻三鎧甲龍從 雲春樹清風匝地何之非早歲損場而師所描邈於 孔臨岐偪拶亦自不無妙峰恩公一臂臺山遂作暮 其難棄能棄難忍能忍以能幽贅 社稷功亮夫師於般若香光固是雲谷老人安上鼻 整聖者雖往來屬而億無喪矣故相張洪陽先生稱 設解坐私建梵利成之雷陽而諸利之蒙悉檀於 人者本不欲患師更以所稔顕末具廣貞狀 饑之籍固在而他無所得其漏危釋憾於中責 神廟之孝爲 上意

牧後機於所不得已而藏用於所不可知襲稱其德

而力倍凡爲無算矣雖報恩之籌以師命輟海印之

其羨以界塔院寺主大方貲至萬知以恬養勞以諫

諏不惜四楞著地惻乎惟恐人之不有之也蹤蹟半 乎技矣師毗尼純白廉而不劌門庭在雲棲紫柏之 天下所至登羯摩之壇升白椎之座以數十會計東 關德尤之符逅之而慢幢折疑城頹瞋劍墮出要咨 持戟使師粒大鑒宗盟而師脫載鬼之孤納用缶之 房扉為之啓從容諭衆而欲得賤雞耶今罪在大辟 齊南越法化久湮佛種幾斷而自其得師也若醯 爛無烈俠氣有烈俠功所謂動刀甚微躒然已解進 反側心且明非胤子之過匡圍聞然蓋師輕身以先 市井豪謹以媚竈胄士之告急於師者再矣師方安 陵其行也與白艚會於時權使有感於將軍則多族 遺栗食民而騰粵耀邦人患之而戴公胤子將歸温 羅雖賤誰當食者聚怒少息而急白權使者出令事 欲而黃白之治受成有司民不知有隨尾之咥白艚 爲嬰兒其應如響於是稅使者窘於至期迫不得所 不可響遜差幸有浮慕於福田而師受戴制臺請與 智妙殿豈復有乏少耶實璫之盖於權也藪盜叢姦 續以城社際南華之墉以裨販圯而師惟心之土悲 雑

萃通國之權以請禪講勝流別心體就美盡東南而 以堂金沙之東禪以構其日歷尾是瞻武陵雲棲則 者陳情而宥師有二焉首尾聚奏凡六年乃聽自念 一郏鄏矣。 賈勇而齒牙無畏投芥於鍼使淸涼之區乃得遵 說無礙之辯曲示單傳而鎔入一塵法界似圭峰解 以爲疲於津梁而師固未嘗下臺山之座也縱其樂 竟爲廬阜之本寂所局已復爲曹溪之驅吟所吸人 馬靜峰執其牛耳是時名刹之虚左者桐鄉之浮渡 練若以會儀部金簡爲三年淹五乳十遭則汪少司 無慮百數而天隨風覓則北之胡南之戴爲尤湖東 免妙喜之冠反棲賢之圉而師初行脚時所銘 m 僧物寺主取大邑人無災用脫 桎梏居然五天之郛 累朝憲章弛於任土而大木終其天年爲官家佛法 淨行無冠笄童耄翕如心別傳之宗時復爲利根者 之觀天地熏於二嚴誓於九品乃至盂蘭放生諸白 **淞**雖豐城之與**延津弗若矣師所莫逆海內賢豪** 慈聖之爲 今上毓於青宮 孝定也臨於湘東大作佛事然後 詔戍士之老疾註 誤

說駕矣二時暖於頂三日汗濡於鼻觀貌如生而海 清言狹日數若生平日中而驪駒叱馭日晡而白牛 少無他**嘯也**初度欲臨而張韶州奉紫回羅衣爲壽 判決立圖而小不豫矣侍者以遺教請至心念佛 警若將遠行且各留緒墨爲別衆以師眷眷法雲也 法施爲心六字其末後句也前化及乙三旬偏謝申 蓋師之所從來深遠矣年譜之筆絕於癸亥而專以 以游世閒所謂善能分別一切法於第一義而不動 是智依藏染依智淨染有生死淨無路佛佩斯印也 率陀樓閣影現夢心錫以策文日分別是藏不分別 與登公謁清凉國師於金剛之窟而慈氏法王亦采 源者豈曰無庸師可報紫柏於淨土矣書譯嚴時夢 十年以來飲光之華往往於吳楚閒振其夕秀淪曹 寥稍似婆心太熱亦或觀時逗根不忍法堂前草深 以宗一心而嚴無生往生之土又以永明雖正令寂 脫於文字般若而多得世閒障難似覺範森雜萬 屬其瑞相者謂招提且火最後供通日內外諸法空 文耳先甲日辛以革其面後甲日丙以蔚其文二

> 醒不消一叫矣綠熏習影重重無盡而出獨弟子日 現色身漚滅空澄了無所得永明有言生則決定生 步趨未也共相與力倘亦有不可思議者焉師現 楞嚴殿蓋夜一浦勤勇坐脫可謂奇中倍人下遠余 生剜臂為燈以斬反錫痂瘢作大悲形衣髮皆具首 也於師臺山願文四攝衆中固是恒河沙一數而 羊馮生昌歷某某等服勤請事助轉法輪皆其盛者 福善某某等在纏弟子日即墨黃生納善某某等五 者傾都去震旦而哀者撼丘陵榮者雕金石如夢 小子賓啖法乳於名字之初歷心血於軍增之後雖 去則實不去利那際中去齊而送者從市去越而慕 同 行著於年譜不可殫書所著復有心經直說圓覺 如何去來之足問然則参雲谷時所觀三 聖聲 意 乍 黄

響論熟山緒言夢遊集若干卷並行於世銘日

師舌相谕三紀而不能挈其廣長摸師眉毛亘三旬

而不能知其在亡聽之以心兮失順呻之師子游之

肇論註八十八祖傳贊方便語參禪切要觀老莊影

經解起信疏略起信直解百法規矩直解性相

通説

峰登公也師以江南習氣輕暖宜入冬氷夏雪苦寒

僧目光激射遂與定参訪之約質明則已行矣即妙

菩薩戒弟子皖舒廣淪吳應賓頓首拜誤 慈航 赐進士出身左春坊左論德兼翰林院侍讀 地皮相者以爲化城之幻迹而心服者以爲實所之 地皮相者以爲化城之幻迹而心服者以爲實所之 水 其神不傷璞三刖而爲璽金百煉而彌剛禮師塔

告日大師東遊得子而惡日刹竿不憂倒却矣燈炧 者日福善奉全身歸五乳而留爪髮於曹溪走書來 王舍城大作佛事而大師有雷陽之行其機緣所主 公在他日請爲第二碑又明年乙丑其弟子居廬山 曹溪也大宗伯宣化蕭公親見其異爲余道之巳而 是二公名聞九重如優曇鉢華應現天際妙峰不出 南海陳迪祥以行狀來謁余表塔余曰有吾師宣化 横見側出固非凡情之可得而測也大師之遷化於 憨山大師實主其事 之志崇奉三寶以隆顧養 我 **慈聖以為愛建祈儲道場於五臺山妙峰登公典** 神宗顯皇帝握金輪以御世推 大明海印憅山大師廬山五乳峰塔銘 光宗貞皇帝遂應期而生於 上春秋熙盛前星未耀 慈聖皇太后

> 除了無人蹟意主東淨者非常人也訪之一黃面病 歲相依如無著天親嘉靖丙寅寺煥於火誓相與畜 中嚴如禪坐不見市有一人也雪浪恩公長於師 然問母從何處去即抱死生去來之疑九歲能誦 師修治故塔稍酬舊願焉師嘗聽講於天界廁涵清 德疾時以期與復師既歸然出世而雪浪卒爲大論 巳熟寐晨起而病良巳三月之内恍在夢中出行 印從雲谷會公縛禪於天界寺發憤多究疽發於背 住處悟法界圓融無盡之旨慕清涼之爲人字日澄 門品年十二辭親入報恩寺依西林和尚內江趙文 **禱護伽藍郦願誦華嚴十部乞假三月以舉禪期禱** 於無極某公認講華嚴玄談至十玄門海印森羅常 肅公摩其項曰兒他日人天師也十九祝髮受具戒 父彦高母洪氏夢大士抱送而生七歲叔父死屍於 宜爲余何敢復辭謹按師諱德淸族蔡氏全椒人也。 月落晤言亹亹所以付囑者甚至塔前之銘非子誰 市

裏灣龍放去休且日知此意否要公不可捉死蛇耳 兩鐵牛相關入水去至今絕消息峰日且喜有住山 古人三十年聞水聲不轉意根當證觀音圓 交流澌衝擊靜中如萬馬馳驟之聲以問妙峰峰響 鼓師深契之送師遊五臺詩云雪中師子騎來看洞 本錢矣遇牛山法光禪師坐參請急法光發音如天 嵐偃嶽之旨作偈曰死生晝夜水流花謝今日方知 然之日尋綠溪廣內危坐其上初則水聲宛然久之 師居北臺之龍門老屋數樣在萬山氷雪中春夏之 **鼻孔向下峰一見遠問師何所得師日夜來見河中** 借妙峰結冬蒲坂閱物不遷論王梵志出家碩了旋 不語僧遂相與樵汲度夏時萬壓元年癸酉也明年 便休戰日子却來處分明遊盤 嚴問何方來日南方來嚴曰記得來時路否曰一過 視一笑多優融貞公融無語惟張目直視又多笑最 楊來訪須髮鬈毯如河朔估客師望其眸子識之相 廣陵市中日吾一鉢足以輕為鍾突抵京師妙峰衣 不可耐之地以痛自摩厲遂飄然北邁天大雪乞食 山至千像峰石室見

能致 Щ. 點筆念佛不廢應對口誦手畫歷然分明隣僧異之 有矯詔賑饑之事山東歲凶以此廣 分了然心目也師既建所儲道場遂遠遁東海之牢 智依藏染依智淨染有生死淨無諸佛自此藏智之 率徒衆來相關已皆讚歎而去嘗夢與妙峰夾侍清 現又夢登彌勒樓閣聞說法日分別是識無分別是 京大師開示初入法界圓融觀境隨所演說其境即 行脚皆夢中事其樂無以喻也還山刺血書華嚴經 不動鳴擊子數聲乃出定默坐却觀如出入息住山 惟睡熟可以消之擁納跏趺一坐五晝夜胡君撼 現前軍身是口不能盡吐師日此法光所謂禪病也 請賦詩甫搆思詩句逼塞喉吻從前記誦見聞一 身心湛然了不可得說傷以頭之遊雁門兵使胡君 行忽立定光明如大圓鏡山河大地影現其中既覺 忽然忘身衆籍買寂水聲不復聒耳矣 賜內帑三千金復固辭使者不敢復命師曰古 慈聖命龍華寺僧瑞菴行求得之遣使再徵不 昭慈於饑民 一日粥罷 Z 臎 颒

不亦可乎使者持賑籍還報

慈聖感歎率闘宮布

獻成將置 慈聖左右并按前後檀施帑金以數十萬計拷掠備 聖許之歲乙未而黃冠之難作師住山十三年方便 。州非 之後懼無以謝 主師 語類聞於外庭所司遂以師爲奇貨欲因以株連 使四出中人讒講動以煩費為言 飛章認奏有旨逮赴詔獻先是 本末具奏日願日减善差百金十年工可學也 之日光如浮橋北度經在塔光中行心師還以報恩 舌吐不能收乃具獄上所列惟賑饑三千金有內庫 鉄耳 說法東海彌離車地咸向三寶而黃冠以侵占道院 上命師廣送因以便歸省父母寺塔放光累日迎經 金造寺賜額日海印師指京謝恩為報恩寺請藏 江上師日君命也其可違乎為師作逐客說而別 籍可考 慈聖及 一無所言已乃從容仰對日公欲某誣服易耳 主上純孝度不以錙銖故傷 上意也達觀可公急師之難將走都門遇於 聖母何地乎公所按數十萬在縣官錙 聖母公窮竟此獄將安請平主者 上皆大喜坐私造寺院遣戍雷 慈聖崇信佛乘敕 上弗問也而其 聖母心獄成 慈 師

生死一著耳周君憮然擊節粵之孝秀馮昌歷輩聞 歲大疫死者相枕籍本衆掩雜作廣薦法會大雨平 度庾嶺入曹溪抵五羊豬衣見粵帥就編伍於雷州 華至實塔示現娑婆華藏涌現目前開悟者甚聚居 風來歸師擬大慧冠巾說法搆禪室於壁壘閒說法 晝夜之道而知發問師日此聖人指示人要悟不屬 地三尺寫氣立解多政周君率學子來扣擊學通乎 雲樓發揮其密行以示學者自吳門返廬山結庵五 毗佛事箴吳越禪人之病作擔板歌弔蓮池宏公於 又二年念達觀法門死生之誼赴葬於雙徑爲作茶 寅夏師在湖東 爲實坊緇白至集攝折互用大鑒之道勃焉中東甲 罗五年乃克住錫曹溪歸侵田斥献舍屠門酒肆虧 溪天啓三年癸亥宣化公赴召來訪劇談信宿公謂 乳峰下效遠公六時刻漏專修淨業居四年復往曹 老僧世緣將盡幻身豈足把翫哉別五日果示像疾 師色力不難百歲更坐二十餘夏如彈指耳師笑日 韶陽守張君來問師力辭醫藥坐語如平時旣別沐 慈聖賓天詔王慟哭披剃返僧服

歲解 大也師爲余言居北臺大雪高於屋數支昏夜可鑑 礦之役釋職尤甚採使調曹溪師以佛法職受徐為 聲色會城以寧珠船千艘罷採不歸剽掠海上而開 以白納作辦羣噪圍帥府師緩頰諭稅使解圍不動 以赈旁山之民威免捐潛稅使與粵帥有除嗾市民 人不知山東再饑師盡發其国現泛舟至遼東羅豆 堂堂所至及物利生機用落巧如日 楚卒發幾無完膚此楞伽筆記所由作也師東遊至 毛髮堅坐待龍身心瑩然運明塔院僧穴雪以入相 言開探利害由是珠船罷探不入海而礦額令有司 為師作末後證明耳嗚呼知言設師長身魁碩氣字 蕭公語余衰老赴屬跋涉二萬里何所為哉天殆使 **鬚髮皆長鼻端微汗手足如綿骨徒驚告謂師復生** 水忽脳百鳥哀鳴夜有光燭天三日入龍面顯發紅 浴焚香集衆告別危坐而逝十月之十一日也曹 制府戴公詒書謝日吾乃今知佛祖慈悲之廣 蘇若陷木石逾年在雷陽聞侍者越呼遠繁毒 洞中里許乃出當詔獻拷治時忽入禪定榜 田田 R 調 加被而 溪

> 楞嚴法華通議起信唯識解若干卷觀老莊影響論 善也學士歸依者馮昌歷爲上首御史王安舜孝廉 焉亦糟粕耳師於出世閒義諦豈必不合古人有不 若干卷嗟乎師於世閒及字豈必不逮古人有不逮 道德經解大學中庸直指春秋左氏心法夢遊 師所著有楞伽筆記華嚴綱要楞嚴懸鏡法華繫節 劉起相陳迪祥歐文起梁四相龍璋皆昌歷之徒也。 者善與通烱超逸通岸也賣介子弟剜臂然燈以求 甚深從師於獄職納橐讀者福將也於始相依於粵 偶然哉師世壽七十八僧臘五十九前後得度弟子 日解脫竟懵然而覺師之樹大法幢為人天眼目覺 世附隸入身求解脫耳師爲說三歸五戒問解 師道現大士像於瘡痂中而坐脫以去者即墨黃納 日我寺两仲秀才也身死尚在中陰聞肉身菩薩出 嘉與楞嚴寺萬衆圍繞有隸人如狂易狀搏 集叉 脱否

全體呈露後五百年使

人知有

大事因緣是豈可

以無畏力處生死流隨緣現身應機接物末後一著

合焉亦皮毛耳惟師夙乘願輪以大悲智入煩惱海

場所で言語がで言えている。是故讀師之書不若以語言情見擬議其短長者哉是故讀師之書不若

而有以知其願力之所存也謙益下劣鈍根荷師記聽師之言聽師之言,又不若周旋羝錫夷考其生平

前援据年譜行狀以書茲石其詞寧繁而不殺者欲

五濁世閒生死之涂屹立重關重關峻復誰不退墮以示末法之儀的啓衆生之正信也銘曰人生出及

師子奮迅一擲而過齊河焚舟縣車束馬一鉢飛渡

光明四照上徹帝閣榮名利養匪我思存震霆赫怒離我禦者永山蟄伏雪窖沉埋氷解凍釋水流花開

電陽萬里謂我何求軍持應器橫戈杖錫毁形壞衣我性不遷桁楊木索說法熾然覺範朱崕妙喜梅州

山川自如孰執景光以窺太虛福德巍峩文句璀璨師之示現如雲出谷觸石膚寸雨不待族雲歸雨藏。

視此內身等一眞幻匡山不來曹溪不去塔光炳然

天啓七年丁卯九月朔常熟幅巾弟子

錢謙磊謹述

長照覺路

憨山大師傳

出家白首而歸鄰人曰昔人猶在耶志曰吾似昔人

論向於不遷論未明旋嵐偃嶽之旨忽閱梵志自幼

— 835 —

哭日天耶那裡去也師愕然問叔身在此又往何處 光笑休去一日謂公不必他往願同老伏牛是相望 子來下一跳師日和尚不是拏龍捉虎手光拈拄杖 王所示以離心意識多出凡聖路學師深領其旨每 見河邊兩個鐵牛相關入水中去也至今絕消息妙 也師同妙師登五臺光以詩送云雪中獅子騎來看 作打勢師把住以手持其發口說是鬼子恰是蝦鄉 和尚通否曰三十年來拏龍捉虎今日草裡走出鬼 自得此佳句復笑曰佳則佳矣那一竅欠通在師問 數日光師談論如天鼓音一日搜師詩讀之笑日何 師笑曰且喜有住山本錢矣時伏牛山法光禪師在 於懷至是如永斯泮矣明日妙師問所得師日夜來 人爾母腹中耶又切疑之自此死去生來之故耿耿 視見嬰兒問母何從人嬸腹中母拍一掌云爾從何 日死矣意死向何處去疑之未幾次確學子隨母往 非昔人也豁然了悟初師方七臷叔死权母撫尸而 禪道久無飾匠比見光師始知有宗門作略大方主 **洞裏潛龍放去休問其意曰要公不捉死蛇耳師言**

人為下居北臺之龍門大風時作萬竅怒號意喧之人為下居北臺之龍門大風時作萬竅怒號意喧之水學宛然久之動念即聞不動念即不聞一日忽然於學宛然久之動念即聞不動念即不聞一日忽然於學宛然久之動念即聞不動念即不聞一日忽然於學內然及之動念即聞不動念即不聞一日忽然於三斗日食麥麩和菜以合米為飲送之半載有餘米三斗日食麥麩和菜以合米為飲送之半載有餘米三斗日食麥麩和菜以合米為飲送之半載有餘學不可數量如是者八閱月全經旨趣了然量中一學專入金剛還石門榜大般若寺見清涼大師倚臥中不容思量如是者八閱月全經旨趣了然量中一學專入金剛還石門榜大般若寺見清涼大師倚臥

界圓融觀境謂佛利五入主件交多往來不動之相

此何境界大師笑日無境界境界又夢履空上昇入

廣大樓閣橢禮彌勒聞其說日分別是誠無分別是

機設其境其境即現自知身心交参涉入妙師問日

逃榜嚴懸鏡一卷丁亥開堂說戒四方衲子日益至 虚空大地咸是妙明真心中物全經觀境了然心目 光此中凡聖絕行藏金剛眼突空花落大地都歸寂 作心經直說以懸鏡文簡學者不易入始創意述楞 滅場入室取树嚴證之開卷見汝身汝心外及山河 起見海忽身心世界當下消落偈日海馮空澄雪月 殿通議已丑為報恩寺請藏實送至龍江便道省親 合宮布金修寺 天下名山 千金為師建庵師俱辭丙戌 寺住持至海上瑜師尋建寺西山期以必往又後三 以五毫新嗣之勞訪求三人大方妙峰俱至命龍華 尋清涼疏所謂那羅延窟者即東為年山也 未師以臺山虐聲難久居遂蹈東海之上易**號憨山** 智依 且欲重修本寺師出家處也乞 於武當皇太后遣官於五臺就本寺建道場武癸 分了然心目萬歷辛已 藏染依智淨染有生死淨無諸佛自此藏智之 慈聖以其一送東海牢山無可供奉命 賜額日海印是冬禪室成靜坐夜 神宗皇帝遣官祈 較頒十五藏經散施 聖母日城膳羞百 聖母 皇嗣

5 . A A-rea

景何如師方註楞伽經拈卷示之日此雷陽風景也

督府命住曹溪關堂濬源行化之外曾潤枯瘠癸卯

達觀在京師適妖書發難下

部獻訊以爲師之故

衆聞之悚然出獄及雷州侍御樊公繼謫問雷陽風

語人日人知憨公爲大善知識不知有社稷陰功也

上意解時相國洪陽張公覽諸當事營救甚力後張

所司印籍以復至是請覈內支籍代賑之外無他 慈饑民乎令盾與使者遍散之僧道孤老獻囚各取 不敢復命師日古人矯詔濟饑今歲凶何不廣 死而已止供前施七百餘金而前所辭建庵金使者 大孝手即曲意妄承奉非臣子所以愛君之心也有 塊爲僧無以報 盡令疏向所出諸名山施資十數萬計嚴訊之師日 前方士流言黎登聞鼓以進下鎮撫司獄望風旨者 年乙未逮師先是 命說戒於慈壽寺再請學修報恩寺 偶以他故藏 兩積之三年可學 聖怒有忌送經使者因之發難遂假 國恩今安惜一死以傷 上數惡內使以佛事請用太煩 慈聖俞之甲午冬入賀 上命徐侠明 皇上之 聖節 垩

御侍者請垂一言師日金口所演尚成故紙我又何 想也癸亥冬十月示微疾韶陽太守挾醫問疾師不 伯吳公暨諸弟子。固請復至曹溪者三壬戌冬至爲 文殊毫丁巳下山吊雲棲說法淨慈之宗鏡堂日邁 影丙辰登巨山避暑金竹坪註肇論僧某以五乳胎 故免丙午遇赦癸丑至衡陽遊南嶽禮八十八祖道 方絕不知有佛法師居東漸久其長率衆來歸開講 爲自後不語端坐而逝初外道羅清以其教遍行東 坐匡廬今日踰河越嶺爲著甚麼爾曹愼毋作容易 弟子戒期講楞嚴起信諸經論晚多示衆云老人穩 著華嚴綱要重述圓覺起信直解莊子內篇註粤方 千指歸閉關謝衆效遠公六時刻香代漏專心淨業 師喜其境幽將投老焉爲達觀茶毗手拾靈骨藏於 昌塔壓碎師所萬樓先時郡士大夫競留師師不止 城將有災行後地大震陷城東隅暨官民廬舍仆明 心法乙巳渡瓊海夜望郡城氣索然遂行謂衆日瓊 解者師云春秋乃明明因果之書耳遂著春秋左氏 激遠戍所因憶達師云楞嚴說七趣因果世書無對

往大言於衆曰諸君所爲欲食賤米耳今犯大法當 其銷擬殺師師笑視之日爾殺人何以自處其人氣 取死即有賤米誰食之耶團乃解會城以寧復甦探 教師遂破關往認從容開曉使者悟傳散亂民師先 向慕法化大行雖上下崇禮奉爲法王而有爲之事 璋者聞師論心異之歸謂其友馮昌歷日北來禪師 師令侍者他往獨徐行其中首一人舞銅牌利刃出 外黃冠稱侵其道院事下菜州無賴數百喧競合團 珠之擾其在東海 沉公子舟持戈圍帥府甚急帥令中軍詣關涕泣求 白糖之旁藉口以大將軍資公子行開士民數千人 大將軍因粵苦閩艚運米新督席閩人也公子舟次 雀角至再然當事有結鼈則必乞師解之稅使者惡 自是王侍御安舜歐文起梁四相等相率歸依士人 說法基奇特因共請益師開示以向上事論信不疑 此聖人指人要悟不屬生死一著公擊節歎服有龍 諸子問道於師周鼎石問通乎晝夜之道而知師 大化遂遍東海嶺南佛法久廢海門周公置 敕賜殿成勢家冀奪道場構方 南部 答 集

然燈保師速還火發瘡痛日夜危坐持觀音大士名。 答云須其人精心求之我求何益初師在海上即墨 人師不語其意深自得又謂師老矣何不加意嗣人 之一市喧云方士殺慆矣太守遭多役捕之彼衆惶 黃生納善年十九參究堅切脇不至席對大士破臂 却維摩了也 誨以詩法師不答瞠目視之敬美一見笑日阿哥輸 解散師於詩文天才駿陵少年入長安王元美諄諄 問狂徒殺僧耶師曰未也來捕時僧方與彼同食瓜 懼皆叩首求解師日爾勿懼亦勿辯第聽吾言太守 師出家師不許生乃日弟子打箇觔斗來師又何能 其治余謂師用世異才也贈以詩曰出世還應用世 才其亦庶乎其可矣余以辛酉入五乳訪師者三語 散之乃故拘之耶太守悟但令地方驅之不三日盡 果耳太守日何関日市関耳太守命三木師日將欲 三月乃愈痂痕結大士像眉目身衣宛然如蓋求隨 者同至寓處閉門解衣磅礴談笑自若取瓜果共噉 索收牌刀圍行城外二里許將東西行師躊躇請首 論日莊生云以聖人之學教聖人之

> 士出身廣東等處提刑按察司按察使會稽陸夢龍 嶺南則馮昌壓五乳之患難不二者爲福善 賜進 止我乎义明年竟坐脫此豈所謂其人耶非耶其在

石啓撰

灣已爲於生靈塗炭請師救濟其一珠船千艘皆費高層活主是嫩縣期以三日盡之因謂師六祖腥 學為層法主是嫩縣期以三日盡之因謂師六祖腥 學為層法主是嫩縣期以三日盡之因謂師六祖腥 學為層法主是嫩縣期以三日盡之因謂師六祖腥 學為層法主是嫩縣期以三日盡之因謂師六祖腥 學為層法主是嫩縣期以三日盡之因謂師六祖腥 學為層法主是嫩縣期以三日盡之因謂師六祖腥

海上巨盜資以

欽採之勢踰期不歸橫掠海上吏

誘信心嚴約珠船徹所遣役歸有司歲額解進民自不能制其一礦役暴橫掘墓破居師乃徐動權使啓

此安枕矣遂騆祖庭立義學登壇說法自宰官文士

在日天時間節戲云天時間宰相定穴非吾法王執 生北上入訪因遊次謂曰已爲師覓一片福地問何 其截業 大師精神十方徹撓挑風置弄日月波瀾不蕩光不 之化波潤津梁大小精粗至人畢賞所以君子契其 提刑按察司按察使會稽陸夢龍彈 被曹溪中流和源遏利山淼源九州列洪鍾在函無 衣履之藏銘日聰明聖智道不涉焦金屬芥世喪裂 星為建塔院即所指天時岡也然裔卒歸五乳是為 寺大衆議留乃屬卜之三屬皆得留字韶太守張三 能居之既別即示微疾數日而逝甲子春廬山弟子 精文小人廖其樂利沒而不忘其在斯平玄圃蕭先 十万旦過寒設庫司荷規井然如官府法蔵大體疫 扣歇水逝風行非擴絕曹溪五乳無蹟轍與塔而三 福善等至請寵還盧嶺南弟子歐义起劉起相豎山 勸施掩給作濟波道場夫無著之機棄絕聖智有為 下及站販咸滋歸依改徑拓產歸所侵田以屠肆爲 天啓七年六月 賜進士出身廣東等處

本師憨山大和尚靈寵還曹溪供奉始末

此段公案其於修墳不既多乎遂謀力任南迎之役

罔效包土之力嘗懷內疚忽猛省日師靈未妥倘了

蔡家先墳二十年來一官拓落既難提石上之衣又 形家異議既入塔復啓費卜地因憶壬戌侍師於屬 門者具書當道何制臺下令强迎歸廬乙丑之春正 年歸休於廬之五乳天啓壬戌起相同堂主本易等 蕭玄圃吳觀我錢受之諸名公碑銘亦既逗漏不少。 於東中授記云爾他日為兵部權要之官當為我修 師別詩云一片遠心遊流水相期端爲不傳衣又會 月也崇顧庚辰起相承乏司李瑞州入山掃塔始知 絕白弟子及十房價道崇建塔院善公者本從師於 也吾師弘法一生精神年在曹溪備載於中與錢春 今所紀者自盧山迎靈龍選曹溪及開龍漆布始末 題難九死之餘孝誠篇擊邀請吳越諸毕官歸依師 善公欽迎靈龜歸屬龍前拈聞三拈皆得留字于時 堅請師南還以癸亥冬示寂於曹溪五乳眷屬知徼 宗伯蕭公捐貲會本道我齋夏公韶府張公暨遠近 證按本師以萬歷丙申逆綠入粤生平履歷備報於

引出山窓警日追河道梗避六舟南邁途中值賊客 守戎金國柱康郡守戎胡宗聖皆遣兵迎送旗鼓導 得業揚帆北渡晏生巳夫望矣是夕石尤風大作又 聲如電以爲從天而下也晏生及嗣孫慈力爲余言 不得如是壓經險阻覆險卒夷川嶽助順何莫非吾 舟皆被邀截獨靈寵船得風揚帆徑去鈎竿皆著手 屋子縣署篆衛公主其事牌行山中深莫敢抗端郡 逆遞廖舟還故處晏生手額日大師之靈也於是檄 遣人趣晏日風利不泊遇則自誤值晏痢病動轉不 迎我獨不可留手相先托同鄉康郡司李廖公文英 師之靈也是年多仲朔二日靈龕到山山中大衆數 所留幾八十日晏生怨之慶欣然許諾一夕風轉南 爲東道主值廖奉臺檄辦事准安已在舟中矣爲風 往康郡糧館亦留都人難之曰大師吾梓里也彼能 色之兩造中質其膽智可任渠亦堅請效勞因命之 相解任將南歸遣男程燁代迎有晏生日瑞者會物 處嗣孫慈力廣成等用予言舊前拈聞三聞皆順起 長男珵燁隨任因力贊之癸未秋楚窓震鄰兵燹是

復値 心有宋總戎紀者語僧遠蒼日大師名喧宇宙豈同 山廿五日孫僧十月初十日漆布陸座十房戶長長 啓泉則自湧應若影響豈偶然也起相與余宗元針 **等李公日官部府黃公銀者入山隨喜共作證明始** 餘人金剛之體保無缺漏請開始禮於四月廿八集 以內身出現手擇吉入塔在甲申九月而荒盜頻仍 岸夫力倍之瘤勉强此何說也予謂老人家顯異欲 請李公撰募疏謂塔院襟眉未舒爲終叛取香燈田 孫慈力等守奉塔院香燈宋公首捐五十金漆布且 老耆舊塔主堂主及長春社護法居士具食帖請嗣 本府長春社中緇白善信設圖山大齋以重陽日入 錫泉久竭郡侯黃公留心法門百計搜馴比靈觀既 信內身大士應緣度世前有大變今有本師先是車 新大衆數呼歸命頂禮觀者如塘後數日前更部尚 甲皆長衣服鮮潔白綾坐褥無半點寂數珠號串若 衆拈屬許開開則道骨如生般然端坐不傾不倚髮 **龜靈吳基初出山及度嶺皆四人界之比到深裏登** 燕都大變崩心痛悼欲先期入山省視未遑

薩戒弟子劉起相順首謹識 产之數故能於末後一著各出手眼為于秋堅光明幢 之緣故能於末後一著各出手眼為于秋堅光明幢 之緣故能於末後一著各出手眼為于秋堅光明幢

矯欲何之晤來已是經千劫化去何煩費一辭忘我 材難得覺海藏舟事莫追睡蝶邃邃纔入夢猶龍矯 堅悲尺素傳書人北面閣黎聞計淚交願法門推棟 **粘縛心常定空有慈悲首重垂落葉秋深忘語倦** 遇會囑機緣忽漫離鴈過寒山秋影盡馬嘶曹水去 法語聽來堪唯唯客程催去故遲遲老知湖海應難 鍾夜牛說心危每嗟塵世心常苦更到禪臺路轉歧 風對故知隱几談天收密義揮毫見地掃塵疑久無 觀自性風旛忽動想能師幾同涼月倍清夢一宿秋 南校衡陽地福安梁澗匡嶽雲深杖錫移臺鏡本空 會萬里音書雁斷時茅結牢山歸北海花開庾嶺向 鼓棹雙林扣夕犀故人把袂治心期 輓 憨分禪師圓寂 蕭雲界少字 一年契濶龍華 人

> 抵愁法侶 憋稀少託鉢傳衣更屬誰 想潮音飯裏詩圓寂那會分去住莊嚴不改舊威儀 非實無相好觀空莫託有形奇囘看峰色林端寺夢

驅等盡予悼宗風之永寂哀玄義之將頹感往多哀 竟成虚想夫金剛不褒則大教常流石電難延則內 城仰参心諦而法臘已滿速登涅槃俾予數年所懷 傷今欲絕攬筆成誄情見乎詞矣 **贻薄宦糾縛未遑酬次每念他日北歸庶幾從容化** 趼千里殷勤啓請始於比年某月再入曹溪則僧輩 巳三詣大師而予亦三致書師矣卓錫之日法訊見 常為若招之比丘雖成各數喜無量投地和熟送重 抑悲不自勝子重憐其意語之日若等眞思大師子 也安禪七日金地將完讒構三途法輪中縣言罷掩 太息韵厥所以老比丘答言此我 雖巨材山積而動曝鶴飛丹青剝落徘徊久之概然 再承之當表道經曹溪頂禮南華 憨山大師禪宗龍象余治兵湖南獲展多龍庚申春 奉輓 憨翁大和尚有數 歐大師未竟業 吳中偉 祖像僅蔽風雨 海左

有經時是誰高足如迦葉把撰遺疏痛所思 出嶺表恩流 翻 盡天龍有大師誘遼華 聖主知鷗鳥宰官疑玩世旃檀海藏 雨落遲遲厨中法膳慈官

字地金重布有三車林風月掩床頭火穀雨煙消定 曹溪滴滴泣南華當日親承坐具紗心印獨傳無

識記南宗歲巳千道場重此更安禪法流心在無窮 後茶末法中與還更墮低何雙樹獨長嗟

雲邊應留道教經同佛館自中流得實船 悟祖去衣藏不再傳拉斷比丘黃葉下靈埋鏁子白

干函子會刺 淨教演青蓮舌再含金版譯窮經幾部銀鈎書就祖 滿月當年一試參歸依初地憶湖南衣從白氎 手術 **歌通議師是誰擅越真師**頁三度 一字常

過匡山奉弔怒山大師 王思迁 山 陰人 書招秪自慚

七峰絕頂□開巒蘿葛窮時剩石攀溪舌瓏玲難翦

截教人猶自聽憨山

塞光作線 在知師原是古金仙 一相牽八里庄前二十年今日拜師猶骨

> 賜環炎海 主恩多鱷頂蛇雲伏幾魔遮莫囊山因

道力空餘好相聽彌陀

治任千般爲一奮曹溪廬阜若何多早知風月猶擎

架一火燒時沒得擔

奉輓五乳大師

象王蹟應瑞蓮開五乳峰前吼若雷今日樹煙何靉 博山後學太鸃

題紫雲旋入白雲推

界不知得法幾多人 南華福地塔全身脚底循拔五乳雲柱杖攪渾清世

哭五乳大師

憶斷南華歸去來那堪已脫舊蓮胎人誰得髓應成 弟子福能

雄才可憐孤客餘雙眼遙對青山泣草萊

笑我未忘情自合哀荷法從今皆弱質論文親昔幾

乍得歸依雙徑山師資可想驚峰閒殺堪玉樹蒼苔 虚即使香臺末路還語對石泉分哽哽涕當風葉園

潛潛印心四卷楞伽在掉臂何人巳出關

載自棄須知負一生推古但云搞履去臨哀離解作 位對級書轉不平空於手澤訴歸盟相逢未情懸千

心旌於茲領取拳拳意何必高談論死生援腰脊三梁自現成紅葉鄉人雙眼血白雲弟子一淚應天涯寄弟兄先師遺囑太分明鬚眉五老堪摩驢鳴蕭蕭客舍幾冬雪點袂依人若有情

寄憨大師曹溪法眷書

繼劫獨追思大師往昔付託良非聊爾流通之資胡

溪削稿時燈前燭下徵水案斷現魄可追毛髮皆竪 以今世時節因緣正當開數此書用以革頭止殺撈 **北好削其繁燕**使斯世得窺全壁不恨半珠人天眼 藏片曹溪卷帙甚富今特為啓請倒囊相付當訂其 大師夢遊集嘉興藏函但是法語一種其他書記序 大師著春秋左氏心法乃發明因果之書常自言曹 日剎塵瞻仰斷不可遼緩後時或貽湮沒之悔也又 傳之文發明大法者有其目而無其書聞大師遺稿 所欲壓請於座右者近代紫柏雲樓皆有全集行世 亦何以稱海印之真子與魔强佛動俗重道輕智眼 與某緇白不同同出大師之門並受遺囑居今之世 無多法城日倒未上諸上座能不何漢吾言否心今 隨波逐流坐視斯人中風狂走搖手閉目不為**拯** 慈心悲愍普施無畏亦豈無厚望於後人與諸上座 是人爲如來使使之屏除魔外不斷佛稱而我大師 風雪當門此一人者或者護世四王密諦力士數手 人不在學世怖聽鏡之頭而有一人不怖單樣孤立 。救

不負佛所付驅也使授諸梓命今釋跋其後嗚呼

台諭惠大師全集泰處署中搜羅咨訪非力听及音識整大師全集泰處署中搜羅咨訪非力听及齊宗實老人歡喜讚歎焚香設拜屬道隱題跋付頭宗實老人歡喜讚歎焚香設拜屬道隱題跋付聲來聚集現在數種附中丞行笥此外更有所得當來聚集現在數種附中丞行笥此外更有所得

憨山大師全集舊序

升中丞者頃攜至海幢華首和尚觀之彈指讚聽

蓋斯錢公能不資師龔公能不貧友而兩公皆能

右錢收齋宗伯訪求憨山大師遺稿書以託襲孝

南奉啓

或重要或救弊其用心於制作之微事無不周義無余嘗思維世聖賢立身一代或開創或繼述或守成

呼有三大師如此光明蘇奕於前而後世尚有曆竊 贊予壽昌先祖及撰塔銘即突出大好山千里遙相 不能正名義者亦何能逃春秋之誅余昔年見大師 春秋正萬世名義雖不能使萬世之名義皆正而有 不恤為大師之罪人者事不大可慎與雖然孔子作 懼而不敢眇视輕賤此其心又奚啻程嬰杵臼哉鳴 防獨虛此位而尊此宗使其狂妄替竊之徒自生畏 之人不據宗門之位是預知宗門將振故爲宗門大 落之際方與雲樓達觀二大師相爲鼎立以悟宗門 能賛一辭蓋痛念法門而有感焉大師當此宗門凋 記贊銘之詳學世莫不知爲再來內身大士矣余何 悟門與教化之廣大巳見於自己著述與諸明眼傳 悟之心其示現普門感應異類者豈不能讀三世之 我佛祖出世爲人以超生死性命之法而化凡唱迷 世聖賢尚能以身盡一代之事以道開萬世之心況 慧燈傳大干之種智乎余於憨山大師見之矣大師 也此非古今之大經大法哉於是更進而思之夫經 不備他一萬世下有能尋其旨趣皆可因之而振起

見之句已知與先祖把手共遊向上一路矣至於平生說法著作曲盡一代時教始終本末全體佛心全行租意其提唱拈頭及指示偈語會何減於古人會问讓今人天下後世自知師實租位之人不居祖位宣可以師不自居即爲非租位人乎師沒後二十二年而全身不慶與曹溪六祖開創重與無有二義其主於維世大經大法而配額法身慧命誠無不渴無不備也茲大師法孫堅如欲募刻師全集乃特請爲不備也茲大師法孫堅如欲募刻師全集乃特請爲不備也茲大師法孫堅如欲募刻師全集乃特請爲

憨山大師口筏引

憨山老人夢遊集卷第五十五卷憨山老人夢遊集卷第五十五卷憨山老人夢遊集卷第五十五卷憨山老人夢遊集卷第五十五卷
東不有千峰積雪萬壑轟雷之雄概此片紙亦具見東而其作略大都從五臺水觀中來故其格墨所宣學記前雲棲以低眉作佛事師與紫柏以努目作佛受記前雲棲以低眉作佛事師與紫柏以努目作佛